

東田之口遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2011.12

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

東田之口遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

二〇一・二二

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



東田之口遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2011.12

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



赤城山南西麓の地形(南から。右上が赤城山。東田之口遺跡は左端中央付近。)



直弧文が施された罎(68号住居出土)

序

東田之口遺跡は赤城山南麓の末端近く、前橋市上細井町にある遺跡です。国道17号線のバイパスとなる上武道路の改築工事に伴って、平成20年度に当事業団が発掘調査を実施いたしました。

本遺跡の発掘調査では、縄文時代～中・近世に及ぶ、多くの遺構・遺物を調査することができました。そのうち、特に古墳時代と中世の遺構が多数発見されています。調査された竪穴住居は68軒にのぼりましたが、大部分は調査区西側に偏って分布し、しかもそのうちのほとんどは6、7世紀に属するものでした。このことから、比較的狭い範囲に短期間、集中的に営まれた集落であることが分かりました。また、調査区北西部には中世の遺構が分布し、この部分に14～16世紀頃の館があったことも判明しました。館内部の構造を把握するまでには至りませんでした。西隣の庄子遺跡でも同じ時代の堀が発見されており、関連性が注目されます。これらの調査の成果は、本地域の歴史上の成り立ちを理解する上で重要なものであり、将来の地域史研究にあたって大いに貢献するものと確信しております。

最後になりましたが、国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本書の刊行に際し、心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成23年12月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄 一

例 言

- 1 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による、東田之口遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 所在地 前橋市上細井町
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間・面積 平成20年7月1日～平成21年2月13日 8,307㎡
- 6 発掘調査体制は次の通りである。

平成20年度 発掘調査担当 主任専門員(総括)木津博明 主任調査研究員 高井佳弘・齋藤 聡
遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル
委託 地上測量：技研測量設計株式会社
空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
自然科学分析：株式会社火山灰考古学研究所
- 7 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理期間 平成22年7月1日～平成23年8月31日
整理担当 上席専門員 神谷佳明(平成22年度)、調査研究員 長谷川博幸(平成23年度)
遺物写真撮影 補佐(総括) 佐藤元彦 保存処理 補佐 関 邦一
- 8 本書作成の担当者は次の通りである。

編集 上席専門員 神谷佳明 調査研究員 長谷川博幸
執筆 上席専門員 神谷佳明(遺物観察表：土師器・須恵器、第4章第1節) 上席専門員 大西雅広(遺物観察表：中世陶磁) 上席専門員 岩崎泰一(遺物観察表：石器・石製品) 主任調査研究員 橋本 淳(遺物観察表：縄文土器、第3章第12節1) 上席専門員 木津博明(第3章第2節、第4章第2節、胎土分類) 主任調査研究員 高井佳弘(前記以外)
- 9 出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)をお願いした。
- 10 出土人骨・馬歯の鑑定は、横崎修一郎氏(生物考古学研究所)に委託し、鑑定結果は第4章第4節2・3に掲載した。
- 11 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)
群馬県教育委員会、前橋市教育委員会。

凡 例

- 本文中に使用した方位は、総て国家座標(世界測地系)の第IX系を使用している。なお、座標北と真北との偏差は、本遺跡南部中央付近の $X=47100$ 、 $Y=-66600$ で $26^{\circ}27.53''$ である。
- 遺構断面図に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、最適と思われる縮尺に適宜変更した場合があるので、各図面のスケールを参照していただきたい。

遺構 竪穴住居 1:80 竈 1:40

平地式建物・竪穴状遺構・土坑・井戸・竈 1:40 掘立柱建物 1:80 粘土採掘坑 1:80

溝—平面図 1:100 断面図 1:50 溜井 1:60

遺物 土師器・須恵器・中世陶磁器・石器(打製石斧・凹石など)・石製品(板碑・砥石など) 1:3

須恵器・中世陶器の大型品、石製品(石白など) 1:4か1:6

銅銭・石鏃 1:1

なお、1:3以外の縮尺の遺物は、遺物番号のあとに縮尺を記入してある。

- 本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示している。

遺構	焼土 	灰 			
遺物	煤 	燧 	粘土 	赤色塗彩 	
	内黒 	漆 	被熱 	磨滅 	

- 遺構の主軸方位・走向は、竈のある竪穴住居の場合は竈のある方向を主軸方位とし、北から東西 180° 以内で、竈のない住居とそれ以外の遺構の場合は、長軸方向で北から東西 90° 以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合N- \circ -Eとした。
- 竪穴住居掘方平面図に記入してある ± 0 、あるいは- \circ \circ という数字は、床面からの掘り込みの深さを表している。単位はcmである。また、竪穴住居のエレベーション図には、床面と掘方底面の2本の線を記入している。
- 遺物の胎土については、産地同定を目的として分類を行っている。その分類は本文及び遺物観察表中に記号等で示したが、分類の基準・内容については遺物観察表冒頭の凡例(338ページ)に記した。
- 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1:25,000「前橋」「渋川」「大胡」「鼻毛石」

国土地理院 地勢図 1:200,000「長野」「宇都宮」

前橋市 1:2,500現形図

目次

カラー口絵

序

例言

凡例

目次

挿図・表・写真目次

第1章 調査の経緯・経過・方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
1 調査の方法	3
2 調査の経過	6
3 整理作業の概要と遺構名称の改訂	7
第2章 遺跡の位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3節 基本土層	16
第3章 調査の成果	17
第1節 概要	17
第2節 竪穴住居	19
第3節 平地式建物と掘立柱建物	223
第4節 竪穴状遺構	236
第5節 土坑	240
第6節 墓	256
第7節 井戸	257
第8節 溝	260
第9節 粘土採掘坑	275
第10節 溜井	293
第11節 その他の遺構	295
第12節 縄文時代の遺物	299
第13節 遺構外出土の遺物	302
第14節 旧石器時代の調査	303
第4章 総括	305
第1節 出土土器について	305
第2節 竪穴住居について	326
第3節 各遺構について	328
第4節 自然科学分析	330
1 東田之口遺跡と壬子遺跡の火山灰分析	330
2 東田之口遺跡出土人骨	335
3 東田之口遺跡出土馬歯	336
遺物観察表	338

写真図版

抄録

付図1 東田之口遺跡全体図(1/200)

付図2 東田之口遺跡と周辺の地形(1/800)

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第60図	19号住居出土遺物(4)、20号住居平面図	131
第2図	東田之口遺跡調査区周辺図	2	第61図	20号住居掘方平面図・竈平面図	132
第3図	大中グリッド設定図	4	第62図	20号住居出土遺物(1)	133
第4図	中小グリッド設定図	5	第63図	20号住居出土遺物(2)	134
第5図	周辺地形分析図	9	第64図	21号住居平面図	135
第6図	周辺の遺跡	11	第65図	21号住居1号竈・2号竈平面図・出土遺物(1)	136
第7図	基本土層	16	第66図	21号住居出土遺物(2)	137
第8図	1号住居平面図	79	第67図	22号住居平面図・竈平面図	138
第9図	1号住居竈平面図・出土遺物(1)	80	第68図	22号住居出土遺物、23号住居・竈平面図	139
第10図	1号住居出土遺物(2)、2号住居平面図・出土遺物(1)	81	第69図	23号住居出土遺物、24号住居平面図	140
第11図	2号住居竈平面図・掘方平面図・出土遺物(2)、3号住居平面図	82	第70図	24号住居竈平面図・出土遺物	141
第12図	3号住居・8号粘土探掘坑断面図、3号住居掘方・8号粘土探掘坑平面図・竈平面図	83	第71図	25号住居平面図・竈平面図	142
第13図	3号住居出土遺物(1)	84	第72図	27号住居出土遺物(1)	143
第14図	3号住居出土遺物(2)、4号住居平面図	85	第73図	25号住居出土遺物(2)	144
第15図	4号住居竈平面図・出土遺物	86	第74図	25号住居出土遺物(3)、26号住居平面図・竈断面図	145
第16図	5号住居平面図・竈平面図・出土遺物、6号住居平面図	87	第75図	26号住居掘方平面図・出土遺物(1)	146
第17図	6号住居掘方平面図・出土遺物(1)・竈平面図	88	第76図	26号住居出土遺物(2)、27号住居平面図	147
第18図	6号住居出土遺物(2)	89	第77図	27号住居掘方平面図・出土遺物(1)	148
第19図	6号住居出土遺物(3)、7号住居平面図	90	第78図	27号住居出土遺物(2)	149
第20図	7号住居竈平面図・出土遺物	91	第79図	27号住居出土遺物(3)	150
第21図	8号住居平面図・竈平面図	92	第80図	28号住居平面図・竈平面図	151
第22図	8号住居出土遺物(1)	93	第81図	28号住居出土遺物(1)	152
第23図	8号住居出土遺物(2)、9号住居平面図	94	第82図	28号住居出土遺物(2)	153
第24図	9号住居竈平面図・出土遺物(1)	95	第83図	28号住居出土遺物(3)	154
第25図	9号住居出土遺物(2)、10号住居平面図	96	第84図	29号住居平面図	155
第26図	10号住居竈平面図・出土遺物(1)	97	第85図	29号住居竈平面図・出土遺物(1)	156
第27図	10号住居出土遺物(2)	98	第86図	29号住居出土遺物(2)	157
第28図	10号住居出土遺物(3)、11号住居平面図	99	第87図	29号住居出土遺物(3)	158
第29図	11号住居竈平面図・出土遺物(1)	100	第88図	30号住居竈平面図・竈平面図	159
第30図	11号住居出土遺物(2)、12号住居平面図・竈断面図	101	第89図	30号住居出土遺物(1)	160
第31図	12号住居掘方平面図・出土遺物(1)	102	第90図	30号住居出土遺物(2)、31号住居平面図	161
第32図	12号住居出土遺物(2)、13号住居平面図	103	第91図	31号住居竈平面図・出土遺物(1)	162
第33図	13号住居掘方平面図・出土遺物(1)	104	第92図	31号住居出土遺物(2)	163
第34図	13号住居出土遺物(2)	105	第93図	31号住居出土遺物(3)	164
第35図	13号住居出土遺物(3)、14号住居平面図	106	第94図	31号住居出土遺物(4)、32号住居平面図	165
第36図	14号住居掘方平面図	107	第95図	32号住居竈平面図・出土遺物(1)	166
第37図	14号住居遺物出土状態図(土器と礎)	108	第96図	32号住居出土遺物(2)、33号住居平面図・竈平面図	167
第38図	14号住居1号竈・2号竈平面図	109	第97図	33号住居出土遺物	168
第39図	14号住居3号竈平面図・出土遺物(1)	110	第98図	34号住居平面図・出土遺物(1)	169
第40図	14号住居出土遺物(2)	111	第99図	34号住居出土遺物(2)、35号住居平面図	170
第41図	14号住居出土遺物(3)	112	第100図	35号住居掘方平面図・出土遺物(1)	171
第42図	15号住居平面図	113	第101図	35号住居出土遺物(2)	172
第43図	15号住居掘方平面図	114	第102図	36号住居平面図・竈平面図・出土遺物	173
第44図	15号住居1号竈・2号竈平面図・出土遺物(1)	115	第103図	37号住居平面図・竈平面図・出土遺物	174
第45図	15号住居出土遺物(2)	116	第104図	38号住居平面図	175
第46図	15号住居出土遺物(3)	117	第105図	38号住居竈平面図・出土遺物、39号住居平面図・竈断面図	176
第47図	15号住居出土遺物(4)、16号住居・7号粘土探掘坑平面図	118	第106図	39号住居出土遺物、40号住居平面図・出土遺物、41号住居平面図・出土遺物	177
第48図	16号住居掘方平面図・竈平面図・出土遺物(1)	119	第107図	42号住居平面図	178
第49図	16号住居出土遺物(2)	120	第108図	42号住居掘方平面図・竈平面図	179
第50図	16号住居出土遺物(3)、17号住居平面図	121	第109図	42号住居掘方2号平面図・出土遺物(1)	180
第51図	17号住居掘方平面図・竈平面図	122	第110図	42号住居出土遺物(2)	181
第52図	17号住居出土遺物	123	第111図	42号住居出土遺物(3)	182
第53図	18号住居平面図・竈平面図	124	第112図	43号住居平面図・竈平面図・出土遺物	183
第54図	18号住居出土遺物	125	第113図	44号住居平面図・竈平面図・出土遺物(1)	184
第55図	19号住居平面図	126	第114図	44号住居出土遺物(2)、45号住居平面図	185
第56図	19号住居1号竈・2号竈平面図	127	第115図	45号住居竈平面図・出土遺物(1)	186
第57図	19号住居出土遺物(1)	128	第116図	45号住居出土遺物(2)、46号住居平面図	187
第58図	19号住居出土遺物(2)	129	第117図	46号住居竈平面図・出土遺物	188
第59図	19号住居出土遺物(3)	130	第118図	47号住居平面図	189
			第119図	47号住居1号竈・2号竈平面図・出土遺物(1)	190
			第120図	47号住居出土遺物(2)	191

第121回	47号住居出土遺物(3)、48号住居平面図・出土遺物	192
第122回	49号住居平面図・壘平面図	193
第123回	49号住居出土遺物、50号住居平面図・出土遺物、51号住居平面図	194
第124回	51号住居出土遺物、52号住居平面図・出土遺物	195
第125回	53号住居平面図	196
第126回	53号住居壘平面図・出土遺物(1)	197
第127回	53号住居出土遺物(2)	198
第128回	53号住居出土遺物(3)、54号住居平面図	199
第129回	54号住居壘平面図・出土遺物	200
第130回	55号住居平面図・壘平面図・出土遺物	201
第131回	56号住居平面図・壘平面図・出土遺物	202
第132回	57・58号住居平面図、58号住居壘平面図	203
第133回	58号住居出土遺物(1)	204
第134回	58号住居出土遺物(2)	205
第135回	58号住居出土遺物(3)	206
第136回	59号住居平面図	207
第137回	59号住居掘方平面図・壘平面図	208
第138回	59号住居出土遺物(1)	209
第139回	59号住居出土遺物(2)、60号住居平面図	210
第140回	60号住居出土遺物、61号住居平面図・出土遺物	211
第141回	62号住居平面図	212
第142回	62号住居1号壘・2号壘平面図・出土遺物(1)	213
第143回	62号住居出土遺物(2)	214
第144回	63号住居平面図・壘平面図	215
第145回	63号住居出土遺物	216
第146回	64号住居平面図・壘平面図	217
第147回	64号住居出土遺物	218
第148回	65号住居平面図・壘平面図	219
第149回	66号住居平面図・壘平面図、67号住居平面図・出土遺物	220
第150回	68号住居平面図・壘平面図・出土遺物(1)	221
第151回	68号住居出土遺物(2)	222
第152回	1号平地建物平面図	228
第153回	2・3号平地建物平面図、1号竪立柱建物平面図	229
第154回	1号竪立柱建物柱穴断面図・出土遺物	230
第155回	2・5号竪立柱建物平面図・出土遺物	231
第156回	2号竪立柱建物柱穴断面図	232
第157回	3号竪立柱建物平面図・出土遺物	233
第158回	4号竪立柱建物平面図・柱穴断面図	234
第159回	6号竪立柱建物平面図、7号竪立柱建物平面図	235
第160回	1号竪穴状遺構平面図・出土遺物(1)	237
第161回	1号竪穴状遺構出土遺物(2)	238
第162回	2号竪穴状遺構平面図・出土遺物	239
第163回	1～11号土坑平面図、1・7号土坑出土遺物	243
第164回	12～16・18～20号土坑平面図、16号土坑出土遺物	244
第165回	21～27号土坑平面図、23・25号土坑出土遺物	245
第166回	30・31・33～37号土坑平面図	246
第167回	38～40・42～46・54号土坑平面図、42・43号土坑出土遺物	247
第168回	47～52号土坑平面図	248
第169回	53・55～60号土坑平面図、56号土坑出土遺物	249
第170回	61～65・90号土坑平面図、61・65号土坑出土遺物	250
第171回	66・67・69～73号土坑平面図	251
第172回	74～80号土坑平面図、78号土坑出土遺物	252
第173回	81～83・85号土坑平面図、82号土坑出土遺物	253
第174回	86～89号土坑平面図、86号土坑出土遺物	254
第175回	91・92・95号土坑平面図	255
第176回	68・84号土坑平面図、68号土坑出土遺物	256

第177回	1号井戸平面図・出土遺物	258
第178回	2～6号井戸平面図、2・3・5号井戸出土遺物	259
第179回	1・2号溝平面図	264
第180回	4号溝平面図・出土遺物	265
第181回	3・5号溝平面図、3号溝出土遺物	266
第182回	5・6号溝断面図	267
第183回	5号溝出土遺物	268
第184回	6号溝平面図	269
第185回	6号溝断面図・出土遺物	270
第186回	7号溝平面図	271
第187回	7号溝出土遺物	272
第188回	8・9・11号溝平面図、8号溝出土遺物	273
第189回	10号溝平面図・出土遺物	274
第190回	1・3号粘土探掘坑平面図、1号粘土探掘坑出土遺物	279
第191回	3号粘土探掘坑断面図・出土遺物、4号粘土探掘坑平面図	280
第192回	4号粘土探掘坑出土遺物	281
第193回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(北部)	282
第194回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(中央部)	283
第195回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(南部)	284
第196回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(1)	285
第197回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(2)	286
第198回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(3)	287
第199回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(4)	288
第200回	2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(5)	289
第201回	2・5号粘土探掘坑出土遺物	290
第202回	粘土探掘坑群出土遺物	291
第203回	9号粘土探掘坑平面図・出土遺物	292
第204回	1号掘方平面図	293
第205回	1号掘方断面図・出土遺物	294
第206回	1号扁平断面図・出土遺物、75号ビット出土遺物	295
第207回	縄文時代の遺物(1)	300
第208回	縄文時代の遺物(2)	301
第209回	縄文時代の遺物(3)	302
第210回	遺構外出土の遺物(1)	302
第211回	遺構外出土の遺物(2)	303
第212回	旧石器調査トレンチ配置図	304
第213回	土器分類①	311
第214回	土器分類②	312
第215回	土器分類③	313
第216回	土器分類④	314
第217回	土器分類⑤	315
第218回	土器分類⑥	316
第219回	1期・2期の土器	320
第220回	3期の土器	321
第221回	4期・5期の土器	322
第222回	6期・7期の土器	323
第223回	西葦垣の上層柱状図	334
第224回	7号トレンチ(150-635)の上層柱状図	334
第225回	84号土坑出土人骨平面図[1/40]	335
第226回	84号土坑出土人骨	335
第227回	16号土坑出土馬歯出土平面図[1/40]	336
第228回	16号土坑出土馬歯出土状況	336
第229回	16号土坑出土馬歯右側上下両列歯側面観	337
第230回	16号土坑出土馬歯左側上下両列歯側面観	337
第231回	16号土坑出土馬歯埋理推定図[1/40]	337
第232回	16号土坑出土馬歯出土状況近接	337

表目次

第1表	遺構名称の改訂	7
第2表	周辺遺跡一覧表(1)	12
第3表	周辺遺跡一覧表(2)	13
第4表	周辺遺跡一覧表(3)	14
第5表	土坑一覧表(1)	241

第6表	土坑一覧表(2)	242
第7表	ビット一覧表(1)	296
第8表	ビット一覧表(2)	297
第9表	ビット一覧表(3)	298
第10表	石器器種別石材組成一覧表	300

第11表	剥片石材組成一覧表	300
第12表	東田之口道神整穴住居出土土器具伴表	318
第13表	テフラ検出分析結果	333
第14表	屈折率測定結果	333
第15表	東田之口道跡出土人骨測定計測値及び比較表	335
第16表	東田之口道跡16号土坑出土馬歯計測値	337
第17表	道物観察表(1)	340
第18表	道物観察表(2)	341
第19表	道物観察表(3)	342
第20表	道物観察表(4)	343
第21表	道物観察表(5)	344
第22表	道物観察表(6)	345
第23表	道物観察表(7)	346
第24表	道物観察表(8)	347
第25表	道物観察表(9)	348
第26表	道物観察表(10)	349
第27表	道物観察表(11)	350
第28表	道物観察表(12)	351
第29表	道物観察表(13)	352
第30表	道物観察表(14)	353
第31表	道物観察表(15)	354
第32表	道物観察表(16)	355
第33表	道物観察表(17)	356
第34表	道物観察表(18)	357
第35表	道物観察表(19)	358
第36表	道物観察表(20)	359

第37表	道物観察表(21)	360
第38表	道物観察表(22)	361
第39表	道物観察表(23)	362
第40表	道物観察表(24)	363
第41表	道物観察表(25)	364
第42表	道物観察表(26)	365
第43表	道物観察表(27)	366
第44表	道物観察表(28)	367
第45表	道物観察表(29)	368
第46表	道物観察表(30)	369
第47表	道物観察表(31)	370
第48表	道物観察表(32)	371
第49表	道物観察表(33)	372
第50表	道物観察表(34)	373
第51表	道物観察表(35)	374
第52表	道物観察表(36)	375
第53表	道物観察表(37)	376
第54表	道物観察表(38)	377
第55表	道物観察表(39)	378
第56表	道物観察表(40)	379
第57表	道物観察表(41)	380
第58表	道物観察表(42)	381
第59表	道物観察表(43)	382
第60表	道物観察表(44)	383
第61表	道物観察表(45)	384

写真目次

P. L. 1	道跡周辺の航空写真(1961年・国土地理院)	5号住居全景(西から)
P. L. 2	道路上空から(上が北・右側中央付近が東田之口道跡) 道跡遠景(西から)	5号住居跡方全景(西から)
P. L. 3	道跡遠景(北から・左端中央付近が東田之口道跡) 道跡遠景(南から)	5号住居電燈方全景(西から)
P. L. 4	調査区全景(北西から)	6号住居全景(南西から)
P. L. 5	調査区全景(南東から)	6号住居跡方全景(南西から)
P. L. 6	調査区全景(北西から)	6号住居電燈方全景(南西から)
P. L. 7	調査区全景(上が北東)	6号住居電燈方全景(南西から)
P. L. 7	1号溝全景(南東から)	6号住居・1号井戸遺物出土状況(南から)
	2号溝全景(南西から)	7号住居全景(南西から)
	3号溝北部(南から)	7号住居跡方全景(南西から)
	3号溝南部(南東から)	7号住居電燈方全景(南西から)
	4号溝全景(南西から)	7号住居遺物出土状況(南西から)
	5号溝全景(西から)	8号住居全景(南西から)
	6号溝全景(南から)	P. L. 12
	8・9・11号溝(南東から)	8号住居跡方全景(南西から)
P. L. 8	10号溝全景(東から)	8号住居電燈方全景(南西から)
	11号溝全景(南東から)	8号住居電燈方全景(南西から)
	1号住居全景(北西から)	9号住居全景(南西から)
	1号住居跡方全景(北西から)	9号住居跡方全景(南西から)
	1号住居電燈方全景(北西から)	9号住居電燈方全景(南西から)
	1号住居電燈方全景(北西から)	9号住居電燈方全景(南西から)
	2号住居全景(西から)	9号住居電燈方全景(南西から)
	2号住居跡方全景(西から)	10号住居全景(西から)
P. L. 9	2号住居電燈方全景(西から)	P. L. 13
	2号住居電燈方全景(西から)	10号住居跡方全景(西から)
	3号住居全景(西から)	10号住居電燈遺物出土状況(西から)
	3号住居跡方全景(西から)	10号住居電燈方全景(西から)
	3号住居電燈方全景(西から)	11号住居全景(西から)
	3号住居電燈方全景(西から)	11号住居跡方全景(西から)
	3号住居電燈方全景(西から)	11号住居電燈方全景(西から)
	4号住居全景(西から)	11号住居電燈方全景(西から)
	4号住居跡方全景(西から)	11号住居電燈方全景(西から)
P. L. 10	4号住居電燈方全景(西から)	11号住居電燈方全景(西から)
	4号住居電燈方全景(西から)	11号住居電燈方全景(西から)
		P. L. 14
		12号住居遺物・礎出土状況(南から)
		12号住居全景(南から)
		12号住居電燈方全景(南から)
		12号住居電燈方全景(南から)
		12号住居2号電燈方全景(西から)
		12号住居2号電燈方全景(西から)
		13号住居全景(西から)

	13号住居跡方全景(西から)	26号住居跡方全景(西から)
P.L. 15	14号住居遺物出土状況(南東から)	26号住居電線全景(西から)
	14号住居全景(南東から)	27号住居全景(南東から)
	14号住居跡方全景(南東から)	27号住居跡方全景(南東から)
	14号住居1号電線全景(南東から)	27号住居貯蔵穴全景(南西から)
	14号住居2号電線全景(南東から)	28号住居遺物出土状況(東から)
	14号住居3号電線全景(北東から)	28号住居全景(東から)
	14号住居(左1号・右2号)電線方全景(南東から)	P.L. 24
	14号住居1号貯蔵穴全景(南東から)	
P.L. 16	14号住居2号貯蔵穴全景(南東から)	28号住居電線方全景(東から)
	15号住居遺物出土状況(南東から)	28号住居貯蔵穴全景(東から)
	15号住居全景(南東から)	29号住居遺物出土状況(西から)
	15号住居跡方全景(南東から)	29号住居全景(西から)
	15号住居電線全景(南東から)	29号住居跡方全景(西から)
	15号住居1号貯蔵穴全景(南東から)	P.L. 25
	15号住居2号電線方全景(北東から)	
	15号住居2号貯蔵穴全景(北東から)	29号住居貯蔵穴全景(南から)
P.L. 17	16号住居全景(南から)	30号住居全景(北西から)
	16号住居電線全景(西から)	30号住居跡方全景(北西から)
	16号住居電線方全景(西から)	30号住居電線天井除去後全景(西から)
	17号住居全景(東から)	30号住居電線方全景(西から)
	17号住居跡方全景(東から)	30号住居貯蔵穴全景(南西から)
	17号住居電線全景(南から)	31号住居全景(北西から)
	17号住居電線方全景(南から)	P.L. 26
	18号住居全景(南西から)	
P.L. 18	18号住居跡方全景(南西から)	31号住居電線全景(西から)
	18号住居電線全景(南西から)	31号住居電線方全景(西から)
	18号住居電線方全景(南西から)	32号住居遺物出土状況(西から)
	18号住居貯蔵穴全景(西から)	32号住居全景(西から)
	19号住居全景(南東から)	32号住居跡方全景(西から)
	19号住居跡方全景(南東から)	32号住居電線全景(西から)
	19号住居1号電線全景(南東から)	P.L. 27
	19号住居2号電線全景(西から)	
P.L. 19	19号住居1号電線方全景(南東から)	33号住居全景(南西から)
	19号住居2号電線方全景(西から)	33号住居跡方全景(南西から)
	19号住居貯蔵穴全景(南から)	33号住居電線全景(南西から)
	20号住居全景(西から)	33号住居電線方全景(南西から)
	20号住居跡方全景(西から)	33号住居貯蔵穴全景(南西から)
	20号住居電線全景(西から)	34号住居遺物出土状況(東から)
	20号住居電線方全景(西から)	P.L. 28
	20号住居電線方全景(西から)	
P.L. 20	21号住居全景(東から)	35号住居全景(西から)
	21号住居1号電線全景(東から)	35号住居跡方全景(南から)
	21号住居1号電線方全景(東から)	36号住居全景(北東から)
	21号住居2号電線全景(西から)	36号住居跡方全景(北東から)
	21号住居2号電線方全景(西から)	36号住居電線全景(北東から)
	21号住居貯蔵穴全景(東から)	36号住居貯蔵穴全景(西から)
	22号住居全景(西から)	37号住居全景(南西から)
	22号住居跡方全景(西から)	37号住居跡方全景(南西から)
	22号住居電線方全景(西から)	38号住居全景(西から)
	22号住居電線方全景(西から)	38号住居跡方全景(西から)
P.L. 21	22号住居電線天井除去後全景(西から)	38号住居電線全景(西から)
	23号住居全景(西から)	39号住居遺物出土状況(北から)
	23号住居跡方全景(西から)	39号住居全景(北から)
	23号住居電線方全景(西から)	39号住居電線全景(南から)
	23号住居電線方全景(西から)	40号住居全景(南西から)
	23号住居電線方全景(西から)	P.L. 29
	24号住居全景(西から)	
	24号住居跡方全景(西から)	38号住居電線方全景(西から)
P.L. 22	24号住居電線全景(西から)	39号住居遺物出土状況(西から)
	24号住居電線方全景(西から)	39号住居全景(北から)
	25号住居全景(西から)	39号住居電線全景(南から)
	25号住居跡方全景(西から)	40号住居全景(南西から)
	25号住居電線方全景(西から)	40号住居跡方全景(南西から)
	25号住居電線遺物出土状況(西から)	41号住居全景(北から)
	25号住居電線全景(西から)	P.L. 30
	25号住居電線方全景(西から)	
	25号住居貯蔵穴遺物出土状況(西から)	42号住居全景(南西から)
P.L. 23	26号住居全景(西から)	42号住居跡方全景(南西から)
		42号住居電線全景(南西から)
		42号住居電線方石組全景(南西から)
		42号住居電線方全景(南西から)
		42号住居貯蔵穴遺物出土状況(南西から)
	26号住居貯蔵穴遺物出土状況(西から)	P.L. 31
	26号住居貯蔵穴遺物出土状況(西から)	
	26号住居貯蔵穴遺物出土状況(西から)	43号住居全景(南西から)
	26号住居貯蔵穴遺物出土状況(西から)	43号住居跡方全景(南西から)

	43号住居電線全景(南西から)	59号住居電線全景(南西から)
	44号住居全景(西から)	59号住居電線方全景(南西から)
	44号住居電線方全景(西から)	59号住居貯蔵穴全景(南西から)
	44号住居電線全景(西から)	P L. 40 60号住居全景(南西から)
P L. 32	44号住居電線方全景(西から)	60号住居掘方全景(南西から)
	44号住居貯蔵穴全景(西から)	61号住居掘方全景(西から)
	45号住居全景(南西から)	61号住居電線方全景(西から)
	45号住居電線方全景(南西から)	61号住居貯蔵穴全景(南西から)
	45号住居電線全景(西から)	62号住居全景(南東から)
	45号住居電線方全景(西から)	62号住居掘方全景(南東から)
	46号住居全景(南西から)	62号住居1号電線全景(南東から)
	46号住居掘方全景(南西から)	P L. 41 62号住居2号電線全景(南西から)
	46号住居電線全景(南西から)	62号住居1号電線方全景(南東から)
P L. 33	46号住居電線方全景(南西から)	62号住居2号電線方全景(南西から)
	46号住居貯蔵穴全景(南西から)	62号住居1号貯蔵穴全景(南東から)
	47号住居全景(南から)	62号住居2号貯蔵穴全景(南西から)
	47号住居掘方全景(南から)	63号住居全景(西から)
	47号住居1号電線全景(南から)	63号住居掘方全景(西から)
	47号住居2号電線全景(西から)	63号住居電線全景(西から)
	47号住居1号電線方全景(南から)	P L. 42 63号住居電線方全景(西から)
	47号住居2号電線方全景(西から)	63号住居貯蔵穴全景(西から)
P L. 34	47号住居貯蔵穴全景(南から)	64号住居全景(西から)
	48号住居全景(東から)	64号住居掘方全景(西から)
	49号住居全景(西から)	64号住居電線全景(西から)
	49号住居掘方全景(西から)	64号住居電線方全景(西から)
	49号住居電線全景(西から)	64号住居貯蔵穴全景(西から)
	49号住居電線方全景(西から)	65号住居全景(西から)
	49号住居貯蔵穴全景(西から)	P L. 43 65号住居掘方全景(西から)
	50号住居全景(南西から)	65号住居電線全景(西から)
P L. 35	50号住居貯蔵穴全景(南西から)	65号住居電線方全景(西から)
	51号住居掘方全景(東から)	66号住居全景(北西から)
	51号住居1号土坑全景(東から)	66号住居掘方全景(北西から)
	52号住居全景(南西から)	66号住居貯蔵穴全景(北から)
	52号住居掘方全景(南西から)	66号住居貯蔵穴(北から)
	52号住居電線全景(南西から)	66号住居1号貯蔵穴全景(北西から)
	52号住居電線方全景(南西から)	P L. 44 66号住居2号貯蔵穴全景(北西から)
	52号住居貯蔵穴全景(南西から)	67号住居全景(西から)
P L. 36	53号住居全景(西から)	67号住居掘方全景(西から)
	53号住居掘方全景(西から)	68号住居全景(西から)
	53号住居電線全景(西から)	68号住居掘方全景(西から)
	53号住居掘方全景(西から)	68号住居貯蔵穴全景(北から)
	53号住居貯蔵穴全景(西から)	68号住居貯蔵穴全景(西から)
	54号住居全景(西から)	64・67号住居作業風景
	54号住居掘方全景(西から)	P L. 45 1号型穴状遺構全景(南から)
	54号住居電線全景(西から)	2号型穴状遺構全景(南東から)
P L. 37	54号住居電線方全景(西から)	1号粘土探掘坑全景(南から)
	55号住居全景(西から)	2号粘土探掘坑全景(南から)
	55号住居掘方全景(西から)	2号粘土探掘坑全景(西から)
	55号住居電線全景(西から)	3号粘土探掘坑全景(南西から)
	55号住居電線方全景(西から)	4号粘土探掘坑遺物出土状況(北西から)
	55号住居貯蔵穴全景(西から)	4号粘土探掘坑全景(北西から)
	56号住居全景(南西から)	P L. 46 5号粘土探掘坑全景(北西から)
	56号住居掘方全景(南西から)	9号粘土探掘坑全景(南から)
P L. 38	56号住居電線全景(南西から)	粘土探掘坑群全景(北から)
	56号住居電線方全景(南西から)	粘土探掘坑群全景(南から)
	56号住居貯蔵穴全景(南西から)	1号平地建物完掘(南西から)
	57号住居全景(南東から)	2・3号平地建物完掘(北西から)
	57号住居掘方全景(南東から)	1号掘立柱建物完掘(南東から)
	58号住居遺物出土状況(西から)	2号掘立柱建物完掘(南から)
	58号住居全景(西から)	P L. 47 2号掘立柱建物完掘(南から)
	58号住居掘方全景(西から)	3号掘立柱建物完掘(北西から)
P L. 39	58号住居電線全景(西から)	5号掘立柱建物完掘(北東から)
	58号住居電線方全景(西から)	6号掘立柱建物完掘(南西から)
	58号住居貯蔵穴全景(西から)	16号土坑馬歯出土状況(南西から)
	59号住居全景(南西から)	16号土坑馬歯出土状況(南西から)
	59号住居掘方全景(南西から)	21号土坑全景(南から)

	25号土坑全景(南から)	5号井戸全景(南から)
P.L. 48	26号土坑全景(南から)	6号井戸全景(南から)
	31号土坑全景断面A-A' (南西から)	1号溜井全景(東から)
	33号土坑全景(南から)	1号畚全景(西から)
	34号土坑全景(南から)	P.L. 54 1～3号住居出土遺物
	35(左)・36(右)号土坑全景(南から)	P.L. 55 3・4・6号住居出土遺物
	37号土坑断面A-A' (南西から)	P.L. 56 6～8号住居出土遺物
	43・44・45・46・54号土坑全景(南西から)	P.L. 57 8号住居出土遺物
	55(左)・56(右)号土坑全景(東から)	P.L. 58 9・10号住居出土遺物
P.L. 49	58号土坑全景(南西から)	P.L. 59 10号住居出土遺物
	59(右)・60(左)号土坑全景(南西から)	P.L. 60 11～13号住居出土遺物
	61・62・65号土坑全景(南東から)	P.L. 61 13・14号住居出土遺物
	69・70・71・72号土坑全景(東から)	P.L. 62 14・15号住居出土遺物
	75(手前)・76(奥)号土坑全景(北西から)	P.L. 63 16号住居出土遺物
	77・80号土坑全景(西から)	P.L. 64 17～19号住居出土遺物
	78号土坑全景(南から)	P.L. 65 19号住居出土遺物
	79号土坑全景全景(北西から)	P.L. 66 19号住居出土遺物
P.L. 50	1号土坑全景(東から)	P.L. 67 19～23・25号住居出土遺物
	5号土坑全景(北から)	P.L. 68 25号住居出土遺物
	6号土坑全景(北から)	P.L. 69 25号住居出土遺物
	7号土坑全景(北から)	P.L. 70 25～27号住居出土遺物
	8号土坑全景(北から)	P.L. 71 27・28号住居出土遺物
	10号土坑全景(北から)	P.L. 72 28号住居出土遺物
	11号土坑全景(北から)	P.L. 73 28号住居出土遺物
	12号土坑全景(北から)	P.L. 74 28・29号住居出土遺物
	13号土坑全景(北から)	P.L. 75 29～31号住居出土遺物
	14号土坑全景(西から)	P.L. 76 31号住居出土遺物
	15号土坑全景(北から)	P.L. 77 31・32号住居出土遺物
	18号土坑全景(南から)	P.L. 78 32～35号住居出土遺物
	19号土坑全景(南から)	P.L. 79 35～37・39・40・42号住居出土遺物
	20号土坑全景(南東から)	P.L. 80 42号住居出土遺物
	22号土坑全景(南から)	P.L. 81 43～45号住居出土遺物
P.L. 51	23号土坑全景(西から)	P.L. 82 45～47号住居出土遺物
	24号土坑全景(南西から)	P.L. 83 49～53号住居出土遺物
	27号土坑全景(北西から)	P.L. 84 53～56号住居出土遺物
	30号土坑全景(南から)	P.L. 85 58号住居出土遺物
	38号土坑全景(西から)	P.L. 86 58号住居出土遺物
	39号土坑全景(西から)	P.L. 87 59・60号住居出土遺物
	40号土坑全景(南東から)	P.L. 88 61・62号住居出土遺物
	41号土坑全景(南から)	P.L. 89 63・64・67・68号住居出土遺物
	42号土坑全景(南西から)	P.L. 90 68号住居、1・2号型穴遺構、1・42・43・56・61・65・82号土坑出土遺物
	47号土坑全景(北東から)	P.L. 91 68号土坑、1・3・5号井戸、3・5号溝出土遺物
	48号土坑全景(南西から)	P.L. 92 6～8・10号溝、2号粘土探掘坑出土遺物
	49号土坑全景(南西から)	P.L. 93 4・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群出土遺物
	50号土坑全景(南から)	P.L. 94 粘土探掘坑群、1号掘井出土遺物
	51号土坑全景(南西から)	P.L. 95 縄文時代出土遺物
	52・53号土坑全景(南西から)	P.L. 96 縄文時代、遺構外出土遺物
P.L. 52	57号土坑全景(南西から)	
	63号土坑全景(東から)	
	64号土坑全景(南から)	
	66号土坑全景(西から)	
	67号土坑全景(南から)	
	68号土坑全景(南から)	
	73号土坑全景(南西から)	
	81号土坑全景(南東から)	
	82号土坑全景(北から)	
	83号土坑全景(南東から)	
	84号土坑全景(北西から)	
	85号土坑全景(北西から)	
	86号土坑全景(南東から)	
	87号土坑断面A-A' (南東から)	
	88号土坑全景(西から)	
P.L. 53	1号井戸全景(南から)	
	2号井戸全景(南から)	
	3号井戸全景(南から)	
	4号井戸全景(南西から)	

第1章 調査の経緯・経過・方法

第1節 調査に至る経緯

上武道路は埼玉県熊谷市西別府から群馬県前橋市田口町に至る延長40.5kmの大規模バイパスであり、地域の基盤整備と国道17号線の混雑緩和のために計画された地域高規格道路である。昭和45年度に交差する国道50号以南の27.4kmがⅠ期工事として事業化され、昭和50年に着工、平成4年に利根川に架かる新上武大橋が完成し、深谷バイパスから国道50号までが開通した。

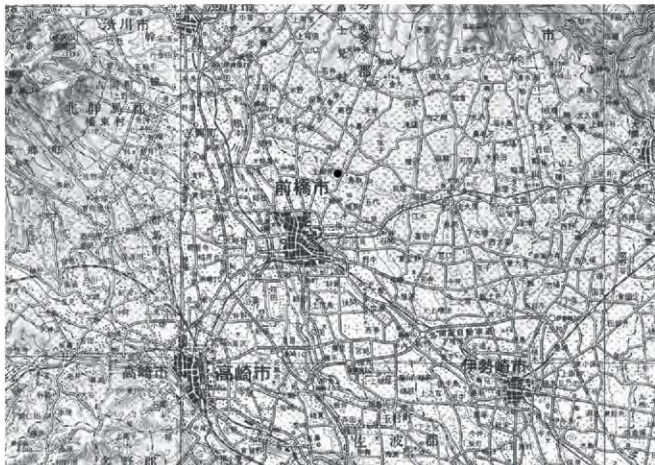
Ⅰ期工事の建設に先だっては、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって53遺跡、延べ53万4,000㎡が発掘調査され、その成果は26冊の発掘調査報告書にまとめられた。

国道50号以北の部分は、Ⅱ期工事として、平成元年、主要地方道前橋大間々桐生線までの4.9kmが事業化され

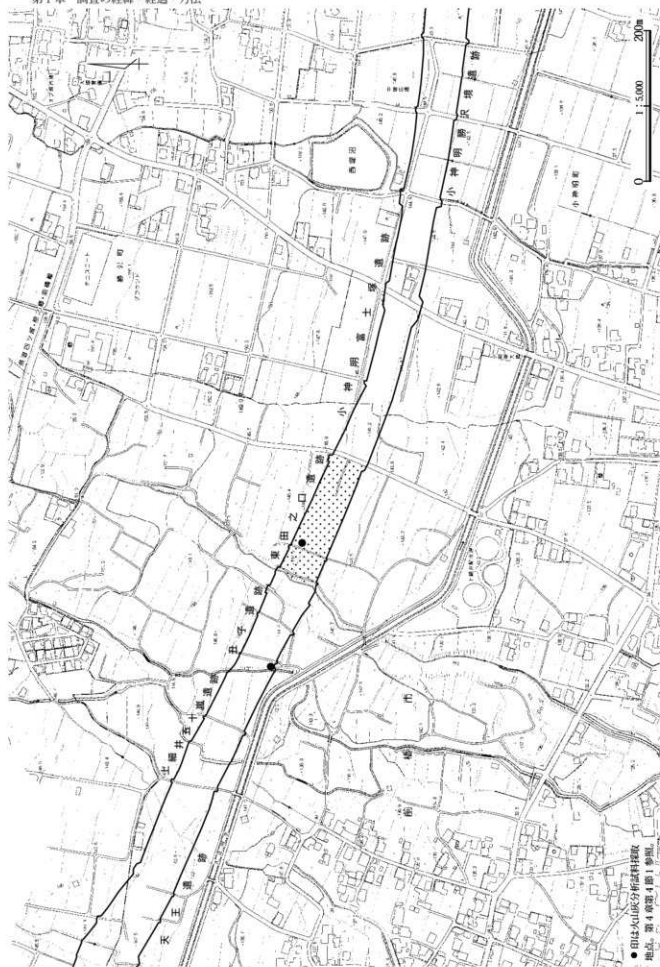
た。これが7工区と呼ばれる部分である。この部分の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省関東地方建設局、県教育委員会文化財保護課との間で協議が行われ、平成11年4月1日付で「一般国道17号(上武道路)改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その1)の実施に関わる協定書」が、建設省関東地方建設局、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者によって締結された。これによって平成11年度当初より、上武道路の発掘調査が10年ぶりに再開された。

この協定は前橋市堤町までをその範囲としていたため、平成14年4月1日付で「一般国道(上武道路)改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その2)の実施に関する協定書」として締結し、さらに平成16年11月10日に変更契約を行い、主要地方道前橋大間々桐生線までの間に範囲を延長して、発掘調査が継続して実施された。

さらに以西、国道17号の田口町までの部分は8工区と



第1図 道跡の位置(国土地理院20万分の1地勢図「長野」(平成10年2月1日発行)「宇都宮」(平成18年4月1日発行)使用)



第2図 東田之口運送調査区周辺図(前橋市役所発行2,500分の1前橋市現形図(平成21年)使用)

呼ばれ、本遺跡もこの工区に含まれる。ここについては平成18年2月16日付で「一般国道(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」が締結されて調査が実施されることになった。区間は前橋市上泉町から同田口町に至るまで約8kmであり、その間にある上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡群、上泉武田遺跡、五代砂留遺跡群、芳賀東部田遺跡、鳥取松合下遺跡、駒城遺跡、鳥取塚田遺跡、堤遺跡、小神明勝沢境遺跡、小神明富士塚遺跡、東田之口遺跡、丑子遺跡、上細井五十嵐遺跡、東紺屋谷戸遺跡、天王遺跡、時沢西紺屋谷戸遺跡、上町遺跡、王久保遺跡、新田上遺跡、上細井中島遺跡、上細井山遺跡、山王・柴遺跡群など31遺跡、約40万㎡が発掘調査対象となっている。これらは平成18年度に上泉唐ノ堀遺跡と上泉新田塚遺跡群の調査から着手され、順次西の遺跡に移りながら、平成23年度現在、調査はまだ進行中である。

東田之口遺跡は全域が用地買収終了となったため、平成20年度に調査対象となり、7月より調査を開始した。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

グリッドの設定

上武道路のⅡ期工事の部分については、発掘開始当初から統一したグリッドを設定することとし、以下のように大中小グリッドを設定した。グリッド設定には国土座標系を使用した。ただし、7工区は旧国土座標系=日本測地系を用いてグリッド設定を行っているが、8工区からは新国土座標系=世界測地系を用いることとしたので、両者のグリッドは直接接続しないため注意が必要である。

大グリッドは1km四方であり、これを第〇地区と呼称する。8工区については国土座標系 $X=45000$ 、 $Y=-63000$ を南東の隅とした1km四方を第1地区とし、以後路線に沿った形で第3図のように地区を設定した。本遺跡は第6地区に含まれる。中グリッドは一つの地区の内部を100m四方で区画したもので、これを〇区と呼称する。各地区の南東隅を1区とし、以後西に向かって2区、3区とし、10区、つまり1kmに達すると、1区の北

側に戻りそこを11区とし、同様に西に向かって12区、13区……とする。以後それを繰り返して各地区の北西隅は100区となる。本遺跡は第4図にみるように、6区、7区、16区、17区の4区にまたがる形となっている。小グリッドはこの中グリッドの内部をさらに5m四方に区画するもので、第4図のように、中グリッド内を5m毎の碁盤目に区画し、南東隅から西に向かってA~T、北に向かって1~20とし、グリッド名称は中グリッドの区名と、小グリッドのアルファベットと数字を組み合わせて、5m四方の南東隅を代表させて、「16区E-15」というように表すことにした。本報告書ではこのグリッド名称を用いて各遺構の場所を表示するが、土坑やピットなどの小さい遺構の平面図などでは、それよりもさらに細かい単位で表示する必要があるものがある。その場合は国土座標系をそのまま使い、1m単位のグリッドを作って、その名称は国土座標系の下3桁を使って表すことにした。たとえば、 $X=47108$ 、 $Y=-66562$ の場合、108-562のようにして位置を表している。

発掘調査

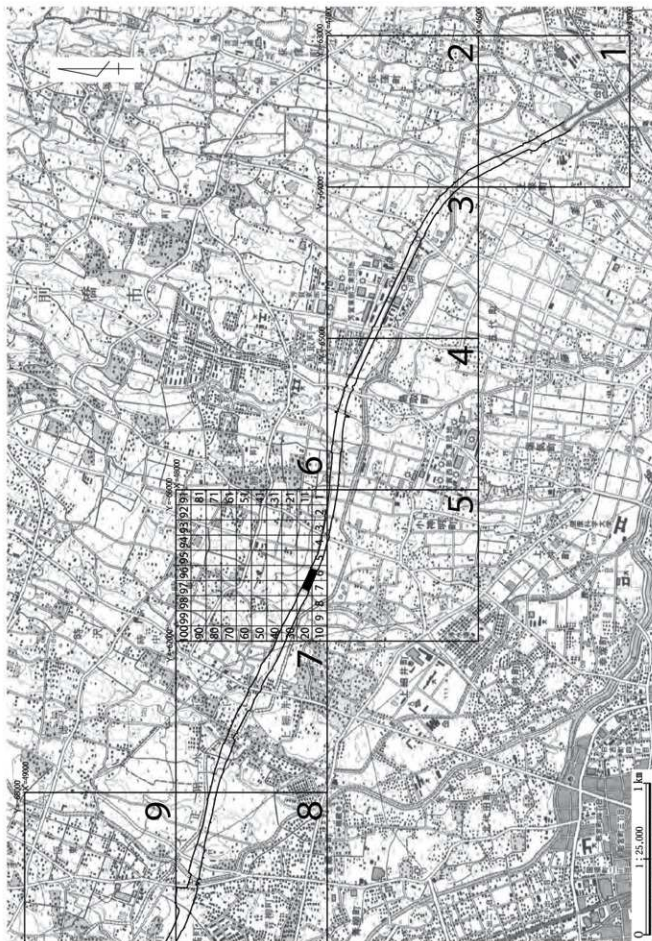
調査方法に特殊なものはなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土(第Ⅰ層)除去は基本的にバックホーを用いた。表土除去終了後はジョレンを用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。遺構の種類は主として竪穴住居であり、その他、掘立柱建物、土坑、溝、ピット、粘土採掘坑などであり、それぞれに適した方法を用いた。竪穴住居のセクション図については、竈のない辺のほぼ中央を結んだ線でのみ作図し、その他は必要に応じてエレベーション図を作成した。

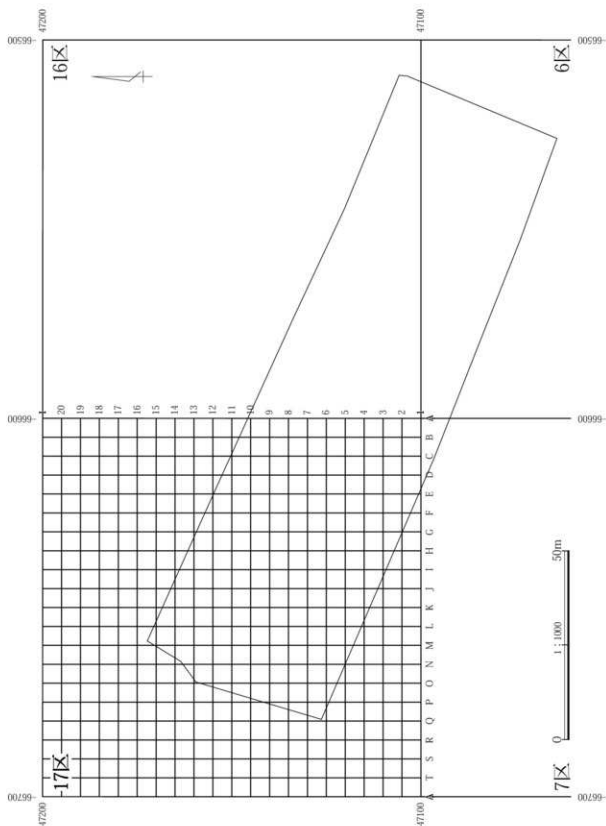
一部ではさらに下層に遺構があったため、2面調査となった。2面目まではやや層厚があったため、バックホーを用いて掘り下げた。

調査区は西側に市道が横断していたが、これは調査期間の後半に撤去できたため、全域を一つの調査区として調査することができた。そのため、調査区名などは無い。遺構番号は遺構毎に全て続き番号で表している。

遺構の測量は、平面図・断面図ともに原則として測量業者に委託したが、竈のみは平面・断面とも作業員により手実測を実施し、後ほど住居平面図と合成した。縮尺は1/10、1/20、1/40を遺構の性格に合わせて適宜使用し



第3図 大中グランド設定図(国土地理院2万5千分の1地形図「前橋」(平成29年12月1日発行)「澁川」(平成14年10月11日発行)「澁川」(平成29年12月1日発行)「大湖」(平成22年12月1日発行)「鼻毛石」(昭和56年7月30日発行)使用)



第4図 中小グリッド設定図

た。写真撮影はデジタル写真を基本とし、重要なものについては6×7白黒を併用した。調査区の全景写真は業者に委託し、ラジコンヘリによる空中撮影を1回実施した。

遺構の調査終了後、旧石器時代の調査を行った。調査対象となるロームの層厚は薄いので、竪穴住居などで破壊されており、そのため、調査トレンチはそれらの遺構が少ない部分を選んで設定した。各トレンチの大きさは2×5mであり、それを7ヶ所設定し、ジョレンで掘り下げて調査を行ったが、各トレンチからは遺構・遺物とも見つからなかった。

旧石器時代の調査時に、白川扇状地の形成時期などを明らかにする資料を得るため、西隣の丸子遺跡と共にテフラ分析を実施した。その結果については第4章に収録した。

2 調査の経過

現地における調査は7月7日より開始した。まず重機を用いて全域の表土除去を行った。その際、西側を南北に横断する市道部分は除外して残し、この部分については12月に表土除去を実施して市道を撤去した。

発掘調査は、調査事務所を用地内に建設する必要があったため、その建設予定地から着手することにした。そのため、現道に面した北東部の60m×20m程度の範囲を先行して調査した。幸いにもこの付近の遺構は少なく、竪穴住居1軒、土坑4基、溝3条のみであり、それらの調査は7月中旬のうちに終了したので、7月22日には事務所用地を造成して、その後調査事務所を設置した。

7月23日から8月6日にかけては、調査区の全域を対象として遺構確認を行った。その結果、調査区東端から約50mの範囲までは遺構は希薄であるものの、ちょうどそこにある南北の浅い谷を境とした西側は、遺構が非常に濃密に分布していることが判明した。この南北の浅い谷にはAs-Bが堆積していたが、その下層に水田などは確認されていない。その西側で発見された遺構は、竪穴住居の数だけでも概算で50軒以上はあり(最終的には65軒であった)、その他、土坑や掘立柱建物などの存在も数多く想定されたため、調査はかなりの困難が予想された。

それらの遺構の調査は8月4日から開始した。調査区西部にある市道から東側については、竪穴住居の重複が

比較的少なく、ある程度の形が把握できたため、あらかじめ住居番号を付し、東側の遺構から着手することとした。まず比較的中・小型の住居である2～9号住居と、2号住居に隣接する1号粘土採掘坑の調査から開始した。以後、調査工程に支障がないようにしながら、順次西の遺構に調査を広げていったが、東側の住居は規模が大きく、しかも床面までの深さが深いものが多く、いずれの層も非常に残りがよかったですので、調査には予想以上の時間がかかることになった。また、これらの住居のうち、最大規模の14・15号住居については、あまりの大きさのために通常の方法では全景写真を撮ることができず、高所作業車を用いて撮影することとし、まず9月11日に遺物出土状況を、9月26日に床面の全景写真を撮る、さらに10月21日に掘方の全景写真を撮影した。

これらの住居群の南東隅にある3号住居には、南東隅にやや細長い別の遺構が重複していることが分かっていた。9月に入って3号住居の調査が終盤に近づいてきたため、この別の遺構の調査に入ったところ、これは溝状の遺構(5号溝と命名)であり、しかもそれを東側に追っていくと、当時の遺構確認面よりも下層に潜り込んでいくことが判明した。この部分より東側は、前述したようにAs-Bが残る浅い低地になっているが、この5号溝はAs-Bの下層にある黒褐色土、暗褐色土などのさらに下層に潜り込みながら続いていることが分かり、その調査のためにはかなり広い範囲でその上にとった土を除去する必要が生じた。そのため、11月11・12日に重機を用いてその土を除去した。ところが、除去したのちに遺構確認を行ってみると、5号溝の延長部の他に、溝や粘土採掘坑と思われる土坑群などの多くの遺構が現れた。これらの予想外の遺構が見つかったため、さらに11月18日にも重機を用いて、さらに広く土を除去し、それによって粘土採掘坑群の全体や41号住居などを見つけることができた。その後、それらの遺構の調査を継続して行った。粘土採掘坑群は深く複雑な遺構であり、調査は難航したが、12月中旬にはほぼ終了し、その後その部分の埋め戻しと整地を行って作業員の駐車場とした。

市道東側の調査は11月末にはかなり進行したため、12月1日に市道を撤去し、さらに西側の調査にも入ることとした。この付近は表土の削平が深く、掘削も多く入っていたため、遺構の残りは全般によくなかったので、確

認作業は難航した。しかも、竪穴住居を初め、ピットや土坑、溝等複雑に重複するところが多かったが、削平が深く及んでいるために各遺構が浅く、調査は予想以上に早く進めることができた。2月には旧石器時代の確認調査にも着手したが、遺構・遺物とも発見されず、現地に於ける調査は2月13日に終了した。

3 整理作業の概要と遺構名称の改訂

整理作業は平成22年7月1日より平成23年8月31日まで、2ヶ年度にまたがって行った。遺構図面は点検・修正を行ったのち、デジタルトレースを行った。遺物につ

いては接合・復元、写真撮影、実測、トレースののち、トレース原稿をスキャニングしてデジタルデータとした。同時に遺物観察を行った。写真はフィルムのもは取り込み作業を行ったが、それ以外は基本的に遺構・遺物ともデジタル写真から編集を行った。それらの作業と並行して本文の執筆、土層注記や各種一覧表などを作成し、それらを併せてデジタル編集し、報告書原稿を作成した。

なお、整理の過程で、調査時と遺構名称の改訂が生じている。以下に一覧を示す。

第1表 遺構名称の改訂

調査時の名称	本報告書で用いた名称
28号土坑	9号粘土探掘坑
29号土坑	1号竪穴遺構
32号土坑	2号竪穴遺構
1号竪穴遺構	1号粘土探掘坑
2号竪穴遺構	2号粘土探掘坑
3号竪穴遺構	3号粘土探掘坑
4号竪穴遺構	4号粘土探掘坑
5号竪穴遺構	5号粘土探掘坑
6号竪穴遺構	粘土探掘坑部に合流
16号住居の一部	7号粘土探掘坑
3号住居の一部	8号粘土探掘坑
74号土坑	11号溝
1号竪立柱建物P 1	1号竪立柱建物P 5
1号竪立柱建物P 2	1号竪立柱建物P 4
1号竪立柱建物P 4	1号竪立柱建物P 2
1号竪立柱建物P 5	1号竪立柱建物P 1
1号竪立柱建物P 7	1号竪立柱建物P 8
1号竪立柱建物P 8	1号竪立柱建物P 9
1号竪立柱建物P 9	1号竪立柱建物P 10
1号竪立柱建物P 11	1号竪立柱建物P 12
1号竪立柱建物P 12	1号竪立柱建物P 7
2号竪立柱建物P 1	2号竪立柱建物P 5
2号竪立柱建物P 2	2号竪立柱建物P 4
2号竪立柱建物P 4	2号竪立柱建物P 2
2号竪立柱建物P 5	2号竪立柱建物P 1
2号竪立柱建物P 7	2号竪立柱建物P 11
2号竪立柱建物P 9	2号竪立柱建物P 13
2号竪立柱建物P 10	2号竪立柱建物P 14
2号竪立柱建物P 11	2号竪立柱建物P 15
2号竪立柱建物P 12	2号竪立柱建物P 10
2号竪立柱建物P 13	2号竪立柱建物P 9
2号竪立柱建物P 14	2号竪立柱建物P 8
2号竪立柱建物P 15	2号竪立柱建物P 7
3号竪立柱建物P 1	3号竪立柱建物P 7
3号竪立柱建物P 2	3号竪立柱建物P 8
3号竪立柱建物P 3	3号竪立柱建物P 9
3号竪立柱建物P 4	3号竪立柱建物P 10
3号竪立柱建物P 5	3号竪立柱建物P 6
3号竪立柱建物P 6	3号竪立柱建物P 4
3号竪立柱建物P 7	3号竪立柱建物P 3

調査時の名称	本報告書で用いた名称
3号竪立柱建物P 8	3号竪立柱建物P 2
3号竪立柱建物P 9	3号竪立柱建物P 1
3号竪立柱建物P 10	3号竪立柱建物P 5
17号土坑	3号竪立柱建物P 8
4号竪立柱建物P 2	4号竪立柱建物P 10
4号竪立柱建物P 3	4号竪立柱建物P 5
1号櫛列P 1	4号竪立柱建物P 15
1号櫛列P 2	4号竪立柱建物P 14
1号櫛列P 3	4号竪立柱建物P 13
1号櫛列P 4	4号竪立柱建物P 12
19号ピット	4号竪立柱建物P 7
24号ピット	4号竪立柱建物P 6
28号ピット	4号竪立柱建物P 1
29号ピット	4号竪立柱建物P 2
23号ピット	5号竪立柱建物P 10
30号ピット	5号竪立柱建物P 8
64号ピット	5号竪立柱建物P 7
66号ピット	5号竪立柱建物P 2
67号ピット	5号竪立柱建物P 3
68号ピット	5号竪立柱建物P 4
69号ピット	5号竪立柱建物P 6
70号ピット	5号竪立柱建物P 9
6号竪立柱建物P 1	6号竪立柱建物P 8
6号竪立柱建物P 2	6号竪立柱建物P 9
6号竪立柱建物P 3	6号竪立柱建物P 10
6号竪立柱建物P 4	6号竪立柱建物P 7
6号竪立柱建物P 5	6号竪立柱建物P 3
6号竪立柱建物P 6	6号竪立柱建物P 2
6号竪立柱建物P 7	6号竪立柱建物P 1
6号竪立柱建物P 8	6号竪立柱建物P 4
6号竪立柱建物P 9	6号竪立柱建物P 5
6号竪立柱建物P 10	6号竪立柱建物P 6
183号ピット	7号竪立柱建物P 7
202号ピット	7号竪立柱建物P 3
221号ピット	7号竪立柱建物P 8
225号ピット	7号竪立柱建物P 4
249号ピット	7号竪立柱建物P 5
250号ピット	7号竪立柱建物P 2
271号ピット	7号竪立柱建物P 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

東田之口遺跡は群馬県の中央部に位置する赤城山の南麓の末端近くにある。

赤城山は標高1828mの複合成層火山で、広大な裾野をもっていることで知られている。山の南側では、特に標高約500m付近よりも下部は傾斜が緩くなり、徐々に傾斜を下げて広瀬川低地帯へとつながっていく。この広瀬川低地帯は中世までの旧利根川の氾濫原である。この山麓地帯には山頂方向から幾筋もの谷が入り、それらは南流してみなこの広瀬川低地帯で広瀬川に注いでいる。

南麓の地形をみると、中央付近を流れる荒砥川を境として東西で大きく異なっている。東側は約20～30万年前に発生した山体崩壊による岩屑なだれによってできた、「流れ山」と呼ばれる小丘陵が多く存在し、起伏に富んでいる。それに対して西側は、基底部に大湖火砕流が堆積するところや、赤城白川の形成した扇状地などがあり、傾斜が緩やかで広々としている。東田之口遺跡は、この白川扇状地の上に立地している。標高は約150mであり、あとわずか700mほど南に下がると広瀬川低地帯となる。まさに赤城山麓の末端というべき位置である。

なお、本遺跡と、亘子遺跡西端の崖面の露頭とで、この白川扇状地の形成年代の一端を知ることができる土層が観察できた。そのためこの両地点で土層に含まれる火山灰分析を行い、その結果を第4章第4節1に掲げた。

この白川扇状地上にも山頂方向から幾筋もの小河川が流れ下っており、細かくみれば起伏のある地形である。東田之口遺跡でもすぐ西側は小さな谷によって亘子遺跡と区切られ、また、調査区の東側には後に述べるように浅い谷が入っており、これによって遺跡の様相に大きな影響を与えられている。

発掘調査前の遺跡周辺は畑地として利用されており、調査区の中は南に傾斜するものの、凹凸をあまり感じないほぼ平坦な土地であった。

第2節 歴史的環境

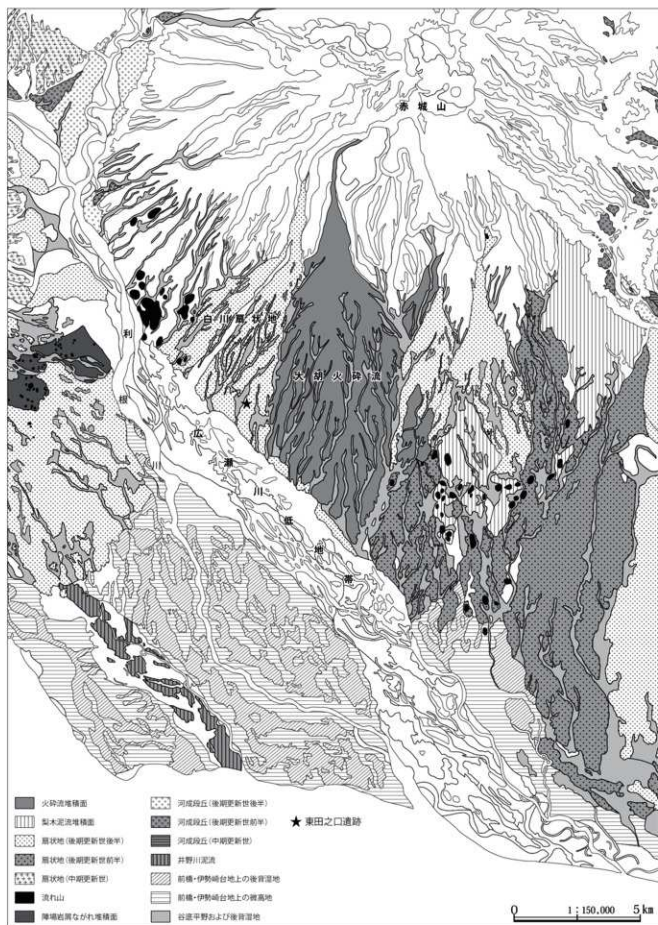
赤城南麓の地は約3万年前の旧石器時代以降の遺跡が数多く残され、県内有数の遺跡密集地帯として有名である。そのため、上武道路の予定地でも、路線のほぼ全域が遺跡として調査対象となっているほどである。以下、本節では東田之口遺跡周辺の遺跡について概観するが、本遺跡で見ついている遺構は、古墳時代、奈良・平安時代、中近世に限られており、主にその時代を中心にみていくことにしたい。

旧石器時代

赤城南麓は有名な岩宿遺跡が存在し、相沢忠洋氏がフィールドとして研究活動を行った、学史的にも重要な地である。現在の前橋、伊勢崎、桐生の地域には、有名な旧石器時代の遺跡が多くあるが、本遺跡周辺での調査例はこれまであまり多くなく、第6図の範囲内では、鳥取福蔵寺遺跡(45、番号は第6図・第2～4表の番号と一致。以下同じ)でAs-YP直下から、細石器が出土している程度である。しかし上武道路の調査では、上細井中島遺跡(10)、上細井峠山遺跡(11)、胴城遺跡(16)、芳賀東部団地遺跡(18)、五代砂留遺跡群(19)などで旧石器時代の遺物が出土しており、調査例が急激に増加した。本遺跡ではこの時代の遺構・遺物は見つかっていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は第6図の範囲に限っても数多く知られ、枚挙に遑がない。赤城山麓は前期の集落が多いことで知られ、芳賀東部団地遺跡(18)、同西部団地遺跡(41)、同北部団地遺跡(149)や、五代中原遺跡(21)を初めとした五代地区の遺跡群など、多くの遺跡で前期の住居が調査されている。以後、中期は五代伊勢宮遺跡(27)など、後期は芳賀東部団地遺跡(18)、小神明九科遺跡(50)などで調査例があるが、晩期には激減する。上武道路の調査でも多くの遺跡で縄文時代の遺構を調査し、中でも堤遺跡(15)では後期の柄鏡形敷石住居3軒のほか、草創期か



第5図 周辺地形分類図(群馬県「群馬県史通史編1」付図2を改変使用)

ら後期にかけての遺構・遺物を多く調査している。本遺跡では少量の土器・石器が出土したのみであり、遺構は見つかっていない。

弥生時代

弥生時代の遺跡は数が少ないのが第一の特徴である。第2～4表をみれば明らかのように、この時代の遺跡は非常に少ないが、貴重な調査例として、小神明倉本遺跡(52)での中期から後期の住居2軒、小神明湯気遺跡(53)の後期の住居1軒、端気遺跡(61)のこの時代の可能性のある方形周溝墓などがある。上武道路の調査では、西隣の庄子遺跡(2)でやや不明瞭ながら後期の住居1軒、小神明勝沢境遺跡(7)で後期構式の住居2軒を調査している。本遺跡では遺物を含めて同時代のものは確認できていない。

古墳時代

古墳時代に入ると遺跡は増加するが、前期のものはまだ数が少ない。芳賀東部団地遺跡(18)では前橋市教育委員会が調査した調査区で73軒の住居が確認され、この時期に大きな集落が成長し始めていることが分かる。その他、五代中原遺跡(21)、五代江戸屋敷遺跡(28)、鳥取福蔵寺遺跡(45)などでもこの時代の住居が調査され、さらに五代江戸屋敷遺跡では方形周溝墓も2基見つかっている。上武道路の調査では庄子遺跡(2)、山王・柴遺跡(12)、小神明勝沢境遺跡(14)、芳賀東部団地遺跡(18)などで前期の住居が見つかり、調査例が増加した。遺跡の数は、中期を経て後期になると増加する。中・後期の遺跡は第2～4表にみるように非常に多く、この時期に開発が進んだことを窺わせる。集落遺跡は、芳賀東部団地遺跡(18)、五代伊勢宮遺跡(27)などの五代地区の遺跡、鳥取福蔵寺遺跡(45)などで数多く調査されている。上武道路の調査では庄子遺跡(2)、山王柴遺跡(12)、胴城遺跡(16)、芳賀東部団地遺跡(18)などで多くの住居を調査しているが、やはり特筆すべきは本遺跡の調査例である。本遺跡では中～後期の住居を68軒調査し、その周囲を含めれば相当な規模の集落であったことが分かる。おそらく本遺跡がこの時代の当地域の拠点的な集落であったと思われるが、芳賀東部団地遺跡(18)のように奈良・平安時代にまで継続している遺跡があるのに比べ、本遺跡で

は短期間で終末を迎えていることが注目される。本地域の集落の動向を考える上で重要な点であろう。

なお、本遺跡の周辺では大規模な古墳は少ない。赤城南麓の大規模な前方後円墳としては本遺跡の南東方向に大きく離れた大室古墳群が上げられ、この古墳群の動向は当地域の古墳の様相にも大きな影響があったものと思われる。第6図の範囲内では大日塚古墳(36)、丑子塚古墳(78)、オブ塚古墳(116、現状で全長35m)などが後期の前方後円墳であり、その他は中小規模の円墳が分布する。『上毛古墳総覧』をみると、南橋村に45基、芳賀村に64基があり、富士見村には29基があるが、第2～4表にみるように消滅してしまったものも多い。古墳の調査例としては芳賀西部団地遺跡(41)で31基の古墳が調査されていることが注目される。

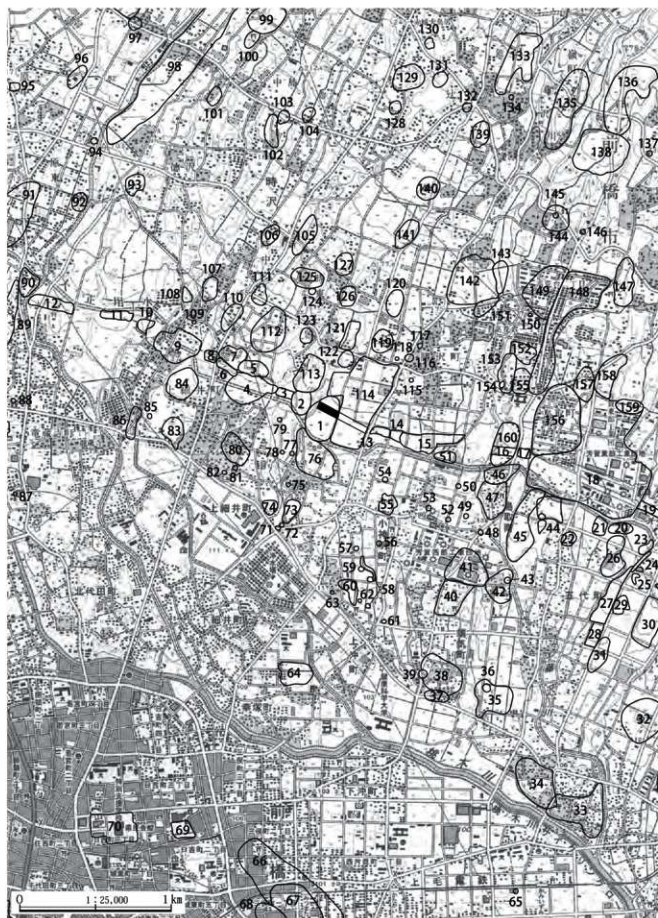
その他、山王柴遺跡ではAs-C前後の高塚が調査されているが、低地の少ない地域であるため、FAやFPIに関わる古墳時代の水田は見つかっていない。

奈良・平安時代

赤城南麓の地域は古代には「勢多部」に属していた。勢多部は『和名抄』によれば深田・田邑・芳賀・桂蓋・真壁・深栗・深澤・時澤・藤澤の9郷からなっている。第6図の範囲でいえば、本遺跡を含む中央から東部一帯が芳賀郷、北西部に時沢郷、南部に桂蓋郷の比定地があるが、芳賀部の比定地には、「芳郷」の墨書土器がかなり離れた二之宮洗橋遺跡(第6図の範囲外)から出土していることなど、不確定要素も大きく、確定しているわけではない。なお、図の南西隅に当たる前橋市街地の大部分は、当時群馬郡に属していたものと思われる。

奈良・平安時代の遺跡は非常に数が多く、小規模な調査で見つかっている住居も含め、集落が広い範囲に分布していることが分かる。

本遺跡の周辺でまず取り上げるべき遺跡は、やはり芳賀東部団地遺跡(18)である。ここでは古墳時代後期から続く奈良・平安時代の大集落が調査されている。その南側に位置する五代地区の諸遺跡(五代伊勢宮遺跡(27)や五代江戸屋敷遺跡(28)、五代竹花遺跡(29)など)や、南西側に位置する鳥取福蔵寺遺跡(45)や小神明地区の遺跡(小神明丸九郎遺跡(50)、小神明湯気遺跡(53)など)でも同時期の住居が多く見つかっており、本遺跡の東側に多く



第6図 周辺の遺跡(国土地理院2万5千分の1地形図「前橋」(平成22年12月1日発行)「洗川」(平成14年10月1日発行)使用)

第2章 遺跡の位置と環境

第2表 周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	集落・溝・土坑など○ 墳墓● 生産跡□							備考	文献
		水田・高田	縄文	弥生	古墳前期	古墳中後	奈良	中・近		
1	東田之口遺跡		△			○	○			本書
2	柱子遺跡			○	○	○	○		弥生後期住居1。古墳前～後期集落。平安集落。中世館の堀、土坑群、井戸。	2
3	上畑井五十嵐遺跡		○				●		縄文前期集落。平安集落。As-6下水田。	2
4	天宮遺跡		○			○	○		古墳後期～奈良・平安集落。	2
5	東畑屋谷戸遺跡					○	○		奈良・平安集落。中近世擬立柱建物、火葬墓。	2・46
6	上野遺跡					○			奈良・平安集落。道路。溜井。	3
7	時沢西畑屋谷戸遺跡					○	○		奈良・平安集落。道路。近世水田。	3・57
8	王久保遺跡					○	○		平安集落。	3
9	新田上遺跡		△		△					64
10	上畑井中島遺跡	△	○				○	○	As-0k下から縦長剣片出土。縄文早期竪穴住居1、中期集落。平安集落。	3
11	上畑井神山遺跡	△	○			●	●		珪質頁岩割器、黒色頁岩槍先形尖頭器出土。縄文前期集落。古墳後期住居1。古墳1。奈良・平安集落。	3
12	山王・栄遺跡群			○	○	●	●		古墳前～後期集落、小石塚墓、方墳四基、横穴式石室、竪。	3
13	小神明富士塚遺跡	△							縄文包含層。古墳後期～奈良・平安集落。近世屋敷。	2・3・21
14	小神明勝沢城遺跡	△	○		○				縄文中期埋蔵。弥生後期集落。古墳集落。	2
15	堤遺跡		○				○		縄文草創期槍形尖頭器製作跡、前期～後期集落、後期敷石住居。平安集落。	2
16	柳城遺跡	△	○			●	○	○	Y P～O k間でナイフ型含む120点の旧石器。縄文前期集落。古墳1基。古墳前期、後期～奈良・平安集落。江戸墓。	1・2
17	鳥取松合下遺跡					○	○	○	古墳～奈良・平安集落。	2
18	芳賀東部田遺跡	△	○		○		○	○	(前橋市調査分)縄文前～後期集落。古墳4基。古墳前期、後期～奈良・平安集落。鍛冶遺構含む。(事業団調査分)As-BP下～暗色帯環状ブロック2、縄文集落。古墳前期集落。古墳後期～奈良・平安集落。近世墓。	1・2・38～40・43・44
19	五代砂留遺跡群	△	○		○				旧石器3ブロック、縄文前期集落。古墳前期集落(銅鏡出土)。平安集落。	1
20	中原遺跡				△					64
21	五代中原遺跡			○	○	○	○	○	縄文前期集落。古墳前期～後期集落。平安集落。	30・32・34
22	天神遺跡	△			△					64
23	五代山街道遺跡								縄文前・中期集落。古墳後期集落。平安集落。	34
24	五代伊勢宮遺跡(2)	○					○		縄文前・中期中土坑。平安集落。	37
25	五代深城遺跡				○	○	○		縄文中期集落。古墳後期～奈良・平安集落。	27・30・35
26	江戸原敷遺跡	△			△					64
27	五代伊勢宮遺跡	○			○	●	○	○	縄文前・中期集落。古墳後期～奈良・平安集落。8世紀末鍛冶工房。	26・29～32・36
28	五代江戸原敷遺跡			○	●	○	○	○	古墳前期集落・方形周溝墓。古墳後期～奈良・平安集落。	28
29	五代竹花遺跡			○			○	○	縄文中期集落。古墳後期～奈良・平安集落。和向間塚2、神功間塚3。銅鏡出土。	26・33
30	五代木福遺跡	○				○	○	○	古墳後期～奈良・平安集落。和向間塚。遠方出土。鍛冶工房含む。	26・27・33・35
31	木福遺跡									64
32	杉山遺跡	△			△					64
33	上泉城							○	16世紀。大胡城の支城。上泉(大胡)氏。橋、戸口、五輪塔。	60・61
34	西久保遺跡				△					64
35	大日遺跡	△								64
36	大日塚古墳					●			原形をとどめないが、前方後円墳で横穴式石室と推定。明治38年発掘。馬具など遺物多数出土。	4
37	細気前遺跡									64
38	下輪遺跡									64
39	ホーク塚古墳					●			消滅。「総覧」芳賀10号。円墳。	63・64
40	後原遺跡	△								64
41	芳賀西部田遺跡	○				●		○	縄文前期集落。古墳31基。埴輪倉1。	41
42	高橋古墳群					●			消滅。	64
43	芳賀13号墳					●			消滅。	64
44	鳥取東原遺跡					○	○		古墳後期住居1。近世墓。	18
45	鳥取福蔵寺遺跡	△		○	○	○	○	○	旧石器Y P下層石器。縄文前期～後期集落。古墳前期、後期～奈良・平安集落。	19・20
46	北原遺跡				△		△			64

第3表 周辺道跡一覧表(2)

番号	道跡名	集落・溝・土坑など○墳墓●生産跡□							備考	文献
		水田・高	縄文	弥生	古墳前期	古墳中後	奈良・平安	中・近		
47	鳥取の磐					△		○	15～16世紀。文献58は福城の支城とし、58は覚智六郎右衛門ら越後勢の居城とする。堀。	60・61
48	前原古墳					●			消滅。	64
49	小神明西田道跡		○			○●			縄文前期集落。古墳中期集落。後期古墳5基。	23
50	小神明丸科道跡		○				○	○	縄文後期集落(新築形敷石住居3軒含む)。古墳後期～奈良・平安集落。近世意。	22・24・25
51	小神明下田道跡		○				○	○	縄文前期・中～後期初頭集落。平安集落。近世遺跡。	21
52	小神明倉本道跡		△	○				○	弥生中・後期集落。戦国以降遺跡。	22
53	小神明湯気道跡		△	○				○	縄文草創期尖頭器出土。弥生後期住居。古墳中・後期～奈良・平安集落。	24
54	小神明合田道跡		△				○		奈良・平安集落。	25
55	小神明の磐							○	16世紀。堀、土居。	60・61
56	小神明大明神道跡					○		○	古墳後期集落。	22
57	小神明谷向道跡		△			△				23
58	谷塚道跡					○	○		古墳後期集落。平安集落。	13
59	時沢遠堀道跡							○	全長2.7kmの堀跡。	60・61
60	寄居道跡							○	「小神明の寄居」とも。	60・61
61	堀気道跡		○	●		○		○	縄文草創期尖頭器、前・中期集落。弥生方形周溝墓。古墳中・後期集落。中世遺跡。	5・6
62	上神神明宮裏道跡					△	△			64
63	上神上ノ山古墳					●			径17.5mの円墳。横穴式石室。直刀・耳環・人骨・歯など出土。消滅。	4
64	上神五反田道跡		△							64
65	茶本田道跡						○		奈良・平安集落。	10
66	三保城之内道跡						△			64
67	三保城							○	市街地となり消滅。北条高広。	60・62
68	三保下高輪道跡					△	△			64
69	三保の寄居							○	16世紀。現私立女子高校。堀、戸口、櫓台。	60
70	清王寺の寄居							○	消滅。現国民会館。	60
71	南橘1号墳					●			消滅。	64
72	南橘2号墳					●			消滅。	64
73	西堀道跡		○						縄文土坑。古墳後期集落。	11
74	南庄依道跡		△			△				64
75	南橘4号墳					●			消滅。	64
76	南田之口道跡		○	○			○		縄文前期土坑。古墳中・後期集落。	9
77	南橘13号墳					●			消滅。	64
78	辻子塚					●	○		「総覧」6号。前方後円墳。昭和29年、平安住居調査。	4
79	南橘8号墳					●			消滅。	64
80	荒屋敷道跡		△	△						64
81	南橘9号墳					●			消滅。	64
82	南橘11号墳					●			消滅。	64
83	栗師道跡		△			△				64
84	王間久保道跡		△			△				64
85	狐塚古墳					●			「総覧」南橘14号墳。円墳。	63・64
86	八幡山の磐							○	詳細不明。五輪塔、板碑。	60・61
87	青柳寄居道跡						○■		平安集落。古代(時期不詳)の水田跡も。	8
88	神明道跡A					△				64
89	青柳宿上道跡					○			昭和27年。古墳後期住居調査。	4
90	引切塚道跡		△			○●	○		古墳後期集落。横穴式石室1基調査。奈良・平安時代集落。	15・16
91	旭久保道跡		△			○	○	○	古墳後期～平安集落。	30・54・55
92	原之郷下白川道跡						△			57・58
93	念仏道跡						△	△		64
94	原之郷白川道跡					△				55
95	原之郷中子道跡						△			64
96	原之郷磯沢道跡		△				○		平安集落。	51・53
97	小沢の場道跡		○				○	○	平安集落。	52・53
98	時沢中島道跡					△				64

第2章 遺跡の位置と環境

第4表 周辺遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	集落・溝・土坑など○ 墳墓● 生産跡□							備考	文献		
		水田・高	縄文	弥生	古墳前期	古墳中後	奈良	平			中	近
99	時沢基太夫遺跡		△								縄文包蔵地。	64
100	時沢諏訪遺跡		△								縄文包蔵地。	64
101	時沢中谷遺跡							△				64
102	時沢堀田遺跡		△					△				64
103	時沢堀遺跡		△							○	江戸時代屋敷。	53
104	時沢大東遺跡		△									47
105	時沢四ツ塚遺跡		△									64
106	時沢大角谷口遺跡							△				64
107	時沢萩林遺跡							△				64
108	時沢西萩林遺跡								△			64
109	新田上古墳								●		酒蔵。	64
110	時沢西高田遺跡									○	平安集落。	54・55・58
111	時沢宮東遺跡									△		64
112	時沢中屋敷遺跡									△		64
113	定福遺跡									△		64
114	田之口遺跡									△		64
115	西曲輪遺跡									△		64
116	オプ塚古墳									●	横穴式石室を伴う前方後円墳。直刀、小刀、刀子、鉄鎌、円筒埴輪、形象埴輪出土。	4
117	芳賀49号墳									●	酒蔵。	64
118	オプ塚西古墳									●	昭和34年発見。墳丘をもたない小型の惣穴式小石塚。	4
119	組之本原遺跡									○	古墳後期～奈良・平安集落。	49・58
120	時沢下百駄山遺跡		△							○		64
121	時沢森後遺跡									△		64
122	時沢上福遺跡		△							△		64
123	時沢古田遺跡									△		64
124	時沢東諏訪遺跡									△		64
125	時沢東諏訪日遺跡									△		64
126	時沢滝輪遺跡									△		64
127	時沢山王遺跡		△							△		64
128	時沢横堀Ⅱ遺跡		△							△		64
129	横堀遺跡		△							△		64
130	小暮八幡遺跡		△							△		64
131	小暮西辻遺跡		△							△		64
132	小暮清塚遺跡		△							△		64
133	広面遺跡		△							○	縄文前期集落。平安集落。	45
134	鉄見塚遺跡									●	「総覧」芳賀56号墳。円墳。「石塚現存」とある。	63・64
135	堀城									○	16世紀。戦国期の並部式の石城。北第二郭の東部を一部調査。堀切、土居、堀戸口、井、腰郭、帯郭。	17・60・61
136	大林下遺跡		△									64
137	小坂子新林遺跡									△		64
138	入替戸・十二原遺跡		△									64
139	寺岡遺跡		△							○	縄文前期集落。平安集落。	47・59
140	孫田遺跡		○							○	縄文土坑。平安溝（道跡か）。	47・59
141	上百駄山遺跡		○							○	縄文前期集落。平安時代集落。小鍛冶遺構含む。中世館跡。	47・48
142	市之巻遺跡		△									64
143	高橋遺跡									△		64
144	東公田遺跡		△							△		64
145	東公田古墳									●	「総覧」記載漏れ。径約14mの円墳。横穴式石室。7世紀後半。	7
146	芳賀59号墳									●	酒蔵。	64
147	小坂子城									○	16世紀。堀城の支城か。堀切、土居、戸口、腰郭。	60・61
148	五反田遺跡										芳賀北部岩地遺跡として調査。149参照。	42
149	芳賀北部岩地遺跡		○							○□	縄文前・中期集落。奈良～平安集落。製鉄遺構含む。	42
150	新次郎遺跡										芳賀北部岩地遺跡として調査。149参照。	42
151	芳賀北曲輪遺跡		○							●	縄文前期、中期末～後期初集落。古墳末部集墳。	12
152	勝沢城									○	16世紀。堀城の支城か。堀、帯郭。	60・61
153	東曲輪遺跡		△									64
154	芳賀46号墳									●	酒蔵。	64
155	鳥取番城遺跡									○		64
156	宮前遺跡										芳賀東部岩地遺跡として調査。参照。	38～40
157	西戸遺跡										芳賀東部岩地遺跡として調査。18参照。	38～40
158	虎替戸の宮									○	16世紀。堀。	60・61
159	下館遺跡										芳賀東部岩地遺跡として調査。18参照。	38～40
160	芳賀北原遺跡		○							○	古墳後期集落。平安集落。	14

参考文献

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業部 2008 『年報27』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業部 2009 『年報28』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業部 2010 『年報29』
- 前橋市 1971 『前橋市史第1巻』
- 前橋市教育委員会 1983 『福気遺跡群Ⅰ』
- 前橋市教育委員会 1984 『福気遺跡群Ⅱ』
- 群馬県教育委員会 1982 『緊急文化財調査報告書 川島遺跡・東公田古墳』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1984 『青柳居遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1985 『南田之口遺跡』
- 前橋市教育委員会 1985 『茶木田遺跡』
- 前橋市教育委員会 1987 『西堀遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1990 『芳賀北曲輪遺跡』
- 前橋市教育委員会 1990 『谷端遺跡調査報告書』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1992 『芳賀北原遺跡』
- 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財調査部 1988 『弓切塚遺跡』
- 前橋市教育委員会 1993 『弓切塚Ⅱ遺跡』
- 前橋市教育委員会 1994 『平成5年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1998 『鳥取東原遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1998 『鳥取福蔵寺遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1999 『鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡』
- 前橋市教育委員会 1983 『小神明遺跡群Ⅰ』
- 前橋市教育委員会 1984 『小神明遺跡群Ⅱ』
- 前橋市教育委員会 1985 『小神明遺跡群Ⅲ』
- 前橋市教育委員会 1986 『小神明遺跡群Ⅳ』
- 前橋市教育委員会 1987 『小神明遺跡群Ⅴ』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2001 『五代伊勢宮Ⅰ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2001 『五代伊勢宮Ⅱ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2001 『五代伊勢宮Ⅲ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2002 『五代伊勢宮Ⅳ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2002 『五代伊勢宮Ⅴ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2002 『五代伊勢宮Ⅵ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2003 『五代伊勢宮Ⅶ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2003 『五代伊勢宮Ⅷ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2003 『五代伊勢宮Ⅸ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2004 『五代伊勢宮Ⅹ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2004 『五代伊勢宮Ⅺ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2005 『五代伊勢宮Ⅻ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2005 『五代伊勢宮Ⅼ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2007 『五代伊勢宮Ⅽ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2009 『五代伊勢宮Ⅾ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1984 『芳賀東原西地遺跡Ⅰ』
- 前橋市教育委員会 1988 『芳賀東原西地遺跡Ⅱ』
- 前橋市教育委員会 1990 『芳賀東原西地遺跡Ⅲ』
- 前橋市教育委員会 1991 『芳賀東原西地遺跡Ⅳ』
- 前橋市教育委員会 1994 『芳賀東原西地遺跡Ⅴ』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 1998 『芳賀東原西地遺跡Ⅵ』
- 前橋市埋蔵文化財調査部 2005 『芳賀東原西地遺跡Ⅶ』
- 富士見村教育委員会 1992 『弘道遺跡』
- 富士見村教育委員会 1995 『上毛監山遺跡・寺間遺跡・孫田遺跡』
- 富士見村教育委員会 1996 『上毛監山遺跡Ⅱ』
- 富士見村調査部 1996 『堀之本原遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『堀久保Ⅱ遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『原之郷原Ⅱ遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『小弓の埴遺跡』
- 富士見村教育委員会 1997 『平成8年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『平成9年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 1999 『平成10年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2000 『平成11年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2001 『平成12年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2002 『平成13年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2003 『平成14年度村内遺跡』
- 群馬県教育委員会1989 『群馬県の中世城跡』
- 山崎一 1978 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会
- 山崎一 1979 『群馬県古城址の研究』補遺Ⅰ上巻 群馬県文化事業振興会
- 群馬県 1938 『上毛城跡』
- 群馬県文化財情報システムWeb版

の集落が分布していたことが判明している。逆の西側一帯は、これまで大規模な調査が少なかったが、旧富士見村教育委員会の調査で同時代の住居が数々と見つかり、(時沢西高田遺跡(110)など)、また、上武道路関連の調査でも庄子遺跡(2)から西の上細井五十嵐遺跡(3)、天王遺跡(4)、東根屋谷遺跡(5)、上町遺跡(6)、時沢西根屋谷遺跡(7)など、多くの遺跡でも同時代の住居が調査され、本遺跡周辺には奈良・平安時代の集落が非常に濃密に分布することが確認された。

ところが、本遺跡ではこの時代には住居が急減し、一部8世紀代まで続く住居のみみられる程度となる。とすれば、この時期に集落の移動があったことになり、その意味が目目されよう。本遺跡で確実に奈良・平安時代の遺構として捉えられるのは粘土採掘坑1基と溜井1基があるのみである。

その他、同時代の遺構として注目されるものには、上細井五十嵐遺跡(3)で見ついているAs-B下水田、芳賀東原西地遺跡(18)など数カ所で確認されている穀作関連の遺構などがあげられる。

中近世

天仁元年(1108)の浅間山噴火以降、この地域に台頭したのが藤原秀郷流の武士団であり、本遺跡周辺で勢力をふるったのは、足利重俊を祖とする大胡氏である。彼等の名は『平治物語』『平家物語』『吾妻鏡』などに散見し、平安時代末から南北朝期までこの地に勢力を有していたようであるが、その後の詳細はよく分らない。

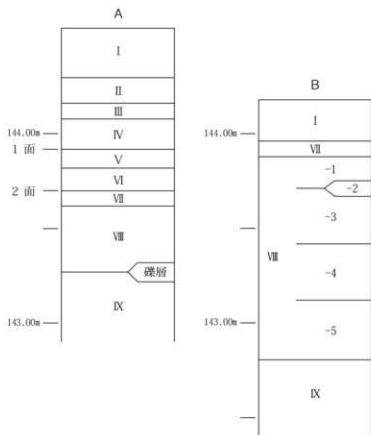
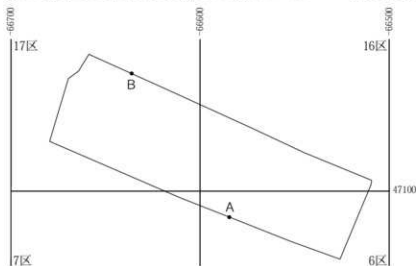
戦国時代に属する城跡としては、嶺城(135)があり、さらに第6図の範囲外であるが大胡城があり、それらに関わる支城・砦・遠堀(上泉城(33)、鳥取の砦(47)、時沢遠堀遺跡(59)、小坂子城(147)など)がこの地域に多くみられるほか、中世に属する館の場などがいくつかの遺跡で見つかり(庄子遺跡(2)など)、比較的濃密な遺跡分布を示している。

本遺跡では北西部に中世に属すると思われる掘立柱建物や多くのピット、柱穴、土坑、堀などが見つかり、この付近は削平が激しく、また遺物の出土も少ないので館内部の構造などが分からないのが残念であるが、上記

のような中世の状況の中で理解すべき館跡がこの地にもあった可能性が高い。

第3節 基本土層

基本土層は、調査区東部にある、南北に延びる浅い谷の部分のすぐ西側(A地点)と、西部の調査区北壁(B地点)とで記録した(場所は下図参照)。A地点でⅡ～Ⅵに



第7図 基本土層

分類した層が、B地点では削平されてなくなっていることが大きな違いである。また、それ以下の層も、旧石器時代の調査トレンチを観察すると、場所によってかなり異なっていた。特に礫を多く含む層が各所で確認できたが、それはⅧ層の中にはあるもの、場所により層位が異なっていた。Ⅷ-2層ではAs-YPが、Ⅷ-5層ではAs-Okが確認できたが、含まれるテフラについては自然科学分析を実施したので、これについて詳細は第4章第4節1を参照のこと。

なお、浅い谷の部分では2面調査を行ったので、A地点の土層にその層位を示した。B地点ではⅧ層上面が遺構確認面である。

基本土層

- I 表土
- II As-B混じり黒褐色土(2.5Y3/2)
- III As-B
上面に赤灰色火山灰(2.5YR4/1)が残るところがある。
- IV As-C混じり黒褐色土(2.5Y3/1)
- V 暗褐色土(10YR3/3)
- VI 褐色土(7.5YR4/4)
- VII 褐色土(10YR4/4)
ロームへの遷移層。
- VIII A地点では黄褐色ローム(10YR5/6)
灰黄(2.5Y6/2)～灰色(5Y6/1)シルトを含む。
B地点では層かく分離できる。
 - 1 にぶい黄褐色ローム(10YR5/3)
やや粒子が粗い。白色軽石を含む。
 - 2 黄色軽石 As-YP
 - 3 にぶい黄褐色ローム(10YR5/4)
色のやや薄いロームを斑状に含む。
 - 4 黄褐色砂質土(10YR5/6)
色の異なるローム粒を斑状に含む。粗砂粒を含み、固くしまっている。小礫を含むところもある。
 - 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3)
円礫。粗砂粒を含む。As-Okを含む。
この層の中に部分的に礫層があるが、その層位は場所によって異なる。
- IX 灰白色シルト(2.5Y7/1)
層厚が厚く、底面までは割れない。非常に硬く締まっている。谷(A地点)に近いほど灰白色粘土を層状に含む。粘土探検坑はこの粘土層の探検を目的としているらしい。B地点では、薄い鉄分の層が何層もみられる。

第3章 調査の成果

第1節 概要

本遺跡で調査した遺構は、竪穴住居68軒、平地式建物3棟、掘立柱建物7棟、竪穴状遺構2基、土坑87基、墓2基、井戸6基、溝11条、粘土採掘坑8基と1群、溜井1基であり、比較的多種多様な遺構が見られる。これらの遺構の属する年代は、古墳時代中～後期のものが多く、次に中世の属するものが多い。総計するとこの2時期に属すると思われるものが大部分を占め、それ以外は奈良・平安時代にまで下る可能性のある住居2軒と、粘土採掘坑1基、溜井1基、及び縄文時代の遺物が少量あるだけである。

本遺跡内の微地形をみると、東部に調査区を横断するように、ごく浅い谷地形が入っていることが注目される。この谷地形は緩やかに下がる程度のごく浅いもので、中央に小川などが流れていることもなく、人の往来などには大きな障害になったとは思えない程度のものであるが、遺跡の様相はこの谷を境として劇的に異なる。全体図(付図)をみれば明らかなように、西側に多くの遺構が集中するのに対して、東側には遺構が非常に少ない。ここでは古墳時代後期の竪穴住居3軒、粘土採掘坑1基、溝3条のほか、時期の特定が困難な土坑9基が見られるにすぎない(土坑のうち1号土坑は板碑と思われる石片が出土しているので、中世にまで下る可能性が高い)。このように遺構が散在的に分布する状況は、現道を挟んですぐ東側に隣接する小神明富士塚遺跡D区にも共通している。そこでもやはり古墳時代後期の竪穴住居2軒が調査されており、これらは一連の集落の一部であると考えることができる。

この浅い谷には浅間B軒石が純層で堆積していたが、その直下には水田などの遺構は確認できなかった。しかし、それ以下の土層の堆積は残りがよかつたため、ここでは平地式住居といった、普通なら削平されてしまうであろう遺構も見つかっている。さらに、調査の過程でその下層にも遺構があることが判明したので、この谷部分だけは2面調査を行った。2面からは粘土採掘坑と

思われる掘り込みが広い面積で見つかったほか(本書で2・5号粘土採掘坑と、粘土採掘坑群と命名した遺構である)、2条の溝と5基の土坑を調査することができた。いずれの遺構も古墳時代後期のものと思われる。

浅い谷の西側は東と対照的に遺構が数多く分布する。本遺跡の西側には土幅約40m、比高差3m程の谷が入っており、調査区のすぐ西はそれに落ち込む崖状の斜面となっている。そのため、この遺構が集中している範囲は長さ約150mの範囲となる。おそらく、この西側の谷に沿って狭い範囲で遺構の集中する範囲が南北に続き、これがこの集落の中核をなすものと思われる。

調査区は、調査開始前は畑地として利用されており、現状ではほぼ平坦に見えるが、かつては緩やかな傾斜をもっていたようである。土地を平坦にした際の削平は西ほど顕著であり、一部には浅い溝状に掘り窪められた所さえあったので、遺構の残りも西側ほど悪かった。逆に東側ほど残りがよく、竪穴住居も非常に深かった。もちろん人籬などの残りもよく、それに伴って遺物なども数多く出土したため、調査にはかなりの時間を要することとなった。

この西側部分には本遺跡の遺構の大部分が存在するが、そのうち竪穴住居は65軒もある。時期は4軒が5世紀代と思われるほかは6世紀から7世紀にかけてのものとされ、比較的狭い時間幅の中で形成された集落である。わずかに1軒が8世紀前半にまで残る可能性があるのと、遺物の出土しない1軒が、その形状からあるいは平安時代にまで下る可能性が残されているだけであり、大枠は古墳時代の中で終わる集落であると考えられる。住居同士の重複が少ないのはその存続期間の短さのためと思われ、調査区の全域にほとんど均等に分布するような状況を示している。住居の中には大型のものがやや多い印象があり、中には1辺10m近いもの(14号、15号住居)も2軒含まれている。この2軒の住居は方位をほぼ同じくして近接しており、注目されるが、その他にも近接する住居で方位をほぼ揃えている住居がいくつかある。たとえば7～9号住居の3軒は、時期は同一ではないが軸をほぼ揃えて南北に並ぶように分布している。このよう

な住居の存在は、本遺跡の集落の変遷を考える上で興味深い。また、竈を作り替えている住居や拡張の跡が認められる住居も複数あり、これも集落の変遷を考える上で貴重な資料となるものと思われる。

掘立柱建物は7棟見つかった。いずれも出土遺物に乏しいので時期の特定は難しいが、7号掘立柱建物が中世と考えられる以外は、7世紀代、すなわち古墳時代後期に属する可能性があると考えられる。そのうち2号掘立柱建物は4間×2間の大型の総柱建物で、建物内部に位置する3本の柱穴が長方形を呈し、それぞれに2本ずつの柱を立てていること、梁間の柱間隔をみると、東側が西側よりも明らかに広いこと、四隅の柱穴が柱筋に対して45°傾いていることなど、特異な構造をもって注目される。梁間の柱間隔が西側よりも東側が広い特徴は4号掘立柱建物にも共通してみられるので、これら2棟の建物は近い時期の所産である可能性も考えられ、集落を構成する要素として注目される建物である。

また、先述のように平地式建物と思われるものが東側の谷近くで見つかっており、類例の比較の少ない遺構であるだけに貴重である。その他、やはり谷に近い部分には粘土探掘坑と思われる大きな土坑が見ついているが、同様に粘土を採掘したと思われる痕跡が竅穴住居と重複している例がいくつか見られるので、本遺跡で「粘土探掘坑」と名付けた遺構の中には、竅穴住居を住居廃棄後に掘り広げたものが含まれているものと思われる。

この時期に属すると思われる土坑の中には、馬の歯が1頭分まとまって出土したものが1基ある(16号土坑)。頭部のみが埋葬された可能性があり、祭祀的な意味合いも考えられ、注目される。これについては馬歯の鑑定分析を実施し、その結果は第4章第4節3に掲載した。

以上が古墳時代後期の遺構であるが、その後この地域には遺構がほとんど見られなくなる。この時期に見られるのは奈良・平安時代の粘土探掘坑1基と溜井1基のみである。粘土探掘坑は古墳時代後期のものとは異なって、浅い谷から離れたところにあり、穴の大きさは狭く、深さはかなり深い。溜井は西側の谷への斜面に掘られており、谷に向かって水を流していたものと思われるが、残念ながら谷との接続部は土砂が崩落するのを防止するために掘り残したので、どのように水を流していたかは明らかにできなかった。

中世には、調査区の北西部を中心に遺構が見られるが、この部分は後世の削平・攪乱が深くまで及んでおり、残りが非常に悪かった。この時期に属すると思われる掘立柱建物は1棟しか把握できなかったが、周囲には数多くのピットが存在し、さらに削平によって消滅したピットも多かったものと思われるので、この部分に複数の建物があった可能性は非常に高い。その他、近くには土坑も数多く存在し、その大部分が中世に属する可能性がある。ただし、遺物の出土が非常に少なく、時期を特定できるものはほとんどない。

その他、墓2基、井戸6基、溝3条(7、8、10号溝)などもこの時期のものと思われる。墓からは残りが悪いものの人骨が出土しており、その鑑定分析は第4章第4節2に掲載した。北西部に見られる溝や土坑の中には、何らかの区画の隅部を形成していると思われる形状・配置のものがあり、先の掘立柱建物とあわせて、この部分に中世の館があった可能性が高いと思われるが、明らかな環濠状の溝などは見つかっておらず、これらの遺構の性格を明確に掴むことはできなかった。数少ない出土遺物からは、14～16世紀頃とやや幅広い年代までしか分からず、中世後期の遺跡がこの地にあったことまでしか分からなかった。

なお、以上の遺構の調査が終了したのち、トレンチ7ヶ所を設けて旧石器時代の調査を行ったが、遺物は出土しなかった。

縄文時代の遺物は、上述した各遺構の覆土や表土から出土しており、同時期の遺構は見られない。草創期の有茎尖頭器など、注目すべき遺物のほか、前期を中心とした土器片208点や石器54点が出土した。これらのうち主なものは第12節で取り上げた。

第2節 竪穴住居

竪穴住居は、前節で述べたように合計68軒調査した。調査区東部にある浅い谷を境として分布密度に大きな差があり、東側にはわずかに3軒があるのみで、西側にはその他の65軒が集中している。ただし、住居の集中する西側でも住居同士の重複は少なく、全域に万遍なく分布しているという状態で、やや特徴的な配置状態である。住居の時期は5世紀から7世紀にほぼ限られ、その他、8世紀代にまで下る可能性のあるものが1軒、遺物が出土せず、住居の形態から10世紀代に入る可能性が指摘できるものが1軒あるが、後者についてはその時期の遺物は表土出土のものを含めてほとんど出土していないので、7世紀代に考えるのが妥当であると思われる。とすると、5世紀代の住居は4軒と少ないので、大部分の住居は6・7世紀、つまり古墳時代後期に収まることになり、非常に短い存続期間の集落と言えよう。

以下、各住居について解説を加える。

なお、各住居から出土した土器については、その産地を推定するために胎土を細かく分類し、大部分は記号で示した。この分類の基準・内容については、遺物観察表冒頭の「凡例」に詳細を記したので、338頁を参照していただきたい。

1号住居(第8～10図、第17表、P.L. 8・54)

(1)概要

当該住居は事務所用地選定段階の調査で発見された住居である。

住居は、河川に依り形成された台地の中央寄りに占地している。当該調査区の内部では、最東端に位置する住居で、調査区内を東西に区別する浅い谷状地形の東側、16区D・E-1・2グリッドに位置している。

形状は正方形を呈し、規模は軸長5.3m、幅5.37mを測る。主軸方位はN-110°-Eを示す。残存深度は47cm程である。重複関係は無く、単独住居である。

屋内施設では、竈が東壁に、南東隅部から1.48mの位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の直下に備え、横長方形を呈する。規模は縦0.52m、幅0.68m、深さ0.44mを測る。主柱穴は3本(P2～P4)が発見され

ているが、深度はいずれも浅い。壁溝は南・西壁下で発見されている。

竈は、全長1.48m(屋内長0.72m屋外長0.76m)、袖基部幅0.87m、焚口部幅0.34m、燃焼部幅0.4m、煙道部幅0.22mを測る。左右両袖は、先端側には礫を芯材としている。

住居の掘方は、北西側で土坑状の掘り込みが4か所(P13～P16)で出土し、北東隅部側では、床面下-10cm程に底面を備え、南側掘方底面より5cm程深く掘り込まれている。前者の土坑状の掘方は、P15は床面から-50cmに底面を備え最も深く、次いでP16(-42cm)、P13(-21cm)、P14(-12cm)である。覆土は湧水により観察が困難であったが、IV・V層土が夾雑する状態が観察された。また、南壁・西壁では、P7・P9・P10の壁面にオーバーハングする土坑状の掘り込みが発見されている。当該住居との切り合いは確認出来なかった。

出土遺物は、全体的に少ない。周辺部での遺構の発見が無いことが要因と考えられる。

図化掲載した遺物の多くは、竈傍らの床面直上から出土している。また、破片類は覆土内からの資料である。図示した8点の中で1・3～6・8の6点は竈周辺の床面直上ないし床面直上層から出土している。7は、主柱穴の北側の部分に当たる位置で出土しているが、この部位での柱穴跡は未発見である。当該土器は、土坑状の掘方内に潜り込み横位で置かれた状態で出土している。この状態から、7は据え置かれていたことが推定される。

未掲載遺物では、土師器甕類17点、土師器杯8点、短頸壺1点がある。出土層位は18層が多く、13層より上位層は少量であった。

(2)所見

調査段階では、土層断面に表されているが、ノロ状の緻密な粒子の土壌の堆積層(14層)が出土し、シルト質の土層、3・5・11層が出土している。このノロ状の堆積土からは、当該住居が埋没段階で被水により冠水したことが窺われる。実際、調査段階でも相当量の湧水により調査は難航している。当該台地上でのこの状況は、広域な台地内部に雨水等の浸透水の「水の道」が存在することを示唆していることと、下位土層が不透水層的な状態にあることを示唆している。このようなノロ状の覆土堆積が認められたのは当該住居だけである。

第3章 調査の成果

他方、当該住居の西方30m程から50m程迄の間は、浅い谷状の地形が認められ、As-B軽石の被覆堆積が認められている。また、更に西側65m程の範囲には、地山層が灰色のシルト質であり、ローム土が還元された状態で堆積している状況が確認されている。この状況は、当該住居の覆土の状況が示唆的であり、雨水等の表流水が地下の深い部分への浸透が出来ず、表土直下の層位を不透水層として台地上の雨水等を集めていたことが類推できる。だが、台地内部には幾条かの小河川の存在がある。いずれも流速は早い。恐らく、表流水が河川以外に土中に集まり、飽和量を超えた段階で何らかの現象が生じていることが推測される。その結果が調査区中央部の浅い谷の存在であろうと考えられる。そして、台地の中央側に位置する当該住居は、この地表下での自然水位の影響により、被水・冠水を受け、覆土内のノロ土の堆積があったことが推測できる。

当該住居は、四隅部が直交状態の整った正方形に構築されている。この住居で注視されるのは、西側隅部の壁面の状態である。この部分には、部分的に屋外側に突出する土坑状の掘り込みが認められている。この土坑状の掘り込みの底辺は、概ね床面の高さに相当し、壁面にオーバーハングをしている。この部分的な状況は、調査区中央部で発見されている粘土採掘坑の壁面際状況に類似点が認められる。すなわち、当該住居の構築と粘土採掘坑が重複したか、住居の掘削方法が粘土採掘坑の掘削方法と同一であったことが推測される。そして、この壁面から外部に突出する土坑状の掘り込みは、床面との比高差がほとんど無いことから、住居構築に伴う段階の所産であることも推測される。

竈は東壁中央より若干南東隅部に寄っている。しかし、竈の設置状態を詳細に見ると、住居の軸線上に左袖を配置する状態である。この軸線上に左袖を配置することに原因して、竈の設置位置が南東隅部にやや寄った状態に観察される。

また、煙道部左壁と左袖内壁は直線配置を採っている。そして、竈右側の構造は、各部位の必要幅員を採ることにより露呈状態の形状が決定されている。すなわち、右袖は、左袖から必要な幅を採り左袖に対して平行に配置し、煙道部は、やはり必要な幅を採っている。これにより、竈全体が歪んだ状態に認められる。これらの状態は、

左袖を基準に竈を構築していることが推断される。

竈の構造は、袖を屋内に長く突出させ、煙道部は、壁の上位部分で屋外に長く突出させている。だが、掘方では、煙道部の掘り込みは深いことから、改築により浅く埋設し使用していたことが推定できる。構築当初は床面から若干立ち上がった部分に構築している。

貯蔵穴は、均整のとれた横長方形を呈している。調査区内で発見された住居の中でも古い様相である。遺物の出土は無かった。

主柱は、南北壁の際から0.9m程、東西壁から1.40m程の位置関係で、柱間2.40m程の正方形配置に設定している。この位置関係は、住居の平面形が軸上にやや長い矩形形状の平面形状に原因していると判断される。また、P4とした位置では、通常主柱穴の発見される位置であるが、当該住居では、同位置から扁平な礎が出土している。恐らく、柱を柱穴で据えるのではなく、根石として床面より上位に柱を据えたと推断される。この措置は、下位の掘方(P16)との関係で、柱穴では柱材の支持力が得られないと判断されてのことと思われる。

住居の掘方は、北側に土坑状の掘り込みが認められ、北半側が南側よりやや深めに掘り込まれている。また、前述した、西壁と南壁で発見されたオーバーハングの土坑(埋掘り)は、荒掘り段階での掘削痕の可能性が推測される。掘削労力を軽減するため、「埋掘り」の上位部分を固まりの状態に単純に崩し土量を軽減させる意図での所産と考えられる。

出土遺物の胎土では、1がC3類、2～6がB1類、7・8はB2類である。未掲載遺物は、いずれもB1類である。

当該住居の時期は、住居の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半には廃棄された住居であると推定出来る。

2号住居 (第10・11図、第17表、P.L. 8・9、54)

(1)概要

当該住居は、東台地に位置する住居である。1号住居の南西17mに当たり、6区H・1-18・19グリッドに位置している。重複する遺構は、1号粘土採掘坑と接する状態で重複している。調査は、当該住居が1号粘土採掘坑より新しいと判断して調査実施した。しかし、切り合い状態が接する程度の状態であることから、相互の出土

遺物からの検証を必要とする。

形状は正方形を呈し、規模は軸長4.4m、幅4.34mを測る。主軸方位はN-89°-Eを示す。残存深度は66cm程である。

屋内施設では、竈が東壁に、南東隅部から0.76mに備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の直下に備え、主柱穴は4本(P2~P5)、壁にやや寄った配置で見えられている。壁溝は未発見である。

竈は、右袖側が攪乱によりほとんどが失われているが、左袖の残存状況から、短い袖と燃焼空間が竈口側に寄った構造であることが推定出来る。規模は、全長1.34m(屋内長0.89m・屋外長0.45m)、袖基部幅1m + a m、焚口部幅0.49m + a m、燃焼部幅0.52m、煙道部幅0.36mを測る。

住居の掘方は西壁側から南西隅部にかけてやや深く掘り込まれ、P3周辺には土坑状に掘り込まれたP7~P10が認められる。P10は円形状を呈するが、深さが16cmと浅い。これらの土坑状の掘り込みの性格付けに供する状況は認められなかった。

覆土は、断面図上で顕著である。特に、2層土は塊状ローム、1・3層もローム土の含有が顕著である。この土層断面の状況は、人為的に埋設された状況を示している。

出土遺物は少なく、ほとんどが床面から遊離している。これは、覆土の状態の反映でもありと考えられる。図化掲載遺物で1~3・7は2層土内の出土である。未掲載の遺物を含めたほとんどがこの2層土からの出土である。床面に近い出土遺物は1のみで、他は床面から10cm以上遊離している。

未掲載遺物では、土師器甕類28点、土師器杯6点である。出土層位的は2・3層が主体である。

(2) 所見

住居は比較的整った正方形を呈している。その中でも、住居の北側と南側では、北側が精緻な状態に構築されている。この状況は、掘り込みでの底面の状況でも窺われ、北壁下の掘り込みがほぼ床面と同位であることから判断される。このことから、住居の構築段階で北側に意識が働き、意図的に構築したことが推定される。

主柱の配置はP2が貯蔵穴に寄った配置で、P3~P5は、壁面に寄った配置になっている。P3は、P4・

P5の配置に対応する配置である。しかし、P2の配置位置がP3~P5に対して不規則な配置状態である。この主柱の配置状態が直接上層構造の変化としては捉えきれない。ただ、竈位置がやや南東隅部に寄っていることと、貯蔵穴の配置部位により、P3~P5に対応する位置にP2を設置すれば、P2の位置は、竈焚口部の前面になってしまう。このことから、P2は意図的に貯蔵穴に寄った位置に据えられたことが推測される。

竈は、東壁中央より南東隅部に寄った位置に据えている。構造は、短い袖と狭い燃焼空間が特徴である。燃焼部はやや屋外側に設けている。袖の右側が攪乱によりほとんど失われているので詳細には推測しえないが、燃焼空間の奥側から煙道が直接立ち上がる構造である。また、左袖から燃焼部の空間面積がやや狭く、焚口から直結煙道に達する様な造りであり、右袖内側端の直ぐ内側から、被熱による酸化反応変色が顕著である。

出土土器の胎土による分類では、図化掲載の遺物で土師器杯1はC1類、2・3はC2類で、同甕類はA類生地土を使用している。須恵器高環(長脚2段透か)4はB1類である。図化掲載以外では、土師器杯6点、甕28点で、坏はD2類1点が含まれている。他は、B1類を生地土としている。未掲載遺物では、土師器甕類28点(いずれもA類)、土師器杯6点(A類4点・B3類1点・D1類1点)である。

当該住居の時期は、住居の形状と出土遺物の様相から、7世紀後半頃には廃棄された住居であると推定出来る。

3号住居(第11~14図、第17・18表、P.L. 9・54・55)

(1) 概要

当該住居は前述した浅い谷部の西側、西側台地の調査区内南端部分で見えられ、南隅部周辺は調査区外部に延びている。位置は、6区Q~S-17・18グリッドに当たる。

重複する遺構は、5号溝が住居の東隅部で重複するが、本跡が切り新しい。また、粘土採掘坑と考えられる遺構(8号粘土採掘坑と命名)と北側部分で重複している。これも、本跡が切っている。

形状は正方形を基調とするも不整形に分類されよう。規模は軸長5.55m、幅5.75mを測る。主軸方位はN-148°-Eを示す。残存深度は80cm程である。

第3章 調査の成果

貯蔵穴(P1)は、内部が複雑な状態で図化されている。恐らく、下位の5号溝との重複により確実な状態で図化されていないと推測する。

主柱穴は判然としなが、配置位置から主柱穴と考えられるのは1本(P6)のみが想定される。やはり下位の8号粘土採掘坑との重複に起因している。

壁溝は、掘方面で東壁の北半分、西隅部周辺で発見されているが、生活面では確認できず、掘方面での露呈になっている。

竈は、短い袖と馬蹄形状の燃焼部と、壁の上位で屋外に突出する煙道を備えている。燃焼部内は左右両壁と奥壁面部分が顕著に被熱酸化反応変色している。竈の掘方は、屋外側の煙道部に当たる周囲が広く掘り込まれている。規模は、全長1.06m(屋内長0.61m屋外長0.45m)、袖基部幅1.22m、焚口部幅0.38m、燃焼部幅0.55m、煙道部幅0.20mを測る。

住居の掘方は、重複する5号溝・粘土採掘坑により詳細は不明だが、周囲より中央に向かい深く掘削している傾向が窺える。竈の前面部分では、最終築段階の竈を構築直前段階に、竈の前面を深く掘削している。竈改築のための素材採取のためなのか、理由となる真意は不明である。また、掘方中央や北寄りの部分で、同部分で被熱により生じた焼土、カ跡状の痕跡が発見されている。しかし、この焼土以外に遺物・炭化物等の出土無く詳細は不明である。

出土遺物は、破片類が比較的多い。遺存状態が良好な個体は、竈燃焼部底面直上で出土した7・9・16の3点である。他は床面直上層・覆土・掘方内での出土で、破片個体である。また、土師器24は、床面直上層出土と掘方出土のものが接合している。未掲載遺物では、土師器環類136点、土師器高環7点、土師器甕類387点がある。多くの遺物は、2・5・6層に集中している。

(2)所見

形状は、重複遺構との同時露呈もあり明確ではない。正方形指向であろうが、北隅部の状況と、土層断面から観察した北壁の位置などから、重複遺構部分は、住居構築段階から8号粘土採掘坑の覆土部分が崩落した状態であったことも考慮される。掘方方面では、東隅部周辺、5号溝との重複部分が正方形を歪める原因になっている。いずれにしても、重複遺構の存在が住居構築段階で

悪い影響を与えたことが推測される。

竈の構造は、右袖と煙道が直線配置を採り、左袖は左側に偏った状態でずれている。この状況は、左袖の設置に際し、右側に合わせて必要な幅を掘り掘入している。すなわち、右側を基準に構築していることが窺われる(1号住居の逆位)。

主柱穴は明確ではない。幸うしてP6が位置・深度から確実視出来た。また、竈右袖前縁P2も周辺状況から確実視される。だが、他の2本は掘方との重複で判然とはしなかった。

出土遺物の胎土では、土師器環類は総じてC1類が多い。C1類には、4・7・10・11・12・15がある。3はB2類。B1類には2・6・13・14、D1類には1・9がある。同甕類では21・23・26がA類、22・24・25はB1類である。高環27は赤色塗彩を施す。胎土はB1類を灰黄色に明るく焼き上げ、塗彩効果を際出させている。16の土師器鉢は、A類である。須恵器では3点が図化されている。18甕はB1類、19高環・20甕は太田産と考えられる。

未掲載遺物では、土師器甕類387点(B1類385点・D2類2点)。同環136点(B1類41点・C1類89点)がある。このほかではS字状口縁台付甕が1点出土している。当該住居は7世紀後半頃には廃棄された住居であると考えられる。

4号住居(第14・15図、第18表、P.L. 9・10・55)

(1)概要

当該住居は西台地中央部、調査区の北端で発見されている。重複関係のない単独住居である。位置は17区A・B-9・10グリッドに当たる。住居は切り合い関係のない単独住居である。周辺の遺構には、南側5m程に5号住居、西側10m程に24号住居が位置している。

住居は、小規模である。形状は歪んだ状態である。隅丸正方形基調と考えられるが、形状は矩形ないし梯形状に分類されよう。

規模は、軸長4.14m、幅4.16mを測る。主軸方位はN-91°Eを示す。残存深度は64cm程である。

貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は、正方形基調とも不整形円形とも思える形状を呈する。規模は径0.5m程で深度は0.38mである。主柱穴お

よび壁溝は未発見である。

竈は、東壁に備えている。遺存が良好で燃焼空間の奥側、煙道部の手前の部分の天井が残存しており、器設部周辺の構造が観察される。煙道部は燃焼部の奥側から徐々に底面を上げ、奥壁から急激に立ち上がり屋外に突出している。

構造の主要部分は灰白色シルトで構築されている。形状は屋内側に突出する左右の袖の短めで、右袖端部には甔(6)と礫を据え、左袖端部には礫だけを据えている。器設部は、燃焼空間の奥壁位置とほぼ一致している。器設部の位置は、左袖端部から55cmに奥壁面に当たり、幅は残存部分で40cmを測る。しかし、支脚等の支持施設は未発見である。規模は、全長1.02m(屋内長0.92m屋外長0.24m)、袖基部幅0.94m、焚口部幅0.34m、燃焼部幅0.26mを測る。掘方は、袖の基部が地山ローム土を削り残して芯材にしている。

住居の掘方は、屋内の南側に集中し、北側では認められなかった。掘方は全体に浅く、土坑状のP2～P7と、浅い不整形の掘り込みが認められる。また、南壁及び南東隅部の壁面側は、床面から10cm程高くテラス状に掘り残されている。そして、南西隅部には、1号住居と同様のオーバーハングする掘り込みが認められる。

出土遺物は未掲載遺物を含めても少ない。竈右袖出土の甔(6)以外はすべて小破片である。いずれも住居覆土・竈覆土内からの出土である。5層土での出土が多い。未掲載遺物では、土師器環類50点(黒色4点・外黒2点を含む)、土師器甕類137点がある。また、礫(地山中に含まれる安山岩の円礫)の出土が目立っている。土器類と同様に5層土の堆積に従う状態で出土している。

(2)所見

掘方で認められた南壁の状況は、1号住居同様の二重構造的な状態である。すなわち、狸掘りに掘られた土坑の痕跡として捉えられる。

竈の形状は、右袖は、燃焼空間から煙道部迄直線的な配置状態を採っていること、右袖基部に地山を削り残していることから、構築は、右袖を基準に構築したことが考えられる。また、左袖の外壁は、住居の中軸に沿う位置に構築しており、構築段階での計画性が窺える。

出土遺物は、5層土下面で礫の出土が多いのが特徴的であり、同様な状況は他の住居でも認められた。また、

土器類の出土は少ない。

出土遺物の胎土では、土師器環1・2はC1類、3・4はB1類。土師器甕では、7～9がB1類、甔6はC3類である。6土師器甔は1土師器環と同一の生地土を用いる製品である。未掲載遺物では、土師器甕類137点(A類9点・B1類128点)、土師器環類50点(B1類点43点・C1類7点)である。

当該住居の時期は、竈形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

5号住居(第16図、第18表、P.L. 10)

(1)概要

当該住居は西側台地で、前述の4号住居の南側4m、南側2.5mには6号住居が位置する。

形状は、南西隅が大きく歪むが、四角形を基調にする。南西隅部の歪みの原因は調査では得られず不明である。

規模は、軸長2.6m、幅2.72mを測る。主軸方位はN-81°-Eを示す。残存深度は80cm程である。発見されている住居の中では最も小規模な住居である。重複関係は無い単独住居である。

構造は、主柱穴の無い造りである。屋外での確認を実施したがやはり柱穴は確認出来なかった。壁溝も未発見である。竈は東壁の中央に備えられている。

貯蔵穴(P1)は、隅部の壁下に設けられている。形状は楕円形を呈する。規模は縦0.2m横0.24m深さ0.34m程である。

竈は、東壁の中央部、左袖を中軸上に据えている。全長0.9m(屋内長0.55m屋外長0.35m)、袖基部幅1.0m、焚口部幅0.5m、燃焼部幅0.5m、煙道部幅0.18mを測る。住居規模に比例して小振りの竈である。左袖では扁平な川原石が袖の上部から出土しているが、袖の補強等に伴うものではない。掘方は、右袖側が地山ローム土を削り残して芯材としている。図上底面上で表現されている礫は地山礫である。

住居の掘方は、床面下5～10cm程で底面が出土している。掘方底面には、多くの地山礫が認められた。P2・P3の浅い土坑状の掘り込みが認められている。

出土遺物は非常に少ないが礫が多く出土している。この礫は、5層土の上面から2層にかけて包含されている。

第3章 調査の成果

土器類は34点出土している。図化掲載出来得た個体はいずれも細片化した状態である。土師器環1は緻密な胎土の製品である。3は赤色塗彩された高環の環部と脚部との接合のヘソ部分である。

(2) 所見

竈は、中軸線上に左袖を設けている。住居が小規模であるが、竈の設置位置決定には左袖を基準にしていることが推測される。

掘方で発見された土坑状のP2・P3とした部分は、周囲に比べ礫が少なかった部分でもあり、土坑状に認められた部分は、礫が除去された結果生じた窪みの状態と考えられる。このことは、土坑として意図的に掘り込まれた状態とは異なっている。意図的な施設の一部とは無縁であると考えられる。また、壁面の地山ローム土を観察すると、礫が出土する層位が、掘方底面とはほぼ同位であることから、この礫混じりローム土層を住居の掘削深度の決定目安としたことが考えられる。

胎土では、掲載遺物土師器環1はC1類、2はB1類、同高環3はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類2点(内1点内黒)、C2類6点。土師器甕B1類18点、B2類4点。土師器高環D2類1点が出土している。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄された住居であると推定出来る。

6号住居(第16～19図、第18・19表、P.L. 10・11・55・56)

(1) 概要

当該住居は西側台地の中央に占地する。位置は、17区A・B-6・7グリッド内に当たる。周辺遺構には、北側2.5m程に5号住居、南側に11号住居が接近している。重複関係では、東壁際で1号井戸に切られている。この1号井戸の構築時期は14世紀前半頃である。他の遺構との重複は確認されていない。

形状は正方形基調であるが、梯形気味で精緻な感はない。規模は、軸長3.7m、幅3.8～4.0mを測る。主軸方位はN-79°-Eを示す。残存深度は58cm程である。

構造は、東壁に竈を備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は縦長方形を呈する。規模は長0.6m幅39m程で、深さは-29cmである。柱穴跡は床面では確認されなかったが、掘方面で浅いP

2～P5の4本が確認されている。しかし、P3・P4はほぼ同一部分での発見で、P2は竈前面の位置での発見である。屋外の柱穴跡を考慮して平面精査を実施したが未確認に終わっている。壁溝も未発見である。

竈は、東壁でも南東隅部にやや偏在した位置に備えている。左袖には土師器甕19を逆位に据えている。竈の掘方は、内外で菱形に広く掘削しているが、深さは浅い。規模は、全長1.33m(屋内長0.69m、屋外長0.64m)、袖基部幅0.95m、焚口部幅0.58m、燃焼部幅0.42m、煙道部幅0.16mを測る。

住居の掘方は、北西隅部周辺以外で顕著に認められている。特に、東壁の竈の前縁側から扇状に広がる状態である。土坑状の掘り込みは認められなかった。

出土遺物はやや少ないが礫類の出土は多い。遺物は、3・4層下層(床面直上層)と2層(覆土内)の二者集中する傾向が看取される。前者には土器類が主体で、後者は礫が主体である。また、掲載遺物の中で、床面直上で出土したものは、土師器甕20の一部だけである。他は3～5層土の下層に当たる床面直上層からの出土で、土師器環類10点、同高環2点、同甕6点。須恵器壺1点の計19点である。住居北西側に集中して出土した傾向が認められている。

(2) 所見

主柱穴はP2～P5を推定したが、北東隅部側部分の柱穴跡が抜けている。P6は、東壁に偏在する位置であり、深度も他の柱穴跡とは異なっている。また、本住居を切り構築している1号井戸もあり、北東部分の柱穴は、この1号井戸と重複し消滅した可能性も考えられる。P6を主柱穴の一つとするには疑問がある。

住居の掘方は、竈前縁部分から周りへ広がる状態は、掘削段階において、竈の設置位置を決定し、竈造作の範囲を避ける状態として捉えられる。

竈の形状は逆V字状で、袖は瘤状を呈し、屋外に強く突出する形態の竈である。通有、この平面形状の竈は9世紀後半以降の形態である。だが、断面形状では燃焼部から煙道立ち上がり部分に掛けて掘り込みが深く、この煙道部の状態が9世紀後半以降の竈と異なる点である。また、掘方の右壁面には2段の細長いテラスを造りだしている。このテラスが高架粘土材(灰白色シルト)の基部に相当させられると考えられる。

出土遺物では、4・7が単なる焼成の結果なのか、意図を持っての焼成なのか中途半端に焼された製品である。4は全体的に磨滅しているが、外面側に中途半端な焼りの状態が認められる。7は極端な磨滅は認められないが、中途半端に両面が焼れている。この「焼れ」を偶発的な焼成の結果と判断するか、焼成での作為と判断するか迷いが生じる。しかし、同質生地上を使用するB類胎土の土師器には、明らかに吸炭を避けて焼成している製品も有ると、内外面を意図的に焼し処理を施した痕跡が認められる。このことから、7も作為による焼し、内外面黒色処理を指向した焼成結果と考えられる。他の土師器環類では、8が同様の焼り状態である。他の環類は、全面「橙色」発色の焼成である。胎土では、土師器環5・6はC1類、同7・8・10はB1類、同9はC3類、同鉢12はC3類、高杯脚部13はB1類。土師器甕では15・17がB2類、同16・19・20B1類、同18はA類の胎土である。

未掲載遺物では、土師器甕類115点(B1類108点・B2類7点)、土師器環類59点(B1類11点・B1類黒色処理10点・C2類37点・C1類放射射文1点)、土師器鉢1点(B1類1点)がある。

当該住居の時期は、出土遺物の様相では6世紀末頃には廃棄されたことが推測出来るが、竈の様相は、屋外に大きく突出する形態であることから、7世紀前半頃の様相が窺え、廃棄はこの頃にあったことが推定される。

7号住居(第19・20図、第19表、P.L. 11・56)

(1)概要

当該住居は西側台地に占地する。位置は17区C・D-5・6グリッド内に当たる。周辺の遺構には、6号住居が西側10m程に位置し、南側で8号住居に接する様に位置している。当住居は、8号住居が至近ではあるが重複の無い単独住居である。だが、上屋構造は、十分に重複する位置関係である。

形状は隅丸正方形である。規模は、軸長4.55m、幅4.7mを測る。主軸方位はN-71°-Eを示す。残存深度は67cm程である。

構造は、竈を東壁中央部に据えている。貯蔵穴(P1)は、東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形ながらも不整形とも言い得る。規模は縦0.84m、横0.78m、

深さ0.59m程である。主柱穴は、判然としないう。また、屋外でも柱穴跡は確認出来なかった。壁溝は生活面では不明瞭であったが、掘方面で壁下に壁溝相当の掘り込みが発見されている。

竈は、住居の中軸上に据えている。形状は、右袖より左袖が長いやや不均整な形状である。このため焚口の開口方向は右に反れる感じを受ける。全長1.42m(屋内長1.13m屋外長0.31m)、袖基部幅0.96m、焚口部幅0.51m、燃焼部幅0.38m、煙道部幅0.20mを測る。

住居の掘方は、壁直下で壁溝状の掘り込みが認められた程度で、ほとんどの部分が掘方面を床面としている。

出土遺物は、点数的には少なかったが、図化掲載した資料は10点ある。これらの中で3・5・6は南壁直下の床面直上で出土している。また、同甕類8・10は西壁の南に寄った部分で出土しているが、出土層位は床面直上層である。このほかの遺物も床面直上層出土が多いが、6を除くすべてが破片資料である。未掲載遺物では、土師器甕類11点のみである。

(2)所見

生活面で発見されているP2は配置位置から主柱穴とも思われるが、他の3本が不明である。また、掘方面で発見されているP4は、P2と対角上の一対にも見られるが、構造上に不安を感じる。直接柱材を床面に設置した可能性も推測できるが、直接設置した痕跡は認められなかった。また、礎板等の受け材は未発見である。

竈は、東壁の中心部分に竈の軸を備えている。今回の調査で、住居の中軸上に、竈の中心を据えた住居は当該住居だけである。残存状態は良好で、燃焼部奥から煙道部にかけて天井部が残存していた。袖部は左右で長さが異なるが、袖の取り付く壁の位置に原因している可能性がある。これは、東壁は竈を境に南北部分で段違い状態に構築された点による。焚口部では、底面がやや強い酸化被熱反応の痕跡を残している。この状況から、残存天井部の前縁が器設部に相当している可能性が強い。煙道は、左袖の直線配置を採り設けている。

住居堆積土の分層は、3層に留まっている。特に2層土は、塊状ローム土を更状に混ぜる特徴的な土層であり、人為層として捉えられる。

図化掲載の中で、土師器環1・4・5の胎土はB2類、同2はC3類、同6はB1類である。土師器甕類8はB

4類、9・10はB1類である。未掲載遺物では、土器器表類B1類11点である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から6世紀後半頃には廃棄された住居であると推定出来る。

8号住居(第21～23図、第19・20表、P.L. 11・12・56・57)

(1)概要

当該住居は、調査区中央部、西側台地中央部に占地し、位置は17区C・D-4・5グリッド内に当たる。周辺の遺構には、北側に7号住居、南側に9号住居、西側に33号住居が接する様な状態で位置している。重複する遺構は無く単独の住居である。

形状は西壁面を基準とする正方形基調である。規模は、軸長4.62m、幅4.57mを測る。主軸方位はN-66°-Eを指す。残存深度は67cm程である。

構造は、東壁の中央部よりやや南東隅部に寄った位置に竈を据えているが、左袖は住居の軸上に当たっている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は円形状を呈する。規模は径0.7m深さ0.38m程である。この貯蔵穴は、竈右袖端部から南壁に向かい「L」字状に突帯を施し、南東隅部を含め、四角い範囲を形成している。柱穴跡は住居内外で未発見である。だが、住居の中央部で柱穴跡状の掘り込み(P2-31cm)が発見されている。土層断面では床面から掘り込まれている状況が看取される。壁溝は、南東隅部・北西隅部以外で発見されている。幅は細く10cm程が多いが、西壁下でやや太く20cm程の幅員になっている。

竈は、天井部が遺存していなかったが全体には残存状況は良好である。構造は、屋内側に長い左右均整の取れた形状である。規模は、全長1.50m(屋内長0.96m屋外長0.54m)、袖基部幅0.93m、焚口部幅0.64m、燃焼部幅0.48m、煙道部幅0.10mを測る。焚口部は灰などの掻き出しにより浅く窪んでいる。袖は、左右両袖の先端に礫を据えている。燃焼部底面には、支脚材と考えられる礫が出土している。また、左壁は袋状に遺存しているが、右壁は直線的な立ち上がりで残存している。煙道部は、燃焼部の奥壁が50cm程立ち上がった中段から短く屋外に突出している。この廃棄段階の構造以前の状態(改築以前の状態)は、掘方で燃焼部奥壁から煙道部の立ち上がり

りの部分が掘方内に遺存していた。改築以前は燃焼部から直接地上面に立ち上がる構造とも思われる。

住居の掘方は、竈の前面にやや高く、壁よりにやや深くなる傾向が図化されている。特に東壁の北側は溝状に一段深く掘り込まれている。また、西壁の中央直下には、周囲より8cm程高く掘り残された部分が認められている。

出土遺物は少ないが礫の出土が多い。出土遺物の一部を除く大半が、床面から20～30cm前後遊離して出土している。図化掲載遺物では、土器器有孔鉢10、土器器鉢9は、竈右袖寄りの床面直上で出土している。他の掲載遺物は床面から20～30cm遊離して出土している。遺物以外では、礫の出土が多く、5層土上層から下層にかけて集中する傾向が認められる。土器類もこの礫と共に出土している。

(2)所見

住居内中央部で発見されたP2は、通常の4本主柱穴が発見されていない住居の構造上、4本主柱に代わる柱穴跡とも推測させる。ただし、中央部で1本の主柱で正方形構造の上層を支えるのは無理を感じる。P2は、このP2だけでの問題ではなく、まず、主柱未発見住居の構造が明らかにすることが肝要であろう。

竈は、住居の中軸線上に左袖を据えている。竈の支脚と考えられる礫は、左袖側に偏って据えており、反対側は支脚一つ分の空き空間が生じている。支脚を必要とする器種は、甕でも器厚の低い小型甕と考えられ、支脚の無い右側は長甕を据える部分であったと考えられる。この状態は、左右に器設する併架方式の竈であったことと類推される。

掲載遺物の胎土は、土器器環1～3・6はC1類、4・5はC3類。土器器高環7はC3類、同8がB1類。土器器鉢9はB2類、土器器有孔鉢10はB1類。土器器表類では、13・15がA類、11・12・14・16・17はB1類である。

図化掲載以外の遺物は、土器器環92点ある。内訳は、D2類が52点、B1類粘土44点(内黒4点・黒色2点)である。土器器甕165点ある。内訳はD2類が9点(同一個体の可能性がある)、B1類粘土156点。土器器高環10点(坏部内黒1点)では、B1類9点、D2類1点がある。須恵器では、坏蓋1点、坏身4点、臍口縁部片1点、

裏側部片1点などがある。胎土はいずれもB1類である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄された住居であると推定出来る。

9号住居(第23～25図、第20表、P.L. 12・58)

(1)概要

当該住居は、西側台地中央部に占地する。位置は17区C・D-3・4グリッド内に当たる。周辺遺構は、北側に8号住居が接近し、北西側2mに33号住居、南東3.5mに10号住居、南側2mに19号住居が位置している。重複関係のない単独住居である。

形状は正方形を基調とするが、北壁辺長が南壁辺長より若干短く梯形状である。規模は、軸長4.0m、幅3.9mを測る。主軸方位はN-74°-Eを指す。残存深度は70cm程である。

構造は、東壁の南側に竈を備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は円形形状を呈する。規模は、径0.64m、深さ0.51m程である。主柱穴は床面・掘方でも柱穴跡は発見出来なかった。屋外でも未発見である。壁溝も発見されなかった。

竈は遺存状態が良く、燃焼部(器設部周辺)～煙道部の天井が残存していた。規模は、全長1.13m(屋内長0.64m、屋外長0.49m)、袖基部幅0.96m、焚口部幅0.4m、燃焼部幅42cm、煙道部幅0.18mを測る。

竈の構造は、屋外に0.49m、屋内に0.64mの規模で屋内側に長く造られている。特徴として、燃焼空間が住居の壁より若干屋外に突出状態である。左袖の先端に小規模な礎を据えている。焚口部分には、天井部の補強に用いられたと判断される土師器甕2個体(11・12)が出土している。また、底面には、被熱酸化変色が認められている。燃焼部では袖部分に顕著な酸化被熱変色が認められている。燃焼部の奥壁部分は緩やかに立ち上がり、煙道部の所辺りから急激に立ち上がっている。煙道部は緩やかに立ち上がり屋外に延びている。

住居の掘方は、土坑状の掘り込みが目立つがいずれも浅い。掘方底面は中央部が生活面とほとんど変り無いが、壁側に向かって徐々に深さを増している。

出土遺物は小規模な住居ではあるが多い。図化掲載遺物では、竈内から上述の甕と共に土師器坏3が出土している。6は床面から30cm程遺離する覆土内下層、5・7

は床面直上層の出土である。他の遺物は、覆土内出土である。未掲載遺物では、土師器坏類169点、土師器甕類333点がある。ほとんどが覆土内からの出土である。

(2)所見

住居の掘方は、顕著な土坑状の掘り込みを図化しているが、全体的に中央部が高く、壁周辺に向かい緩やかに深さを増している。そして、中央部分は生活面と同位面である。また、掘方面の底面、下端の状態は、南壁の直線性が強く、隅部も北壁の両隅部より鋭角に東西壁側に構築されている。この状況は、当時の掘削段階での、南壁側に対する何らかの意識の表れと思われる。恐らく構築段階で基準として設けた部分の壁と考えられ、南壁を構築基準として東西・北壁の設定があったものと考えられる。

竈の土層断面からは、左袖の14層と20層の関係を観察すると、挟り込まれた部分に埋設された土が20層であり、14層などの袖構築材は、この20層を平夷して積み上げた状況である。この状況は、竈の袖部分の据え変えと判断される。また、竈右側の造りは直線的に造り込まれていることから、右袖が構築基準であったことが推測される。

土師の胎土では、図化掲載した土師器坏1・2・4～6・8はC1類、同3はB1類、同7はD1類。土師器鉢9はB1類、土師器短頸壺10はC1類、土師器甕11・12はB1類である。須恵器では甕13が太田産、同14はB1か。同15～17はB1類の胎土である。

図化掲載以外の土師器では、坏類154点、内B1類89点(内黒1点・内外燻れ8点を含む)、C類56点。同高坏2点が、黒色処理された土師器短頸壺1点、甕類はB1類320点。須恵器では、甕1点・内短頸壺1点・甕2点かB類。長頸瓶1点かC2類であった。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀中頃に廃棄された住居であると推定出来る。

10号住居(第25～28図、第20・21表、P.L. 12・13・58・59)

(1)概要

当該住居は、西側台地中央部に占地している。位置は17区A・B-1・2グリッド内に当たる。周辺の遺構には、東2.5mに当遺跡で最大の14号住居が位置し、36・14・17・19・9号住居に囲まれる状態で位置している。重複

第3章 調査の成果

関係は無く単独の住居である。

形状は、隅丸正方形を呈するが、若干、平行四辺形状に歪んでいる。規模は、軸長3.35m、幅3.50mを測る。主軸方位は $N-95^{\circ}-E$ を指す。残存深度は0.6m程である。

構造は、東壁に竈を備えている。主柱穴は、床面・掘方でも発見されていない、柱穴を備えない構造である。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下、竈に接するような位置関係に設けられている。形状は楕円形状を呈する。規模は縦0.5m横0.58m深さ0.41m程である。また、貯蔵穴の西側立ち上がり部分には、高さ5cm、幅15～18cm程で、三日月状の周提状の高まりを施している。この周提状の高まりの北側は、竈の右袖を利用している。

竈は、東壁中央部よりやや南東隅部に寄った位置で、中軸線の南側に備えている。竈は、屋外に逆位の「V」の字状に突出する。屋内長0.77m、屋外長0.31mを測り、屋内側に長い。袖は、左右両袖とも先端に土師器甕を逆位の状態で据えている(9・11)。焚口部では、左袖に掛かった状態で土師器甕12が出土している。燃焼部では、土師器小型甕8が逆位の倒立状態で出土している。煙道部は、燃焼部底面から直接伸び垂直に近い状態で立ち上がっている。掘方は、煙道部分が若干屋外に掘り込まれている状態である。

住居の掘方は、竈焚口部辺りから西側にかけて顕著で、特に西壁側に向かい掘り込みも深くなっている。また、不整形に部分的に深く掘り込まれたP2・P4・P5・P6・P8の部分がある。全体的には、凹凸が多い。

出土遺物は少ない。竈に関わる遺物は上述の通りである。図化掲載した遺物で竈出土以外の遺物は全て床面直上層での出土である。また、覆土3層中では礫の出土が目立っている。

未掲載遺物では、土師器甕類76点、土師器環42点がある。また、南西隅部周辺では、床面直上で礫がややまとまった状態で出土している。いわゆる菰編石と考えられる。調査段階で廃棄されたため詳細は不明である。

(2) 所見

住居の生活面・掘方面の南壁の下端は、他3壁の下端に比較して直線的な造りになっており、南東隅部・南西隅部の下端は、北東隅部・北西隅部の下端に比較して整った状態に造られている。この状況は前出の9号住居と同

様な構造である。この状態は構築当初の創意部分と考えられ、南壁を構築基準面として捉えられる。

竈燃焼部内では、支脚に土師器小型甕(8)を逆位(中空状態)にして転用されていた。この小型甕は高さ20.4cm、支脚として燃焼空間に露出していた部分の高さは15cmを測る。この支脚部＝器設部での推定天井高は、土層断面からすると33cm以上が推定される。最終時に使用されていた甕を12とすると、12の器外面に残る焼れた範囲から、燃焼部に露出していた部分は、上述器設部での指定高にほぼ一致する33cmが計測される。このことから、支脚部分には、12が掛けられていたことは考え難く、別な小型の個体が掛けられていた可能性が生じる。だが、この小型甕と同等の個体は出土していない。

出土した土師の胎土では、土師器環1・3はC1類、2・4・5はB1類、土師器小型甕8はB1類、土師器甕9はB1類、10・12はB4類、11はA類である。須臾器では、6がB1類、7が夾雑物をほとんど含まないC3類に類似する胎土である。未掲載遺物では、土師器環C1類30点、B1類12点。土師器甕類B1類75点、B2類1点である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃に廃棄された住居であると推定出来る。

11号住居(第28～30図、第21・22表、P.L. 13・60)

(1) 概要

当該住居は西側台地の中央部に占地している。位置は、16区T-5・6、17区A-5・6グリッド内に当たる。周辺遺構は、東側至近に13号住居、北側至近に6号住居、南東側至近に6号掘立柱建物が存在するが重複関係の無い単独住居である。

住居の形状は、南西側(主軸に対して右下側)がやや歪むが正方形基調を呈している。規模は、軸長4.03m、幅4.02mを測る。主軸方位は $N-95^{\circ}-E$ を指す。残存深度は50cm程である。

屋内施設では、竈が東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は円形を呈する。規模は縦0.42m、横0.46m、深さ0.52m程である。主柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。

竈は東壁中央よりやや南東隅部寄りに備えている。袖

は灰白色シルト土を主材として長く、燃焼空間の幅は狭く、屋内に平行状態で延びている。また、屋外への掘り込みは、煙道端部のみである。規模は、全長1.07m(屋内長0.73m屋外長0.34m)、袖基部幅0.53m、焚口部幅0.35m、燃焼部幅0.35m、煙道部幅0.12mを測る。

住居の掘方は、各壁下で様相を異にしている。床面からの深度では、北東隅部周辺はほとんど掘り込みがなく、南東隅部周辺の掘り込みが浅い。全体的には東側の掘り込みが浅い。一方、北側中央部周辺から南側、南東側、南側の順に従い掘り込みが深くなっている。中央部分は、P3・P4の掘り込みが認められている。この双方の周囲の掘り込みは、北壁直下と西壁直下の掘り込みの中間程の深さに掘り込みが認められている。最深部南壁で床面から-30cmを測る。

出土遺物はやや少ない。図化掲載遺物では、土師器環1は床面直上層、同5・10は4層土下層、土師器短頸壺16は床面直上層からの出土である。未掲載破片土師器では、甕類146点、坏類115点(内、黒色44点・内黒2点・外黒1点を含む)、高坏6点、埴1点。須恵器では、瓶類1点、甕1点がある。いずれも覆土内からの出土であるが、出土層位と出土傾向は把握されていない。

(2) 所見

住居規模は、1辺4m程を計測するが、南壁が3.6mでやや短く、南西側(主軸に対して右下側)がやや歪むが正方形基調を呈している。このような歪む状態の住居は、調査区内で他例もあることから(中軸に対して左下側、左壁がやや長い状態が多い)、構築段階での何らかの意図による結果とも思われる。

住居の掘方の特徴は上述した通りである。壁下に部分的な深さの異なる掘り込みが重なる状態は、掘削時の単位が小単位であったことが窺える。このことは、掘削・排土の作業工程が少数、少なくとも2人程度の作業内容であったことを示唆している。

竈では、右袖の内壁は、住居東壁から直角に伸びる、直線的な造りであるのに対して、左袖内壁は、各構造部位の特徴を示す造りになっている。この状況は、竈の構築は右袖を基準にして、必要な幅員を採り、左袖を構築したことが窺知出来、この右袖を構築基準としたことが判断される。また、袖部分の土層断面では、20層上面が酸化被熱変色が顕著であることから、少なくともこの20

層上面が被熱を受ける条件下にあったことを示している。竈の構造上、この被熱を受ける構造は、器設部奥壁面より焚口側の構造部分であったことが判断され、19層内面側には18層、20層上位には17層が袖の部分的な構築土としての調査所見から、17・18層土は部分的な改築を示す痕跡として考えられる。これらの状況から、竈は少なくとも2回以上の改築が行われていたことが窺える。

出土遺物の胎土では、図化掲載土師器環3～8・11～15の11点がB1類、1・2・9・10がC1類、同短頸壺16はC2類、同埴17がC3類である。土師器甕18・19がB4類で同一個体の可能性がある。20はB1類である。須恵器では、21・22・24がB1類、24は提瓶の可能性はある。23は乗附ないし太田産と思われる。未掲載遺物では、土師器環類59点(内黒2点・黒色43点・外黒1点を含む)がB1類、C1類が56点(黒色1点を含む)。土師器甕類では、A類4点、B1類192点(台付1点を含む)、B2類22点、B4類13点、C1類9点がある。須恵器では瓶類1点がB1類、甕1点が太田産である。

当該住居の時期は、住居の形状と出土遺物の様相から、6世紀末頃には廃棄されたことが推定出来る。

12号住居(第30～32図、第22表、P.L. 14・60)

(1) 概要

当該住居は、西側台地の中央寄り、調査区内北端に位置している。位置は、16区Q・R-7・8グリッド内に当たる。南南東側には4号粘土採掘坑が位置し、南側4m程に32号住居が位置している。住居は切り合い関係の無い単独住居である。

形状は、縦長方形を呈する。規模は、軸長5.91m、幅5.0mを測る。主軸方位はN-11°-Wを指す。残存深度は60cm程である。

貯蔵穴は2基発見されている。P1は、住居廃棄段階で使用されている。北東隅部の壁下に設けられ、形状は横長方形を呈する。規模は縦63cm、横65cm、深さ57cm程である。P6は竈の据え替え以前(住居構築当初)の竈位置に伴う。南東隅部の壁下に設けられ、形状は不整楕円形を呈する。規模は縦83cm、横66cm、深さ48cm程である。この双方共に周囲には、高さ3cm程度の低い土手状の施設を施している。また、双方とも二重構造である。

主柱穴は6本(P2～P5・P7・P8)が発見されて

いる。この6本は同時使用ではなく、調査所見では、廃棄段階でP2～P5が使われ、P7・P8はやはり竈の据替え以前(住居構築当初)の使用とされている。壁溝は未発見である。

構造は、竈を北壁・東壁で発見されている。北壁側の竈が据えられた竈で、東壁の竈は、据え以前の竈である。しかし、据え後の北壁竈は、トレンチにより袖側を失ってしまい、詳細は不分明である。また、据え以前の竈は、住居の廃棄段階では竈の痕跡が認識できる程度までに破壊されていた。そして、東壁竈の詳細は、竈の煙道側を東壁の一部とするため、埋め戻されたことにより、旧状は失っており不分明である。

住居の掘方は、全体的に床面とほぼ同様に平らな状態であるが、北東、南東側で壁に沿う状態で細長い土坑状の掘り込みが認められ、北西隅部周辺では不整形の掘り込みが認められる。

出土遺物は少ない。図化掲載遺物では、床面直上出土遺物は無く、全て床面直上層中からの出土である。特筆される遺物として、滑石製石製模造品16、滑石製白玉17が上げられる。未掲載破片土師器では、甕類150点、坏類46点、高坏7点、埴1点、短頸壺3点、手捏1点。須恵器では、高坏1点、瓶1点(9世紀)が数えられる。遺物以外では、礫が住居内南半中央寄りで床面直上層中から集中して出土している。

(2) 所見

住居は縦長方形を呈し、竈を備えた住居としては唯一の住居である。縦長方形ないし横長方形の形状を呈する住居には33・34・43号住居の3基が発見されている。しかし、前二者は竈を備えない竪穴状遺構である。この形状を選択した理由については因る可くも無いが、特殊な性格が具備されていたことも考慮される。

主柱穴跡はP2～P5・P7・P8の6本が確認出来る。この中で、P2～P5の4本とP2・P5・P7・P8の4本での使用が、調査段階の所見として得られている。しかし、改めてP7・P8と構築当初の竈との配置関係を検討すると、P7は、推定される右袖の先端に20cm～30cmと接近している。また、P2・P5の配置位置は、北壁から1.5m程の位置に配置している。P7・P8の配置位置は南壁から同様1.5m程の位置関係に当たっている。このことは、P2・P5が廃棄段階での北

側主柱穴であることから、廃棄段階の主柱穴配置はP2・P7・P8・P5の4本配置であった可能性を推測させている。他方、P3・P4の配置位置は、構築当初の竈とP6(貯蔵穴)との配置関係から、調査区内で発見されている、他の住居の竈・貯蔵穴・主柱穴の配置関係と相違がない。これらのことから、上述の廃棄段階ではP2・P7・P8・P5を主柱穴としていたことが類推される。

しかし、構築当初段階の竈としている東壁竈が、北壁の据え後の竈としている竈の関係が相違する場合、すなわち東壁竈が、北壁竈の存続期間中の一時的に構築された可能性があるならば、上記内容とは異なった推移になる。すなわち、住居の構築当初(北壁竈)にP2・P7・P8・P5が伴い、何らかの理由により東壁に竈を移設し、これに伴いP2・P3・P4・P5に据え替えたことになり、状況は一転する。調査所見の廃棄段階の主柱穴配置状況からすれば、構築当初から、竈は北壁に据え、何らかの理由で一時的に竈を東壁に移設し、再び北壁に再移設したことが推測される。実体的に上述の双方のいずれかであろうが、現段階としては確定することが出来ない。

上記の他、P4に重複するP9・P10が発見されているが、深度が14cm・4cmと浅く、主柱穴とするには無理がある。可能性として、補助的な副素材の痕跡とも思われる。この場合、P4は補助材を必要とする状況である。この状況が柱据えの経過を示唆しているのであろう。また、上述の状況は、主柱穴の据えにより、上屋も改修されたことを示している。

住居の掘方では、東壁及び南壁東半直下部分の掘り込みは、東壁と北東・南東隅部を決定させている。この状況から、東壁を基準にする住居掘削が行われたことを推測させる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器坏では1～4がC1類、同高坏5・6がB1類、7がC3類、同短頸壺10がC1類である。土師器甕では、11・12・14がB1類、13はA類である。須恵器では、8が搬入品(東海か)、15は乗附産である。未掲載遺物では、土師器坏類では、A類5点・B1類7点・B2類1点・B3類1点・C1類32点・C2類1点、同高坏A類1点・B2類6点、同短頸壺B2類2点・C1類1点、同赤色塗彩埴B2類1点、手捏ねB1類1点、土師器甕類では、A類26点・B

1類85点・B2類23点・B4類16点がある。須恵器では、太田産と思われる高坏2点・C類の瓶1点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

13号住居(第32～35図、第22・23表、P.L.14・60・61)

(1)概要

当該住居は西側台地の中央部分に占地する。位置は、16区S・T-5・6グリッド内に当たる。重複関係は、37号住居・6号獨立柱建物・102号ピットが当該住居を切っている。また、西側至近には11号住居、東側4m程に32号住居が位置している。

形状は、南北方向に若干長い正方形を呈する。規模は、軸長4.94m、幅5.10mを測る。主軸方位はN-80°-Eを指す。残存深度は35cm程である。

竈は、東壁の南東隅部寄りに想定されたが、調査の結果、痕跡も発見されなかった。この竈の想定位置には、37号住居と、耕作による擾乱により、竈のほとんどが失われたかに思われたが、極一部分の痕跡と思われる状態も確認できなかった。このため、当該住居は、竈を備えない住居であったことが確認されている。しかし、一方では、床面上でも灰跡等の施設も未発見であった。

貯蔵穴は未発見である。位置は南東隅部直下に推定が出来るが、同部分は37号住居の重複により失われており、この重複に原因して貯蔵穴も失われたと推定される。

主柱穴はP1～P4の4本が発見されている。各柱穴の配置位置は、壁1辺長の1/4の規模で内側に配置している。壁溝は、生活面では認められなかったが、掘り方で発見されている。

住居の掘り方は、床面下全体に浅く認められた。主柱穴以外の柱穴跡は、P5～P14がある。これらの中で、P8が床面下-45cmに底面を備える主柱穴に相当している。発見部位からは、出入口施設に伴う柱穴跡と考えられる。また、P11が床面下-23cmに、他は-20cm未満の浅い状態である。柱穴跡以外では、壁直下から主柱穴部分に接続する溝状(いわゆる「間切り溝」)の掘り込みが発見され(M1～M4)、北壁下の中央やや西寄りでは、単独で同様な溝状の掘り込みが発見されている(M5)。北東隅部直下から、南西隅部直下では、壁溝が発見され、

南壁下では部分的に発見されている。

出土遺物は少ない。図化掲載遺物では、11・22が床面直上出土、1・4・6・21が床面直上層出土、2・3・5・8・10・13・15・16・19・20・23～25は5層土内の出土が確認される。しかし、5層土が床面直上まで堆積している状態から、これらはほとんど時間差なく廃棄された遺物であることが確認できる。また、西壁中央部分では覆土中層で、南西隅部周辺では、床面直上に焼土ブロックを含む土層の堆積が確認され、同部分の覆土上層では炭化材が出土している。

未掲載破片土師器では、坏類67点、高坏14点、短頸壺1点、赤色塗彩高坏2点、同埴2点、甕類161点(球形甕が目立つ)。須恵器では、坏身1点、高坏2点、甕1点、甕1点などが出土している。出土層位は、いずれも覆土内としか記録がなく、出土傾向は不分明である。

(2)所見

住居の覆土は、大きく上下二層と壁周辺の堆積の三者に集約される。この内、前二者の層間には、4層土の「にぶい黄色ローム土」が認められており、この4層を上下する3層土・5層土には顕著な色調差がある。この4層土は、出土遺物の様相から、榛名山二ツ岳を給源とするHr-FAであることが推断される。そして、上述5層土内出土の遺物は、Hr-FA降下以前の土器群として捉えられる。同様な事象は68号住居でも認められている。

竈は痕跡も確認できなかったが、灰跡も未確認である。出土遺物の時期傾向と、覆土内にHr-FA被覆住居であることから、当該住居は竈を備えなかったことが推定される。

掘り方で発見された溝状遺構の施設は、間切り等の施設に伴う掘り込みともされているが、調査所見では、埋設土・覆土等の特徴が確認されていないため、詳細は不分明である。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器全てがB1類である。未掲載遺物では、土師器坏類67点、土師器甕類161点がある。他方、未掲載になった須恵器では、坏身がB類の胎土と判断され、高坏では、太田産と考えられる個体が2点(同一個体と考えられる)、乗附産と考えられる高坏1点、瓶類2点(内1点はB1類、他の1点は不明)、甕1点(これも太田産と考えられる)。この他では、10世紀頃の須恵器坏1点が吉井産と考えられる製品

が出土している。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、5世紀末頃から6世紀中頃には廃棄されたことが推定される。

14号住居(第35～41図、第23～25表、P.L. 15・16・61・62)

(1) 概要

当該住居は西側台地中央部に占地する、一辺9mを超える大型住居である。位置は、16区S・T-1～4、17区A-2・3グリッド内に当たる。周辺遺構には、東側2mを隔て、同規模の15号住居が位置している。この接近する状況から、併存の場合は上層構造が重複する状態であり、恐らく、平面での状況から、双方には新旧関係が存在することが推定される。重複関係では、当該住居が北西隅部分で36号住居を切っている。

形状は正方形を呈する。規模は、軸長9.32m、幅9.64mを測る。主軸方位はN-14°-Wを指す。残存深度は78cm程である。当遺跡内最大規模を有する。

構造は、竈を北壁に2か所、西壁南端に1か所、合計3か所で出土している。廃棄時の竈は北壁中央寄りに、構築当初は北東隅部に寄った位置に構築されている。貯蔵穴は、住居の北東隅部(P1)と、北壁中央直下(P14)(廃棄時の竈左袖の左側)の2か所で発見されている。形状は前者が不整形形状を呈し、後者は梯形(正方形基調)を呈する。また、P1貯蔵穴は、床面延長面でも硬化が認められなかったことから、住居の廃棄段階まで開口していたことが調査所見で得られている。

主柱穴は8本(P2・P4・P5・P7・P8・P11・P12・P13)が発見されている。これらの柱穴跡の内P2・P13、P4・P5、P7・P8、P11・P12の重複関係が有る。

竈は前述の通り新田3か所で発見されている。住居構築当初の竈を第1号竈、住居廃棄段階の竈を第3号竈とし、西壁南端部で発見された竈を第2号竈とする。

第1号竈は、廃絶後壁を補修し北壁の一部にされている。形状の特徴は明確ではないが、残存した煙道部から、焚口から燃焼部・煙道と平坦な底面を基本形としたことが判断されるが、使用時の補修により廃絶直前には、煙道部が緩やかな底面傾斜を備える構造に成っていること

が掘方から看取される。

第2号竈は、調査所見では覆土内から焼土・炭化物が含まれなかったことから、未使用であったのではないかと調査所見が得られている。構造は掘方から窺知するしかないが、底面が第2号竈同様に、床面と同位であることから、第2号竈同様な構造であったことが想定出来る。また、竈周辺(付帯施設)の調査段階でも、袖などの存在が認められなかったことから、第3号竈に先行する段階の竈であったことが判断される。

第3号竈は、遺存が良く、器設部周辺から(燃焼部奥部分)煙道部の天井が残存し、最も形状が窺える状態である。設置位置は、中軸線上に竈左袖を配する形である。規模は、全長1.55m(屋内長0.79m、屋外長0.76m)、袖基部幅1.57m、焚口部幅0.75m、燃焼部幅0.4m、煙道部幅0.14mを測る。

住居の掘方は、東壁中央部直下から住居内中央部に向け地山掘り残しの床面を用い、北壁・西壁・南壁下で不整形の土坑状の掘り込みが露呈されている。各土坑状の掘り込みの深度は図中に示したが、各壁下では段々状に壁に向かい深く掘り込まれている。

北壁下第3号竈の前縁には、不整形な溝状の掘り込みが北壁側のみ直線的に掘り込まれている。この溝状の掘り込みの北側壁の走行は、第3号竈構築以前の壁溝の痕跡と推定され、これが北壁の痕跡とした場合、住居の形状は比較的整った形状になる。また、壁際の底面全体に柱穴状の掘り込みが多く認められ、東壁下と南壁下では、短い溝状遺構の掘り込みも認められている。壁際の柱穴では、特に西壁・北壁直下のP50～P55・P57～P61が深い。

出土遺物は非常に多い。これは、当該住居の容積量が、通有住居の8倍に匹敵することに原因している。

図化掲載遺物では、床面直上出土遺物では、須恵器高坏30・31・33、床面直上層出土遺物では、土師器坏4・6・8・15、同短頸壺36、同鉢26がある。他は覆土下層での出土である。未掲載破片土師器では、土師器裏類1984点、鉢類17点、短頸壺類11点、手捏ね4点、粘土塊2点、坏類962点(内黒10点・内黒内面研磨15点、内黒内面研磨無し5点・黒色土器蓋46点・同身33点・同体部43点、半黒色土器蓋29点・同身22点・同体部32点を含む)。須恵器では、坏蓋5点(乗附産2点を含む)、坏身2点(乗附産

2点)、高环長脚2段透脚部7点、同環部5点、竪1点、裏類21点などがある。

また、遺物の他では、夥しい量の礫が出土している。この礫の大きさは拳～人頭大の大きさで、4層土を主体として出土している。

(2) 所見

住居形状の特徴として、四壁の内、東壁・南壁は直線的に構築されているのに対して、北壁・西壁は歪んだ状態が認められる。北・西壁の歪みは東壁・南壁に相反する状況である。この状況は、住居の構築段階での掘削の創意状況を強く示唆しており、住居の掘削段階に、掘削形状の決定が東壁・南壁を基準に構築されたことが窺知される。だが、第3号竪の構築に伴い、北壁が改修された可能性が、第3号竪の掘り方で看取され、露呈時の形状が構築当初の形状とは異なる可能性がある。また、第3号竪の設置位置は、任意に設定した中軸線に左袖の中心に当たるが、南壁を基準とした場合、南壁の垂直二等分線の延長上に第3号竪の左袖内壁面が合致している。また、隅部の造作では南東隅部の直角思考に次ぐ状態が南西隅部に認められ、北東隅部は曖昧な状態である。これらのことから、住居構築段階から改修段階まで、南壁ないし南壁と東壁を基準にして住居掘削が行われた可能性が推測でき、少なくとも、南壁を「構築基準辺」として捉えられる。

貯蔵穴では、P1・P14は、北壁の新旧2か所の竪に対応して構築された可能性が推測出来、竪と貯蔵穴との関係、貯蔵穴と称している施設の性格解明には示唆的な存在でもある。また、P1貯蔵穴は、床面延長面でも硬化が認められなかったことから、住居の廃棄段階まで開口していたことが調査所見で得られている。このことは、貯蔵穴の性格付けに、竪と一体の関係だけではなく、住居総体の中で考えなくてはならないであろう。

支柱穴では、四隅のP2・P13、P5・P4、P8・P7、P11・P12は重複する状態で発見されている。この重複状態は、柱の据え変え、すなわち、上屋構造も掛け替えが行われたことを示している。これらの支柱穴の重複状態では、深い側の柱穴跡が改築段階に掘削された柱穴跡と考えられる。このことから、構築当初の支柱穴の配置はP13・P5・P8・P12となり、改築段階にP2・P4・P7・P11の配置であったことが類推される。

支柱穴以外では、P3・P6・P10は梁・桁材を支える補助柱穴跡と判断される。だが、これらの3本が構築当初から設置されたのではなく、改築を必要とする状況が生ずる以前に、支柱の上屋支持に無理が生じたために施された処置が想定される。P9は桁材を利用した何らかの施設に用いられた柱穴であることが考えられる。掘方面では、壁際の柱穴の発見もあるが、他にも多くの柱穴が発見されている。特に、支柱穴の内側では、深度は浅いものの、P39・P43～P45・P47・P48・P15・P16は、桁・梁の補強の補助的な役割が、屋内施設等の部分的な構造に供した施設と思われる。

竪は3か所で見られているが、全体形状が露呈出来たのは廃棄段階の第3号竪だけであった。この第3号竪の構造は、全体に歪んだ形状に看取されるが、基本的には、右壁側を直線構造としている。左壁側は、右壁側から必要な幅員を採り全体形状を決定している。構造は、平坦な燃焼空間の底面から45度ほどの傾斜で奥壁が立ち上がり煙道部に至っている。器器部はすでに崩落が生じていると考えざるを得ないが、縦断面から、燃焼空間の奥壁より手前側に設けていることが判断出来る。全体として、出土した竪形状は、当時の姿をおおそ留めていることが確認出来る。特徴として、煙道部の掘り込みが、ほぼ床面の延長面に構築している点で、この特徴は、第2・3号竪でも同じである。

住居の掘方では、全体に西壁側に集中し、南北壁下の半ばまで及んでいる。この状態は、住居の掘削当初に集中掘削する部分が構築の基準とも考えられるが、西壁の直線性が無いことから構築基準とは認められなかった。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・5～7・11・12・14～19がB1類、2・4・13・20がC1類、3・8・9・10がC3類である。同高環はすべてB1類、同鉢・有孔鉢26・27はB1類、同短頸壺36・埴埴はB1類、同甕39はB2類か、41はB2類、42・44はB1類、同甕43はA類である。須恵器では、28・30・31・33・38・47・48がB1類、甕49は太田産である。34・35は未分類搬入品の可能性がある。32高環は未確認である。未掲載遺物では、土師器環類でB1類597点(黒色蓋46点・同身33点・同体部43点、内黒有磨盤15点・同無磨盤5点、中途半端な燻蓋29点・同身22点・同体部32点を含む)、C1類365点(内黒10点を含む)。土師器甕類でA類121点、B

1類1748点、B 4類99点、D 2類16点がある。この他では、鉢17点B 1類、短頸壺11点C 1類である。手捏ねB 1類4点などもある。須恵器では、環蓋4点(乗附か2点・不分明2点)、坏身2点(乗附か)、高坏脚部(長脚2段透)7点(太田産3点・乗附か3点・不分明1点)、甕1点(太田産)、器台2点(同一個体)B 1類、高盤2点(C 1類1点・不分明1点)、甕21点(太田産2点・B 1類19点)である。

当該住居の時期は、住居の形状と出土遺物の様相から、7世紀中頃には廃棄されたことが推定出来る。

15号住居(第42～47図、第25・26表、P. L. 16・62)

(1)概要

当該住居は西側台地中央部に占地している。位置は16区P～S-2～4グリッド内に当たる。前述の14号住居に次ぐ規模を有する大型の住居である。周囲の遺構には、14号住居が西に2m程に位置し、東側4.5m程には3号粘土探掘坑、北側には4号粘土探掘坑・32号住居・37号住居・12号住居・11号住居・6号掘立柱建物が列線を描き、南側には35号住居・3号掘立柱建物が位置している。重複関係は無い単独住居である。

形状は、比較的整った正方形を呈するが、東壁に山形状に突出する張出部を備えている。規模は、軸長9.0m、幅9.30mを測る。主軸方位はN-11°-Wを指す。残存深度は70cm程である。

屋内施設では、竈は北壁に北東隅部から2.4mの位置に備えている(廃棄段階)。また、西壁南端側には一時的に使われたと考えられる竈が発見されている。貯蔵穴(P 1)は、北東隅部の壁下に設けられている。形状は横長方形を呈する。規模は縦0.73m、横1.12m、深さ32cm程である。西壁竈に伴う貯蔵穴は住居の掘方面で発見されている(P 8)。貯蔵穴P 8は南西隅部壁下に設けられている。形状は横長方形を呈する。規模は縦0.58m、横0.74m、深さ0.68m程である。

主柱穴は6本(P 2～P 7)が発見されている。壁溝は西壁・東壁下で発見されている。

第1号竈は、逆「V」の字状に開く袖を備えている。全長1.79m(屋内長1.29m屋外長0.5m)、袖基部幅1.5m、焚口部幅0.8m、燃焼部幅0.55m、煙道部幅0.29mを測る。第2号竈は、放棄後破壊し西壁の一部にされている。こ

のため、詳細は不分明である。

住居の掘方は、北東側、南西側で広く掘り込まれている。しかし、記録された平面図と断面図には齧齧があり、断面図では、北西側でも掘り込みが顕著であるが、平面図では表現されていない。このため詳細については不分明である。

出土遺物は、図化掲載遺物の床面直上出土遺物には、土師器環10、同高坏14、同短頸壺28、同壺31・同甕37がある。床面直上層出土遺物には、土師器大型坏13、同甕40、須恵器高坏23がある。覆土下層では、土師器高坏20がある。貯蔵穴(P 1)内では、土師器坏9、同甕39が出土している。未掲載遺物では、土師器坏類406点、同高坏69点、同短頸壺17点、同壺7点、同甕類1228点がある。須恵器では環蓋10点・坏身4点、高坏2点、瓶類3点、甕類6点、器種不分明3点がある。

(2)所見

住居の形状では、西壁と南西隅部は直線的・類直角状態であるのに対して、南壁は南西隅部以東部分が精緻な造りではない。東壁・北壁は直線的ではあるものの、東壁直下及び北東隅部直下より内側床面上では、壁溝の痕跡が発見されている。これは、東壁と北壁が拡張された可能性がある。この拡張の痕跡として、西壁の張出部分である。この部分の、東壁延長の部分の屋内側は、黒褐色土主体の覆土(土層断面9層土など)が堆積していたが、この張出部分の覆土には、多くの礫と黒褐色土が混じる状態であった。この状態からは人為の所産と判断でき、拡張に伴い部分的に掘り過ぎた部分を埋設した状態として捉えられた。そして、北東部分の壁溝の痕跡部は、ほぼ直角に屈曲する状態であることから、構築当初の住居の竈穴部分は均整の採れた正方形を呈する状態であったことが窺われる。しかし、南東隅部側の壁溝の痕跡はやや楕円状態であることと、南壁が改築の痕跡が認められないことから、全体的な歪みの要因は、南壁の造りに原因していることが類推される。そして、西壁の精緻な造りが当該住居「構築基準辺」として捉えることが出来る。

竈は新旧2か所で発見されている。竈は北壁でやや北東隅部に寄った位置に備えられている。廃棄以前に使用されていた竈は、西壁南西隅部寄りに備えられている。しかし、この竈は、煙道部分を残し破壊し壁を構築し痕

跡を消去している。

北壁は改修された可能性があることは上述したが、この北壁改修以前には竈が備えられていた筈である。これは、貯蔵穴(P1)の配置位置からすれば順当であろう。このことから、実際には、目に見られない竈が存在していたことになる。すなわち、当該住居は竈が3か所に構築されたことが考えられる。恐らく、廃棄段階の竈とほぼ同位置に構築されていたことが推定される。北壁の改修でほとんど姿を失ったのであろう。便宜上、構築段階の姿を失っている竈を第1号竈、西壁の竈を第2号竈、改築北壁に築かれた竈(廃棄段階の竈)を第3号竈と呼称しておく。

これらのことから、第2号竈の構築は、北壁の改築により一時的に構築され、北壁の改修後にその機能を新しく構築された第3号竈に移されたことが類推される。

貯蔵穴はP1が北東隅部直下で、P8が南西隅部直下で発見されている。この双方と竈との関係は上述の通りである。

主柱穴跡はP2・P4・P5・P7の4本が考えられ、桁・梁の各間に補助的な柱を据えた掘方がP3・P16・P6・P28の4本である。また、主柱穴P5の南西傍らには径の細いP22が発見されている。配置位置からP5の補助的に備えられたことが考えられる。このP22の位置は、最も柱間の均整が取れる状態で、柱間は概480cmを計り、30cmを公約数とすれば、8単位の数値が得られる。

住居の掘方は、北東隅部・南西隅部周辺で認められるが、著しい深さを伴う状態ではない。部分的な掘り込みでは、P13・P14が土坑状の掘り込みを印象付ける。しかし、やはり明瞭な土坑とは異なっている。また、南壁・東壁中央部直下に柱穴跡状の掘り込みがやや集中する状況が看取される。東壁下では、突出部に当たり浅い窪み状の中に2本。南壁下では4本、ほぼ軸線上に集中する傾向が看取される。東側部分は、日の出の入光方向に当たることから、出入口部の施設が推定される。一方の南壁側の出入口部の施設を推定出来なくもないが、積極的な根拠を欠いている。大型住居であることから、出入口部が複数箇所を推測させる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環2・7～10・13・堎11がB1類、1・3・5・6がC1類、4が

C2類、12がC3類である。同高環14～20の全てがB1類、同短頸壺27・28がB1類、同埴29はB1類、同壺30・31、同甕36、同甕37～39・41・43がB1類、同甕40がB4類である。須恵器では、坏蓋21・坏身22・高環24、瓶33・34、甕42が太田産。高環23・25がB1類である。未掲載遺物では、土師器環では、B1類209点(内黒有研磨2点・内黒無研磨2点・黒色蓋20点・黒色身22点・黒色体44点を含む)、C1類145点、C2類30点、同高環では、脚部B1類36点・同坏部33点(内黒2点を含む)。同短頸壺B1類17点。同壺B1類7点。土師器甕類では、A類29点、B1類1162点、B4類31点、C1類6点である。須恵器では、坏蓋B1類10点・太田産1点、同身B1類4点。同高環B1類2点。瓶類B1類3点。同甕B1類1点・太田産1点・不分明1点。器種不明3点は不分明である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

16号住居(第47～50図、第26・27表、P.L. 17・63)

(1)概要

当該住居は西側台地の東縁でも北側に占地している。位置は、16区N・O-5・6グリッド内に当たる。周囲での発見遺構には、北側2m程の至近には12号住居、東側3m程に16号住居、南東3m程には3号粘土探掘坑、南側5m程には15号住居、西側至近に32号住居が位置している。重複関係では7号粘土探掘坑に切られている。この7号粘土探掘坑による擾乱は、住居の東壁北半分から北壁・西壁・中央部分に重複し、壁の大半を失っている。このため当該住居の遺存は非常に悪い。調査当初、形状が非常に歪んだ状態で平面形状が確認できたが、これは、当該住居と7号粘土探掘坑が重複している状態ということを確認出来ていなかった。このため、双方を同時に調査実施し、調査半ばで二者の遺構の切り合い関係があることを認識するに至った。

形状は横長方形を呈していたことが残存部分から判断される。

規模は、軸長3.7m、幅4.8mを測る。主軸方位はN-90°-E程である。残存深度は70cm程である。

屋内施設では、竈が東壁で南東隅部に偏在した位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部からやや離れた

第3章 調査の成果

南壁下に設けられている。形状は不整形を呈する。通有部からやや西側寄りの位置に成る。規模は、長径0.53m、短径0.47m、深さ0.46m程である。柱穴跡と壁溝は未発見である。

竈は、竈露呈時には、焚口天井の補強に用いられた裏が土圧により押しつぶされた状態で出土し、右袖の傍らには完形個体の土師器甕13が出土している。規模は、全長1.13m(屋内長0.6m屋外長0.53m)、袖基部幅0.88m、焚口幅0.47m、燃焼部幅0.4m、煙道部幅0.24mを測る。

竈の構造は、左右両袖に芯材としてやや大振りの礫を縦位に置き据え、焚口天井には上述の土師器甕(右12・左13)を架けている。燃焼空間は隅丸長方形を呈し、煙道側の半分を屋外側に突出させている。底面は、燃焼部末端(支脚手前)で一旦立ち上がり、架けられた裏の手前部分で楕が裏に直接当たる造りになっている。この燃焼部の末端には、礫を用いた支脚を据えている。煙道部は、底面が緩やかに登り垂直気味に立ち上がっている。

また、両袖の内部には、酸化被熱変色した部分が認められ、この部分の上位には、天井部を構造させた粘土(シルト)(31層土)が積まれており、燃焼部天井を造り変えた痕跡が認められる。

住居の掘方は、住居自体の遺存が悪いながらも辛うじて窺出出来る。掘方は住居の北東隅部周辺に浅く土坑状に掘り込まれた箇所が2か所連続して発見されている。この土坑状の掘り込み以外は顕著な状況は認められなかった。

出土遺物は、当該住居と7号粘土採掘坑の遺物が混在する状態で整理を迎えている。可能な限り分別を行ったが、不確実な状態で本報告を行わなければならなかった。このため、破片類の情報は双方の遺構の情報であるが、周囲の遺構、粘土採掘坑の性格から、限りなく当該住居の覆土内出土遺物としての様子をうかがわせる内容であろう。この状況下で確実に当該住居に伴うのは、竈から出土した12～14の3点である

未掲載破片土師器では、甕類280点、坏類50点(蓋2点・身7点・体部7点、黒色土器蓋3点、C類胎土蓋31点)、埴1点、高坏1点である。須恵器の破片類は未確認である。

(2) 所見

当該住居は7号粘土採掘坑に切れ、大半の部分の失っているため詳細は不明である。所見としては、竈の天井部の改修が上げられる。

出土遺物の胎土では、土師器甕12がA類、同13・14がB1類である。未掲載遺物では、土師器坏B1類21点(黒色蓋3点を含む)、C1類19点・C2類2点12点、土師器甕B1類276点・B4類4点、高坏B1類1点、埴B1類1点がある。須恵器は皆無である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

17号住居(第50～52図、第27表、P.L. 17・64)

(1) 概要

当該住居は西側台地の東寄りの調査区南端で、南西隅部が調査区外に延びている。位置は、7区A・B-19・20、17区A・B-1グリッド内に当たる。周辺遺構には、北側8m程に10号住居、北東側5m程に14号住居、東側至近に34号住居、西側3m程に31号住居と9号粘土採掘坑、北西側4m程に19号住居が位置している。重複関係の無い単独住居である。

形状は均整の採れた正方形を呈する。規模は、軸長6.84m、幅6.88mを測る。主軸方位はN-4°-Wを指す。残存深度は67cm程である。屋内施設では、竈を北壁の中軸線より北東隅部に寄った位置に備えている。主柱穴はやや壁寄りに4本備えている。壁下には壁溝が竈部分以外で全周する。

貯蔵穴(P1)は、北東隅部直下に備えている。形状は楕円形状を呈する。構造は二重の底面を備える。この二重構造の底面は、調査区内でも比較的多く発見されている。規模は、縦0.88m、横1.06m、深さ0.52m程である。主柱穴は4本、P2・P3・P5・P6である。また、桁側の柱間にはP4・P7・P13(掘り方で発見)の横架材の補助柱穴跡が出土している。壁溝は、幅15～20cmで安定した幅員で廻っている。

竈は煙道部前縁部分の天井が残存する。構造は、焚口から燃焼部・煙道下端までが細長い舌状を呈しており、古式の形状を留めている。しかし、底面の状態は、焚口から煙道下端まで床面とほぼ同位の平坦な構造であり、単に古式な構造とは異なっている。袖は左右で長さが異なり、左袖長1.25m、右袖0.85mで40cm左袖が長い。こ

のため、焚口部では、炭化物の分布範囲が左側に多く散布が認められる。燃焼空間は狭いが、壁面は被熱酸化が顕著である。掘方では、右袖が地山削り出しの芯材を残し、左袖部分には拳大の礫を4点、縦列配置を採り芯材としている。屋外への掘り込みは、煙道部分のみが認められる。全体的には、床面から浅く皿状に掘り窪められている状態が縦断面図から看取されるが、平面図化が成されていなかった。規模は、全長1.65m(屋内長1.28m 屋外長0.37m)、袖基部幅1.47m、焚口部幅0.52m、燃焼部幅0.43m、煙道部幅0.27mを測る。屋内側での構造長が長い。

住居の掘方は、東壁から南東隅部・南壁東側直下で「L」字状に広く浅い掘り込みが認められ、南西隅部では土坑状の掘り込みが認められる。また、P5に向かい西壁から垂直に伸びる溝状の掘り込みが認められている。いわゆる「間仕切り溝」と呼称されているもの同一の施設である。また、床面上で確認・発見されている壁溝は、掘方底面では消滅している。図化されていない部分では、全体的に浅い掘り込みが土層断面から看取でき、住居全体では、中央部が盛り上がる様な状態であったことが窺知される。

出土遺物は全体的に少ない。図化掲載遺物では、床面直上出土遺物で12土師器甕1点、覆土下層では5土師器環1点である。未掲載遺物では、土師器環類120点、同高環3点、同短頸壺1点、同甕類365点がある。須恵器では、高環3点、瓶類1点、甕7点がある。未掲載遺物は、調査段階での収納が覆土内の記述である。特筆される遺物として、線鋸歯文を施す紡錘車(17)が覆土内から出土している。また、鉄製品として18が図化掲載されている。外見は平根三角形被覆式である。

(2) 所見

当該住居は、今回の調査で発見された住居の中でも形状が整った住居である。また、屋内施設の通例に準じている。特に、発見された住居の中でも主柱穴の配置状態は最も均整がとれている。

主柱穴の配置状態は、各壁の下端から各柱穴の中心まで、距離は1.4mでほぼ統一されている。また、各隅部からの対角線下に主柱穴は配置されている。そして、各主柱穴間の距離はほぼ3.7mである。この壁-柱穴距離と柱間長の比率は2:5になる。この数値は、当該遺跡

ないし周辺地域との住居の構造を考察する時、今回の調査での基準となる数値である。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器全てがB1類である。須恵器では、高環14が太田産、他はB1類である。

未掲載破片では、土師器環類A類1点・B1類79点(黒色土器蓋6点・同身3点・同体部9点、内黒内面研磨蓋2点・同身1点を含む)・C1類23点・C2類15点、短頸壺B1類1点・C1類1点、高環B1類2点・C1類1点がある。須恵器では、坏蓋太田産1点・不明3点、高環B1類1点、瓶(横瓶か)1点、甕類太田産1点・B1類1点である。

鉄鏝18は、被覆部分は非常に薄い造りである。また被覆の欠損部は、上方向に向かい反り上がった状態である。姿は鏝としても、簀代の厚味が薄過ぎることから、器種としては鏝以外を考慮しなければならない。しかし、現段階では鏝以外の器種の想定は無い。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたと推定できる。

18号住居(第53・54図、第27・28表、P.L. 17・18・64)

(1) 概要

当該住居は西側台地の中央部で、調査区内の南側に位置している。グリッドでは、17区D-1・2に当たる。周辺遺構には19号住居が東側に近接し、北側に32号住居、北東側に9号住居、北西側に21号住居が位置している。重複関係では、20・40号住居を切っている。

形状は小形の横長方形を呈する。規模は、軸長3.5m、幅4.48mを測る。主軸方位はN-75°-Eを指す。残存深度は67cm程である。

屋内施設では、竈を東壁の南東隅部寄りに備えている。遺存状態は良好である。柱穴跡は未発見である。貯蔵穴(P1)は南東隅部直下で発見されている。形状は円形を基調とする2重構造の底面を備えている。規模は径0.48m、深さ0.26m程である。主柱穴は床面、屋外周囲の平面精査を行ったが未発見である。壁溝は、南東隅部以外の壁下で発見されている。

竈は、小振りであるが燃焼空間は比率上広い。短めの両袖に挟まれる燃焼空間は楕円形状を呈する。焚口から燃焼部・煙道部下端まで床面と同位の底面で繋がり、煙

第3章 調査の成果

道が垂直に立ち上がっている。掘方は燃焼部分の下位が浅い土坑状に掘り込まれ、煙道部分は壁の中心から上位を舌状に掘り込んでいる。形態的には古式な掘方である。規模は、全長0.82m(屋内長0.72m屋外長0.10m)、袖基部幅0.90m、焚口部幅0.61m、燃焼部幅0.42m、煙道部幅0.09mを測る。

住居の掘方は、ほとんど認められない。特徴的なのは壁溝の幅員が拡張された様な状態であるが、掘り過ぎも考慮される。出土遺物は、少なく図化掲載した資料は全てが破片個体である。床面直上出土遺物として土師器甕14が1点、床面直上層では土師器台付甕11が1点、貯蔵穴底面直上層からは土師器環8点が出土している。未掲載遺物では、土師器環類196点、埴1点、高環4点、短頸壺1点、土師器甕類344点。須恵器では、环蓋4点、高環1点、甕2点がある。

(2) 所見

当該住居の西壁及び西壁の両隅部は、東壁及び東壁の両隅部より、直線的で鋭角な隅部の造りを備えている。また、北壁では、壁の直進性が見られない。南壁は直進性があり、西壁と鋭角な隅部で繋がっている。この状況は、西壁と南壁を基準に住居の掘削構築があったことを示唆している。この二辺夾角による構築方法は、9・10世紀の住居に通常に見られる。しかし、住居の掘方がほとんど認められないことから確実な裏付けが出来ない。

竈は、左袖を壁に向かい直角に備えている。形状は、この左袖の内壁面を基準に必要幅員を採り形状の決定がなされている。このために竈形状が右側に開く状態に構築されている。この状況から、左袖を基準に竈の構築が行われたことが判断される。また、掘方は、屋外への掘り込みが少なく古式な竈である。貯蔵穴も浅い。

土器の胎土からは、掲載した土師器環類は、1～3がC1類、4～7・9・10がB1類、8がD1類。同台付甕11・同甕15・16がB1類、同甕14がA類である。須恵器では、坏身13が太田産?、环蓋12がB1類、同瓶17が太田産?である。未掲載遺物では、土師器環B1類52点(黒色身5点・同蓋3点・体部10点、内黒身2点・同体部5点、外黒身2点・同蓋2点・同体部15点を含む)、C1類56点、C2類99点がある。土師器甕A類3点、B1類312点、同B4類9点、D2類20点がある。須恵器では、环蓋太田産4点・他1点、高環脚部B1類1点、

豊太田産1点・B1類1点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

19号住居(第55～60図、第28・29表、P.L. 18・19・64～67)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の中央部に古地し、調査区内やや南側寄り、17区B～D-1～3グリッド内に位置している。周辺遺構には、西側に18号住居が接する状態で位置し、北側2m程に9号住居、東側3m程に10号住居、南側3mには17・31号住居、南西側には20号住居が位置している。

形状は正方形を基調にすると考えられるが、歪んでおり矩形として捉えられる。規模は、軸長5.32～6.08m、幅6.4mを測る。主軸方位はN-8(8～14)°-Eを指す。残存深度は73cm程である。

屋内施設では、竈が北壁中央よりやや南東隅部に寄った位置と、南東隅部寄りて竈の煙道部分のみが発見されている。この双方の竈を便宜上、前者を第2号竈、後者を第1号竈としておく。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は横長方形を呈する。この貯蔵穴に隣接する南・西側には、「L」字状で高さ10cm程の突提を備えている。規模は縦0.74m、横1.07m、深さ0.5m程である。主柱穴は合計12本が発見されている。生活面ではP2～P5であるが、住居の掘方面では、P15・P18・P41・P38、P10・P7～P9が発見されている。壁溝は南・西壁直下で発見されている。

第2号竈は、左右両袖に土師器甕を逆位に据え、焚口の横架材として同甕38を用いている。全長1.13m(屋内長0.72m屋外長0.42m)、袖基部幅1.72m、焚口部幅0.58m、燃焼部幅0.43m、煙道部幅0.12mを測る。第2号竈は、屋外に延びた煙道部分のみの残存であるため、詳細は不明である。

住居の掘方では、全体的に土坑状の掘り込みが目立つ。しかし、主柱穴と考えられる柱穴跡が8本含まれ、南東隅部ではP6の古期貯蔵穴が発見されている。全体的には、西壁・南壁側の掘り込みが深い。

覆土では、住居内壁際に焼土を含む堆積土が目立っている。層的には床面直上層の上位、覆土下層に当たる

層位での出土である。しかし、炭化材の出土、床面の被熱変色が認められていないことから、火災住居とは異なると考えられる。

出土遺物は、全体的やや多い。土師器環では黒色土器の占有が多い。図化掲載遺物では、床面直上出土遺物として土師器高坏18～21、同小型甕33・同甕37・39がある。床面直上層出土では、土師器環8・12、同埴16、同鉢24、同小型甕34・35、同球胴甕29、同長胴甕36がある。須恵器では層位を特定できる遺物は無い。未掲載遺物では、土師器環類310点(内黒蓋7・黒色蓋24・同身22・坏蓋17を含む)、土師器甕類1146点がある。

(2) 所見

当該住居は、調査段階に於いて単独住居として認識されている。住居の掘方で露呈された柱穴跡・貯蔵穴により、調査段階とは異なる所見が得られた。

竈の第2号は、第1号の単なる据変えによる所産と考えられている。しかし、住居の掘方で発見された柱穴跡は新田2時代の柱の掘方が認められる。また生活面での柱穴跡を含めると3時期に亘る据変えになる。しかし、住居の掘方で発見されている柱穴跡の配置状態と、生活面での柱穴跡の配置状態には大きな異りがある。

主柱穴の配置は、P2～P5の住居全体を覆う上屋と、南東隅部に偏在するP15・P18・P41・P38と、P10・P7・P8・P9に分別される。そして、後者は、第1号竈とP6で構成される。一辺4.8m前後を規模とする別な住居を推測させる。この推測される住居を19B号住居とした場合、19号住居の東壁・南壁側でほぼ重複する状態になる。これらのことから、当該住居は2軒の重複状態であることが判断される。

また、19号住居の南・西壁は、直線走行する状態と、南西隅部が他の隅部より直角が鋭い、そして、掘方が南西隅部を中心として、南・西壁側で他の部分より深く掘り込まれていることから、この南・西壁を構築基準としたことが窺知される。だが、19B号住居の掘方は不分明とせざるを得ないが、掘方内で発見されている、P24・P35は、推定される19B号住居の隅部に当たることから、双方が19B号住居に伴う掘方の一部である可能性もある。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器類で、坏4・13・14はB1類、1・12はB2類、2・3・5はC1

類、7はC2類、8～11はC3類である。埴16はB1類、甕17はB1類、高坏18～21はB1類、台付甕22・30はB1類、同23はC3類、甕類29・31～37はB1類、同38はA類、同39はD1類、同40・41はB4類である。須恵器では、坏蓋25・坏身27はB1類、坏身26は乗附?、甕類では、43・44がB1類、42は産不詳、45は瓶で太田産である。未掲載遺物では、土師器環B1類93点(前述の内黒土器・黒色土器が含まれる)・B4類1点・C1類142点(外黒土器5点)・C2類74点がある。高坏5点B1類、短頸壺2点(未分類)、鉢3点(未分類)がある。土師器甕では、A類13点、B1類923点、B4類210点、C1類12点がある。

当該19号住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。しかし、19B号住居は不分明である。

20号住居(第60～63図、第29・30表、P.L. 19・67)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の中央部分に占地し、調査区内南端、住居の南西隅部側が調査区外に延びている。このため、完全露呈は出来なかった。位置は、7区D・E-20及び17区D・E-1・2グリッド内に当たる。重複関係は、18号住居・31号住居に切られている。周辺遺構には北東側に19号住居が至近に位置している。

形状は、正方形基調と考えられるが歪みがあり、梯形状を呈する。一部未調査部分があるがおおよその規模が推定できる。規模は、軸長6.4～7.3m、幅7.16mを測る。主軸方位はN-0°-Eを指す。残存深度は63cm程である。数字上は比較的整った正方形形状を連想させるが、実際には歪んだ感じが否めない。

屋内施設では、竈が北壁中央よりやや北東隅部に寄った位置に備えており、東壁にも竈の痕跡が確認できる。貯蔵穴は3か所で発見されている(P1・P7・P8)。P1は、北東隅部の壁下に設けられている。形状は横長方形を呈する。規模は縦0.7m横0.83m深さ0.68m程である。東壁で確認された竈に伴う貯蔵穴(P7)は、南東隅部で発見されているが、南側の一部が調査区外に延びている。規模は縦0.68m、横0.73+am、深さ0.56mである。生活面で調査されているのがP1・P7である。P8は、掘方面で東壁竈の傍らで発見されている。形状

第3章 調査の成果

は横長方形。規模は、縦0.56m、横0.75m、深さ0.60mである。形状は、3基とも竈を正面側とした場合に横長方形になる。この三者の中でP1のみが二重構造の造りになっている。P8は、移設前の東竈以前にP8の右傍らに据えられていた可能性を想起させるが、調査所見では痕跡等は得られていない。現状では、第3番目の竈の存在は明らかではない。

北竈は18号住居の掘削によりほとんど失っている。東竈は煙道側が9号粘土採掘坑に切られている。屋内構造などは、竈移設後破壊され東壁の一部にされている。このため、双方共に竈の詳細は不明である。調査所見では北竈が廃棄段階、東竈は廃棄段階以前として調査所見として判断されている。東竈は、土層断面で住居の壁の立ち上がり確認できる。また、北竈は、掘方がほとんど認められなかった様である。北竈部分の住居の掘方面では、溝状掘り込みM7が発見されている。

主柱穴は3本(P2・P3・P6)が発見されている。未調査部分に南西側の柱穴跡が推定できる(P4)。またP2-P3・P2-P6・P5-P4間には、桁・梁の間を支える補助柱穴跡が住居の掘方面で発見されている(P5・P10・P17・P19)。

壁溝は発見されていない。

住居の掘方は、全体的に浅い。特徴として、P2・P10・P3・P6の4本の構造柱穴跡と壁との間に、それぞれM1-M5の溝状の掘り込みが接続している。この他、M6・M7が北壁直下の前面で発見されている。

出土遺物はやや少ない。掲載遺物では、床面直上が無い。床面直上層出土では土師器環3・4・7、覆土下層では土師器環1・6・8・9・11がある。この他は覆土内の出土であるが、詳細な層位は不明である。未掲載遺物では、土師器環類227点、土師器甕類481点がある。須恵器では、環類8点、高環3点(同一個体)、甕2点、瓶類1点、甕3点がある。

また、この時期としては特殊遺物になる、35砥石(手持ち)があり、36棒状の鉄器1点がある。

(2)所見

当該住居は、完全露呈出来ていないことと、竈が重複構造の破壊・移設に伴う破壊により詳細は不明であることなどから、遺構の所見としては記述内容がない。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器で環4・10

がC3、高環15がD2類である以外は、全てがB1類である。須恵器では小振りの杯蓋16が太田産、坏身では、17がB1類、大身の作り18は太田産と思われる。この18は口径18cmを超える大きさから、長脚2段透の高環の可能性も考慮される。脚部20はB1類、同19は東海地方からの搬入品と思われる。同25は太田産?。23短頸甕はB1類。24瓶口縁部片はB1類。甕類30・31は太田産、同33・34はB1類である。未掲載遺物では、土師器環類では、B1類133点(黒色53点・内黒2点・外黒1点を含む)、C1類17点(内黒1点を含む)・C2類77点。土師器甕類では、A類3点、B1類461点、B4類24点、D2類3点がある。

当該住居の時期は、出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

21号住居(第64～66図、第30・31表、P.L. 19・20・67)

(1)概要

当該住居は、西側台地中央部に占地し、調査区内の南側、17区E・F-3・4グリッド内に位置している。周辺遺構には、北側4m程に29号住居、北東側3m程に33号住居、南東側4m程に40号住居、南西側6.5m程に30号住居が位置している。重複関係の無い単独住居である。

形状は、やや胴が張る正方形を呈する。規模は、軸長5.06m、幅5.34mを測る。主軸方位はN-98°-Wを指す。残存深度は60cm程である。

屋内施設では、竈が東西両壁に備えているが、同時使用ではなく、調査所見では西壁側の竈が廃棄段階で使用され、東壁の竈は廃棄以前に破壊され、壁内に埋設された状態であったことが判明している。貯蔵穴は、新旧3か所で見られている。住居廃棄段階に伴う貯蔵穴はP1、住居の掘方面ではP14・P15が発見されている。

P1は南西隅部の壁下に設けられている。形状は不整形円形を呈する。規模は縦0.45m、横0.50m、深さ0.21m程である。P14は住居掘方面、移設以前の竈の右傍らで見られている。形状は円形を呈する。規模は、縦0.34m、横0.33m、深さ0.26mである。P15は南東隅部の壁下で見られている。形状は円形を呈する。規模は、縦0.25m、横0.32m、深さ0.51mを測る。

主柱穴は8本(P2～P5とP6・P3・P13・P18)

が発見されている。P2～P5の柱穴跡は、調査所見によれば、住居廃棄段階まで使用されていた柱穴跡と判断されている。後者のP6・P3・P13・P18の4本は、住居掘方面で発見されている。前者の柱間は、2.1m×2.4m、後者の柱間は、1.7m～1.9m×2.1mであり、改築後は柱間が広がっている。

壁溝は南壁下東半分を除く壁下で発見されている。

竈は、廃棄段階まで使用されていた西竈の遺存は良好とは言い難く、住居自体の遺存状態とは異なる状態である。遺存状態では、器設部部分の崩壊は言うに及ばないが、右袖側の灰の残存状態からは、右袖が更に延びていた状態を示している。左袖も同様な状況が窺われ、双方共に、10～20cm程度は屋内側に向かい更に長い状態であったことを推測させている。

東壁の旧竈は、煙道部分のみ遺存が認められる。煙道部以外は破壊されている。詳細は不明である。

住居の掘方は、住居の中央部分をドーナツ状に掘り残し、縁辺側を掘り込む顕著な状態を示している。この縁辺側の掘り込みは、床面下15cm前後の深さである。また、ピット状の掘り込みは、上述改築以前の主柱穴が発見されているが、この他にもピット状の掘り込みが目立っている。特に、東竈部分周辺、南東隅部周辺に集中する傾向が認められる。

また北壁から西壁下には逆「L」字状に掘り込みが認められている。

出土遺物は比較的多い。図化掲載遺物では、床面直上出土遺物は土師器高環14。床面直上層出土遺物では、土師器環4・同覆17・18。覆土下層～中層出土遺物では、土師器環6・8である。

未掲載破片土師器では、甕類974点、同環類318点、短頸壺7点、高環4点、鉢1点、甕1点などがある。

(2)所見

住居の掘方で発見されたP6・P3・P13・P18の主柱穴は、廃棄段階の以前に、この4本で上屋を支えていたことが判断される。そして、この状態は、上屋が掛け替えられたことを示している。恐らく、竈もこの上屋の掛け替えに伴い移設されたことが推測される。また、改築時のP2～P3・P4～P5の柱間が2.10m、P2～P5・P3～P4の柱間2.40mであり、双方とも30cmを1単位とする公倍数に成っている。また、改築以前で

の柱間は、P6～P3が1.90m、P13～P18が1.70mで平均1.80m。P6～P18・P3～P13が2.10mである。この双方も公約数30cmが得られる。偶然の可能性もあろうが、これらのことから、柱穴位置の選定には、1単位の公約数＝尺度の存在が示唆される。

一方、調査所見では、改築後のP2～P5の断ち割り調査により「柱痕のはっきりしたものが多く」とされている。この、柱痕が明瞭なことから、柱材は「立ち腐れ」状態であったことが推定され、廃棄された住居がそのままに近い状態で放置されていたことも類推させている。

住居の掘方では、北壁から西壁下の逆「L」字状の掘り込みは、両壁が他の2壁に比較し直線的に構築されていることと、北壁・西壁の北西隅部が鋭角に屈曲することから、この2壁をもって構築基準辺としたことが窺知される。

出土遺物の胎土では、掲載した土師器環1・2・4・5・8・9 B1類、同6・7・10 C3類。同高環14 B1類・13 C1類。土師器甕17・18・20 A類・19 B1類である。須恵器では、高環12・坏蓋15・有蓋瓶16 B1類・甕21・22・24 B1類、23未分類である。未掲載遺物では、甕類では、A類79点、B1類869点、B2類7点、B4類19点である。土師器環類は、A類89点、B1類215点(内黒3点・外黒4点・黒色土器11点を含む)、C1類11点、D2類3点である。須恵器では環H3点太田産、環G1点太田産、坏蓋8点(太田産6点・不明2点)、瓶7点(太田産5点・不明2点)、甕7点(太田産5点・太田産?1点・不明1点)などがある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

22号住居(第67・68図、第31表、P.L. 20・21・67)

(1)概要

当該住居は西側台地の中央部で発見されている。位置は、17区D・E-6・7グリッド内に当たる。周辺遺構では、北側に24・27号住居、南側2m程に7号住居、南西側6m程に29号住居が位置している。重複関係では、23号住居・2号掘立柱建物と切り構築し、3号掘立柱建物と重複するが新旧関係は不明である。

形状は南壁がやや長く歪む梯形状を呈している。規模は、軸長3.54m、幅3.5mを測る。主軸方位はN-92°

—Eを指す。残存深度は42cm程である。

屋内施設では、竈が東壁で南東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴・柱穴跡・壁溝は未発見である。

竈は、南東隅部から60cm程北側の位置に備えている。煙道側から器設部側にかけて天井部が残存している。両袖は短く瘤状である。焚口から煙道部直下まで焼土・炭・灰が広く散布し、右袖の側には粘土が分布している。この粘土は、竈の構築素材と推定される。この双方の状態から、袖の位置・範囲は図示の通りであり、平面的に失われた部分は認められない。

住居の掘方は、住居中央部にドーナツ状に掘削し、北壁の直下には犬走り状の平坦部分が残っている。そして、中央部P1の土坑状の掘り込みの底面直上層には、灰白色シルトブロックを非常に多く含むにぶい黄褐色土を敷設した状態である。また、この敷設は、掘方埋土を切る状態で、底面から床面まで達していることから、床面構築後の段階で行われたことが判断される。南壁下では、南壁を中心に「コ」の字状に掘り込み認められ、反対側に当たる東壁・北壁でも逆位の「コ」の字状の掘り込みが壁面から若干離れた部分で認められる。そして、双方の中心には上述の円形状のP1の掘り込みを介している。

出土遺物は少な目である。図化掲載遺物は、いずれも覆土内出土の破片である。残存率は最大でも30%程度である。また、床面直上及び床面直上層出土遺物の記録は無い。掲載・未掲載共に遺物は全て覆土内の出土である。未掲載土師器では、甕類364点、環類41点である。

(2) 所見

竈の形状は、右袖が煙道部下端から直線的に屋内に延び、東壁面とは直行する状態で据えられている。左袖は、これに反して煙道下端から大きく開く状態で構築されている。この状態から、右袖基準に、各部位の必要幅員を採り竈構築が行われたことが窺知される。天井部の残存状態から、器設部の位置が、袖の屋内端部側に偏在する位置に推定される。このため、燃焼空間は通常の焚口部分に相当させられ、特異な構造とも言い得る。このことに原因し、焚口部の手前側に相当広く焼土・炭・灰が散布させる要因になったと考えられる。調査所見では、この瘤状の袖の要因として、据え置かれた甕を外したことで考えている。掘方は、屋外側に「コ」の字状に突出させた掘り込みと、煙道部の短く舌状に突出させた掘り込み

が連続している。

住居の掘方では、南壁の状態は直線的で、南東隅部・南西隅部は鋭角な交差状態に造られている。だが、東壁・北壁はこの精緻にかけている。前述した住居の掘方の掘削方法は、少人数(2人位か)による結果と思われる。掘削創業者の意思が南壁を中心として、反対側は追従者による結果であろう。これらのことは、南壁を構築基準辺として先行掘削があったことを示している。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・2共にB1類、甕8もB1類である。須恵器では、3～7全てがB1類である。未掲載遺物では、土師器環33点B1類(内黒土器10点を含む)、8点C3類、土師器甕3点A類、362点B1類、2点B4類である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

23号住居(第68・69図、第31表、P.L. 21・67)

(1) 概要

当該住居は西側台地の中央部分に占地している。位置は17区E・F-7グリッド内に当たる。周辺遺構には北側8m程に27号住居、東側近至に2・5号掘立柱建物、南西側7m程に29号住居が位置している。重複関係では、前述22号住居の北西隅部に竈燃焼部の掘方周辺が切られている。

形状は、非常に歪んだ状態で、主軸の計測が困難であった。当該住居の歪みの要因は、北壁側と南壁側での方向角の角差12度により歪みを生じさせている。規模は、軸長4.34m、幅3.84mを測る。主軸方位はN-83°-Eを指す。残存深度は44cm程である。

屋内施設では、竈が東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴は明確ではない。P1は、掘方面で発見されている柱穴状の掘り込みと位置を隔しており、発見部位が南東隅部に当たっている。この発見状況から、このP1を貯蔵穴としておきたい。このP1は、軸を南北に採る楕円形を呈している。規模は、縦0.19m、横0.29m、深さ0.22mを測る。主柱穴は未発見である。竈は、燃焼部の掘方の一部が22号住居の破壊を受けているものの形状は失われてはいない。全体構造は長く屋内側に延びる袖と、幅員の狭い燃焼部と煙道部から構成され、均整の採れた形状をしている。掘方では、煙道部分

が地山面に掘り込まれ、住居掘方より上位に構築している。規模は、全長1.07m(屋内長0.58m、屋外長0.49m)、袖基部幅0.80m、焚口部幅0.83m、燃焼部幅0.31m、煙道部幅0.20mを測る。

住居の掘方は、北壁側で壁沿いに土坑状の掘り込みが認められるのに対して、南壁側はピット状の掘り込みが目立っている。これらのピット状の掘り込みの中で、P5・P6は床面下30cm以上あり、周囲のピットとは異なっている。位置が南壁中央部分の壁寄りであることから、恐らく、この双方は入口施設に伴う施設であることが推定される。他のピットの性格は不分明である。

出土遺物は非常に少ない。図化掲載遺物の全てが覆土内出土の小破片である。未掲載遺物では、土師器環18点(黒色土器10点を含む)、同高環5点、同埴2点、同甕94点である。須恵器では、環蓋1点、瓶1点がある。

(2) 所見

当該住居の歪みは著しい、南北双方の壁は、北壁が直線的に構築され、南壁は北壁側の均整が認められない。そして、この双方の壁の構築状態を掘方から見ると、北壁に沿う状態不整形な土坑状の掘り込みが認められ、この掘り込みが当初の構築基準辺に北壁に有ったことを推定される。また、形状の歪みは、東壁の中央よりやや北側の部分で屈折する状態になっており、この屈点を境に、東壁は南北両壁に向かい直行する状態の壁構造を構築している。そして、北壁側の構築、南壁側の構築、東壁側の構築のそれぞれの段階に指向方向が異なったことに起因し、竈を備える壁の構築段階に至り、方向修正を行ったことが要因と推断される。だが、南東隅部が22号住居の擾乱により詳細な状況が不分明であり、東壁と南壁の関係に不明な点が残る。これらのことから、当該住居の構築過程が頻推出来、竈の方向は、住居の指向方向を決定させるだけの要因として存在することが指摘出来、竈の構築は、東壁の構築後に行われたことが判明する。この掘削の工程は、北壁を先行掘削し、その後東壁側が掘削(竈位置の選定)され、西壁側は最後に掘削されたことが判断される。かかる状況から、掘削に関わる人員は1～3人程度であったことが頻推される。

出土遺物の胎土では、土師器環B1類4点・C1類1点・C3類3点。同高環B1類3点・C3類2点、同埴C1類2点、同甕類A類2点・B1類2点がある。須

恵器では、環蓋1点・瓶1点共に太田産である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

24号住居(第69・70図、第31・32表、P.L. 21・22)

(1) 概要

当該住居は西側台地中央部に占地している。位置は、調査区の北端で17区C・D-9・10グリッド内に当たる。周辺遺構には、東側9m程に4号住居、西側2m程に27号住居、南側4m程に5号掘立柱建物位置している。重複関係では、4号掘立柱建物が当該住居を切っている。

形状は、平行四辺形気味にやや歪んだ正方形基調である。規模は、軸長4.63m、幅4.76mを測る。主軸方位はN-78°-Eを指す。残存深度は56cm程である。

屋内施設では、竈が東壁中央に備えている。貯蔵穴(P1)は、隅部の壁下に設けられている。形状は横長方形を呈する。規模は縦0.53m、横0.68m、深さ0.66m程である。主柱穴は4本(P2～P5)、屋内中心側に若干寄った位置に備えている。

竈は、東壁の中央に備え、左袖を中軸上に備えている。遺存状態は良く、煙道前縁部分の天井部が残存するが、器設部は既に失われていると判断される。袖は、長く屋内側に延びている。煙道部は急傾斜で屋外に延びている。掘方は壁下に土坑状のP18・P19が発見されているが、竈に直接的には関わりないと考えられる。煙道部分は壁の中位から舌状で屋外に突出する掘方が認められる。

住居の掘方は、北・西壁側直下で小単位の土坑状の掘り込みが認められるが、北壁下側では土坑状の掘り込みが連続した状態で間断無く発見されている。また、竈部分には、円形状の掘り込み(P18)が東壁の中心部分の直下で認められている。

覆土の状態は、全体的に分層が細かではない。この中で2層土は、ローム粒・ロームブロックを相当量含有していることから、人為層として理解される。そして、一部は床面直上に達していることから、3層土を含め、住居の廃棄後早い段階で埋没していることが窺える。

出土遺物は少ない。図化掲載した遺物はいずれも破片で、細片も多い。掲載遺物で床面直上出土の個体は無い。床面直上層出土には1土師器環・4高環がある。3は覆土下層での出土である。未掲載遺物では、土師器環53点、

同高環7点、同埴1点、同甕114点。須恵器では高環1点がある。

(2) 所見

竈は、左袖を東壁の中心位置で、中軸線上に当たっている。左袖は、壁に向かい直角に据え、右袖は、左袖から必要な幅員を採り、右流れ状態に据えている。袖の右流れになる部分から奥壁側は、左袖と平行する幅員を有していることから、この右流れになる部分辺りまでを焚口と燃焼部とし、同時に、器設部が推定される。これらのことから、右袖側は、左袖内側を基準にして幅員を採り竈の構築が行われたことが判断される。また、土層断面から、底面の改修が行われたことが窺える。

住居の掘方では、北・西壁直下の土坑状の掘り込みが認められる部分、特に北壁側は、土坑状の掘り込みが連続し、壁も直線的である。しかし、西壁は歪んで、直線的な造りは東壁にも認められ、南壁は最も直線的な造りではない。そして、北壁の両隅部は鋭角に近い。これらのことから、北壁を構築基準辺とし、東壁と逆「L」の字状の基準辺を構成した後、西壁・南壁の掘削を行っていることが窺知される。住居の平面形状が歪む原因は、この構築方法に原因している。

主柱穴4本(P2～P5)の内北壁側P5・P4は、壁下端から1.22m・1.29mで、P2・P3の設置位置より屋内側に入り込んでいる。この位置での主柱穴の配置は、通有、6世紀中頃までの住居に見られる配置部位である。一方、P2～P4の東壁・南壁・西壁下端からの距離は1.03～1.15mでやや壁側に接近している。壁側への接近傾向は、6世紀後半頃から認められる。この状況は双方の6世紀中頃～6世紀後半頃の過渡期的な状態なのかもしれない。

出土物の胎土では、図化掲載した土師器環1・3・5はB1類、2・4はC3類、同甕6はA類、7はB1類である。須恵器では、8が太田産、9はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類23点(内黒6点を含む)、C1類1点、C3類23点、同高環B1類6点、C3類1点、同埴B1類1点、土師器甕A類1点、B1類112点、B4類1点がある。須恵器では太田産の短頸壺片1点がある。

当該住居の時期は、住居・竈の形状様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

25号住居(第71～74図、第32・33表、P.L. 22・67～70)

(1) 概要

当該住居は、西側台地の中央やや西寄りに占地している。調査区内の北端部、17区E・F-11グリッド内に位置している。周辺遺構では、北西2m程に26号住居、南東側2m程に25号住居・4号掘立柱建物が位置している。重複関係は27号住居を切り構築している。

形状は正方形基調に採り、規模は、軸長3.84m、幅3.81mを測る。主軸方位はN-86°-Eを指す。残存深度は55cm程である。

屋内施設では、竈が東壁中央に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形を呈する。規模は縦0.72m、横0.74m、深さ0.78m程である。主柱穴は未発見である。壁溝は北西隅部で部分的に発見されている。

竈は、東壁中央部に備え、左袖を東壁の中心に据えている。前述の24号住居と同様である。焚口から煙道下端までの形状は、軸線上でイチジク形をした対称形で均整が取れている。焚口部は、軸方向の土層断面にポイントA^{*}際まで浅く落ち込んでいる状態が観察できる。この浅い落ち込みが平面図上では未記録(写真撮影記録にもない)であるが、焚口部での諸作業範囲として捉えることも出来る。この範囲を含めるのが焚口部の範囲である。左右両袖の端部、焚口部分には、土師器長甕を逆位に据えている(23・27)。燃焼部の最大幅員部分には、坏部を欠損する高環脚部(13)を左袖際に据えている。この高環が支脚と判断される。

住居の掘方では、南壁・西壁下の横長の土坑状の掘り込みが認められている。一方、北壁側では、不整形な土坑状の掘り込みが認められている。また、壁の状態では、北壁が最も直線的な造りになっている。

出土物は住居規模が小規模であることからやはり少ない。図化掲載遺物では、特に竈・貯蔵穴で出土した個体が際立っている。床面直上層出土遺物では、土師器環1・同甕21・23・25・28、同高環14、須恵器高環脚部18があり、覆土層出土遺物には、土師器環3・4がある。竈では、左右両袖に据えられた長甕(23・27)、焚口・燃焼部で出土した長甕(22・24)がある。貯蔵穴部分では、土師器環4点(6～8・10)、有孔鉢1点(16)、小型甕1

点(20)、球胴甕1点(29)がある。この貯蔵穴部分での出土状態には3様が認められる。29は甕右傍らの床面から貯蔵穴側に倒れ込む状態。20・16・7・8の4点はほぼ貯蔵穴に正位で潜り込む状態。6・10の2点は覆土下層で出土している。この3様の出土状況の中でも、4点がほぼ同位で出土している点が注意される。

未掲載遺物では、土師器環89点、同高環1点、同短頸壺3点・同甕187点があり、須恵器では、坏蓋1点・高環1点がある。

(2) 所見

竈内支脚の高環の高さは24cm程を計る。土層断面C-C'から、推定される天井部分の高さは25cm前後である。この数値は、高環の高さにほぼ等しい。高環に架けられた主体物は、底面から24cm、推定される天井までの高さ25cm前後の限られた条件から、恐らく小型甕程の小形器種と推定される。また、支脚位置が左側に寄った位置であることは、右側に余分な空間が生ずることから、この空間にも長巻を据える併架式の構造であったことが推定される。

貯蔵穴周辺での遺物状況には、何らかの施設が存在が想定され、貯蔵穴下層での6・10の出土状況は、上位の4点(6・8・10)と同時期に落ち込んだ遺物であることが類推出来、29が倒れ込む状態であるのも、やはり4点が潜り込んだ時と同時に倒れ込んだことが想起される。この廃棄後の貯蔵穴内に潜り込む状況は、貯蔵穴上面には何らかの施設が施されていたことを示唆しており、有機質(板材など)の蓋状の設置されていたことが類推される。

覆土は、1層土が大半を占めているが、1層土は上下での分層が可能である(写真記録で確認)。上層は層厚12cm程で、白色軽石が多い黒褐色土である。下層は層厚22cm程で暗褐色土にロームブロック・小塊状ロームが夾雑している。この暗褐色土が覆土の大半を占めている。そして、ロームブロックを夾雑することから、人為層の可能性が推測され、住居の廃棄から埋没までの時間が短かった可能性も示唆される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1～3・7・9・10はB1類、4はC1類、6はC2類、8はC3類、11はD2類である。同高環では、12・13がD1類である。同有孔鉢15・16はB1類。同甕類では25・26は

A類、20～24・29・30はB1類、27・28はB4類である。須恵器では、3点坏蓋・高環はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類69点、C3類20点、同高環C3類1点、同短頸壺B2類2点・C3類1点。同甕A類2点・B1類185点である。須恵器では、太田産坏蓋1点、B1類高環1点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

26号住居(第74～76図、第33表、P.L. 23・70)

(1) 概要

当該住居は西側台地のやや西寄りに占地する。位置は、調査区内北側で17区F・G-11・12グリッド内に当たる。周辺遺構には、南東側2m程に25号住居、南側5m程に27号住居、西側9m程に48号住居が位置している。重複関係は、41・89号土坑に切られている。住居の北東隅部は調査区外に延びている。このため、住居は完掘出来なかった。

形状は整った正方形状を呈する。規模は、軸長5.85m、幅5.82mを測る。主軸方位はN-74°-Eを指す。残存深度は57cm程である。

屋内施設では、竈が東壁の北東隅部寄りに備えている。しかし、41号土坑に攪乱され、右袖が痕跡程度にしか残存していない。貯蔵穴(P1)は、調査所見で南東隅部寄りの東壁直下のP1。主柱穴はP2～P5の4本である。壁溝は、四壁直下に部分的な不連続状態で発見されている。

竈は、41号土坑の攪乱により詳細は不明である。辛うじて計測できるのは次の通りである。右袖長0.73m、焚口部幅0.44m、燃焼部幅0.42mが計測される。貯蔵穴(P1)は、東壁直下、南東隅部から東壁の中央寄りに設けられている。形状は横長方形を呈する。規模は縦0.5m、横0.63m、深さ0.12m程である。主柱穴は、P4以外住居の掘り方で発見されている。調査所見では、床面精査を実施しても床面上では確認出来ていない。

掘方は、全体に床面下に認められる。記録図には、部分的に土坑状の掘り込み(P11～P17など)が認められる。だが、個別的には具体的な目的を持つての施設とは思われない。写真記録からは、図示された状態より、より複雑な状況が看取される。特に、南西側の掘り込みが

第3章 調査の成果

顕著である。詳細は不明と言わざるを得ない。壁溝の掘方は、南壁・東壁直下で発見されている。

出土遺物は、規模に比較すると少ない。図化掲載の遺物で、床面直上出土は土師器杯6が1点、床面直上層出土では土師器高杯8が1点、円盤状土製品14が1点、覆土下層では須恵器鉢10が1点ある。未掲載遺物では、土師器杯37点、同費66点があるが、須恵器の未掲載は無い。特筆される遺物として、滑石製勾玉(15)がある。頭部の一部を欠損している。孔の左右には、玉類を並べた際に生じたであろう痕跡が顕著に認められる。

(2) 所見

貯蔵穴は竈と不即不離の関係にあることが発見された住居で確認できる。当該の貯蔵穴(P1)は、竈と距離を隔てている。竈自体の配置位置が他の住居とは異なる配置状態でもある。調査所見で貯蔵穴とされたP1は、床面上で明確に落ち込みとして確認されているが、写真記録に残された土層断面からは、ロームブロック・黒色土ブロック・焼土ブロックなどが含まれており、人為的に埋設され可能性が色濃い。また、深度も他例とは異なり30～50cm程浅い。これらのことから、調査所見で貯蔵穴とされたP1は、本来の貯蔵穴とは異なる別な施設ないし住居掘方の一部ではないかと思われる。整理所見としては、竈の左側、北東隅部側の未調査部分に貯蔵穴の存在余地を考慮しておきたい。

主柱穴は均整の取れた配置状態で、住居の中心位置よりやや外側寄りに配置している。壁下端間の距離と柱位置での配置比率は、1:2.4:1程度である。柱位置がやや壁寄りになっていることから、上層構造も居住空間の利用にも変化が現れたことも想起される。また、南壁中央直下で発見されたP6～P8の3本の柱穴跡は、配置位置的に出入口部の施設に伴う柱穴跡と考えられる。特に、P6・P8は一对を成すものと考えられる。P7は後補等に伴うと思われる。

覆土の状態は、41・89号土坑の擾乱があるが、特徴的な状態が認められる。土層断面2・3層は褐色質の発色が強く、床面直上13・14層でも同様である。住居中央部の8～10層は最も顕著な層で、ロームブロックを主体とする土層である。この10層と13層との間層11・12層は、黒褐色土と暗灰黄色土の堆積である。この状況は、住居が人為による埋設であることが判断される。そして、短

時間の間に埋設平夷された可能性が推測される。

住居の掘方では、南壁・東壁直下で壁溝が発見されている。この南壁の走行は直線的であり東西隅部は鋭い。そして、土坑状の掘り込みが南側に集中傾向が認められることから、南壁を構築基準とし、東壁と共に構築の基準としたことが窺われる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器杯1～4・7はB1類、同5・6はC3類、同高杯8・9はB1類、同費12・13はB1類、土製品14もB1類である。須恵器では、鉢10が太田産、坏身11が乗附産と考えられる。未掲載遺物では、土師器杯B1類10点(黒色土器蓋2点・身3点を含む)、同杯C3類27点(黒色土器身1点・体部2点を含む)、同短頸壺B1類1点、同費類B1類66点のみである。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

27号住居(第76～79図、第33・34表、P.L. 23・70・71)

(1) 概要

当該住居は西側台地のやや西寄りに占地し、調査区の北側に位置し、17区E～G-9～11グリッド内に当たる。周辺遺構には、北側3m程に26号住居、東側3m程には24号住居と4号掘立柱建物、南側には22・23号住居と5号掘立柱建物、西側近所に43号住居と2号掘立柱建物が位置している。重複関係では、当該住居を25号住居が切っている。

形状は均整の採れた横長方形(長方形率0.9)を呈している。規模は、軸長7.85m、軸幅8.73mを測る。主軸方位はN-38°-Wを指す。残存深度は28cm程である。

屋内施設では、竈は認められないが、床面上北西壁寄りに炉跡(床炉)が発見されている。規模は、軸長0.6m幅0.5mを測る。主軸方位はN-85°-Wを指す。貯蔵穴(P1)は、東隅部でP3に寄った位置で発見されている。形状は正方形を呈する。規模は縦0.90m、横0.93m、深さ0.51m程である。主柱穴はP2～P5の4本が発見されている。いずれの柱穴跡も深度が～90cmを超えP4以外は～1mに近い。壁溝は未発見である。

当該住居は、炉跡を備え、主軸方向も調査区内で発見されている住居とは異なり対角線方向に東西南北を採つ

ている。類似する方向性を有する住居としては唯一48号住居が上げられるが、遺存状態が極めて悪い。

貯蔵穴(P1)は、一辺90cm程の正方形状を呈している。深度は51cmである。東隅部とP3に囲まれる状態で設置されている。

住居の掘方では、全体に平均的床面から掘り下がる。掘り方では、土坑状の掘り込み、溝状の掘り込み、柱穴跡が発見されている。特に注意されるのは、-40cm以上深さの柱穴跡(P6・P13・P21・P24・P25・P27・P30)の多さと、-30cm前後の深さの柱穴跡(P11・P20・P22・P33)が多い点である。これらの柱穴跡の特徴として口径が小さい点である。

また、北東壁と北西壁下では壁溝が発見されている。特に北東壁下では確実に及んでいてと考えられ、M1～M3が接続している。

出土遺物は非常に少ない。図化掲載遺物で床面直上出土遺物は無い。床面直上層出土遺物として、2土師器碗、同高環4・12・14、同埴18、同裏20・21がある。覆土下層では9高環、19埴。覆土中層10高環、16短頸壺がある。未掲載遺物では、土師器環6点(黒色土器3点を含む)、同高環15点(赤色塗彩6点を含む)、同短頸壺4点、同埴4点、同裏類66点である。

(2) 所見

炉跡は、地床材で長軸を東西方向に採っている。規模は60cm×50cmで、橙色～黄橙色に酸化焙変色している。床面上では、小動物類・草木類の顕著な攪乱により血状に浅く窪んだ状態の錯覚を起こさせている(調査所見)。しかし、床面と同位で酸化焙変色が認められる。写真記録の土層断面でも、酸化焙変色が下位に向かい弱くなり、地山土との差異が無くなることから、施設設備を伴わない床面と同位の跡であることを整理所見とした。

主柱穴4本は、壁に非常に寄った位置に備えられている。住居内寸(壁下端間の距離)での壁一柱:柱間の比率は、軸方向で概1:4:1、軸直行方向で1:3.4:1程度である。この数値からは、柱間長が異常に長いことが判断される。一方、四本の柱に囲まれる範囲は、P2-P3・P4-P5が4.85m、P2-P5・P3-P4が5.75×5.78mで、公約数24cmで約20:24=5:6である。これらの数値から、柱の位置決定には計画的な設計

が存在した可能性がある。

また、住居の壁下端での住居規模の内寸は、大体7.2m×8.4mであり、上記の公約数24cmで除けると、30:35=6:7の数値が得られる。住居の規模をどこで計測するかが大きな問題になるが、一例として留めておく。

掘り方で発見された柱穴跡の中で、P13・P21・P27・P30・P33・P6がP2を起点として、P2～P5の内側に横長方形の区画が形成される。これらP2を含める7本の柱穴跡は、P2～P5の四本主柱の補助的な支えであったことが窺われる。そして、中央部で発見されている、P24・P25、特にP25はP2側から斜位に掘られている。恐らく、補強の7本の柱中で特にP2が負っていた北側全体の補強として掘えられた可能性が考えられ、P24は、上屋の中央部を支えた可能性が考えられる。

当該住居からの出土遺物の量が極端に少なかった。この要因は、当該期の段階での集落構成が途上の段階か、周辺遺構がほとんど無く、生活の痕跡がほとんど無かったことに原因するものと考えられ、故に廃棄される土器類の絶対量が無かったことに原因していると考えられる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器全てがB1類である。これらの中で、高環の多くに赤色塗彩がされている。

調査区内での赤色塗彩土師器は目立っている。この赤色塗彩土師器は、B類胎土を使用し、色調が白味を強く帯びる灰黄色を呈している。出土器種では、高環・埴が主体である。この赤色塗彩を施す土師器を伴う時期の住居は、当該住居と60号住居の2基が考えられる。しかし、この2基の住居出土の赤色塗彩土師器の量を凌駕する出土量が調査区内から出土していることは、周囲に同時期の住居の存在を示唆しているのと、屋外での使用も相当量有ったことも示唆していると考えられる。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、5世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

28号住居(第80～83図、第34・35表、P.L. 23・24・71～74)

(1) 概要

当該住居は西側台地の西寄りで占地している。位置は、調査区内北端17区G・H-5・6グリッド内に当たる。

第3章 調査の成果

重複関係は東壁が29号住居を切っている。周辺遺構は、北側至近の位置に42号住居、西側に38号住居が位置し、南側3m程に1号竪穴状遺構が位置している。

形状は縦長方形である。4壁共に平行・直行する均整の採れた形状を呈している。規模は、軸長4.18m、幅3.60mを測る。主軸方位はN-77°-Wを指す。残存深度は73cm程である。

屋内施設では、竈が西壁中央よりやや南西隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南西隅部の壁下に設けられている。形状は楕円形を呈する。規模は縦0.49m、横0.42m、深さ0.5m程である。主柱穴・壁溝は未発見である。

竈は遺存状態が良く煙道部の天井が残存している。左右の軸は長く屋内側に突出し、先端側に長巻を左(22)右(20)共に据えている。焚口部では2個体の長巻(19・21)が横位の状態で出土している。恐らく、焚口天井に横架された補強材と考えられる。燃焼部は袋状に広がり、器設部の位置に想定できる。煙道部は細く屋外に延び垂直気味に立ち上がっている。規模は、全長1.2m(屋内長0.63m、屋外長0.57m)、袖基部幅1.12m、焚口部幅0.43m、燃焼部幅0.34m、煙道部幅0.1mを測る。掘方は、外郭の掘り込みと、中央部分に縦方向の掘り込みの二重構造的に見られる。中軸方向の土層断面には、廃棄段階以前の竈の底面と奥壁面が看取される。このことから、少なくとも3回3面の掘り込みの存在が確実であることから、住居構築時を初回掘り込みとして捉えれば、改築が2回行われたことが確認できる。これが二重構造的に見られる要因であろう。

住居の掘方は、西壁以外の壁直下に、若干の犬走り状の平坦部分を残し、土坑状の掘り込みが連続する状態で認められる。いずれも、床面下15～20cmに底面が発見されている。中央部分は、P6～8の3基の柱穴跡状の掘り込みが認められるが、いずれも深度は10～18cmで浅い。性格は不明である。中央部分ではこの柱穴跡以外にほとんど認められない。

出土遺物の量は並程度である。図化掲載では、床面直上出土遺物10有孔鉢・13台付短頸壺・17甕があり、竈部19～22長巻である。床面直上層出土遺物では、3環、11櫃、16・23～25甕がある。他は覆土下層からの出土である。特に、住居中央部の灰白色シルト堆積部に遺

物がやや集中する傾向が写真記録から窺える。この粘土は、床面直上に堆積している。土層断面の11層に当たる。灰白色シルトは、竈の構築材として広く当該遺跡内の住居で見られている。地山ローム土の還元色で、基本土層のⅧ層土に当たる。

未掲載遺物の土器では、坏45点(内黒土器10を含む)、高坏20点、甕301点、須恵器では、東海産の長脚2段透し高坏片が出土している。焼締めにより緻密硬質で、自然軸を内外面にかぶる暗灰色を呈するすこぶる良品である。

(2)所見

南壁面直下には、P2と意図不明な部分がある(土層断面位置とP2の間)。これは、P3(-5cm)を南壁と馬蹄形状の突帯が囲んでいる。この部分を含めP2は、屋内配置の状況から出入口に伴う施設と考えられる。

竈は、右袖内面側の造りが直線的であり構築基準辺にしている。左袖は右袖内面から必要幅員を採り構築している。

住居の掘方は、壁治いの掘り込みが特徴的であり、北壁面下端と東壁面下端が直線的に構築されている。このことから、住居構築時の構築基準面が双方ない北壁面であることが判断される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土器器環1・6はB1類、2・4・5はC1類、高坏7～9はB1類、有孔鉢10はB1類・櫃11はB1類、台付短頸壺12はB2類、壺14はC1類、壺15はB1類、小型甕16はB1類、甕類では17・18・22・24・26・27がB1類・19・20・23・25はB2類・21はB4類である。須恵器では12がB1類である。未掲載遺物では、土器器環B1類20点(内黒土器10点を含む)・C1類17点・C3類8点。同高坏B1類17点・C3類3点。甕類A類54点、B1類247点である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

29号住居(第84～87図、第35・36表、P.L. 24・25・74・75)

(1)概要

当該住居は西側台地の西寄りに占地する。位置は17区F～H-5・6グリッド内に当たる。重複関係では、28号住居に南壁の南西隅部周辺部分を切られている。周辺

遺構には、北側7m程に1号掘立柱建物、北東側5m程に23・22号住居、東側から南東隅部側にかけて7・8・33号住居、南南東5m程に21号住居、西側3m程に42号住居が位置している。

形状は、正方形を呈する。部分的な形状では、北壁が直線的に造られているが、東壁と南壁の南東隅部周辺は丸みを帯びた造りで、隅丸状を呈している。西壁は直線的に造られているが、北壁とは鈍角で交わっている。このため、住居全体は均整の採れた状態ではなく、やや歪んだ形状に見られる。規模は、軸長6.80m、幅6.52mを測る。主軸方位はN-95°-Eを指す。残存深度は68cm程である。

屋内施設では、竈が東壁中央に備えている。貯蔵穴(P1)は、北東隅部よりやや竈寄りの壁下に設けられている。形状は隅丸横長方形を呈する。規模は縦0.6m、横0.74m、深さ0.55m程である。底面から1~2cm遊離して土師器環1が出土している。主柱穴は4本(P2~P5)が発見されている。壁溝は、南壁及び南東隅部周辺、西壁・東壁の一部で断続的な状態で発見されている。

竈は、東壁の中心で、竈の中心軸に住居の中軸線が合致している。図上ではやや北側に寄った位置に感じるが、計測値では壁の中心と竈の中心が一致している。遺存状態も良好で、煙道部天井が残存する。袖は屋内側に突出し、煙道部分が屋外に突出する。形状は軸を中心として対称形に造られ均整が取れている。支脚等の付帯設備は未発見である。規模は、全長1.31m(屋内長0.69m、屋外長0.62m)、袖基部幅1.24m、焚口部幅0.60m、燃焼部幅0.32m、煙道部幅0.19mを測る。

住居の掘方は、西壁下の中央で左右対称状態に「L」の字状・逆「L」の字状に掘り込みが認められ、東壁下でも逆「L」の字状に掘り込みが壁下で認められる。住居内中央部では、深さ10~20cmの柱穴様の掘り込みが多く、小規模な土坑状の掘り込みも目立っている。

出土遺物は住居規模に相応してやや多い。図化掲載遺物で床面直上出土遺物は無かった。床面直上層では、15・18土師器環・35・37土師器裏がある。覆土内下層出土は、6~8土師器環以外は覆土内中层より上位か覆土内での出土である。未掲載遺物の土師器では、土師器環255点、同高環28点、鉢類10点、甕類740点である。

(2) 所見

竈の構造は、左右の袖の内側から煙道方向に直線的に伸びる構造で、燃焼部・器設部での幅員の増加は認められない。そして、燃焼部の幅は、0.32mで非常に狭い造りになっている。また、燃焼空間の奥行きは0.6mで、全体に細長い造りになっている。この構造の特徴から、器設部は併架式の構造ではなく、縦列型の構造であることが推定される。

住居の掘方は、「L」・逆「L」の字状状態の壁際の掘り込みが目立ち、北壁側は最も掘り込み規模が大きい。そして、北壁は直線的な造りになっており、北東隅部・南西隅部の角は鋭い。この状態から、北壁は構築基準辺として、掘削が成されたことが判断される。また、主柱穴は、北壁側のP4・P5は北壁に対して平行する配置を採り、P2・P3もほぼ南壁に平行する配置に成っている。しかし、P3・P4は西壁に対して平行する配置にならず、また同様に、東壁とP2・P5の関係も平行配置に成らず、若干ずれている。この壁の方向と、主柱穴の並びとで生じているずれの原因は、主柱穴の配置位置の決定に、北壁の影響が色濃く現れている。すなわち、北壁が構築基準辺として掘削が行われ、住居の掘削後、北壁に平行するP4・P5(柱間3.6m)を設定し、さらに3.6mの距離を置き、南壁に平行するP2・P3を設定したことが推定される。これにより、主柱穴が北壁との位置関係で整合性が認められるものの、東・西壁とは不整合な状態に陥っている原因であろう。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1~3・10・13~18・19・21はB1類、11・12はC1類、4~9・20はC3類、同高環23・24はB1類、同小型裏31はB2類、裏類33はA類、30・35~37はB1類、34はB2類である。須恵器類は25・28が太田産、他はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類は153点(黒色土師器87点・内黒土器7点を含む)、C1類は32点、C3類は70点(内黒土器13点を含む)。同高環B1類が16点、C3類12点。同鉢類B1類が10点。同甕類B1類が395点、B2類3点、B3類335点、B4類7点である。須恵器では、坯身1点・体部4点が太田産。同高環4点太田産・1点未分類。同甕2点太田産。瓶3点太田産。甕3点太田産である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

30号住居(第88～90図、第36・37表、P.L. 25・75)

(1)概要

当該住居は、西側台地の西寄りに占地する。調査区南端に位置し、17区G・H-2・3グリッド内に当たる。南西隅部が調査区外に延びる状態で発見されている。このため、住居の南西隅部は未調査である。重複する遺構は無く単独住居である。周辺遺構には、北側10m程に29号住居、同5m程に1号竪穴状遺構、北東7m程に21号住居、東側には4号溝・20・22号土坑・40号住居・20号住居、南側至近の位置に39号住居が位置している。

形状は、小型の横長形状を呈する。規模は、軸長3.38m、幅4.36mを測る。主軸方位はN-77°-Eを指す。残存深度は73cm程である。竈は東壁の南東隅部寄りに備えている。貯蔵穴(P1)は、東壁の直下南東隅部に寄った位置、竈の右傍らに備えている。主柱穴は未発見である。南壁及び貯蔵穴周囲以外の壁下には壁溝が発見されている。

竈は、残存状態が良好で、器設部の後ろから煙道部にかけて天井部が残存している。位置は東壁の南東隅部寄りに備えられている。左右の両袖は、縮状で屋内側に突出し、先端部分に礎を据えている。このため、焚口部と燃焼部は住居の壁際まで寄った位置になる。焚口部では、土師器甕24が焚口底面に押し潰された状態で出土している。煙道部は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。掘方は、屋外側に「コ」の字状に突出させている。左袖の直下には、血状に窪んだ掘り込みが出土している。この掘り込みは、袖石の据え方と考えられる。規模は、全長1.05m(屋内長0.50m、屋外長0.55m)、袖基部幅1.15m、焚口部幅0.38m、燃焼部幅0.4m、煙道部幅0.20mを測る。

貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形を呈する。規模は縦0.52m、横0.58m、深さ0.56m程である。形状は二重構造になっている。

住居の掘方は、西壁直下で壁沿いに土坑状の掘り込みが認められているが、他の部分ではほとんど認められない状態である。この他、貯蔵穴と重複した土坑状の掘り込み(P2)が認められている。他方、北壁直下には壁溝が発見されている。また、P5～P7の小穴が発見されているが性格等は不明である。

出土遺物は、住居の規模に比較するとやや多い。図化掲載資料で床面直上遺物は、前述の竈穴底面から出土

した土師器甕1点のみで、床面直上層出土遺物は無い。図化掲載資料のほとんどは覆土内出土遺物である。未掲載遺物では、土師器環361点・同高環3点(脚部)・同甕類349点・同鉢8点・同甌1点である。須恵器では、環蓋2点・高環2点・高盤3点・甕1点・提瓶3点・横瓶1点・瓶類8点(耳付小型壺1点を含む)・甕類4点などがある。

(2)所見

竈の右内壁面は、直線の構造であり、左壁面は各部位の必要幅員を採り構築されている。この状態から、竈の構築は、右袖側を基準にしていることが看取され、右袖内壁面を構築基準面として捉えることが出来る。また、掘方が屋外に大きく「コ」の字状に掘り込んでいるのに対して、煙道・燃焼空間の規模は大きく萎縮した状態である。この不均衡な状態と、左袖下の礎等の掘り込みだけの存在から、竈は改築されている可能性が強い。ただ、土層断面等では具体的に確認出来ない。

住居の掘方は、西壁直下のP3・P4と西・北・東壁下の壁溝の状況から、西壁を構築基準面として判断される。

また、西壁は直線的に掘削されているが、北壁は直線的な掘削が行われてはいない。これらのことから、構築段階の基準は北壁を基準にしていたことが判断される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環3～7・11～13はB1類、1はC1類、2・10はD2類、9はE類である。同甌14はB1類。同高環15はB1類。同鉢23はB1類。同甕24はB1類である。須恵器では、環蓋16は太田産、坯身17は東海地方からの搬入品。高環18は太田産か。甕20・21はB1類。瓶類19・22はB1類。甕25はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類165点(外黒土器5点・黒色土器34点を含む)、同B2類2点、同C1類58点、C3類120点。同高環B1類3点。同鉢8点。甕類では、A類10点、B1類335点、B4類3点、D2類1点がある。須恵器では、環蓋2点・高環2点・甕1点・提瓶3点・横瓶1点・瓶類7点・甕2点が太田産。高盤3点・甕2点が太田産と思われる。耳付小型壺が産地不詳である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀中頃には廃棄されたことが推定出来る。

31号住居(第90～94図、第37・38表、P.L. 25・26・75～77)

(1) 概要

当該住居は西側台地部分の中央部に占地し、調査区の南端に位置し、7区C・D-1、17区C・D-20グリッド内に当たる。住居の対角線方向の南側半分が調査区外に延びている。このため、住居は完掘出来なかった。重複関係では、9号粘土採掘坑に切られ、20号住居を切っている。また、東側3m程に20号住居が位置している。周辺遺構には、北側4m程に18・19号住居、東側3.5m程に17号住居が位置している。

形状は、南半部分が未調査であるのと、9号粘土採掘坑が重複するため、住居としての露呈状態は不良である。恐らく、一辺5m程の正方形基調であることは推定出来る。

推定規模は、軸長5.01m、幅4.72+ α mを測る。主軸方位はおおよそN-75°-Eを指す。残存深度は70cm程である。

屋内施設では、竈が東壁に備えているが、詳細な位置関係は不明である。貯蔵穴(P1)は、住居の掘方面で発見されたP1が該当すると考えられる。位置は、東壁南端部分で一部調査区外に延びている。形状は円形を呈する。規模は径0.35m、深さ0.36m程である。主柱穴及び壁溝は未発見である。

竈は、残存状態が良好で、煙道部の天井部分が残存している。規模は、全長1.08m(屋内長0.73m屋外長0.35m)、袖基部幅1.04m、焚口部幅0.51m、燃燒部幅0.48m、煙道部幅0.12mを測る。

構造は、左右の両袖は長く屋内側に延び、左袖先端には土師器長裏(31)、右袖には小振りの土師器裏(33)が据えられている。焚口部では、長裏2個体(30・32)が横架されたまま崩落した状態で出土している。燃燒部は幅広の造りで、煙道部寄りには、坏部を欠損する高環(19)を左壁寄りに据え支脚としている。そして、高環の前部には長裏(29)が、口縁部を右袖側にして転倒した状態で出土している。恐らく、この長裏は、架けられた状態で廃棄されたものと考えられる。燃燒部最奥部は、煙道に向かい窄む状態になっている。

竈の掘方は、住居掘方底面と同位面に竈掘方底面を設けている。底面には部分的な凹凸状の掘り込みが認めら

れるが、掘削底面の基本は住居掘方底面の揃えたことが看取される。他には、独立した竈の掘方が認められない。

住居の掘方は、竈前面から北東隅部にかけて土坑状の連接状態とも溝状とも言える掘り込みが認められるが、北東隅部部分周辺には9号粘土採掘坑が重複し破壊しているため不明な点が多い。だが、住居の中央部側は掘り込みが浅いことから、東壁直下部分側だけに集中しているのかもしれない。全体形状に不明な点が多い。

出土遺物はやや多めである。上述竈の構築材に転用された土器類の他に、竈周辺からは、住居廃棄直前段階の状況のままで出土している。土師器環では、1～3・6・7、同短頸直27、同小型裏28、同脚付小型裏26、同轆25などいずれも床面直上での出土である。未掲載遺物では、土師器環294点、同埴1点、同短頸直9点、同鉢類8点、同裏類77点がある。須恵器では、14・21号住居出土遺物と同一個体2点ある。未掲載資料であるが、搬入品で造りの非常に薄い個体(器厚2～3mm)である。器形は、丸底から内湾する口縁が立ち上がる。鉄鉢の写似的な器形に類するが異種である。この他裏片が数点ある。

(2) 所見

住居の掘方は、東壁直下の土坑状の掘り込みが直線的な壁面構成を成している。住居の露呈された部分が半程度なので、確実視出来ないが、東壁の状況は構築基準辺を成している。当該遺跡で発見された住居で、構築基準辺に構築当初から竈を備える例が無いことから、構築当初は、竈は別な壁面に構築された可能性が推測出来る。また、掘方覆土の状態は、住居掘方の埋土上に竈を構築している。この状況から、床面構築以降に竈が据えられたことを物語っている。これらのことから、構築当初の竈は、恐らく北壁部分に据えられたと思われる。しかし、同部分は9号粘土採掘坑が破壊していることから、確認が出来ないのが残念である。

竈の構造の特徴は、左袖を東壁に直行する状態で据え、内壁面を直線的に構築されている。しかし、対辺に当たる右袖内面は、左袖内面側から構造に必要な幅員を採り右袖として構築している。このため、竈は右流れ状に見られる。また、燃燒部内の支脚として据えられた高環(19)の配置位置から、袖右壁寄りに空間を設けていることが看取される。長裏は高環の支脚の上からの転倒した個体とは思わず、むしろ、高環支脚の右側に据えられてい

たことが推測される。この状況から、器設部は併架式であったことを裏付けている。そして、高環支脚の配置位置と、煙道天井部の残存状態から、器設部の背後すぐの所から煙道部天井を設けられたことが推定出来、高環の配置位置・器設部の状態から、当該の竈は、当時の形状を良く留めていることが窺知される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環3・11～13・15・16はB1類、2・4・6・9・10・14・17はC1類、1・5・7・8はC3類。同高環20・21はB1類、18・19はB2類。同鉢22はB1類、26はB2類。同甕25はB1類。同小型甕28はB2類。同甕29～31はB2類、33はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類177点、C1類40点、C3類86点、D2類1点。同高環B1類9点。同鉢類8点B1類。同埴B1類。甕類では、A類15点、B1類531点、B2類8点、B4類213点、D2類10点である。B2類・B4類の出土が目立っている。また、土師器環13～17の5点は9号粘土採掘坑遺物である可能性も考慮される。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

32号住居(第94～96図、第38・39表、P.L. 26・77・78)

(1) 概要

当該住居は、西側台地部の中央やや東よりに占地し、調査区内中央部やや北側に位置し、16区R・S-5・6グリッド内に当たる。重複関係のない単独住居である。周辺の遺構には、北側4m程に12号住居、東側至近に4号粘土採掘坑、南側6m程には15号住居、南西側9m程に14号住居、西側至近に37号住居が位置している。

形状は、軸方向にやや長い正方形基調を呈するが、均整が取れてはいない。南西隅部以外の隅部はほぼ直角に近いものの南西隅部は丸味を強く帯びている。また、南壁は最も直線に近い状態で構築されているが、実際には弓形状を呈している。規模は、軸長4.26m、幅3.96mを測る。主軸方位はN-88°-Eを指す。残存深度は37cm程である。

竈は東壁の南東隅部にやや寄りに備え、南東隅部直下には貯蔵穴(P1)が発見されている。この貯蔵穴の周囲は、床面より2～3cm程高く構築されている。主柱穴及

び壁溝は未発見である。

貯蔵穴は、不整形形を呈し二重構造になっている。規模は縦0.48m、横0.51m、深さ0.41m程である。

竈は、全長0.81m(屋内長0.55m、屋外長0.26m)、袖基部幅0.85m、焚口部幅0.39m、燃焼部幅0.26m、煙道部幅0.20mを測る。形状は、左右両袖が屋内側に平行状態で突出している。焚口燃焼部は狭く細長い。燃焼部が狭い状態から、甕を併架出来る状態ではないが、縦列の併架は可能であろう。焚口部全面の床面直上には、炭化物と焼土の散布が認められている。竈の掘方は、煙道部分が三角形状に突出して認められる。掘方底面は緩やかな傾斜を有し、住居掘方と同等に掘削されている。また、焚口側のP3部分の埋土には、炭化物が含有されるもの、竈に起因する炭化物なのかは不明である。

住居の掘方は、P2・P3が土坑状として顕著な状態として認められるが、他の部分では不明確である。これは、軸方向の断面と平面とに不明瞭な部分が在るからである。これは、写真記録でも確認が出来なかったためでもある。住居掘方の写真記録では、地山礫が浮き上がる状態で撮影されている。恐らくは、掘方底面はこの礫の上位面であった筈であろうから、図化された面が、この地山礫を含める面なのかという点である。

住居の覆土は、遺構確認前から床面まで、1層土のみで埋没している。この分層不能な状態は人為層の可能性がある。そして、覆土内での遺物の出土量は非常に少ない。この状況も短時間埋没を示唆している。

出土遺物は、上記の通り全体的に少ない。図化掲載遺物で床面直上土には、竈の左側で東壁の直下辺りに集中しており(1・4～7・9・10)、住居廃棄段階の状態であろう。特に土師器高環(10)は転倒した状態で出土しているが、廃棄段階には、土師器環1と6が乗せられていた可能性がある。また、竈寄りの部分には床面直上で土師器環(3)が出土し、南壁側で貯蔵穴に落ち込む状態で土師器環(2)が出土している。土師器小型甕13、甕12・14・15は床面直上層の出土である。未掲載遺物では、土師器環31点(黒色土器5点を含む)、同高環2点、同鉢1点、同甕類64点である。須恵器では、高環1点(28号住居出土未掲載高環と同一個体)、甕片2点がある。

(2) 所見

住居の掘方は、上述の通り不明瞭であるが、形状・状

況から、南壁が構築基準辺であろうことと、竈の構築は、南壁の掘削とは別に行われた可能性がある。これは、南壁と北壁が南東隅部を夹角とする2辺が、それぞれ、北東隅部・南西隅部の3つの隅部が整った造りに成っていることと、南壁が比較的整った状態であること。北壁の竈周辺部分が北壁の中でも部分的に直線構造であることから、北壁部分でも竈部分だけが別途構築されている状態と判断される点にある。

竈は、右袖が壁面に対して直角に据えられているが、左袖は、右袖から僅に開きながら構築されている。これは、左袖が右袖内面側を基準に必要幅員を採り構築された状況であることが窺知される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1～4・9はB1類、5～7はC1類、8・12はC3類。同高環10はB1類、11はB3類。同壺13はB1類、甕14はA類、15はC1類、16はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類15点(黒色土器5点を含む)、C3類16点。同高環B1類2点。鉢B1類1点。甕類A類6点、B1類58点である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

33号住居(第96・97図、第39表、P.L. 27・78)

(1) 概要

当該住居は、西側台地の中央部に占地し、17区D・E-4グリッド内に当たる。重複関係は無い。周辺遺構には、北東側2.5m程に7号住居、東側至近の位置に8号住居、南東側2.5m程に9号住居、南側6m程に40号住居、西側3m程には21号住居が位置している。

形状は軸方向がやや短い横長方形を呈する。規模は、軸長3.45m、幅3.76mを測る。主軸方位はN-62°-Eを指す。残存深度は46cm程である。

屋内施設では、竈が壁中央よりやや東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形を呈し、規模は縦0.58m、横0.48m、深さ0.46m程である。

竈は東壁中央、中軸線上に左袖の内側壁面があたる。遺存状態は非常に良く、煙道部の天井部が残存している。規模は、全長1.39m(屋内長0.85m、屋外長0.54m)、袖基部幅1.25m、焚口部幅0.30m、燃焼部幅0.50m、煙道

部幅0.18mを測る。形状は、左右両袖は屋内側に突出する。両袖の端部には礎を据えているが、写真記録には留めていないため、角礎か円礎は不分明である。記録図では角礎状に見える。焚口部の燃焼部側には、焚口天井に据えられたと考えられる人身の礎が横位の状態で出土している。燃焼部から煙道部にかけては、煙道下端に向かい窄んだ形状を呈している。また、燃焼部では支脚と考えられる礎が出土している。煙道部は、屋外に長く延びている。底面は煙道下端に向かい若干高くなっている。竈の掘方は、袖部を地山削り出しとしている。削り出し袖が残している住居は、39号住居が該当する可能性がある。焚口前縁部分には、土坑状の掘り込みが認められる。

住居の掘方は、全体的に浅い。南壁側に土坑状の掘り込みが集中する傾向が認められる。特に顕著な状態は看取されない。

出土遺物は少ない。掲載遺物では、土師器環1が床面直上、須臾器環蓋2は竈焚口高架材に乗った状態で出土。同3は覆土下層、同5甕は覆土中層で出土している。未掲載遺物では、土師器環39点(内黒土器17点を含む)、同甕類115点が出土している。

(2) 所見

住居の北壁・東壁・北隅部は、ほぼ直角に構築されている。整った状態に仕上げられている。他方この対象側の南壁・西壁・南隅部は前者に比べて精緻さが感じられない。そして、東壁は北壁より直線的な状態にある。これらのことから、北壁を構築基準辺として住居の構築がされたことが窺知される。

竈は、住居の中軸線上に、左袖掘方内壁面を設け、想定される竈各部位の必要幅員を定めて右袖側を削り出ししている。この状況から、竈は左袖を基準にして構築の設計がされたことが窺知される。

又、支脚は竈の中心より左袖に偏在し、支脚の右側には、甕1個体分を据える余裕が生じている。この状況から、当該住居の竈は、併架式の構造と判断される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1はB1類、同甕5はB1類である。須臾器では、环蓋2・3はB1類、同4は太田産と考えられ、同甕類6・7はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類29点(内黒土器17点・黒色土器7点を含む)・C3類内黒土器3点。同甕A類2点・B1類113点がある。須臾器の未掲載遺

物は無かった。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

34号住居(第98・99図、第39・40表、P.L. 27・78)

(1)概要

当該住居は、西側台地の東端寄りに占地し、調査区の南側に位置している。7区T-19・20グリッド内に当たる。

重複関係はない単独住居である。周辺遺構には、北側5m程に15号住居、東側7m程に35号住居、南東側5m程には3号住居、西側至近の位置に17号住居が位置している。

形状は、長方形と円形が同軸上で重なった状態で、北壁が丸く、東西両壁と南壁は縦長方形を形成する状態である。「盾」形ともいえる形状である。規模は、軸長6.55m、幅4.06mを測る。主軸方位はN-1°-Wを指す。残存深度は、北側で105cm、南側で47cm程である。床面は土坑状の掘り込み部分では、土坑状の単位で凹凸に成っている。南側長方形の部分では概ね平坦な掘方である。竈は未発見である。また、貯蔵穴・柱穴も未発見である。

掘方は、南側長方形の部分で若干認められ、浅く部分的な状態である。柱穴状の掘り込みP1・P2が発見されている。土坑状の掘り込みの部分では改めて掘方という状態は存在しない。

出土遺物は少ない。掲載遺物では床面直上層での出土遺物は無い。床面直上層では9土師器環、15同高環の2点。他は覆土中層より上層にかけての層位で出土している。未掲載遺物では、土師器環161点。同高環16点。同裏類196点である。須恵器では、坏蓋2点。短頸壺1点がある。

(2)所見

当該遺構は、住居として調査実施されているが、平面形状・土層断面・生活面・掘方面等を観察すると、以下の点が指摘出来る。

南北での平面形状が著しく異なること。

南北で底面の状態が著しく異なること。

土層断面では、南側の覆土が褐色味強い発色に成っていること。

これらのことから、元来は住居ではなく、南北二つの

遺構の切り合いが推測される。この場合、北側に粘土探掘坑、南側には住居ないし竪穴状遺構が推定できる。この状況は土層断面A-A'で確認される。調査所見では、一つの遺構として土層断面観察が行われているが、同土層断面の写真撮影記録を検討すると、中央部分に破線で示した部分の左右で土層が異なっている様に見える。北側の土層には褐色質の発色とロームブロックが見られ、南側には黒褐色土ブロックが見られる。

整理所見としては、北側に粘土探掘坑、南側には住居ないし竪穴状遺構とする所見である。ただ、南側の遺構は、竈・などの付帯施設が未発見なことから、恐らく竪穴状遺構であろうと考えている。この場合、粘土探掘坑が新しく竪穴状遺構が古い。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・3～5・7・9～11はB1類、6はC1類、8はC3類、2はD2類である。同高環12・14～16はB1類、13はC3類である。同甕20はB1類、同甕21・22はB1類である。須恵器では、坏身17はB1類、同高坏18は東海産か。同瓶把手19はB1類、同瓶類23は太田産である。未掲載遺物では、土師器環B1類121点(黒色土器61点を含む)、B2類2点、C1類8点、C3類32点(内黒土器2点を含む)である。同高環B1類13点、C3類3点、同甕A類6点、B1類186点、B2類2点、D2類2点がある。須恵器では、坏蓋2点太田産。同短頸壺1点太田産である。

当該竪穴状遺構・粘土探掘坑の時期は、出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

35号住居(第99～101図、第40・41表、P.L. 27・28・78・79)

(1)概要

当該住居は、西側台地の東端側に占地している。位置は、調査区のほぼ中央部、6区R-20・16区R-1グリッド内に当たる。重複関係は、北東隅部で30号土坑と重複するが双方の新旧関係は不分明である。また、住居の北壁の東側で、壁が張り出す状態の部分では、底面に張り出す範囲と同等に、長方形に窪む部分が写真記録に認められ、土層断面でも、重複を想起させる覆土の堆積が図面記録として残されている。この張り出し状になる壁の部分には、壁が張り出す状況の原因として長方形土坑な

いし長円形土坑の重複が想定される。周辺遺構には北側3m程に14・15号住居、南側5m程には1号平地式建物・3号住居、西側7m程には34号住居が位置している。

形状は、縦長方形を呈する。規模は、軸長5.52m、幅4.28mを測る。主軸方位はN-8°-Wを指す。残存深度は60cm程である。竈等の付帯施設は未発見である。

底面は、北西部以外で平坦であるが、北西部は土坑が切り合う状態である。そして、この状況と前述土坑の重複が想定される部分、更に30号土坑の重複は、粘土採掘坑の状況を想起させる。また、掘方とされる地山面の状況では、南側では浅い土坑状の掘り込みが認められる程度であるのに対して、北西側は全体に深く掘り込んでいる。これらの全体的な状況は、前述した34号住居の状況に類似している。

出土遺物は、屋内には並みである。図化掲載遺物の床面直上出土遺物は無い。床面直上層では3土師器環、13高環。覆土内下層では11高環がある。未掲載遺物では、土師器環126点、同高環1点。同埴1点。同鉢6点。同甕類279点がある。

(2) 所見

当該住居も前述したように、状況的に34号住居の状況に似ている。このことから、当該住居とする遺構も、粘土採掘坑と竪穴状遺構が重複する状況が推測される。整理所見として、この双方の重複ないし竪穴状遺構から粘土の採掘が開始される状況が当該遺構で観察されることとしたい。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器高環13がC3類以外、土師器・須恵器全てがB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類94点、C3類32点。同高環B1類1点。同埴1点B1類。同鉢B1類6点。同甕A類11点、B1類261点、B2類2点、D2類2点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

36号住居(第102図、第41表、P.L. 28・79)

(1) 概要

当該住居は、西側台地の東側の谷寄りに占地している。調査区の中央部に位置し、16区T-3・4・17区A-3グリッド内に当たる。重複関係は、14号住居に東側の大半を切られている。周辺遺構には、北側2m程に2号竪

穴状遺構、西側至近の位置に10号住居が位置している。

形状は14号住居が重複する部分を復すると、軸方向が若干長い縦長方形を呈している。規模は、軸長7.93m、幅4.06mを測る。主軸方位はN-110°-Wを指す。残存深度は64cm程である。

竈は西壁で、中央部よりやや南隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南隅部の壁下に設けられている。形状は、二重構造の横長方形を呈する。規模は縦0.53m、横0.83m、深さ0.66m程である。また、竈の右側には、竈右袖端部から土手状の高まりに区画される、掘方を伴う浅い横長方形施設が発見されている。通有の貯蔵穴より広い面積を占有しているが深度が浅い。配置位置などの状況から、通有の貯蔵穴とする施設の性格の一部が、この部分に負荷されていたことが推測される。

主柱穴は細く浅い。P6は実際には発見されていないが、14号住居の破壊により消滅していることが確認出来ることから番号として呼称させてある。位置的には、14号住居P11に重複する位置である。未発見はこの14号住居P11の攪乱により消滅したことが推断される。

竈の両袖は屋内側に長く突出している。右袖内側壁の奥側は、直線的に壁に直行する状態で据えられ、この直線的な内側壁下端が住居の中軸から若干北側に当たっている。右袖の先端側は内側に巻き込む状態である。左袖は細く、奥壁面から屋内に向かい開く状態で据えられている。このため、竈全体は左側に流される様な状態の平面形状を呈している。支脚などの付帯施設は未発見であるが、燃焼部の幅員は広いことから、器設部は併架式であったことが推定される。掘方は奥壁面側に向かい緩やかに傾斜している。壁直下には壁溝が発見されている。奥壁面は、住居西壁の下方から半円状に突出する煙道部分の掘方が発見されている。記録図面の断面図には、竈底面下に掘方底面が図化されている。掘方平面図には、屋内側には掘方の表現が成されていない。恐らく、屋内側には、皿状の浅い掘方が存在した筈である。

住居の掘方は、14号住居が重複する部分が不明であるが、残存する部分からは、全体に平坦であったかのように感じるが、横断面D-D'では、住居の南側に掘り込みが顕著であることが確認出来る。このことから、南壁側に壁沿いに掘方の掘り込みが顕著であったのかもしれない。

第3章 調査の成果

出土遺物は非常に少ない。図化掲載遺物では、土師器環(1)、同短頸壺(2)が床面直上出土である。未掲載遺物では、土師器環4点。同糞類32点だけである。

(2)所見

住居は東・南壁がほとんど失われているが、残存2壁の西壁は直線的な造りで、西隅部は鋭い。この状況から、構築基準辺が北壁にあったことが窺える。

竈の形状は、左袖側に向かい焚口が広がる歪んだ状態である。この原因は、直線的な右袖内側壁を基準に、燃焼部・焚口部の必要な幅員を採り構築していることにより、左袖側広がる状態を生じさせたことが判断される。未記録であった竈掘方の皿状の掘り込みと奥壁面の掘方からすれば、比較的古い竈の掘方形状に成る。

また出土遺物が少ないのは、14号住居の掘乱に原因しているか、住居廃棄段階には、周辺部での生活・活動が少なく、これにより廃棄される土器類がまだ少なかったことが推測される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器3点共にB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類4点(内黒土器1点・黒色土器1点を含む)、同糞類A類2点、B1類26点がある。

当該住居の時期は、竈形状、推定される竈の掘方様相、出土遺物から、6世紀後半頃に廃棄されたことが推定出来る。

37号住居(第103図、第41表、P.L. 28・79)

(1)概要

当該住居は、西側台地の中央に占地している。位置は調査区内中央部分、16区S-5グリッド内に当たる。重複関係では、13号住居を切っている。周辺遺構には、東側至近の位置に32号住居、南側7m程に14・15号住居、西側至近の位置に6号掘立柱建物がある。

形状は、中軸方向が若干短い正方形基調とし、北壁に長方形に突出する張り出し(幅1.52m奥行き0.64m)部分を備えている。規模は、軸長3.80m、幅3.24mを測る。主軸方位はN-71°-Eを指す。残存深度は39cm程である。

屋内施設では、竈が東壁で南東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に、10cm程の土手状の高まりを備えて設けられている。形状は不整

方形を呈する。規模は縦0.49m、横0.58m、深さ0.10m程である。

竈は、東壁の南東隅部に偏在し備えている。形状は、両袖を屋内側に突出させ、右袖は、上述した貯蔵穴の左壁の一部を兼ねている。また、左袖の燃焼部の部分は、袋状になり煙道の下端部分で窄んでいる。燃焼部の形状と幅員から、器設部は併架式であったと考えられる。焚口部で出土した土師器高環脚部(4)は、脚高が低く、器面には酸化被熱による変色・風化・劣化は認められない。このことから、支脚として転用されたものではないと考えられる。掘方は、屋内側に浅い皿状の掘り込みが認められ、燃焼部では、住居東壁の中心から外側に舌状に突出する掘り込みが認められる。竈として古期の掘方の特徴を備えている。

住居の掘方は、張り出し部分周辺と北東隅部直下で部分的に認められるが、ほとんど認められない程度である。

出土遺物は非常に少ない。掲載遺物では、土師器環3・同高環が床面直上出土。床面直上層では土師器壺6。覆土内下層で土師器環1。同中層で土師器環2が出土している。未掲載遺物では、土師器環28点。同高環6点。同糞類31点である。また、覆土内中層では礫の出土が多い。

当該住居は、張出施設を伴う住居としては唯一の出土例である。だが、同部分では、特殊な状況等は発見されなかった。

(2)所見

当該住居は張出施設を伴うためであろうか、全体に精緻な状況はない。このため、住居構築段階に於ける構築基準辺の認定はやや困難である。敢えて示せば、東隅部周辺の稚拙な状態を考慮して西壁が類推される。

竈の右袖は、東壁に対して直角に掘え、内壁面は緩い曲線を描いているが、壁に向かい直行方向に構築されている。そして、左袖は、各部位の必要幅員を採り構築している。このため、竈全体が左側に流れるような平面形状を成している。すなわち右袖を構築基準として構築されている。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器類・須恵器類は全てB1類である。未掲載遺物では、土師器環では、B1類20点、C1類5点、C3類3点。同高環ではB1類5点、C3類1点。同糞類ではA類1点、B1類30点である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

38号住居(第104・105図、第41表、P.L. 28・29)

(1)概要

当該住居は、西側台地西辺りに古地し、調査区内の西端に寄った位置、7区I・J-4・3グリッド内に当たる。

重複関係は無く、単独の住居である。周辺遺構は至近の位置が多い。北側に42号住居、北東側に28号住居、東側に1号竪穴状遺構、西側に46号住居が位置している。

形状は、均整の採れた正方形を呈する。東壁は弓形気味であるが、他の3壁は直線的に造られている。規模は、軸長4.92m、幅5.08mを測る。主軸方位はN-90°-Eを指す。残存深度は62cm程である。

竈は東壁の中央より南側にやや寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は二重構造の不整形円形を呈するが、隅丸正方形が崩れた状態であるとも言える。規模は縦0.75m、横0.74m、深さ0.59m程である。主柱穴は4本(P2~P5)が発見されている。壁溝は竈周辺を除く壁下で発見されている。

竈は遺存状態が良く、器設部から煙道部にかけての天井部分と煙道部の天井部が残存している。形状は、左右の袖は長く屋内に延びている。左袖は焚口部先端側がやや右袖に寄っている。また、器設部周辺の天井範囲が焚口側に寄っている。このため、竈全体が屋内側に、そして、主要な部位が他の住居例より屋内側に配置されている。掘方は、屋内側ではほとんど認められない程の状態である。このため、明瞭な形の掘方は認められてはいない。ピットの性格は不分明である。屋外側では、東壁の中心から、幅広く舌状の掘り込みが屋外に延びている。規模は、全長1.17m(屋内長0.86m、屋外長0.31m)、袖基部幅0.93m、焚口部幅0.35m、燃焼部幅0.38m、煙道部幅0.15mを測る。

住居の掘方は、四様の状況が看取される。1. 東壁から南東隅部直下の帯状の掘り込み。2. 西壁南半直下から南壁中央寄りの直下にかけての小単位の土坑状の掘り込みが集中する部分。3. 住居中央部の土坑状の掘り込み。4. 北壁直下から中央部にかけての目立った凹凸が

無い部分である。

出土遺物は住居規模からすれば非常に少なく、図化掲載した資料は、残存率が3%~10%程度の個体が多い。このため、調査段階で平面図上に記録された出土遺物はない。未掲載遺物では、土師器杯40点。同高環1点。同短頸壺3点。同鉢1点。甕類117点である。須恵器では、坏蓋3点がある程度である。

(2)所見

当該住居は均整の取れた形状で構築されている。特に南壁を除く3壁は、北東隅部・北西隅部共にほぼ直角に成っている。しかし、屋内施設を詳細にみると、主柱穴の配置には不均整な状態が認められる。主柱穴4本の内、住居の壁と平行する配置を採っているのはP2・P5とP4・P5である(柱穴跡の心一線で計測)。これは、前者が東壁と、後者は北壁の走行方向に平行している状態である。この状況は東壁と北壁を構築基準辺として構成していることが推定出来る。だが、P3はこの方法に順ぜず一つずれた配置位置になっている。そして、P2とP4の配置関係では、P1を含め南東隅部と北西隅部の対角線上(対角線の線分端位置は、住居下端部分で内接する正方形の頂点位置)に配列されている。同様に北東隅部と南西隅部を結ぶ対角線上では、P5でもややずれているが、P3は完全に外れている。この様に、P3の配置位置は何らかの要因により確実な方法での位置決定が成されなかったことが推測される。

また、住居下端に内接する正方形の対角線を住居外部に延長し、住居外形が内接する正方形を作ると、概ね一辺4.8m規模の住居になる。この外接正方形とP2・P4・P5の距離は平均で1.28mである。これらの数値は概ね4:1の値が得られる。前述の17号住居の5:2、そして、当該38号住居の4:1の二者の柱位置配置が何らかの背景を示唆していると考えられる。

西壁寄りで発見されたP6は、主柱穴に匹敵する規模を有している。このことから、主柱に準じる構造柱を据えた柱穴跡であることは明白である。具体的には、棟持材ないし出入口、若しくは双方に伴う施設であろう。

竈は東壁の中心に左袖の左側壁を据えている。このため、竈全体が南東隅部に寄る配置関係に成っている。右袖は、東壁に対して直角に据え、各部位の必要幅員を探り構築している。だが、焚口部・燃焼部の幅員は狭い。

第3章 調査の成果

この状況から、当該の竈の器設は、横列併架ではなく、縦位方向での併架が考慮される。また、掘方では、竈直下の部分にも住居の掘方が達し、竈自体の掘方が浅い状態は、当該期でも古式の様相である。竈の各部位の配置位置からも、当該住居の竈は、古式な様相を具備している。

住居の掘方では、東壁下の掘方状況は古式な住居掘方に顕著に認められる。中央部の土坑(P11)としての掘り込みは、概して9世紀以降の住居で多く認められる。この土坑の掘り込み(P11)の大半の埋土は、ローム土で黒褐色土ブロックを僅かに含む程度である。掘削から埋設が短期間で有ったことを判断させる。西壁下の状況は、当該遺跡で通常に認められる状態である。北壁下の掘方がほとんど認められない部分は、当該部基準として住居の掘削が行われたことを示唆している。このため、対辺に当たる南壁が弓形に成ること、東西両壁が北壁と直角に交わる状況などからも北壁を構築基準としていることが推定される。だが、P11の性格はなお不明と言わざるを得ない。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1がC1類、須恵器環9が乗附ないし太田産と考えられ、この2点以外は全てB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類33点(黒色土器7点を含む)。同高環B1類11点(赤色塗彩1点を含む)・C3類1点。同短頸壺B1類1点。同鉢B1類1点。同甕類B1類116点・B3類1点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

39号住居(第105・106図、第41表、P.L. 29・79)

(1)概要

当該住居は、西側台地の中央部に占地し、調査区南端に位置し、7区I・J-3・4グリッド内に当たる。住居は、大半の部分が南側の調査区外部に伸びているため、完全露呈出来なかった。発見・露呈出来たのは、竈の北半分を北壁の東半部周辺の限られた部分のみである。重複する遺構は4号溝1条。新旧関係では当該住居が新しい。周辺遺構には北側8m程に29号住居、東側5m程に20号住居、北西側至近の位置に30号住居が位置している。形状及び付帯する施設等、ほとんど不明である。

竈は北壁に構築しているが詳細な位置は不明であ

る。構造は、煙道先端側の屋外突出がやや長く感じられる。

燃焼は酸化被熱による変色が非常に顕著である。

住居の掘方では、北壁直下に土坑状の掘り込みが認められる。

出土遺物は露呈部分が一部であったため少ない。未掲載遺物では、土師器環類53点(B類)だけである。

図化掲載遺物では、床面直上出土遺物では、土師器鉢(4)だけである。

(2)所見

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

40号住居(第106図、第42表、P.L. 29・79)

(1)概要

当該住居は西側台地中央部に占地している。位置は調査区内中央部でもやや西寄り、17区D・E-2・3グリッド内に当たる。重複関係では、18号住居が本跡南東部分を切っている。周辺遺構では、北側4m程に21号住居、南側至近の位置に20号住居が位置している。

形状は、隅丸正方形を呈している。規模は、軸長2.80m、幅2.80mを測る。主軸方位はN-70°-Eを指す。残存深度は32cm程である。竈・貯蔵穴・主柱穴は未発見である。

出土遺物で注目されるのは、土師器環(1)・同有孔鉢(3)・須恵器環蓋ないし浅鉢(4)は、床面直上で正位の状態出土している。住居廃棄時の状態で出土している。

遺物出土量は非常に少ない。未掲載遺物では、土師器環15点。土師器環類27点がある程度である。

(2)所見

竈・貯蔵穴は18号住居の擾乱により失われた可能性があるが、当該の規模での遺具備もやや疑問もある。可能性として竪穴状遺構も選択肢の一つと考えられる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1はB1類、2はC1類。同有孔鉢3はB1類である。須恵器では4が環蓋とも浅鉢とも思える器種でB1類。同甕5はB1類。同甕6は乗附産と考えられる。

当該住居の時期は、重複関係、出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

41号住居(第106図、第42表、P.L. 30)

(1) 概要

当該住居は東側台地の谷寄りに占地する。調査区内では東側の南端に位置し、6区K・L-15グリッド内に当たる。住居は調査区外に延びている。このため完掘は出来なかった。重複する遺構は、露呈部分では確認されなかった。周辺遺構もほとんど無く、北・西側5m程に粘土採掘坑群が位置し、西側31m程に3号住居が位置している。

形状は全体露呈が出来得無かったが、推定される形状は正方形基調と考えられる。規模は、軸長3.58m、幅2.20 + a mを測る。主軸方位は概ねN-85°-E程を指す。残存深度は60cm程である。竈は、東壁に備えるが、辛うじて、竈の左軸が確認出来た程度である。貯蔵穴は未確認である。主柱が露呈部分では発見されていないことから、主柱穴を備えない住居と判断される。

住居の掘方は、部分的で、北壁直下でやや幅の広めな掘り込みが認められている。他の部分は床面と掘り底面は同位である。

出土遺物は少なく、図化掲載資料も覆土内出土資料であり全てである。土師器環2が10%程度の残存率が最大で、他は2~3%の残存率である。

(2) 所見

所見として改めて記せないが、占地が他の住居とは隔絶するような状況であることから、1号住居で認められた自然湧水層との関係があるのかもしれない。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・3がB1類、2はC1類、須恵器4はB1類である。

当該住居の時期は、出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

42・42B号住居(第107~111図、第42・43表、P.L. 30・31・79・80)

(1) 42号住居概要

当該住居は、西側台地の西寄りに占地している。位置は調査区内西側、17区H~J-5~7グリッド内に当たる。重複する遺構は、56号住居を切っている。周辺遺構は、北側6m程に45・51・52号住居、東側3m程に29号住居、南東から南側の至近距離に28・38号住居、南西側2.5m程に46号住居、西側至近の位置に47号住居が位置して

いる。

形状は正方形基調。規模は、軸長7.00m、幅7.50mを測る。主軸方位はN-67°-Eを指す。残存深度は60cm程である。屋内施設では、竈は東壁隅部寄りの位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形を呈する。規模は縦0.65m、横0.67m、深さ0.59m程である。主柱穴は4本(P2~P5)が掘り方で発見されている。壁溝は、竈周辺で未確認であるが、他の部分では断片的ながら全周する。

竈は、残存状況は良好であるが、天井部等の構造は残っていない。構造は、芯材に小振りの地山礫を用いた積石構造である。間隙及び底面にはローム土・黄灰色土の混土を用いて盲目地を施している。形状は、屋内に長く突出する袖を備え、全体的に細長い舌状を呈している。掘り方は、左右両袖部分の地山を掘り残す削り出しの袖を備え、屋外には箱状に掘り込んでいる。規模は、全長1.66m(屋内長1.02m、屋外長0.64m)、袖基部幅1.76m、焚口部幅0.70m、燃焼部幅0.54m、煙道部幅0.27mを測り、概して、調査区内で発見された他の住居より規模が大きい。

住居の掘り方は、二重構造である。これは、当該住居の構築以前に別住居(42B号住居)の存在が確認されたため、露呈された掘り方は、2基の住居としての掘り方である。詳細については、42B号住居を含めた所見で記す。

出土遺物は、住居規模に相応しい。図化掲載資料で床面直上出土遺物は、土師器環4・16、同台付甕41、同甕42・43、須恵器では、坏蓋29・30である。床面直上層出土遺物では、土師器甕45。覆土内下層では、土師器環11・21・22、同高坏28、同甕48がある。これより上位層では、土師器環15・20がある。未掲載遺物では、土師器環348点。同高坏21点(内黒坏部4点を含む)。同短頸甕5点。同埴18点。鉢類3点。同甕類975点がある。

(2) 42B号住居概要

当該住居は42号住居の掘り調査に依り発見された住居である。このため、詳細な構造については不分明である。

露呈された状況は、42号住居の南・西壁を共有する状態で、42号住居は42B号住居が対角線方向に拡張された状態である。形状は正方形を呈すると考えられ、規模は1辺5.7~6.0mと考えられる。屋内施設で発見されたのは、貯蔵穴(P6)、主柱穴は4本(P7~P10)で、貯

蔵穴の縦長方形を呈し、規模は縦0.65m、幅0.60m、深さ0.66mである。

出土遺物は、調査段階で42号住居と42B号住居が分別されていない状態であり、42号住居として一括されている。このため、42B号住居を特定できる遺物は無い。

(3) 所見

42号住居は、42B号住居の在り方からすると、42B号住居を完全に改築する意思の元で対角線方向に拡張された結果と考えることが出来、双方は拡張前と拡張後の状態として捉えられる。便宜上、拡張後の状態を42号住居、拡張前の状態を42B号住居とする。

42号住居の掘方は、南隅部から対角線方向に広がる掘方が認められ、西壁・南壁下、東壁の内側から北壁内側にかけて「L」字状・逆「L」字状で溝状の掘り込みが認められ、また、土坑状の掘り込みが散見される。この「L」字状の掘り込みに外接する正方形が42B号住居である。また、土坑状の掘り込みで、P14は、P13・15を切る状態とも思われることから、P14は、42号住居に伴う土坑状の掘り込みとして捉えられる。P12は外接正方形に接し、貯蔵穴(P6)との位置関係から、42B号住居の竈掘方の屋内部分と考えられる。P19～P26は逆「L」字状の部分より外側に当たることから、拡張後に伴う掘り込みと判断される。

双方の主柱穴は配置状態から改築前(42B号住居)が、P7～P10改築後がP2～P5である。これらの柱穴跡の特徴は、改築前は屋内に寄った位置に据えられているのに対して、改築後は壁に寄った位置に配置されている。これらを数値に置き直すと、改築前は推定される壁下端から柱穴まで平均1.63mに当たり、改築後は様々な様相もあるが、平均1.40mである。この両者の数値を住居規模(壁下端間での距離を規模に置き換え)と比較すると、改築前は概ね1:3.4、改築後は1:4.95である。柱間との比較では、改築前が1:1.6、改築後は1:2.85である。これらの数値からの双方の相違点は、改築前は壁から柱間での距離が長く柱間は狭い。改築後は、壁から柱までの距離は短く柱間は広いことが数値で確認出来る。この傾向は、時間の経過により、主柱の配置位置が壁寄りに成り、柱間が広がることが判断される。また、各部位間の距離を検討すると、改築前はおおよその規模5.7～6.0m、柱間平均値2.64m、壁下端と柱穴間の平

均距離1.62m。改築後の規模(壁下端間)6.95m、柱間平均値4.01m、壁下端と柱穴間の平均距離1.40m。これらの数値の公約数を求めると、概ね0.24m=24cmという単位が得られる。

竈は(改築後の42号住居)、掘方段階で左右両袖を削り残している。この掘方段階の袖の形状は、右袖は内面側を燃焼空間・煙道部とほぼ直線状に削り出しているが、左袖は燃焼空間部分と煙道部分との境部分に段差を作り出している。同様に、壁面の積石も右側は直線的に構築し、左側は必要な幅員を採る状態で構築している。このため、左袖に開く状態で左流れ状態の平面形状に成っている。そして、露呈時の竈形状は、右内壁面が直線的な造りに対して、左内壁面は燃焼空間の奥側では、外側に向かい緩やかに曲線を描き広がった状態である。この状況から、右袖及び右内壁面側を基準構築面としていることが看取される。

出土遺物の脂土では、図化掲載した土師器環1・2・4・5・9～14・17・20・22～24がB1類、3・7はE類、6・8・15・16・21はC3類、18・19はD2類である。同高環25はC3類、26・27はB1類。同表類28・42～47はB1類、48はA類である。須恵器では、环蓋29～31はB1類、32・33は太田産。36は太田産。坏身34・35はB1類、瓶類37は東海からの搬入品、同38・39はB1類。甕40はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類64点(外黒11点・黒色土器31点・内黒土器2点を含む)。C1類284点。同高環B1類21点(内黒環部4点を含む)。同埴B1類18点。同短頸壺B1類5点。同鉢類B1類3点。同表A類139点、B1類918点、B3類17点、D2類13点がある。須恵器では、环蓋4点太田産。坏身4点太田産。环C蓋10点、同H身2点太田産。小型鉢1点太田産。高環2点太田産。甕類は全てB1類である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

43号住居(第112図、第44表、P.L. 31・81)

(1) 概要

当該住居は西側台地の西側緩斜面に占地している。位置は、調査区内北西側、17区G・H-9・10グリッド内に当たる。重複する関係では、1号掘立柱建物・103号ピットに切られている。周辺遺構には、北側6m程に26号住

居、北東側至近の位置に27号住居、南西8m程に45号住居、北西側4m程に44号住居が位置している。

形状は、極度に横方向に長い横長方形を呈する。規模は、軸長2.90m、幅4.93mを測る。主軸方位は $N-54^{\circ}-E$ を指す。残存深度は6cm程で遺存状態不良である。屋内施設では、竈を東壁の南東隅部に接近した位置に備えている。しかし、貯蔵穴・壁溝は未発見である。

竈の内面形状は細長い舌状を呈する。しかし、遺存状態が悪いため上部でもこの形状であったのかは不明である。規模は、全長1.30m(屋内長0.85m、屋外長0.45m)、袖基部幅1.06m、焚口部幅0.6m、燃焼部幅0.36m、煙道部幅0.21mを測る。

住居の掘方は、総体的に壁下での掘り込みが顕著である。南・西壁直下に逆「L」字状の掘り込み、北東隅部・東壁中央では土坑状の掘り込みが認められている。また、北西隅部周辺のピットについては性格等不明である。

出土遺物は、非常に少ない。住居の遺存状態の悪さを反映している。図化掲載した土師器類4・5は床面直上出土である。他は床面直上層での出土になる。未掲載遺物では、土師器環10点。同埴1点。同高環4点。同甕32点がある。須恵器類の出土は無かった。

(2) 所見

竈の構築は、左袖を東壁に向かい直角に据え、左袖内側壁を基準に必要幅員を採り右袖を構築している。この状況から、右袖内側壁を基準構築面としていることが判断される。

住居の掘方は、南・西壁直下の逆「L」字状の掘り込みから、西壁を構築基準面としたことが窺える。また、今回発見された住居の中でも、特異な形状を呈する当該住居の形状は、掘方平面図を観察する限りに於いて、元来は、西壁直下の溝状の掘方の範囲と、東壁直下の土坑状の掘り込みを結ぶ辺り、すなわち東壁の形状が歪むまでの位置が、当初の住居の規模であった可能性が想起される。この部分辺りまでを住居形状とすると、当該遺跡での小型住居の形状と齟齬が無くなる。この時の規模は、幅3.2m程になり、中軸線方向の規模に近くなる。この場合、北側の部分は、掘方部分の土層断面を見る限りに於いて、掘方埋土が分層出来ない状況、すなわち、構築段階に於いて、突発的な状況変化により形状の変更を行ったことが想起される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器は全てB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類1点、C1類9点。同埴B1類1点。同高環B1類4点。同甕A類4点、B1類28点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀中頃の廃棄と思われるが、遺存状態不良なため明定は出来ない。

44号住居(第113・114図、第44表、P.L. 31・32・81)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に古地し、調査区内北西側、17区I・J-10・11グリッド内に位置している。重複関係の無い単独住居である。周辺遺構には、北側7m程に48号住居、南側4m程に45号住居、南西側3m程に51・52号住居、北西側2.5m程に49号住居が位置している。

形状は均整の取れた正方形を呈する。規模は、軸長5.0m、幅4.92mを測る。主軸方位は $N-81^{\circ}-E$ を指す。残存深度は31cm程である。竈は、東壁の中央部に備える。貯蔵穴(P1)は、北東隅部の壁下に設けられている。形状は隅丸正方形を呈する。規模は縦0.72m、横0.72m、深さ58m程である。主柱穴は4本(P2~P6)が発見されている。壁溝は各壁下で寸断された状態で発見されている。

竈は、全体形状を細い舌状に採り、左右の袖が屋内側に長く突出、焚口部から燃焼部は一段浅く窪んだ状態である。掘方では、煙道部分が屋外に突出するが、底面は、床面と同位程である。規模は、全長1.31m(屋内長0.94m、屋外長0.37m)、袖基部幅0.94m、焚口部幅0.37m、燃焼部幅0.5m、煙道部幅0.26mを測る。

住居の掘方は、北東隅部・南西隅部側を中心に、逆「L」字状に壁下で認められている。この「L」字状の掘り込みにより、壁沿いに掘り込みが顕著であるが、屋内中央部分、主柱穴を囲む範囲が四角く掘り残された状態になっている。また、P3-P4の間を、双方を繋ぐ状態で細い溝状の掘り込みが認められる。この他、柱穴状の掘り込みが南側壁で目立っている。出入口施設に伴う柱穴跡も含まれている可能性があるが、特定は困難である。

出土遺物は全体的に少ない。図化掲載した土師器環1・須恵器短頸甕3・土師器甕6はいずれも覆土内での出土

である。未掲載遺物では、土師器6点。同高坏4点。同裏75点がある。須恵器の未掲載品は無い。

(2) 所見

竈は、左袖左側面が中軸線に配置している。左右両袖を壁に向かい直角に据えている。一方、左袖内側壁は直線的に構築されているが、右内側壁は膨らんだ状態である。この状態は、左袖内側壁を構築基準面として必要幅員を採り構築されたことが判断される。

住居の掘方の「L」字状の掘り込みは、中央部を直線的に囲む状態であるが、その掘削順位には計画性が窺われる。中央部の方形状の掘り込みは、支柱穴を結ぶ状態であり、支柱穴位置の決定が先に存在したかの状況である。特に北側の部分は、P4-P6を直線で結んだ部分で「L」字状の屋内側立ち上がりが立ち上がっている。この状態の住居の掘方は、単に「粗掘り」と言うだけの作業結果ではなく、掘方自体に何らかの意味・意義が存在したのかもしれない。

当該の中央部を方形に掘り残す掘方は、古墳時代前期～後期初頭まで顕著に認められている。掘方全体として、当該期の住居の掘方としては、やや古式な感じを受ける。

支柱穴の配置位置は、やや屋内寄りに設置されているものの、詳細な位置関係では、住居の外形から歪んだ状態で、中軸線とも平行・直角の関係にはならない。だが、上述のように、掘削段階にはある程度の計画性が窺える状態とは矛盾する状況である。

これらの柱穴の配置関係を数値換算すると、壁下端から柱穴の中心位置までの距離の平均(各壁から8方向からの平均値)は、1.2075mでおおよそ1.2mである。また柱間距離の平均値は2.3925mでおおよそ2.4mである。この双方の数値の関係は、1:2である。このことは、同様に壁下端での中軸長4.81mと幅4.87mとの関係では、1:2:4、すなわち、中軸線と同垂直二等分線をして対象の配置関係になる。そして、この四者の数字の公約数は、24cmと30cmが得られる。この双方の数字は、これまで柱位置を数値化した場合と同一の値である。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器1・2はB1類。同裏類4～6・8はB1類、7はB2類。須恵器短頸壺3はB1類である。未掲載遺物では、土師器坏B1類6点(黒色土器4点を含む)。同高坏B1類4点(赤色塗彩1点を含む)。裏類B1類74点、D2類1点である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

45号住居(第114～116図、第44表、P.L. 32・81・82)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内北西側、17区I・J-8・9グリッド内に位置している。重複関係では、51・52号住居を切り構築している。その他、ピット6本が切っている。周辺遺構には、北側7m程に48号住居、南東側4m程に43号住居、南側6.5m程に42号住居、南西側2.5mに47号住居が位置している。

形状は、中軸方向がやや短い横長方形を呈する。規模は、軸長4.48m、幅4.92mを測る。主軸方位はN-73°-Eを指す。残存深度は15cm程である。

屋内施設では、竈は東壁隅部から1.03mの位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、隅部の壁下に設けられている。形状は、住居の中軸方向に長い楕円形を呈する。規模は縦0.60m、横0.50m、深さ0.28m程である。支柱穴は4本(P2～P5)が床面上で発見されている。壁溝は壁下でほぼ全周する。

竈は、屋外に向かい細長く舌状に突出する。袖は小さく縮状で、主体部分は屋外に張り出した状態である。支脚は燃焼部の奥側に土師器甕(8)の胴下半部を逆位にして据えている。焚口部で出土している土師器甕(6・9)は、個体として遺存状態が不良であることから、焚口に架けられた甕では無いと考えられる。規模は、全長1.58m(屋内長0.35m、屋外長1.23m)、袖基部幅0.98+a m、焚口部幅0.44m、燃焼部幅0.70m、煙道部幅0.22～0.32mを測る。

住居の掘方は、西隅部以外の隅部に土坑状の掘り込みが発見されている。西隅部は51・52号住居の重複により、図化できる状態で露呈出来なかったことが考慮される。他方、写真記録では、南壁直下の中央部でも土坑状の掘り込みが見られ、南壁直下には全体的に掘方の存在が見られる。また、北隅部の掘り込みは西壁下に続き、西隅部に続く状況が見られる。同様に、南隅部の掘り込みも西隅部側に続く様に見える。そして、北・西壁下に溝状の掘り込みが存在した可能性が考えられる。

出土遺物は、全体的に少ない。図化掲載した資料で床面直上出土は無い。床面直上層出土では土師器坏2・3、

4・7は覆土下層から中層での出土である。未掲載遺物では、土師器環9点、同高環2点、同費105点がある。

(2) 所見

住居形状は東壁に歪みが見られ、特に北側の部分は俯いた状態になっている。また北壁は西・南壁と比較しやや捻んだ状態であるが、西壁との西隅部はほぼ直角で鋭い。全体的には西壁と南壁が直線的で南隅部は鋭くほぼ直下な造りである。掘方では、記録図では判然としない状態だが、写真記録等から、西壁を中心に「コ」の字状に顕著な掘方が認められる。この掘方の状態と、壁の直線的な状態、隅部の状態を勘案すると、西壁を構築基準として住居の構築が行われたことが判断される。

竈は、廃棄時の形状は細長い舌状を呈するが、掘方は箱状の掘り込みに奥壁面部分が舌状に突出する状態である。この状態は、双方が相反する状態である。残念ながら、双方の関係を観察出来る部分での土層断面が無いため確認できないが、この状態を合理的に解釈するならば、据変えにより、形状は著しく変えられた可能性がある。また、縦断面では、最下面の住居掘方底面、竈掘方底面2面が認められることから、廃棄以前に2回の据変えがあったことが類推される。これらのことから、廃棄段階の竈形状と、掘方形状に著しい差異が生じていることの要因として、数次に亘る改築が行われたことにより生じていると判断される。

主柱穴は4本(P2～P5)の配置位置は、対角線に沿う様に壁寄りの配置になっている。この配置状態を数値に置き換えると、南・北壁下から柱穴跡の距離の平均値は1.13m、東・西壁下から柱穴跡の距離の平均値は0.80mである。この数値の差異は、主柱穴の配置が、住居形状に従って配置されたことを裏付けている。柱間では平均2.33mまた、壁下端間での配置状態は、中軸方向壁下端距離4.2m、幅での壁下端間4.8mである。これらの数字に公約数を求めると、24cmではなく、30cmの数値(中軸方向での壁下端一柱穴跡以外の部分)で得られる。この公約数での数値に換算すると、中軸方向では、おおよそ3(壁下一柱穴跡間)：8(柱間)：14(中軸距離)、住居の幅では、おおよそ1(壁下一柱穴跡間)：2(柱間)：4に換算できる。住居の幅からでは、壁下一柱穴跡：壁下端幅では、1：4の位置配分に成っている。この配置関係は、44号住居と同一の比率配分に成っている。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・2はB1類。同費6・8・9はB1類、7はA類である。須恵器では、灯蓋3はB1類。御付埴4は搬入品(東海か)。埴5はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類5点、C1類4点。同高環B1類2点。同費類A類23点、B1類82点である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

46号住居(第116・117図、第44・45表、P.L. 32・33・82)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に古地し、調査区内北西寄り、17区J・K-4・5グリッド内に位置している。重複関係は無い単独住居である。周辺遺構には、北側5.5m程に47号住居、北東3m程に42号住居、東側近所に38号住居、西側5m程に63・68号住居が位置している。

形状は、正方形基調であるが、隅部は丸みを帯びた梯形を呈している。規模は、軸長4.0m、幅4.34mを測る。主軸方位はN-30°-Eを指す。残存深度は61cm程である。竈は北東壁で東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、東隅部からやや南側の壁下に設けられている。形状は縦長方形を呈する。規模は縦0.97m、横0.64m、深さ0.58m程である。主柱穴4本(P2～P5)は掘方面で発見されている。

竈は、東隅部に接近した位置に備えている。形状は細い舌状を呈する。特徴は、半分程度を屋内に構築し、半分は屋外に構築している。袖は屋内に向かい突出し、右袖が大きく造られている。燃焼部左壁側に寄った位置に礎を用いた支脚を据えている。掘方は、袖基部を瘤状に地山を掘り残している。規模は、全長0.94m(屋内長0.57m、屋外長0.37m)、袖基部幅1.03m、焚口部幅0.36m、燃焼部幅0.31m、煙道部幅0.18mを測る。

住居の掘方は、南隅部を起点に大きく掘り込まれている。北西壁下には、溝状の掘り込みが認められる。土坑状の掘り込みとしてP7がある。形状が縦長方形であり、形態上は貯蔵穴に類似している。床面で発見された貯蔵穴(P1)と重複している。

覆土は最上層1層土がロームブロックなどを混入し、一括した状態で認められている。短時間で埋設が推定

される

出土遺物は、全体的に少ない。図化掲載遺物で、調査段階の遺構記録図に記載された遺物は無い。掲載資料は覆土内出土の遺物から拾取選択した。未掲載遺物では、土師器環108点。同高環8点。同埴1点。同鉢類3点。同甕126点がある。須恵器では、坏蓋1点。甕1点がある。(2)所見

竈は、掘方左内側壁が直線的で北東隅部壁に向かい直角に造られている。右袖は、左袖左側壁から必要な幅員を採る状態で掘り込んでいる。この状況が右袖側を流れる状態にし、北東隅部が歪んだ状態を生じさせたと思われる。

住居の形状は梯形を呈する。しかし、掘方の北西壁直下で発見された溝状の走行方向は南東壁に対してほぼ平行する状態であり、この溝状の掘り込み部分での住居の幅は中軸上での規模と同等になり、壁下端での規模は、軸長3.66m幅3.6mを測る。住居形状も正方形に成る。恐らく、住居掘削段階では、この溝状の掘り込みまでを以て、正方形住居としての形状が決定されていたことが窺われる。一方、四壁の走行状態と掘方の状態から、南西壁を構築基準辺として捉えられる。

主柱穴4本(P2～P5)は掘方で発見されているが、住居は廃棄段階までの主柱穴で上屋を支えていたと考えられる。この主柱穴の配置位置は、壁からやや屋内に寄った位置である。この主柱穴位置を、上述の構築当初段階の正方形設計での配置関係を数値で見ると、中軸方向で壁下端での規模3.66mと、壁下端—柱穴の平均距離0.87m、平均柱間長1.91mでの関係は、12:3:6である。公約数は30cmである。中軸方向と壁下端—柱穴では4:1の配置関係が得られる。この配置関係は、前述した44・45号住居と同一の配分比率である。この住居下端での規模と、壁下端—柱の距離が4:1の比率で構築されている類例が複数例あることは、一つの指標としてこの数値を位置づけられる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1～3はC1類、4はB1類。同高環B1類。同鉢6はC1類である。須恵器では、甕7はB1類。甕8は太田産(?)である。未掲載遺物では、土師器環B1類28点(黒色土器10点を含む)、C1類29点、C3類51点。同高環B1類8点。同鉢類B1類3点。同埴B1類1点。同甕類A

類3点、B1類122点、D2類1点がある。須恵器は2点ともに太田産である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

47号住居(第118～121図、第45表、P.L. 33・34・82)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に古地し、調査区内西端側、17区J・K-6・7グリッド内に位置している。重複関係は無く単独住居である。周辺遺構には、北側3m程に45・51・52号住居、東側至近に42号住居、南側5m程に46号住居、南西側3m程に63号住居、北西側2m程に60・61号住居が位置している。

形状はやや歪んでいるが縦長方形を呈する。規模は、軸長5.34m、幅4.90mを測る。主軸方位はN-7°Wを指す。残存深度は49cm程である。

竈は、北壁と東壁の2か所に備えている。双方には新旧関係があり、東竈(第1竈)は構築当初段階に掘えられた竈で、北竈(第2竈)が新しい。

貯蔵穴(P1)は、北竈に伴う状態で、北竈の左傍ら、北壁直下に設けられている。形状は不整形方形を呈する。住居内側には5～7cm程の高さで帯状に突帯を備えており、竈側は、左袖が突帯に重なる状態である。規模は縦0.83m、横0.83m、深さ0.13m程で非常に浅い。東壁竈に伴う貯蔵穴(P18)は、掘方面南東隅部直下で発見されている。形状は楕円形を呈する。規模は縦0.50m、横0.53m、深さ0.51m程である。また、貯蔵穴とも思われる土坑状の掘り込み(P8・P9・P11・P17)が掘方面で発見されている。主柱穴と考えられる柱穴跡は多い。P2～P5・P11・P13・P18・P21～P24の11本が該当する。壁溝は壁下で全周する。

竈は構築当初は東壁に掘え、後に北壁に掘え替えている。北竈は、袖は短い広い燃焼空間を備えている。掘方は、屋内部分では小土坑状の掘り込みが見られる。屋外部分は、二重の箱堀が接続する状態であるが、燃焼部側の掘り込みは少ない。底面は床面と同位である。右袖側の直下、左袖左側壁のやや左側には浅いピット状の掘り込みが認められる。位置的には燃焼部側壁の部分に当たる。壁の補強材の掘方のピットとも思われるが、廃棄段階の竈には、補強材の痕跡は認められなかった。規模

は、全長1.24m(屋内長0.57m、屋外長0.67m)、袖基部幅1.08m、焚口部幅0.85m、燃焼部幅0.84m、煙道部幅0.23mを測る。東竈は、竈改築に伴い屋内側は破壊され、煙道部分しか残存していなかった。掘方は、図化されている状態は、住居構築段階の状態で、住居掘方の部分的な状態でもあり、竈の掘方は、その上位意に認められ、土層断面では48・49層が該当する。また、東壁直下に一對の小ピットが掘り込まれている。これも燃焼部側壁部分に当たり、袖端部の補強とは異なる位置である。

住居の掘方は、南壁・西壁下で溝状の掘り込みが顕著で、北側、第2号竈前縁辺りまで土坑状の掘り込みが顕著である。また北西隅部周辺では、貯蔵穴状の掘り込みが多く、上述したP8・P9・P11・P17などが該当する。

出土遺物は、全体でやや多い位である。図化掲載遺物で、床面直上出土はないが、4土師器環がP1底面直上で出土している。床面直上層出土遺物には、21土師器高環、24・25・27同環がある。1～3・19は覆土中層から下層にかけての出土である。未掲載遺物では、土師器環250点(黒色土器44点・内黒土器11点を含む)、同高環19点。同短頸壺5点。鉢類5点。同環類689点がある。須恵器では、坏G3点、坏蓋1点。高環2点。短頸壺1点(作りは薄く優品)。甕類1点がある。

(2) 所見

当該住居は、掘方の状況から、竈の据え変えに伴い北側を拡張していることが推断される。これは、北竈の前縁部分に、土坑状の掘り込みが東西に連続する状態が露呈されている。この状態は、通常住居の掘方の壁際の状況である。この状況は、土坑状の掘り込みの北側端部辺りに構築当初の壁が存在したことを示唆しており、南壁から当該部分の距離と東西方向の規模値がほぼ一致している。更に、主柱穴が11本も発見されている点と、その配置状態にも現れている。また、「L」字状の掘方と壁の直線的な状態から東壁が構築基準面と考えられる。掘方面で露呈されたP1・P8～P10の貯蔵穴状の掘り込みは、P1・P10が北竈に伴う古期の貯蔵穴と推定されるものの、P8・P9はなお不分明である。

主柱穴の拡張前・後での配置は、構築当初はP3(P22・P23)・P24・P21・P14。改築後はP13(P14)・P18(P22・P23)・P2・P5での構造が推定される。これらは、構築段階では比較的均整が採れているが、改

築後は東辺に当たるP13・P18の配置が間延びした状態であるが、これは、改築後の東壁長に応じた距離を採ったことが推測される。

構築段階の主柱穴の配置状況は、壁下端一柱穴(平均値):柱間(平均値):壁下端間距離は、0.9937:2.3275:4.5であり、公約数を30cmとすると、おおよそ3:8:15になり、壁下端一柱穴(平均値):壁下端間距離は、1:5になる。

北竈の造りは、右内側壁の直進性が強く、左内側壁は各部位の変換点が鮮明であることから、右内側壁を基準にして左内側壁を構築したことが判断される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・6～8・10・11はB1類、2・4・5・9はC1類、3はC3類。同環12はC1類、13はB1類、同高環14～18はB1類。同鉢19はB1類。同短頸壺21はB2類。同壺24はB4類である。同環27～29はB1類、26はB2類、25はB4類である。須恵器は全てB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類118点(黒色土器44点・内黒土器11点を含む)。同高環B1類19点。同鉢類B1類5点。同短頸壺5点B1類。同環類A類39点、B1類640点、B4類10点がある。須恵器類は全て太田産である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来るが、住居の改築などの諸状況から、存続期間は比較的長期であった可能性がある。

48号住居(第121図、第46表、P.L. 34)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に古地し、調査区内西北端側、17区1・J-12・13グリッド内に位置している。重複関係では多くの68・43・47号土坑に切られている。周辺遺構には南側7m程に44号住居、南西側5m程に49号住居、西側7m程に50号住居が位置している。また、周囲には中世・近世の遺構が多く、著しく擾乱を受けている。このため遺存状態は非常に悪く、住居の掘方が部分的に残存している程度である。このため詳細は不分明である。

当該住居は残存不良のため形状・規模確定し難い。推定される形状は正方形ないし縦長方形で、規模は、軸長3.7+a m、幅3.34mを測る。主軸方位はおおよそN-

第3章 調査の成果

47°-Eを指す。残存深度は0cm程である。屋内施設では、竈が北東壁中央から東隅部に寄った位置に推定される。貯蔵穴(P1)は、東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形を呈する。規模は縦0.48m、横0.40m、深さ0.45m程である。主柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。

住居の掘方は、南西壁下に溝状の掘り込みが認められ、全体には土坑状の掘り込みが目立つ。

出土遺物は、図化掲載した土師器環のみである。この1の胎土はB1類である。

(2)所見

当該住居の時期は、出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定される。

49号住居(第122・123図、第46表、P.L. 34・83)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内西端部、17区J・K-11・12グリッド内に位置している。重複関係では、7号溝78・91・92号土坑に切れ、57号住居を切っている。このため遺存状態は悪い。周辺遺構には北東5m程に48号住居、南東2.5m程に44号住居、南西2m程に53号住居、北西6m程に50号住居が位置している。

形状は縦長方形を呈する。規模は、軸長4.86m、幅4.73m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-73°-Eを指す。東壁中央より南東隅部寄りに竈を備える。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は楕円形を呈する。規模は縦0.72m、横0.83m、深さ0.56m程である。主柱穴は4本(P2~P5)を呼称させている。しかし、P4は78号土坑の攪乱に寄り失われているが便宜上推定位置に充てた。

竈は、92号土坑に左袖・燃焼部・焚口が破壊されている。このため、詳細は不明である。掘方は、屋外に舌状に突出する煙道部分の掘り込みが露呈されている。

住居の掘方は、全体的に平坦な状態であるが、東壁側で土坑状の掘り込みが認められている。しかし、7号溝78・91・92号土坑の攪乱により北壁側が不明であるのと、住居総体が遺存不良なため詳細は不明である。

出土遺物は、住居の遺存状態に比例し、非常に少ない。図化掲載資料は全て30%以下の遺存状態であり、出土遺

物層位も覆土内である。掲載遺物で6の有孔円盤以外はB1類を胎土としている。未掲載遺物では、土師器環B1類25点(黒色土器10点・内黒土器1点・外面黒色1点を含む)、C1類は6点、C3類は6点、合計37点。同表類では、A類1点、B1類62点がある。須恵器では、瓶類1点太田産がある。

(2)所見

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定される。

50号住居(第123図、第46表、P.L. 34・35・83)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内北西端部、17区K・L-13・14グリッド内に位置している。重複関係は、多くの中世ビット・近世土坑に切られているが、同期の遺構との重複関係は認められない。そして、遺存状態は甚だ悪い。周辺遺構には、東7m程に48号住居、南側6m程に49号住居が位置し、北側・西側には遺構は無い。

形状は痕跡により復せる程度で、恐らく正方形基調であったと推定出来る。規模は、軸長3.74+αm、幅3.6mを測る。主軸方位はおおよそN-64°-Eを指す。残存深度は0cm程である。形状は掘方が部分的に残存したのと、遺構確認段階での所見に基づいている。貯蔵穴(P1)は、調査所見では竈右手前部分に推定している。形状は不整形を呈する。規模は縦0.50m、横0.48m、深さ0.48m程である。主柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。壁溝も未発見である。

竈は非常に遺存状態が悪く詳細は不明である。

住居の掘方も詳細は不明だが、住居内北側の部分に、攪乱に大半が破壊された掘り込みが認められている。やはり詳細は不明である。

出土遺物は、やはり微量である。図化掲載した土師器環1は掘方内に近い層位と思われる。胎土はB1類である。未掲載遺物では、土師器環0点、内黒土器鉢1点B1類、同表4点B1類がある。須恵器は出土していない。

(2)所見

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定される。

51号住居(第123・124図、第46表、P L. 35・83)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区西側内、17区J-8・9グリッド内に位置している。重複する遺構は、45号住居に切られ、52号住居を切っている。周辺遺構には、北側5m程に44号住居、南側4m程に47号住居、南西側3m程に60号住居、西側4m程に54・55号住居が位置している。

形状は、東側を45号住居に切られて失っているため詳細は不明であるが、残存部分の状態から正方形基調であったことが推定される。竈・貯蔵穴等屋内施設は45号住居により失われている。主柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。

住居の掘方は、露呈部の南側で発見されている。土坑状に不整形で広がる掘り込みが顕著である。

出土遺物は、図化掲載した須恵器糞1(B1類)は床面直上で出土している。この糞の傍らから、壁際の床面直上層堆積土上で河原礫が集中して出土している。掲載した石器2は、この礫の集中部分から出土している。未掲載遺物では、土師器環2点(B1類1点・C1類1点)。同埴2点(B1類)。同糞11点(B1類)がある。

(2)所見

当該住居の時期は、住居跡の新旧関係と出土遺物の様相から、6世紀後半頃～7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

52号住居(第124図、第46表、P L. 35・83)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区西側端、17区J・K-8・9グリッド内に位置している。重複する遺構は、45・51号住居に切られている。周辺遺構には、北側5m程に44号住居、南側4m程に47号住居、南西側3m程に60号住居、西側4m程に54・55号住居が位置している。

住居の形状は、東隅部を51号住居により失われているが、正方形を呈していることは確実である。規模は、軸長4.77m、幅4.63mを測る。主軸方位はN-66°-Eを指す。残存深度は39cm程である。竈は、北東壁の中央部に備えているが、やはり45号住居の攪乱により大半を失っている。このため、竈の詳細は不明である。貯蔵

穴(P1)は、東隅部の壁下に設けられている。形状は横長方形を呈する。規模は縦0.58m、横0.70m、深さ0.57m程である。主柱穴は4本(P2～P5)が床面上で発見されている。

住居の掘方は、南西壁下側で顕著で、北・東隅部周辺では土坑状の掘り込みが認められている。南西壁下側では、土坑状の掘り込みが接続する状態で、隅部が最も深く掘り込まれている。また、柱穴状の掘り込みも認められているが性格は不明である。

出土遺物は、図化掲載資料で床面直上などの個別に記録を留めた資料は無い。全て覆土内一括収納されている。未掲載遺物では、土師器環22点。同高環4点。同埴類4点。同糞類82点がある。

(2)所見

住居の中軸線は、東隅部が失われていたため、南西壁の垂直二等分線の中軸に読み替えた。この中軸線は、住居をほぼ二等分している。この中軸線の北東壁の通過位置は、竈左側壁際に当たる。恐らく、竈は北東壁の中心に左側壁を置き設置した可能性が類推される。

住居の掘方の状況から、南西壁と南東壁を概ね直角に設定し、南西壁を構築基準面として住居の構築を行ったことが考えられる。そして、壁下端での屋内規模は、4.5mが計測される。

主柱穴4本(P2～P5)は、その配置位置を壁下端からの距離で数値比較すると、壁下端-柱穴(平均値):柱間(平均値):壁下端間距離は、1.004m:2.458m:4.5mであり、公約数を30cmとすると、おおよそ3:8:15、壁下端部-柱穴:壁下間距離は1:5の数値が得られる。前述した47号住居の改築以前、構築当初と同一の数値である。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1はB1類。同赤色塗彩の高環2はB1類。同小型甕はB1類。須恵器高環3はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類22点(黒色土器6点を含む)。同高環B1類4点。同埴B1類4点。同糞類B1類82点がある。

当該住居の時期は、出土遺物と住居形状の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

53号住居(第125～128図、第46・47表、P L. 36・83・84)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内西端側、17区L・M-10・11グリッド内に位置している。重複する遺構は、南東側で55号住居を切り構築している。周辺遺構には、北東側至近に57号住居、南西側至近の位置に59号住居、西側3m程に58号住居が位置している。

形状は、正方形を呈するが、北壁側が若干歪んでいる。規模は、軸長5.64m、幅5.80mを測る。主軸方位はN-81°-Eを指す。残存深度は51cm程である。

屋内施設では竈を東壁の中央程に備えている。貯蔵穴(P1)は、隅部の東壁下に設けられている。形状は不整形を呈する。規模は縦0.78m、横0.80m、深さ0.78m程である。主柱穴は4本(P2~P5)が床面で発見されている。また、東壁中央部の直下でP6が発見されている。壁溝は未発見である。

竈は、東壁中央部に備えている。形状は非常に均整の取れた状態である。袖は屋内側に突出する。左袖の屋内側先端には礫を据え、焚口の補強を行っている。右袖屋内側先端は土師器甕(25)を据え補強を行っている。燃焼部中央部には、地山礫を用いた支脚を備えている。掘方では、左右の袖部分は、地山ローム土を削り出している。奥壁側は箱型に掘り込まれている。土層断面では、器設部奥壁面に相当する部分の42~44層土がシルト土とローム土からなり、煙道部に34層土が一括で埋没している状況から、調査段階には、器設部から煙道部にかけての天井部が残存していたことが窺われる。図中破線表現を行った部分は、推定器設部奥壁部分である。

住居の掘方は、貯蔵穴周辺の東隅部周辺と南隅部周辺に土坑状ないし土坑状の連続する状態が認められる。この2か所以外では、ほとんど認められない状態である。

出土遺物は、図化掲載遺物で、床面直上出土は竈部分以外では無かった。床面直上層出土では土師器環5が1点である。特殊な状態として、土師器甕20がP5の底面から出土している。竈部分では、右袖先端に設置された土師器甕(25)。焚口天井部の補強材に用いられた土師器甕22・23があり、土師器環2がこの甕と共に出土している。未掲載遺物では、土師器環153点(黒色土器45点・内黒土器13点・外黒13点を含む)。同高環9点(内黒環部1点を含む)。同埴1点。同甕類356点。土師器で赤色塗彩を施した器種不明1点がある。

(2) 所見

竈は、住居に設定した中軸線が竈左袖左壁側に当たっている。竈の構造は、支脚位置と燃焼部の幅員から縦列の器設の可能性が考えられる。構築は、東壁面に向かい、右袖内側壁を直角に据え、必要な空間規模の距離を採り左袖の構築を行っている。構築基準は右袖内側壁と考えられる。

南壁中央部分壁直下で発見されているP6は、配置位置の状況から、恐らく出入口部分の施設に伴う柱穴跡と考えられる。

住居の掘方はほとんど認められない位に無駄なく構築されている。南壁・西壁・南西隅部の状態は、直線的な双方の壁と直角に鋭い南西隅部での構成である。この状況から、西壁を構築基準辺として住居の構築が行われたことが推定される。そして、西壁を基準とすると、西壁の下端距離は5.1mになり、中軸線上の壁下端距離での規模も5.1mが計測される。恐らく、住居構築段階では5.1m規模の正方形を思考して構築があったと考えられる。また、この形状に何らかの状況が北壁を歪ませ、発見された状態を生んだものと思われる。

主柱穴4本(P2~P5)の配置位置は壁寄りに成っている。この主柱穴の配置状態を数値に換算すると、壁下端-柱穴(平均値):柱間(平均値):壁下端間距離は、1.1m:2.98m:5.1m、公約数30cmで3.7:10:17、壁下端-柱穴:壁下端間距離は1:4.6になり、1:4と1:5の中間様相になる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・2・4・5・8・9はB1類、7はC1類、3・6・10はC3類。同高環11・12・14はB1類。同台付鉢13はB1類。同鉢15・16はB1類。同甕類19~24・27~29はB1類、25・26はB2類である。須恵器2点はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類138点(黒色土器45点・内黒土器13点・外黒13点を含む)、同C1類13点。同高環B1類9点。同埴B1類1点。同甕類B1類347点、同D4類9点がある。器種不明の赤色塗彩土器はB1類である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内西端側、17区K・L-9グリッド内に位置している。重複する遺構は、北側で55号住居を切り、南側で60号住居を切っている。周辺遺構には、北側3m程に53号住居、東側4.5m程に52号住居、西側3m程に59号住居が位置している。

形状は、正方形基調と考えられるが、東壁側が歪んでいる。この東壁の歪みは、南東に竈を据える部分で、俯いた状態に成っている。規模は、軸長3.94m、幅4.00mを測る。主軸方位はN-75°-Eを指す。残存深度は22cm程である。竈は東壁に備え、貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は円形を呈する二重構造である。規模は径0.5m深さ0.85m程である。支柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。壁溝も未発見である。

竈は、屋外が屋内より長く突出している。袖は瘤状気味でやや短い。燃焼空間の幅はやや細く煙道に延びている。土層断面C-C'では、底面(使用面)が2面認められている。平面図左上袖上と土層断面上に記した「a」は改築以前の状態での上立ちり部分である。掘方は、屋外部の掘り込みが複雑な様相を呈している。特に煙道部の掘り込みは三重構造状である。規模は、全長1.35m(屋内長0.62m、屋外長0.73m)、袖基部幅1.15m、焚口部幅0.58m、燃焼部幅0.48m、煙道部幅0.23mを測る。

住居の掘方は、全体的に掘り込まれ、北・南壁下では土坑状で顕著に認められる。特に東側では、北側から連続する状態の掘り込みが「L」字状を呈し、東壁の北東隅部に達した部分から東壁の歪みが生じている。また、柱穴状の掘り込みが目立っている。

出土遺物は少ない。図化掲載遺物で調査記録図に記録されているものは無く、全て覆土内扱いの遺物である。未掲載遺物では、土師器環46点。同高環3点。同糞類46点がある。

(2)所見

竈の掘方で、屋外域の煙道部分は三重構造の状態であるが、使用面に整合する状態ではない。当初構築の竈の埋没(23層土)している。また、掘方内左側には狭いが平坦面が残されている。この平坦面は、土層断面C-C'で認められている改築以前の竈に伴う掘方と考えら

れる。この状況と掘方平面とを勘案すると、改築以前は燃焼空間がやや広い状態であったと考えられる。

住居の掘方は、北壁と西壁が直線走行する壁を構築し、北壁側に顕著な土坑状の掘り込みが認められている。また、双方の接する北西隅部はほぼ直角で鋭い。そして、東壁で北東隅部周辺の掘り込みは、床面相当面と掘方の土坑状の底面が二重構造となっている。この相対部分の西壁でも同様な二重構造の掘方が認められる。この双方間の距離と、西壁下端の距離は3.6mが計測出来、構築当初は北壁を構築基準とし、西壁がこれに準じたことが窺知される。しかし、東壁で歪みが生じている。同様な状況は23号住居でも認められており、北壁側—西壁側の掘削の間に竈側の掘削を開始し、竈形状が決した後に、南壁側の掘削が行われることにより歪みを生じせしめた可能性がある。

通常、時期が異なるがこの形状の住居は、10世紀後半～11世紀前半に散見される住居形状である。この時期での形状は、明確な構築意思を以て構築されていることが確実である。それは類例が多いことで証明されよう。

北壁・西壁の壁下端規模が3.6m程であることは掘方から窺え、東壁部分の歪みは、突発的な状況により生じたことと理解される。そして、構築当初はこの3.6mの正方形企画で計画があったことが類推される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器類は全てがB1類。須恵器環蓋5は太田産である。このほか、希少な類例として砥石(6)がある。また遺存状態が不良であるが刀子(7)が出土している。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

55号住居(第130図、第47表、P.L. 37・84)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内西端側、17区K・L-9・10グリッド内に位置している。重複関係では、北側を53号住居に、南側を54号住居に切られている。周辺遺構は、北側3m程に49・57号住居、東側8m程に44号住居、南東側3m程に52号住居、西側3m程に59号住居が位置している。

形状は正方形を呈する。規模は、軸長4.38m、幅(4.30)mを測る。主軸方位はN-81°-Eを指す。残存深度は

20cm程である。竈は東壁中央より南東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は円形を呈する。規模は縦0.5m、横0.57m、深さ0.46m程である。主柱穴は4本(P2～P5)が発見されている。竈は、右袖側が54号住居の攪乱により右側部を失っている。形状は、屋外への掘り込みは少なく、袖は屋内に長く突出している。燃焼部と煙道部の形状的境は無く、細い舌状を呈する。掘方は煙道部先端側が認められる。平面図では壁中位に掘り込む状態に見えるが、底面は住居の掘り込みとほぼ同位である。

主柱穴4本(P2～P5)はやや壁寄りに設けられている。P6は桁の補助柱穴と思われる。P7は出入施設に伴う柱穴跡と思われる。

住居の掘方は、住居南半分と北東隅部から北壁下で認められ、中央部には土坑状の掘り込みも認められる。この様な掘方は当該住居のみである。特異な住居でもある。

出土遺物は非常に少ない。規模図化掲載遺物で、記録図に記されたものは無い。いずれも覆土内で扱われた資料である。未掲載遺物では、土師器7点、同裏29点がある。

(2)所見

住居は53・54号住居の攪乱を上坑ながらも形状等に就いては推断される。遺存深度が浅いのは、後世の攪乱により上位部分が失われたことに原因すると考えられる。

竈は、54号住居により右袖が部分的に攪乱されているため、詳細な部分にやや不明な点がある。屋外への掘り込みが少ない点は、古式な形状を認めることが出来、器設部は、燃焼空間が狭いことから、縦列の併架式と考えられる。左袖は内側壁を壁に直行する状態に据えているが、燃焼部及び煙道部形状が細い舌状のため、構築基準として先行構築された袖は不明である。

主柱穴4本(P2～P5)はやや屋内側に備えているが、53・54号住居の攪乱により詳細は不明であるが相対的位置は確認出来る。柱穴位置の傾向として、竈を備える東壁と西壁下端から柱穴までの距離と、北壁と南壁下端と柱穴との距離にはやや異なりが認められ、中軸方向が壁下端からの距離が長い。この傾向は46号住居でも認められる。そして、壁下端—柱穴(計測可能な6距離での平均値):柱間(平均値):壁下端間距離は、0.898m:2.28m:4.25m、公約数は24・30cmが得られる。前者が4:9.5:18、後者が3:6.7:12であり、壁下端—柱

穴:壁下端間距離は、1:4.5と1:4である。

住居の掘方は、特異な状態である。掘り込みの量比から南壁側を基準とした構築基準辺が推測できるが、壁自体が54号住居の攪乱により失われているため詳細は不明である。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器B1・2はB1類。同赤色塗彩高杯3・4はB1類。同埴5もB1類である。未掲載遺物では、土師器B1類5点、C1類2点。同裏類B1類19点、同D4類10点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

56号住居(第131図、第47表、P.L. 37・38・84)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に古地し、調査区内西端側、17区H・1-6・7グリッド内に位置している。重複関係では、住居の大半を42号住居に切られている。周辺遺構には、北側6m程に45・51・52号住居、東側3m程に29号住居、南東から南側の至近距離に28・38号住居、南西側2.5m程に46号住居が位置している。

形状は42号住居の攪乱により大半が失われていることから不明である。竈は北壁の中央部からやや北東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P1)は、東隅部の壁下に設けられている。形状は楕円形を呈し二重構造を呈している。規模は縦0.42m、横0.54m、深さ0.36m程である。柱穴は未確認である。

竈は北壁に備えている。形状は、左袖の先端側を42号住居に切られて失っている。全体に細長い舌状を呈している。煙道部は屋外に長く突出し、袖も屋内側に長い。燃焼部と煙道部の境は階段状に立ち上がっている。

住居の掘方は、残存部分を見る限りに於いて、住居内東側に集中するが詳細は不明である。

出土遺物は非常に少ない。図化掲載遺物2点は竈内での出土である。未掲載遺物では、土師器7点(黒色土器2を含む)。同裏類11点がある。

(2)所見

竈は煙道部分が極度に長い特徴的な形状で、燃焼部から煙道部へは階段状の立ち上がりを行っているなど、当該遺跡では特異な竈である。また、右袖は二重構造的な状態である。造りは、右袖内壁側が北壁に直角に据えら

れ、燃焼空間・煙道部分まで直線的に構築されている。この状態から、右袖を構築基準にしたことが窺われる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1はB1類、同裏2もB1類である。未掲載遺物では、土師器環7点はB1類、同裏A類1点、B1類10点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相、住居の切り合い関係から、7世紀中頃には廃棄されたことが推定出来る。

57号住居(第132図、P.L. 38)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内西端部、17区K・L-11グリッド内に位置している。重複関係は7号溝・49号住居に切られている。北側9m程に50号住居、東側7m程に44号住居、南東側至近に53号住居が位置している。住居は7号溝・49号住居の攪乱により大半を失っている。

形状は、7号溝と49号住居の重複状態から、当該住居の南側への延長は考えられず、住居の幅員は残存部分とさほど変わりがないと考えられる。規模は、軸長 $2.46+\alpha$ m、幅 $3.13+\alpha$ mを測る。主軸方位は $N-40^{\circ}-E$ を指す。残存深度は7cm程である。平面形状は正方形であろうか。竈は東壁に備えたことが推定されるが、49号住居に破壊され痕跡が残っていない。貯蔵穴も失われている。主柱穴は唯一P2が配置位置上推定されるもの、南側及び北側での相対位置の柱穴が未発見であることから確實視は出来ない。

住居の掘方は、西壁側で土坑住居の掘り込みが顕著であるが、全体的に残存不良のため詳細は不明である。

出土遺物は無かった。

58号住居(第132～135図、第48表、P.L. 38・39・85・86)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内西端部、17区M・N-10・11グリッド内に位置している。重複関係はない単独住居である。周辺遺構には、東側3m程に53号住居。南側至近の位置に59号住居が位置し、西側は谷地である。

形状は縦長方形を呈する。規模は、軸長3.38m、幅3.06

mを測る。主軸方位は $N-76^{\circ}-E$ を指す。残存深度は52cm程である。竈は東壁中央部に備えている。貯蔵穴(P1)は、隅部の南東隅部壁下に設けられている。形状は不整縦長方形を呈する。規模は縦0.51m、横0.39m、深さ0.52m程である。主柱穴は生活面及び掘方側面でも発見されていない。壁溝も未発見である。

竈は東壁に据えている。形状は屋内に長く突出する袖を備え、煙道部は屋外に延びている。燃焼部は広く煙道部は狭く伸びている。この燃焼部は、左側壁は直線的に構築されているが、右側壁は鍵の手状に屈曲する壁面構造を備えている。底面は煙道端部に向かい若干立ち上がる程度で、ほぼ同位面である。掘方は煙道部分が突出する状態で、燃焼部と焚口部分は土坑状の掘り込みになっている。規模は、全長1.03m(屋内長0.61m、屋外長0.42m)、袖基部幅0.95m、焚口部幅0.50m、燃焼部幅0.45m、煙道部幅0.25mを測る。

住居の掘方は、北隅部にやや大きく土坑状に掘り込んでいる。また、北壁の直下は、生活面と掘方面が階段状になった状態である。

出土遺物は、図化掲載遺物で、床面直上出土は皆無で、掲載した土師器環2、同裏類(12・16を除く)・甕は全て床面直上層でまとまった状態で出土している。他は覆土内での出土である。未掲載遺物では、土師器環24(黒色土器2を含む)点、同裏121点がある。

(2)所見

竈は、中軸線が左内側壁に当たる。左袖は、壁面に向かい直角に据えられている。燃焼部の造りは左右で異なっているが、これは左袖左側壁を構築基準にした結果と考えられ、必要な幅員を設定した結果が右袖内壁の状況であろう。

住居の掘方は、北隅部で顕著で、北壁直下の状況は二重構造になっている。壁の状態では、北壁に最も直線的な状況が看取され、北壁の掘方面は、北壁と直行する状態である。この状況は、北壁を構築基準として看做されるが、住居の残存状況が良好とはいえないので確實視出来ない。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1・2はB1類、3・4はC1類。同裏5はB1類。同裏類は全てB1類である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、

7世紀中頃には廃棄されたことが推定出来る。

59号住居(第136～139図、第48・49表、P.L. 39・87)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内西端、17区M・N-8～10グリッド内に位置している。重複関係の無い単独住居である。周辺遺構には、北側至近に58号住居、北東至近に53号住居、東側2.5m程に54・55号住居、南側2m程に64・67号住居、南西側2m程に62号住居が位置している。

形状は、西隅部に歪みがあるものの正方形基調である。規模は、軸長7.54m、幅7.22mを測る。主軸方位はN-70°-Eを指す。残存深度は47cm程である。竈は東壁の中央部より東隅部に寄った位置に据えている。貯蔵穴(P1)は、東隅部の壁下に設けられている。形状は円を呈する。規模は縦0.85m、横0.82m、深さ0.65m程である。主柱穴は5本(P2～P6)が床面で発見されている。壁溝は壁下で全周する。

竈の形状は、やや大きい竈状の両袖が屋内に、燃焼部の後半部と煙道部が屋外に延びている。底面は床面とほぼ同位で、煙道部奥壁部分で立ち上がっている。右袖焚口部のピットは後世のものと判断される。規模は、全長1.50m(屋内長0.68m、屋外長0.82m)、袖基部幅1.38m、焚口部幅0.80m、燃焼部幅0.52m、煙道部幅0.30mを測る。

住居の掘方では、非常に顕著な状態である。北壁下では、「コ」の字状に掘り込みが認められ、東西壁下では、溝状とも土坑状とも言い得る状態で広く掘り込みが認められ、南壁下から住居中央部側に土坑状の掘り込みが認められる。また、柱穴跡ないし柱状の掘り込みも認められ、特にP15～17は南壁中央部直下に配置されている状態から、出入口に伴う施設の柱穴と考えられる。

出土遺物は、図化掲載遺物で、床面直上出土遺物は、土師器環2・7・8。同高環14がある。他は覆土内での収納遺物である。未掲載遺物では、土師器環156点。同高環14点。同赤色塗彩埴1点。同有孔鉢1点。同鉢1点。同裏423点がある。

(2)所見

竈の左袖は、東壁に向かい直角に据えられ、焚口から煙道部奥壁までの側壁は直線的な造りに成っている。右

袖は、右側に流れるような状態で据えられている。この状況は、左袖左側壁を基準にして必要規模を右壁側に向かい求めた結果の状態と判断される。そして、構築段階では左袖内壁面を構築基準辺として構築したことが判断される。

住居の掘方では、北壁の直線的な状態と、壁下の「コ」の字状の掘り込み、北隅部が直角を成している状況から、北壁が構築基準辺と判断される。

主柱穴の配置位置は、全体的に壁に寄った配置に成っている。この配置位置を数値で見ると、中軸方向(東壁下端・西壁下端からの距離)では、P2-東壁下端が1.52m、P4-西壁下端が1.48m、住居形状が歪む西隅部で、西壁-P5の距離が1.85m、P6-東壁下端が1.75mで、平均1.65mである。これに対して中軸の直行方向(北壁下端・南壁下端からの距離)ではP2-南壁下端が1.4m、P4-南壁下端が1.35m、P5-北壁下端が1.34m、P6-北壁下端が1.35mで、平均1.36mで均質である。このことは、総じて南北壁からの距離は計画的に配置があったことを示唆している。そして、南北壁下端距離7.0mとの配分は、1:5である。東西側での柱穴-壁下端距離には、数値に幅があるため数値化は不向きであろう。この1:5の比率からも柱穴の配置は壁寄りであることが判断される。また、構築基準辺の北壁の下端長は7.2mであるのに対して南壁は6.8mである。この双方の距離差が歪みの原因であろうが、単なる誤差とも思えず、何らかの要因で生じたことが推測されるが、要因の特定はあたわなかった。他方、構築基準辺の北壁下端長7.2mはこれまでに得られた公約数30cmの24単位に当たり、24cmでは30単位になる。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1～6・8～12はB1類、7はC3類、13はC1類である。同高環14・15はB1類。壺類17～19はB1類。同裏類20～26はB1類である。須恵器では、高環16はB1類。同裏28は乗附産。29はB1類である。未掲載遺物では、土師器環B1類150点(黒色土器95点・内黒土器3点を含む)、C1類3点、C3類3点。同高環14点・同有孔鉢1点・同鉢1点・赤色塗彩埴1点はB1類であり、同裏類A類4点、B1類441点、B4類8点がある。土師器環黒色土器の出土量が多い点に注意される。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、

7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

60号住居(第139・140図、第49表、P.L. 40・87)

(1)概要

当該住居は西側台地部の緑辺部に古地し、調査区内西端側、17区K・L-7～9グリッド内に位置している。重複関係は、54号住居に北隅部を切られている。その他、87号土坑及び多くの掘乱により破壊されている。このため、残存状況は極めて悪い。周辺遺構には、北東側3m程に52・51号住居、南東側2m程に47号住居、南西側で接する状態で61号住居、北西側2m程に59号住居が位置している。

平面形状は、主柱穴の配置状態から正方形であったことが窺われる。推定される規模は、1辺4.8m程である。主軸方位はN-50°-Eを指す。残存深度は19cm程である。竈は発見されていない。出土遺物の様相からは、竈を備える住居とは思わず、むしろ炉跡を備える住居であったと判断される。そして、記録図には、住居内中央部分に「遺物集中範囲」として弧形状に示された範囲がある。写真では、黒く落ち込む内側に土器が破片化した状態で集中している。そして落ち込みの範囲の中に、長さ30cm、幅20cm程の礫が床面直上で出土している。位置的状況から恐らく炉跡と考えられる。また、写真には右手前側に小土坑が写っている。この土坑の位置は推定される住居の内側、南隅部に当たっている。可能性として貯蔵穴が想起される。

住居の掘方は、ピット状の掘り込みが図化されているが性格等は不明である。

出土遺物は、図化掲載遺物で、床面直上出土は、土師器高環(1)1点である。他は、覆土内出土資料である。未掲載遺物では、土師器内黒環1点。同高環9点。同埴1点。同埴類46点がある。

(2)所見

推定される住居規模から、柱穴位置を見ると、柱穴は屋内側に寄った配置になっている。住居規模が確定は無いため、数値化は不可能だが、屋内側に寄った配置が確認出来る。

出土遺物の胎土は、全てB1類である。須恵器の出土は無かった。

当該住居の時期は、住居形状と出土遺物の様相から、

5世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

61号住居(第140図、第49表、P.L. 40・88)

(1)概要

当該住居は西側台地部の緑辺部に古地し、調査区内西端側、17区K・L-7・8グリッド内に位置している。重複関係は無い単独住居であるが、大規模な掘乱により遺存状態は極めて不良である。周辺遺構には、北東側至近に60号住居、東側5m程に47号住居、南側5m程に63号住居、西側3m程に64号住居、北西側5m程に59号住居が位置している。

調査は、遺存状態が不良であったため、床面での露呈は行われず掘り方で露呈されている。このため詳細は不明である。

形状は、歪みが顕著な縦長方形を呈する。規模は、軸長4.26m、幅2.48mを測る。主軸方位はN-97°-Eを指す。残存深度は0cm程である。竈は東壁の中央部から北東隅部に寄った位置に備えているが、遺存状態が悪かったため詳細は不明である。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形を呈する。規模は縦0.60m、横0.60m、深さ0.41m程である。主柱穴及び壁溝は生活面及び掘り床面でも発見されていない。

竈は、平面図上では煙道部分の掘り込みが図化されている程度であるため、詳細は不明である。

住居の掘りは、中央部に大きな土坑状の掘り込みがあり、北側では土坑状の掘り込みが認められている。

出土遺物は、貯蔵穴部分で集中して出土している。図化掲載された1～5が該当する。土師器環(1)・同小型甕(4)・同甕(5)は貯蔵穴に落ち込む状態で。土師器環(2)・同小型甕(3)は、貯蔵穴傍らの床面直上で出土している。未掲載遺物では、土師器環3点。同赤色塗彩高環2点。同埴類11点がある。

(2)所見

住居は歪んだ状態である。この状態の中で、北壁と西壁はやや直線的な造りであり、北西隅部は他の3か所の隅部に比較して鋭く直角に近い。この状況から、北壁を構築基準と看做すことが出来る。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1はC1類で、2～5はB1類である。甕6はD1類。未掲載遺

物では、土師器類全てB1類である。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

62号住居(第141～143図、第50表、P.L. 40・41・88)

(1)概要

当該住居は西側台地部の緑辺部に占地し、調査区内最西端、17区N～P-7・8グリッド内に位置している。重複関係では、1号溜井に切られており、住居の中央部から西壁側を失っている。周辺遺構には、北東側2m程に59号住居、東側2m程に64・67号住居、南側4m程に65・66号住居が位置している。

形状は、1号溜井による破壊部分を復元すると正方形であることが確認出来る。しかし、北西隅部の位置が確定できないため、詳細な状態までは復し得ない。規模は、軸長5.94m、幅6.4m(南東壁長)を測る。主軸方位はN-30°-Wを指す。残存深度は37cm程である。

竈は、北西壁と北東壁の2か所で発見されているが、住居の廃棄段階で使用されていたのは北西壁部分の竈である。北東壁で発見されている竈は、屋内部分が破壊され、住居の壁の一部となっていることから、構築当初の竈と考えられる。すなわち、北西壁の竈は移設後の竈である。

貯蔵穴は北隅部にP1、東隅部にP2の二か所で発見されている。P1は改築後の竈に対応すると考えられ、P2は構築当初の竈に対応すると考えられる。P1は不整楕円(瓢形)状で二重構造である。規模は縦0.78m、横0.84m、深さ1.15m程である。P2は長方形を呈する。規模は縦0.58m、横0.65m、深さ0.91m程である。

主柱穴は4本(P3～P6)が床面で発見されている。壁溝は北西壁の西側半分以外で発見されている。

竈は上述の新田関係がある。住居構築当初の竈は、旧状での中軸線より東隅部に寄った位置に据えている。屋外部分しか残存していなかった。形状は、箱状の燃焼部の上端側に煙道が取り付いている。掘方はほぼ同様な形状をしている。計測可能な部位での規模は、燃焼部幅0.6m、煙道部幅0.35mを測る。

移設後の竈は、中世ピットと攪乱により上半部と燃焼部の右奥壁側が破壊され、煙道部を失っている。位置は中軸線より北隅部にやや寄った位置に据えている。配置

位置は構築当初の竈と同様である。形状は均整が採れた竈で、屋内側に延びる袖の先端に土師器裏(右袖7・左袖9)を逆位に据えている。燃焼部の奥壁は、掘方面より40cm程手前で立ち上がっており、更なる改築があったことが窺える。規模は、残存長0.93m(屋内長0.68m、屋外長0.25m)、袖基部幅1.10m、焚口部幅0.37m、燃焼部幅0.43mを測る。

住居の掘方は、1号溜井の破壊によりほとんどが失われている。辛うじて壁周辺が遺存するが、顕著な掘り込み等は認められない。床面との比高差は10cm内外である。ただ、記録図によれば、床面上で壁溝が未発見部分であった、北西壁西半分部分で壁溝が発見されている。恐らく床面での調査漏れと思われる。この他に記録された状態は無い。

出土遺物は全体的に少ない。1号溜井による破壊に原因していることが推定される。図化掲載した土師器環1は壁際で覆土下層から出土している。同糞類では7・9が竈袖先端、小型糞5は北壁際で覆土下層から、同糞10は竈右袖傍らの床面直上で出土している。未掲載遺物では、土師器環13点(黒色土器4点・内黒土器1点を含む)。同高環1点。同糞93点がある。

(2)所見

住居は南西壁のほとんどを失っているため詳細は不明な点が多い。住居形状は北西壁と南東壁との壁下端間での距離は5.80～5.87mを測り、ほぼ平行配置の状態が確認出来る。そして、北東壁は北隅部分だけに北西壁から直角に曲がる状態が確認出来る。しかし、北東壁の南側の大半は東側にやや開いた状態で構築され、東隅部では南東壁と直角に成っていない。また部分的ではあるが、南西隅部の残存部分では概ね直角の状態が確認できる。これらの状況から、北西壁と南東壁の平行する状態は、構築当初段階での計画性が窺知され、双方のどちらか一方が構築基準辺と考えられる。

主柱穴の配置状態は、南西壁を失っているため詳細な位置は如何ともしがたいが、北西側のP3・P4は壁寄りの配置である。特にP3は北東壁寄りに、P4は南東壁寄りに配置している。しかし、P5・P6は双方ともP3・P4より南西壁から屋内側に配置している。この状態を数値で確認すると、北西壁と南東壁との壁下端距離と、北西壁-P3・南東壁-P4との距離関係は、1.22

m:5.87mと1.04m:5.87mであり、1:4.8と1:5.6で、平均値では1:5.2になる。同様に、P5・P6で確認すると、P5は1.22m:5.80m=1:4.8、P6は1.15m:5.80m=1:5.0、平均1:4.9である。この双方の数値的からも柱穴位置が壁寄りであることが確認出来る。しかし、現状ではやはり南西壁と西隅部の状態が不明な以上詳細は不明である。

移設後の竪は、攪乱により煙道部を失っている。失われた煙道部は、構築当初の竪の状態を見る限り、恐らく、細い煙道が燃焼部奥壁から立ち上がった位置から屋外に延びたことが推定される。しかし、燃焼部の掘方は、使用面からさらに奥側に40cm以上伸びていることから、構築当初とは異なる形状であったことが窺える。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器は全てがB1類である。未掲載遺物では、土師器杯B1類12点(黒色土器4点・内黒土器1点を含む)、C1類1点。同高杯B1類1点。同甕類B1類93点がある。

当該住居の時期は、竪の形状と出土遺物の様相から、7世紀前半頃には廃棄されたことが推定出来る。

63号住居(第144・145図、第50表、P.L. 41・42・89)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に古地し、調査区内西端側、17区L・M-5・6グリッド内に位置している。重複関係は、住居の南東部分が68号住居を切り構築している。周辺遺構には、北側5m程に61号住居、北東側4m程に47号住居、南東側46m程に46号住居、西側6m程に65号住居、北西側5m程に64・67号住居が位置している。

形状は、南東隅部側が若干歪むが、正方形を呈している。規模は、軸長5.0m幅4.40mを測る。主軸方位はN-84°-Eを指す。残存深度は60cm程である。竪は東壁中央部に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は楕円形を呈する。規模は縦0.58m、横0.68m、深さ0.42m程である。主柱穴は床面で4本(P2~P5)、掘方面で更に3本(P7・P17・P12)が発見されている。壁溝は東壁の南半部分以外で廻っている。

竪は、遺存状態が良好で、器設部の奥壁から煙道部にかけて天井部が残存している。形状は全体的に細長い舌

状を呈する。長い両袖が屋内に突出し、煙道部分が短く屋外に突出している。掘方は、住居底面と同位の底面を備えている。屋外の掘り込みは浅く、山形状に突出する程度である。左右両袖直下には、ビット状の掘り込みが目立っているが、補強材等の掘方とは異なると考えられる。規模は、全長1.15m(屋内長0.96m、屋外長0.19m)、袖基部幅0.97m、焚口部幅0.55m、燃焼部幅0.50m、煙道部幅0.17mを測る。

住居の掘方は、住居中央部分に楕円形状の土坑状の掘り込みが発見され、四隅部分に掘り込みが認められている。また、住居内西側のP3・P17と西壁部分には溝状の掘り込み(M2・3)が認められ、南壁下でもM1が認められる。この他小ビット状の掘り込みが発見されている。

出土遺物は非常に少ない。図化掲載遺物で、床面直上等の記録遺物は無く、全て覆土内出土である。未掲載遺物では、土師器杯37点。同高杯8点。同甕類130点がある。(2)所見

住居は南東隅部が若干歪んでいるが、四壁は直線的な造りになっており、東壁・西壁は、北壁に対してほぼ直角に構築されている。そして、東壁と西壁は平行関係にある。しかし、南壁は北壁に対して平行関係にはない。これらのことから、北壁を構築基準準として置いていることが窺われる。床面上での壁下端間規模は4.32mで、24cmの18倍数でもある。

柱穴は6本発見されている。東側のP7・P12は掘方面で発見されていることから、古期の柱穴跡と判断され、住居の上屋が改築されたことを示している。主柱穴の配置状態は、西側は屋内側に寄った位置に配置しているが、東側はやや壁寄りの配置に成っているが、据変え後のP2・P5は屋内寄りに配置している。しかし、南北壁との関係では、いずれの柱穴もやや壁寄りの配置を採っている。特に、構築当初の配置状態は平行四辺形状状態になり不均整な状態となっている。同様に改築後も不均整な配置状態に成っている。配置状態を数値化すると、壁下端距離4.32m、壁下端一柱穴跡:壁下端距離は、西側P3・P4側の平均が1.22mで1:3.54。東側P7・P12一壁下端では平均1.02mで1:4.24。北側P12・P17側が平均0.945mで1:4.57。南側P7・P2側の平均0.79mで1:5.47であり全体の平均は1:4.35である。柱の

第3章 調査の成果

配置位置のばらつきがそのまま数値として現れている。

この他の柱穴では、P 8が南壁から若干離れて発見され、傍らに溝状の掘り込みも発見されている。配置位置から、このP 8は人出入口の施設に伴う柱穴と考えられる。

竈は、主体部分を屋内側に構築する古期の特徴を備えている。構築は、東壁の中心に左袖左側壁を据え、右袖内側壁を東壁に対して直角に設定し、必要幅員を左側に採り構築されている。この状態から、右袖が構築基準面と判断される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環1がC 1類であるが、他の土師器全てと須恵器裏(11)はB 1類である。未掲載遺物では、土師器環B 1類33点(黒色土器10点を含む)、C 1類3点、C 3類1点。同高環B 1類7点、C 1類1点。同裏類B 1類127点、B 4類3点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

64号住居(第146・147図、第50表、P L. 42・89)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内南西端側、17区M・N-7グリッド内に位置している。重複関係では、4号井戸に切られ、67号住居を覆う様に切っている。周辺遺構には、北側2m程に58号住居、東側2m程に61号住居、南東側4m程に63号住居、南側3m程に65号住居、西側至近の位置に62号住居が位置している。

平面形状は、やや歪んでいるが正方形基調である。規模は、軸長3.98m、幅3.9mを測る。主軸方位はN-92°-Eを指す。残存深度は32cm程である。竈は東壁中央から若干北東隅部に寄った位置に備えている。貯蔵穴(P 1)は、北東隅部の壁下に設けられている。形状は楕円形を呈するが、西側が4号井戸に切られている。規模は縦0.5+a m、横0.58m、深さ0.80m程である。主柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。壁溝は、北東隅部から南西隅部の壁下で発見されている。

竈は、屋内側に瘤状の袖を突出させ、屋外側に燃焼部と煙道部を構築している。住居の中軸線は、竈の右袖中央に当たる。燃焼部は広く馬蹄形状を呈する。煙道部は細く、燃焼部底面から緩やかに立ち上がっている。掘方では、左右の袖部分で礫・土師器裏が出土している。右

袖は、礫で袖基部の芯材としている。左袖は、燃焼空間側に土師器裏片を直立させ、外側に礫を芯材としている。掘方の外形は三角形形状を呈している。規模は、全長0.98m(屋内長0.22m、屋外長0.76m)、袖基部幅1.12m、焚口部幅0.50m、燃焼部幅0.70m、煙道部幅0.20mを測る。

住居の掘方は、東壁端よりから南壁中央部付近までが最も深く、北壁中央部から西壁下で溝状に掘り込まれている。南壁の南西隅部寄りの部分では、階段状の掘り込みが認められている。この壁際の掘り込みにより、中央部は台状に盛り上がった状態になっている。

出土遺物は、図化掲載遺物で、床面直上出土は無い。床面直上層出土には、土師器環(2)、同裏(5)がある。他は覆土内の出土資料である。未掲載遺物では、土師器環13点。同高環1点。同裏類64点がある。また、住居内北西隅部では礫が5点集中して出土している。出土層位は床面直上層相当である。

(2)所見

住居形状はやや歪んでいる。四壁は緩やかに弧線を描く状態で、小規模住居であるが故の状況とも言えるが、下端は比較的直線的である。特に、西壁直下と南壁直下で直線的で、南西隅部も直角に近い。掘方も同部分では顕著である。この状況から、西壁側が構築基準面であったと判断される。

出土遺物の胎土では、図化掲載した土師器環2はC 1類で、他の土師器は全てB 1類である。須恵器裏9は太田産と考えられる。未掲載遺物では、土師器環B 1類12点(黒色土器1点を含む)、C 1類1点。同高環B 1類1点。同裏類B 1類64点がある。

当該住居の時期は、竈の形状と出土遺物の様相から、7世紀中頃には廃棄されたことが推定出来る。

65号住居(第148図、P L. 42・43)

(1)概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内南西端側、17区N-5・6グリッド内に位置している。重複関係は、66号住居の北東側を切っている。周辺遺構には、北側4m程に64・67号住居、東側5m程に63・68号住居、北西側7m程に62号住居が位置している。

形状は、正方形を呈する。規模は、軸長3.36m、幅3.50mを測る。主軸方位はN-82°-Eを指す。残存深度は

30cm程である。竈は東壁でも南東隅部に付近に備えている。貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられているが、竈の据え変えに伴い埋設されている。形状は楕円形を呈する。規模は縦0.65m、横0.43m、深さ0.30m程である。

竈は、南東隅部に接する位置に右袖を据えている。形状は、主軸を東壁に向かい25度程南に傾かせて構築している。このため、左袖より右袖が大きい。形状は細い舌状を呈している。瘤状の袖が屋内に突出し、燃焼部と煙道部は屋外に据えている。底面は焚口部から煙道部奥壁まで床面と同位である。掘方は、屋内側に不整楕円形状に掘り込み、屋外側には舌状に突出させ掘り込んでいる。調査所見によれば、右袖の据え変え段階に貯蔵穴埋設後の上面を同時に被覆している。左袖はこの段階では据え替えられていない状態が看取される。この状況から、据え変えは複数時に亘ることが判断される。規模は、全長0.77m(屋内長0.35m屋外長0.42m)、袖基部幅0.83m、焚口部幅0.47m、燃焼部幅0.40m、煙道部幅0.24mを測る。

住居の掘方は、土坑状の掘り込みが住居内縁辺側に広がるが、北東・南西・北西隅部に集中する傾向が認められる。特に、北西隅部のP8の掘り込みは床面下28cmまで達している。

出土遺物は極度に少ない。図化掲載し得る状態の遺物は無かった。未掲載遺物では、土師器高環1点、同類類2点である。双方ともB1類の胎上である。

(2) 所見

住居の壁は、西・北壁が直線的で双方が接する北西隅部は鋭角に近い状態である。これに対して、南西・北東隅部は緩やかな状態である。この状況から、西壁が構築基準辺と考えられる。

時期は、出土遺物がほとんど無かったことから決定が困難である。他方、住居の形状では、南東隅部寄りに竈を据える状況は、10世紀後半頃の住居の特徴でもある。竈も平面形状は同期の竈と相違はないが、煙道部の奥壁面がほぼ垂直に立ち上がる点に疑問が残る。また、7世紀前半の竈としても遜色はない。調査区内では6世紀を主体とする住居が多数発見されているが、平安時代の住居は皆無であり、遺物としても9世紀後半頃までの出土だけである。これらのことから、当該住居の時期は、7世紀前半ないし10世紀後半としておきたい。

66号住居(第149図、P.L. 43・44)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内南西端部、17区N・O-5・6グリッド内に位置している。重複関係は、65号住居が住居の東側を切っている。周辺遺構には北側4m程に64・67号住居、東側5m程に63・68号住居、北西側7m程に62号住居が位置している。

形状は横長方形を呈する。規模は、軸長0.56m、幅5.38mを測る。主軸方位はN-17°-Eを指す。残存深度は9cm程である。竈は無く、屋内中央部よりやや北側に炉を備えている。炉跡は、楕円形状に浅く皿状に掘り窪められている。南側に枕石を備えている。底面中央部は酸化被熱変色が認められる。規模は縦0.56m、横0.50m、深さ0.07m程である。貯蔵穴は南壁の両隅部で発見されている。南東隅部がP1、南西隅部がP2である。P1は隅丸方形を呈する。規模は縦0.76m、横0.78m、深さ0.05m程である。P2は楕円形を呈する。規模は縦0.80m、横0.70m、深さ0.30m程である。主柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。壁溝も未発見である。

住居の掘方は、極部分的な土坑状の掘り込みと柱穴状の掘り込みが認められている。

出土遺物は、極少量で図化掲載し得る遺物は無かった。未掲載遺物では、土師器高環2点、同壺・甕類12点がある。胎上はいずれもB1類である。

当該住居の時期は、5世紀中頃と考えられる。

67号住居(第149図、第51表、P.L. 44・89)

(1) 概要

当該住居は西側台地部の縁辺部に占地し、調査区内南西端部、17区N・O-5・6グリッド内に位置している。重複関係では、住居の半分以上を64号住居に切られ、東壁部分では4号井戸に切られている。周辺遺構には、北側2m程に58号住居、東側2m程に61号住居、南東側4m程に63号住居、南側3m程に65号住居、西側至近の位置に62号住居が位置している。

形状は、64号住居の破壊により失った部分を考慮しても均整の取れた正方形を呈することは確実である。規模は、軸長4.24m、幅4.7mを測る。主軸方位はN-79°-Eを指す。残存深度は60cm程である。竈は64号住居の掘乱により失われているが東壁に付設されたことは確実

である。貯蔵穴(P1)は、北東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形円形を呈する。規模は縦0.56m、横0.57m、深さ0.60m程である。一方、北西隅部では、P6が発見されている。P1の対象位置に当たるが深度は浅い。性格は不明である。主柱穴は4本(P2~P5)発見されている。壁溝は、64号住居の攪乱部分は不明であるが、住居の露呈部分では壁下で認められている。

住居の掘方は、やはり64号住居の重複により詳細は不明である。露呈部分では比較的浅い。また北東隅部ではM1がP5と北壁下端間を繋ぐ様な状態で発見されている。

出土遺物は、極少量で、図化掲載した土師器環1点(床面直上層出土・B1類)以外は作図し得なかった。未掲載遺物では、土師器類24点(B1類8点・B4類16点)がある。

(2)所見

壁の状態では、東・南壁の大半を失っているため詳細は不明だが、西壁は直線的である。恐らく西壁が構築基準辺であったと推定される。主柱穴の配置は屋内側に寄っている。主柱穴の配置を数値化すると、壁下端距離中軸側で3.98m、中軸直行幅3.9mでは、壁下端一柱穴:壁下端距離の中軸方向P4・P5では1:4.06。直行軸P2・P5では1:3.75、同P3・P4では1:3.98になり、およそ1:4の配置状態が判断される。

当該住居の時期は、住居形状と出土遺物の様相から、6世紀後半頃には廃棄されたことが推定出来る。

68号住居(第150・151図、第51表、P.L. 44・89・90)

(1)概要

当該住居は西側台地の縁辺部に占地し、調査区内南西端部、17区L・M-5グリッド内に位置している。重複関係は、65号住居に北東隅部部分を切られている。周辺遺構には、北側4m程に64・67号住居、東側5m程に63・68号住居、北西側7m程に62号住居が位置している。

形状は北東部分を65号住居の攪乱により失っているが横長方形であることが判断される。規模は、軸長3.0m、幅3.56mを測る。主軸方位はN-13°-Wを指す。残存深度は52cm程である。竪は無く、屋内中央部よりやや北側に枳を備えている。

枳跡は、円形状に浅く皿状に掘り窪められている。南

側に枳石を備えている。底面中央部は酸化被熱変色が認められる。規模は縦0.52m、横0.54m、深さ0.14m程である。また、枳跡の周辺では、長軸1.53m、短軸0.88mの楕円形の範囲の中に焼土と粒状炭化物が分布する。

主柱穴は生活面及び掘方底面でも発見されていない。壁溝は、南東・南西隅部で未発見であるが他の部分では発見されている。

貯蔵穴(P1)は、南東隅部の壁下に設けられている。形状は不整形円形を呈する。規模は縦0.62m、横0.62m、深さ0.71m程である。

住居の掘方は、西壁から中央部にかけて不整形で土坑状の大きな掘り込みが在る。また、東壁・南壁直下には土坑状の掘り込みと柱穴状の掘り込みが認められている。

出土遺物は、図化掲載遺物で、床面直上出土遺物が多く遺存状態も良好である。2・3土師器高環・8同鉢・10・11同埴・12小型甕・13・14同甕が該当する。この他は覆土内から出土した破片である。未掲載遺物では、土師器環4点。同高環5点。同甕55点がある。石製品では、滑石製の石製模造品が出土している。また、特殊遺物として、土師器埴(11)には、胴部最大径の部分に平行沈線に区画される直弧文を施している。この施文は、焼成前、乾燥以前に施文されている。器面の整形終了直後に施文されたことが判断される。

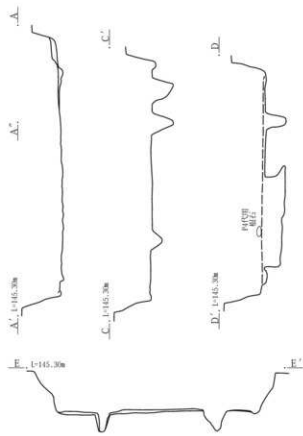
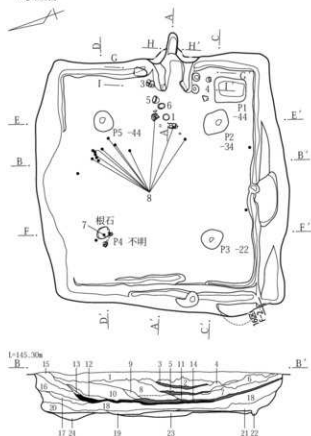
(2)所見

住居は63号住居の攪乱を受けているが、失っている部分は北壁の東側半分程度であり、旧状は復し得る状態である。旧状、構築当初の形状は、直線的な北壁であったことが推断される。この北壁の直線的な造りの状態と、東・西壁の下端の直線的な造りは北東・北西隅部で直角に交わっている。この状態から、北壁は構築基準辺であったことが窺知される。

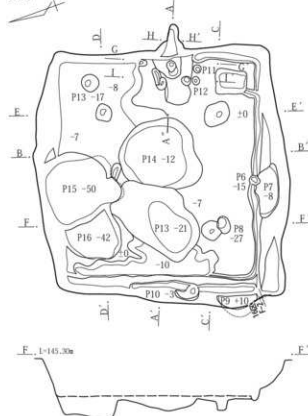
出土遺物の胎土では、図化掲載した遺物及び未掲載遺物の双方ともB1類を胎土としている。

当該住居の時期は、住居形態と出土遺物の様相から、5世紀中頃には廃棄されたことが推定出来る。

1号住居



掘方



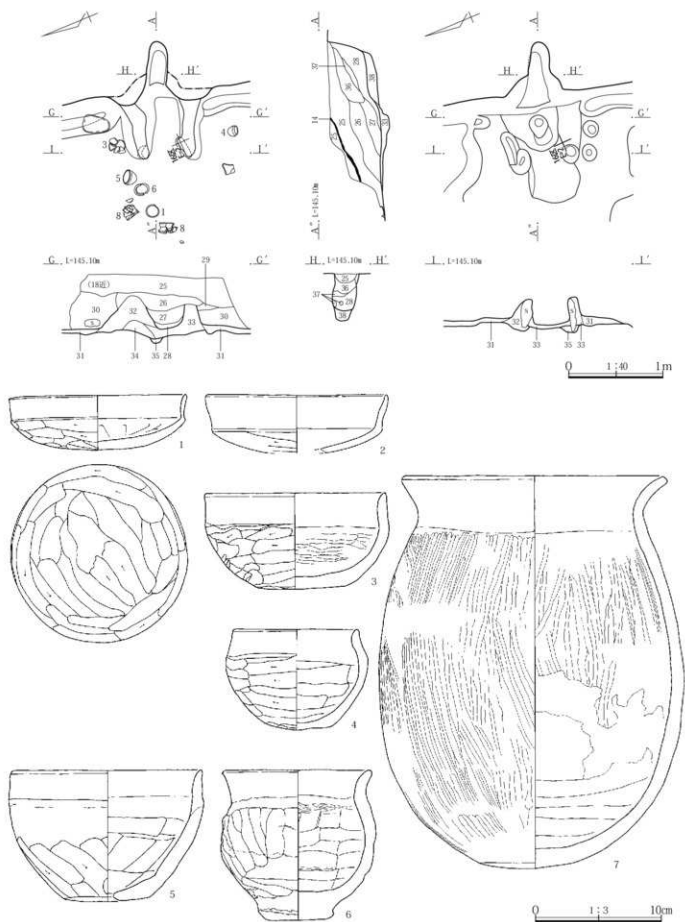
1号住居

1. 赤茶褐色土：粗粒状～細粒状白色軽石少量。
2. 赤茶褐色土：粒状白色軽石微量。全体にシルト質。
3. 黒茶褐色土：粒状白色軽石微量。全体にシルト質。
4. 2同質。 5. 3同質。
6. 塊状礫層土と赤茶褐色土の混入。
7. 赤茶褐色土：粒状白色軽石若干。全体にシルト質。 8. 砂層。
9. 粗粒状粒状白色軽石と砂の混入層。 10. 砂層。
11. 黒茶褐色土：シルト質。水性堆積。 12. 黒茶褐色土：砂質。
13. 黒茶褐色土：粒状白色軽石微量。全体にシルト質。
14. 黒茶褐色土：黒いノロ状。水性堆積。
15. 暗赤茶褐色土：粒状白色軽石含有。砂質。
16. 暗赤茶褐色土：粒状白色軽石微量。シルト質。
17. 暗赤茶褐色土：粒状白色軽石若干。粘質強い。
18. 暗赤茶褐色土：粒状白色軽石若干・粒状鉄分混入。砂質土と粘質土の混入。
19. 暗灰褐色土：還元塊状礫層土多量。 20. 暗茶褐色土：シルト質で粘性がある。
21. 赤茶褐色土：塊状礫層土混入。 22. 赤茶褐色土：小塊状礫層土多量。
23. 22同質。
24. 黒茶褐色土：粒状白色軽石少量。粘質土。 25. 18近質。
26. 暗灰褐色土：粒状白色軽石微量・粒状焼土微量。
27. 赤茶褐色土：塊状焼土主体。
28. 暗赤茶褐色土：塊状焼土混入・粒状焼土混入・灰色シルト混入。
29. 暗灰褐色土：粒状白色軽石含有・粒状焼土含有。
30. 暗灰褐色土：粒状白色軽石含有・粒状焼土含有・粒状炭化物含有。
31. 暗灰褐色土：灰色シルト含有。
32. 暗灰褐色土：粗粒状焼土多量・粗粒状灰色シルト多量。
33. 暗灰褐色土：粗粒状灰色シルト多量。
34. 暗灰褐色土：粒状灰色シルト少量。
35. 暗茶褐色土：小塊状礫層土多量。
36. 赤茶褐色土：塊状焼土多量・灰色シルト少量。
37. 塊状焼土。
38. 暗褐色土：小塊状灰色シルト混入。

第8図 1号住居平面図

0 1:80 2m

第3章 調査の成果

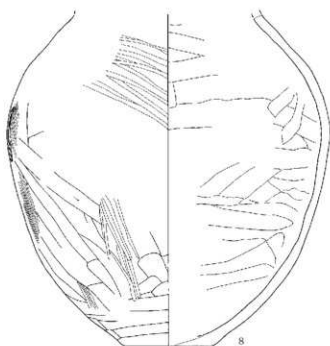


第9図 1号住居竪断面図・出土遺物(1)

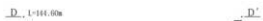
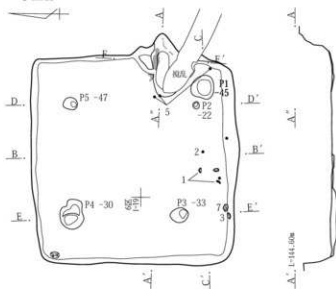
2号住居出土遺物



0 1:3 10cm



2号住居



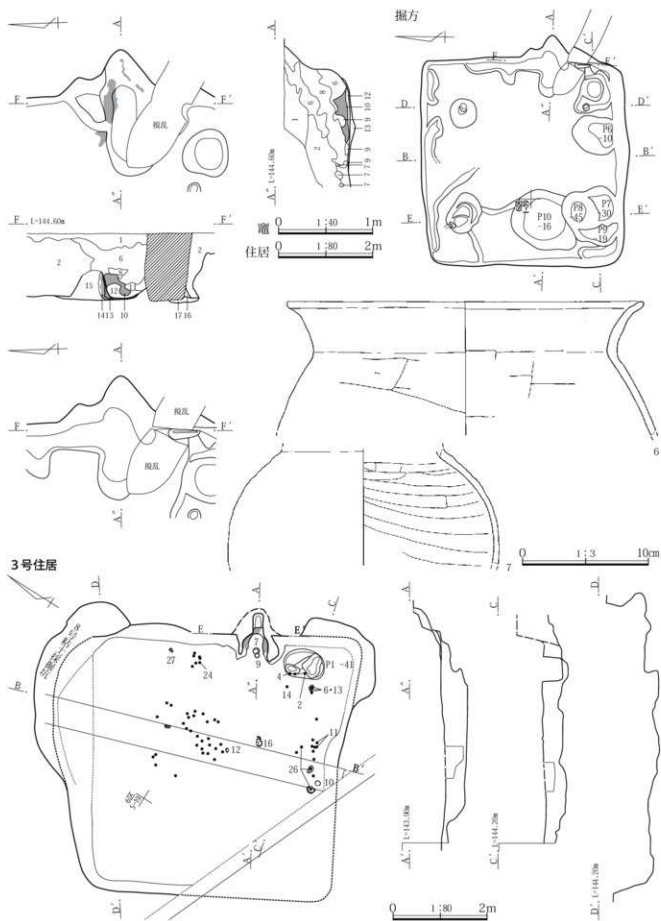
2号住居

1. 黒褐色土と塊状燧層土の混土。
2. 塊状燧層土主体。
3. 暗褐色土；粒状白色軽石少量・塊状燧層土多量・粒状燧層土多量。
4. 暗褐色土；粒状白色軽石無・粒状燧層土若干。
5. 茶褐色土；塊状燧層土。
6. 灰黄褐色土；塊状燧層土。 7. 6同質。
8. 黒褐色土；塊状燧層土多量・細粒状燧層土多量。
9. 6同質。
10. 塊状焼土(天井部の壁落)。
11. 被熱塊状燧層土。
12. 粒状炭化物+灰+塊状焼土(被熱壁面の崩落)。
13. 塊状燧層土+粒状炭化物+粒状焼土。
14. 15が焼土化した土。
15. 黄色ローム(竈の袖)。
16. 15と同じ。
17. ロームブロック主体。黒褐色土を含む。

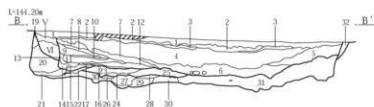
0 1:80 2m

第10図 1号住居出土遺物(2)、2号住居平面断面図・出土遺物(1)

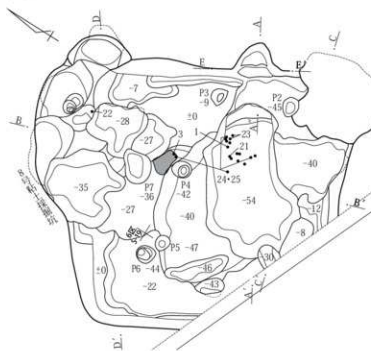
第3章 調査の成果



第11図 2号住居断平面図・掘方平面図・出土遺物(2)、3号住居断平面図

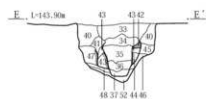
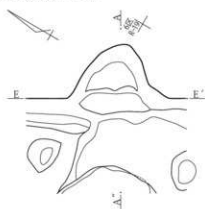
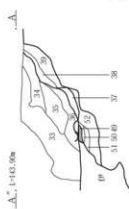
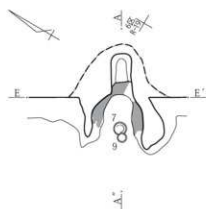


掘方

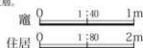


3号住居

1. 赤茶褐色土；粒状白色軽石混入・鉄分混入。
2. 茶褐色土；粒状白色軽石含有・鉄分混入。
3. 黒褐色土；粒状白色軽石混入。
4. 黒褐色土；粒状白色軽石多量・粗粒状Ⅴ層土含有・粒状Ⅴ層土含有。
5. 暗褐色土；粒状白色軽石多量・粗粒状Ⅴ層土含有。粒状焼上・炭化物少量。
6. 黒褐色土；粒状白色軽石含有・微量少量・粒状Ⅴ層土含有。
7. 黒褐色土；粒状白色軽石少量・塊状Ⅴ層土若干・粒状Ⅴ層土含有。 8. 黒色土；粒状白色軽石若干。
9. 黒褐色土；粒状白色軽石含有・塊状Ⅴ層土混入。
10. 暗褐色土；粒状白色軽石微量・細粒砂含有。
11. 黒褐色土；粒状白色軽石少量・塊状灰褐色シルト多量・粗粒状Ⅴ層土少量。
12. 黒褐色土；粒状白色軽石無・塊状灰褐色シルト含有・粗粒状灰褐色シルト混入。
13. 暗褐色土；粒状白色軽石無。 14. 塊状暗褐色シルト。
15. 暗褐色土；粒状白色軽石無・塊状灰褐色シルト含有。
16. 黒褐色土；粒状白色軽石無・粗粒状Ⅴ層土若干。
17. 灰黄褐色シルト。 18. 暗褐色土；塊状灰褐色シルト混入。
19. 暗褐色土；塊状灰黄褐色土多量。
20. 暗茶褐色土；塊状Ⅴ層土多量。 21. 黒褐色土；粒状Ⅴ層土少量。
22. 灰色シルト。
23. 暗褐色土；細粒状白色軽石微量・塊状灰褐色シルト混入。
24. 暗褐色土；塊状灰黄褐色土多量。
25. 暗褐色土；粗粒状白色軽石若干・粒状焼上少量。
26. 暗灰褐色シルト主体。
27. 塊状暗灰褐色シルト混入・塊状Ⅴ層土混入。
28. 黒褐色土；粒状焼上混入。
29. 暗褐色土；粗粒状白色軽石若干・粒状焼上少量。
30. 塊状焼上。
31. 暗褐色土；細粒状白色軽石混入・塊状Ⅴ層土混入・粒状Ⅴ層土混入。
32. 暗褐色土；粒状白色軽石含有。
33. 黒褐色土；粒状白色軽石若干。粒状灰色シルト混入・粒状焼上若干。
34. 黒褐色土；塊状灰色シルト含有。 35. 塊状灰色シルト。
36. 塊状灰色シルトと塊状焼上の混上。

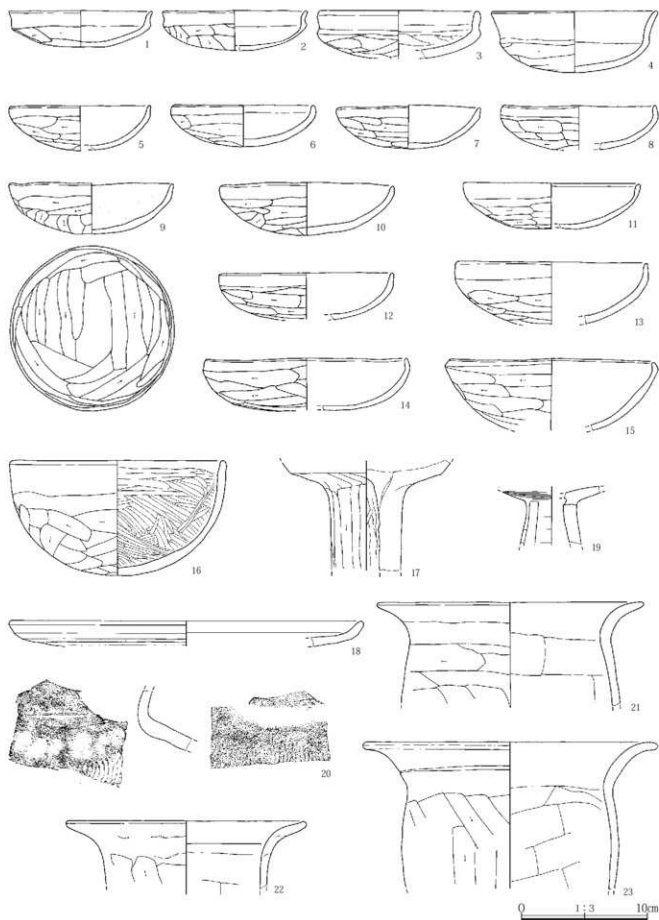


37. 塊状灰色シルトと塊状焼上の混上に黒褐色土を含有。
38. 灰色シルト；塊状焼上含有。
39. 黒褐色土；含有シルト・塊状焼上の混上。 40. 39近置。
41. 黒褐色土；粒状焼上含有。 42. 棕色土；灰色シルトの被熱焼上化。
43. 灰色シルト。 44. 塊状焼上。 45. 灰白色シルト。
46. 灰色シルトの被熱焼上化。 47. 46近置。
48. 灰色シルト；暗灰色シルトを含有。 49. 被熱焼上層。
50. 黒灰色土；粒状炭化物多量。
51. 粒状焼上・塊状焼上の混上。灰色シルト含有。
52. 黒灰色土と灰白色シルトの混上層。

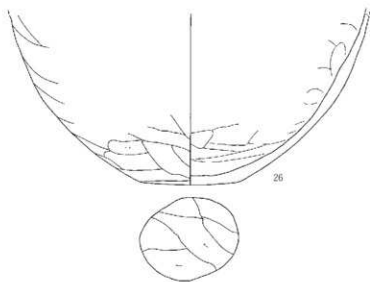
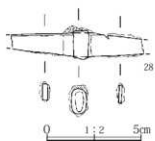
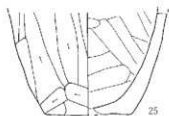
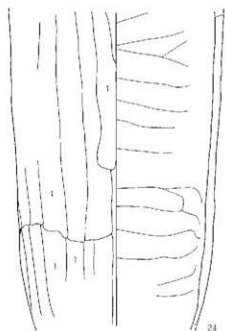


第12図 3号住居・8号粘土探掘坑断面図、3号住居掘方・8号粘土探掘坑平面図、竪断面図

第3章 調査の成果

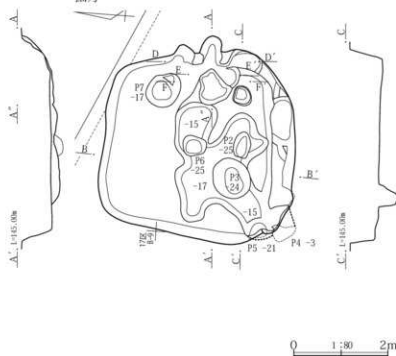
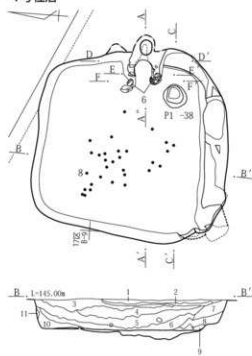


第13図 3号住居出土遺物(1)



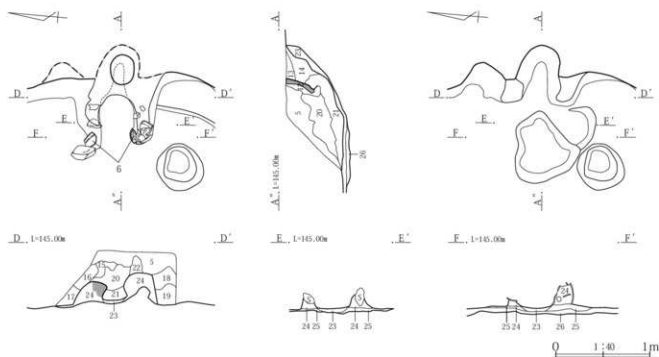
4号住居

掘方



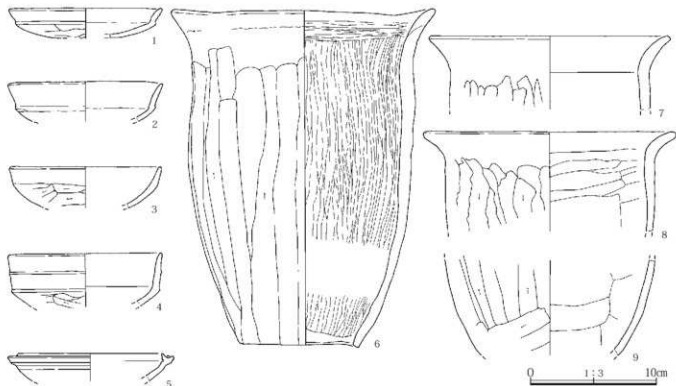
第14图 3号住居出土遺物(2)、4号住居断面図

第3章 調査の成果



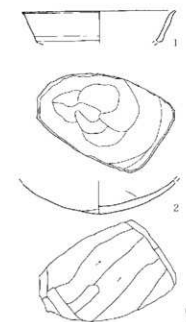
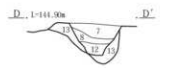
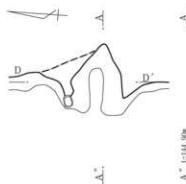
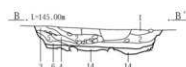
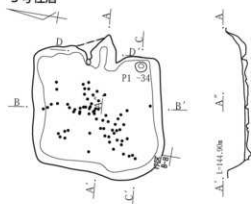
4号住居

1. 赤茶褐色土：粒状白色軽石混入・鉄分混入。
2. 茶褐色土：粒状白色軽石少量・粒状ローム若干・鉄分混入。
3. 暗褐色土：粒状白色軽石混入・塊状ローム土混入。
4. 黒褐色土：粒状白色軽石少量・塊状ローム土多量・粒状ローム多量。
5. 暗褐色土：塊状ローム土混入。
6. 暗褐色土：細粒状白色軽石若干・粗粒状ローム混入。粒状ローム含有。
7. 暗褐色土：粒状白色軽石混入・粒状ローム少量・塊状ローム土若干。
8. 暗褐色土：細粒状白色軽石少量・塊状ローム土少量。
9. 暗褐色土：細粒状白色軽石微量・塊状ローム土含有。
10. 8回質。 11. 塊状層上。
12. 被熱層上。天井部の残存。
13. 黒褐色土：粒状白色軽石少量・粒状焼土含有。
14. 黒褐色土：粒状白色軽石無し・塊状焼土含有・塊状VI層土混入。
15. 暗褐色土の被熱土。 16. 暗茶褐色土：塊状VI含有。
17. 16回質。 18. 暗茶褐色土：粒状焼土含有・粒状VII層土多量。
19. 18近質。
20. 暗茶褐色土：粒状白色軽石無し・粗粒状焼土若干・塊状VII層土含有。
21. 灰+炭化物。 22. 暗茶褐色土：塊状IV層土主体。
23. 黒褐色土と塊状層上の混入。
24. VII層土。 25. 23近質。 26. 塊状VII層土主体。塊状黒褐色土少量。

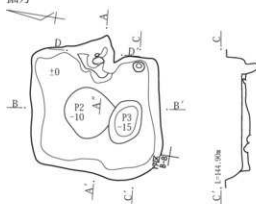


第15図 4号住居竈平断面図・出土遺物

5号住居



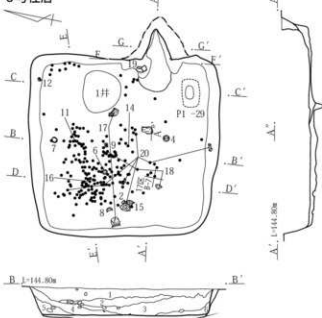
掘方



5号住居

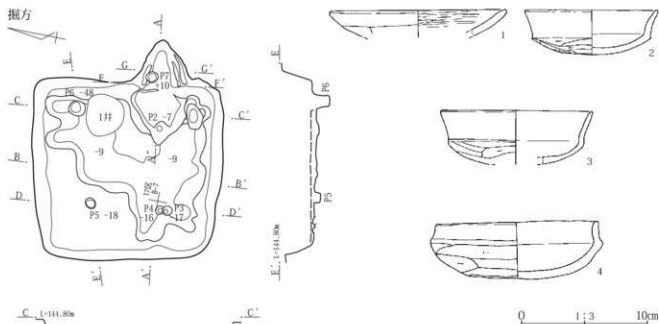
1. 暗褐色土(シルト質=水の影響と思われる。どのような影響かは不明): 鉄分多量・粒状白色軽石混入。
2. 暗褐色土: 粒状白色軽石少量。
3. 暗褐色土: 粒状白色軽石含有。
4. 黒褐色土: 粒状白色軽石若干・塊状ローム土混入。
5. 茶褐色土: 粒状白色軽石微量・塊状ローム土少量・粒状ローム混入。
6. 茶褐色土: 粒状白色軽石微量・塊状ローム土少量・粒状ローム混入。
7. 暗褐色土: 被熱燻層上含有・粒状焼土少量。
8. 暗褐色土: 粒状白色軽石少量・粒状焼土含有。
9. 暗褐色土: 粒状白色軽石少量・被熱燻土化燻層上含有・粒状焼土含有。
10. 掘丸。
11. 塊状燻層土主体・粒状焼土少量。
12. 暗褐色土: 粒状白色軽石少量・塊状焼土含有・塊状燻層土含有・粒状焼土含有。
13. 暗褐色土と塊状燻層土の混土+粒状焼土若干。
14. 13近置。

6号住居



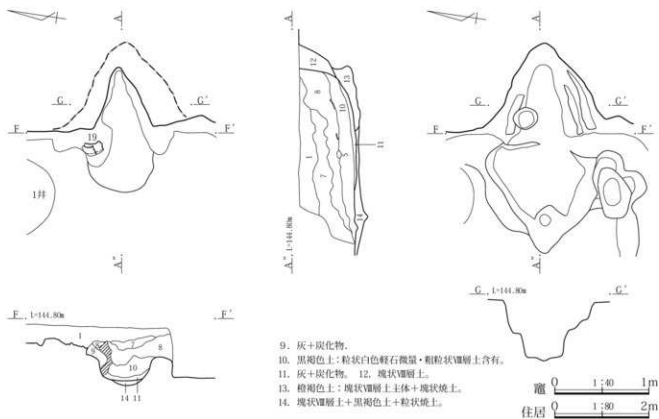
第16図 5号住居平面断面図・竪平面断面図・出土遺物、6号住居平面断面図

第3章 調査の結果



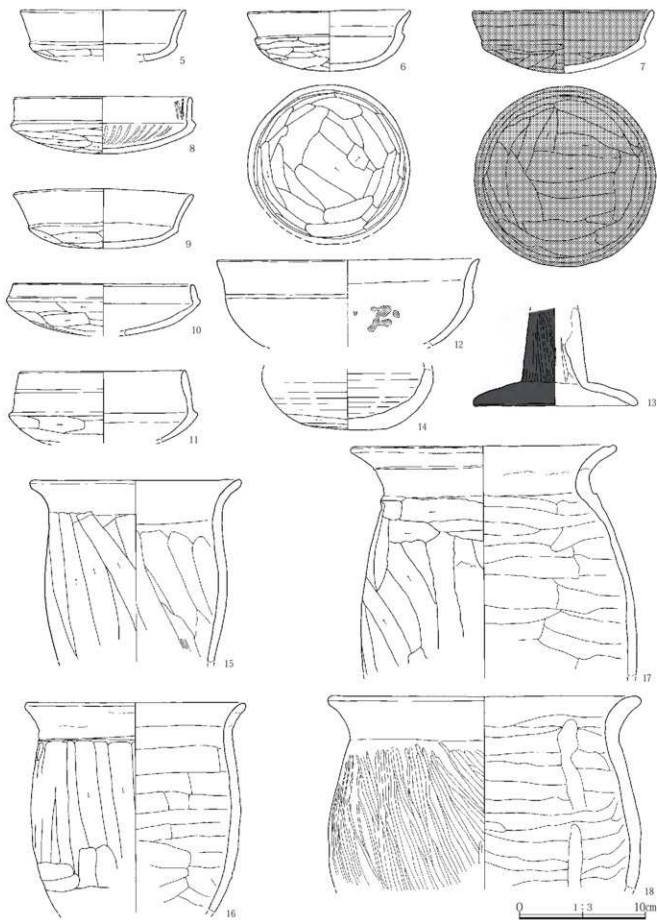
6号住居

1. 暗褐色土：粒状白色軽石多量・粒状ローム少量。
2. 暗褐色土：粒状白色軽石少量・塊状ローム上若・粒状ローム少量。
3. 暗褐色土：塊状ローム土斑状・粒状ローム多量。
4. 暗褐色土：粒状白色軽石少量・塊状ローム上含有・粒状ローム含有。
5. 暗褐色土：細粒状白色軽石微量・塊状ローム上若干。
6. 暗褐色土：細粒状白色軽石微量・塊状ローム上若干。
7. 黒褐色土：細粒状白色軽石少量・粒状焼土少量・塊状VI層上若干。
8. 黒褐色土：粒状白色軽石若干・粒状焼土+塊状焼土+塊状淡黄褐色土の混上。

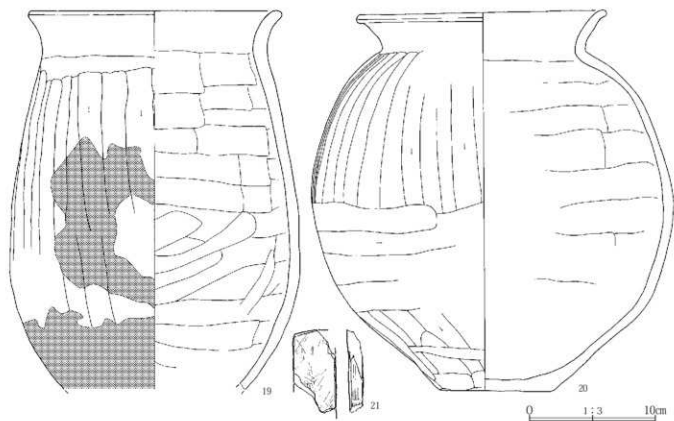


9. 灰+炭化物。
10. 黒褐色土：粒状白色軽石微量・粗粒状VI層上含有。
11. 灰+炭化物。 12. 塊状VI層上。
13. 橙褐色土：塊状VI層上土体+塊状焼土。
14. 塊状VI層上+黒褐色土+粒状焼土。

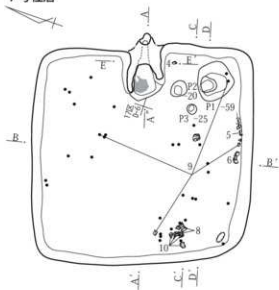
第17図 6号住居掘方平面断面図・出土遺物(1)・竈平面断面図



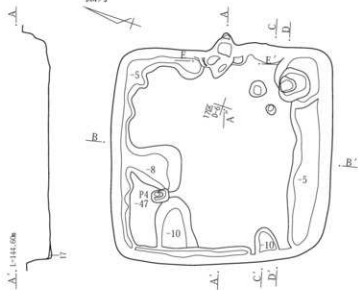
第18圖 6号住居出土遺物(2)



7号住居



掘方

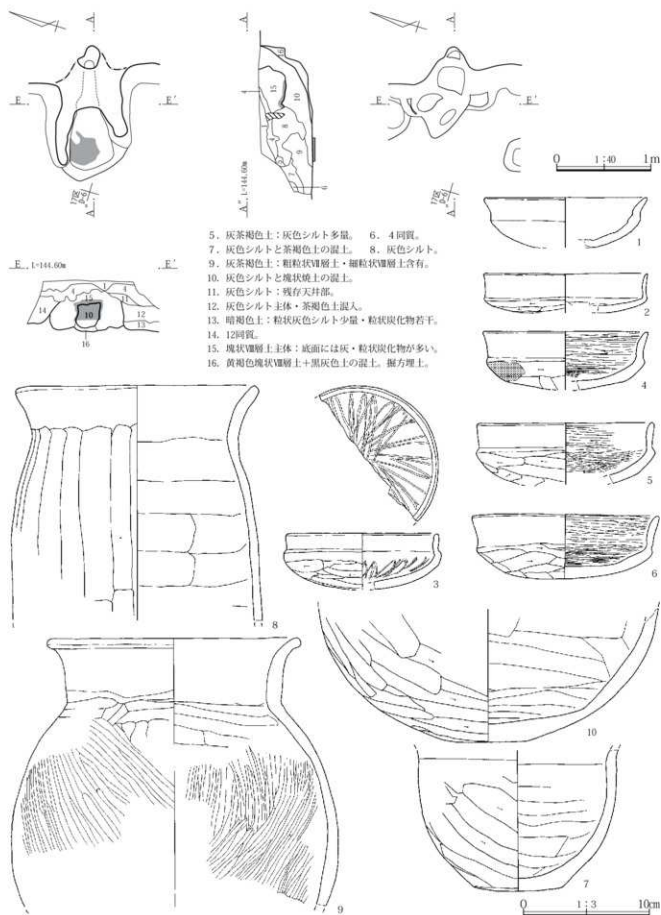


7号住居

1. 暗褐色土：粒状白色軽石混入・塊状ローム少量。
2. 暗褐色土：塊状ローム土斑状。
3. 暗褐色土：粒状白色軽石若干・塊状ローム上含有・粒状ローム混入。
4. 暗褐色土：粒状白色軽石若干。

0 1:80 2m

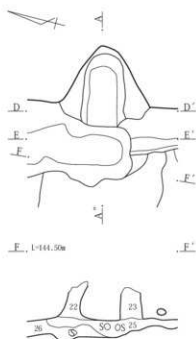
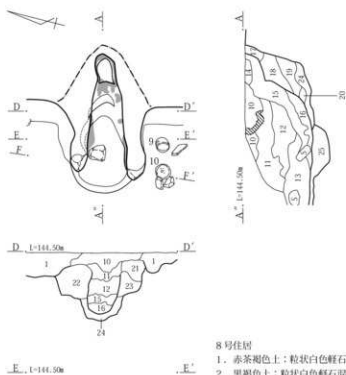
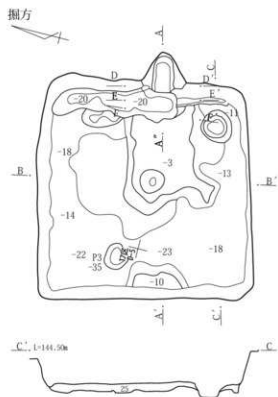
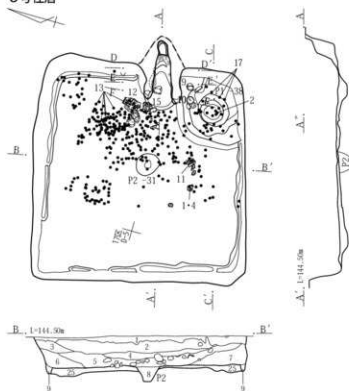
第19図 6号住居出土遺物(3)、7号住居平面断面図



5. 灰茶褐色土：灰色シルト多量。 6. 4同頁。
7. 灰色シルトと茶褐色土の混土。 8. 灰色シルト。
9. 灰茶褐色土：粗粒状礫層土・細粒状礫層土含有。
10. 灰色シルトと塊状礫土の混土。
11. 灰色シルト：残存天井部。
12. 灰色シルト主体・茶褐色土混入。
13. 暗褐色土：粒状灰色シルト少量・粒状炭化物若干。
14. 12同頁。
15. 塊状礫層土主体：底面には灰・粒状炭化物が多い。
16. 黄褐色塊状礫層土+黒灰色土の混土。掘方埋土。

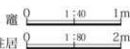
第20図 7号住居竪断面図・出土遺物

8号住居



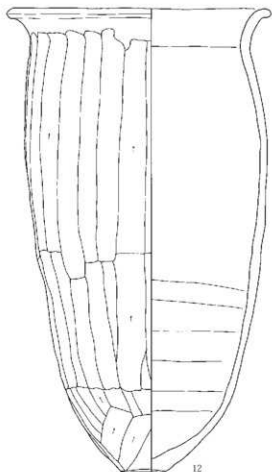
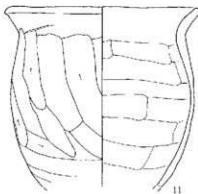
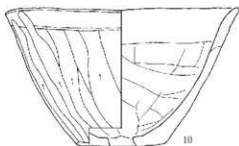
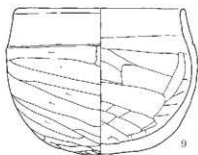
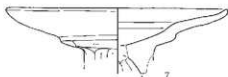
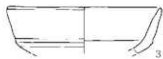
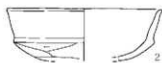
8号住居

1. 赤茶褐色上：粒状白色軽石多量・鉄分混入。
2. 黒褐色上：粒状白色軽石混入・塊状ローム土若干・粒状焼土微量。
3. 暗褐色上：粒状白色軽石少量・塊状ローム土若干。
4. 黒褐色上：粒状白色軽石少量・塊状ローム土少量。
5. 黒褐色上：粒状白色軽石若干。礫を包含。
6. 暗褐色上：細粒状白色軽石微量・塊状褐色土含有・粒状ローム含有。
7. 暗褐色上：細粒状白色軽石若干・塊状ローム土少量・塊状褐色土含有。
8. 暗褐色上：塊状礫層土多量。
9. 暗褐色上：塊状礫層土含有・小礫含有。



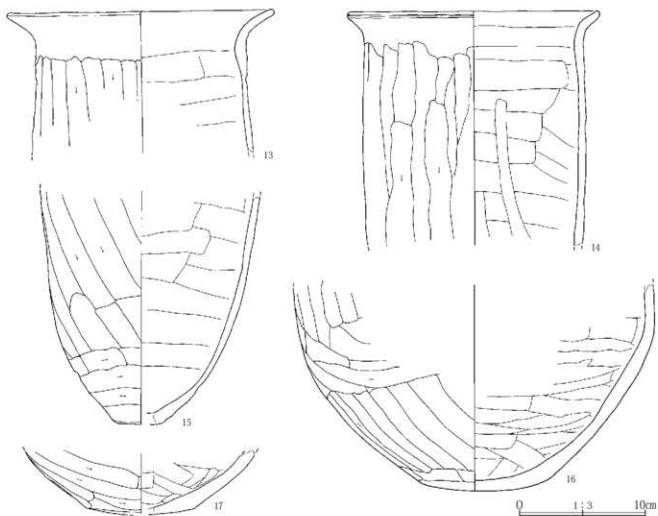
第21圖 8号住居断面図・竈断面図

10. 14近質。
 11. 暗褐色土：粒状白色軽石含有。
 12. 暗灰色シルト(天井部崩落上)。
 13. 暗灰色シルト(口よりやや暗い)。
 14. 黄褐色土：被熱焼土化粘土。
 15. 暗灰色シルト。
 16. 灰+炭化物+塊状焼土の混土。
 17. 灰褐色土。
 18. 灰シルト+灰褐色土の混土。
 19. 灰褐色土：灰色シルト含有。
 20. 灰+炭化物。
 21. 暗褐色土：白色軽石含有・粒状焼土含有。
 22. 灰色シルト：黒色土含有・塊状燻層土含有。
 23. 22同質。
 24. 灰シルト+灰+炭化物。改築直前の底面直上層。
 25. 黄褐色塊状燻層土+黒灰色土の混土。掘方埋土。
 26. 黒褐色土：塊状燻層土(主体)・黒褐色土の混土。

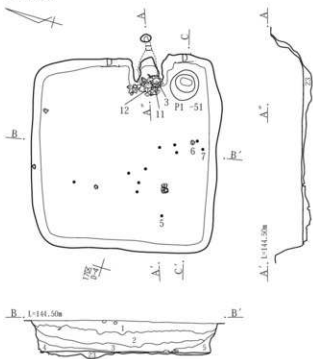


0 1:3 10cm

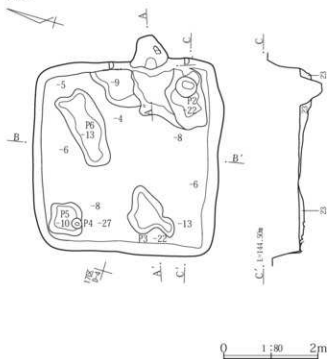
第22図 8号住居出土遺物(1)



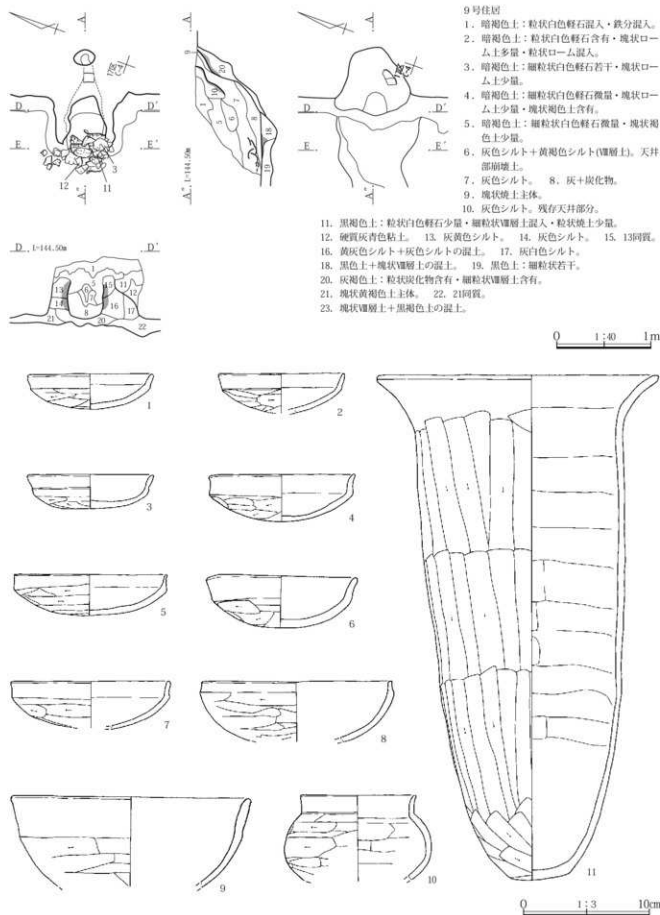
9号住居



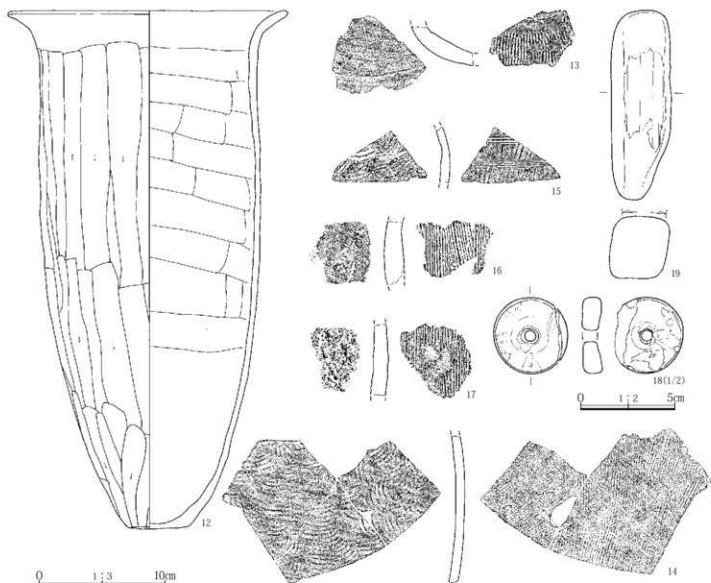
掘方



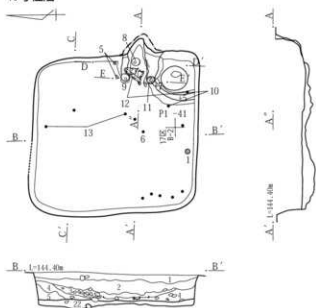
第23図 8号住居出土遺物(2)、9号住居平面図



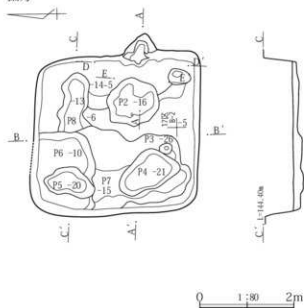
第24図 9号住居竪断面図・出土遺物(1)



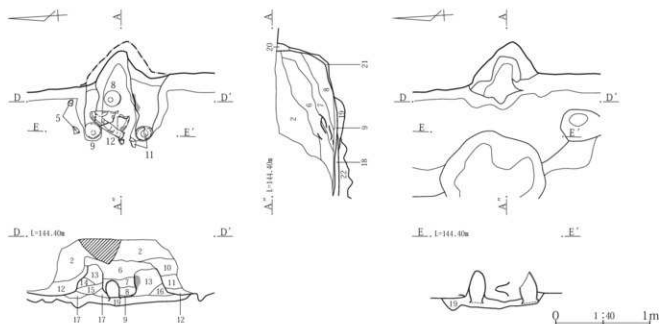
10号住居



掘方



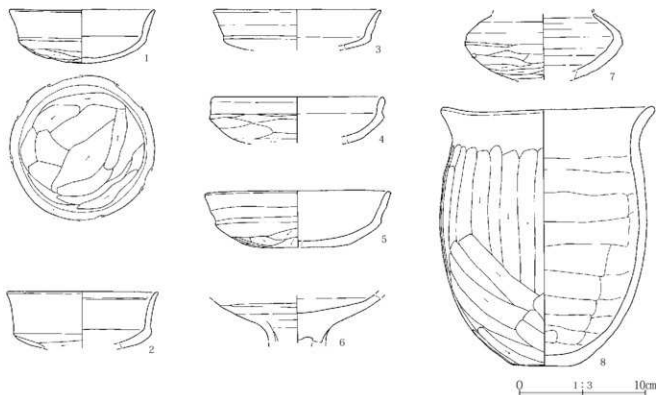
第25図 9号住居出土遺物(2)、10号住居平面断面図



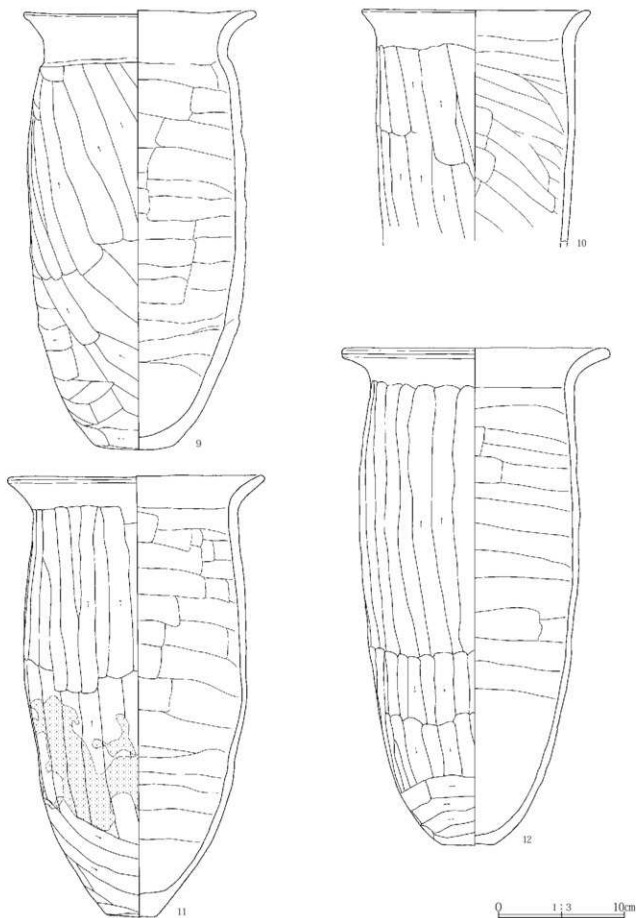
10号住居

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4):軽石(F.A.C)含む、黄色味が強い。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3):軽石(F.A.C)含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2):礫(粒径5~10cm)、炭化物を含む。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2):軽石(F.A.C)、ロームブロック含む。
5. 褐色土(10YR4/4):軽石(F.A.C)、ローム粒を含む。
6. 褐色土(10YR5/1):灰白色シルト(10YR7/1)を多く含む。
7. 褐色土(10YR5/1)と焼土の混合。
8. 黒褐色土(10YR3/1):炭化物、焼土を含む。
9. 黄褐色土(2.5Y4/1):灰、炭化物含む。
10. 暗灰黄色土(2.5Y5/2):灰白色シルトを含む。
11. 黒褐色土(10YR3/1):ロームブロック僅かに含む。

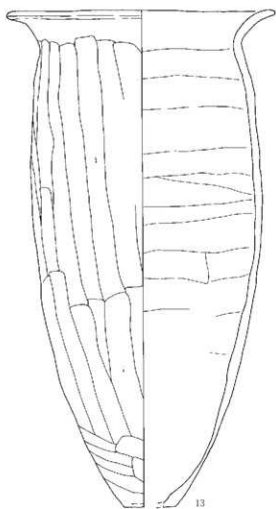
12. 暗灰黄色土(2.5Y5/2):ローム粒を多く含む。
13. 黄灰色シルト(2.5Y6/1):ローム粒を僅かに含む。
14. ロームブロックと黄灰シルトの混土。
15. 13同質。
16. 黄灰色土(2.5Y4/1):炭化物、ローム粒含む。
17. 16同質。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2):ローム土含む。固く締まっている。床面。
19. にぶい黄褐色土(10YR5/4):黒褐色土、炭化物、灰を含む。
20. 灰黄褐色土(10YR4/2):焼土を含む。
21. 褐色シルト(10YR6/1):奥の壁に薄く貼り付けている。
22. 黒褐色土(10YR3/2):ロームの小ブロック含む。



第26図 10号住居竪断面図・出土遺物(1)

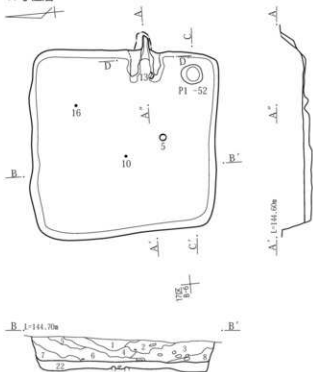


第27図 10号住居出土遺物(2)

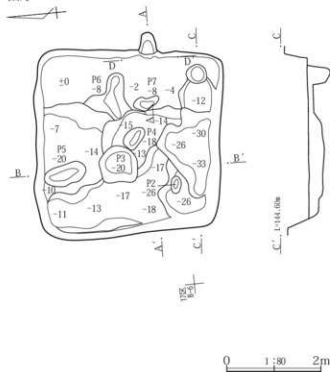


0 1:3 10cm

11号住居

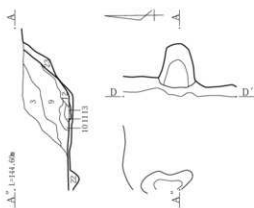
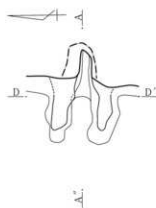


掘方



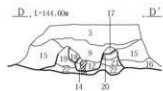
第28図 10号住居出土遺物(3)、11号住居平面図

第3章 調査の成果



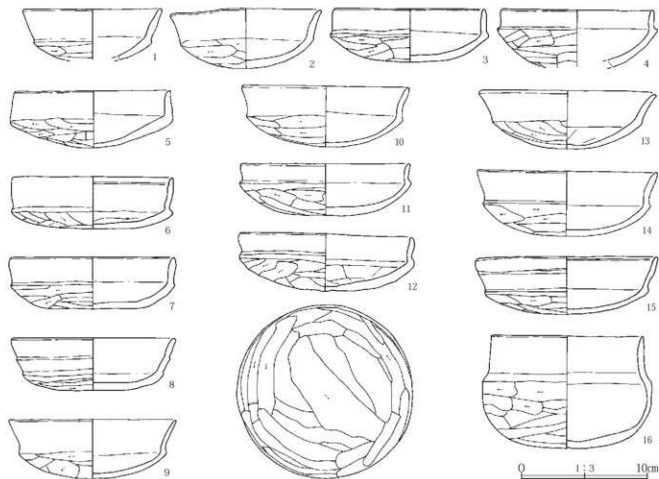
11号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を含む、焼土をまばらに含む。
2. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：ローム粒、焼土、炭化物を含む。
3. オリーブ褐色土(2.5Y4/4)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。
4. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒、軽石を含む。
5. オリーブ褐色土(2.5Y4/4)：ローム粒、礫(粒径5～10cm)を含む。
6. 黄褐色土(2.5Y5/4)：ローム粒を多く含む、黒色土、軽石を含む。
7. 黄褐色土(2.5Y5/4)：ローム粒を含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ロームブロック、黒色土、軽石を含む。

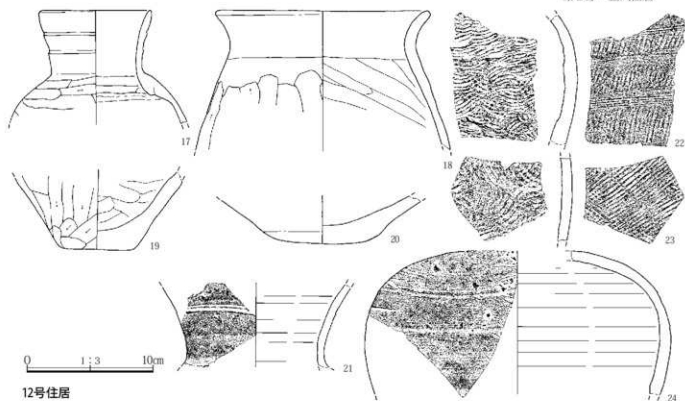


9. 灰黄褐色土(10YR5/2)：ロームブロック、灰白色シルトブロック、焼土、炭化物を含む。
10. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：シルト分多い、灰白色シルト、炭化物、焼土を含む。
11. 焼土主体の上。黄灰色土、炭化物を含む。
12. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)：焼土、炭化物、黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。
13. 灰層。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2)：ローム粒、灰白色シルト粒を含む。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2)：ロームブロック、灰白色シルトブロックを含む。
16. 灰黄褐色土(10YR5/2)：灰白色シルトブロックを多量に含む、ロームブロック、炭化物を少量含む。
17. 暗褐色土(10YR3/3)：灰白色シルト粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
18. 暗褐色土(10YR3/3)：灰白色シルトブロックを多く含む。焼粒、炭化物粒、ローム粒、白色軽石を少量含む。
19. にぶい黄褐色土(10YR4/3)：灰白色シルトブロックを多く含む。焼土ブロック、ロームブロックをやや多く含む。一部焼土化している。
20. 19同質。
21. にぶい黄褐色土(10YR3/3)：灰白色シルトブロック、ロームブロックを多く含む。焼土粒僅かに含む。
22. にぶい黄褐色土(10YR5/3)：灰白色シルト、暗褐色土の斑混上。炭化物を僅かに含む。
23. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック、灰白色シルトブロックを少量含む。

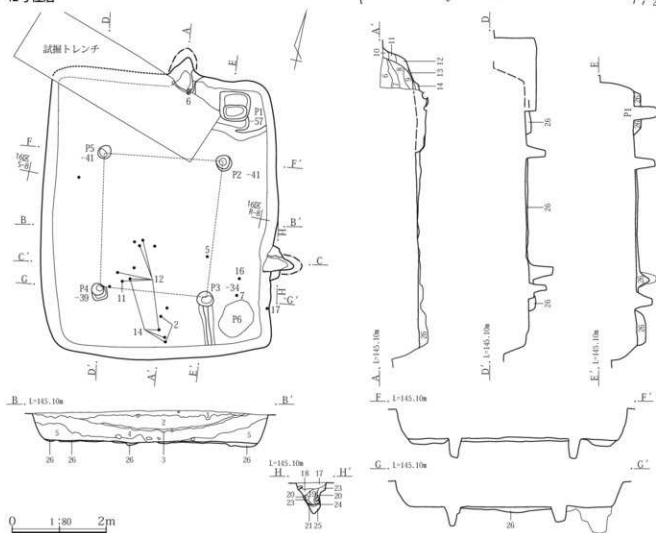
0 1:40 1m



第29図 11号住居竈平断面図・出土遺物(1)

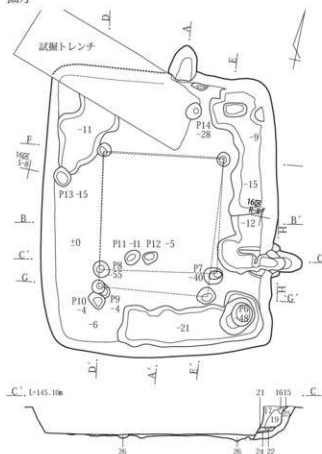


12号住居



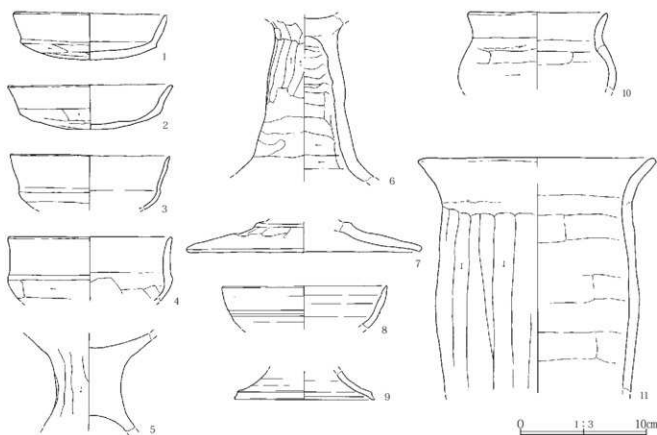
第30図 11号住居出土遺物(2)、12号住居平面断面図・竪断面図

掘方

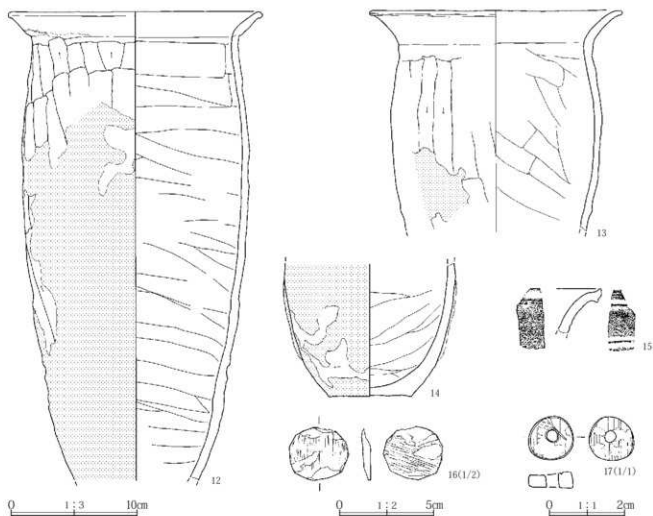


12号住居

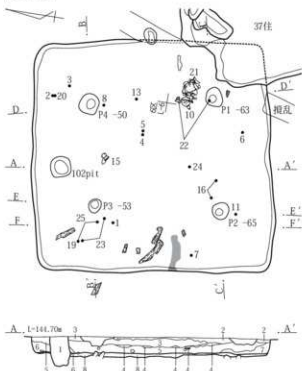
1. にぶい黄褐色土(10YR5/3): ローム粒を多く含む、黄色味が強い、白色軽石を含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2): 白色軽石、焼土粒を含む。
3. 褐色土(10YR4/1): ややシルト質。
4. 褐色土(10YR4/1): 白色軽石を含む。
5. 褐色土(10YR5/1): やや粘土質、ローム粒、焼土粒、砂粒を含む。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2): 白色軽石、砂粒を含む。
7. 灰黄褐色土(10YR5/2): 白色軽石、灰白色シルトブロック、焼土を含む。
8. 灰黄褐色土(10YR5/2): 焼土をやや多く含む。
9. 灰白色シルト、焼土・炭化物の混和。
10. 灰黄褐色土(10YR5/2): 僅かに焼土を含む。
11. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 焼土、炭化物を含む。
12. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 焼土、炭化物、白灰色シルトを含む。
13. 炭化物・焼土・灰白色シルトを多く含む。
14. 黒褐色土(2.5Y3/1): ロームの小ブロックを含む。
15. 黒褐色土(10YR2/2): 灰白色シルトブロック、焼土粒を僅かに含む。
16. 黒褐色土(10YR2/3): 灰白色シルトブロック、焼土粒を少量含む。
17. 黒褐色土(10YR2/3): 白色バミス、暗褐色土ブロック、焼土粒、炭化物粒を含む。
18. 15号瓦。
19. 灰黄褐色土(10YR4/2): 灰白色シルトブロック、ローム粒、焼土ブロックを含む。
20. 黒褐色土(10YR3/2): 灰白色シルトブロック、暗褐色土ブロック、焼土ブロックを多く含む。
21. 黒褐色土(10YR2/2): 暗褐色土ブロック、焼土粒、炭化物粗粒を少量含む。
22. 暗褐色土(10YR3/3): 焼土粒、灰を非常に多く含む。
23. 22号瓦。
24. 黒褐色土(10YR3/1): 炭化物を含む。
25. 黄褐色土(2.5Y4/1): 炭化物、焼土礫ら、灰白色シルトブロックを含む。
26. 黒褐色土(10YR3/2): 灰黄褐色シルト(10YR5/2)を含む。固く締まっている。



第31図 12号住居掘方平面断面図・出土遺物(1)



13号住居



13号住居

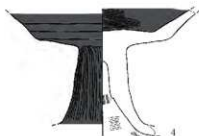
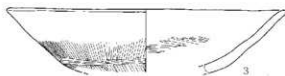
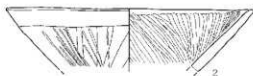
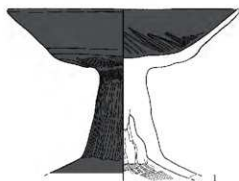
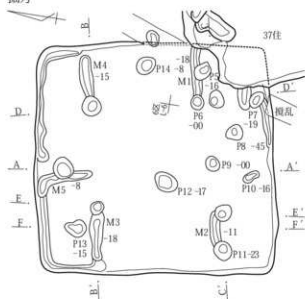
1. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): 軽石を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。焼土粒もまばらに含む。
4. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/3): しまり弱く、ボロボロしている。
5. 黒褐色土(10YR3/2): 軽石、炭化物粒、焼土粒を含む。
6. 灰黄色土(2.5Y6/2): 炭化物、焼土粒を含む。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1): 炭化物、焼土粒を含む。
8. 茶褐色土(10YR3/2): ロームブロックを多く含む。白色軽石、炭化物粒、焼土粒を僅かに含む。固く締まっている。

第32図 12号住居出土遺物(2)、13号住居平面断面図

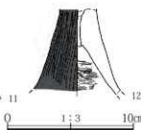
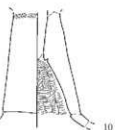
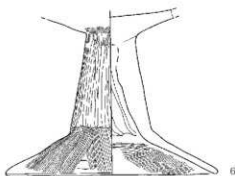
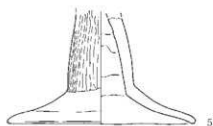
0 1:80 2m

第3章 調査の成果

掘方

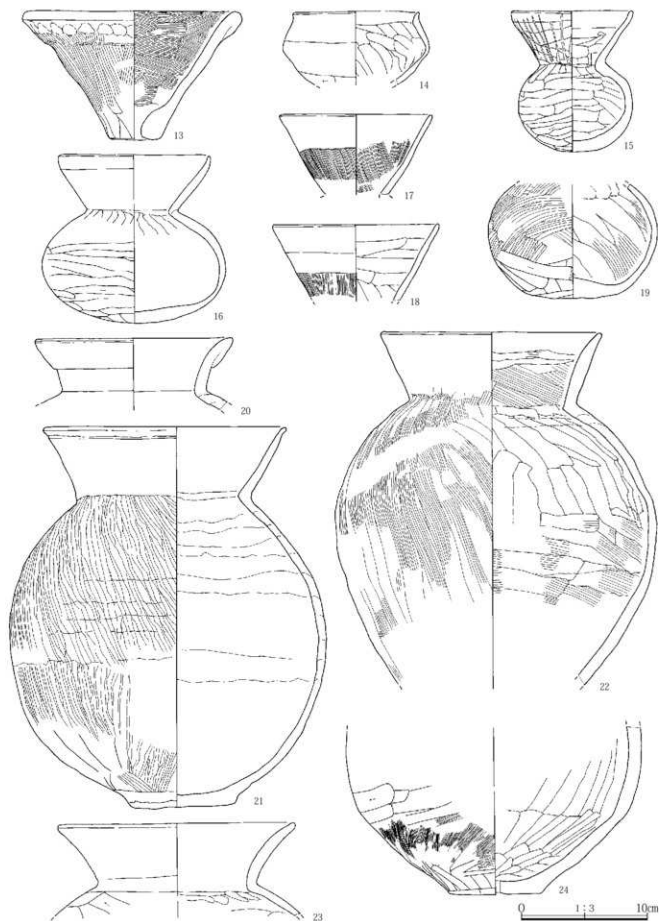


0 1:80 2m

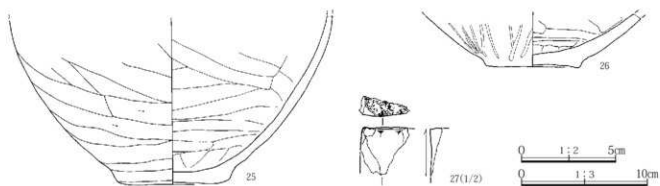


0 1:3 10cm

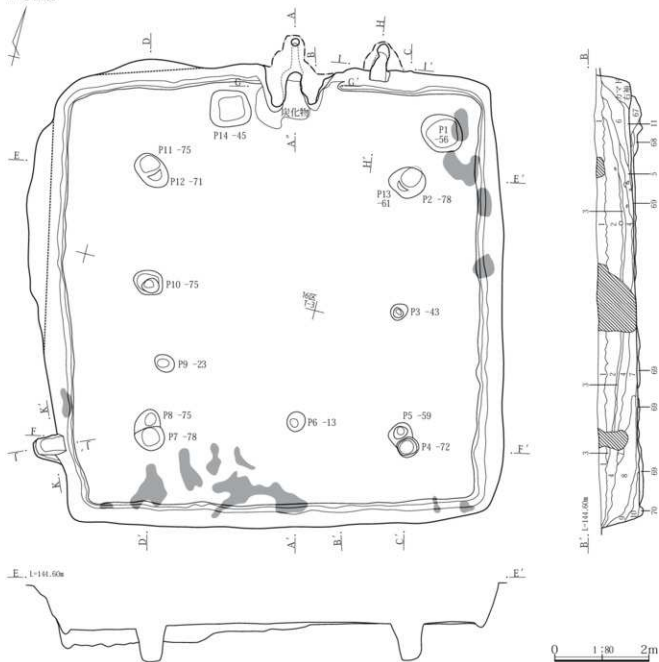
第33図 13号住居掘方平断面図・出土遺物(1)



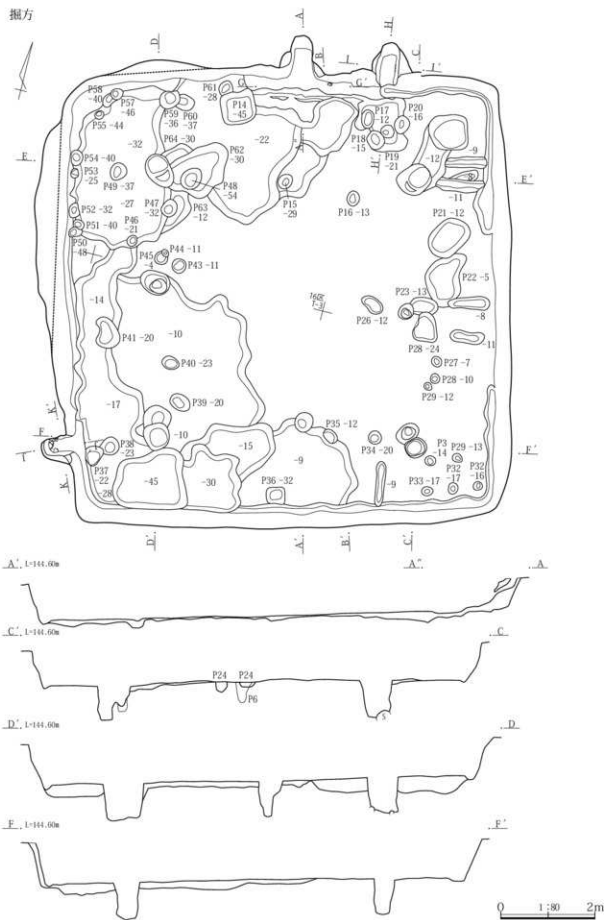
第34图 13号住居出土遗物(2)



14号住居



第35図 13号住居出土遺物(3)、14号住居平面断面図



第36图 14号住居掘方平面断面图

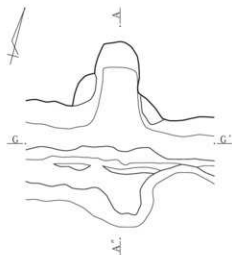
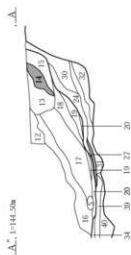
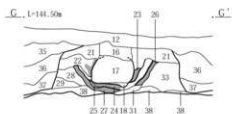
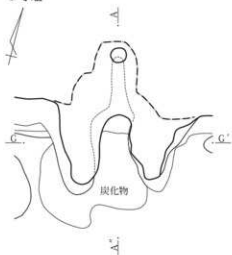
14号住居

1. 赤茶褐色土：白色軽石混入・粒状ローム多量。
2. 暗褐色土：白色軽石含有・粒状焼土含有。
3. 黒褐色土：ノロ状で夾雑物無。
4. 黒褐色土：白色軽石少量・粒状焼土混入。
5. 暗灰色土：白色軽石若干。
6. 暗灰色土：白色軽石若干・粒状焼土含有。
7. 暗灰色土：白色軽石微量。
8. 暗灰色土：塊状ローム土斑状多量。
9. 暗褐色土：白色軽石無。
10. 暗褐色土：白色軽石無・塊状ローム土と焼土塊の混上。
11. 茶褐色土：白色軽石微量・粒状焼土少量。
12. 1 近質。
13. 黄灰色土：ややシルト質。竈構築土(天井部)。
14. 10の被熱焼土化。
15. 褐色土：焼土を多く含む。
16. 灰褐色土：少量の焼土と軽石(粒径約5mm)を含む。
17. 灰褐色土：焼土ブロックを含む。
18. 褐色土：焼土・炭化物を含む。
19. にぶい赤褐色土：固くなっている。天井の崩壊上。
20. 灰・炭化物層。
21. 黄灰色シルト(2.5Y5/1)。
22. 黄灰色土(2.5Y5/1)：焼土を含む。
23. 焼土。
24. 灰褐色土(5YR6/2)：灰白色シルトが被熱。内側ほど焼土化。
25. 灰。
26. 焼土。
27. 焼土：灰白色シルトが焼土化したもの。
28. 黄灰色土(2.5Y5/1)：焼土含まない。
29. 黄灰色土(2.5Y5/1)：焼土を多く含む。
30. 灰黄褐色土(10YR5/2)：焼土・炭化物を含む。
31. 灰黄褐色土(10YR5/2)：灰白色シルト、焼土を含む。
32. 黄灰色土(2.5Y5/1)：焼土を多く含む。
33. 28同質。
34. にぶい黄褐色土(10YR5/4)：灰白色シルト粒含む。固く締まっている。床面。
35. 灰褐色土：焼土、炭化物、軽石を含む。
36. 灰褐色土：灰シルト、焼土粒、炭化物、軽石を含む。
37. (左)黒褐色土：炭化物を多く含む。(右)暗灰色土：焼土多い。灰白色シルト、炭化物を含む。
38. 黄灰色土：ロームブロック、灰白色シルト粒の混上。
39. 灰黄褐色土(10YR5/2)：灰白色シルト、焼土を含む。
40. にぶい黄褐色土(10YR7/2)：褐色土を含む。住居崩方。
41. にぶい黄褐色土(10YR5/3)：軽石、ローム粒、焼土粒を含む。
42. 褐色土(10YR5/1)：灰白色シルト、ローム粒を含む。
43. 灰白色シルト(10YR7/1)：下部が焼土化している。
44. 黄灰色土(2.5Y4/1)：焼土粒を僅かに含む。
45. 灰白色シルト(10YR7/1)：焼土を含む。天井構築土の崩壊。
46. 灰白色シルトが焼土化した上。
47. 灰黄褐色土(10YR5/2)：焼土・炭化物を含む。
48. 褐色土(10YR7/1)：灰白色シルト、焼土、炭化物を多く含む。
49. 灰白色シルト主体の上。焼土、炭化物を含む。
50. 焼土。
51. 炭化物、灰の混上。
52. ローム粒と灰褐色土(10YR4/1)の混上。
53. 灰白色シルト：薄く貼っている。最も内側が焼土化。
54. 黄褐色ローム(10YR5/6)。
55. 焼土、灰、炭化物、灰白色シルトの混上。
56. 灰白色シルト(10YR7/1)：焼土、灰、炭化物を多く含む。
57. 褐色土(10YR4/1)：炭化物を多く含む。
58. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルトを含む。固く締まっている。床面。
59. にぶい黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルトブロック、焼土、黒褐色土を含む。
60. にぶい黄褐色土(10YR5/3)：灰白色シルトブロック、ローム粒、黒褐色土を含む。焼土は少ない。
61. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石、ロームブロック、炭化物を少量含む。
62. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石、ロームブロック、灰白色シルトブロック、炭化物を含む。
63. 灰黄褐色土(10YR4/2)：白色軽石、ロームブロック、灰白色シルトブロック、炭化物を含む。
64. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。白色軽石、ロームブロック、炭化物を僅かに含む。
65. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックをやや多く含む。灰白色シルトブロックを僅かに含む。
66. 黒褐色土(10YR3/2)：灰白色シルトブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む。
67. 黒褐色土(2.5Y3/1)：黄褐色土、黒色土を含む。
68. ロームブロック、黒褐色土、灰白色シルトブロックの混上。
69. 灰白色シルト(10YR7/1)：ローム粒、灰褐色土を含む。固く締まっている。床面。
70. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒混入。

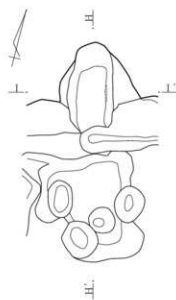
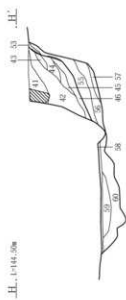
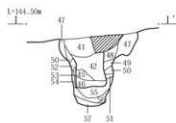
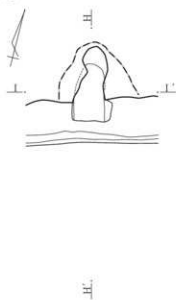


第37図 14号住居遺物出土状態図(土器と礫)

1号窟



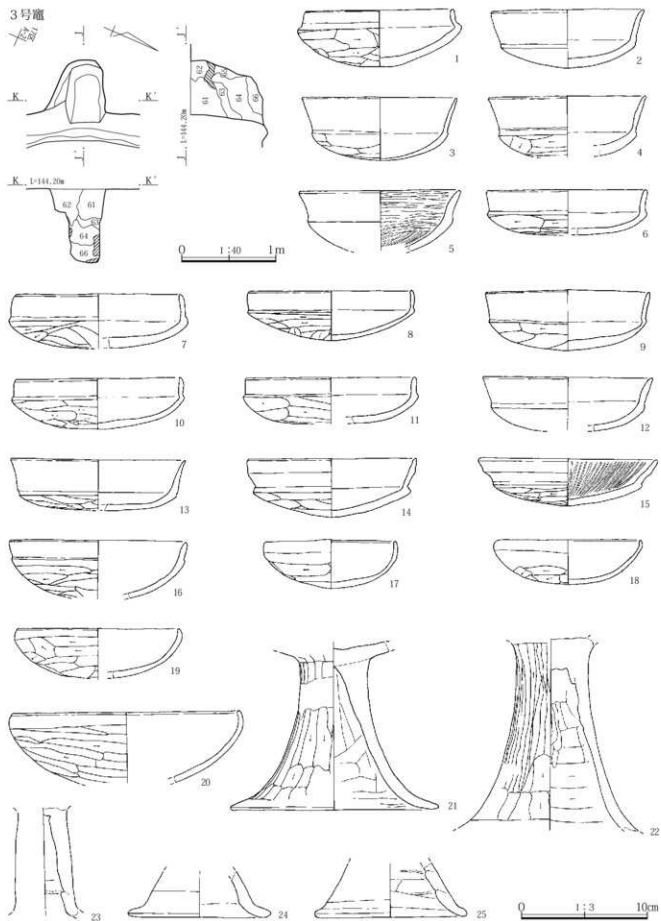
2号窟



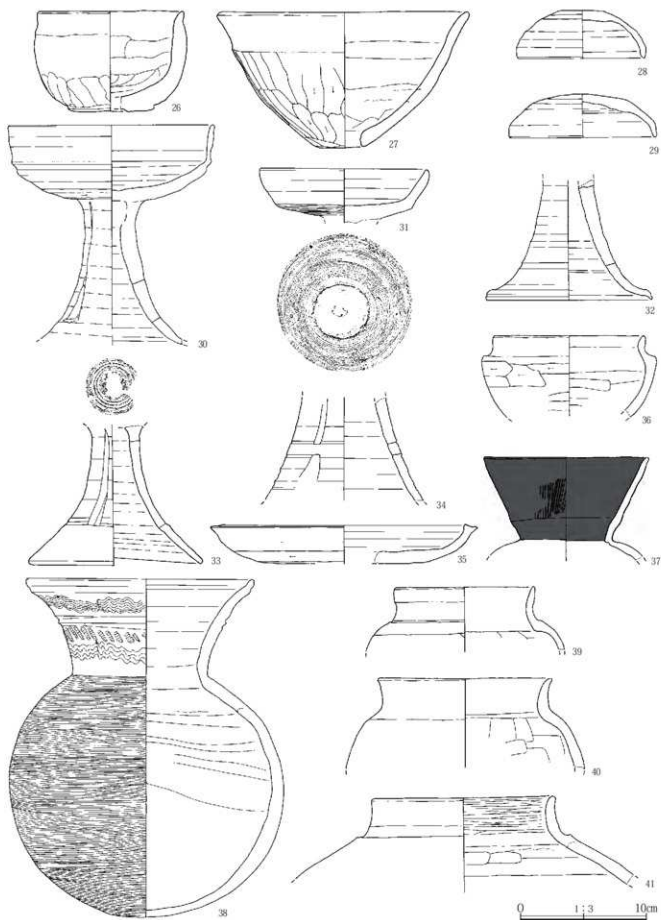
第38图 14号住居1号窟・2号窟平断面图

第3章 調査の成果

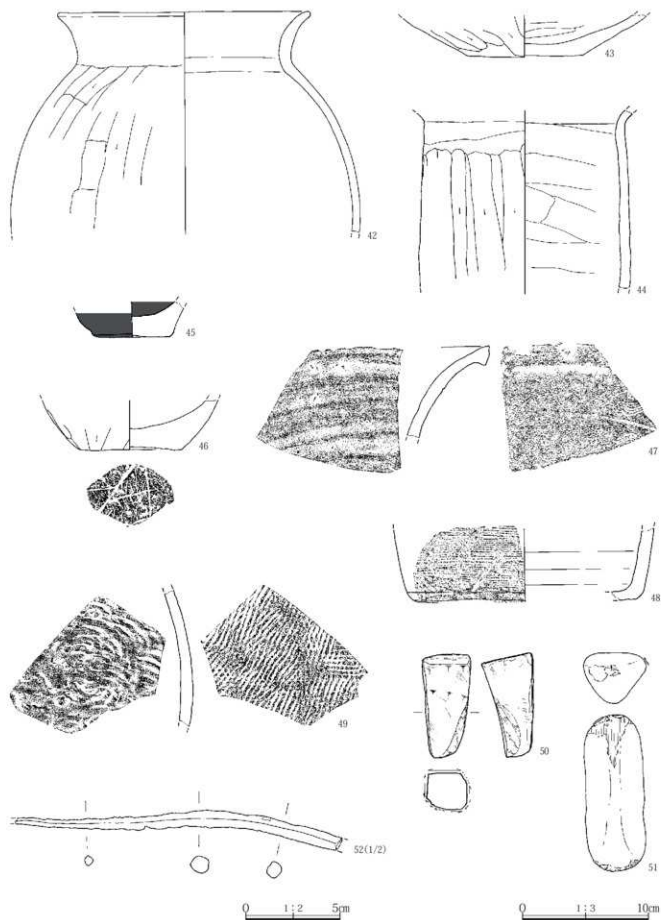
3号竈



第39図 14号住居3号竈平断面図・出土物(1)

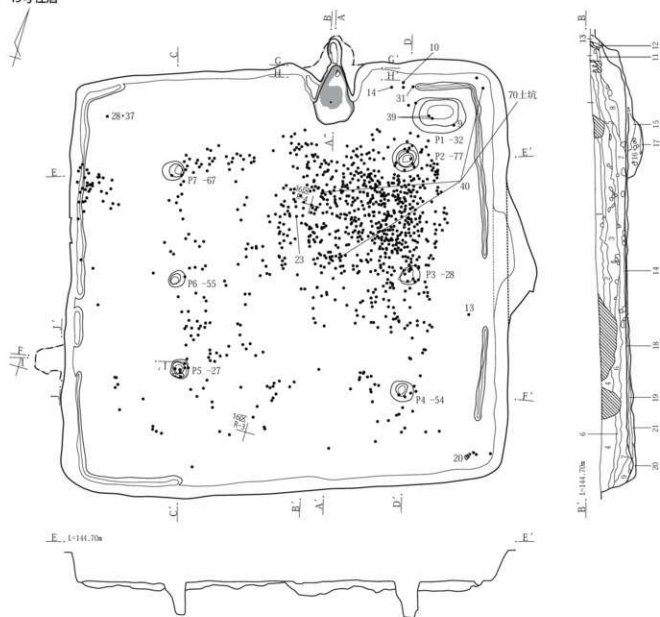


第40图 14号住居出土遺物(2)



第41图 14号住居出土遺物(3)

15号住居



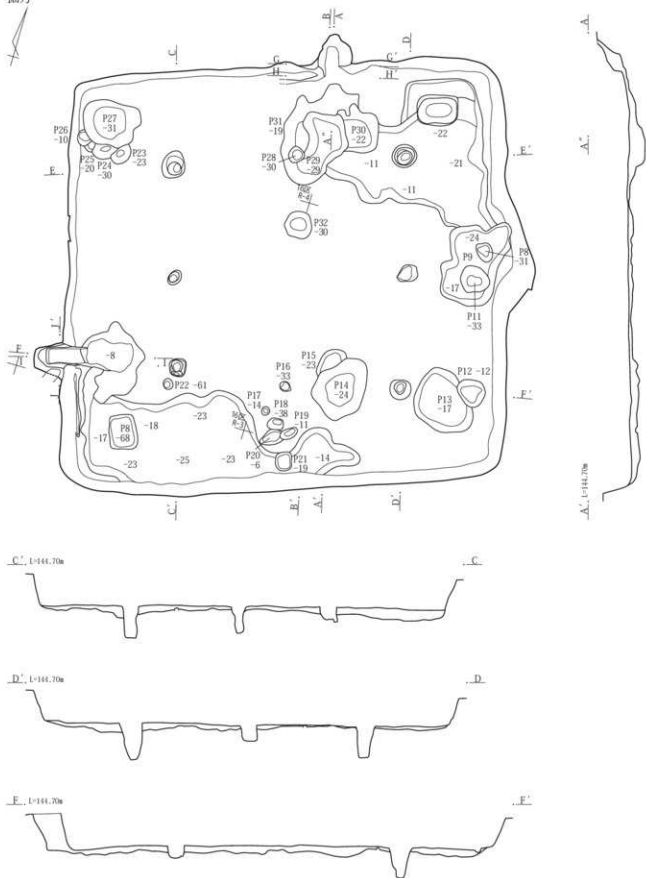
15号住居

1. 赤茶褐色上: 白色軽石含有・粒状ローム多量。
2. 塊状IV層上主体(黒褐色上)。 3. 黒褐色上: 白色軽石少量・粒状ローム含有。
4. 黒褐色上(シルト質): 白色軽石少量・粒状黄茶褐色上多量。
5. 2近質・粒状焼土混入。
6. 暗褐色上: 白色軽石少量・粒状焼土含有・均質にシルトが混じる。
7. 黒褐色上: 細白色軽石若干。 8. 塊状被熱地山上(被熱ローム上)。
9. 黒褐色上: 白色軽石無・塊状ローム上少量。 10. 褐色上: 粗粒状ローム含有。
11. 8同質(塊状化=草木等の混入が原因)。 12. 8同質。 13. 8近質。
14. 黒褐色上: 白色軽石複雑。 15. 黄灰色上(2.5V4/1): ローム粒を多く含む。
16. 濃い黄灰色上(2.5V6/4): ロームブロック主体の上。灰白色シルトブロック少量含む。
17. 灰黄色砂質シルト上(2.5V6/2)。
18. 黄褐色上(2.5V3/3): 粗砂粒多く含む。固く締まっている。床面。
19. 濃い黄褐色上(2.5V6/4): 小礫を含む。固く締まっている。
20. 暗灰黄色上(2.5V4/2): ローム粒含む。固く締まっている。
21. 明黄褐色上(2.5V6/6): 地山の崩れた上。
22. ロームブロック主体。 23. 茶褐色上: 白色軽石若干・ロームブロック含有。
24. 被熱ローム上主体。 25. 灰黄褐色上: 白色軽石若干・被熱ローム上含有。
26. 灰黄褐色上: 白色軽石無し・被熱ローム上含有。
27. 塊状焼土主体: ブロック状に26層上含有。 28. 塊状焼土層。
29. 暗茶褐色上: 粗粒状焼土含有。 30. 灰黄褐色ローム上。
31. 塊状焼土層。
32. 灰・炭化物層。 33. 灰黄褐色上: 灰色シルト粒・砂粒を含む。固い。床。
34. 明黄褐色ローム上: 黄土・黒褐色上を含む。
35. 焼土層: ロームの小ブロックを含む。 36. ロームブロック・焼土・黒褐色上の混土層。
37. 明黄褐色ローム上: 地山ローム上の崩れた上。
38. 暗灰黄色上(2.5V4/2): ロームブロック・砂粒を含む。
39. 焼土と灰白色シルトの混土。 40. 焼土・炭化物・黒褐色上の混土。
41. 黒褐色上(2.5V3/1): 黄土をまばらに含む。
42. 灰白色シルト(2.5V8/1)。 43. 焼土。
44. 灰白色シルト・焼土・暗灰黄色上の混土。

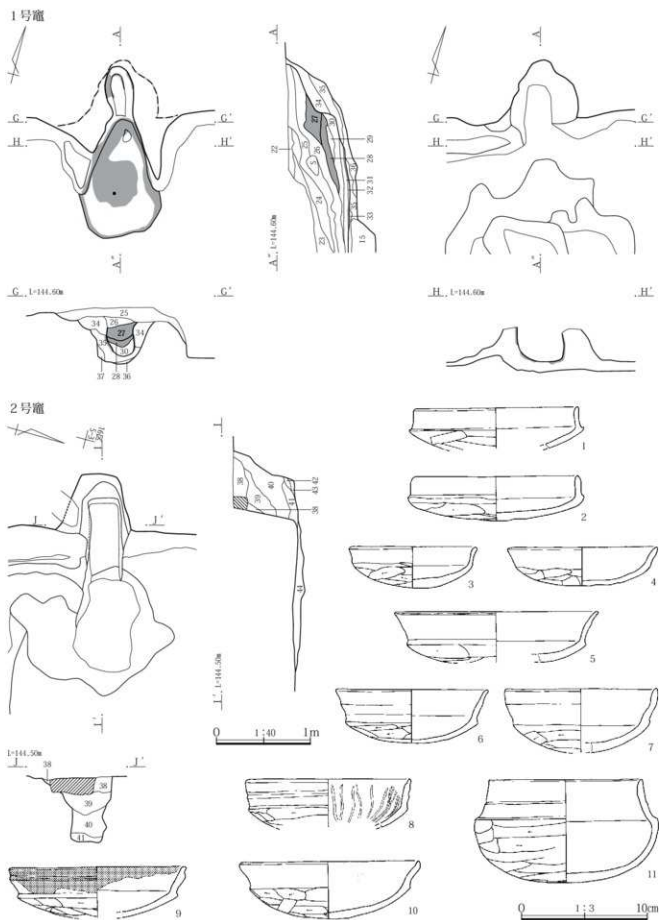
第42図 15号住居断面図

第3章 調査の成果

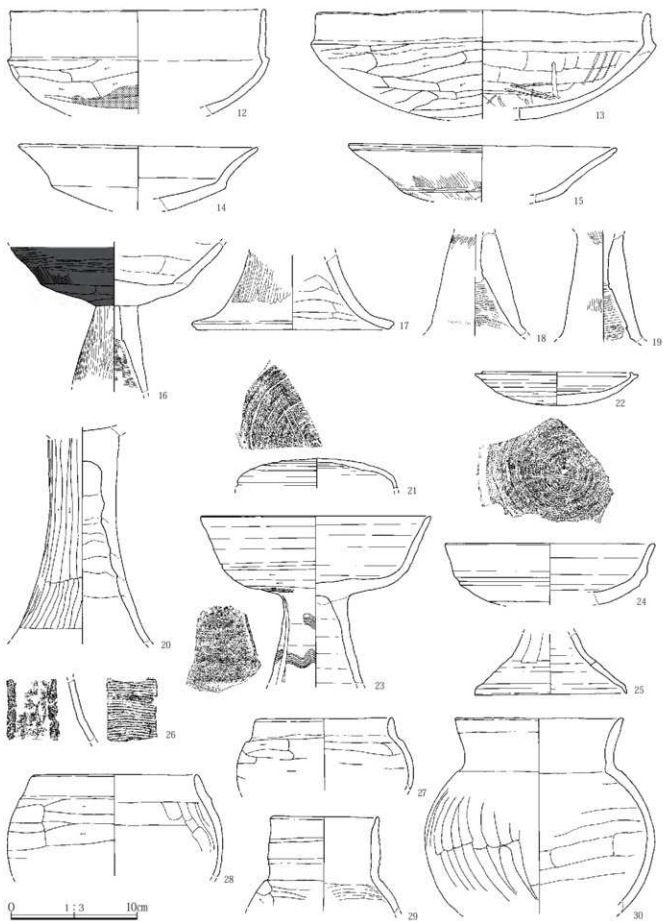
掘方



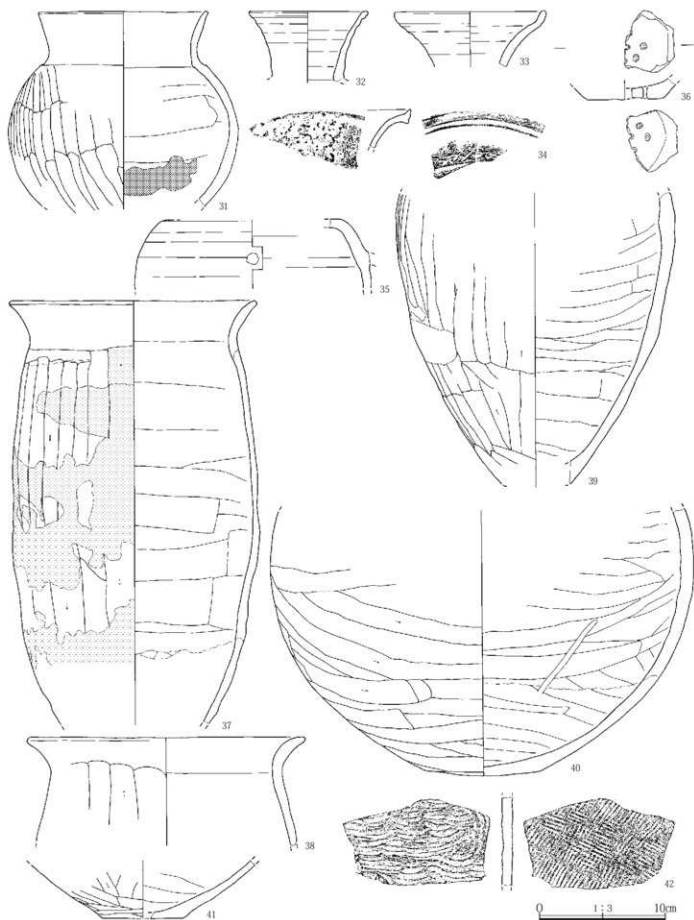
第43図 15号住居掘方平面断面図



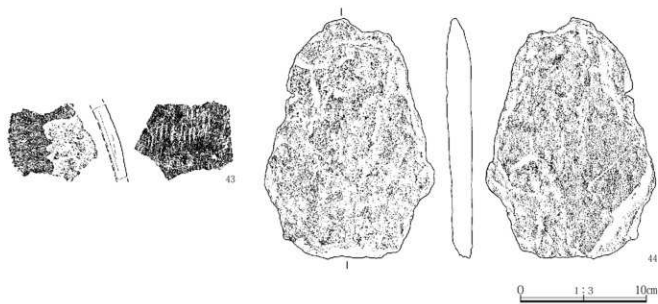
第44図 15号住居 1号竪・2号竪平断面図・出土遺物(1)



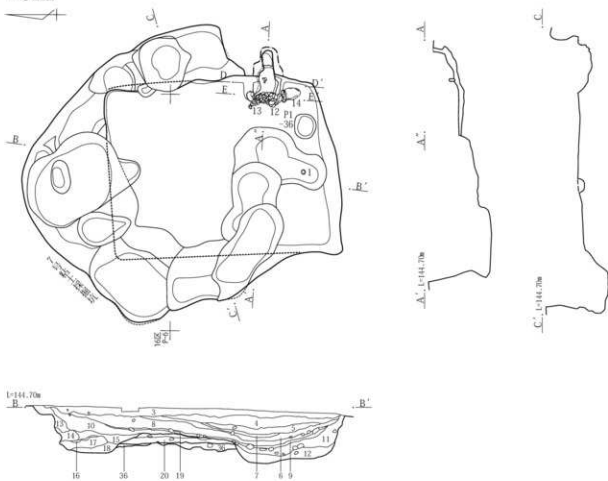
第45図 15号住居出土遺物(2)



第46圖 15号住居出土遺物(3)

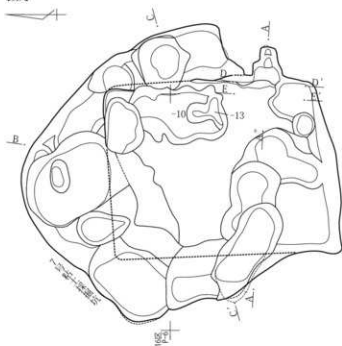


16号住居



第47図 15号住居出土遺物(4)、16号住居・7号粘土探掘坑断面図

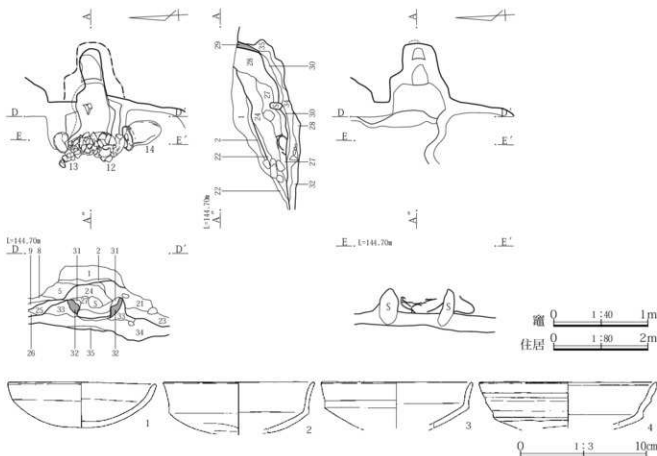
掘方



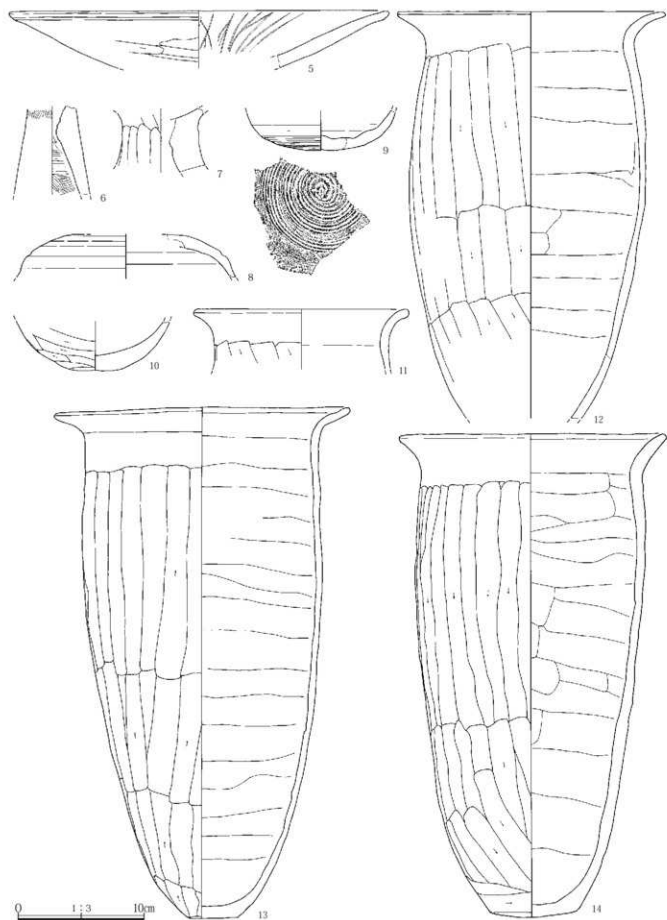
16号住居

1. 褐色土(10YR4/1)：灰白色シルト小ブロック、白色軽石含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルト小ブロック、砂粒含む。
3. 黒褐色土：白色軽石含む。
4. 赤茶褐色土：白色軽石混入・粒状ローム多量・鉄分混入。

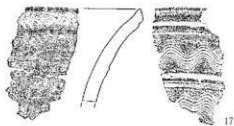
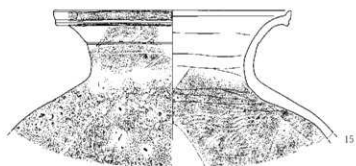
5. 黒褐色土：白色軽石含有・塊状灰黄褐色シルト多量。
6. 黒褐色土：白色軽石混入・塊状灰黄褐色シルト含有。
7. 黒褐色土：白色軽石少量・塊状灰黄褐色シルト少量・粒状焼土若干。
8. 黒褐色土：白色軽石無・塊状灰黄褐色シルト混入・焼土塊含有。
9. 黒灰色土：ノロ。
10. 黒褐色土：白色軽石少量・粒状焼土少量。
11. 暗褐色土：白色軽石若干・塊状暗褐色土(粒状軽石無)含有。
12. 黒褐色土：白色軽石含有。 13. 暗褐色土=V層上。
14. 塊状V層と塊状黒褐色土白色軽石含有の混土。
15. 暗褐色土：白色軽石少量・塊状灰色シルト若干。
16. 黒褐色土：白色軽石若干・粒状焼土多量・灰色シルト多量。
17. 黒褐色土：白色軽石若干・粒状焼土含有・灰色シルト含有。
18. 黒褐色土：白色軽石若干。 19. 黒褐色土：白色軽石少量。
20. 黒褐色土：白色軽石微量。
21. 黒褐色土(10YR3/1)：ローム粒、焼土粒を含む。
22. 黒褐色粘質土(10YR3/2)：白色軽石極微量。
23. 黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒、灰白色シルトブロックを含む。
24. 褐色土(10YR5/1)：焼土、砂粒、灰白色シルト粒を含む。
25. 23同質。
26. 灰白色シルトブロック(10YR7/1)：黒褐色土を含む。
27. 褐色土(10YR6/1)：灰白色シルトを多く含む。焼土、炭化物を含む。
28. 灰白色シルト(10YR7/1)：焼土、炭化物の混土。
29. 焼土：灰白色シルトの焼土化。
30. 黒褐色土(10YR2/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。
31. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。
32. 31の焼土化。 33. 31同質。
34. 黒褐色土(10YR3/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。
35. 灰白色シルトブロック(10YR7/1)と黒褐色土の混土。
36. 灰白色シルト(10YR7/1)と黒褐色土(2.5Y3/2)の混土。



第48図 16号住居掘方平面図・竪断面図・出土遺物(1)



第49図 16号住居出土遺物(2)

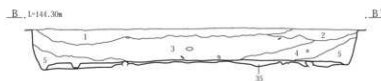
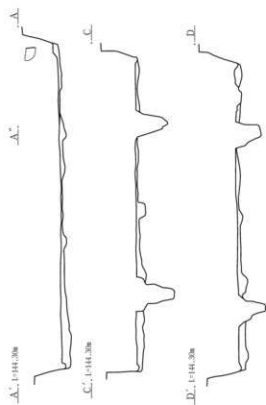
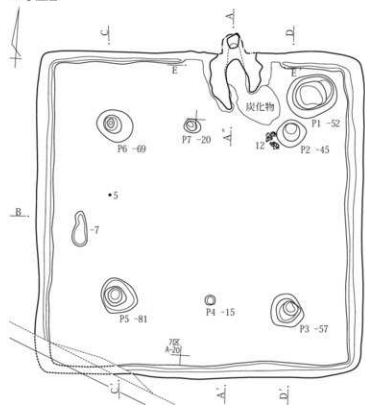


0 1:3 10cm



18(1/4) 0 1:4 10cm

17号住居



0 1:80 2m

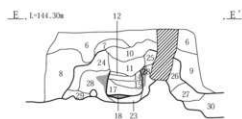
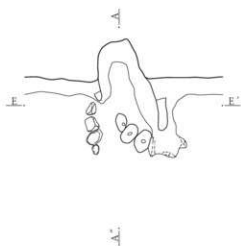
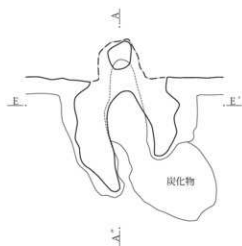
第50図 16号住居出土遺物(3)、17号住居平面断面図

掘方

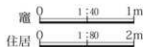


17号住居

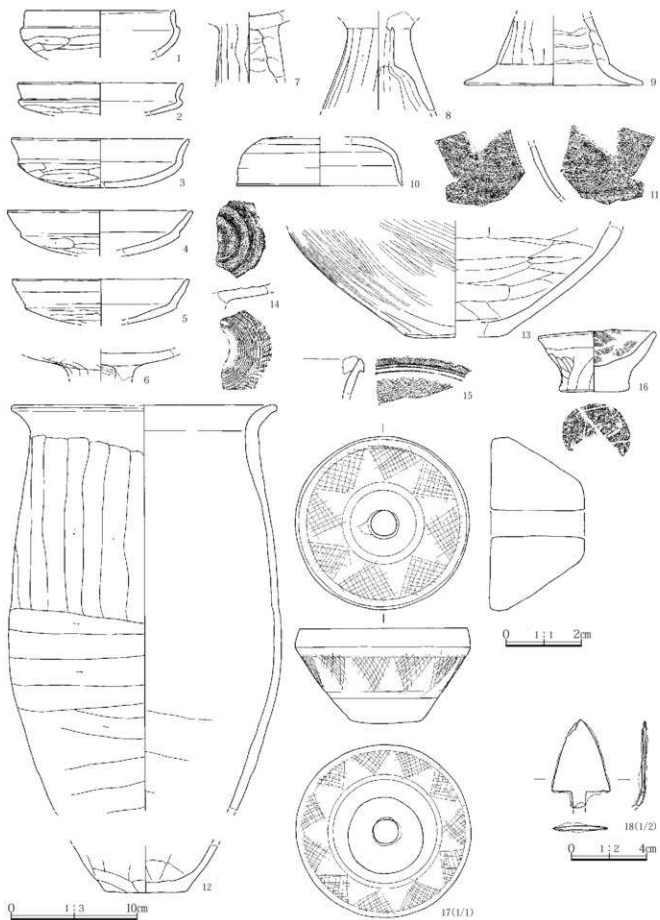
1. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石、ローム粒を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石、ローム粒を含む。
3. 灰黄色土(10YR4/2)：ロームブロックを含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)：ローム粒、炭化物を含む。
5. 暗褐色土(10YR3/4)：ローム粒を含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒、白色軽石を含む。
7. 暗褐色土(10YR3/3)：ローム粒多い、炭化物・焼土まばら。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土、ロームブロックを含む。
9. 8同質。
10. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。
11. 浅灰色土(2.5Y7/4)：焼土をまばらに含む。
12. 焼土の薄い層。
13. にぶい黄褐色土(10YR5/3)：珪土・焼土との混土。
14. 珪土化したもの。
15. 褐灰色土(10YR4/2)：焼土、ロームブロックを含む。
16. 浅黄色ローム土、焼土、炭化物、褐色土を含む。
17. 浅黄色ローム土、焼土、炭化物、褐色土との混土。
18. 焼土の薄い層。
19. にぶい黄褐色シルト(2.5Y6/4)：天井の残り。
20. 灰黄シルト(2.5Y7/2)：天井の残り。
21. にぶい黄色シルト(2.5Y6/4)：奥に貼り付けてあるシルト。
22. 焼土とにぶい黄色シルトブロックの混土。
23. 焼土、炭化物、灰の混土。
24. にぶい黄色土(2.5Y6/4)：灰白色シルト粒を含む。
25. 24同質。
26. 24のブロックと黄灰色土との混土。
27. 灰白色シルト(2.5Y8/1)：黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。
28. 灰白色シルト(10YR8/1)
29. にぶい黄褐色土(10YR5/3)と灰白色シルト(2.5Y8/1)との混土。
30. 黒褐色土(10YR3/1)：ローム粒、灰白色シルト粒を含む。



31. にぶい黄色シルト(2.5Y6/4)：上面焼土化している。
32. 焼土、炭化物、灰の混土。
33. にぶい黄色土(2.5Y6/4)：砂質、固く締まっている。
34. 33同質。
35. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを非常に多く含む。固く締まっている。
36. 黒褐色土(10YR2/2)：灰白色シルトブロックを非常に多く含む。固く締まっている。

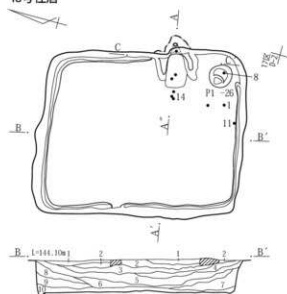


第51図 17号住居掘方平面図・竈断面図

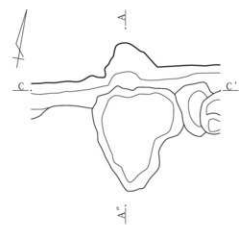
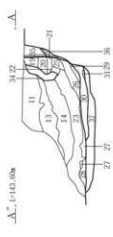
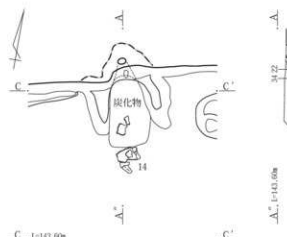
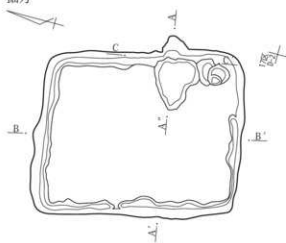


第52図 17号住居出土遺物

18号住居



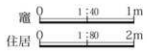
掘方



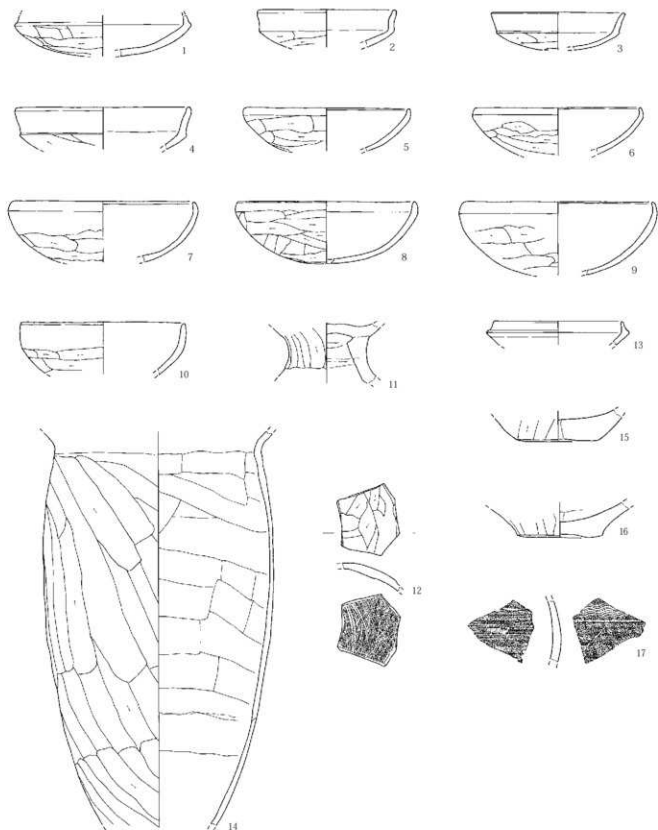
18号住居

1. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石、ロームブロックを多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石、ロームブロックをやや多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石をやや多く含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含む。ロームブロックをやや多く含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石、ロームブロックを少量含む。
6. 黒褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
7. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを少量含む。白色軽石を僅かに含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石、ロームブロックを多く含む。炭化物粒を僅かに含む。
9. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石、ロームブロックをやや多く含む。
10. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石、ロームブロック、焼土ブロックを少量含む。
11. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：白色軽石を多く含む。ローム粒を含む。
12. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルト、暗灰黄色土の混上。
13. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：白色軽石、ローム粒、炭化物を含む。

14. 黄灰色土(2.5Y4/1)：灰黄色シルトブロック(2.5Y6/1)、焼土ブロック、炭化物を含む。
15. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。灰白色シルトブロックを少量含む。
16. 暗褐色土(10YR3/4)：灰白色シルトブロックを多く含む。
17. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック、灰白色シルトブロックを少量含む。
18. 15同質。 19. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：白色軽石を僅かに含む。
20. 黄灰色土(2.5Y4/1)：焼土を含む。
21. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4)：地山の崩落か。
22. 焼土ブロックと黒褐色土の混上。
23. 黄灰色土(2.5Y5/1)：シルト質、暗灰黄色土(2.5Y4/2)焼土を含む。
24. 灰白色シルト、焼土、炭化物の混上。
25. 黒褐色土(10YR3/2)：焼土を多く含む。
26. 焼土ブロック主体。 27. 黒褐色土(10YR3/1)：炭化物、灰を含む。
28. 灰白色シルト(10YR7/1)：下部がやや焼土化。
29. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：焼土、炭化物を僅かに含む。
30. 黒色土(10YR2/1)：焼土粒、炭化物粒、灰を多く含む。
31. 灰層。 32. 明赤褐色土(5YR5/6)：33層の焼土化。
33. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。ロームブロック、焼土粒を僅かに含む。
34. 暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)：壱構築上。
35. 褐灰色土(10YR4/1)：焼土を多く含む。外側が焼土化している。
36. 灰黄褐色土(10YR4/2)：上面が焼土化している。この上が煙道だった時期あったか。
37. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを非常に多く含む。



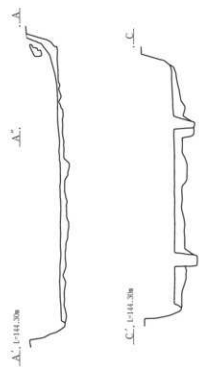
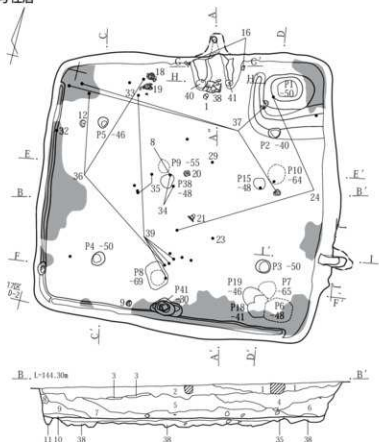
第33図 18号住居平面断面図・竈平面断面図



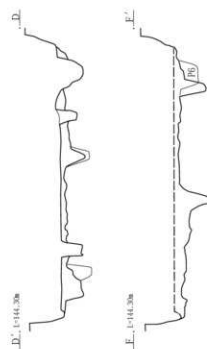
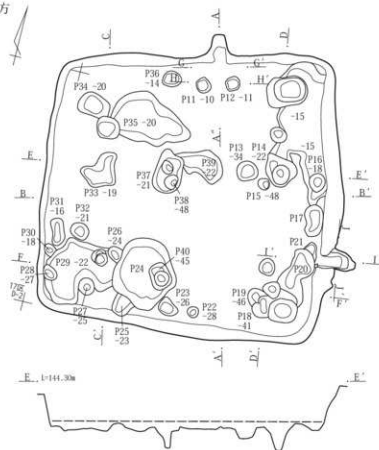
第54図 18号住居出土遺物

0 1:3 10cm

19号住居

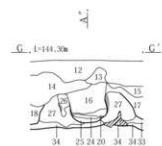
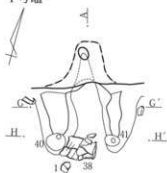


掘方

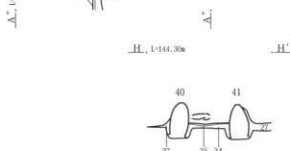
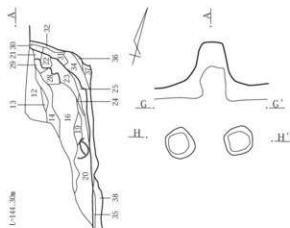
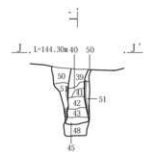


第55図 19号住居平面断面図

1号竪



2号竪



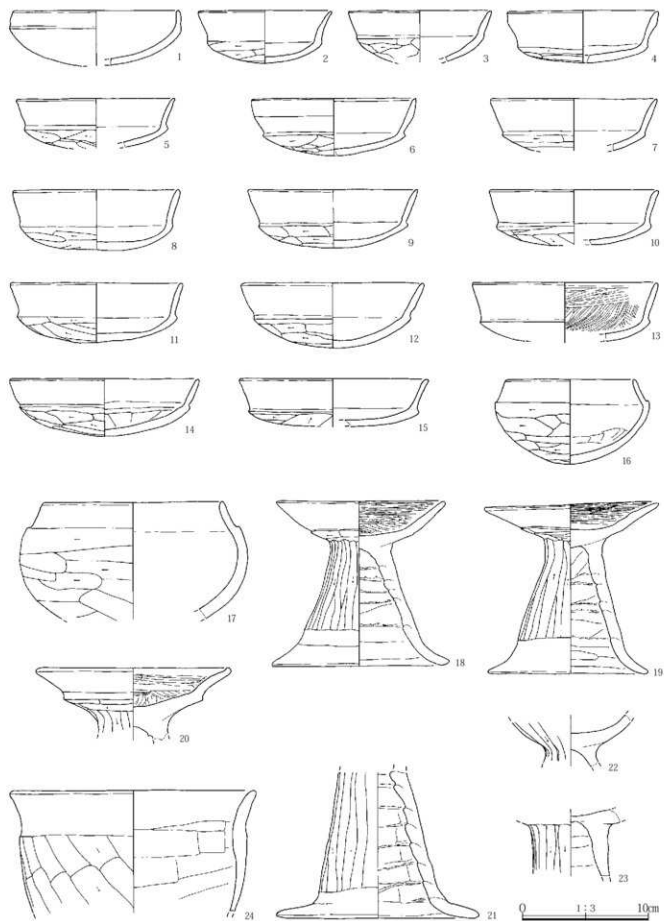
19号住居

1. 灰黄褐色土(10YR5/2):白色軽石、ローム粒、焼土を含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2):白色軽石を含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2):灰白色シルトを多く含む。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2):白色軽石、ロームブロック、黒色土ブロックを含む。
5. 褐色土(10YR4/1):白色軽石、ロームブロックを含む。黒色土ブロックを多く含む。
6. 褐色土(10YR4/2):白色軽石、ローム粒をまばらに含む。
7. 褐色土(10YR5/1):白色軽石を少量含む。ローム粒、炭化物を含む。
8. にぶい黄褐色土(10YR4/3):ブロック上。
9. 褐色土(10YR4/1):白色軽石、ローム粒を僅かに含む。
10. 焼土と炭化物の層。
11. 褐色土とロームブロックの混土。
12. にぶい黄褐色土(10YR4/3):白色軽石、ローム粒、焼土を含む。
13. 暗黄褐色土(2.5Y5/2):灰白色シルトブロック、軽石を含む。
14. 褐色土(10YR4/1):灰白色シルト粒、焼土粒を含む。
15. 14同層。
16. 暗黄褐色土(2.5Y4/2):灰白色シルトブロック、焼土を含む。
17. 灰黄褐色土(10YR4/2):灰白色シルトを多く含む。
18. 灰白色シルト(10YR7/1):褐色土を僅かに含む。
19. 黄灰色土(2.5Y4/1):焼土、炭化物、灰を含む。
20. 焼土、灰白色シルトの混土。
21. 黄灰色土(2.5Y4/1):焼土を多く含む。
22. 黄灰色シルト(2.5Y5/1):一部焼土化している。
23. 21同層。
24. 炭化物。
25. 灰層。
26. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)と黄灰色土(2.5Y4/1)の混土。
27. 黄灰色シルト(2.5Y6/1):袖。
28. 灰白色シルト(2.5Y7/1):一部焼土化。
29. 褐色シルト(10YR6/1):天井部。
30. 黄灰色シルト(2.5Y6/1):壁無經過部。
31. 黄灰色土(2.5Y5/1):炭化物、焼土を含む。
32. 黄灰色土(2.5Y6/2):焼土を含む。
33. 黄灰色土(2.5Y4/1):ローム粒を含む。
34. 黄灰色土(2.5Y5/1):灰、炭化物を多く含む。ロームブロックを含む。
35. 暗黄褐色土(2.5Y4/2):焼土、ローム粒を含む。
36. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)。
37. 黒褐色土(2.5Y3/1):塊状層上を含む。
38. ロームブロックと黒褐色土の混土。
39. 灰黄褐色土(10YR4/2):ローム粒、灰白色シルト粒を含む。
40. にぶい黄褐色土(10YR4/3):焼土、灰白色シルトを含む。
41. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)。
42. 明黄褐色ロームブロック(2.5Y7/6):間隙に黄灰色土(2.5Y4/1)が入る。
43. 褐色土(10YR4/1):焼土をまばらに含む。
44. 暗褐色土(10YR3/4):焼土ブロック、ロームブロックを僅かに含む。
45. 灰と焼土の混土。
46. 黄灰色土(2.5Y4/1):灰・焼土を含む。
47. 黒褐色土(2.5Y3/1)ブロックとローム粒、灰白色シルトブロックの混土。焼土を含む。
48. 黄灰色土(2.5Y4/1)とローム土の混土。炭化物、焼土、灰を含む。
49. 暗褐色土(10YR3/4):焼土ブロックを僅かに含む。
50. 暗黄褐色土(2.5Y4/2):軽石を多く含む。焼土をまばらに含む。
51. オリブ褐色土(2.5Y4/3):ローム土、焼土を含む。

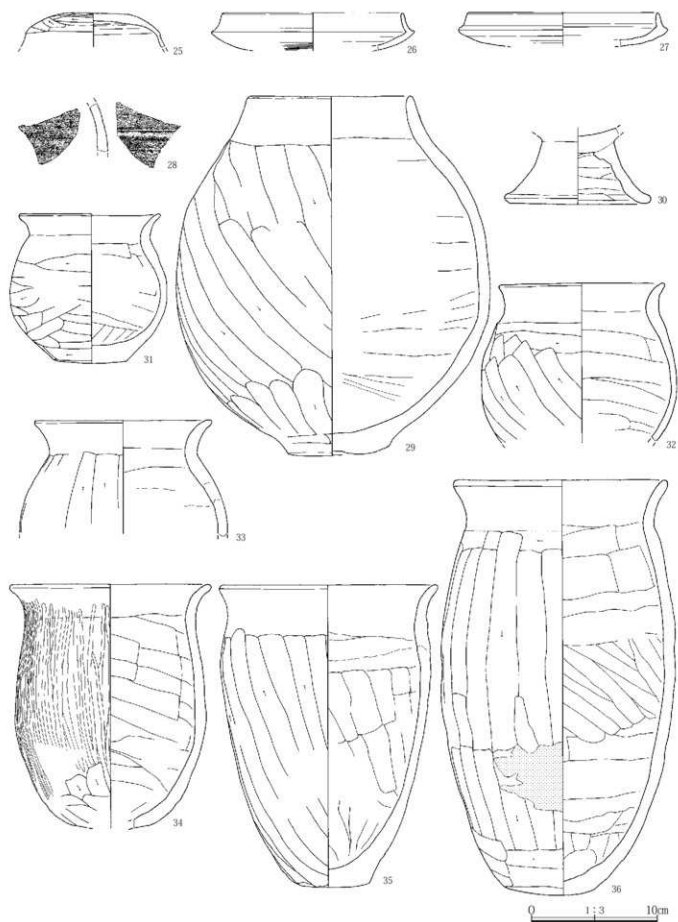
0 1:40 1m

第56図 19号住居1号竪・2号竪断面図

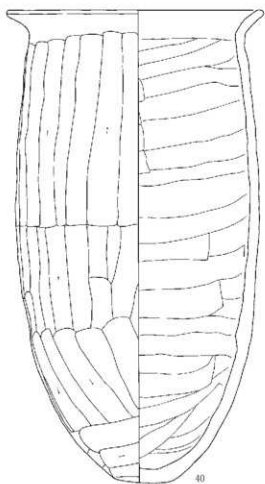
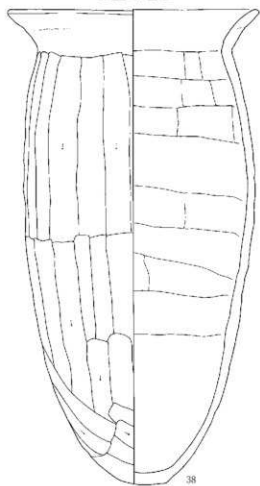
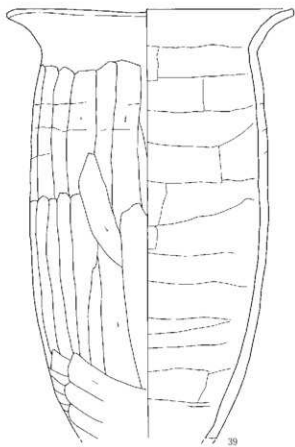
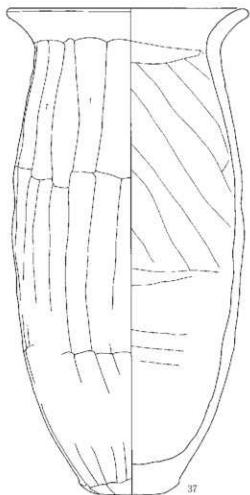
第3章 調査の成果



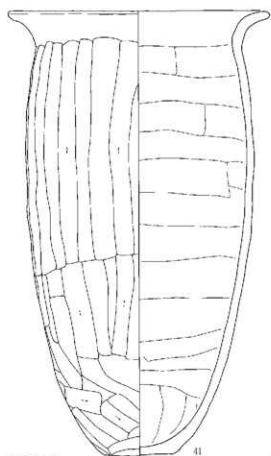
第57図 19号住居出土遺物(1)



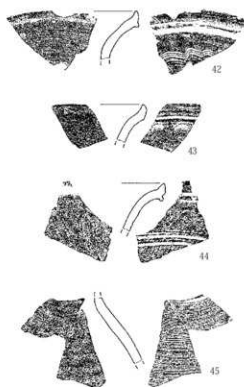
第58圖 19号住居出土遺物(2)



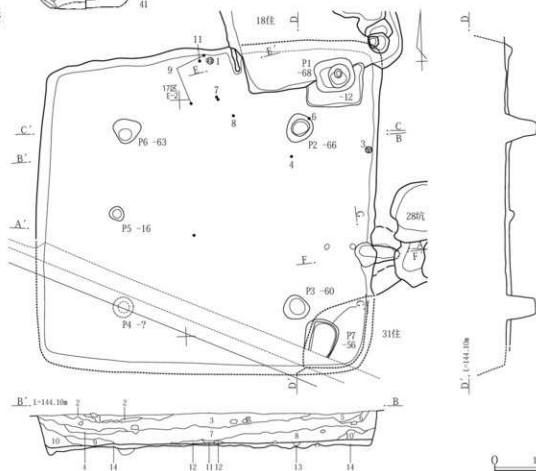
0 1:3 10cm



20号住居

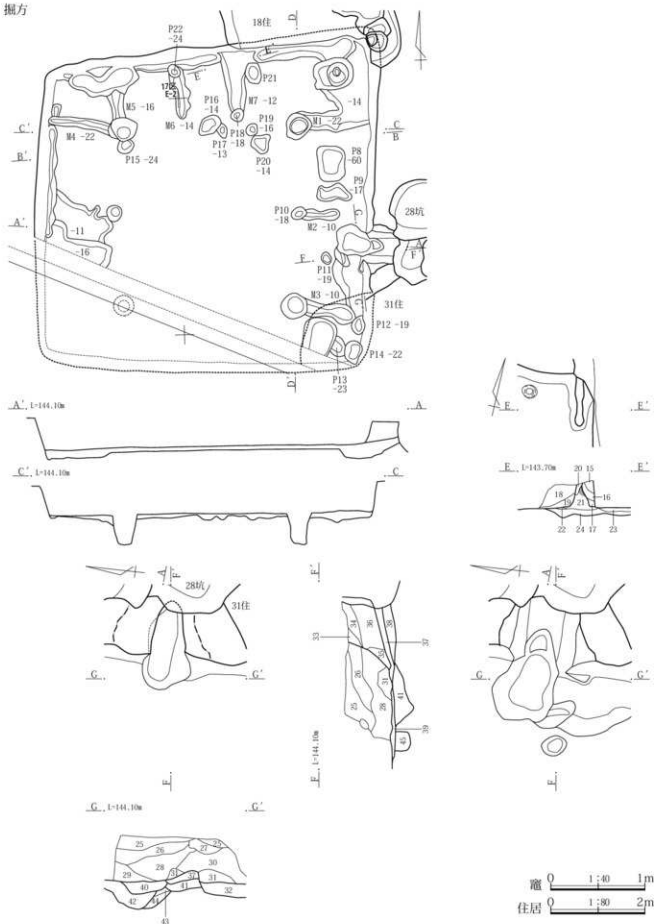


0 1:3 10cm



第60图 19号住居出土遺物(4)、20号住居平面断面图

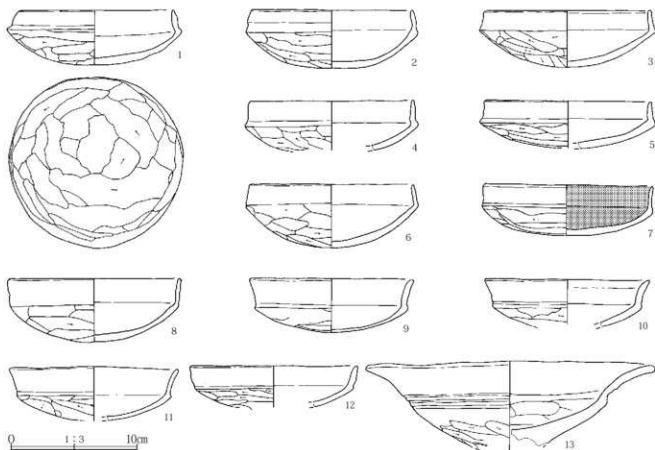
掘方



第61図 20号住居掘方平断面図・縦平断面図

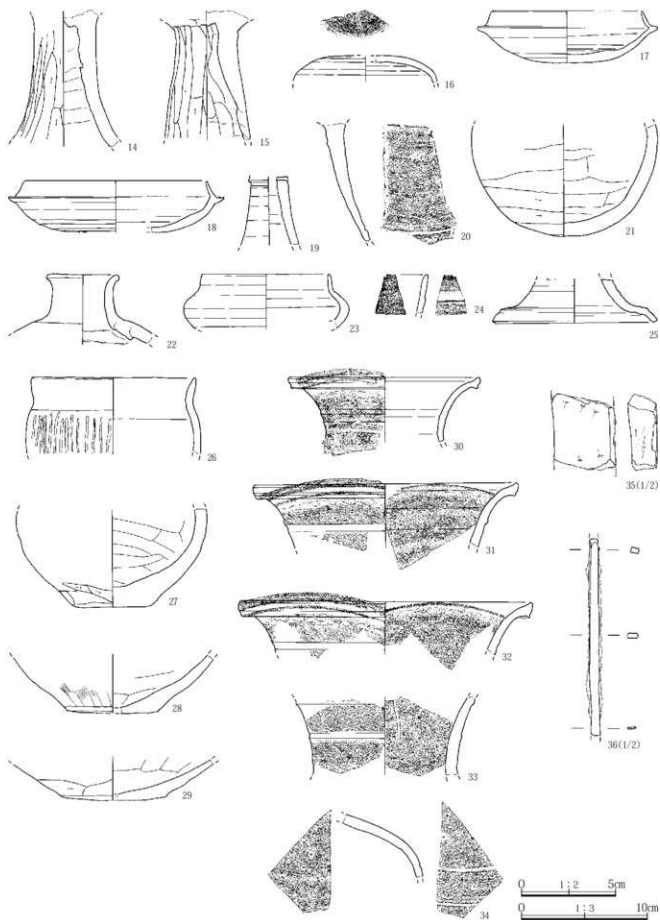
20号住居

1. 黄灰色土(2.5V4/1):白色軽石を含む。
2. 黄灰色シルト(2.5V6/1):白色軽石、黒褐色土を含む。
3. 暗灰黄色砂質土(2.5V4/2):砂粒やや多い。締まり弱く崩れ易い。黒色土、炭化物を含む。
4. 黄灰色土(2.5V4/1):白色軽石、砂粒を含む。
5. 暗灰黄色砂質土(2.5V5/2):灰黄色砂(2.5V7/2)を多く含む。締まり弱く崩れ易い。
6. オリーブ褐色土(2.5V4/3):小ロームブロック、砂粒を含む。
7. 黄褐色土(2.5V3/3):ロームブロック、黒褐色土ブロック、白色軽石、砂粒を含む。中央部分には焼土を含む。
8. 暗灰黄色土(2.5V4/2):ロームブロック、白色軽石、砂粒を含む。
9. 暗灰黄色土(2.5V4/2):黒色土ブロック、ロームブロック、白色軽石を含む。
10. 黄灰色土(2.5V4/1):ローム粒、白色軽石、砂粒を含む。
10. 10号瓦だが焼土粒を含む。
11. 黄褐色土(2.5V5/4):ローム粒を多く含む。
12. 明黄褐色ローム質土(2.5V6/6):ローム上の崩れた土。
13. P2埋土。 14. 掘方埋土。
15. 黒褐色土(10YR2/2):ローム粒、焼土粒、白色軽石を含む。
16. 黒褐色土(10YR2/2):焼土ブロックを多く含む。ローム粒を少量含む。
17. 黒褐色土(10YR2/2):ロームブロックを多く含む。焼土ブロックを少量含む。
18. 黒褐色土(10YR3/2):ロームブロック、白色軽石を少量含む。焼土ブロックを僅かに含む。
19. 褐色土(10YR4/4):ロームブロック主体。黒褐色土ブロック、焼土ブロックを少量含む。
20. 淡黄色シルト(2.5Y8/3)
21. 明黄褐色ローム土(2.5V7/6)
22. 黒色土(2.5Y2/1):炭化物を含む。
23. オリーブ褐色土(2.5V4/3):焼土、ローム粒を含む。
24. 暗灰黄色土(2.5V4/2):ローム粒、炭化物を含む。
25. 黒褐色土(10YR2/2):白色軽石、焼土ブロック、黒色土ブロックを多く含む。ロームブロックを少量含む。
26. 暗褐色土(10YR3/3):白色軽石、灰白色シルトブロックをやや多く含む。焼土ブロック、ロームブロックを少量含む。
27. 暗褐色土(10YR3/3):3層近置。焼土ブロックは僅かに含む。
28. 黒褐色土(10YR3/2):灰白色シルトブロックをやや多く含む。焼土ブロック、白色軽石、ロームブロックを少量含む。
29. 暗褐色土(10YR3/3):灰白色シルトブロック、ロームブロック、白色軽石、焼土ブロックを少量含む。炭化物を僅かに含む。
30. 黒褐色土(10YR3/2):灰白色シルトブロック、ロームブロック、白色軽石、焼土ブロックを少量含む。
31. 黒褐色土(10YR3/2):ロームブロックをやや多く含む。灰白色シルトブロック、ロームブロック、白色軽石、焼土ブロックを少量含む。
32. 暗灰黄色土:焼土粒、ローム粒、炭化物を多く含む。
33. 暗褐色土(10YR3/3):焼土ブロック、白色軽石、ロームブロックを少量含む。
34. 暗褐色土(10YR3/3):焼土ブロックを非常に多く含む。白色軽石、ロームブロックを僅かに含む。
35. 黒褐色土(10YR3/2):焼土ブロックを非常に多く含む。ロームブロック、灰をやや多く含む。
36. 赤褐色土(2.5YR4/6):焼土ブロックの堆積層。灰をやや多く含む。
37. 黄褐色土(2.5Y5/6):ローム主体とし、焼土ブロック、灰をやや多く含む。
38. 黄褐色土(2.5Y5/6):ローム主体とし、焼土ブロック、灰白色シルトブロックを少量含む。
39. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4):焼土、黒色土を多く含む。固く締まっている。
40. 褐色土(10YR4/4):焼土ブロック、ロームブロックを多く含む。
41. 明黄褐色ローム土(2.5V6/6):焼土、黒色土粒、灰白色シルト粒を多く含む。
42. 黄褐色土(10YR5/6):ロームを主体とし、黒褐色土ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。
43. 褐色土(10YR4/4):焼土粒を多く含む。ローム粒、灰白色シルトブロックを少量含む。
44. 暗灰黄色土(2.5V4/2):ローム粒、灰白色シルトブロックを多く含む。焼土粒を僅かに含む。
45. 黄褐色土(2.5Y5/4):焼土、灰白色シルト、黒色土を含む。



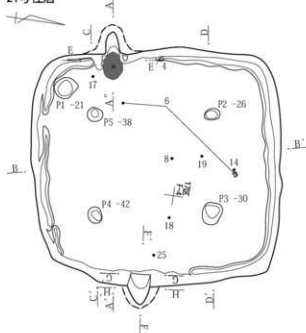
第62図 20号住居出土遺物(1)

第3章 調査の成果

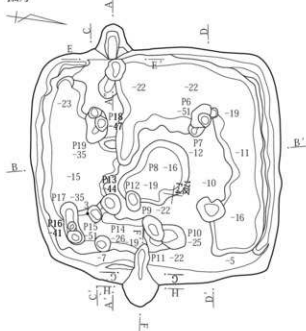


第63図 20号住居出土遺物(2)

21号住居

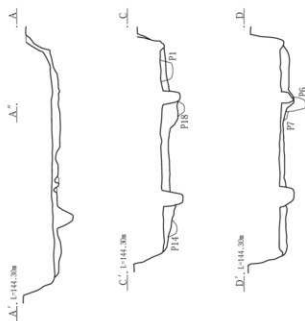


掘方



21号住居

1. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石を多く含む。ロームブロックを多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を少量含む。ロームブロックを僅かに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含む。ロームブロック・炭化物を僅かに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石をやや多く含む。
5. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石を多く含む。ロームブロックを少量含む。
6. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石・ロームブロックを多く含む。
7. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石を少量含む。ロームブロック・炭化物を僅かに含む。



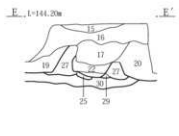
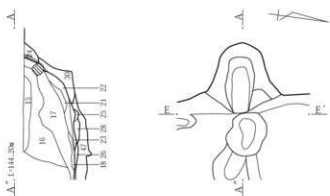
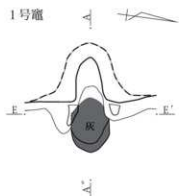
8. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・ロームブロック・炭化物・焼土粒を僅かに含む。
9. 黒褐色土(10YR3/1)：灰を多く含む。炭化物・焼土粒を僅かに含む。
10. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石を少量含む。ロームブロック・炭化物・焼土粒を僅かに含む。
11. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石をやや多く含む。ロームブロック・炭化物・焼土粒を僅かに含む。
12. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロックをやや多く含む。炭化物・焼土粒を僅かに含む。
13. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・ロームブロック・黒色土ブロック・灰白色シルトブロックを僅かに含む。
14. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロック・焼土粒を僅かに含む。
15. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。
16. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。炭化物・焼土粒を僅かに含む。
17. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・焼土粒を少量含む。ロームブロック・灰白色シルトブロックを僅かに含む。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土ブロックを多く含む。灰白色シルトブロックを少量含む。
19. 黒褐色土(10YR2/3)：白色軽石・焼土粒を僅かに含む。
20. 19同質。
21. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土ブロック・灰白色シルトブロックをやや多く含む。
22. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土ブロック・灰を多く含む。
23. 灰黄色土(2.5Y5/1)：灰層(焼土粒、暗褐色土粒を含む)。
24. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・焼土ブロック・白色軽石を少量含む。
25. 暗褐色土(10YR3/3)：灰・焼土粒・炭化物粒・ローム粒を含む。
26. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・焼土粒・炭化物粒・ローム粒を含む。固く締まっている。
27. 褐色土(7.5YR4/1)：焼土ブロックを多く含む。粘性がある。
28. 赤褐色土(5YR4/8)：47層上面の焼土粒。
29. 暗灰色土(7.5YR4/1)：灰・焼土ブロックを多く含む。ロームブロックを少量含む。袖を補修した上か。
30. 黒褐色土(10YR3/2)：焼土ブロック・灰を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。
31. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・ロームブロック・炭化物・焼土粒を少量含む。
32. 黒褐色土(10YR3/2)：灰白色シルトブロックをやや多く含む。炭化物・焼土粒を少量含む。
33. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・ロームブロック・炭化物・焼土粒を少量含む。
34. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルトと黒褐色土の混土。焼土ブロック・炭化物粒を少量含む。固く締まっている。東端陥没後、壁を補修したと考えられる。

0 1:80 2m

第64図 21号住居平面図

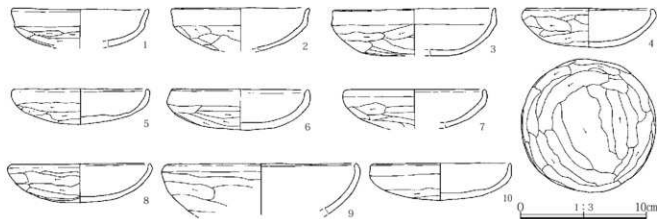
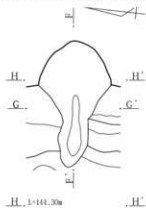
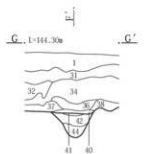
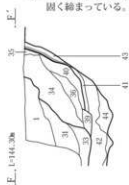
第3章 調査の成果

1号窟

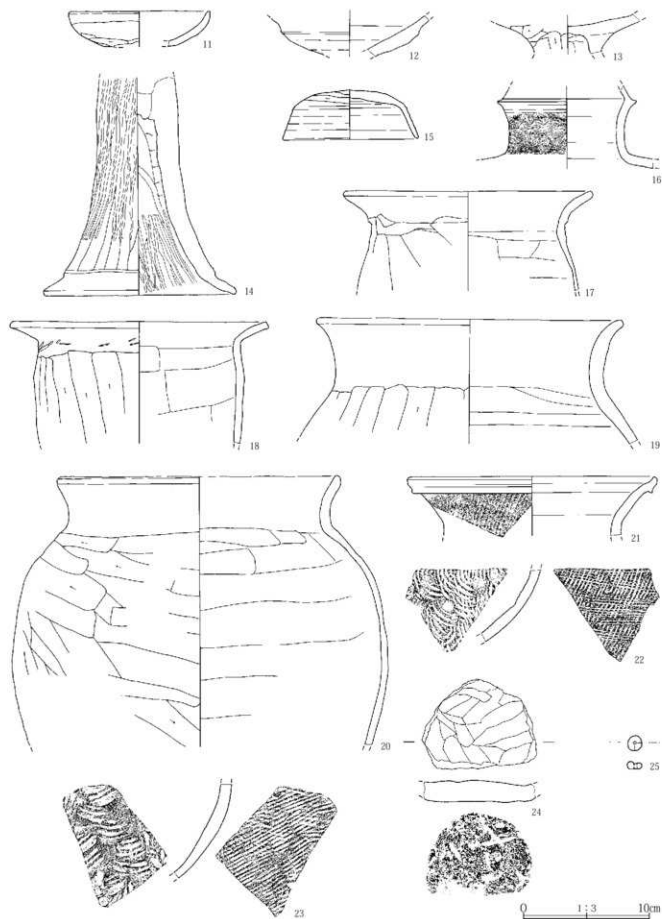


- 35. 暗褐色土(7.5YR3/3)：ロームブロック・焼土ブロックをやや多く含む。
- 36. 褐色土(7.5YR4/3)：焼土ブロック・灰を多く含む。
- 37. 黒色土(10YR2/1)：灰非常に多く含む。
- 38. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・灰白色シルトブロック・焼土ブロックを少量含む。
- 39. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・炭化物・焼土粒・灰を少量含む。
- 40. 黒色土(10YR2/1)：灰非常に多く含む。焼土ブロックをやや多く含む。
- 41. 黒褐色土(2.5Y3/2)：焼土粒・灰を含む。
- 42. 褐灰色土(10YR4/1)：ロームブロック・炭化物・焼土粒を含む。
- 43. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・灰白色シルトブロック・焼土ブロックを少量含む。
- 44. 明黄褐色土(2.5Y6/6)：地山の崩れた上。黄灰色土(2.5Y4/1)ブロックをまばらに含む。
- 45. 褐色土(10YR4/4)：ロームブロックを多く含む。灰白色シルトブロック・焼土粒を少量含む。
- 46. 43同質。
- 47. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む。焼土粒・炭化物粒を僅かに含む。固く締まっている。
- 48. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロックを多く含む。焼土粒・炭化物粒を僅かに含む。
- 49. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。ロームブロックをやや多く含む。粘性があり固く締まっている。

2号窟



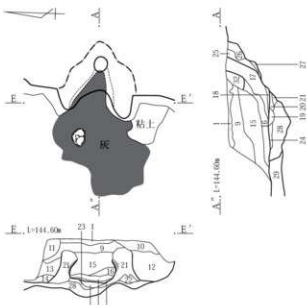
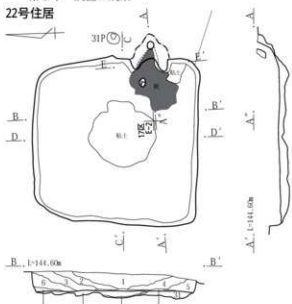
第65図 21号住居1号窟・2号窟平断面図・出土遺物(1)



第66圖 21号住居出土遺物(2)

第3章 調査の成果

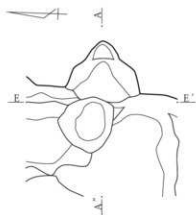
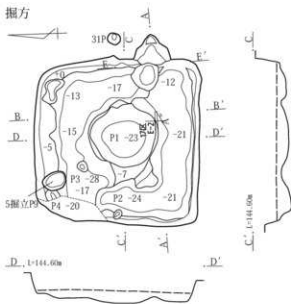
22号住居



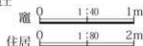
22号住居

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを多く含む。炭化物・焼土ブロックを僅かに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを非常に多く含む。白色軽石をやや多く含む。炭化物・焼土ブロックを僅かに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを非常に多く含む。炭化物・焼土ブロックを僅かに含む。 4. 2同頁。
5. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石・炭化物・焼土ブロックを僅かに含む。
6. 黒褐色土(10YR2/3)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。炭化物・焼土ブロック・灰を僅かに含む。
7. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロック・白色軽石・炭化物・焼土ブロック・灰を含む。やや粘性がある。 8. 7同頁。
9. 暗褐色土(10YR3/4)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。炭化物を僅かに含む。
10. 暗褐色土(10YR3/4)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。
11. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石をやや多く含む。ロームブロックを少量含む。
12. 褐色土(10YR4/4)：ロームブロック・黒褐色土ブロックを多く含む。白色軽石を僅かに含む。 13. 12同頁。
14. 褐色土(10YR4/4)：ロームブロック・黒褐色土ブロックを多く含む。白色軽石を僅かに含む。灰白色シルトブロックを含む。
15. 暗褐色土(10YR3/4)：ロームブロック・白色軽石を少量含む。焼土ブロック

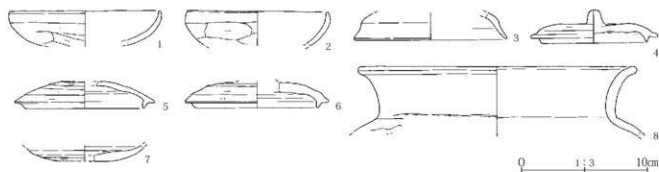
掘方



- クを僅かに含む。
16. 暗褐色土(10YR3/4)：ロームブロックを多く含む。炭化物・焼土ブロックを少量含む。
17. 褐色土(10YR4/4)：ローム土を主体とし、焼土ブロックを多く含む。灰を少量含む。
18. 灰類。灰黄褐色土(10YR5/2)：焼土ブロック・炭化物をやや多く含む。
19. 暗褐色土(10YR3/4)：焼土ブロックを非常に多く含む。ロームブロックをやや多く含む。
20. 褐色土(7.5YR4/3)：焼土粒・灰をやや多く含む。
21. に近い黄褐色土(10YR5/4)：ローム土を主体とし灰白色シルトブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
22. 暗褐色土(10YR3/4)：灰白色シルトブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
23. 黒褐色土(10YR2/3)：ローム粒をやや多く含む。
24. 黒褐色土(10YR3/1)：灰・ロームブロックを多く含む。
25. 明赤褐色土(5YR5/8)：焼土ブロックを多く含む。焼土化した奥壁。灰を多く含む。
26. 暗褐色土(7.5YR3/4)：焼土ブロックを多く含む。灰・灰白色シルトブロックを少量含む。
27. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・灰白色シルトブロックをやや多く含む。
28. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。焼土粒を僅かに含む。
29. 明黄褐色土(10YR6/6)：ロームブロックを主体とし、暗褐色土粒を含む。
30. に近い黄褐色土(10YR4/3)：灰白色シルトブロックを非常に多く含む。ロームブロックをやや多く含む。
31. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを非常に多く含む。
32. に近い黄褐色土(10YR4/3)：ロームを主体とし白色軽石・灰白色シルトブロックを少量含む。(天井)



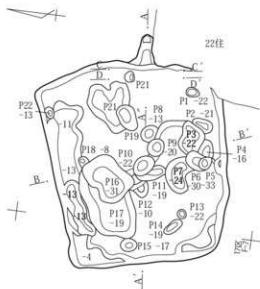
第67図 22号住居平面断面図・掘平面断面図



23号住居

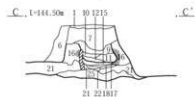
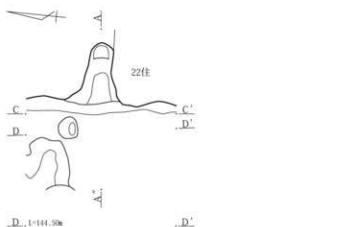
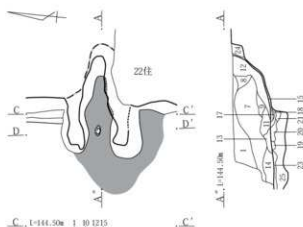
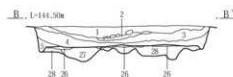


掘方



23号住居

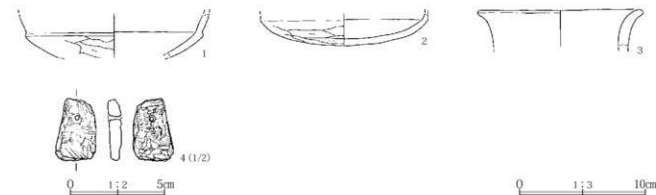
1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含む。ロームブロック・炭化物を僅かに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。炭化物を僅かに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含む。ロームブロック・炭化物・黒色土ブロックを少量含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロックをやや多く含む。白色軽石・炭化物・黒色土ブロックを僅かに含む。
5. 黒色土(10YR2/1)：ローム粒をやや多く含む。粘性がある。



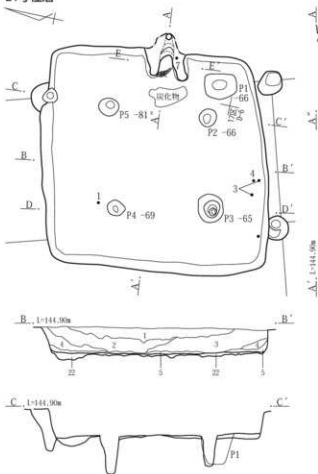
第68図 22号住居出土遺物、23号住居・竪断面図

第3章 調査の成果

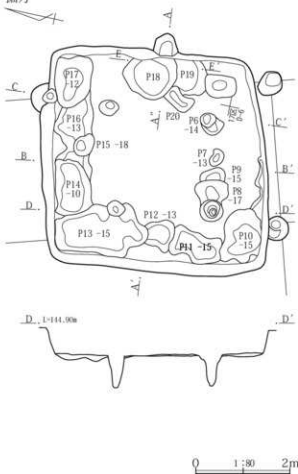
6. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックをやや多く含む。白色軽石を僅かに含む。
7. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを多く含む。白色軽石・焼土粒・炭化物を少量含む。
8. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/3): 天井部の崩落土。一部焼土化している。
9. 黄褐色土(10YR5/6): ロームを主体とし、焼土ブロックを僅かに含む。
10. 赤褐色土(5YR4/6): 3層が焼土化したもの。
11. 黒褐色土(10YR2/2): ローム粒・焼土ブロックを多く含む。炭化物を僅かに含む。
12. 黒褐色土(10YR2/2): 灰を多く含む。焼土ブロック・ロームブロックを少量含む。
13. にぶい黄褐色土(10YR4/3): ロームブロック・焼土ブロックをやや多く含む。
14. 黒褐色土(10YR2/2): ローム粒・焼土ブロックを少量含む。白色軽石・炭化物を僅かに含む。
15. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/3): 焼土を含む。
16. 浅黄色ローム土(2.5Y7/3): 礫袖。
17. 黒褐色土(10YR3/1)。
18. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4)。
19. 焼土とロームの混土。
20. 黒褐色土(10YR3/2): 白色軽石・焼土を含む。
21. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 細かいローム粒を含む。焼土まばら。
22. 黒褐色土(10YR3/1): ローム粒・焼土を含む。
23. 黄灰土(2.5Y4/1)。
24. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・白色軽石を含む。
25. にぶい黄色ローム質土(2.5Y6/3): ロームの崩れた上に、暗灰黄色土を含む。
26. 黒褐色土(10YR3/1): 粘床。固く締まっている。
27. 黄灰土(2.5Y4/1): ローム小ブロックを多く含む。
28. 明褐色ローム土(2.5Y6/6): 崩れたロームが主体。黄灰土土を含む。



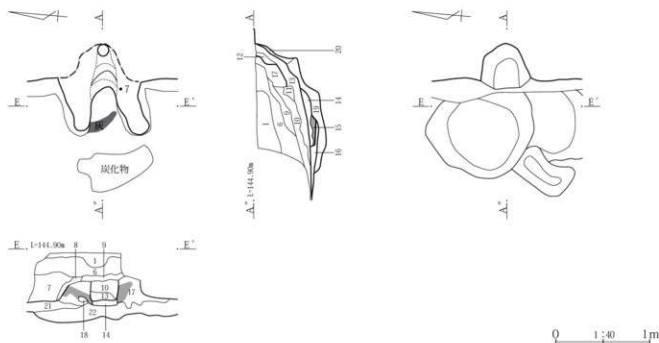
24号住居



掘方

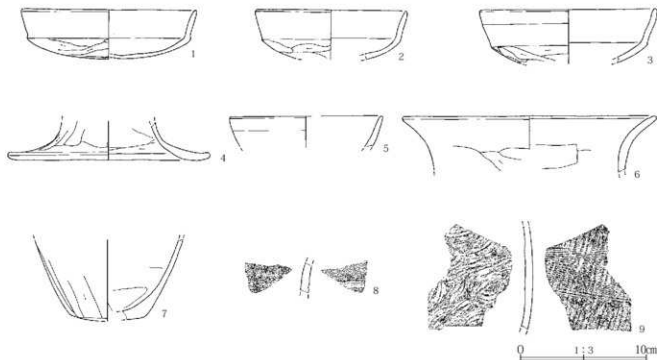


第69図 23号住居出土遺物、24号住居平面図



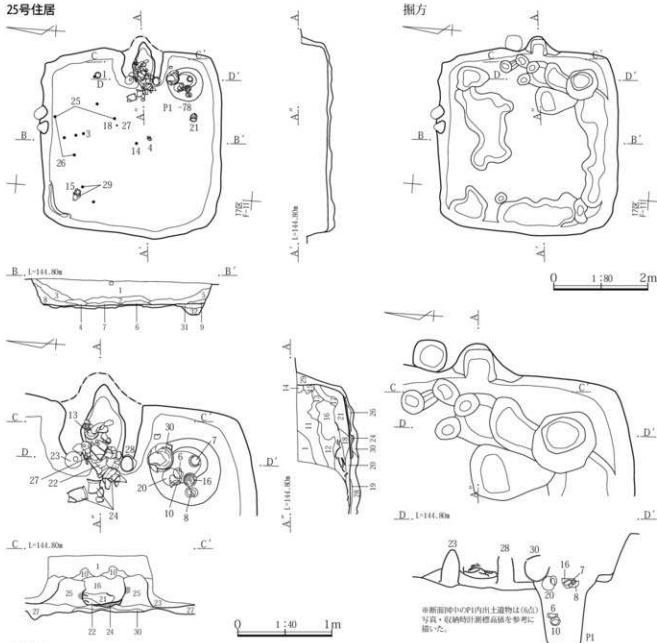
24号住居

1. 黒褐色土(010R3/1)：白色軽石を多く含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・ローム小ブロックを含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1)：白色軽石を含む。ローム粒をまばらに含む。
4. 黒褐色土(010R3/1)：ローム粒をまばらに含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ややシルト質。ローム粒を含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒・白色軽石を含む。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ロームブロックを僅かに含む。
8. 濃い黄色土(2.5Y6/3)：焼土粒を含む。(天井崩落上)
9. 灰黄褐色土(10YR4/2)：ローム粒・焼土粒を含む。
10. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ローム土を多く含む。焼土粒をまばらに含む。
11. 黒褐色土(2.5Y3/1)：炭化物・焼土粒を含む。
12. 灰黄色土(2.5Y6/2)：天井崩落上。焼土粒を含む。
13. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：焼土粒・炭化物を含む。
14. 灰褐色土(7.5YR4/2)：灰・焼土粒・炭化物を含む。
15. 焼土(5YR4/8)
16. 黒色土(10YR2/1)：灰・炭化物を多く含む。ロームブロックを少量含む。
17. 黄灰色シルト(2.5Y4/1)～明黄褐色土(2.5Y7/6)
18. 灰。炭化物を含む。
19. 黒褐色土(010R3/2)：焼土粒・炭化物を含む。
20. 黄褐色土(2.5Y5/3)：焼土粒を含む。
21. 黒褐色土(010R3/1)：ロームブロックを多く含む。
22. 濃い黄褐色土(10YR4/3)：ロームブロックを非常に多く含む。焼土粒・炭化物を僅かに含む。



第70図 24号住居竈平断面図・出土遺物

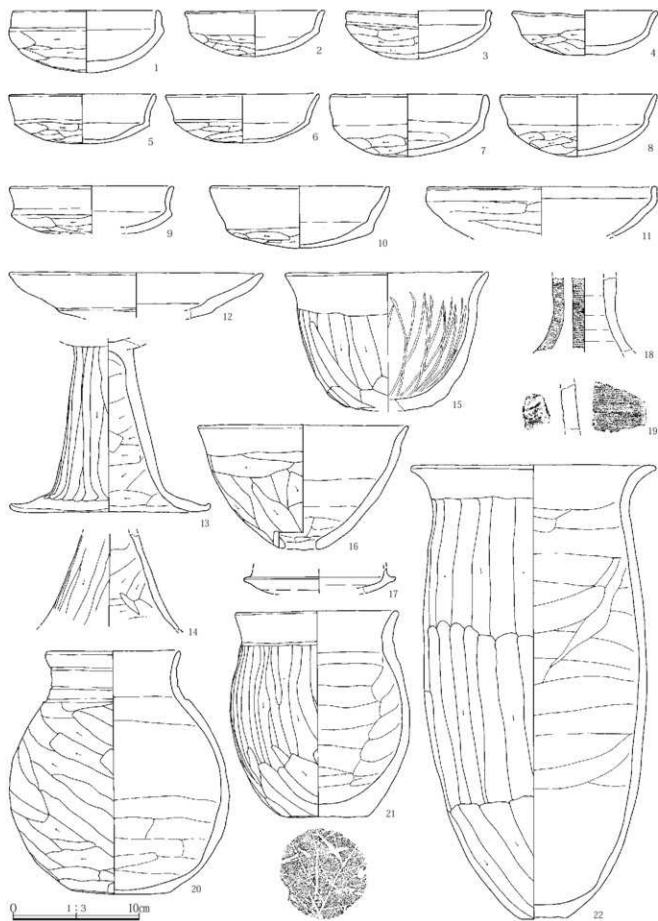
25号住居



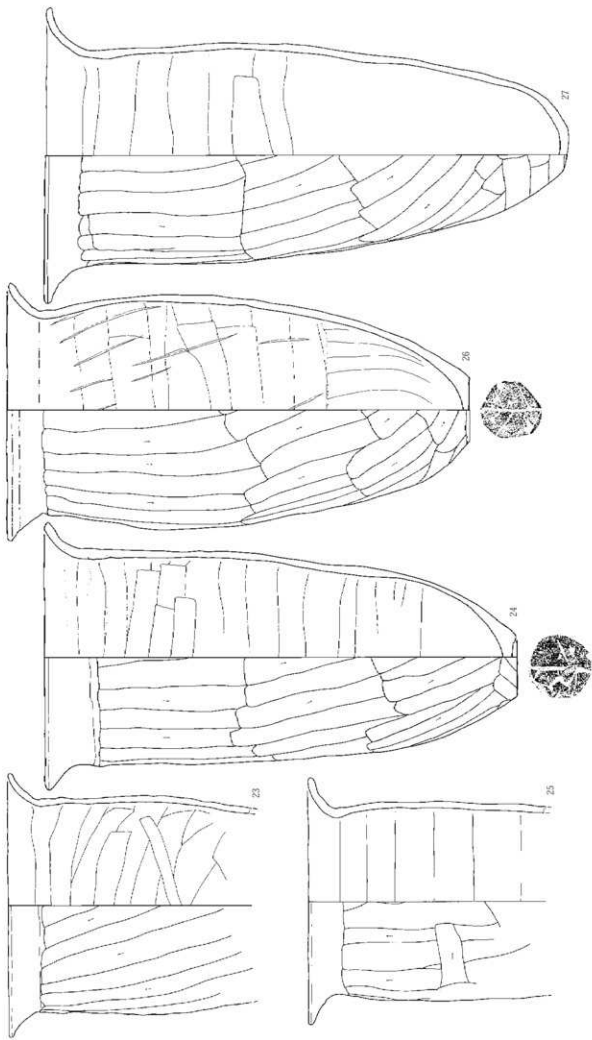
25号住居

1. 暗褐色土(10YR3/3)；白色軽石を多く含む。明黄褐色軽石・ロームブロック・炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)；塊状礫層上をやや多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石・炭化物を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)；白色軽石・明黄褐色軽石を少量含む。塊状礫層上・白色軽石・明黄褐色軽石を僅かに含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2)；塊状礫層上を少量含む。炭化物を僅かに含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)；白色軽石・明黄褐色軽石・ロームブロックを少量含む。炭化物を僅かに含む。
6. 褐色土(10YR4/4)；ロームを主体とし、黒褐色土ブロック・炭化物を少量含む。やや粘性がある。
7. 黒褐色土(10YR2/2)；ロームブロック・炭化物・焼土粒を少量含む。やや粘性がある。
8. 黒褐色土(10YR2/3)；ロームブロック・ローム粒をやや多く含む。炭化物を僅かに含む。
9. 黒褐色土(10YR2/2)；炭化物をやや多く含む。焼土粒・ローム粒を僅かに含む。
10. 黒褐色土(10YR2/2)；白色軽石・ローム土を含む。焼土ブロックを僅かに含む。
11. 黒褐色土(10YR3/1)；軽石を含む。
12. 灰黄褐色土(10YR4/2)；軽石・ローム土を含む。
13. 黄褐色土(2.5Y5/4)；白色軽石・黒褐色土ブロック・焼土粒を含む。
14. 明黄褐色ローム土(10YR6/6)；白色軽石・焼土粒を少量含む。
15. 明黄褐色ローム土(10YR6/6)；焼土粒を含む。
16. 明黄褐色ローム土(10YR6/6)；焼土粒・炭化物を含む。礫の崩壊上。
17. 暗褐色土(7.5YR3/4)；ロームブロック・焼土粒を含む。
18. 褐灰色土(7.5YR6/1)；焼土粒・灰を多く含む。
19. 近い黄色土(2.5Y6/3)；焼土粒を少量含む。固く締まっている。貼床。
20. 褐灰色土(10YR6/1)；ややシルト質。炭化物を含む。
21. 赤褐色土(5YR4/8)；焼土主体の層。
22. 褐灰色土(7.5YR4/1)；焼土粒・灰を多く含む。
23. 黒褐色土(10YR2/2)；軽石・ローム土を含む。焼土ブロックを僅かに含む。
24. 焼土主体。炭化物を含む。
25. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4)；軽石を含む。
26. 浅黄色土粒(2.5Y7/4)と黄灰色土(2.5Y4/1)の混土。
27. 26同質。 28. 26同質。
29. 黄褐色土(2.5Y5/3)；焼土を含む。
30. 浅黄色土(2.5Y7/4)；黄灰色土を僅かに含む。
31. 近い黄色ローム土(2.5Y6/4)；黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。固く締まっている。
32. 近い黄色ローム土(2.5Y6/4)；灰白色シルトブロックを含む。締まりやや弱い。

第71図 25号住居平面断面図・縦平面断面図

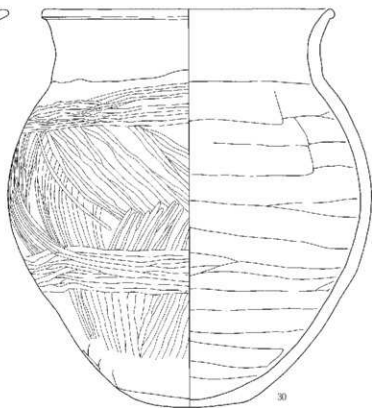
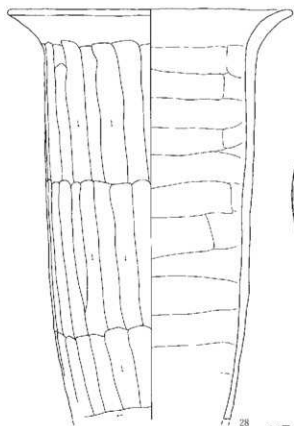


第72图 25号住居出土物(1)

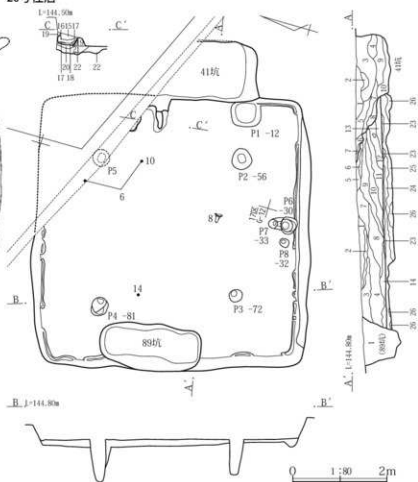
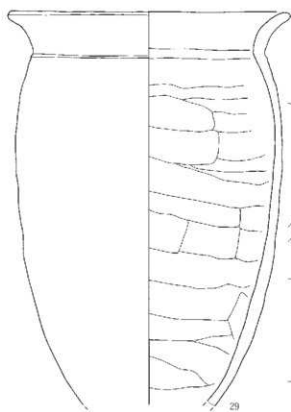


第73図 25号住居出土遺物(2)



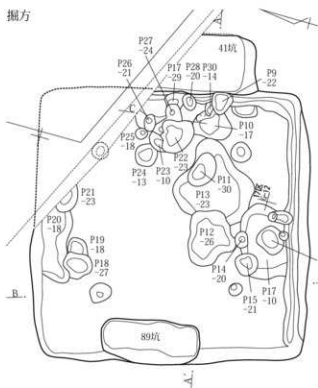


26号住居



第74图 25号住居出土物(3)、26号住居平面断面图・断面面图

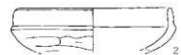
掘方



0 1:80 2m



1



2



3



4



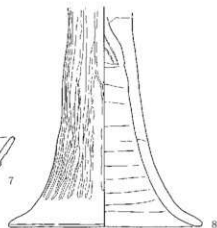
5



6



7



8

0 1:3 10cm

41号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・ロームブロック・軽石を含む。
2. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): 軽石を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ロームブロック・黒色土・軽石を含む。
4. 明黄褐色ローム土(2.5Y6/6): 地山の崩れ。
5. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒・ロームブロック・軽石を含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。
7. 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム粒を多く含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。ローム粒を僅かに含む。
9. 黄灰色土(2.5Y4/1): 下層に黒色土を多く含む。
10. 黄褐色土(2.5Y5/4): ローム粒を多く含む。

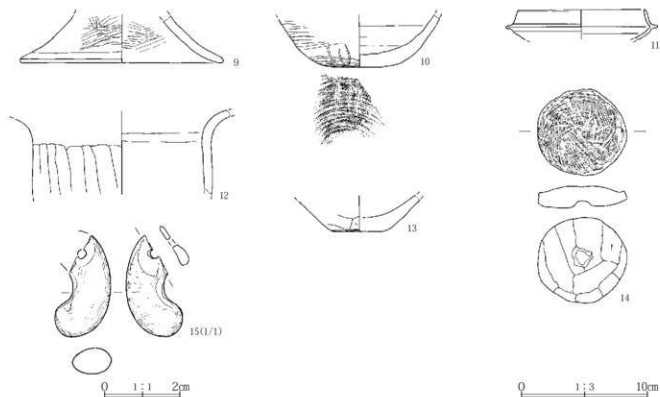
89号土坑

1. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・砂粒を含む。固く締まっている。

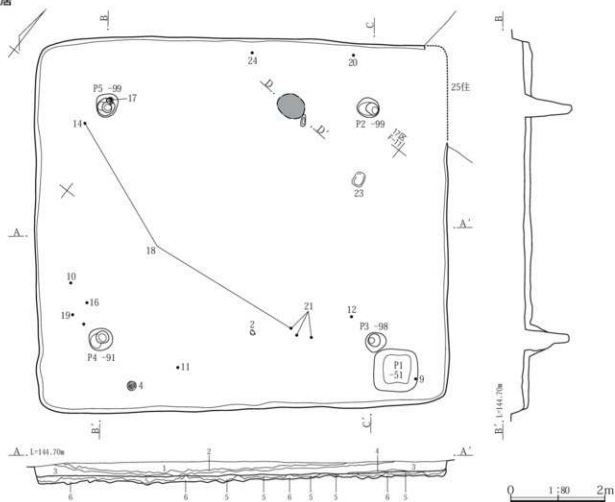
26号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。
2. 黄灰色シルト質土(2.5Y5/1): 軽石を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒をやや多く含む。軽石を含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2): ローム粒・軽石を含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): 軽石・ローム粒を含む。
6. 黒色土(2.5Y2/1): 暗灰黄色土ブロックを含む。
7. にぶい黄色土(2.5Y6/4): 崩れたローム主体。ロームブロック・黄灰色土を含む。
8. 黄褐色土(2.5Y5/3): ロームブロック・黄灰色土を含む。
9. 黄褐色土(2.5Y5/4): ロームブロックを多く含む。黒褐色土を含む。
10. 黒褐色土(2.5Y3/2): ロームブロックを多く含む。
11. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を含む。ローム粒をまばらに含む。
12. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を僅かに含む。
13. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒を多く含む。焼土・炭化物を少量含む。
14. 黄灰色土(2.5Y4/2): 軽石を少量含む。
15. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/4): ローム上の崩れた土。黄灰色土を含む。
16. 黄灰色土(2.5Y4/1): 炭化物・焼土粒・灰白色シルト粒を含む。
17. 焼土。固化している。
18. 炭化物・灰屑。焼土粒も含む。
19. 明黄褐色土(10YR6/6): ローム土を主体とし、黒褐色土ブロックを少量含む。 20. 焼土。
21. 黒褐色土(10YR3/1): ローム小ブロック・暗褐色土ブロックを多く含む。
22. にぶい黄褐色土(10YR5/4): ロームブロックを非常に多く含む。
23. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒・軽石を含む。固く締まっている。暗床。
24. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・ロームブロックを含む。
25. ロームブロック・暗灰黄色土の混土。
26. ローム上の崩れた土。

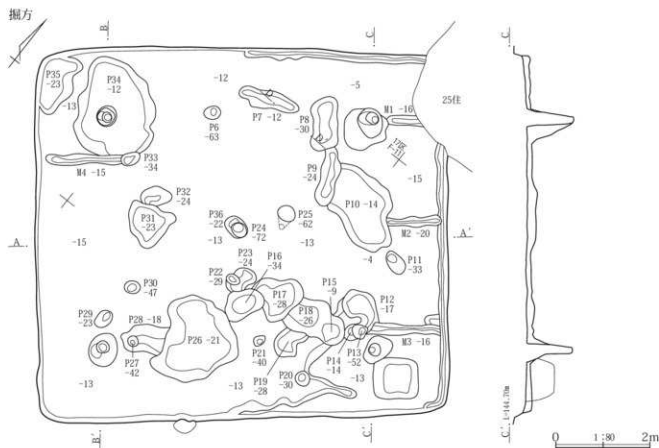
第75図 26号住居掘方平面図・出土遺物(1)



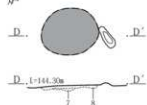
27号住居



第76図 26号住居出土遺物(2)、27号住居平面図



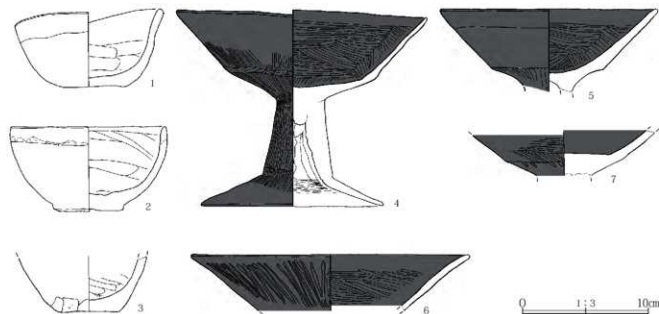
堀



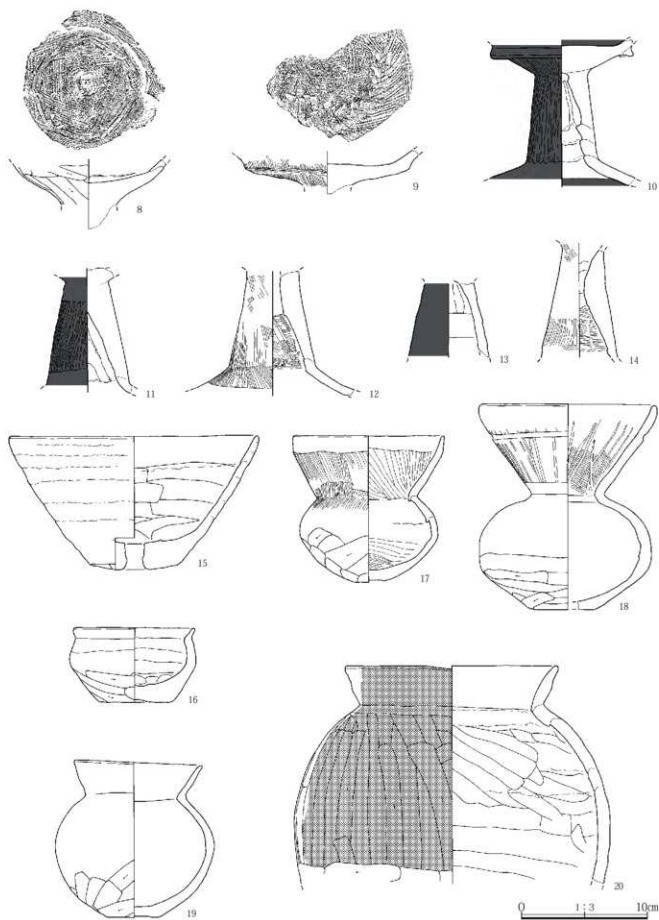
27号住居

1. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石をやや多く含む。炭化物を僅かに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・明黄褐色軽石(4s-C 軽石か)を多く含む。ロームブロックを少量含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。明黄褐色軽石を少量含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。明黄褐色軽石を僅かに含む。
6. 黄褐色土(2.5Y5/6)：ローム上と黒褐色土の混上。
7. 棕色。酸化被熱変色層
8. 黄棕色。酸化被熱変色層

0 1:40 1m

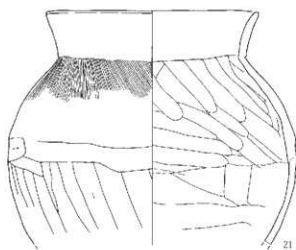


第77図 27号住居掘方平面図・出土遺物(1)

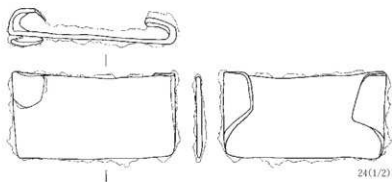
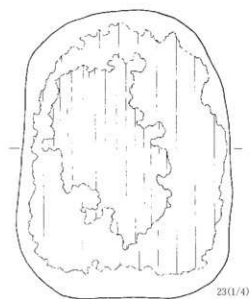


第78图 27号住居出土遗物(2)

第3章 調査の成果



0 1:3 10cm



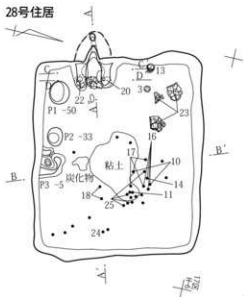
0 1:2 5cm



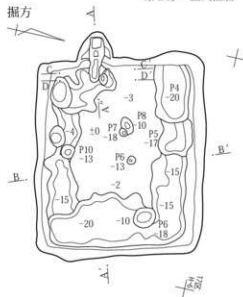
0 1:4 10cm

第79図 27号住居出土遺物(3)

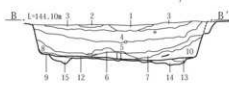
28号住居



掘方

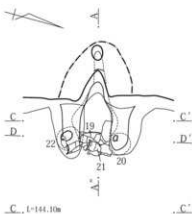


B. 1:144.10m

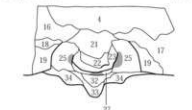


28号住居

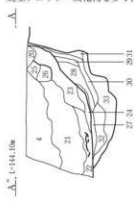
1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム小ブロックを含む。
2. 浅灰色ローム土。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・焼上粉を僅かに含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石を多く含む。焼上粉を僅かに含む。
5. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・ローム粒を含む。
6. 黄灰色シルト土(2.5Y5/1): 軽石・ローム粒を含む。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・黒色土を含む。
8. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒・炭化物を含む。
9. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒を含む。焼上ブロック・炭化物を多く含む。
10. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒を多く含む。



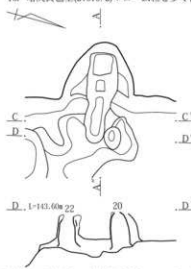
C. 1:144.10m



D. 1:144.10m



A. 1:144.10m



D. 1:143.60m

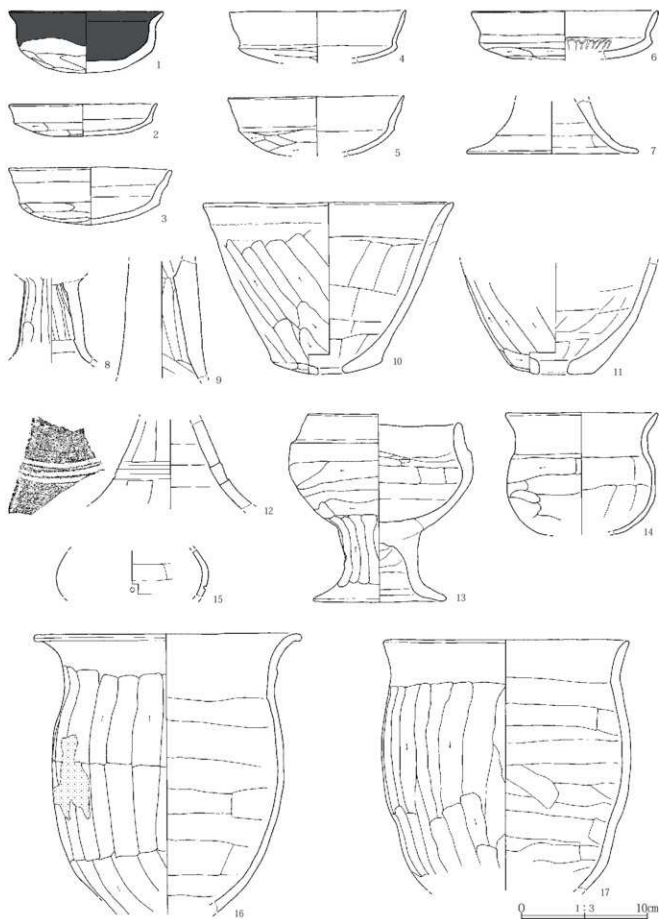
11. 灰白色シルトブロック・黒褐色土の炭状混土。
12. 明黄褐色ローム土・黒褐色土の混土。
13. 明黄褐色土(10YR5/6): 黒褐色土を僅かに含む。
14. 黒褐色土(10YR3/1): ロームブロックを含む。
15. 14同質。
16. 暗褐色土(10YR3/3): 白色軽石・灰白色シルトブロック・ロームブロックをやや多く含む。
17. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石・灰白色シルトブロック・ロームブロックをやや多く含む。
18. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石・灰白色シルトブロック・ロームブロックを多く含む。
19. 黒褐色土(10YR2/3): 白色軽石・灰白色シルトブロック・焼上ブロックを少量含む。
20. 灰黄褐色土(10YR4/2): 灰白色シルトブロックを多く含む。焼上ブロックをやや多く含む。
21. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 白色軽石・ロームブロック・灰白色シルトブロック・炭化物を少量含む。

22. 黒褐色土(10YR3/2): 灰白色シルトブロックを多く含む。ロームブロックを少量含む。
23. 黒褐色土(10YR3/2): 灰白色シルトブロック・焼上ブロックをやや多く含む。
24. 灰黄褐色土(10YR4/2): 焼上ブロックを多く含む。灰白色シルトブロック・炭をやや多く含む。
25. 暗褐色土(10YR3/3): 灰白色シルトブロック・ロームブロック・焼上ブロックを少量含む。
26. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 灰白色シルトブロック・焼上ブロックをやや多く含む。
27. にぶい赤褐色土(5YR4/4): 焼上・炭化物・灰の混土。
28. 黒色土(10YR2/1): 炭を非常に多く含む。焼上ブロックをやや多く含む。断面にぶい黄褐色土(10YR4/3): 焼上ブロック・灰白色シルトブロックをやや多く含む。
29. 暗褐色土(10YR3/4): ロームブロックを多く含む。灰白色シルトブロック・焼上ブロックを少量含む。
30. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 灰白色シルトブロックを多く含む。焼上ブロックをやや多く含む。
31. 黒褐色土(10YR3/2): 灰白色シルトブロックをやや多く含む。
32. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロック・灰白色シルトブロック・焼上ブロック・炭を多く含む。
33. 暗褐色土(10YR3/4): ロームブロックを多く含む。灰白色シルトブロック・焼上ブロックを少量含む。
34. ロームブロック・黒色土・黄褐色土の混土。

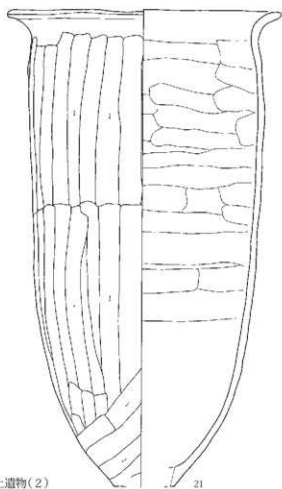
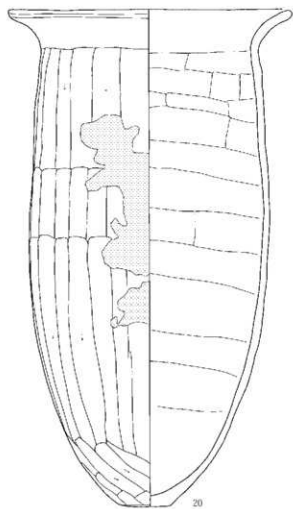
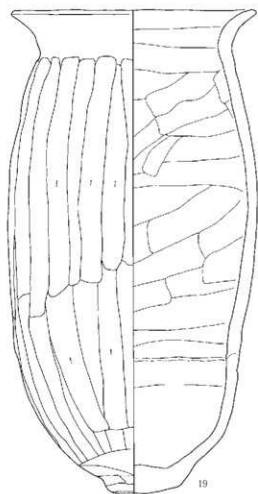
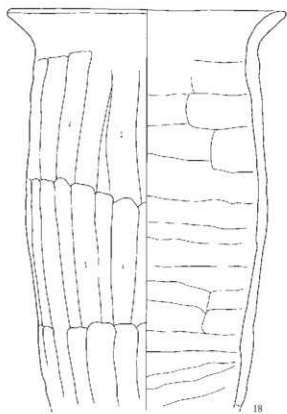
竪 0 1:40 1m 住居 0 1:80 2m

第80図 28号住居断面図・竪断面図

第3章 調査の成果

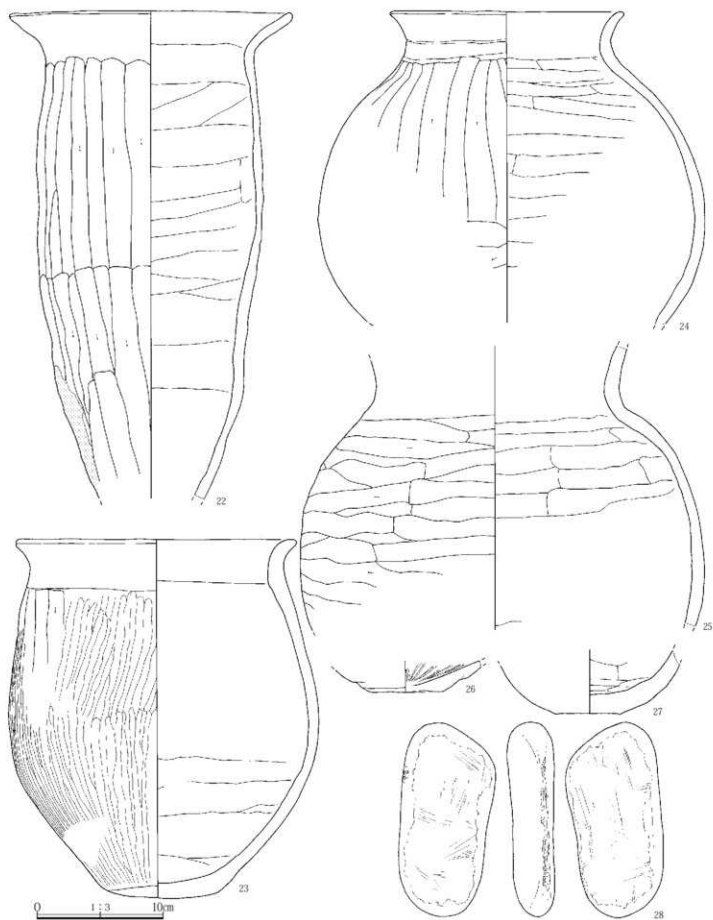


第81図 28号住居出土遺物(1)



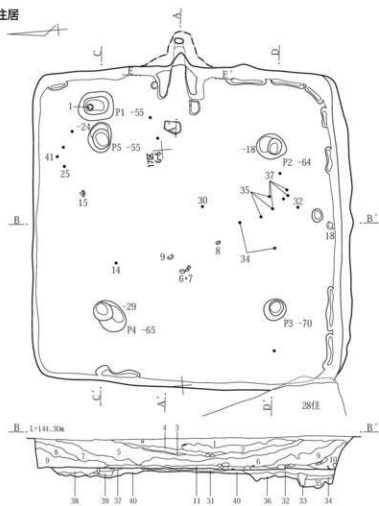
0 1:3 10cm

第82图 28号住居出土物(2)

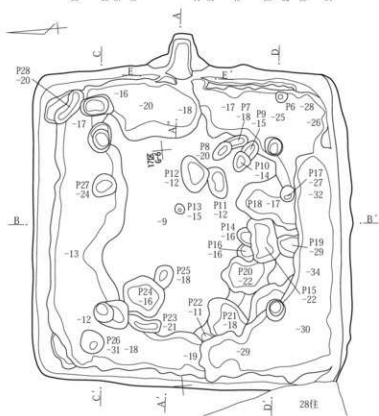


第83図 28号住居出土遺物(3)

29号住居



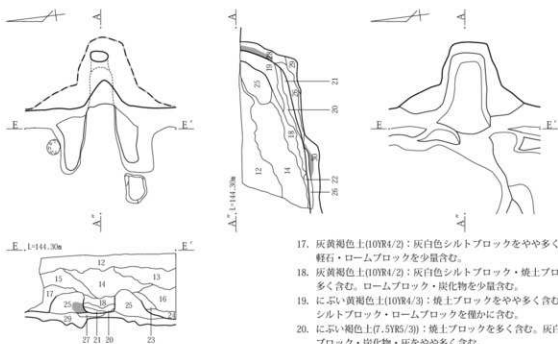
掘方



第84图 29号住居平面断面图

0 1:80 2m

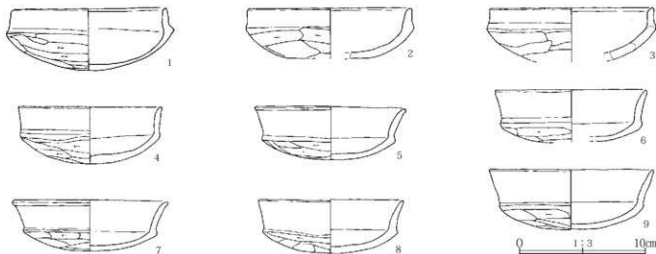
第3章 調査の結果



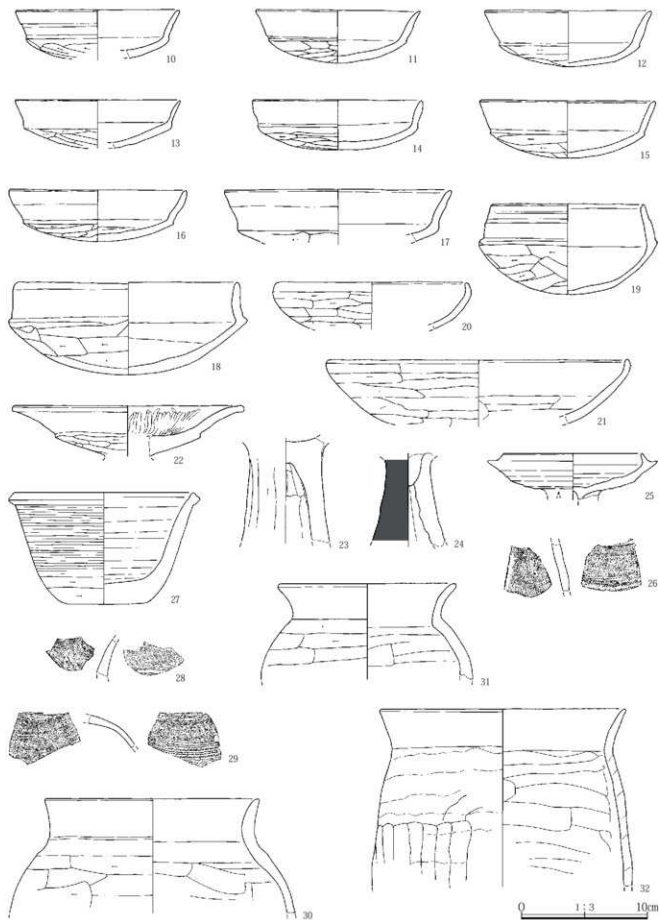
29号住居

1. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): 軽石を多く含む。
2. 黄褐色土(2.5Y5/3): ロームブロックを多く含む。軽石を含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1): 炭化物・軽石を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): 細かい層をなす。
5. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石を多く含む。炭化物を含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。ローム粒をまばらに含む。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ロームブロック・黒褐色土ブロックを多く含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・黒褐色土粒を含む。
9. 黄褐色土(2.5Y5/3): やや砂質。ローム粒・ロームブロックを含む。
10. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石を含む。
11. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒を含む。やや締まりよい。
12. 黒褐色土(10YR3/2): 白色軽石・ロームブロックを多く含む。焼土粒・炭化物を僅かに含む。
13. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 白色軽石・灰白色シルトブロックを多く含む。焼土粒を僅かに含む。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2): 白色軽石・灰白色シルトブロックをやや多く含む。ロームブロック・焼土粒・炭化物を少量含む。
15. 暗褐色土(10YR3/3): 白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。炭化物を僅かに含む。
16. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。焼土粒・炭化物を僅かに含む。

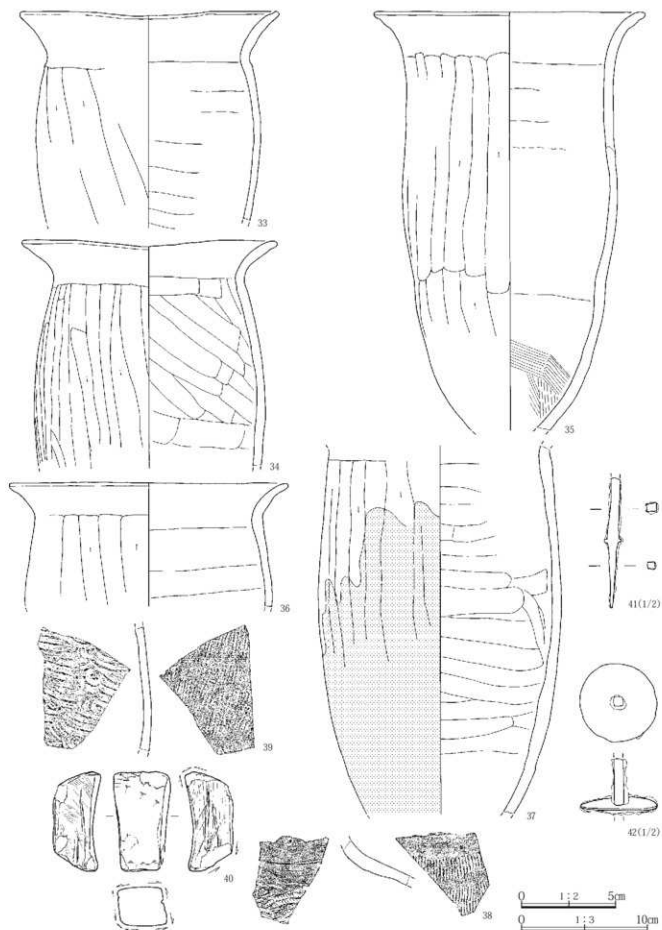
17. 灰黄褐色土(10YR4/2): 灰白色シルトブロックをやや多く含む。白色軽石・ロームブロックを少量含む。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2): 灰白色シルトブロック・焼土ブロックをやや多く含む。ロームブロック・炭化物を少量含む。
19. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 焼土ブロックをやや多く含む。灰白色シルトブロック・ロームブロックを僅かに含む。
20. にぶい褐色土(7.5YR5/3): 焼土ブロックを多く含む。灰白色シルトブロック・炭化物・灰をやや多く含む。
21. 褐色土(7.5YR4/4): 焼土ブロック・灰を非常に多く含む。
22. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 灰白色シルトブロック・焼土粒・炭化物・灰をやや多く含む。
23. にぶい黄褐色土(10YR4/3): ロームブロックをやや多く含む。白色軽石を僅かに含む。
24. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
25. 灰黄褐色土(10YR4/2): 焼土ブロック・灰白色シルトブロックを少量含む。
26. 暗褐色土(10YR3/3): 焼土ブロック・灰を多く含む。
27. 23同質。
28. 暗褐色土(7.5YR3/4): ローム粒・焼土粒を僅かに含む。
29. 黒褐色土(10YR2/2): 灰白色シルトブロックを多く含む。ロームブロック・焼土ブロックを少量含む。
30. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロック・黒色土ブロックを含む。
31. ロームブロックと暗灰黄色土(2.5Y4/2)の混上。固く締まっている。
32. ロームブロック主体。暗灰黄色土(2.5Y5/2)を含む。
33. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒を含む。
34. 黒色土(2.5Y2/1): ローム粒をまばらに含む。
35. ロームブロック。黒色土を僅かに含む。
36. 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム粒を非常に多く含む。
37. ロームブロックと暗灰黄色土(2.5Y4/2)の混上。固く締まっている。
38. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロックを含む。
39. 黒褐色土とロームブロックの混上。
40. ロームブロック。



第85図 29号住居竈平断面図・出土遺物(1)

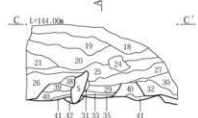
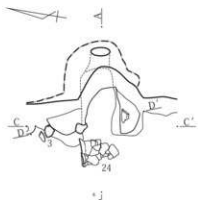
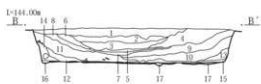
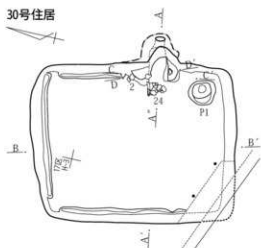


第86图 29号住居出土遺物(2)



第87図 29号住居出土遺物(3)

30号住居



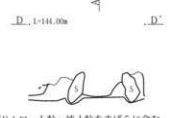
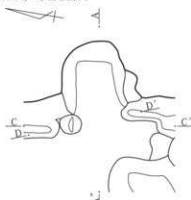
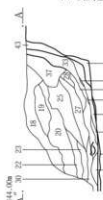
8. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒・ロームブロック・黒褐色土ブロックを含む。 9. 8回瓦。
10. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。
11. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石・ローム粒・黒褐色土を含む。
12. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ローム粒を多く含む。
13. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石・焼土粒を僅かに含む。 14. 13回瓦。
15. 黒褐色土(2.5Y3/1)：炭化物を含む。 16. 15回瓦。
17. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒・炭化物を含む。固く締まっている。
18. 黒褐色土(10YR3/2)：軽石・ローム粒を多く含む。
19. 黒褐色土(10YR3/1)：軽石・ローム粒を含む。
20. 褐色土(10YR5/1)：灰色シルトを含む。
21. 褐色土(10Y4/1)：ローム粒を含む。
22. 褐色土(10Y4/1)：炭化物・ローム粒を含む。
23. 褐色土(10YR5/1)：ローム小ブロックを含む。
24. 黄灰色シルト(2.5Y5/1)：壙構築土の一部。
25. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を含む。
26. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒を僅かに含む。

掘方



30号住居

1. 灰黄褐色土(10YR4/2)：軽石・ローム粒を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石・ローム粒を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ロームブロックをやや多く含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム小ブロックを含む。
6. 黄灰色土(2.5Y4/1)：黒褐色土ブロック・軽石を含む。
7. 黄灰色シルト(2.5Y4/1)：水性堆積物。

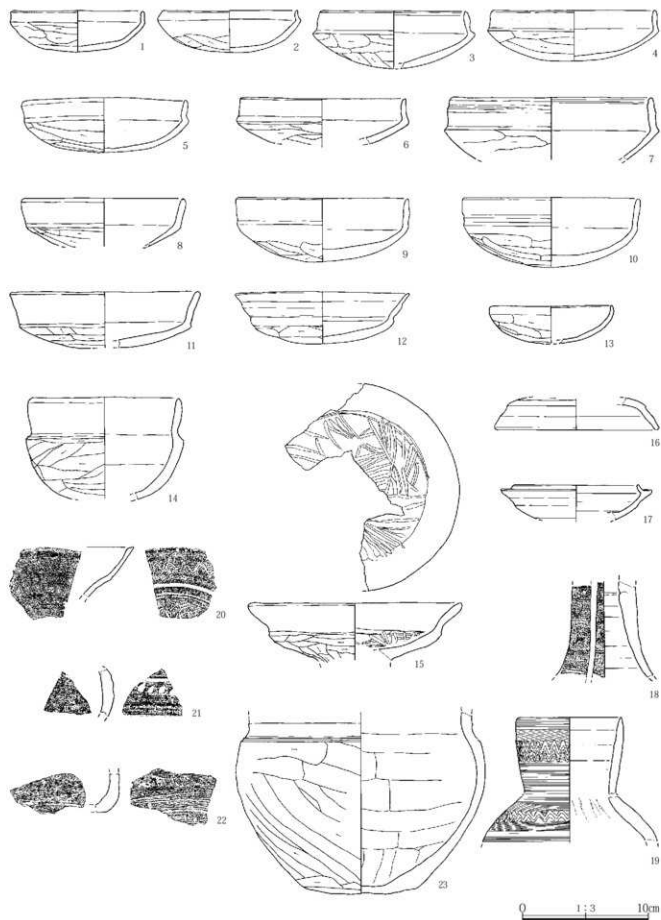


27. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒・焼土粒をまばらに含む。
28. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)：構築土の崩れ。
29. 黄灰色土(2.5Y5/1)：焼土粒を僅かに含む。
30. 黄灰色土(2.5Y4/1)：炭化物・焼土粒を含む。
31. 黒褐色土(2.5Y3/1)：炭化物を含む。
32. 30近質。 33. 黒褐色土(2.5Y3/1)：炭化物・焼土粒を含む。 34. 33回瓦。
35. 灰・炭化物の層。 36. 黄灰色シルト(2.5Y5/1)：壙の崩壊土か。
37. 褐色シルト(10YR6/1)・灰黄色シルト(2.5Y7/2)一部焼土化。
38. 赤い褐色土(7.5YR5/3)：灰白色シルトブロックを含む。
39. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ローム粒を僅かに含む。
40. 暗褐色土(10YR3/3)：ローム粒を多く含む。炭化物を僅かに含む。
41. 明黄褐色土(10YR6/8)：ロームブロック主体、黒褐色土ブロックを僅かに含む。
42. 明黄褐色土(10YR6/8)：ロームブロックと黒褐色土の混土。 43. 酸化被熱変色層。
44. 黄灰色土(2.5Y5/1)：灰・焼土・炭化物を含む。

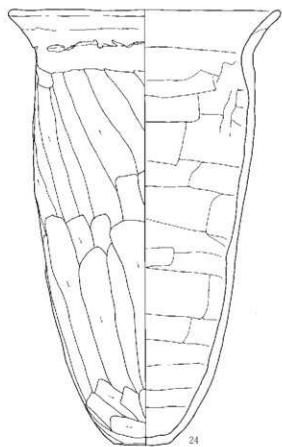
壙 0 1:40 1m 住居 0 1:80 2m

第88図 30号住居平断面図・壙平断面図

第3章 調査の成果



第89図 30号住居出土遺物(1)



24



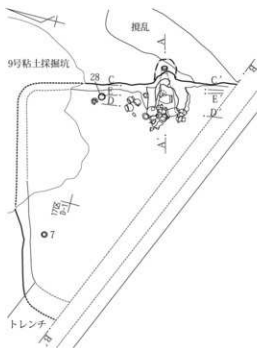
25



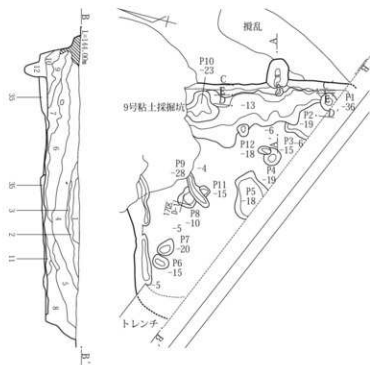
26



31号住居

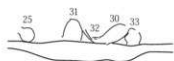
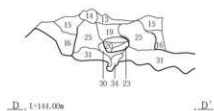


掘方



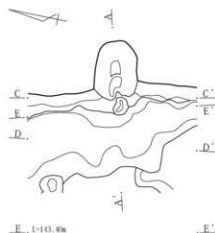
第90図 30号住居出土遺物(2)、31号住居平面図

第3章 調査の成果



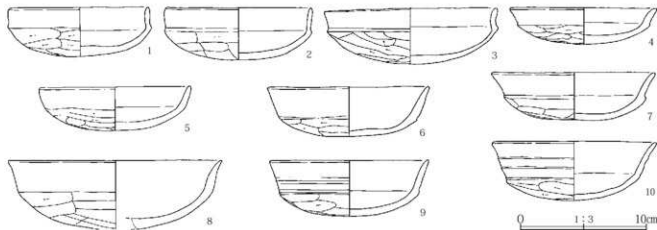
31号住居

1. 黄褐色土(2.5V5/3): ローム粒を多く含む。軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5V4/2): 軽石・ローム粒を少量含む。
3. 黄灰色土(2.5V4/1): シルト分を多く含む。砂粒を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5V4/2): 軽石・ローム粒を含む。
5. オリーブ褐色土(2.5V4/3): 軽石・ローム粒を少量含む。
6. 黄灰色土(2.5V4/1): 軽石・ローム粒を含む。
7. 黄褐色土(2.5V5/3): ローム粒をやや多く含む。
8. 黄灰色土(2.5V4/1): 軽石・ローム粒を含む。
9. 黄褐色土(2.5V5/4): ローム粒を多く含む。
10. 暗灰黄色土(2.5V4/2): 軽石・ローム粒を含む。
11. 黄褐色土(2.5V5/3): ロームブロック・ローム粒を多く含む。
12. 黒褐色土(10YR3/2): ローム粒・ロームブロック・軽石を含む。
13. 暗灰黄色土(2.5V4/2): ロームブロック・焼土を含む。
14. にぶい黄色ローム土(2.5V6/3)と暗灰黄色土(2.5V4/2)の混土。焼土を含む。

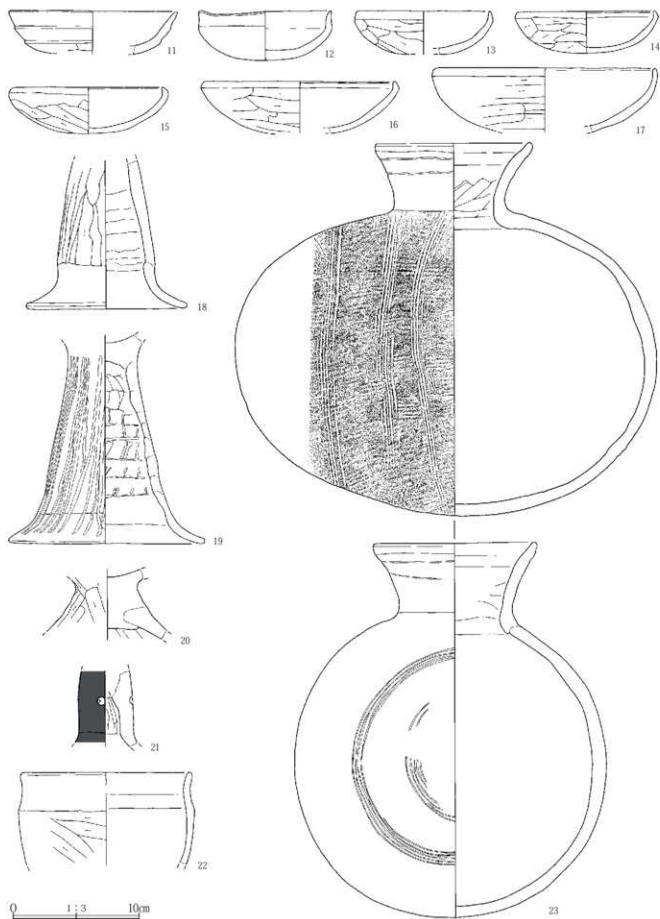


0 1:40 1m

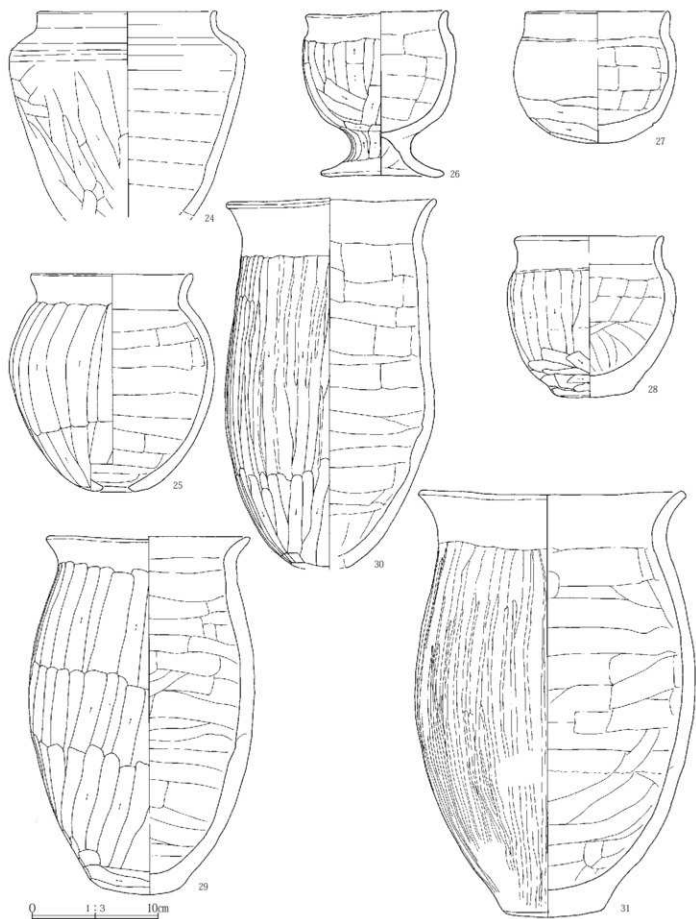
15. 褐灰色土(10YR4/1): ローム粒を含む。
16. 黒褐色土(10YR3/2)
17. にぶい黄色ローム土(2.5V6/4): ロームブロック。
18. 黒褐色土(2.5Y3/2): 焼土を含む。
19. 14同質。
20. 灰黄褐色土(10YR5/2): 焼土を含む。
21. 暗褐色土(10YR3/4): ロームブロック・焼土ブロックを多く含む。
22. 褐色土(7.5YR4/6): 黒褐色土ブロック・焼土ブロックを非常に多く含む。
23. 焼土。天井崩壊土。
24. 黄褐色土(10YR5/6): ロームを主体とし、黒褐色土ブロック・焼土ブロックをやや多く含む。
25. 灰黄色シルト土(2.5V6/2): 内面側焼土化している。
26. 褐灰色土(10YR4/1): 焼土・炭化物を含む。
27. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム粒を含む。固く締まっている。
28. 暗灰黄色土(2.5V4/2): ローム小ブロックを多く含む。焼土を含む。
29. 黄褐色土(2.5V4/1): ロームブロックを含む。
30. 灰黄褐色土(10YR4/2): 灰・焼土を含む。
31. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム土を含む。
32. 暗褐色土(10YR3/4): ロームブロックを非常に多く含む。
33. 黄褐色土(2.5V5/6): ローム上主体、黒褐色土ブロックを僅かに含む。
34. 黒褐色土(2.5Y2/2): ロームブロックをやや多く含む。
35. にぶい黄色土(2.5V6/4): ロームの崩れた土。黄灰色土を含む。



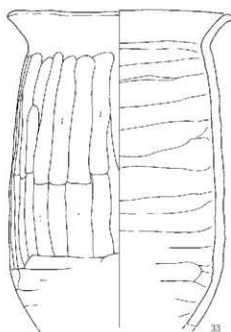
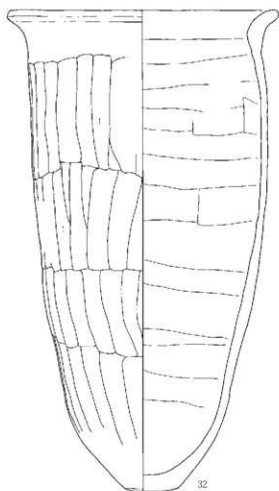
第91図 31号住居竈平面断面図・出土遺物(1)



第92图 31号住居出土遺物(2)

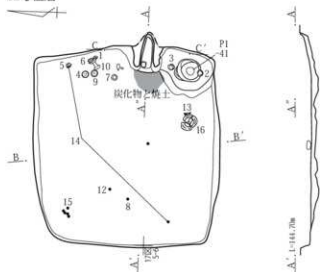


第93図 31号住居出土遺物(3)

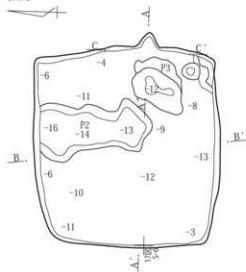


0 1:3 10cm

32号住居



掘方



32号住居

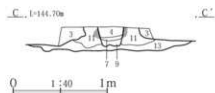
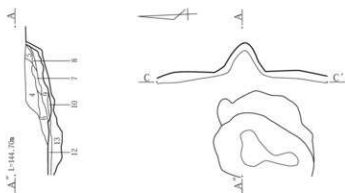
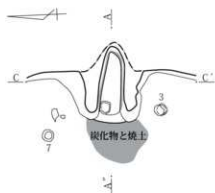


1. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石を含む。締まり良く固い。
 2. 灰黄褐色土(10YR4/2): ローム粒を含む。 3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
 4. にぶい黄褐色土(10YR6/4): 固く締まった粘質土。焼土・炭化物を含む。

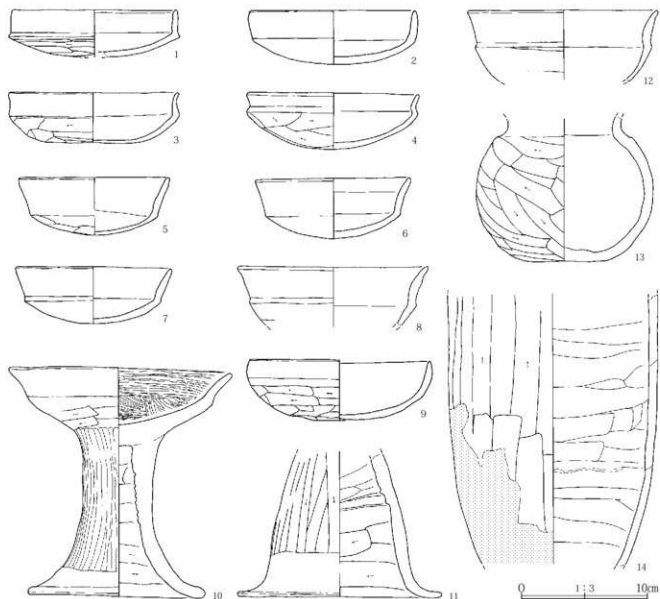
0 1:80 2m

第94図 31号住居出土遺物(4)、32号住居平面断面図

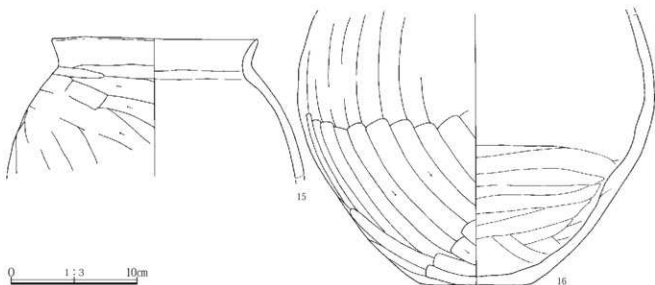
第3章 調査の成果



5. 焼土。天井崩壊土。
6. 灰黄色土(10YR4/2)：焼土をまばらに含む。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1)：焼土・炭化物を含む。
8. 黒褐色土(10YR3/1)：炭化物を含む。
9. 灰層。
10. 焼土。
11. 暗灰黄色シルト土(2.5Y5/2)：ロームブロック・炭化物・軽石を含む。
12. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・炭化物・軽石を含む。固く締まっている。
13. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム小ブロック・炭化物・軽石を含む。
14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム小ブロックを含む。固く締まっている。
15. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム小ブロックを多く含む。

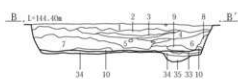
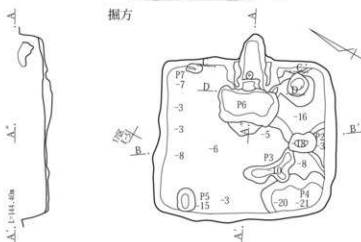


第95図 32号住居竪断面図・出土遺物(1)



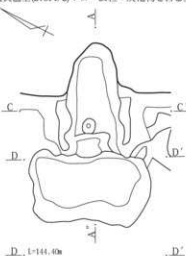
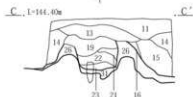
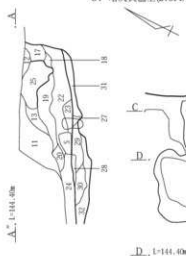
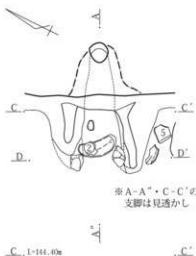
33号住居

掘方



33号住居

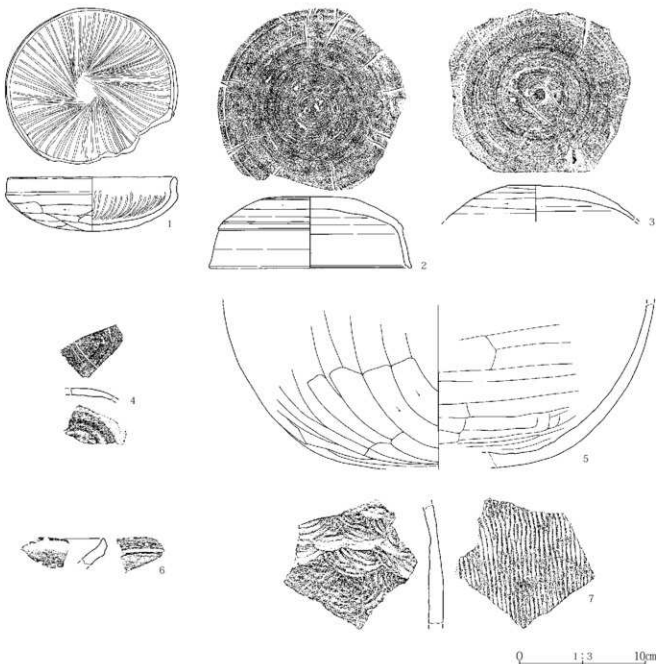
1. 灰黄褐色土(10YR4/2)：軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR3/1)：軽石を含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ロームブロック・軽石を含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石を僅かに含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を含む。
6. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。締まりやや弱い。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒・炭化物を含む。
8. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ローム土を含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・炭化物を含む。



第96図 32号住居出土遺物(2)、33号住居平断面図・竈平断面図

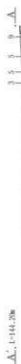
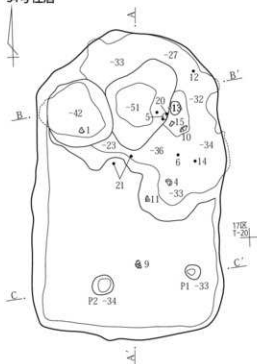
第3章 調査の成果

10. 黒褐色土(2.5Y3/1): 焼土・炭化物を多く含む。
11. 暗褐色土(10YR3/4): 白色軽石を多く含む。ロームブロックを少量含む。
12. にぶい黄褐色土(10YR5/4): ローム小ブロックを含む。
13. 褐色土(10YR4/4): ローム粒を多く含む。白色軽石を少量含む。
14. 暗褐色土(10YR3/3): ローム粒を含む。
15. にぶい黄褐色土(10YR4/3): ローム粒を多く含む。
16. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ロームブロックを含む。
17. 灰黄褐色土(10YR4/2): ローム粒・焼土を含む。
18. 明黄褐色土(10YR6/6): 崩落したロームブロック・焼土ブロックを少量含む。
19. 暗褐色土(10YR3/4): ローム粒・ロームブロックを多く含む。焼土ブロックを僅かに含む。
20. 褐色土(10YR4/4): ローム粒・ロームブロックを多く含む。焼土ブロックを少量含む。
21. 黄褐色土(10YR5/6): ローム上主体。黒褐色土粒・焼土ブロックを含む。
22. 黒褐色土(10YR2/3): ロームブロック・焼土ブロックを含む。
23. 黒褐色土(2.5Y3/2): 灰・焼土ブロックを多く含む。ローム粒を少量含む。
24. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロック・焼土ブロック・炭化物を含む。
25. 明黄褐色土(10YR6/6): ローム上主体。白色軽石・黒褐色土ブロックを少量含む。
26. 黄褐色土(10YR5/8): ローム上主体。黒褐色土ブロックを含む。
27. 暗褐色土(10YR3/3): 灰を多く含む。焼土ブロック・ロームブロックを少量含む。
28. 暗褐色土(10YR3/4): ロームブロック・焼土ブロックをやや多く含む。
29. 暗褐色土(10YR3/4): 焼土ブロックを多く含む。ロームブロックを少量含む。
30. 褐色土(10YR4/6): ローム上主体。黒褐色土ブロック・焼土ブロックを僅かに含む。
31. 褐色土(10YR4/4): ロームブロック・焼土ブロック黒褐色土ブロック・灰を含む。
32. 暗褐色土(10YR3/4): ロームブロックを多く含む。焼土ブロックを僅かに含む。
33. ローム上と黒褐色土の混上。焼土・炭化物を含む。
34. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4): 固く締まっている。
35. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/3): 暗灰黄色土(2.5Y5/2)を含む。



第97図 33号住居出土遺物

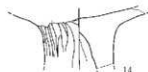
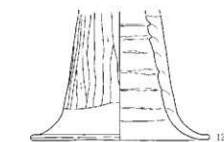
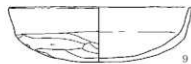
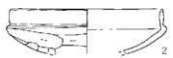
34号住居



34号住居

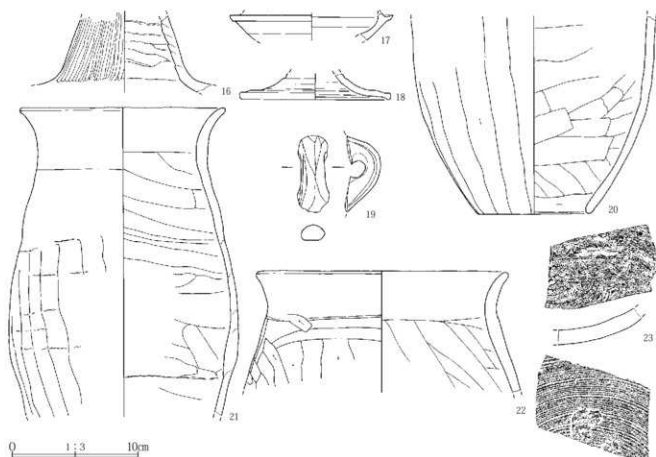
1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石を多く含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石を含む。灰化物をまばらに含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石・炭化物を含む。
4. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：ローム粒を含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/2)とロームブロックの混土。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム土を含む。
7. 黒褐色土(2.5Y3/1)：炭化物・焼土を含む。
8. ロームブロックと灰黄色シルトブロック(2.5Y7/2)の混土。
9. 黒色土(2.5Y2/1)：軽石を多く含む。VI層上を含む。
10. 黒褐色土(2.5Y3/2)：崩落VI層上。
11. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：崩落VI・VII層上。
12. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒を含む。
13. オリーブ褐色土(2.5Y4/4)：崩落VII・VIII層上。
14. ロームブロックと灰黄色シルトブロック(2.5Y7/2)の混土。
15. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・ローム小ブロックを含む。
16. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム土を含む。固く締まっている。

0 1:80 2m

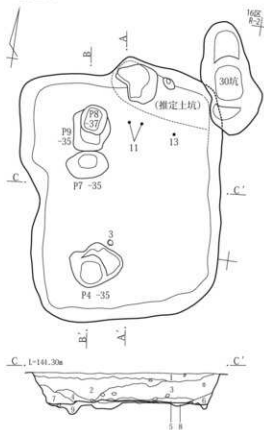


0 1:3 10cm

第98図 34号住居平面断面図・出土遺物(1)



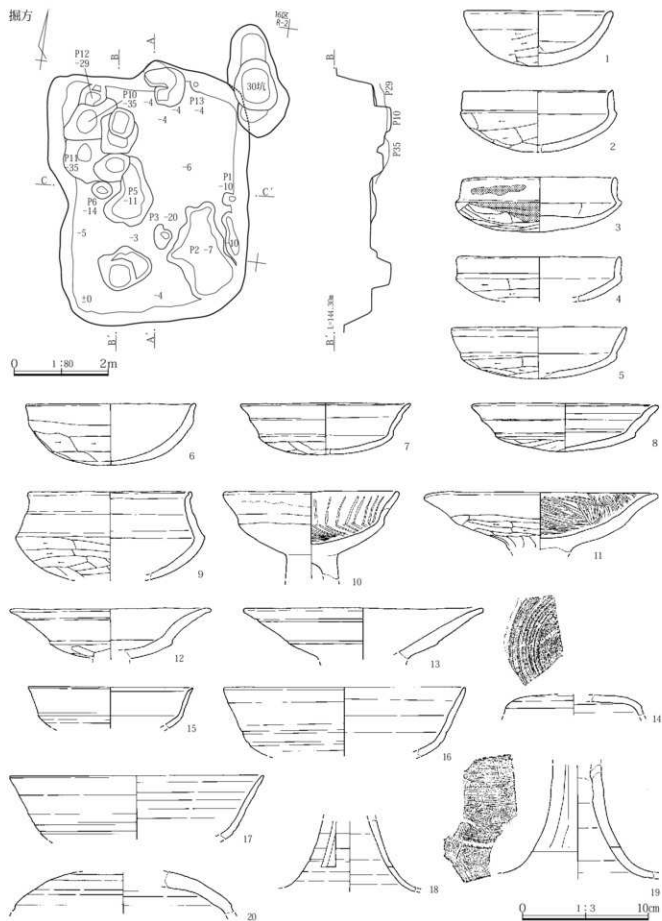
35号住居



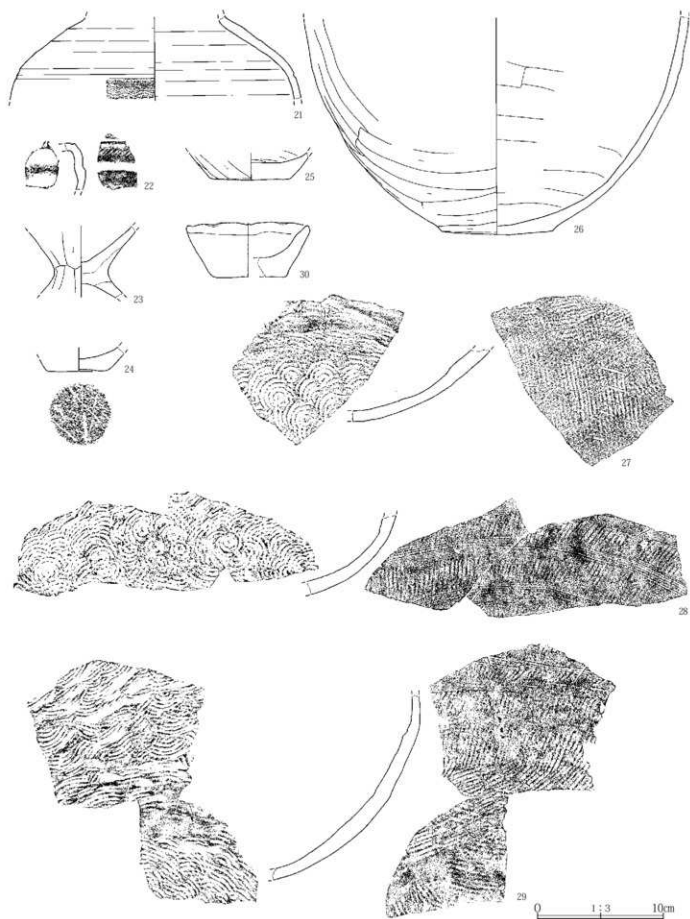
35号住居

1. 黄褐色土(2.5Y5/3): 軽石・ローム粒を含む。
2. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): 軽石・ローム粒を含む。
3. オリーブ褐色土(2.5Y4/4): ローム粒を多く含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 焼土・炭化物・ローム粒を含む。
5. 黄灰色砂質シルト(2.5Y4/1): 軽石を含む。
6. 黒褐色土ブロック(2.5Y3/1)と5層土の混土。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1): ロームブロック・軽石を含む。
8. 黄褐色土(10YR5/6): ロームブロック主体。黒褐色土ブロック・灰白色シルトブロックを含む。
9. 暗褐色土ブロック(10YR3/3)とローム上の現状。白色軽石を僅かに含む。
10. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒を含む。
11. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・軽石を含む。
12. 黄灰色土(2.5Y4/1): 焼土を含む。
13. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・ローム粒を含む。
14. ロームブロックと灰黄色シルトブロック(2.5Y7/2)と黄褐色土の混土。
15. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を多く含む。
16. 灰黄色シルト(2.5Y6/2): ロームブロック層。

第99図 34号住居出土遺物(2)、35号住居平面図

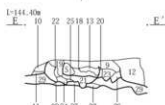
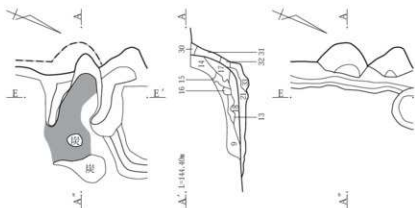
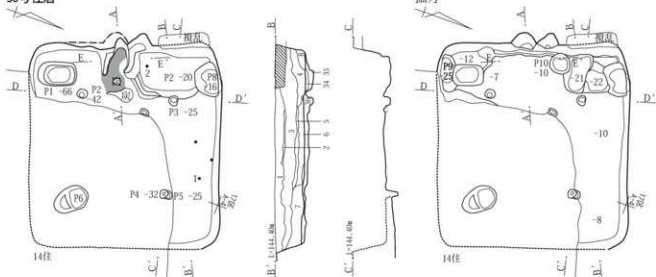


第100图 35号住居掘方平面図・出土遺物(1)



第101図 35号住居出土遺物(2)

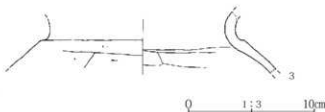
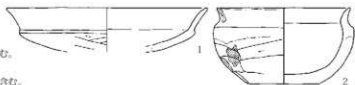
36号住居



13. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/4): 焼土を含む。
14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
15. 13同質。
16. 黄灰色土ブロック(2.5Y4/1)
17. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒を含む。焼土を僅かに含む。
18. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 炭化物・焼土を多く含む。
19. 黄褐色土(10YR5/8): ローム土主体。黒褐色土ブロック・灰白色シルトブロック・焼土ブロックを含む。
20. 19近質。
21. 暗褐色土(10YR3/4): 焼土ブロックを多く含む。ローム粒・炭化物を少量含む。

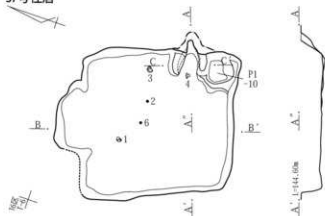
竪 0 1:40 1m
住居 0 1:80 2m

22. 明黄褐色土(10YR6/6): ローム土主体。焼土ブロックを少量含む。
23. 22近質。
24. 黒褐色土(2.5Y2/3): ローム粒・焼土粒を多く含む。
25. 19近質。
26. 明黄褐色土(10YR6/6): ローム土主体。灰白色シルトブロックを含む。
27. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックを少量含む。
28. 黄褐色土(10YR5/6): 黒褐色土ブロック・ロームブロックを僅かに含む。
29. 暗褐色土(10YR3/3): 白色軽石・ローム粒をやや多く含む。
30. にぶい黄色土(2.5Y6/4): ローム粒主体。軽石を含む。
31. 黄灰色土(2.5Y4/1): 焼土・軽石をまばらに含む。
32. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): 焼土をまばらに含む。
33. 27同質。
34. 黒褐色土(2.5Y3/1): 固く締まっている。
35. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・灰白色シルト粒を含む。
36. にぶい黄色土(2.5Y6/3): 地山ローム土の崩れ。上部は固く締まっている。

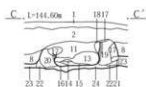
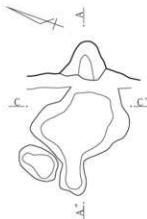
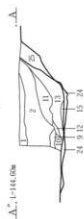
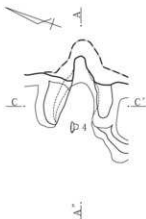
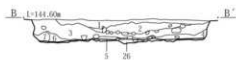
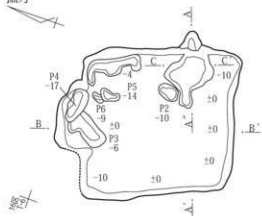


第102図 36号住居平面断面図・竪断面図・出土遺物

37号住居



掘方

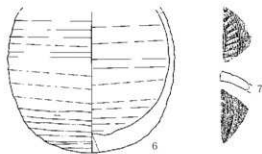
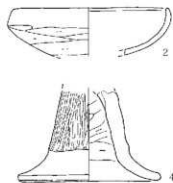
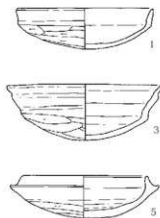


37号住居

1. ぶい黄褐色土(10YR4/3): 軽石を含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2): 軽石・ローム粒を含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石を多く含む。礫(粒径5~10mm)を含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を含む。
5. 暗黄灰色土(2.5Y4/2): 黄褐色シルトブロック礫(粒径5mm)を含む。固く締まっている。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2): 軽石を含む。
7. 黄褐色ローム土(10YR5/6): 6層土を含む。
8. 黒褐色土(10YR2/3): 軽石・ロームブロックを含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。
10. 黒褐色土(2.5Y3/2): 焼土・ローム粒を含む。
11. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ややシルト質。
12. 暗黄灰色土(2.5Y4/2): 炭化物を含む。
13. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): 焼土・炭化物を含む。
14. 明黄褐色土(10YR6/6): ローム土。15. 焼土。
16. 灰層
17. 明黄褐色土(10YR6/6): 黒褐色土ブロックを僅かに含む。
18. 明黄褐色土(10YR6/6): 黒褐色土ブロックを僅かに含む。焼土ブロックを含む。
19. 褐色土(7.5YR4/4): ロームブロック・黒褐色土ブロックを含む。 20. 19同質。
21. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロックを僅かに含む。
22. 明黄褐色土(10YR6/6): 黒褐色土ブロックを多く含む。
23. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを少量含む。固くなっている。
24. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロック・小礫・焼土ブロック・灰を含む。固く締まっている。
25. 赤褐色土(5YR4/6): 焼土ブロックを多く含む。
26. 灰黄褐色土(10YR4/2): ローム粒・円礫(粒径5cm)を含む。固く締まっている。

縮 0 1:40 1m

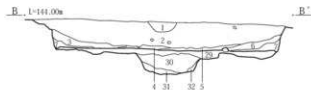
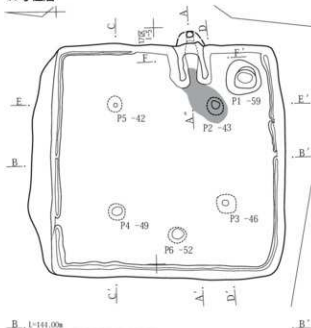
住居 0 1:80 2m



0 1:3 10cm

第103図 37号住居平断面図・縮平断面図・出土遺物

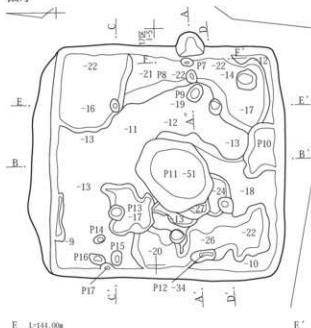
38号住居



38号住居

1. 暗褐色土(10YR3/3): 白色軽石を多く含む。下部に砂層あり。
2. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石を多く含む。礫を少量含む。
3. 黒色土(10YR2/1): 白色軽石を少量含む。
4. 黒色土(10YR2/1): ロームブロックをやや多く含む。
5. 黒色土(10YR2/1): 炭化物を多く含む。ロームブロック・焼土ブロックを少量含む。
6. 黒色土(10YR2/1): 白色軽石をやや多く含む。ロームブロック・焼土粒・炭化物を少量含む。
7. 黒色土(10YR2/1): ロームブロック・焼土ブロック炭化物をやや多く含む。
8. 暗灰黄色(2.5Y4/2): ロームブロック・ローム粒を含む。
9. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒・ローム小ブロックを含む。焼土を極少量含む。
10. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒を多く含む。焼土を僅かに含む。
11. 灰白色シルト(2.5Y8/1)と暗灰黄色土(2.5Y5/2)の混土。
12. 黄灰色土(2.5Y5/1): ローム粒・灰白色シルト粒・焼土・炭化物を含む。
13. 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム粒・焼土を多く含む。
14. 天井崩壊土。ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒などの混土。
15. 黒褐色土(10YR3/2): 焼土粒・ローム粒をやや多く含む。
16. 黒褐色土(10YR3/2): 焼土粒をやや多く含む。ローム粒・炭化物を含む。
17. 黄褐色土(10YR5/6): ローム土主体。黒褐色土ブロック・焼土ブロックをやや多く含む。
18. 焼土層。炭化物を含む。
19. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): 焼土・ローム粒を含む。固く締まっている。
20. 黄灰色土(2.5Y1/4): ローム粒を含む。固く締まっている。
21. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒を多く含む。
22. 明黄褐色土(2.5Y6/6): 黒褐色土を僅かに含む。
23. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒を含む。
24. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒を多く含む。
25. 明黄褐色ローム土(2.5Y7/6): 大部分が焼土化している。特に内側が著しい。
26. 黒褐色土(2.5Y3/2): 内側が薄く焼土化。
27. ローム土の剥れた土体。黒褐色土をまばらに含む。
28. ローム土の剥れた土体。
29. ぶい黄褐色土(10YR5/4): ローム土主体。黒褐色土ブロックを少量含む。炭化物を僅かに含む。固く締まっている。
30. ぶい黄褐色土(10YR5/4): ローム土主体。黒褐色土ブロックを僅かに含む。
31. 褐色土(10YR4/4): ローム土主体。黒褐色土ブロックをやや多く含む。
32. 黄褐色土(10YR5/6): ローム土主体。灰黄色砂質土ブロック(2.5Y6/2)を多く含む。

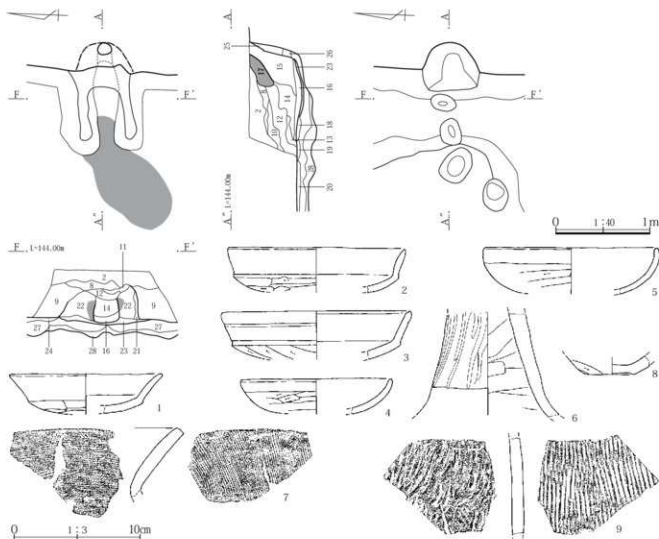
掘方



第104図 38号住居断面図

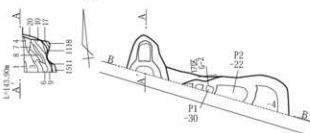
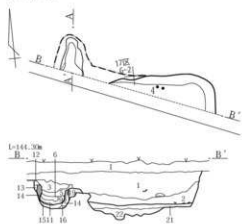
0 1:80 2m

第3章 調査の成果



39号住居

掘方



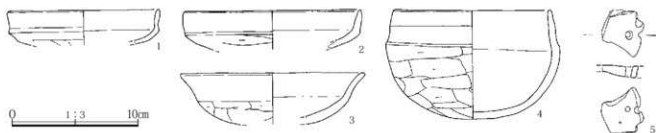
39号住居

1. 褐灰色土(10YR4/1)；焼土を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)；ローム粒・焼土を含む。
3. 灰黄褐色土(10YR5/2)；焼土・灰白色シルトブロック(10YR7/1)を含む。
4. 褐灰色土(10YR5/1)；焼土をまばらに含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2)；焼土・焼土ブロックを多く含む。締まり弱い。
6. 灰白色シルト(10YR7/1)；ブロック状。
7. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)；炭化物・灰を含む。

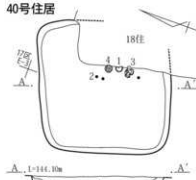
8. 明黄褐色ローム土(10YR6/6)；焼土化している部分が多い。天井崩落上。
9. 褐灰色土(10YR4/1)；炭化物・焼土を含む。
10. 焼土主体。天井崩落上か。
11. 焼土・炭化物・灰の混土。
12. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/4)；焼土を少量含む。
13. 黄褐色ローム土(10YR5/4)；焼土を含む。
14. 13同質。 15. 黄褐色土(2.5Y5/3)；炭化物を含む。
16. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)
17. 黄褐色土(2.5Y5/4)；炭化物・シルトを含む。
18. 褐灰色土(10YR5/1)；炭化物を含む。
19. 黄褐色ローム土(2.5Y5/6)；焼土を含む。締まり弱い。
20. 焼土。非常に良く焼土化している。
21. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)；ローム粒・黒色土を含む。締まり良く固い。
22. ロームブロックと黄灰色土の混土。

0 1:80 2m

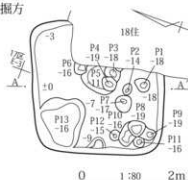
第105図 38号住居竪断面図・出土遺物、39号住居断面図・竪断面図



40号住居

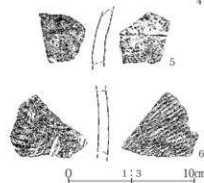
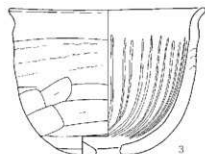
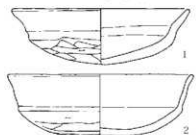


掘方

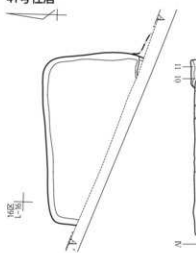


40号住居

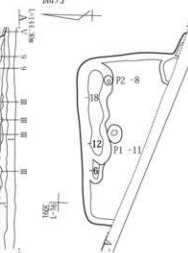
1. 暗灰黄色土(2.5V4/2):軽石・ローム粒を含む。
2. オリーブ褐色土(2.5V4/3):1に比べて軽石少くローム粒多い。
3. 黒褐色土(2.5V3/1):ロームブロックを含む。



41号住居

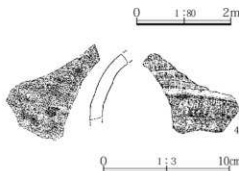
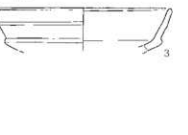


掘方



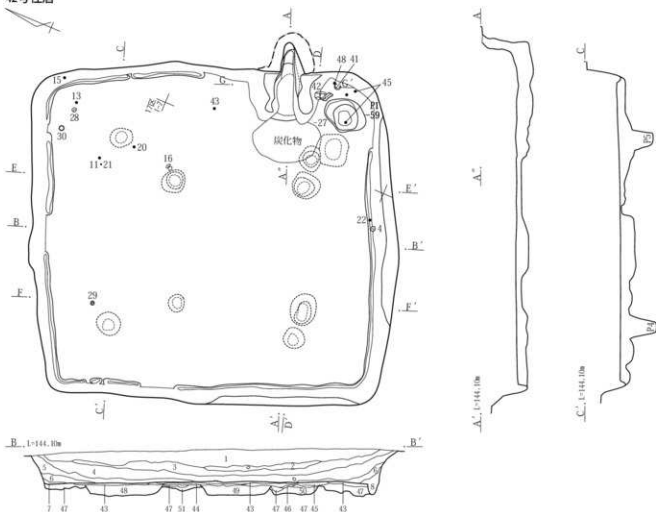
41号住居

1. 黄灰色土(2.5V4/1):軽石・砂粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5V5/2):ローム粒を多く含む。
3. 黄灰色土(2.5V5/1):ローム粒・ローム小ブロック・黒褐色土を多く含む。
4. 黄灰色土(2.5V4/1):ローム粒・ローム小ブロック・黒褐色土を含む。
5. 4同質。
6. 明黄褐色土(10YR7/6)と暗灰黄色土(2.5V4/2)の混土。
7. 明黄褐色ローム土(10YR7/6)
8. 黄褐色土(2.5V5/3):ローム粒を多く含む。
9. 黄土・ローム粒を含む。
10. 7同質。
11. ロームブロックと黒色の混土。



第106図 39号住居出土遺物、40号住居平断面図・出土遺物、41号住居平断面図・出土遺物

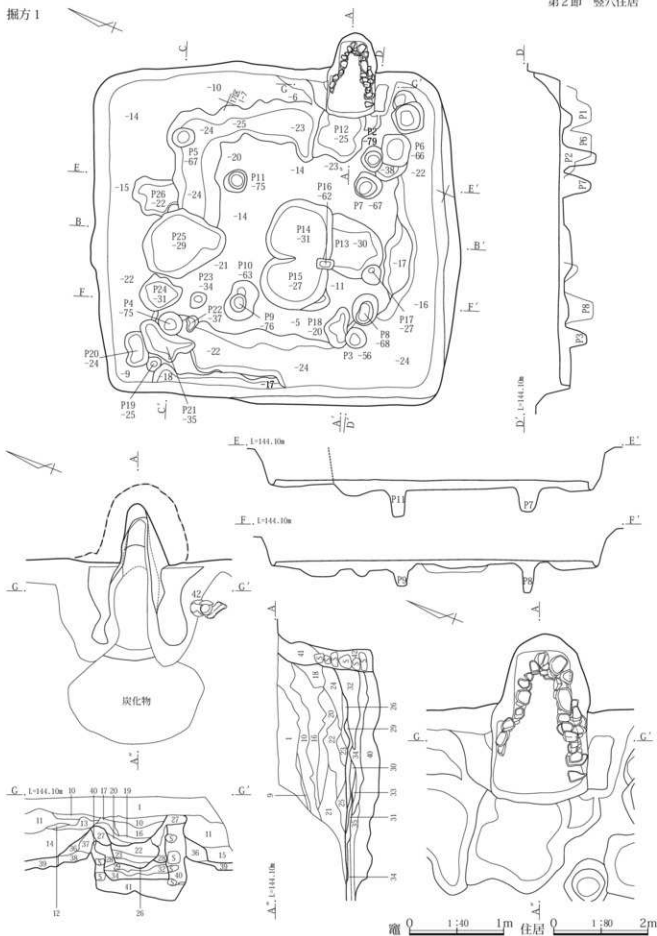
42号住居



42号住居

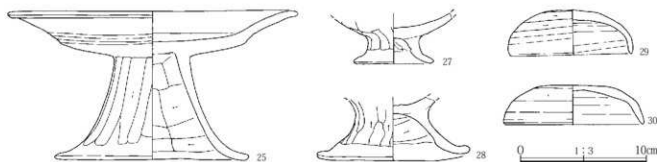
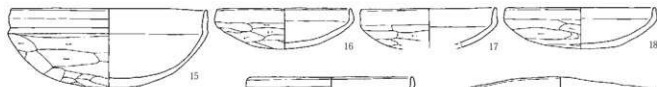
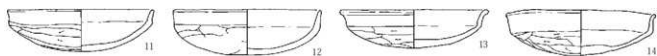
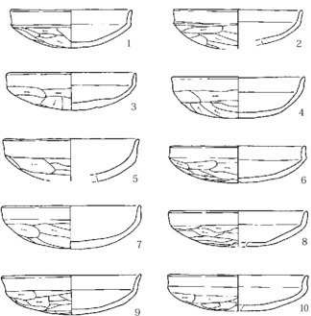
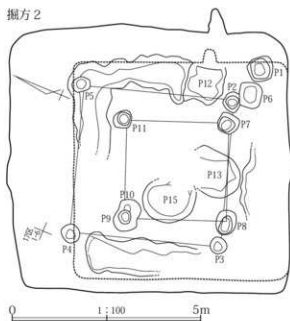
1. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
3. 黒色土(10YR2/1)：白色軽石をやや多く含む。ロームブロックを僅かに含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石をやや多く含む。ロームブロック・焼土粒を少量含む。炭化物を僅かに含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石をやや多く含む。ロームブロック・焼土粒を少量含む。
6. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石とロームブロックを少量含む。焼土粒・炭化物を僅かに含む。
7. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを少量含む。
9. 黒褐色土(2.5Y3/2)：炭化物を多く含む。
10. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒・焼土粒を含む。
11. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：軽石・ローム粒・焼土粒を含む。
12. 焼土。
13. 黄灰色シルト質土(2.5Y6/1)
14. 黄灰色土(2.5Y5/1)：軽石・焼土・炭化物を含む。
15. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石を含む。
16. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒を多く含む。焼土を含む。
17. にふい黄色土(2.5Y6/4)：ローム土主体。灰白色シルト・焼土・炭化物を含む。
18. ロームブロック・暗褐色土の混土。
19. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ローム粒・焼土・炭化物を多く含む。
20. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・焼土・炭化物を含む。
21. 20同質。
22. 黄褐色土(2.5Y5/3)：19近質。灰白色シルトが多い。
23. 灰黄褐色土(10YR5/2)：シルト分多い。焼土を含む。
24. 褐灰色土(10YR4/1)：焼土ブロック・炭化物を含む。
25. 焼土小ブロックと灰黄褐色土(10YR4/2)の混土。炭化物・ローム小ブロックを含む。
26. 焼土。
27. 褐灰色シルト(10YR6/1)：焼土を含む。
28. 焼土・褐灰色シルトが焼土化。
29. 灰屑。
30. 灰・焼土の混土。
31. 黒褐色土(10YR3/1)：灰・炭化物を含む。固く締まっている。
32. 灰・焼土の混土。
33. 灰褐色土(5YR4/2)：焼土を非常に多く含む。
34. ローム粒・焼土・炭化物の混土。
35. 灰黄褐色土(10YR4/2)：ローム粒を多く含む。
36. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒・焼土粒を多く含む。
37. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)主体。焼土粒を含む。
38. にふい黄色土(2.5Y6/4)：焼土粒・灰を含む。
39. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。
40. 焼土。
41. ローム土・黄灰色土の混土。焼土を含む。
42. 焼土化したローム質土。40が焼土化したもの。
43. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒・軽石を含む。
44. にふい黄色土(2.5Y6/4)：崩落ローム土。固く締まっている。
45. ローム粒・褐灰色土(10Y4/1)・灰白色シルト粒・焼土粒の混土。
46. 灰屑。
47. 灰黄褐色土(10YR4/2)：ローム粒・ロームブロックを含む。
48. 黒褐色土(10YR3/1)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。
49. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・ロームブロックを非常に多く含む。
50. ロームブロック主体。暗灰黄色土を僅かに含む。焼土を多く含む。
51. 崩落ローム土。

第107図 42号住居平面断面図

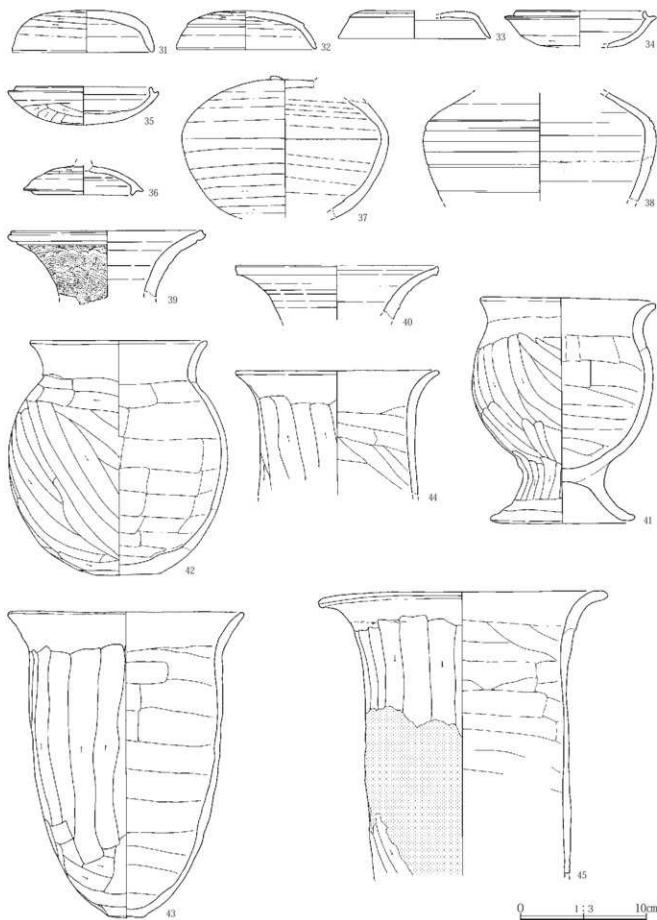


第108图 42号住居掘方平面图·窨井平面图

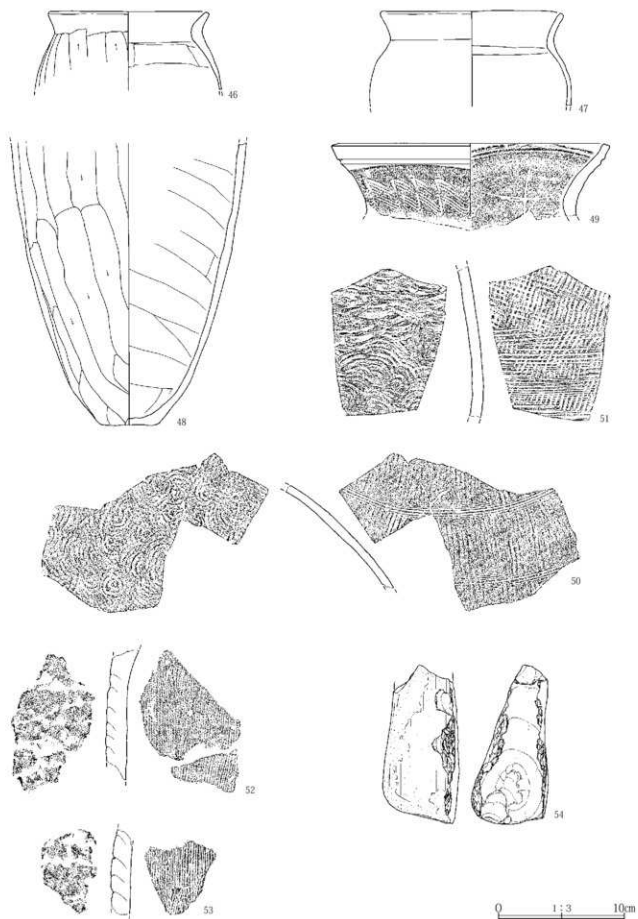
掘方2



第109図 42号住居掘方2平面図・出土遺物(1)

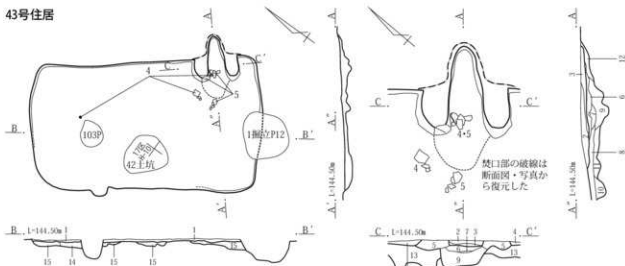


第110圖 42号住居出土遺物(2)

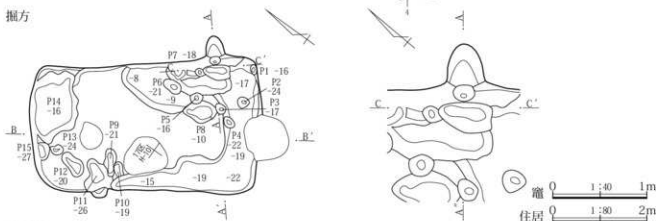


第111図 42号住居出土遺物(3)

43号住居



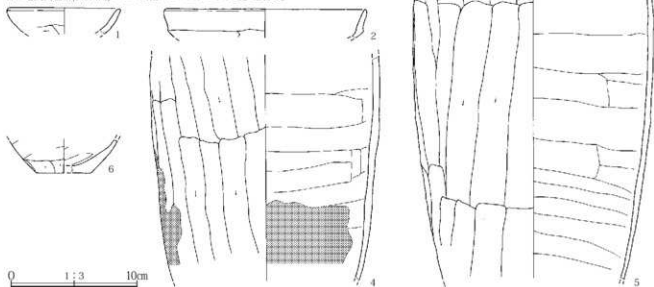
掘方



43号住居

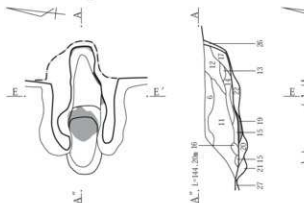
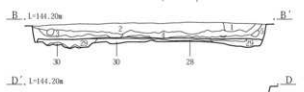
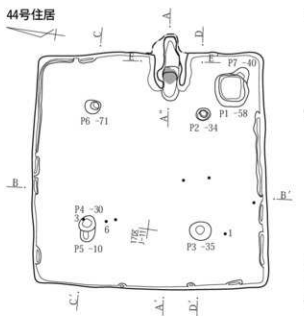
1. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石・ローム粒を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y6/1): 礫構築上の崩壊土。灰白色シルト・黒褐色土を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 焼土・炭化物・灰白色シルトを含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を稀かに含む。
5. 灰白色シルト(10YR7/1): 焼土・炭化物・灰黄褐色土を含む。
6. 灰黄褐色土(10YR5/2): 焼土・炭化物を含む。
7. 焼土。上面ほど良く焼けている。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒を含む。
9. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒・軽石を少量含む。
10. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒を多く含む。 11. 100網質。
12. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 砂粒・炭化物を含む。
13. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・ロームブロックを少量含む。

14. 黒褐色土(10YR3/1): ローム粒・ロームブロックを含む。
15. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・ロームブロックを含む。



第112図 43号住居断面図・竈断面図・出土遺物

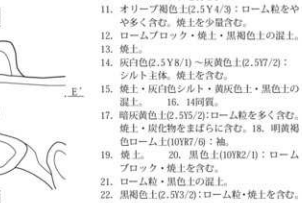
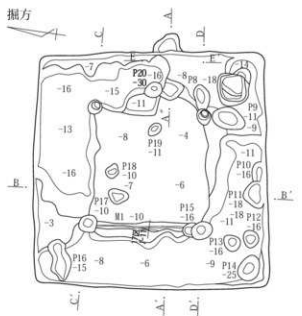
44号住居



44号住居

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・砂をやや多く含む。ローム粒を少量含む。
2. 黒色土(10YR2/1)：白色軽石をやや多く含む。ローム粒を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
4. 黒色土(10YR2/1)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ロームブロックを多く含む。白色軽石を僅かに含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を含む。
7. 黄灰色土(2.5Y4/2)：ローム粒を僅かに含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒・ロームブロックを含む。
9. 黒色土(2.5Y2/1)：ローム粒を僅かに含む。

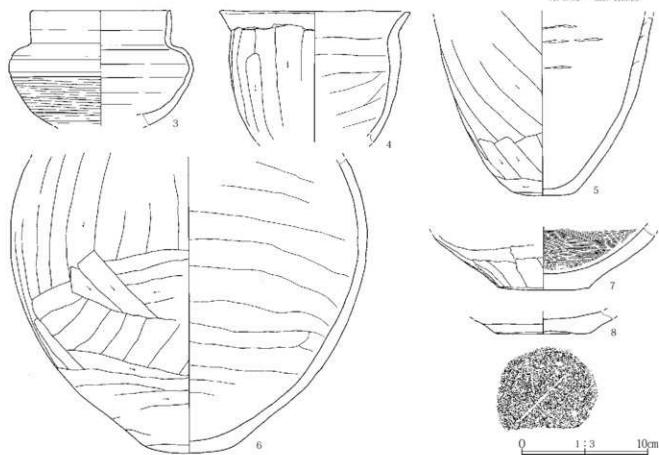
掘方



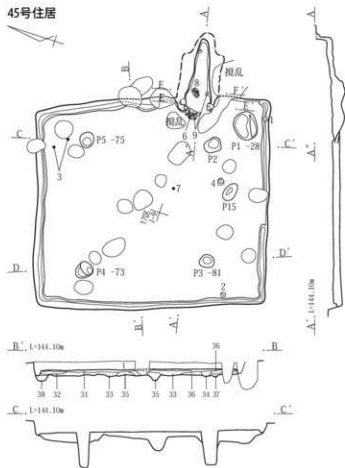
10. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ローム粒を多く含む。ロームブロックを含む。
11. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：ローム粒をやや多く含む。焼土を少量含む。
12. ロームブロック・焼土・黒褐色土の混土。
13. 焼土。
14. 灰白色(2.5Y8/1)～灰黄色土(2.5Y7/2)：シルト主体。焼土を含む。
15. 焼土・灰白色シルト・黄灰色土・黒色土の混土。16. 14同質。
17. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒を多く含む。焼土・炭化物をまばらに含む。18. 明黄褐色ローム土(10YR7/9)：袖。
19. 焼土。20. 黒色土(10YR2/1)：ロームブロック・焼土を含む。
21. ローム粒・黒色土の混土。
22. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ローム粒・焼土を含む。
23. 黒色土(2.5Y2/1)：ローム粒を少量含む。



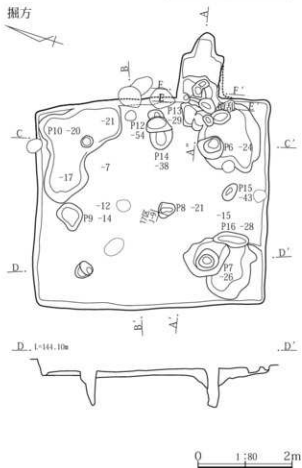
第113図 44号住居平面図・縦断面図・出土遺物(1)



45号住居

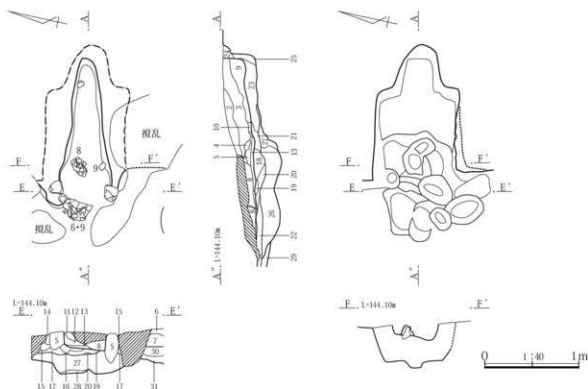


掘方



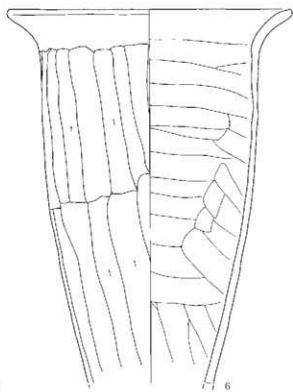
第114图 44号住居出土遺物(2)、45号住居平面断面图

第3章 調査の結果

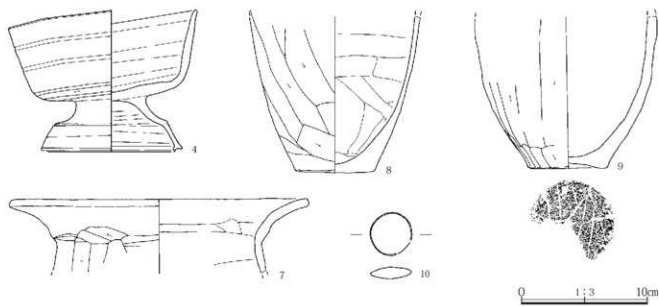


45号住居

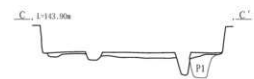
1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・灰白色シルト粒を含む。
3. 灰白色シルトブロック・暗灰黄色土・焼土の混上。
4. 焼土。 5. 黒褐色土(2.5Y3/1): 炭化物を多く含む。焼土ブロックを含む。
6. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を含む。
7. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム粒を含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・焼土を含む。
9. 5P質。 10. 焼土。
11. 灰白色シルトブロック・黄灰色土の混上。 12. 6P質。
13. 黒褐色土(10YR3/1): 炭化物を含む。 14. 灰白色シルト(2.5Y7/1)。
15. 黒褐色土(10YR3/1): ロームブロックを含む。
16. 褐色土(10YR4/1): 焼土を含む。
17. 褐色シルト(10YR6/1): 灰白色シルト粒を含む。
18. 黄灰色土(2.5Y5/1): 灰を多く含む。炭化物・焼土を含む。
19. 焼土。 20. 焼土・灰の混上。
21. 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム土・灰・灰白色シルトブロックを含む。
22. ローム粒・黄灰色土の混上。
23. 黒褐色土(10YR3/2): 焼土ブロック・灰白色シルトブロックを含む。
24. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 灰白色シルト粒を含む。
25. 黄灰色シルト(2.5Y6/1): 暗灰黄色土を含む。
26. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒・ローム小ブロックを含む。
27. ロームブロック・黒褐色土の混上。 28. 崩壊ローム土。 29. 28P質。
30. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒を含む。
31. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒・ローム小ブロックを含む。
32. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム粒を僅かに含む。
33. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・ロームブロックを多く含む。
34. ロームブロック・黒褐色土の混上。
35. にくい黄色土(2.5Y6/4): 崩壊ローム土。暗灰黄色土を含む。
36. にくい黄褐色土(10YR4/3): まじりけ少ない。
37. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒を含む。
38. 黄褐色土(2.5Y5/3): 地山の崩落土。



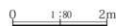
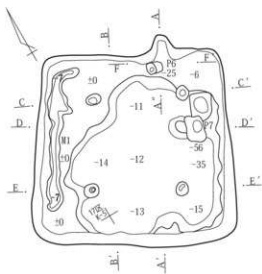
第115図 45号住居断平面図・出土遺物(1)



46号住居

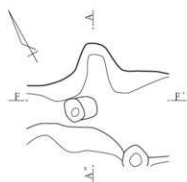
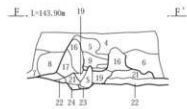
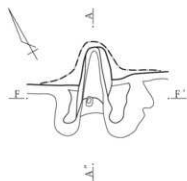


掘方



第116图 45号住居出土遺物(2)、46号住居平面図

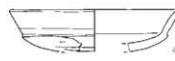
第3章 調査の成果



46号住居

1. 暗灰黄色土(2.SY4/2)：ローム粒・ローム小ブロック・焼土を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/1)：軽石・暗灰黄色土を含む。
3. 黄灰色土(2.SY4/1)：ローム粒・ロームブロック・黒色土ブロックを含む。灰白色シルトブロック・焼土をまばらに含む。
4. 暗灰黄色土(2.SY4/2)：灰白色シルト粒・軽石を含む。
5. 灰白色シルトブロック主体。暗灰黄色土を含む。焼土を僅かに含む。
6. 黒褐色土(2.SY3/1)：ローム粒・灰白色粒子を含む。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2)：軽石・ローム粒を僅かに含む。
8. 黒色土(2.SY2/1)：軽石を含む。
9. 黄灰色土(2.SY4/1)：灰白色シルト粒を含む。
10. 灰白色シルト(10YR7/1)：焼土、炭化物を含む。
11. 暗灰黄色土(2.SY4/2)：ローム粒を含む。
12. 褐灰色土(10YR4/1)：ローム粒・炭化物を多く含む。
13. ローム粒・黄灰色土の混土。灰を含む。固く締まっている。
14. ロームブロック主体。黒褐色土を含む。
15. 黄灰色土(2.SY4/1)：ローム粒・ローム小ブロックを含む。炭化物をまばらに含む。
16. 褐灰色シルトブロック(10YR6/1)・灰黄褐色(10YR4/1)の混土。
17. 褐灰色シルト(10YR6/1)：内側が焼土化している。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土・炭化物を極僅かに含む。
19. 暗灰黄色土(2.SY4/2)：ローム粒を含む。
20. 暗灰黄色土(2.SY5/2)：ロームブロック・灰白色シルトブロックを含む。
21. 褐灰色シルトブロック(10YR6/1)・黄灰色土(2.SY4/1)の混土。
22. ロームブロック・黄灰色土の混土。
23. 黄灰色土(2.SY4/1)：ローム小ブロックを含む。
24. 黄褐色土(2.SY5/3)：ローム粒を多く含む。
25. ローム土・黒褐色土の混土。
26. 崩落ローム土。黒褐色土(2.SY3/1)を含む。

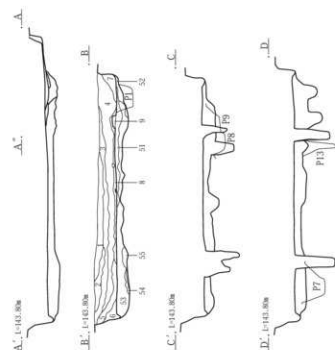
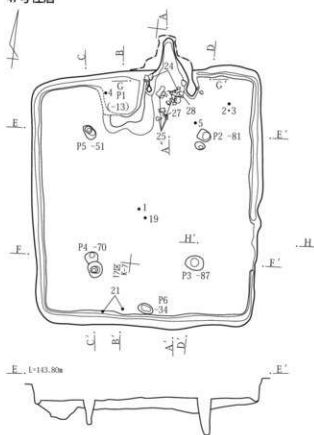
0 1:40 1m



0 1:3 10cm

第117図 46号住居竪断面図・出土遺物

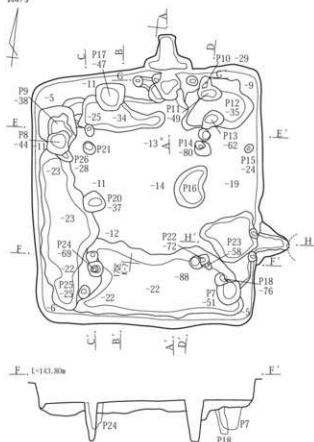
47号住居



47号住居

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロック・炭化物を少量含む。焼土粒を僅かに含む部分的に砂を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石をやや多く含む。ロームブロック・炭化物を少量含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/2)：白色軽石をやや多く含む。炭化物・焼土粒を少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/1)：白色軽石をやや多く含む。ロームブロック・灰白色シルトブロック・炭化物を僅かに含む。
5. 黒色土(10YR2/1)：白色軽石・ロームブロック・灰白色シルトブロックを僅かに含む。
6. 黒色土(2.5Y2/1)：ロームブロックを多く含む。白色軽石を僅かに含む。
7. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石・焼土粒・炭化物を僅かに含む。
8. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ロームブロックをやや多く含む。白色軽石・炭化物を僅かに含む。9. ローム土と黄灰色土の互層。
10. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石・灰白色シルト粒を含む。
11. 黄灰色土(2.5Y4/1)と灰白色シルト粒(2.5Y7/1)の混土。
12. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を含む。
13. 黒褐色土(2.5Y3/1)：灰白色シルト粒を含む。
14. 黄灰色土(2.5Y4/1)：灰白色シルト粒を含む。
15. 灰白色シルト(2.5Y7/1)と黄灰色土(2.5Y7/1)。
16. 黄灰色土(2.5Y4/1)と灰白色シルト(2.5Y7/1)の混土。焼土を含む。
17. 黄灰色土(2.5Y4/1)：焼土・灰白色シルト粒を含む。
18. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：焼土を含む。
19. 暗灰色土(10YR4/1)：焼土ブロック・灰白色シルトブロックを含む。
20. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土を少量含む。
21. 灰黄褐色土(10YR4/3)：焼土・灰白色シルトブロックを含む。
22. 黄灰色土(2.5Y4/1)：灰白色シルト粒・ローム粒・焼土粒・灰を含む。
23. 灰黄褐色シルトブロック(2.5Y7/2)。 24. 灰白色シルト(2.5Y7/1)。
25. 灰白色シルト・黄灰色土・焼土の混土。
26. 黒褐色土(2.5Y3/2)：灰白色シルト粒を含む。 27. 焼土。
28. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム小ブロックを含む。
29. 崩落ローム土。 30. 暗黄褐色土・灰白色シルト粒・ローム粒の混土。
31. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ロームブロックを含む。 32. 崩落ローム土。
33. 22近質。 34. 黒色土(2.5Y2/1)：ロームブロック・暗灰色ブロックを含む。
35. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ローム小ブロック・灰白色シルトブロックを多く含む。
36. 黒褐色土(10YR3/1)：焼土・灰白色シルトブロックを含む。
37. 黄灰色土(2.5Y4/1)：焼土・軽石を含む。
38. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：焼土ブロックを含む。

掘方

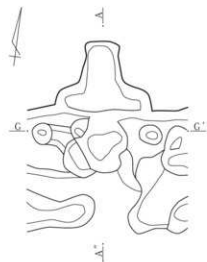
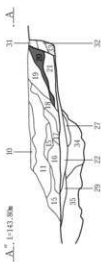
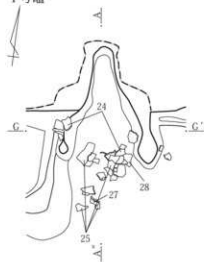


第118図 47号住居断面図

0 1:80 2m

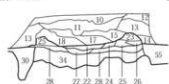
第3章 調査の成果

1号窟

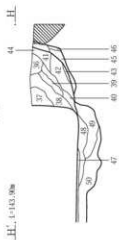
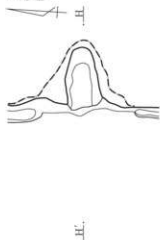


G. 1:10.00m

F.



2号窟

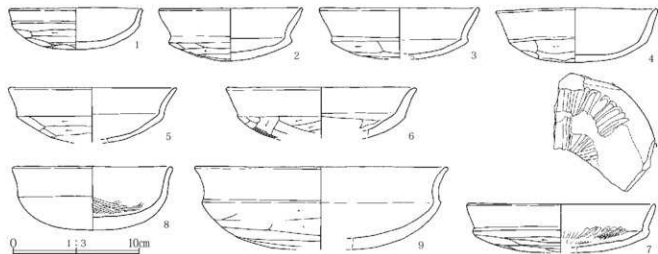


H.

H. 1:10.00m

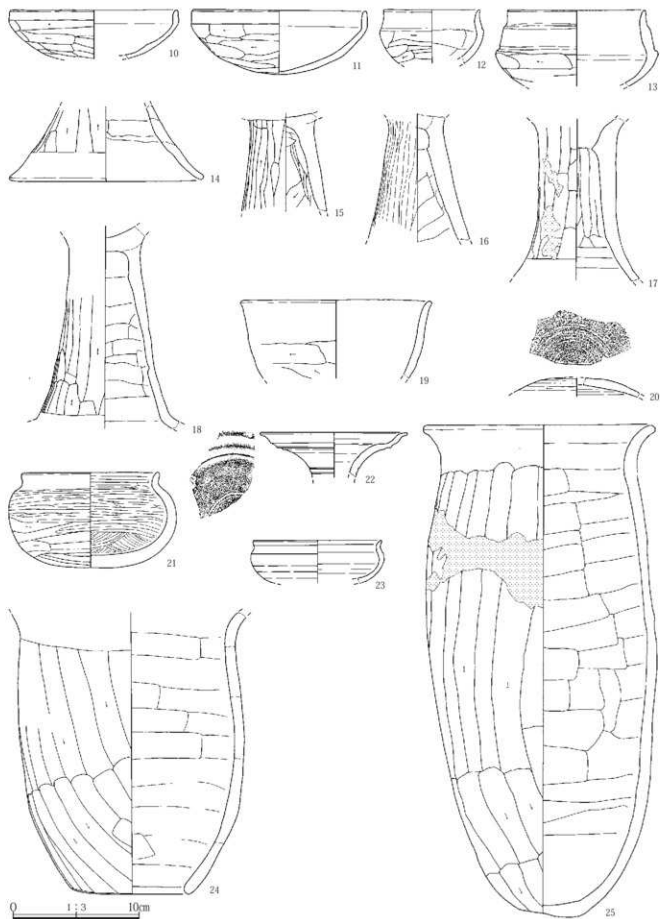
H.

0 1:40 1m



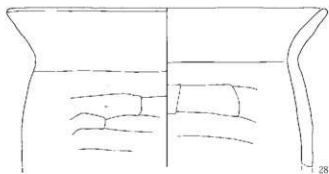
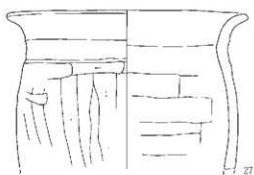
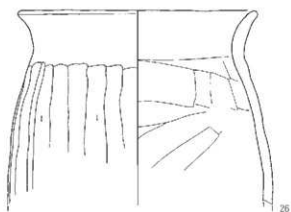
第119図 47号住居1号窟・2号窟平断面図・出土遺物(1)

39. 焼土ブロック・炭化物・黄灰色土の混土。
40. 褐灰色土(10YR4/1)；焼土・炭化物を含む。
41. 黄灰色土(2.5Y4/1)；焼土を極僅かに含む。
42. 褐灰色土(10YR5/1)；焼土・炭化物を含む。
43. 黒褐色土(10YR3/1)；炭化物を多く含む。焼土を含む。
44. 焼土化したシルト。 45. 黒褐色土(10YR3/1)；ローム粒・炭化物を含む。
46. 黄褐色土(2.5Y3/3)；ローム質の土。
47. ローム小ブロック・黄灰色土の混土。硬質。
48. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)；ローム粒・灰白色シルト粒・焼土粒を含む。
49. 黄灰色シルト(2.5Y5/1)；ローム粒・黒色土粒・焼土を含む。
50. 黒褐色土(2.5Y3/1)；ローム小ブロック・灰白色シルト粒を含む。焼土をまばらに含む。
51. 黒褐色土(2.5Y3/1)；ローム粒・焼土・灰・灰白色シルトを含む。上面硬質。
52. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)；ローム粒・ロームブロック・黒色土を多く含む。
53. 崩壊ローム上。 54. ローム上。
55. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)；ロームブロック・ローム粒・黒色土を含む。



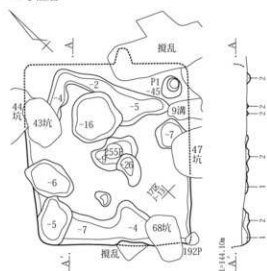
第120図 47号住居出土遺物(2)

第3章 調査の成果



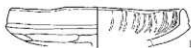
0 1:3 10cm

48号住居



48号住居

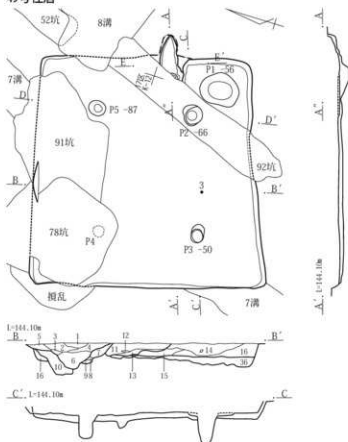
1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒・ローム小ブロックを含む。固く締まっている。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。締まり良い。



0 1:3 10cm

第121図 47号住居出土遺物(3)、48号住居平面図・出土遺物

49号住居



49号住居・78・91号土坑・7号溝

91号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2):軽石・ローム粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y5/2):ロームブロックを多く含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1):ローム粒を多く含む。
4. 1同質。
5. にぶい黄色土(2.5Y6/3):ローム粒を多く含む。
6. 1近質。

78号土坑

7. 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/1):灰色砂。
8. 崩落ローム土。
9. 砂礫層。
10. 暗灰黄色土(2.5Y4/2):ローム粒を多く含む。

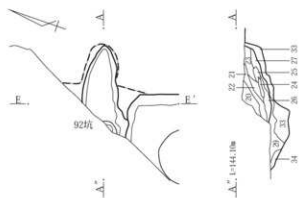
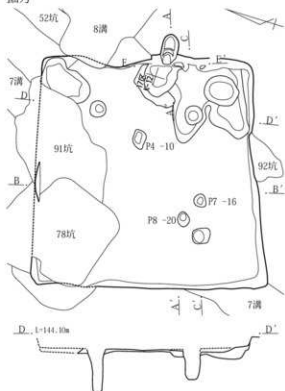
7号溝

11. 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/1):灰色砂・小礫を層状に多く含む。
12. 黄灰色細砂(2.5Y6/1):ブロック状に存在。
13. 黄灰色土(2.5Y4/1):砂粒を含む。固く締まっている。

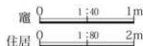
49号住居

14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2):ローム粒・ロームブロックを多く含む。軽石を含む。
15. 黄灰色土(2.5Y4/1):ローム粒をやや多く含む。
16. 暗灰黄色土(2.5Y4/2):軽石を含む。ローム粒・ロームブロックをまばらに含む。
17. 黄灰色土(2.5Y4/1):ローム粒・軽石を含む。
18. 灰白色シルト(10YR6/1):一部焼土化。
19. 17同質。
20. 暗灰黄色土(2.5Y4/2):灰白色シルトブロック・焼土を含む。
21. 焼土層。
22. 暗灰黄色土(2.5Y4/2):崩落ローム土を多く含む。
23. 褐灰色土(10YR4/1):灰・焼土・炭化物を多く含む。
24. 23近質。
25. 崩落ローム土。
26. 灰層。
27. 暗灰黄色土(2.5Y5/2):焼土・黒褐色土を含む。
28. 灰白色シルト(10YR6/1):ローム粒・焼土を含む。
29. 27近質。
30. 灰白色シルト(10YR6/1)。
31. 黄灰色土(2.5Y5/1):ロームブロックを含む。
32. 崩落ローム土。
33. 黒褐色土(10YR3/2):ロームブロックを含む。
34. 黄褐色土(2.5Y5/3):ローム粒を多く含む。
35. 崩落ローム土。
36. ロームブロック・黒褐色土(2.5Y3/2)の混土。

掘方

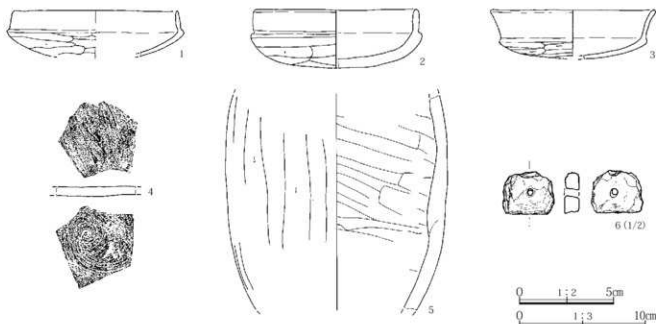


E-E', 1:144.10m 28

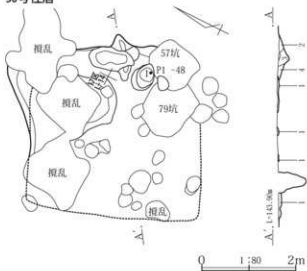


第122図 49号住居平面断面図・竪断面断面図

第3章 調査の結果



50号住居

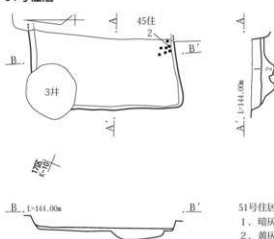


50号住居

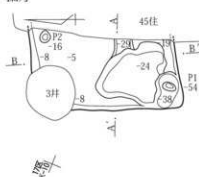
1. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒を含む。
2. 明黄褐色土(2.5Y6/6)：崩壊ローム土。粘土を含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ロームブロックを含む。後土をまばらに含む。
4. ロームブロック・小礫・黄灰色土の混土。



51号住居



掘方

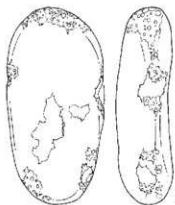


51号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ロームブロックを多く含む。

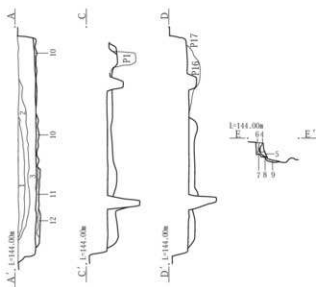
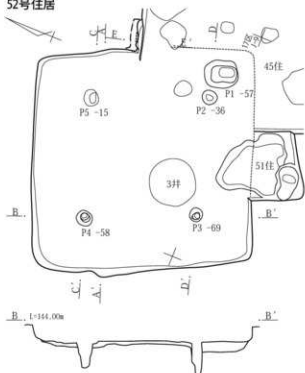


第123図 49号住居出土遺物、50号住居平断面図・出土遺物、51号住居平断面図



0 1:3 10cm

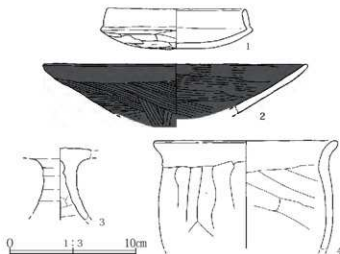
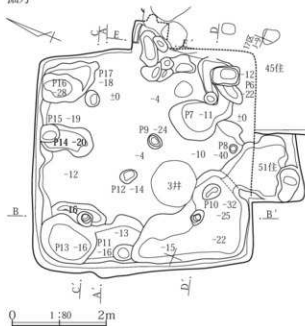
52号住居



52号住居

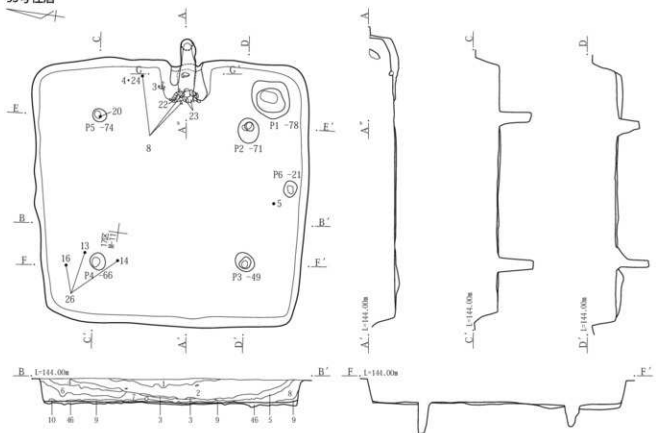
1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒を含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石を含む。ローム粒をまばらに含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒・ロームブロックを含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1)：焼土を多く含む。
5. 焼土・黒褐色土の混土。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を多く含む。
7. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4)。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2)：炭化物・焼土を含む。
9. ローム土・黄灰色土の混土。
10. 崩壊ローム土。黒褐色土を少量含む。
11. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ロームブロックを含む。
12. ローム粒・黒褐色土の混土。

掘方

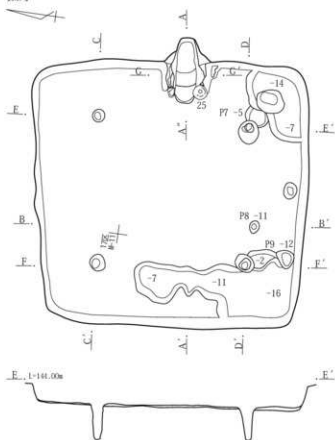


第124図 51号住居出土遺物、52号住居平面図・出土遺物

53号住居



掘方

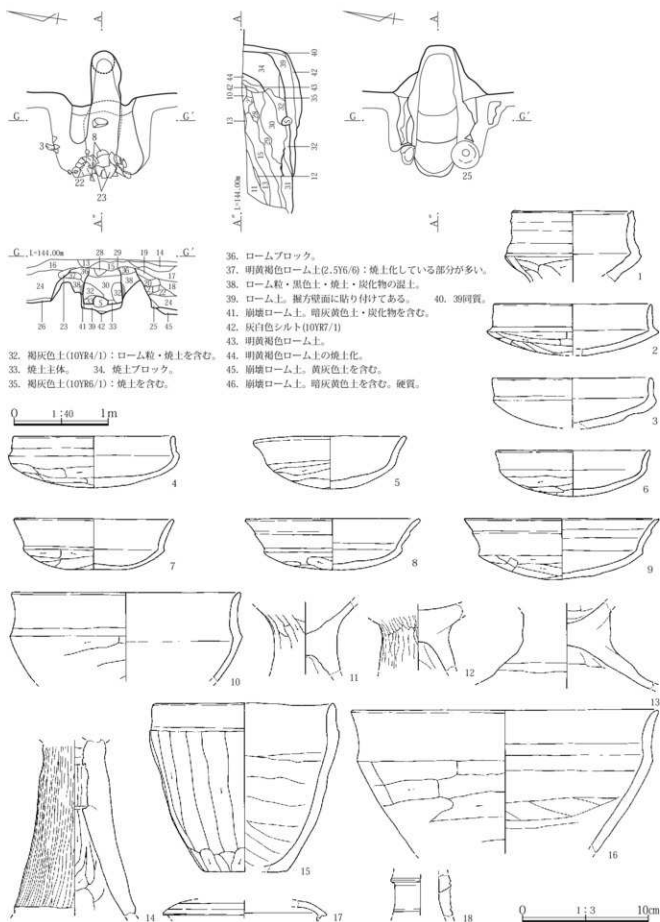


53号住居

1. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石・炭化物を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1): 炭化物・ローム粒を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・ローム小ブロック・焼土ブロックを含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・ロームブロックを含む。
6. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石・ローム粒を含む。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒を含む。軽石をまばらに含む。
8. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石・ローム粒を含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒を多く含む。
10. 9近置
11. 褐色土(10YR4/1): ローム粒・焼土粒を少量含む。
12. 黒褐色土(10YR3/1): 炭化物を含む。
13. 灰黄褐色土(10YR4/2): ローム粒・焼土粒をやや多く含む。
14. 黄褐色土(10YR5/4): ローム粒・焼土を多く含む。
15. ローム・灰褐色土・焼土の混土。灰白色シルトを含む。
16. 13同置。
17. 暗灰黄色土(2.5Y5/4): ローム粒・焼土・軽石を含む。
18. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石・ローム粒を含む。
19. 黄灰色シルト(2.5Y6/1): ローム土を含む。
20. 明黄褐色ローム土(10YR6/6): 焼土を含む。
21. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4): 焼土・黄灰色シルトを含む。
22. 黄灰色シルト・暗灰黄色土の混土。焼土を含む。
23. 22同置。
24. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム小ブロック・焼土粒を含む。
25. 崩壊ローム土。
26. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒をやや多く含む。
27. 褐色土(10YR5/1): ローム粒・焼土を含む。
28. 褐色土(10YR5/1): 焼土・ローム粒を含む。
29. 褐色土(10YR4/1): ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒を含む。
30. 29同置。
31. 褐色土(10YR4/1): ローム・焼土を多く含む。

0 1:80 2m

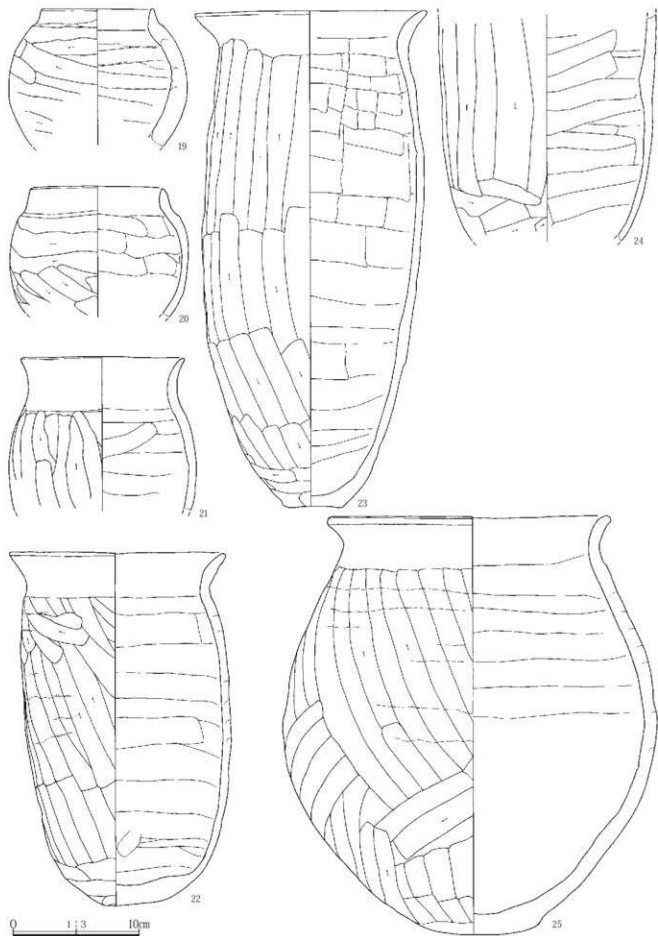
第125図 53号住居平面断面図



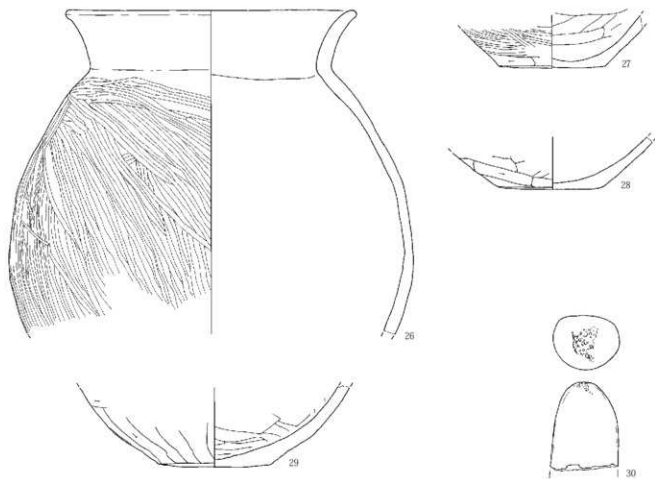
36. ロームブロック。
 37. 明黄褐色ローム上(2.5Y6/6)：焼上化している部分が多い。
 38. ローム粒・黒色土・焼土・炭化物の混土。
 39. ローム上。掘方壁面に貼り付けてある。 40. 39同質。
 41. 崩壊ローム上。暗灰黄色土・炭化物を含む。
 42. 灰白色シルト(10YR7/1)
 43. 明黄褐色ローム上。
 44. 明黄褐色ローム上の焼上化。
 45. 崩壊ローム上。黄灰色土を含む。
 46. 崩壊ローム上。暗灰黄色土を含む。硬質。

32. 褐灰色土(10YR4/1)：ローム粒・焼土を含む。
 33. 焼上主体。 34. 焼上ブロック。
 35. 褐灰色土(10YR5/1)：焼土を含む。

第126図 53号住居竪断平面図・出土遺物(1)

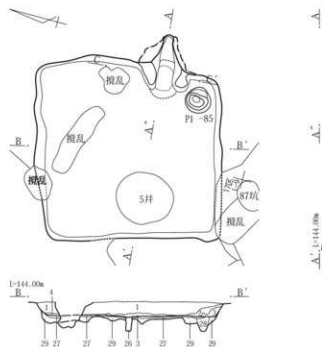


第127图 53号住居出土遺物(2)

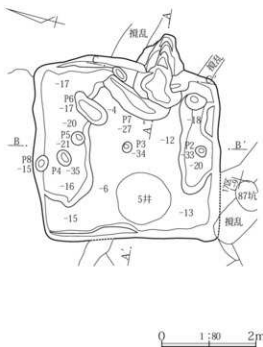


0 1:3 10m

54号住居

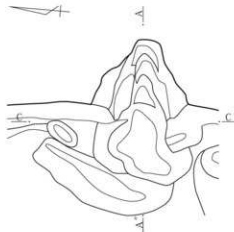
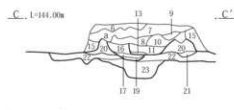
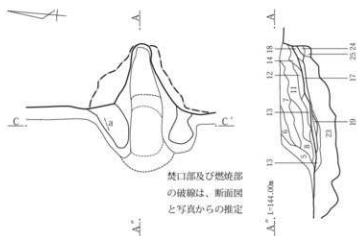


掘方



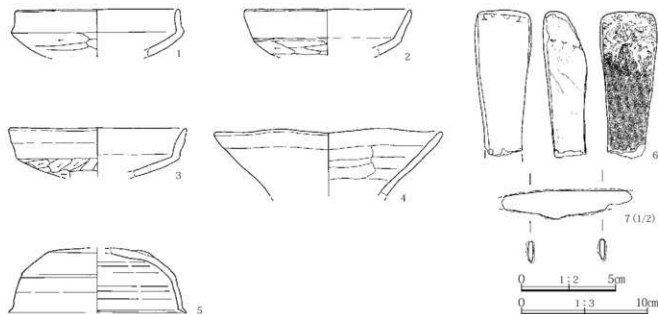
第128图 53号住居出土遺物(3)、54号住居平断面图

第3章 調査の成果



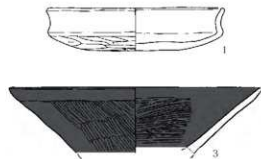
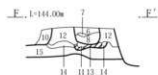
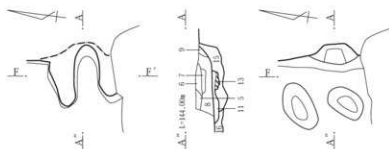
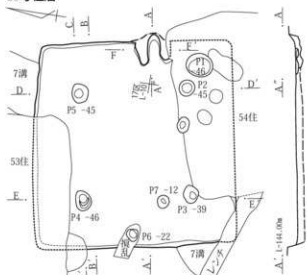
54号住居

1. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石を含む。ローム粒をまばらに含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石・黒褐色土を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒をやや多く含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒を含む。
5. 褐色土(10YR4/1)：軽石を含む。
6. 黄灰色シルト(2.5Y5/1)：灰白色シルト粒・軽石を含む。
7. 灰白色シルト(2.5Y7/1)の崩壊土。黄灰色土を含む。
8. 黄灰色シルト(2.5Y5/1)：ローム粒・焼土粒を含む。
9. 褐色土(10YR5/1)：灰白色シルト粒・焼土粒を含む。
10. 灰黄褐色土(10YR5/2)：焼土・焼土ブロックを多く含む。
11. 灰白色シルト(2.5Y7/1)の崩壊土。焼土・黄灰色土を含む。
12. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土・灰白色シルトを含む。
13. 焼土・灰白色シルトの混土。
14. 黒褐色土(10YR3/2)：焼土・灰白色シルトを少量含む。
15. 黒褐色土(2.5Y3/2)：焼土粒を含む。
16. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：焼土を含む。
17. 褐色土(10YR5/1)：炭化物・灰を含む。
18. 黄褐色土(2.5Y5/4)：堆山の崩落土。
19. 焼土。
20. 灰白色シルト(2.5Y7/1)・褐色土(10YR4/1)の混土。
21. 褐色土(10YR5/1)：灰白色シルト粒・ローム粒を含む。
22. 黄灰色土(2.5Y5/1)：ローム粒を多く含む。
23. 黒色土(10YR2/1)：ロームブロックを含む。
24. 灰白色シルト(5Y7/1)。
25. にぶい黄色土(2.5Y6/4)：ローム土の崩壊土。黄灰色土を含む。
26. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を含む。
27. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：ローム粒を多く含む。
28. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒を含む。締まり強い。
29. ローム土・ロームブロック・黄灰色土の混土。

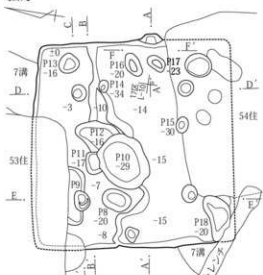


第129図 54号住居堀平断面図・出土遺物

55号住居



掘方

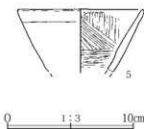


55号住居

1. 灰黄褐色土(10YR4/2): 軽石・砂粒・ローム粒を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2): ローム粒・軽石を少量含む。
3. 黒色土(10YR2/1): ローム粒を少量含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・ローム小ブロックを含む。
5. 黄灰色土(2.5Y4/1): 灰白色ローム粒を含む。
6. 灰黄色土(2.5Y7/2)
7. 2の焼土化。
8. 褐色土(10YR4/1): ローム粒・焼土粒を含む。
9. 灰黄色シルト(2.5Y7/2): 黒褐色土を含む。
10. 黒褐色土(10YR3/1): ローム粒・灰黄色シルト粒を含む。
11. 黒褐色土(10YR3/3): 焼土・灰黄色シルト・炭化物を含む。
12. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 一部焼土を含む。
13. 焼土。
14. 灰黄褐色土(2.5Y6/4): 黄灰色土を少量含む。
15. 黒褐色土(10YR3/1): ローム小ブロック・ローム粒を含む。焼土粒をまばらに含む。
16. 灰黄褐色土(10YR4/2): ロームブロックを含む。
17. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロックを多く含む。
18. ロームブロックの崩壊土。

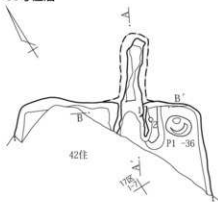
縮 0 1:40 1m

住居 0 1:80 2m

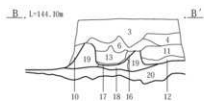
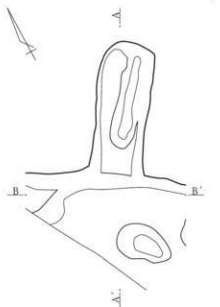
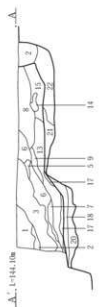
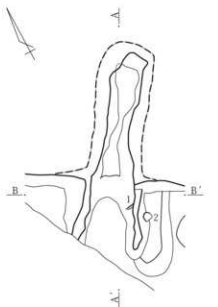


第130図 55号住居平面図・竪断面図・出土遺物

56号住居

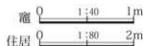
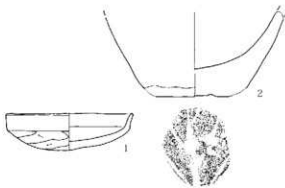


掘方



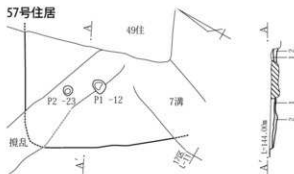
56号住居

1. 暗灰黄色土(2.5V4/2)：軽石を含む。ローム小ブロック・ローム粒を僅かに含む。
2. 1cにロームブロックを多く含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2)：軽石・ローム粒を含む。
4. 黒色土(10YR2/1)：軽石を含む。
5. 黒褐色土(10YR3/1)：ロームブロック・焼土粒・軽石を含む。
6. 灰白色シルト(2.5V7/1)：黒褐色土を少量含む。
7. 4と焼上の混土。焼上は4が焼けたものか。
8. 黒褐色土(10YR3/1)：軽石を多く含む。焼土を含む。
9. 焼上。灰黄褐色土を含む。
10. 暗灰黄色土(2.5V5/2)：ロームブロックをやや多く含む。
11. 黒褐色土(10YR3/1)：ロームブロック・焼土粒・炭化物を含む。
12. 焼土ブロックと黒褐色土の混土。
13. 灰黄褐色土(10YR4/2)：灰・焼土を多く含む。
14. 焼土ブロック。
15. 灰黄褐色土(10YR5/2)：焼土ブロックを含む。粒子の細かな土。
16. 黄灰色土(2.5Y6/1)：焼土を多く含む。
17. 焼土・シルトが焼土化したもの。灰を含む。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土粒・炭化物・灰・ローム粒を含む。
19. 灰黄色土(2.5Y6/2)：焼土を含む。
20. ローム粒・ロームブロック・黒褐色土・黄灰色土の混土。
21. 焼土・灰の混土。
22. 焼土・暗灰色土の混土。

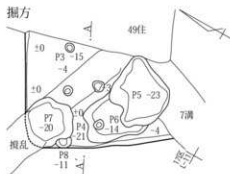


第131図 56号住居平断面図・竈平断面図・出土遺物

57号住居



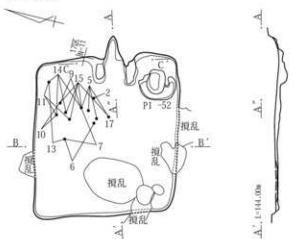
掘方



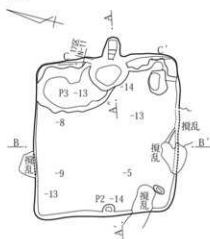
57号住居

1. 褐色土(10YR4/1): 軽石を含む。ロームブロックをまばらに含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2): ローム粒を含む

58号住居

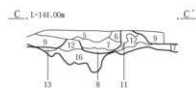
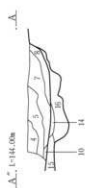
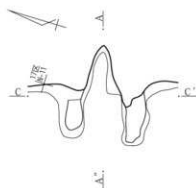
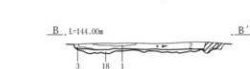


掘方



58号住居

1. 黒色土(10YR2/1): 軽石・ローム粒を含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒を多く含む。
4. 黄灰色シルト(2.5Y6/1): 焼土・ローム粒・黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/2): 焼土・ローム粒を含む。
6. 焼土主体。
7. 焼土ブロック・暗灰黄色土(2.5Y4/2)の混上。
8. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 焼土・炭化物を含む。



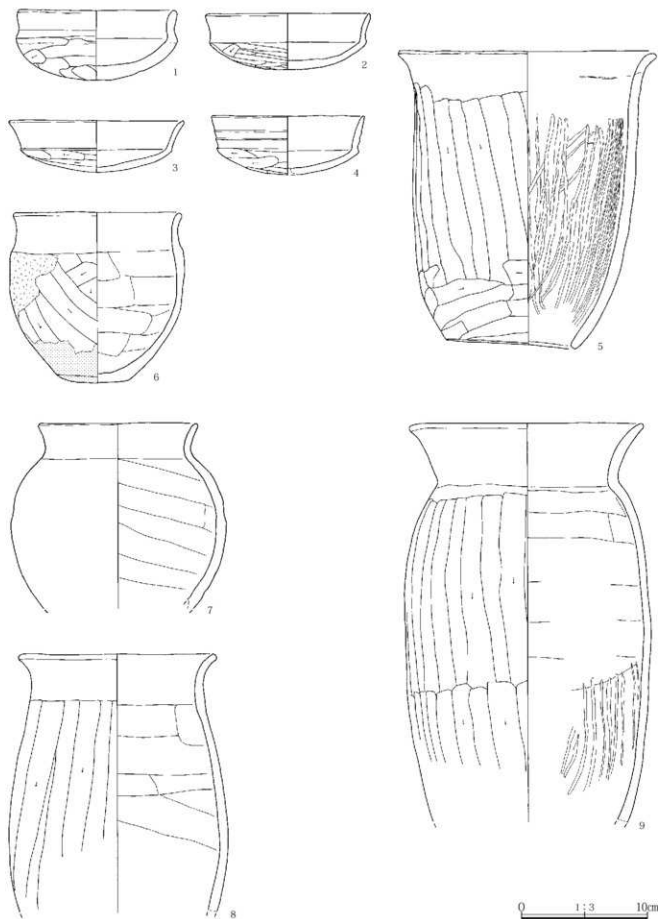
9. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 灰白色シルト・焼土・炭化物を含む。
10. 灰白色シルト(2.5Y7/1)
11. 12の焼土化。
12. 黄灰色シルト(2.5Y6/1): ローム粒・灰白色シルト粒を含む。
13. 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム粒を多く含む。
14. 焼土・褐色土(7.5Y4/1)の混上。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2): ローム小ブロックを多く含む。
16. 黒褐色土(10YR3/1): ロームブロック・ローム粒を多く含む。
17. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ロームブロックを多く含む。
18. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム粒・ロームブロックを含む。

竪 0 1:40 1m

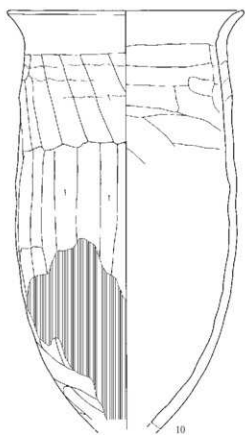
住居 0 1:80 2m

第132図 57・58号住居平面断面図、58号住居掘り出し断面図

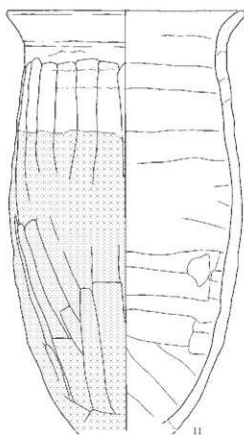
第3章 調査の成果



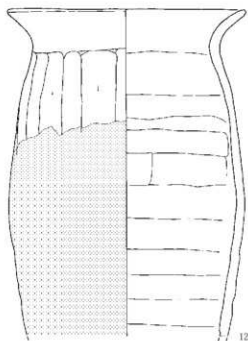
第133図 58号住居出土遺物(1)



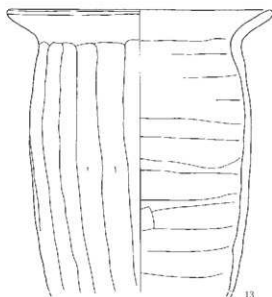
10



11



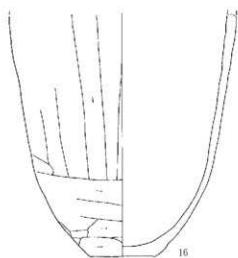
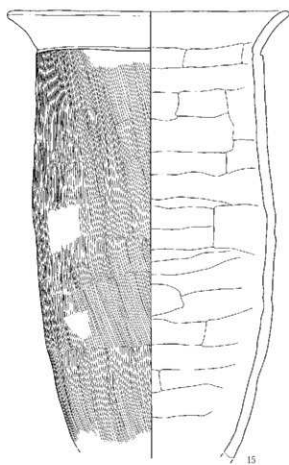
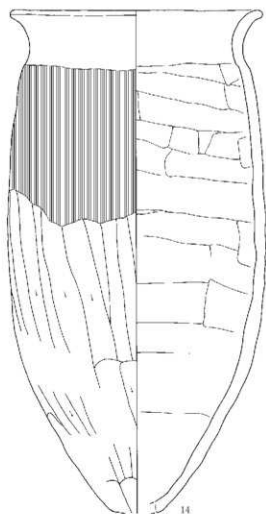
12



13

0 1:3 10cm

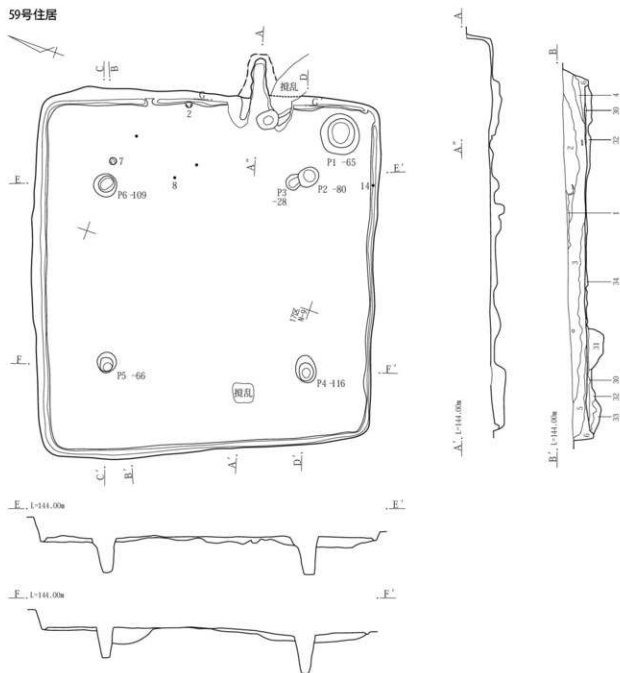
第134図 58号住居出土遺物(2)



0 1:3 10cm

第135図 58号住居出土遺物(3)

59号住居



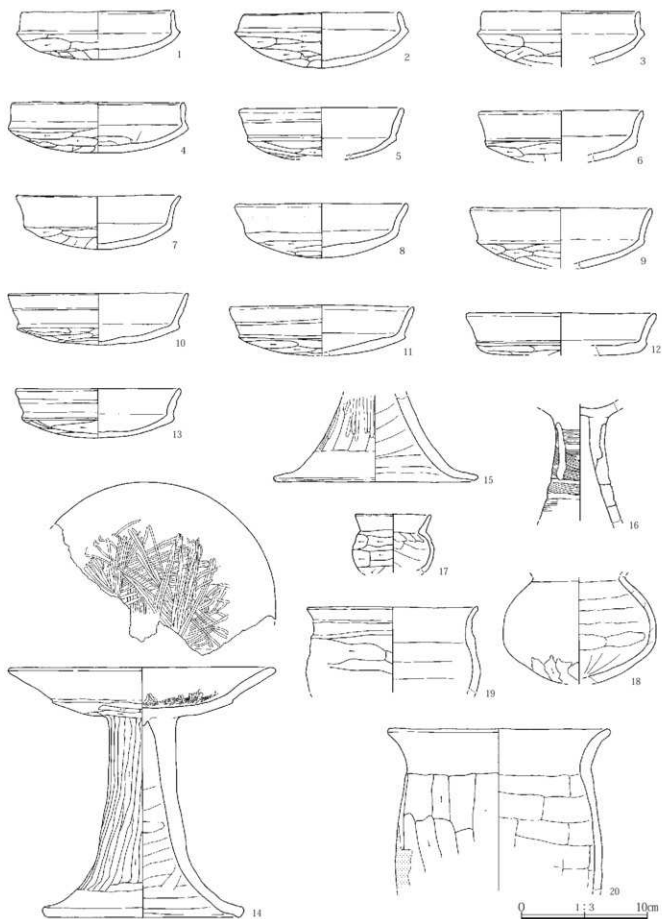
59号住居

1. 黒色土(10YR2/1): 軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2): 軽石・ローム粒・ローム小ブロックを含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石を含む。ローム粒をまばらに含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒を含む。粒子は細かい。
6. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒を多く含む。
7. 黒褐色土(10YR3/2): 軽石を含む。
8. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・灰白色シルト粒を含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y3/2): ローム粒・灰白色シルト粒を多く含む。
10. 黄灰色土(2.5Y6/1): 灰白色シルト粒を多く含む。
11. 焼土。
12. 灰白色シルト(2.5Y8/1): ブロック状に入る。黄灰色土を含む。
13. にぶい黄色土(2.5Y6/3): ローム土の崩落土。
14. 焼土・灰白色シルトの混土。
15. 焼土・灰の混土。
16. 褐色土(10YR4/1): 粒子細かい。焼土を含む。
17. 焼土・褐灰色土の混土。

18. 灰黄褐色土(10YR4/2): 粒子細かい。焼土を含む。
19. 焼土ブロック・褐色土の混土。
20. 黒褐色土・ローム粒・焼土・灰の混土。
21. 灰白色ローム土。
22. 10同質。
23. 黄灰色土(2.5Y4/1): 灰白色シルトブロックを含む。
24. 灰黄色シルト(2.5Y7/2)。
25. 焼土。
26. 灰白色シルト(2.5Y8/1)。
27. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム小ブロックを含む。
28. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム小ブロックを多く含む。
29. 灰白色シルト(10YR7/1): 壁に貼り付いている。内側が焼土化している。
30. 明黄褐色ローム土(2.5Y6/6): 暗灰黄色土を含む。固く締まっている。
31. ロームブロック主体。暗灰黄色土を含む。
32. 暗灰黄色土(2.5Y4/4): ロームブロックを多く含む。
33. ロームブロック主体。暗灰黄色土を含む。
34. ローム土の崩壊土。固く締まっている。

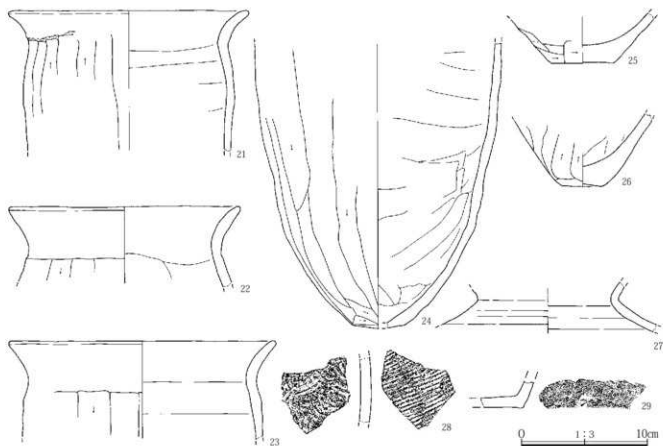
0 1:80 2m

第136図 59号住居平面断面図

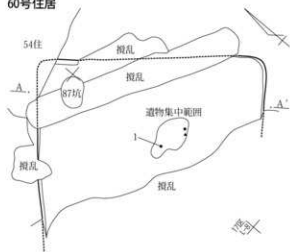


第138圖 59号住居出土遺物(1)

第3章 調査の成果



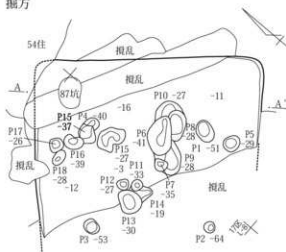
60号住居



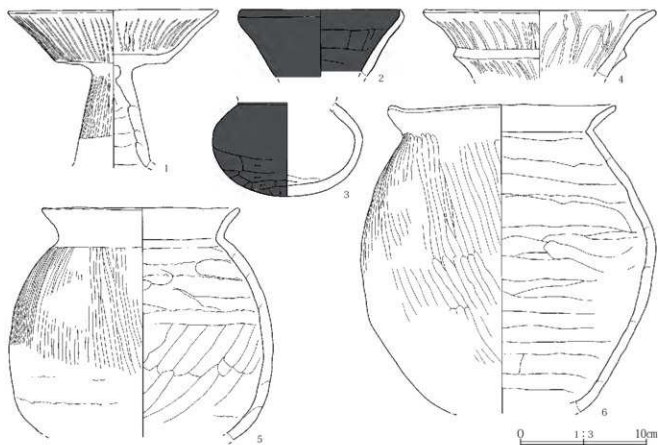
60号住居

1. 黒色土(10YR2/1): 軽石を含む。
2. にぶい黄色土(2.5Y6/4): ローム土の崩壊主体、黄灰色土を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム粒を含む。
5. 黒褐色土・ロームブロックの混土。
6. ローム土の崩壊土。黒褐色土を僅かに含む。

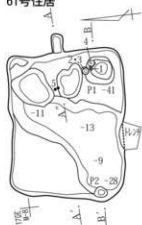
掘方



第139図 59号住居出土遺物(2)、60号住居断面図

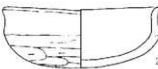


61号住居

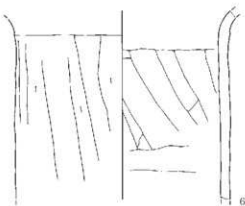
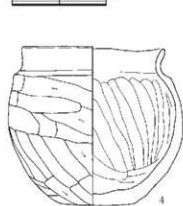


61号住居

1. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石・ローム粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
3. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): 夾雑少量。
4. 暗灰褐色土(2.5Y5/3): ロームブロックを多く含む。
5. 褐灰色土(10YR5/1): 焼土を含む。
6. 黒色土(10YR2/1): 炭化物を多く含む。
7. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロックを多く含む。
8. ローム土の崩壊土。

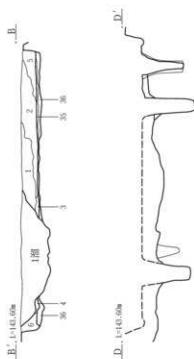
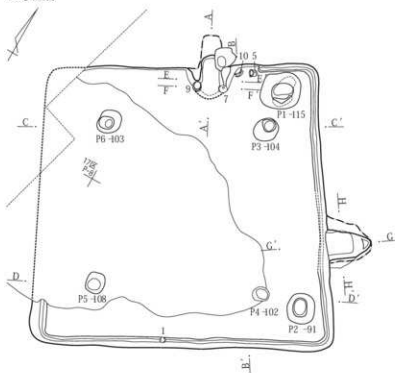


0 1:3 10cm

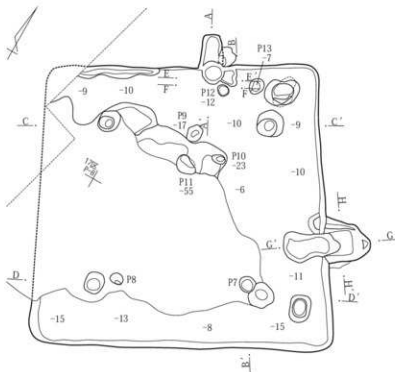


第140図 60号住居出土遺物、61号住居平面図・出土遺物

62号住居



掘方



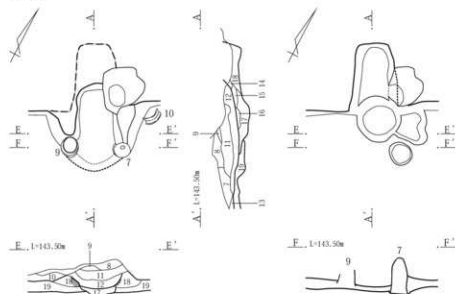
62号住居

1. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・軽石を含む。
3. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒を多く含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒を多く含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2): ローム粒・焼土粒を含む。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2): 混じり気少ない。ローム粒を極僅かに含む。
7. 明灰黄色土(2.5Y6/6): 焼土をまばらに含む。縮研築土の崩落。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・焼土粒を含む。
9. 焼土。
10. 黄褐色ローム土(2.5Y5/6): ローム土の崩落。焼土・ロームブロックの混入。
11. 黒褐色土(7.5YR3/1): 焼土粒・炭化物を多く含む。ローム粒を少量含む。
12. にぶい黄褐色土(10YR5/3): ローム粒・焼土粒を多く含む。
13. 黄灰色土(2.5Y4/1): 焼土粒を少量含む。
14. 焼土。
15. 褐灰色土(10YR4/1): 焼土・炭化物を含む。
16. 焼土・にぶい黄褐色土(2.5Y5/3)の混入。炭化物を含む。
17. 焼土・黒褐色土の混入。炭化物・ローム粒を含む。
18. 明黄褐色土ローム土(2.5Y6/6): 塵袖。
19. ローム土の崩壊土。黄褐色土を含む。焼土・炭化物を僅かに含む。
20. 黄灰色土(2.5Y5/1): やや砂質。焼土をまばらに含む。
21. 灰黄色シルト(2.5Y7/2): 暗灰黄色土・焼土を含む。
22. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 焼土・炭化物を含む。
23. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 焼土粒・炭化物を含む。
24. にぶい黄褐色土(2.5Y5/3): 灰白色シルト粒・ローム粒・焼土粒を含む。
25. 褐灰色土(10YR5/1): 焼土粒・炭化物を含む。

0 1:80 2m

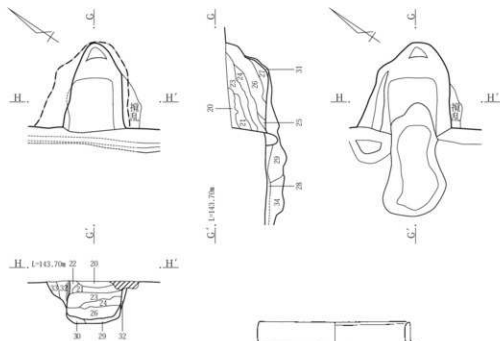
第141図 62号住居平面図

1号窟

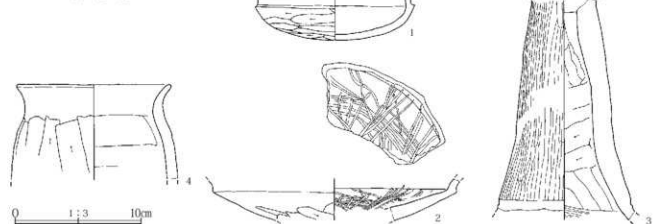


26. 焼土小ブロック(固く焼けている)・黒褐色上の混土。
27. 灰白色シルト(10YR7/1): 灰黄褐色土を含む。焼土を少量含む。
28. 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム粒を多く含む。焼土粒を少量含む。固く締まっている。住居貼床。
29. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒・焼土を多く含む。
30. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/3): 焼土・灰を含む。
31. 黒褐色土(10YR3/2): 灰白色シルトを含む。
32. 灰黄色シルト(2.5Y7/2): 灰白色シルト(2.5R/1)を含む。壁構築土。
33. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 焼土・ローム小ブロックを含む。
34. 黄灰色土(2.5Y4/1): ロームブロック・ローム粒を多く含む。
35. ローム土・暗灰黄色土の混土。
36. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ロームブロック・ローム粒を多く含む。

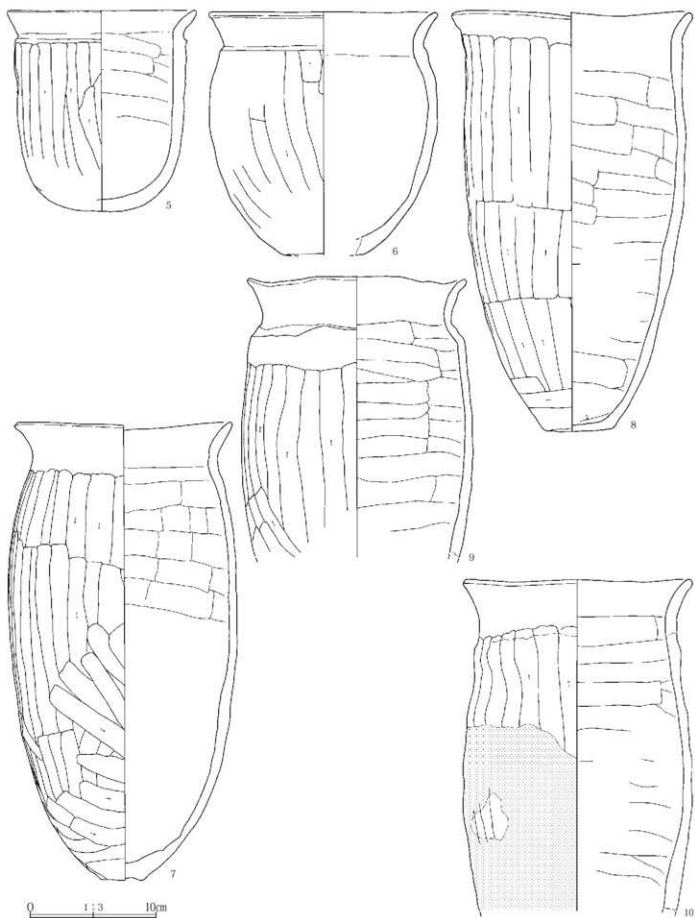
2号窟



0 1:40 1m

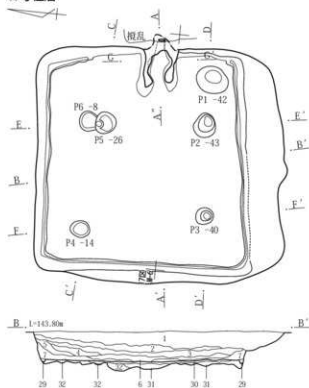


第142図 62号住居1号窟・2号窟平面図・出土遺物(1)

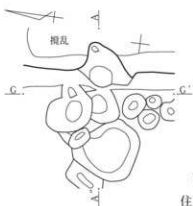
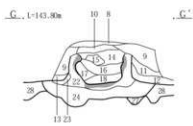
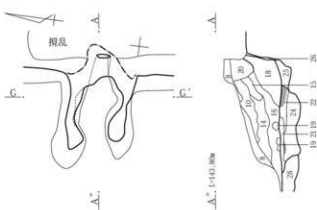
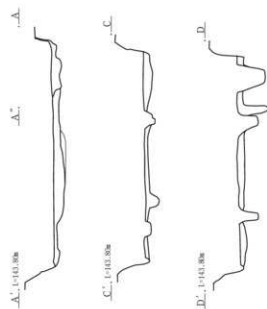
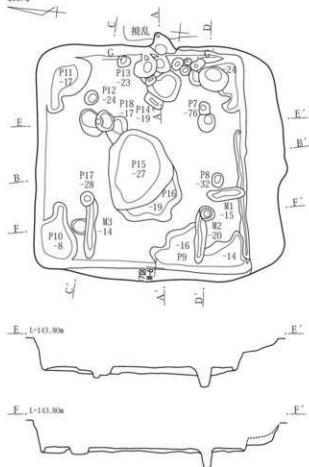


第143図 62号住居出土遺物(2)

63号住居



掘方

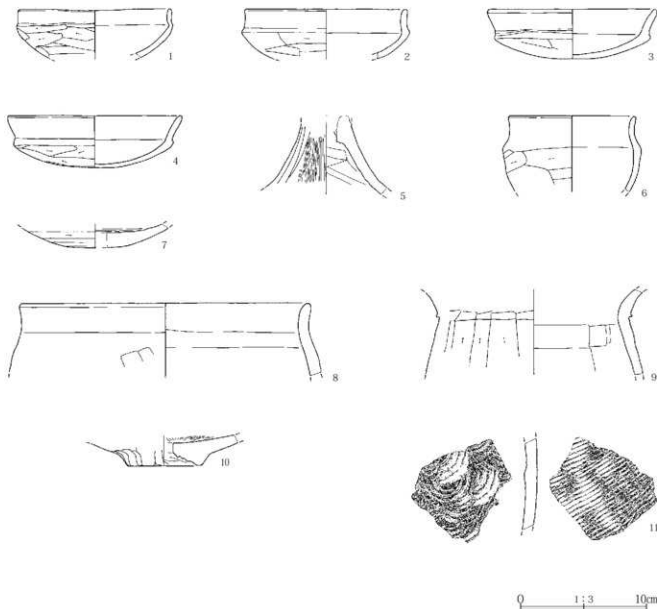


第144图 63号住居平断面图·窟平断面图

第3章 調査の成果

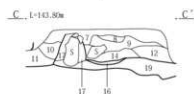
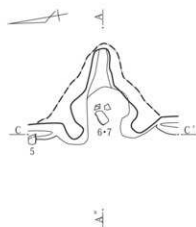
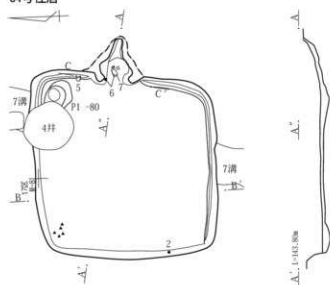
63号住居

1. 黒褐色土(10YR2/2): 軽石をやや多く含む。炭化物・焼土粒を僅かに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3): 軽石・炭化物を少量含む。ローム粒を僅かに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2): 軽石・ロームブロックを少量含む。炭化物を僅かに含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2): 軽石をやや多く含む。ロームブロックを少量含む。炭化物・焼土粒を僅かに含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2): ローム粒を少量含む。
6. 黒色土(2.5Y2/1): 軽石・灰・炭化物をやや多く含む。ロームブロック・明黄褐色軽石を少量含む。
7. 黒褐色土(10YR3/1): ロームブロック・焼土ブロックをやや多く含む。炭化物・軽石・明黄褐色軽石を少量含む。
8. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム小ブロック・焼土・軽石を含む。
9. 黒褐色土(2.5Y3/1): ローム粒・軽石を含む。
10. 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム上の崩壊土を多く含む。
11. 焼土主体。
12. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒を含む。
13. ローム上の崩壊土。
14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・焼土粒を含む。
15. 焼土ブロック。
16. 灰黄色土(2.5Y6/2): 灰白色シルトブロックを多く含む。焼土を含む。
17. 黒褐色土(2.5Y3/1): 焼土・炭化物・ローム粒を含む。
18. 焼土ブロック主体。 19. 18同質。
20. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4): 袖の構築土。
21. 焼土・灰・炭化物の層。
22. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4): 袖の構築土。
23. ローム粒・暗灰黄色土(2.5Y4/2)の混土。
24. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。
25. 焼土粒・炭化物・暗灰黄色土(2.5Y4/2)の混土。
26. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4): 壁に貼られている内側は焼土化している。
27. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。
28. ロームブロックローム粒・暗灰色土の混土。
29. 黒褐色土(10YR3/2): ローム粒を含む。
30. 暗灰色土(10YR4/1): ローム粒・ロームブロックをやや多く含む。
31. 暗灰色土(10YR4/1): ローム粒・ロームブロックの混土。
32. ローム上の崩壊土: 暗灰色土を僅かに含む。



第145図 63号住居出土遺物

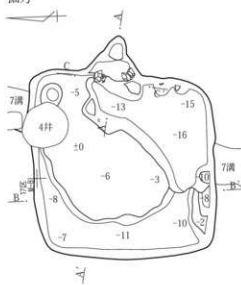
64号住居



64号住居

1. 黄灰色土(2.5Y5/1): 軽石を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・ローム粒を含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1): 黒色土・灰白色シルト・焼土を含む。
4. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・ローム粒を含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
6. オリーブ褐色土(2.5Y4/3): ローム粒を含む。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1): 灰白色シルト・軽石を含む。
8. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)の崩壊土。黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。焼土粒を極僅かに含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 焼土粒を少量含む。
10. 黄灰色土(2.5Y4/1): 灰白色シルトを多く含む。
11. 黒褐色土(2.5Y3/2): 灰白色シルト粒を少量含む。
12. 黄灰色土(2.5Y4/1): 焼土を少量含む。

掘方

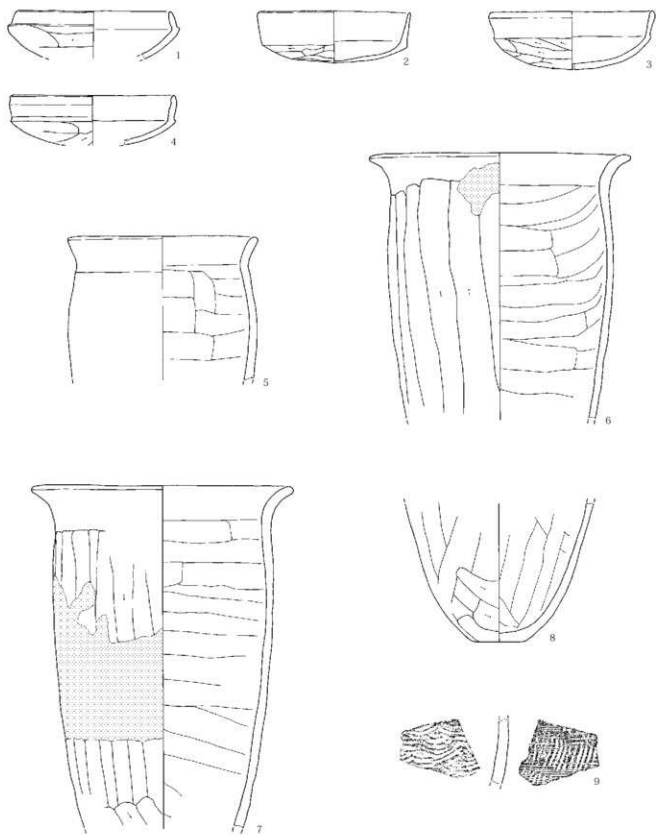


13. 黄灰色シルト(2.5Y6/1): 壺内側が薄く焼土化している。天井部の落下したものでらしい。
14. 黄灰色シルト(2.5Y6/1): 一部焼土化している。
15. 黄灰色土(2.5Y5/1): シルトが多い。炭化物・焼土を含む。
16. 褐灰色土(10YR4/1): 焼土粒を含む。
17. 黄灰色シルト(2.5Y5/1)。
18. 黄灰色シルト(2.5Y6/1): 壁に貼り付いている。内側が焼土化している部分がある。
19. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): ロームブロック・ローム粒を多く含む。焼土・炭化物を少量含む。
20. 黄灰色土(2.5Y4/1): ローム粒を含む。



第146図 64号住居平面断面図・壺平面断面図

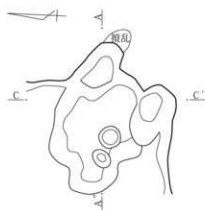
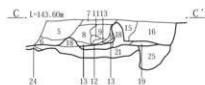
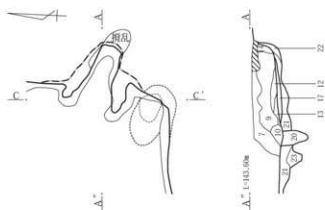
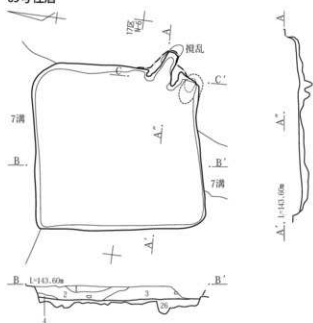
第3章 調査の成果



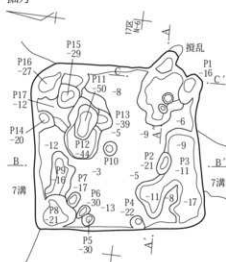
0 1:3 10cm

第147図 64号住居出土遺物

65号住居



掘方



65号住居

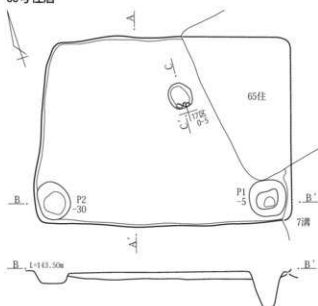
1. 褐灰色土(10YR4/1)：黄褐色土・軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒・軽石を含む。
4. 黄灰色シルト土(2.5Y4/1)：ローム粒を極僅かに含む。
5. 黒褐色土(10YR3/1)：ローム粒を含む。軽石をまばらに含む。
6. 黄灰色土(2.5Y4/1)：焼土・ローム粒を含む。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒を含む。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土・ロームを多く含む。
9. しぶい黄色ローム土(2.5Y6/4)：壙構築上の崩壊土。
10. 黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒を含む。
11. ロームブロック。
12. 9の焼土化したもの。
13. 黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒・焼土粒を含む。
14. 黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒を僅かに含む。別的小ピットらしい。壙の奥壁を壊している。
15. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ローム粒を多く含む。
16. 黒褐色土(10YR3/1)：ローム粒を含む。軽石をまばらに含む。
17. 黒褐色土(10YR3/2)：焼土・炭化物を含む。
18. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4)：袖。内面壁が極薄く焼土化。
19. 黄灰色土(2.5Y4/1)：焼土粒・ローム粒を含む。
20. 黒色土(10YR2/1)：ロームブロックを含む。
21. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を多く含む。
22. 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)：まじりけない。ローム粒を極僅かに含む。
23. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を多く含む。
24. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を含む。
25. 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)：ローム粒を含む。
26. 黒褐色土(10YR3/1)・灰黄色土(10YR4/2)・ロームブロック・ローム粒の混土。



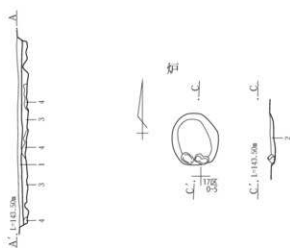
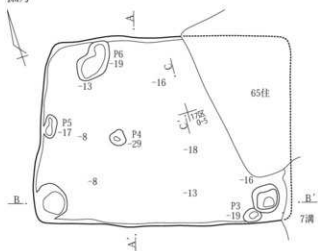
第148図 65号住居平面断面図・竈平面断面図

第3章 調査の成果

66号住居



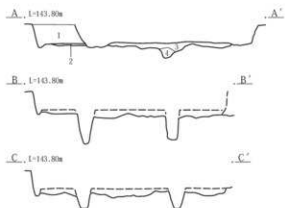
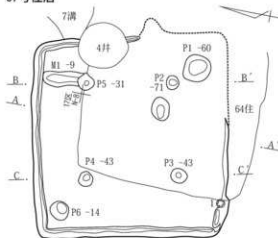
掘方



66号住居

1. 黒色土(0.0R2/1)：全体に軽石を含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/1)：焼土粒・炭化物を含む。底面はよく焼けている。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒・ローム小ブロックを含む。
4. 黄褐色土(2.5Y5/3)：混じりけ少ない。

67号住居



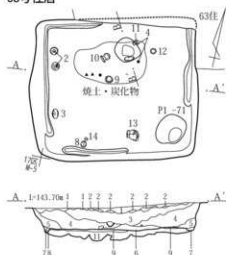
67号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒を含む。
2. 浅黄色ローム土(2.5Y7/4)：黒褐色土を含む。固く締まっている。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ロームブロックを含む。炭化物をまばらに含む。
4. ロームブロック主体。黒褐色土を含む。



第149図 66号住居平面断面図・掘方断面図、67号住居平面断面図・出土遺物

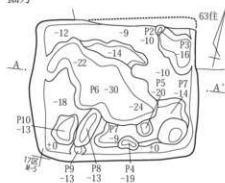
68号住居



炬

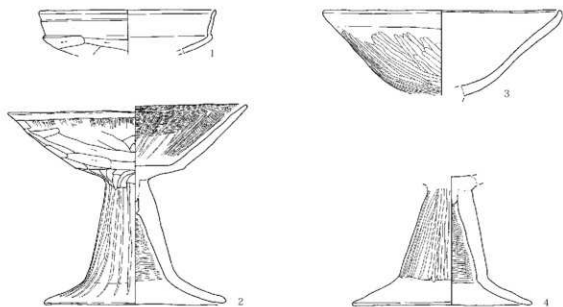
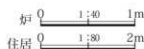


掘方



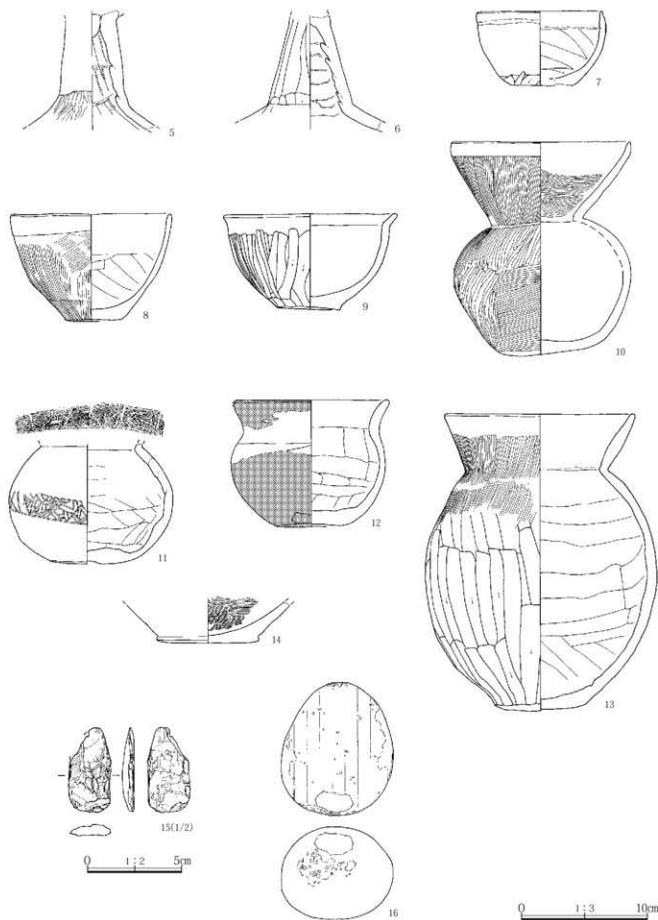
68号住居

1. 黄灰色土(2.5Y4/1)：やや砂質。軽石を少量含む。
2. 黄褐色砂質ローム土(2.5Y5/4)：Hr-FA分。
3. 黒色土(10YR2/1)：軽石をやや多く含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石・ローム粒を含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ローム粒を含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：炭化物をやや多く含む。
7. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：ローム粒を多く含む。
8. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ローム小ブロックを含む。
9. 浅黄色ローム土(2.5Y4/3)：黒褐色土を含む。固く締まっている。貼床。
10. 黒褐色土(10YR3/1)：炭化物・ローム粒を含む。焼土粒はほとんど含まない。
11. ロームブロック・黒褐色土上の混土。



第150図 68号住居平面図・炬平面図・出土遺物(1)

第3章 調査の成果



第151図 68号住居出土遺物(2)

第3節 平地式建物と掘立柱建物

本書で言う平地式建物と掘立柱建物との区別は実は明確ではなく、その差異は明確ではない。というのも、掘立柱建物には、平地式のものと同床式のものがあるはずであり、本来「平地式建物」と「掘立柱建物」とは対立する概念ではないからである。しかし、1号平地式建物のように、側柱を結ぶ溝状の遺構をもつものは、これが壁の基部を埋め込んだものと考えられ、明らかに「平地式」の建物であると考えられる。そのため、このような建物を明確に示したいため、これを平地式と呼び、そのような溝状の遺構のないものを掘立柱建物と呼び分けたのである。遺構の形態としては、1号平地式建物でも、もう少し確認面が低ければ溝が消滅していたはずなので、これが掘立柱建物と認識されていた可能性があったわけであるし、逆に本書で掘立柱建物としたものも、確認面が高ければ溝状の遺構が残っていた可能性があるかもしれない。その意味では、1号平地式建物については、ここで「掘立柱建物」と呼ぶものに本質的な差異を認めるのは困難であるといえよう。ただし、2、3号平地式建物については、後述するようにわずかな溝状の遺構だけで判断したものであり、事情が少し異なる。これについては後述する。

本書では以下の通り、平地式建物を3棟、掘立柱建物を7棟報告する。平地式建物は、3棟とも調査区東側の低地部に近いところにあり、掘立柱建物は中央から西側にかけて散在する。

1号平地式建物(第152図、P.L. 46)

調査区西2/3の、遺構が集中する範囲では最も東端にある。この遺構のすぐ側にはAs-Bが上面に堆積する浅い谷が南北に入っていることからわかるように、この付近は遺構確認面がその他の場所と比べてかなり深くなっており、そのために遺構の残りがよかった。本平地式建物のような遺構が残ったのは、そのようなよい条件に恵まれたためと思われる。

遺構の平面的な形態は、柱穴に注目すれば2間×2間の総柱建物であり、その側柱列4辺のうち、東辺を除いた側柱列に、柱同士をつなぐ溝状の遺構があるのが通常

の掘立柱建物と大きく異なる点である。この溝状の遺構は幅0.12～0.35mで、深さは0.10～0.30mである。溝の形態は、いくつかの細長い土坑が連なるような形であり、底面の高さには段差が認められる。溝が途切れている辺があるのはそのためだと思われるが、東辺に本来溝があったかどうかは明らかではない。

主軸方位はN-75°-Eで、建物の規模は、隅柱の心一線で計測して、長さ4.65m(北辺4.60m、南辺4.70mを平均した)、幅3.80mである。柱間は、梁間のはほぼ等間隔だが、桁行中央のものにやや歪みがある。柱穴の規模は溝と重複するため計測が難しいが、以下の通りである(長軸×短軸×深さ、m)。

P 1	0.50×0.41×0.79
P 2	0.41×0.38×0.75
P 3	0.42×0.36×0.74
P 4	0.51×0.44×0.63
P 5	0.46×0.33×0.41
P 6	0.41×0.37×0.49
P 7	0.39×0.37×0.69
P 8	0.37×0.35×0.65
P 9	0.39×0.32×0.72

出土した遺物は小破片のみで実測図を掲載できるものではなく、土師器類5点、同環類3点である。それらは6世紀代のもと思われる、この遺構の時期も古墳時代後期のものであると思われる。

2号平地式建物(第153図、P.L. 46)

1号平地式建物の北東にある。直角に交わるわずかなL字状の溝である。これを平地式建物の一部ではないかと推定したのは、すぐ南側にある1号平地式建物の存在と、渋川市黒井峯遺跡などで見つかっている平地式建物との類似からであり、この溝が壁の基部を埋め込んだものと判断したためである。ただし、この遺構には側柱の柱穴と考えられるようなピットは見つかっておらず、そのため、この溝状の遺構が建物ではない可能性も高いといわざるを得ない。

溝の規模は、長い方が長さ1.64m、幅0.19m、深さは最も深いところでわずか2cm、短い方が長さ0.58m、幅0.18mで、深さは最も深いところでやはり2cmであり、痕跡程度の遺構である。長い方の溝の走行方位はN

—67°—Wである。

遺物は全く見つかっておらず、時期などの詳細は不明である。

3号平地式建物(第153図、P.L. 46)

2号平地式建物よりもさらに残りの悪い痕跡であり、建物ではない可能性も強いものであるが、同様な理由から平地式建物の可能性があるものとして報告する。走行方位はほぼ東西方向に等しい。規模は長さ2.20m、幅0.15～0.34m、深さは0.03～0.05mである。東端がやや太くなっているのはここが建物隅になるからではないかと推定される。

遺物は全く見つかっておらず、時期などの詳細は不明である。

1号掘立柱建物(第153・154図、第51表、P.L. 46)

調査区西部の中央付近にある。2間×4間の側柱建物である。P3は23号土坑によって、P11は攪乱によって破壊されている。43号住居と柱穴の一つが重複しているが、平面・断面観察によって本遺構が新しいことを確認している。

主軸方位はN-32°-Eであり、規模は隅の柱の心-心距離を計測して桁行は南東辺が7.10m、北西辺が7.35m、梁間は北東辺で4.04m、南西辺で4.03mである。柱痕が確認できなかったので、柱間は確定できないが、桁行の柱間は柱穴の心-心で計測して1.74～1.94m、平均1.81m、梁間ほどの柱間もほぼ2.04mで等間であった。

柱穴掘方の平面形は方形に近いものが多いので、本来は方形であつたらしい。いずれも浅いので、表面がかなり削平されていると思われ、また、柱穴の埋土では柱痕が確認できないなど、遺存度はよくない。

各柱穴の大きさは下記の通りである。(長軸×短軸×深さ、m)

P 1 0.72×0.71×0.46

P 2 0.71×0.63×0.28

P 4 0.64×0.52×0.35

P 5 0.99×0.71×0.42

P 6 0.96×0.86×0.46

P 7 0.87×0.64×0.36

P 8 0.83×0.79×0.57

P 9 0.63×0.57×0.36

P 12 0.99×0.93×0.47

遺物は、遺構を精査した際に建物内に堆積した土から出土したのも、「1号掘立柱建物覆土」出土として取り上げたので、比較的多く出土している。掲載したものはそのようにして「覆土」として取り上げたものであり、土師器環2点、同襲1点である。ただし、混入した遺物である可能性も十分考えられ、これらの遺物が本遺構に伴うものか、断定するのは難しいといえよう。その他小破片は、同じく覆土出土として土師器襲類42点が出土している。それに対して各柱穴からの遺物は少なく、小破片ばかりである。すべて土師器で、P1、4、5、6、8、9、10から出土したものを合計して、襲類11点、環類9点が出土しているだけである。

43号住居は7世紀前半代のものであり、本遺構はそれよりも新しいことを確認しているため、それ以降のものであることは確実であるが、ピットから年代を確定できるような遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。

2号掘立柱建物(第155・156図、第51表、P.L. 46・47)

調査区西部の中央やや北寄りにある。2間×4間の総柱建物であるが、柱穴の形態・配置にいくつか特徴的な点がある建物である。

22号住居と重複するが、この住居と重複すべき柱穴(P12)は精査しても見つからなかったで、住居によって破壊されたものと思われ、本建物が古いと思われる。5号掘立柱建物とも柱穴(2号のP8と5号のP9)が重複するが、わずかな部分であり新旧は分からなかった。

主軸方位はN-4°-Wである。各柱穴には柱痕がはっきり観察できるものもあるが、それが無いものも多いので、柱穴の心-心で計測して本建物の規模は、桁行は東辺で11.15m、西辺で11.25m、梁間は北辺で5.45m、南辺で5.30mである。梁間の柱間隔は、東側よりも西側が狭く、東側が平均3.18m、西側は平均2.34mである。

各柱穴の掘方の形は長方形を意識したものと思われる。先述のように断面では柱痕が確認できるものがあり、P2、3、4、5、7、8、9、15で確認できる。

柱穴の形・配置には特徴があり、まず、中央の3本の柱穴は長方形で、P9では2本の柱が入っていたことが

断面から確認できた。その他のP7、P8では断面では明確に確認できなかったが、柱掘方の形が3本とも似ているので、本来はそれぞれの柱穴に2本の柱が入っていたと推定される。柱筋からみると南側の柱穴が柱筋に合致するので、これがこの建物の構造材であると考えられる。とすれば、北側は補助的な、あるいは東柱のような機能をもった柱であったのではないだろうか。また、四隅の柱穴は柱筋に対して約45°傾いていることも特徴的である。

各柱穴の規模は下記の通りである(長軸×短軸×深さ、m)。

P 1	0.98×0.79×0.65
P 2	1.01×0.89×0.79
P 3	0.81×0.58×0.53
P 4	0.88×0.73×0.83
P 5	0.82×0.56×0.62
P 6	1.01×0.68×0.72
P 7	1.41×0.82×0.92
P 8	1.15×0.76×0.63
P 9	1.51×0.62×0.68
P 10	1.06×0.76×1.04
P 11	0.92×0.58×0.51
P 13	0.74×0.65×0.58
P 14	0.82×0.54×0.60
P 15	0.97×0.72×0.80

出土遺物はごく少なく、掲載できるのはP11から出土した土師器環各1点とP3から出土した土師器高環脚部のみである。その他小破片として、P1～4、6～9・11から土師器類24点、同環類10点が出土している。

時期を確定するのは難しいが、この建物より新しい22号住居が7世紀後半のものと思われ、また、P15から出土した土師器環は7世紀代のもと考えられるので、この建物は22号住居をさほど遡らない時期、すなわち7世紀前半のものと考えられる。

3号掘立柱建物(第157図、第52表、P L. 47)

平地式建物と同様、遺構が集中する範囲の東端にあり、1号平地式建物と2・3号平地式建物との中間にある。2間×3間の側柱建物である。柱の配置にやや歪みがあり、全体として平行四辺形に近い形となっているが、本

来は第157図に実線で示したような平面形を意図したものであろう。

主軸方位はN-78°-Wである。規模は、隅柱の心一線で計測して、桁行は南辺4.74m、北辺4.67m、梁間は東辺2.98m、西辺3.07mである。各柱間はほぼ等しく、平均1.55mなので、本来は5尺等間で設計されたものと思われる。

柱穴掘方はほぼ円形が多い。各柱穴の規模は下記の通りである(長軸×短軸×深さ、m)

P 1	0.73×0.69×0.54
P 2	0.66×0.40×0.54
P 3	0.35×0.35×0.45
P 4	0.39×0.39×0.39
P 5	0.31×0.29×0.37
P 6	0.67×0.42×0.32
P 7	0.54×0.50×0.69
P 8	0.45×0.35×0.58
P 9	0.43×0.43×0.47
P 10	0.43×0.38×0.47

遺物はごく少なく、掲載できたのはP3から出土した土師器環のみである。その他はごく小破片で、P1～3、7、8から土師器類9点、同環類1点、同高環1点が出土している。以上の遺物のみなので時期決定はきわめて難しいが、出土遺物と周囲の以降から、古墳時代後期の中には取まるのではなかろうか。

4号掘立柱建物(第158図)

調査区西部の中央北側にある。

24号住居と重複するが、整理作業時にこの掘立柱建物の存在が判明したので、発掘調査時には新旧関係は把握できなかった。ただし、いくつかの点で2号掘立柱建物に似ているので、時期も近い可能性があり、それが正しければ、後述するように本遺構が24号住居よりも新しいものと思われる。

2間×4間の総柱建物と推定されるが、南西隅のものと、住居に重複する部分の3本の柱穴が見つからない。

主軸方位はN-17°-Wである。規模は各隅柱の心一線で計測して、桁行は東辺9.59m、中央間9.73m、梁間は北辺5.19m、その一列南が5.43m、南辺から一列北が

5.43mである。梁間の柱間隔をみると、2号掘立柱建物同様、東側よりも西側が狭い。柱穴心一線で計測して東側は平均2.98m、西側は平均2.28mであるので、西側は約0.70m狭いことになる。

各柱穴の規模は下記の通りである(長軸×短軸×深さ、m)。

P 1	0.51×0.50×1.11
P 2	0.56×0.47×0.91
P 4	0.53×0.37×0.85
P 5	0.55×0.49×0.73
P 6	0.42×0.41×0.55
P 7	0.50×0.39×0.62
P 10	0.60×0.49×0.44
P 12	0.47×0.41×0.61
P 13	0.64×0.54×0.57
P 14	0.65×0.62×0.53
P 15	0.47×0.42×0.35

出土遺物はきわめて少なく、掲載できる遺物はない。小破片としてはP13と14から土師器類3点、同環類1点、同赤色塗彩の高杯が1点出土しているのみなので、遺物から時期を特定することは困難である。建物の平面形からみると、柱穴の掘方の形は2号とは異なるが、西側の梁間が短いことなどの特徴が同じなので、両者は近い時期の可能性はある。建物の桁行の長さは2号の方が大きい、幅はほぼ同じであり、これも時期を近く考える根拠の一つである。とするとこの建物も7世紀前半代のものであるが、断定するのは難しい。しかし、それが正しければ、重複する24号住居は6世紀後半のものなので、本建物の方が新しいことになる。

5号掘立柱建物(第155図、第51表、P.L. 47)

2号掘立柱建物の南に重複する。2間×2間か2間×3間と考えられるものであるが、ここでは2間×3間として報告する。

西側に22号住居が重複する。北西隅柱のP7はその床面を掘り抜いていたため、本遺構が新しいと判断できるが、南西側の柱穴(P1とP5)は見つからなかった。そのため、本遺構はこの列まで延びておらず、P2とP8を結んだ線までがその範囲である可能性もあるが、その場合は2間×2間の建物となり、西辺の中間にあるべき

柱穴がやや見つかっていないことになる。桁行柱間隔が、東端の柱間と中央の柱間がいずれも1.80m前後であるのに、西端間の長さがP7からP8で計測して2.10mとやや長いのも、2間×3間と考える上ではやや不利な点である。

また、先述のように2号掘立柱建物とも重複するが、わずかな部分であり、新旧関係は把握できなかった。

主軸方位はN-71°-Eであり、長さはいずれも柱心一線で計測して、桁行が北辺で5.75m、梁間が東辺で3.66mである。

柱穴の掘方はほぼ円形で規模がやや小さい傾向がある。各柱穴の規模は下記の通りである(長軸×短軸×深さ、m)。

P 2	0.46×0.42×0.38
P 3	0.57×0.53×0.56
P 4	0.44×0.43×0.64
P 6	0.44×0.31×0.38
P 7	0.51×0.37×0.10
P 8	0.49×0.41×0.66
P 9	0.47×0.38×0.33
P 10	0.36×0.33×0.32

出土遺物はP10から土師器環のごくわずかな破片が出土している他、小破片としてP3、4、8、10、12から土師器類13点、同環類7点が出土しているのみであり、時期を明確に示すものはない。22号住居が7世紀後半なので、それよりも新しいとするとそれ以降のものであり、2号掘立柱建物よりも新しいものとなる。

6号掘立柱建物(第159図、P.L. 47)

調査区のほぼ中央にある。2間×2間の小さな竪柱建物である。13号住居と重複するが、本遺構が新しいことを確認した。北西隅の柱穴(P8)がやや歪んだ位置にある。

中央の柱穴が2基(P5・6)あるほか、P7とP8も2時期の切り合いを思わせる形態をしているので、修理か建て替えが行われた可能性がある。

ほぼ正方形であるが北西-南東方向がやや長いのでこちらを主軸とすると主軸方位はN-72°-Wである。規模は各隅柱の心一線を計測すると、桁行方向の南西辺が3.33m、北東辺が3.30m、梁間方向の北西辺が3.28m、

南東辺が3.12mである。

柱穴はみな円形で、他の掘立柱建物と比べてかなり小さい。P 7のみは非常に浅く、疑問のある柱穴である。各柱穴の規模は下記の通りである(長軸×短軸×深さ、m)。

P 1	0.23×0.23×0.25
P 2	0.26×0.21×0.22
P 3	0.29×0.24×0.56
P 4	0.25×0.24×0.37
P 5	0.34×0.25×0.46
P 6	0.26×0.22×0.37
P 7	0.37×0.33×0.07
P 8	0.29×0.27×0.12
P 9	0.28×0.26×0.25
P 10	0.29×0.24×0.33

出土遺物はないので、時期を確定することは困難であるが、5世紀末から6世紀初頭と考えられる13号住居より新しいことは確認している。

7号掘立柱建物(第159図)

調査区北西隅にある。調査区の北西部には多くのピットが存在するが、それらの大部分は他の遺構よりも新しいことが平面観察で分かり、時間的にはかなり新しいものであることが判明していた。また、他に土坑や溝なども多くあり、その中からは少ないながらも中世に属する遺物が出土することから、それらのピットとも合わせて、この付近に中世の屋敷跡などの存在が想定されていた。これらのピットはその屋敷に付属する掘立柱建物のものである可能性が強いものと思われるが、上面からの攪乱・削平が著しいので、多くの柱穴が既に消滅しているものと思われ、建物として把握することは困難を極めた。ここで報告する7号掘立柱建物は、整理作業を行う中で平面図を点検して見出されたものであり、調査当時は建物として認識できなかったものである。同様な建物はこの付近にさらに存在したと思われるが、他に確実なものは見出すことができなかった。

この建物は1間×3間ないしは2間×3間と思われるものであるが、梁間中央の柱穴は見つかっていないし、北東隅の柱穴も攪乱のために破壊されているものと思われる、やや不確実な要素が大きい。

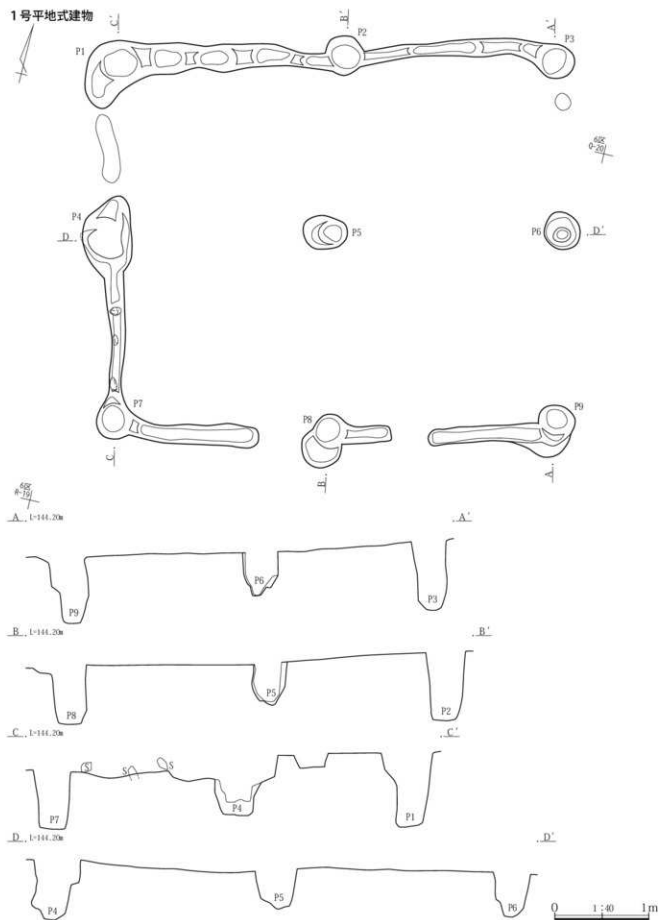
主軸方位はN-73°-Wであり、規模は隅柱穴心-心で計測して桁行(南辺)が6.49m、梁間(東辺)が4.22mである。桁行の柱間隔はやや不揃いであり、南辺はP 1～2が2.37m、P 2～3が2.02m、P 3～4が2.10m、北辺はP 5～6が2.18m、P 6～7が1.78mである。

各柱穴は不整形のものが多く、比較的小さいものが多い。それぞれの規模は下記の通りである(長軸×短軸×深さ、m)。

P 1	0.24×0.23×0.19
P 2	0.27×0.18×0.17
P 3	0.33×0.29×0.38
P 4	0.25×0.21×0.46
P 5	0.33×0.27×0.41
P 6	0.31×0.31×0.31
P 7	0.34×0.23×0.29

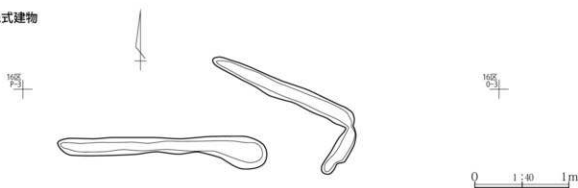
出土遺物はなく、時期を特定することは困難であるが、前述のように中世に属するものである可能性が高いものと考えられる。

1号平地式建物

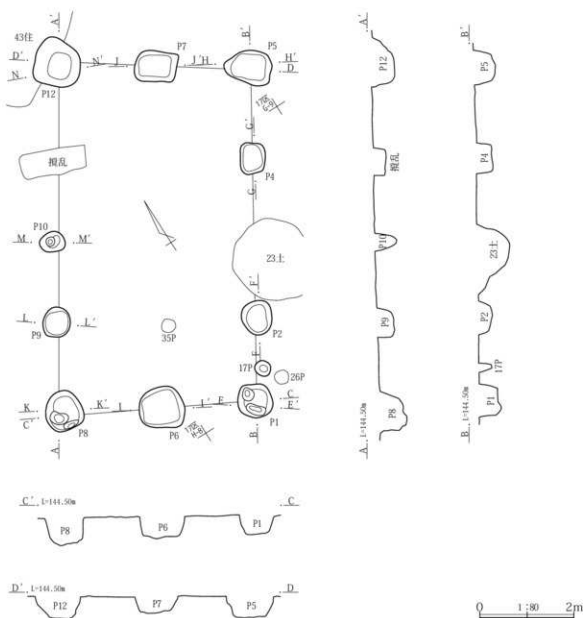


第152図 1号平地式建物平面図

2・3号平地式建物

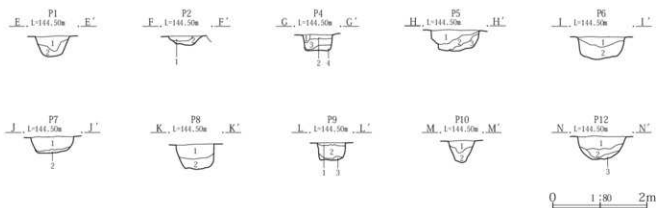


1号掘立柱建物



第153图 2・3号平地式建物平面図、1号掘立柱建物断面図

第3章 調査の成果



1号掘立柱建物

P 1

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを含む。

P 2

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を含みローム粒をわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。

P 4

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を含む。(中世ビットフク上)。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む。

P 5

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ローム粒を含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。

P 6

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 7

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 8

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 9

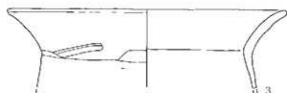
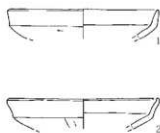
1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ローム粒を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 10

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 12

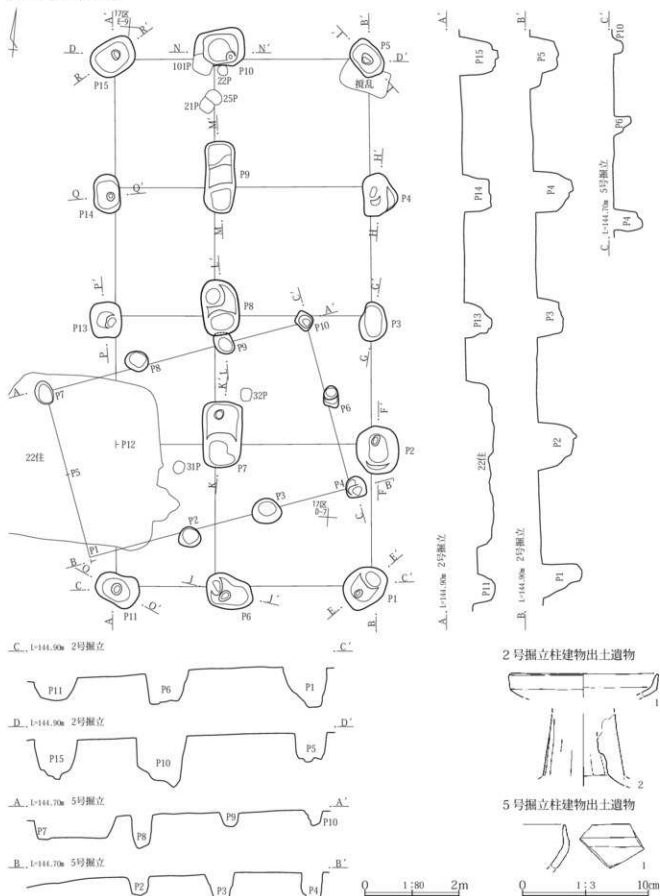
1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックをわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。



0 1:3 10cm

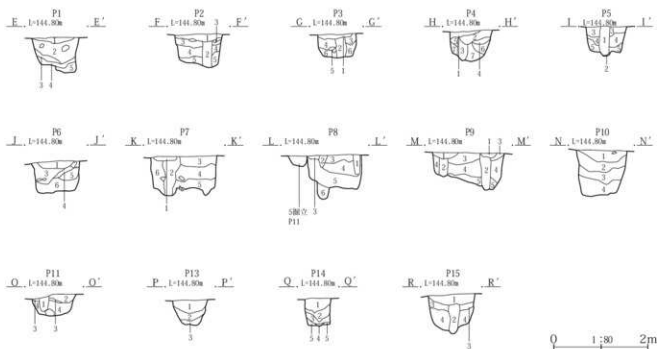
第154図 1号掘立柱建物柱穴断面図・出土遺物

2・5号掘立柱建物



第155図 2・5号掘立柱建物平面図・出土遺物

第3章 調査の成果



2号掘立柱建物

P 1

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・白色軽石を少量含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・ローム粒を非常に多く含む。
5. 暗褐色土(10YR3/3)：ローム粒を非常に多く含む。

P 2

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・白色軽石をわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：白色軽石をやや多く含むロームブロックを少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックをやや多く含む白色軽石をわずかに含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを多く含む。

P 3

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：白色軽石をやや多く含むロームブロックをわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを多く含む白色軽石を少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを多く含む。
6. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックをやや多く含む白色軽石をわずかに含む。

P 4

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 褐色土(10YR4/4)：ロームブロック・ローム粒を多く含む白色軽石をわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックをやや多く含む白色軽石をわずかに含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを多く含む白色軽石をわずかに含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを少量含む。
6. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを多く含む。
7. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックをやや多く含む。

P 5

1. 灰黄褐色土(10YR4/2)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
2. 黒色土(10YR2/1)：ロームブロックをわずかに含む非常に固く締まっている。
3. 暗褐色土(10YR3/4)：ロームブロック・ローム粒を多く含むローム粒をわずかに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・ローム粒をやや多く含む白色軽石をわずかに含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・ローム粒を少量含む白色軽石をわずかに含む。

P 6

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを多く含む白色軽石を少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・白色軽石を少量含む。
5. 暗褐色土(10YR3/4)：ロームブロック・ローム粒を非常に多く含む。
6. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックをやや多く含む。

P 7

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロック・白色軽石をわずかに含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む白色軽石を少量含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロックをやや多く含む。白色軽石をわずかに含む。礫を含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む礫を含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2)：ロームブロックを多く含む礫を含む。

P 8

1. 黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を非常に多く含むロームブロック・炭化物をわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックをやや多く含む白色軽石を少量含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)とロームの互層。
6. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・礫を少量含む。

第156図 2号掘立柱建物柱穴断面図

P 9

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・白色軽石を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックを多く含む白色軽石を少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む白色軽石をわずかに含む。

5. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを非常に多く含む。

P 10

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・ローム粒を少量含む白色軽石をわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・ローム粒を多く含む白色軽石をわずかに含む。

4. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・ローム粒をやや多く含む。

P 11

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・白色軽石をわずかに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロックをやや多く含む焼土粒をわずかに含む。

P 13

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・ローム粒を少量含む白色軽石をわずかに含む。
3. 褐色土(10YR4/4)：ロームブロック・ローム粒を多く含む。

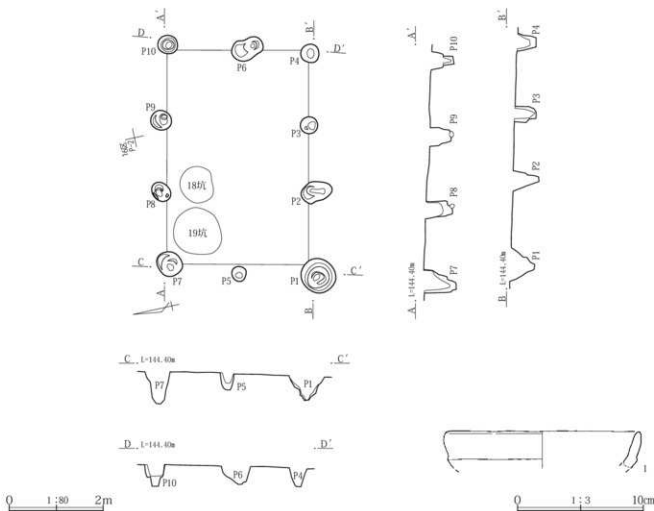
P 14

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：ローム粒・白色軽石をわずかに含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・ローム粒を少量含む白色軽石をわずかに含む。
4. 黒色土(10YR2/1)：ロームブロックをわずかに含む非常に固く締まっている。
5. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・ローム粒を多く含む白色軽石をわずかに含む。

P 15

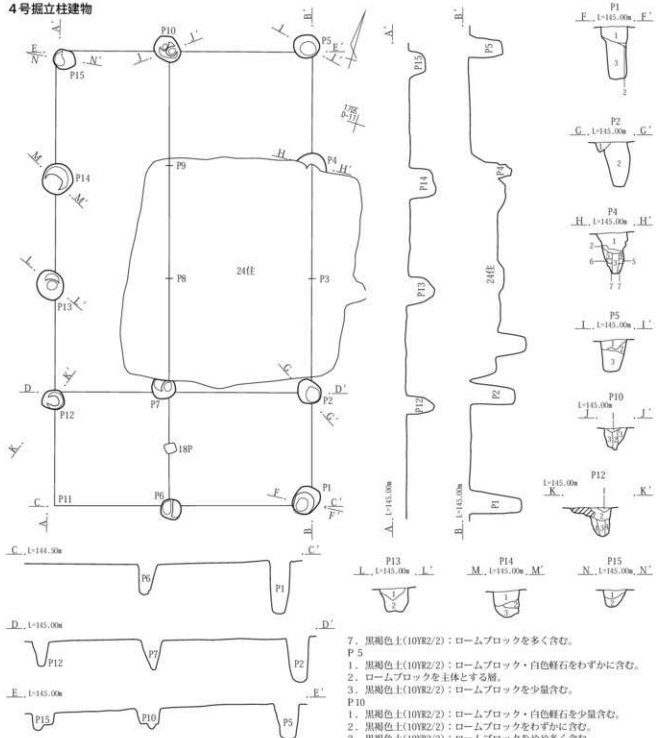
1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・ローム粒をやや多く含む白色軽石をわずかに含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・ローム粒を少量含む白色軽石をわずかに含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・ローム粒を多く含む白色軽石をわずかに含む。

3号掘立柱建物



第157図 3号掘立柱建物平面図・出土遺物

4号掘立柱建物



4号掘立柱建物

P 1

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：ローム粒を多く含む。

P 2

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を多く含みローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 4

1. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石を多く含みロームブロックをわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石をやや多く含みロームブロックをわずかに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石・ロームブロックをわずかに含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックをやや多く含む。
6. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含み白色軽石をわずかに含む。

7. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 5

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・白色軽石をわずかに含む。
2. ロームブロックを主体とする層。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを少量含む。

P 10

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・白色軽石を少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む。

P 12

1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/1)：ローム粒をわずかに含む。(柱底)
4. 黒褐色土(10YR2/1)：ローム粒・ロームブロックを含む。

P 13

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・白色軽石を少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを少量含む。

P 14

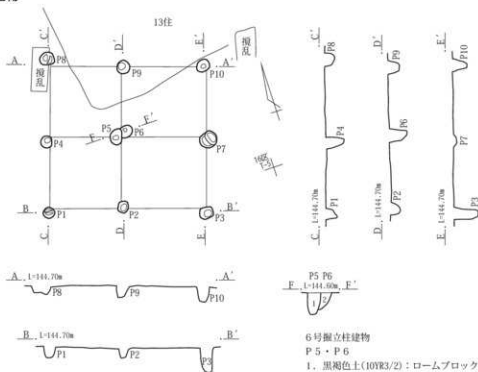
1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含み白色軽石をわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。

P 15

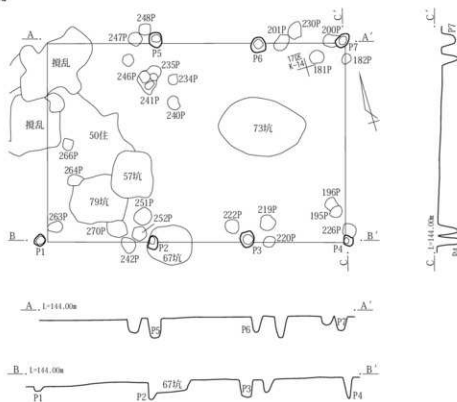
1. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを含む。

0 1:80 2m

6号掘立柱建物



7号掘立柱建物



第159図 6号掘立柱建物平面図、7号掘立柱建物平面図

0 1:80 2m

第4節 竪穴状遺構

「竪穴状遺構」とは、ほぼ正方形の浅い土坑である。平面形状は竪穴住居とよく似ているが、竈や炉、柱穴といった施設がなく、人の居住の痕跡に乏しいために通常の住居とは思えないので、これらを「竪穴状遺構」と名付けて報告することにしたものである。これには2基がある。

1号竪穴状遺構(第160・161図、第52表、P.L. 45・90)

調査区中央やや南西寄りにある。他の遺構との重複はなく単独で存在する。北東隅と東壁際にピットが計3基あるものの、偏った配置から柱穴とは思えず、また、竈や炉などの火を用いる施設もないため、竪穴住居とは思えないので「竪穴状遺構」に分類した。ただし、覆土最下層(5層)の中央付近は床面状に硬化しており、内部で何らかの作業を行った施設であることは確かだと思われる。

平面形は正方形に近い長方形で、主軸方位はN-75°-E、規模は長軸2.80m、短軸2.67m、深さは最も深いところで0.54mである。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は、比較的多い。自然礫とともに遺構の中央から東側にかけて多く出土したが、覆土からのものが多く、特に意味のある出土状態のものはない。掲載したのは、土師器環5点、須恵器環蓋2点、同環身1点、同壺1点、同1点、瓶1点、土師器甕6点、須恵器甕2点、埴塀1点である。その他小破片であるが、土師器甕類304点、同環類152点、同高環11点、同赤色塗彩の高環9点、須恵器甕類11点、同環類2点、同瓶類9点が出土している。

遺物には6世紀前半から7世紀後半のものが混在しているので、礫と共に遺構の中に流れ込んだものであると考えられる。そのため、この遺構の時期は7世紀後半以降と考えられる。

先述のように覆土最下層が硬化しているため、この上面が底面であった時期があったらしい。しかし、その面は水平ではなく、断面図に見えるように、東に向かって徐々に高くなっているため、この点でも通常の住居とは異なっている。硬化面の存在からは、人が頻繁に中に入ったことを想定できるものと思われるが、火の痕跡がない

ので、あるいは納屋的な建物ではないかと考えられる。

2号竪穴状遺構(第162図、第52表、P.L. 45・90)

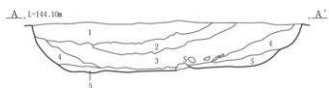
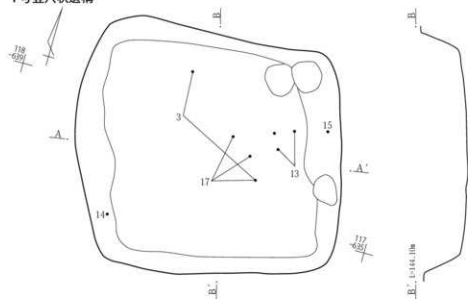
調査区のほぼ中央にあり、やはり他の遺構との重複はなく単独で存在する。竈や炉、柱穴などの施設はなく、底面も硬化していない。覆土にも特徴的なところはなく、遺構の特徴からその性格を考えるのは難しい。

平面形はほぼ正方形で、主軸方位はN-27°-W、規模は長軸2.87m、短軸2.78m、深さは浅く、最も深いところで0.17mである。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は少ない。掲載できた遺物はいずれも遺構の中央やや西寄りから出土しているが、覆土からの出土であり、意味のある出土状態ではない。掲載したのは、土師器環1点、同高環1点、同甕2点である。その他小破片として土師器甕類24点、同高環1点、同赤色塗彩土器(環か)が2点出土している。

遺物からみて6世紀代のもと思われるが、特徴の少ない土坑であるため、性格は不明である。

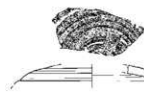
1号竪穴状遺構



1号竪穴状遺構

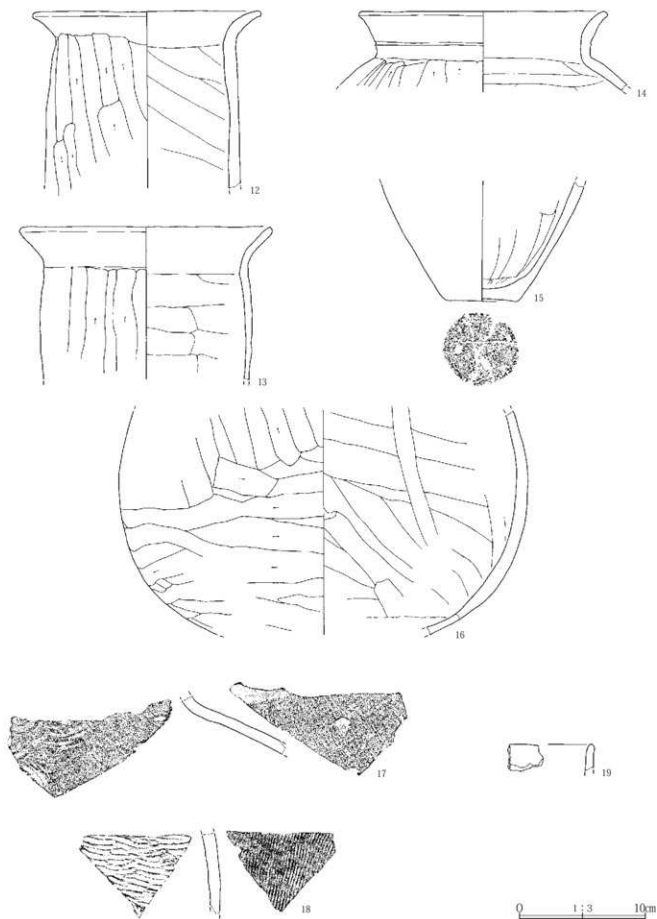
1. 灰黄褐色土(10YR4/2): 軽石・ローム粒を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・ローム粒を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2): ローム粒・ロームブロックを多く含む。
4. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・ローム粒を含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/2): ローム粒・ローム小ブロック・軽石を含む。中央部は固く締まり床面状。

0 1:40 1m



0 1:3 10cm

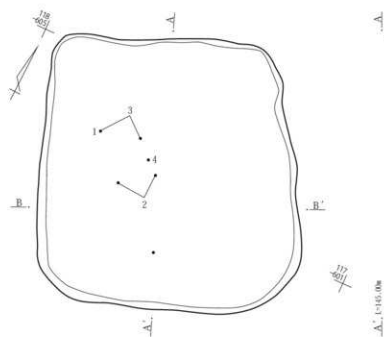
第160図 1号竪穴状遺構横断面図・出土遺物(1)



第161図 1号壺状遺構出土遺物(2)

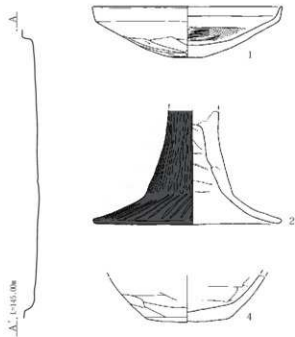
0 1:3 10m

2号竪穴状遺構



2号竪穴状遺構

1. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石を多く含みロームブロックをやや多く含む。
 2. 暗褐色土(10YR3/4)：ロームブロックを多く含み白色軽石を僅かに含む。



第162図 2号竪穴状遺構平面断面図・出土遺物

第5節 土坑

土坑として番号を付して調査したものは95基であるが、そのうち他の遺構に変更になるなどの理由で欠番となったものが6基、墓として次節で取り上げるものが2基あるので、本節で取り上げるのは合計87基である。調査区全体に散在しているが、特に北西部に集中しているのが目立つ。その他の場所でも、単独で存在する場合は少なく、数基の土坑が狭い範囲にかたまる傾向にある。

基本的なデータについては第5・6表にまとめたとおりである。明確な伴出遺物から時期・性格が推定できる土坑は少ないので、以下、注目される土坑について説明を加えることにする。

16号土坑(第164図、第53表、P.L. 47)

馬歯が出土した土坑である。4号粘土採掘坑と重複するが、新旧関係は把握できなかった。東側半分が壊されているので全体の形は不明で、規模は長さ2.10m、幅1.15m以上、深さは0.42mである。掲載できた遺物は土師器杯1点、同環2点であり、その他小破片として土師器甕類68点、同環類29点、赤色塗彩土器1点が出土している。重複関係にある4号粘土採掘坑が7世紀前半代と考えられるが、本土坑の掲載遺物はそれよりもやや古く、6世紀後半と見られるものである。少ない遺物からなので確定的ではないが、本遺構の方が古い可能性がある。馬歯については第4章第4節3を参照。

33号土坑(第166図、P.L. 48)

調査区中央北側にある。34号土坑と重複し、本土坑が新しい。規模は長さ1.07m、幅0.96m、深さ0.24mである。埋土に炭化物・焼土を含み、その点で注意すべき土坑であるが、遺物が全く出土せず、時期・性格とも不明である。

35号土坑(第166図、P.L. 48)

やはり調査区中央北側にあり、33号土坑と同様炭化物・焼土が多く含まれている土坑である。長方形の土坑に小さな張り出し部が付くような形態であり、規模は長さ1.36m、幅0.78m、深さ0.19mである。これも遺物が全く出土せず、時期・性格とも不明である。

40号土坑(第167図、P.L. 51)

調査区東部の第2面から見つかった土坑である。長方形に近い楕円形で、長さ0.87m、幅0.39m、深さ0.17mである。底面に炭化物が堆積し、壁が一部焼土化しているので、内部で火を燃やしたことが分かる土坑であるが、それ以外の遺物や骨などは全く出土せず、性格は不明である。時期も確定できないが、第2面にあることから古墳時代後期のものである可能性が高い。

42号土坑(第167図、第53表、P.L. 51・90)

43号住居の掘方底面で見つかった土坑である。やや不整な楕円形で、長さ0.93m、幅0.77m、深さ0.23mである。7世紀中葉のものと思われる須恵器蓋1点が完形のまますたしている。43号住居は出土遺物があまり多くないが、7世紀前半代の住居と思われるので、この土坑は43号住居に伴う可能性もある。

43号土坑(第167図、第53表、P.L. 48・90)

調査区北西部で、44～46、54号土坑などともに5基の土坑が南北に並んで重複している。本土坑は最も南にあり、44・45・54号土坑よりも新しい。不整な長方形で、長さ1.02m、幅0.72m、深さ0.38mである。これらの土坑からの出土遺物は44号土坑から小破片の土師器・須恵器が出土しているだけで全体に少ないが、本土坑からは銅銭2点(天聖元寶、熙寧元寶)が出土しており、中世の土坑である可能性が高い。銅銭の出土から、墓である可能性も考えられるが、人骨らしいもの出土はなく、土層にもそれらしい特徴はなかった。

52号土坑・81号土坑・85号土坑(第168・173図、P.L. 51・52)

調査区北西部にある。いずれも長細い土坑でよく似ている。規模は52号が長さ3.39m、幅0.60m、深さ0.39m、81号が長さ2.60m、幅0.58m、深さ0.22m、85号が長さ3.38m、幅0.57m、深さ0.18mである。3基の配置は、互いにやや離れているもののクランク状で、走行方位はほぼ直交する方向になっている。この付近には攪乱にもほぼ同じ方向で長細いものがあるので、ここには近現代まで続く、何らかの区画があるのではないかとと思われる。ただしその時期については、52・81号土坑から土器の小

片が出土している以外は出土遺物に乏しく不明である。

65号土坑(第170図、第53表、P.L. 49・90)

調査区の北西部にあり、61・62号土坑と共に3基の土坑が南北に並んで重複している。65号土坑は最も北にあり、61号土坑よりも古い。形態は長方形で、長さ1.02m、幅0.64m、深さは0.45mである。断面図に見えるように、上部を攪乱によって破壊されている。61・62号土坑からは計3点の土師器小破片の他、61号土坑からは石製模造品の玉1点、釘か鎌と考えられる鉄製品が出土している。本土坑からは土器の出土はないが、銅銭2枚(元祐通寶、紹聖元寶)が出土しているため、43号土坑同様、これも墓である可能性が考えられる。しかし、それを示すような痕跡は全く認められなかった。

82号土坑(第73図、第53表、P.L. 52・90)

調査区北西部にあり、10号溝、81号土坑と重複する大きな土坑である。そのいずれよりも本遺構が古い。やや

歪んだ長方形で、規模は長さ2.98m、幅2.56m、深さは最も深いところで1.07mである。銅銭(聖宋通寶)が1点出土している以外遺物の出土はないので、性格は明らかにしがたい。時期は、10号溝から中世遺物(在地系土器の内耳銅で最も新しいものは16世紀前半と考えられる)が出土しており、また、銅銭の出土からも中世のものと思われる。

86号土坑(第174図、第53表、P.L. 52)

調査区南西部の南端付近にある大きな円形の土坑である。丸みを帯びているが、長方形を意識したように見える。規模は長さ2.57m、幅2.24m、深さは最も深いところで0.99mあり、82号土坑よりやや小さい。遺物は非常に少ないが、土師器費2点を掲載した。これらは5世紀代のものと考えられるが、小破片なので、あるいはすぐ西隣にある68号住居の土器が混入した可能性もある。他に小破片として土師器費類11点、同環類4点が出土している。

第5表 土坑一覧表(1)

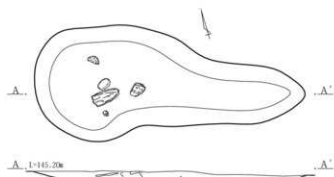
番号	区	グリッド	形状	主軸方位	規模(m)			備考 ○内の遺物数は未掲載の小破片遺物出土数。
					長軸	短軸	深度	
1	6	D-E-20	不整形	N-70°-W	2.86	1.25	0.14	破砕片1点。
2	16	I-4	円形	N-35°-E	0.39	0.38	0.08	
3	16	K-3	楕円形	N-61°-E	0.60	0.45	0.15	
4	16	K-L-4-5	円形	N-62°-W	0.42	0.34	0.13	
5	6	F-14	円形	N-1°-W	0.90	0.86	0.09	
6	6	F-15	不整形	N-34°-W	0.73	0.68	0.12	
7	6	F-15	楕円形	N-29°-E	0.88	0.67	0.10	土師器費1点。
8	6	F-G-15	不整形	N-18°-W	0.82	0.65	0.06	
9	6	G-H-14	円形	N-27°-W	0.70	0.70	0.17	
10	16	N-5	円形	N-43°-W	0.19	0.19	0.11	
11	16	N-5	楕円形	N-33°-E	0.36	0.30	0.25	
12	16	N-5	楕円形	N-45°-E	0.28	0.26	0.20	
13	16	O-4	楕円形	N-30°-E	0.47	0.35	0.20	
14	16	P-3-4	楕円形	N-11°-E	1.28	0.91	0.24	
15	16	O-2	楕円形	N-7°-E	0.33	0.28	0.11	
16	16	Q-R-6-7	楕円形	N-26°-E	2.1	1.15~	0.42	土師器環1点、同環2点。(土師器費類68点、同環類29点、同赤色塗彩土器1点) 3号掘立(P8)に変更。
17	欠番							
18	16	P-1	楕円形	N-1°-E	0.78	0.68	0.15	
19	16	P-1	楕円形	N-22°-W	1.07	1.01	0.32	(土師器費類4点。)
20	17	F-2	楕円形	N-17°-W	0.91	0.88	0.46	
21	17	F-2	楕円形	N-44°-W	0.87	0.69	0.37	(土師器費類13点、同環類10点。)
22	17	E-2-3	楕円形	N-7°-E	0.65	0.57	0.16	
23	17	G-8	楕円形	N-16°-E	1.76	1.69	0.65	1号掘立と重複。新旧不明。土師器環2点。(土師器費類8点、環類4点、赤色塗彩土器3点。)
24	17	E-8	長方形	N-18°-E	0.85	0.49	0.23	16号P11と重複。新旧不明。
25	17	E-9	楕円形	N-55°-W	0.75	0.67	0.25	14号P11より古。
26	17	D-11	楕円形	N-55°-W	0.59	0.56	0.25	
27	17	B-10	楕円形	N-30°-E	0.52	0.42	0.43	4号住居と重複。新旧不明。
28	欠番							9号粘土探掘坑に変更。
29	欠番							1号祭穴遺構に変更。
30	16	R-5-2	不整形	N-12°-W	2.37	1.06	0.90	35号住居より新。
31	6	N-0-17	不整形	N-73°-W	1.13	1.05	0.43	第2前。6号溝より新。
32	欠番							2号祭穴遺構に変更。

第3章 調査の結果

第6表 土坑一覧表(2)

番号	区	グリッド	形状	主軸方位	規模(m)			備考 ()内の遺物数は未発掘の小破片遺物出土数。
					長軸	短軸	深度	
33	16	S・T-8	楕円形	N-46°-W	1.07	0.96	0.24	34号土坑より新。99Pitとは新旧不明。
34	16	S・T-8	長方形	N-81°-W	1.21	0.65	0.38	33号土坑より古。
35	16	S-8	長方形	N-11°-E	1.36	0.78	0.19	100号Pitと重複。新旧不明。
36	16	S-8	長方形	N-11°-E	2.18	0.79	0.27	
37	6	K-18	楕円形	N-34°-E	0.98	0.86	0.73	第2面。
38	6	K-20	不整形	N-29°-W	1.36	1.04	0.23	第2面。
39	6	K-19	長方形	N-22°-W	1.65	0.95	0.45	第2面。
40	6	M-17	楕円形	N-88°-W	0.87	0.39	0.17	第2面。
41	17	F-12	長方形	N-14°-W	1.71	1.27	0.61	26号住居より新。
42	17	H-9・10	楕円形	N-50°-W	0.93	0.77	0.23	43号住居と重複。新旧不明。(土師器類1点、銅環類1点。)
43	17	J-13	長方形	N-19°-E	1.02	0.72	0.38	44号土坑より新。銅銭2枚。
44	17	J-13	長方形	N-87°-W	1.51	0.91	0.23	43号土坑より古。45号土坑より新。(土師器類2点、赤色塗器1点、須恵器類3点。)
45	17	J-13	長方形	N-78°-W	1.83	0.92	0.56	44・46号土坑より古。54号土坑より新。
46	17	J-13	不整形	N-21°-E	0.62	0.42	0.26	45・54号土坑より新。
47	17	I-12・13	長方形	N-52°-W	1.39	1.07	0.65	(土師器類1点。)
48	17	L-14・15	楕円形	N-23°-E	1.18	0.99	0.51	77・80号土坑より新。
49	17	L-15	長方形	N-16°-E	1.25	1.10	0.44	69・70号土坑より新。(土師器類2点。)
50	17	K-14	長方形	N-85°-W	1.04	0.86	0.49	(土師器類1点。)
51	17	J-14	長方形	N-25°-E	1.11	0.89	0.39	
52	17	J-12・13	長方形	N-22°-E	3.39	0.60	0.39	53号土坑と重複。新旧不明。(土師器類1点、須恵器類1点。)
53	17	J-13	長方形	N-9°-E	1.34	0.98	0.41	7号溝より新。52号土坑とは新旧不明。(土師器類1点、須恵器類3点。)
54	17	J-14	不整形	N-11°-W	0.90	0.82	0.41	45・46号土坑より古。
55	17	L-13	長方形	N-22°-E	1.23	0.89	0.41	56号土坑より新。
56	17	L-13	楕円形	N-23°-E	0.99	0.98	0.47	55号土坑より古。218Pitとは新旧不明。球形埴輪1点。
57	17	K-13	長方形	N-24°-E	0.98	0.88	0.32	50号住居・79号土坑より新。(土師器類1点。)
58	17	K-14・15	不整形	N-77°-W	1.11	0.54	0.24	
59	17	J-14	不整形	N-57°-W	1.20	0.73	0.36	60号土坑より新。
60	17	J-14	不整形	N-57°-W	0.82	0.71	0.26	59号土坑より古。
61	17	I-1・12	不整形	N-34°-E	1.26	0.84	0.41	62・65号土坑より新。右製模造品玉1点。鉄製品(釘か鍔)1点。(土師器類1点、銅環類1点。)
62	17	I-1・12	不整形	N-67°-W	0.62	0.32	0.15	61号土坑より古。(土師器類1点。)
63	17	I-12	不整形	N-71°-W	1.58	1.31	0.48	8・11溝より新。90号土坑とは新旧不明。
64	17	L-15	長方形	N-64°-W	1.69	1.44	0.46	70号土坑より新。
65	17	I-1・12	長方形	N-8°-E	1.02	0.64	0.45	61号土坑より古。銅銭2枚。
66	17	I-11・12	長方形	N-6°-W	1.05	0.78	0.40	8号溝より新。(土師器類1点、須恵器類1点。)
67	17	K-13	楕円形	N-64°-W	0.94	0.85	0.28	250号Pitより古。
68	17	J-12	長方形	N-38°-E	1.00	0.59	0.29	人骨出土。48号住居より新。銅銭5枚。(第6節参照)
69	17	L-15	不整形	N-54°-E	0.71	0.29	0.35	49号土坑より古。70号土坑より新。
70	17	L-15	楕円形	N-28°-E	1.36	1.14	0.61	49・69号土坑より古。72号土坑より新。
71	17	L-14	不整形	N-68°-W	1.31	0.41	0.31	72号土坑より新。
72	17	K・L-14・15	長方形	N-74°-W	1.85	1.16	0.57	70・71号土坑より古。205Pitより新。
73	17	K-13	長方形	N-47°-W	1.62	1.23	1.64	
74	17	L-11・12	不整形	N-25°-E	2.54	1.19	0.15	11号溝と新旧不明。
75	17	K・L-15	不整形	N-56°-W	0.95	0.83	0.57	76号土坑より新。
76	17	K-15	楕円形	N-62°-W	1.14	0.96	0.61	75号土坑より古。
77	17	L-14・15	長方形	N-22°-E	1.74	1.03	0.51	48・80号土坑より新。
78	17	K-11・12	正方形	N-23°-E	2.36	2.16	0.66	49号住居より新。91号土坑とは新旧不明。須恵器類1点。(土師器類3点、銅環類1点、須恵器類1点。)
79	17	K・L-13	不整形	N-69°-W	1.19	0.99	0.41	50号住居より新。57号土坑より古。264・270Pitとは新旧不明。
80	17	L-14	不整形	N-72°-W	1.03	0.92	0.24	48号土坑より古。77号土坑より新。
81	17	M-11・12	長方形	N-62°-W	2.60	0.58	0.22	10号溝。82号土坑より新。(土師器類1点、銅環類4点。)
82	17	M-12	楕円形	N-33°-E	2.98	2.56	1.07	10号溝・81号土坑より古。銅銭1枚。(土師器類1点。)
83	17	L-11	不整形	N-80°-W	1.06	0.86	0.24	
84	17	J・K-9	不整形	N-24°-W	0.96	0.94	0.80	人骨出土。52号住居より新。(土師器類1点)(第6節参照)
85	17	M・N-11	長方形	N-23°-E	3.38	0.57	0.18	
86	17	K・L-4	楕円形	N-50°-W	2.57	2.24	0.99	土師器類2点。(土師器類11点、銅環類4点。)
87	17	L-8	楕円形	N-47°-E	0.67	0.47	0.28	60号住居より新。
88	17	L-7	不整形	N-2°-W	1.28	0.99	0.71	
89	17	G-12	楕円形	N-11°-W	2.14	1.01	0.61	26号住居より新。
90	17	I-12	不整形	N-61°-E	0.96	0.54	0.25	11号溝より新。63号土坑とは新旧不明。
91	17	K-12	不整形	N-14°-W	2.51	2.22	0.48	49号より新。7溝より古。78坑とは新旧不明。
92	17	J・K-11・12	長方形	N-22°-W	3.91	0.69	0.07	49号住居・8号溝より新。
93		欠番						
94		欠番						
95	17	M・N-6・7	不整形		1.92	1.50	0.19	65号住居より新。7号溝とは新旧不明。

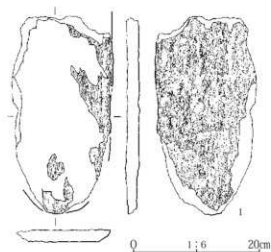
1号土坑



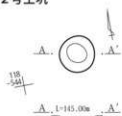
1号土坑

1. 薄黑灰褐色。

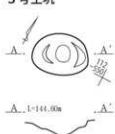
1号土坑出土遺物



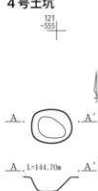
2号土坑



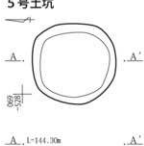
3号土坑



4号土坑



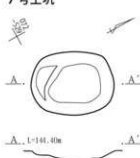
5号土坑



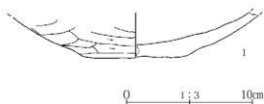
6号土坑



7号土坑



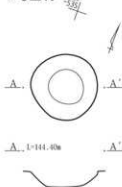
7号土坑出土遺物



8号土坑



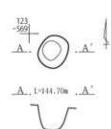
9号土坑



10号土坑



11号土坑



第163图 1~11号土坑平面图、1·7号土坑出土遺物

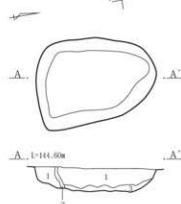
12号土坑



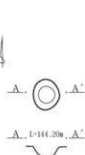
13号土坑



14号土坑



15号土坑



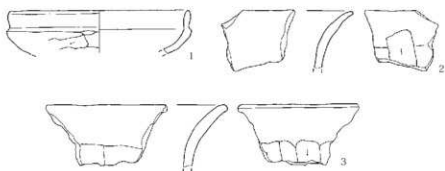
16号土坑



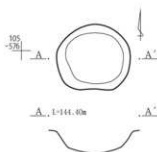
14号土坑

1. 砂質シルト・暗褐色・灰褐色土ブロックを含む。
2. シルト・灰褐色・暗褐色土混じり。
3. 砂質シルト・暗褐色。

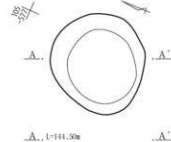
16号土坑出土遺物



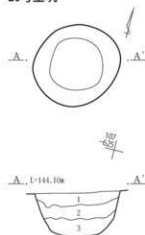
18号土坑



19号土坑



20号土坑



19号土坑

1. 赤茶褐色土。C軽石やや多く混じる。
2. 黒色土。褐色土ブロック混入。

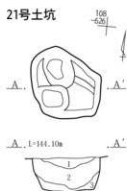
20号土坑

1. 褐色土(10YR4/4)；軽石を含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)；軽石を含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)；軽石少なくローム粒を含む。



第164図 12～16・18～20号土坑断面図、16号土坑出土遺物

21号土坑



21号土坑

1. 灰色砂(10Y5/1): $\phi 3 \sim 5$ cmの礫を含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3): わずかな軽石を含む。
3. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4): ロームの崩壊上。

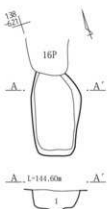
22号土坑



22号土坑

1. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を含む。

24号土坑



24号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石・ロームブロックを含む。

23号土坑



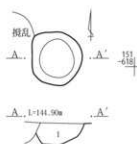
A., L-144.60m



23号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石をやや多く含む。ロームブロックをわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックを少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石・ロームブロックをわずかに含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックを多く含む。
5. ロームの崩壊上。黒褐色土ブロックを含む。

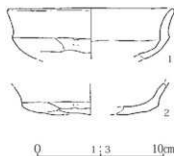
26号土坑



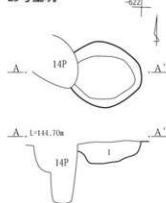
26号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/3): ロームブロック・ローム粒を含む。

23号土坑出土遺物



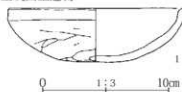
25号土坑



25号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2): 白色軽石をやや多く含む。ロームブロックを少量含む。

25号土坑出土遺物



27号土坑



27号土坑

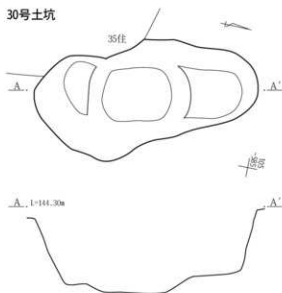
1. 黒褐色土(10YR2/3): 白色軽石をやや多く含む。ロームブロックを少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3): ロームブロックを含む。



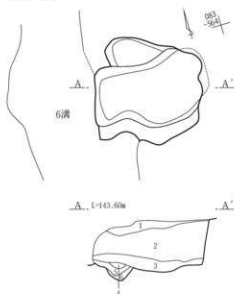
第165図 21～27号土坑平面図、23・25号土坑出土遺物

第3章 調査の成果

30号土坑



31号土坑



31号土坑

1. 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。
2. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：軽石を多く含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石・砂粒・暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)を含む。
4. 黄灰色土(2.5Y5/1)・灰黄色シルト(2.5Y6/2)砂粒を含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：シルト分多く、やや粘質。
6. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：地山崩落土。

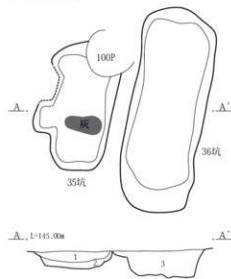
33・34号土坑



33・34号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。白色軽石・炭化物を少量含む。(33号土坑)
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・焼上ブロック・炭化物を多く含む。白色軽石を少量含む。(33号土坑)
3. 暗褐色土(10YR3/4)：ロームブロックをやや多く含む。白色軽石をわずかに含む。(34号土坑)

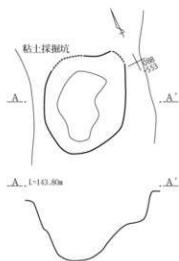
35・36号土坑



35・36号土坑

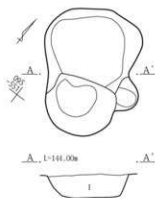
1. 暗褐色土(10YR3/3)：炭化物を多く含む。ロームブロック・焼上ブロック・白色軽石をやや多く含む。(35号土坑)
2. 黄褐色土(10YR5/6)：ロームを主体とし、炭化物を非常に多く含む。焼上ブロックをやや多く含む。白色軽石・暗褐色土上ブロックを少量含む。(35号土坑)
3. 黒褐色土(10YR2/3)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。(36号土坑)

37号土坑



0 1:40 1m

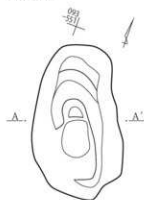
38号土坑



38号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石・砂粒を含む。やや粘性あり。

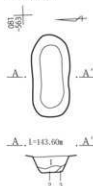
39号土坑



39号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/1): 軽石・砂粒を含む。
 2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 黒褐色土・砂粒を含む。
 3. 灰白色シルトブロック(2.5Y8/2)主体の層。暗灰黄色土を含む。

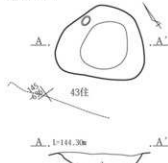
40号土坑



40号土坑

1. 褐灰色土(10YR4/1): 軽石を多く含む。砂粒・炭化物を含む。
 2. 炭化物の層。炭の単位がはっきりしない。かなりバラバラになっているらしい。
 3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 焼土・軽石を含む。

42号土坑



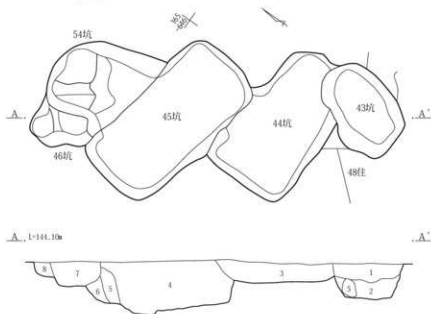
42号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。

42号土坑出土遺物



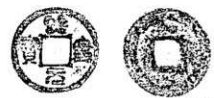
43~46・54号土坑



43号土坑出土遺物



1 (1/1)



2 (1/1)



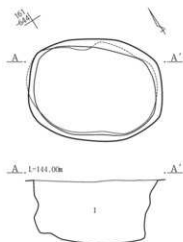
43・44・45・46・54号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを多く含む。白色軽石をわずかに含む。(43号土坑)
 2. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを少量含む。(43号土坑)
 3. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックをやや多く含む(44号土坑)
 4. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを少量含む。(45号土坑)
 5. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックをやや多く含む(45号土坑)
 6. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックを少量含む。(54号土坑)
 7. 黒褐色土(10YR2/2): ローム粒をやや多く含む。焼上粒をわずかに含む。(46号土坑)
 8. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを多く含む。(46号土坑)



第167図 38~40・42~46・54号土坑平面断面図、42・43号土坑出土遺物

47号土坑



47号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石(As-YPか)をやや多く含む。

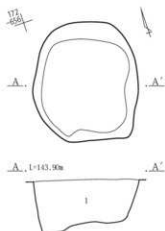
48号土坑



48号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)：ロームブロックを非常に多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石をやや多く含む。

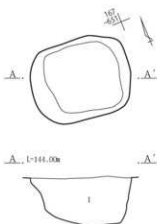
49号土坑



49号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)：ロームブロックを非常に多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石をやや多く含む。

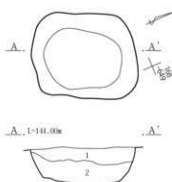
50号土坑



50号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを非常に多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石をやや多く含む。炭化物をわずかに含む。

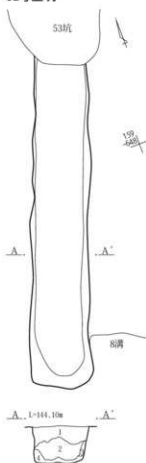
51号土坑



51号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックをやや多く含む。白色軽石・黄褐色軽石を少量含む。
2. 褐色土(10YR4/4)：ロームブロックを非常に多く含む。白色軽石・黄褐色軽石をやや多く含む。

52号土坑



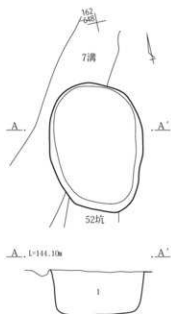
52号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石を少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを少量含む。
3. 明黄褐色土(10YR6/6)：ローム土を主体とし黒褐色土ブロックを少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む。

0 1:40 1m

第168図 47～52号土坑平面断面図

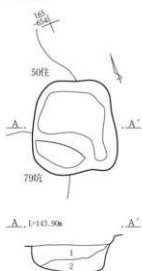
53号土坑



53号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックをやや多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石・炭化物粒を少量含む

57号土坑

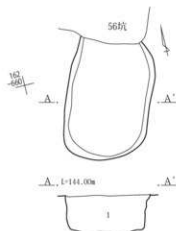


57号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを多く含む。軽石(As-SP)を少量含む。炭化物粒を僅かに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを非常に多く含む。軽石(As-SP)を僅かに含む。



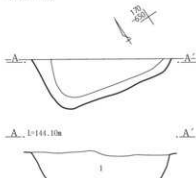
55号土坑



55号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4): ロームブロックを非常に多く含む。軽石(As-SP)と似る)を少量含む。

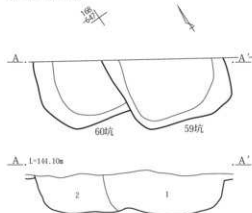
58号土坑



58号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4): ロームブロックを多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石を少量含む。

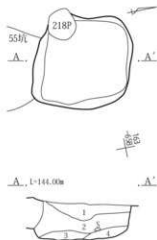
59・60号土坑



59・60号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4): ロームブロックを多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石を少量含む。(59号土坑)
2. 1層に同じ。(ロームブロックが1層に比べ小さい)(60号土坑)

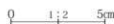
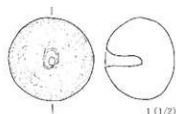
56号土坑



56号土坑

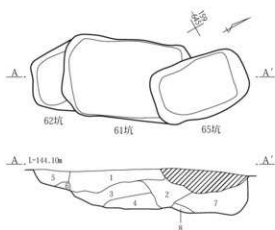
1. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを多く含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4): ロームブロックを非常に多く含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4): ロームブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを少量含む。

56号土坑出土遺物



第169図 53・55～60号土坑平面図、56号土坑出土遺物

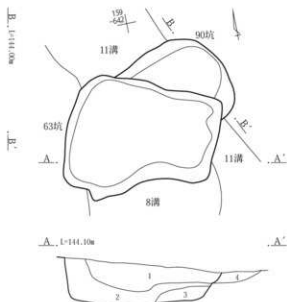
61・62・65号土坑



61・62・65号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む。(61号土坑)
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを非常に多く含む。黒褐色土ブロックを少量含む。(61号土坑)
3. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを非常に多く含む。(2層に比べブロックが大きい)。(61号土坑)
4. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。(61号土坑)
5. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。炭化物粒をわずかに含む。(62号土坑)
6. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを少量含む。(62号土坑)
7. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。(65号土坑)
8. 黄褐色土(10YR5/8)：ロームを主体とし暗褐色土ブロックを少量含む。(65号土坑)

63・90号土坑



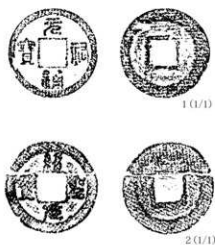
63号土坑

1. 褐灰色土(10YR4/1)：ローム粒・軽石を含む。(11号溝)
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)：ロームブロックを多く含む。(63号土坑)
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3)：混じりけ少ない。地山崩落土(63号土坑)
4. 黒褐色土(10YR3/1)：ローム粒を含む。(11号溝)

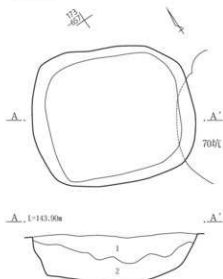
61号土坑出土遺物



65号土坑出土遺物

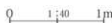


64号土坑



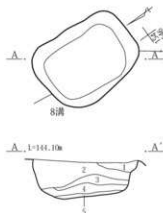
64号土坑

1. ローム土・ロームブロック・褐灰色土の混合。
2. ローム土・ロームブロック・灰白色シルトの混合。



第170図 61・65・90号土坑断面図、61・65号土坑出土遺物

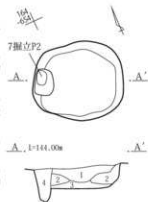
66号土坑



66号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックをわずかに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックをやや多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを非常に多く含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックを少量含む。炭化物粒をわずかに含む。

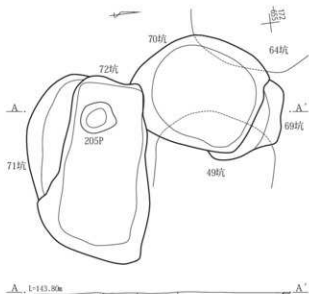
67号土坑



67号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを少量含む。炭化物粒をわずかに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックをやや多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3): ローム粒を多く含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを非常に多く含む。白色軽石・炭化物粒をわずかに含む。(7層立P2)

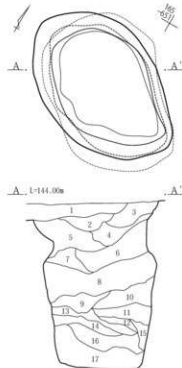
69~72号土坑



69・70・71・72号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3): ロームブロックをやや多く含む。炭化物をわずかに含む。(69号土坑)
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3): ロームブロックを多く含む。(70号土坑)
3. 褐色土(10YR4/4): ロームブロックを多く含む。炭化物を少量含む。(71号土坑)
4. 褐色土(10YR4/4): ロームブロックを多く含む。灰白色シルトブロックを少量含む。(72号土坑)
5. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを少量含む。灰白色シルトブロックを多く含む。(205号P1)

73号土坑



73号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックをやや多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石を少量含む。炭化物をわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロック白色軽石を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2): 最大φ10cmのロームブロックを多く含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックを少量含む。白色軽石をわずかに含む。
5. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロックを非常に多く含む。
6. 黒褐色土(10YR2/2): ロームブロックをやや多く含む。

7. 黒色土(10YR2/1): ロームブロックを少量含む。
8. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロック・灰白色シルトブロックをやや多く含む粘性がある。
9. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロックを多く含む粘性を少量含む。
10. 黄褐色土(10YR5/8): ロームを主体とし黒褐色土ブロックを少量含む粘性がある。
11. ロームと灰白色シルトの混混土。粘性がある。
12. 灰白色シルト層。固く締まっている。
13. 黄褐色土(10YR5/8): ロームを主体とし灰白色シルトブロックをやや多く含む。粘性がある。
14. 灰白色シルト層。ロームブロックを少量含む粘性がある。
15. にぶい黄褐色シルト(10YR5/3): 灰白色シルトが変化したものか。
16. 灰白色シルト層。ロームブロックをわずかに含む。
17. 灰白色シルト層。ロームブロックをやや多く含む粘性がある。

0 1:40 1m

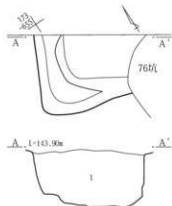
第171図 66・67・69～73号土坑断面図

第3章 調査の成果

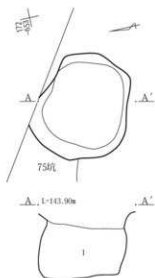
74号土坑



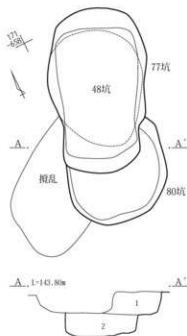
75号土坑



76号土坑



77・80号土坑



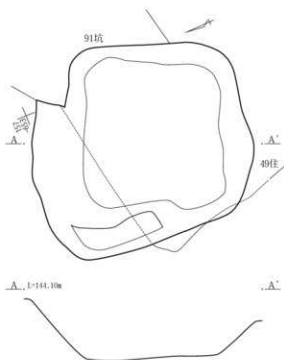
75号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石・炭化物粒を少量含む。

76号土坑

1. 褐色土(10YR4/4)：ロームブロックを非常に多く含む。灰白色シルトブロックをやや多く含む。白色軽石・明黄褐色軽石・炭化物粒をわずかに含む。

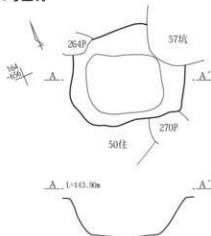
78号土坑



77・80号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを少量含む。白色軽石をわずかに含む。(80号土坑)
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・灰白色シルトブロックをやや多く含む。白色軽石・炭化物粒をわずかに含む。(77号土坑)

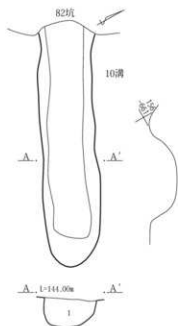
79号土坑



第172図 74～80号土坑平面図、78号土坑出土遺物



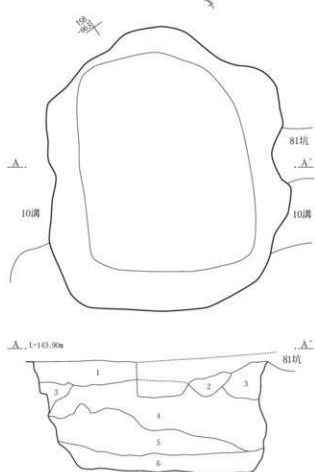
81号土坑



81号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ロームブロックを多く含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石・ローム粒を含む。浅い凹み。

82号土坑

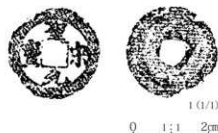


A. 1-10.90m

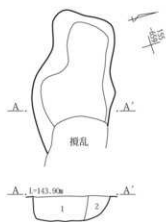
82号土坑

1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を含む。
2. ロームブロック。
3. 地山ロームの崩れた上。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・ロームブロックを含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ロームブロックを多く含む。
6. ロームの崩れた上。暗灰黄色土・小礫(φ1~2cm)を含む。

82号土坑出土遺物



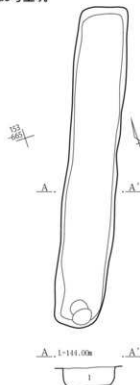
83号土坑



83号土坑

1. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ローム粒をやや多く含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を多く含む。

85号土坑



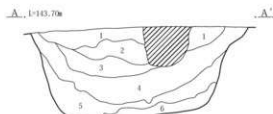
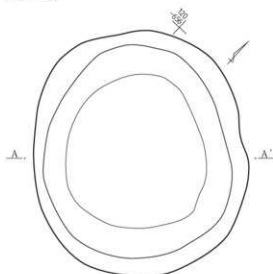
85号土坑

1. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ローム粒をやや多く含む。

第173図 81～83・85号土坑平面図、82号土坑出土遺物



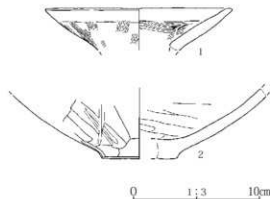
86号土坑



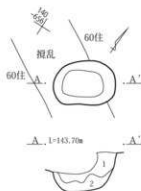
86号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)：白色軽石・ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
5. 黒色土(10YR2/1)：白色軽石・ロームブロックを少量含む。
6. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックを非常に多く含む。

86号土坑出土遺物



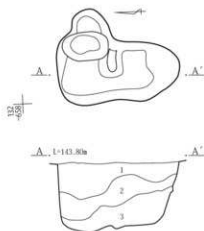
87号土坑



87号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・炭化物粒を少量含む。焼土粒・明黄褐色軽石(As-YP)をわずかに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロック・明黄褐色軽石(As-YP)をやや多く含む。

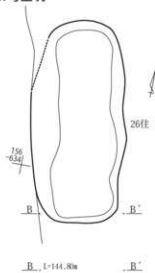
88号土坑



88号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロック・白色軽石をやや多く含む。
2. 黒色土(10YR2/1)：ロームブロックを少量含む。
3. 明黄褐色土(10YR7/6)：ロームを主体とし黒色土ブロックをやや多く含む。

89号土坑



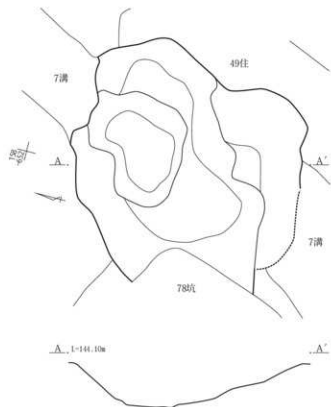
89号土坑

1. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石・砂粒を含む。固く締まっている。

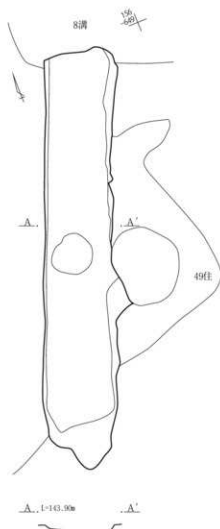


第174図 86～89号土坑平面断面図、86号土坑出土遺物

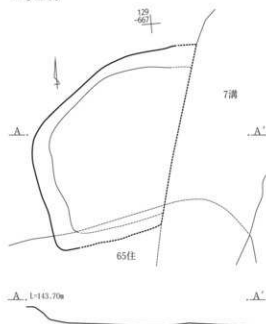
91号土坑



92号土坑



95号土坑



0 1:40 1m

第175图 91・92・95号土坑平面圖

第6節 墓

墓と思われる土坑は、68号と84号の2基である。いずれも人骨の出土から墓と判断したが、骨の遺存状態は不良であるため、骨が完全に消滅してしまった墓が他にもあった可能性は否定できない。出土した人骨・歯については第4章第4節2で報告する。

68号土坑(第176図、第53・54表、P L. 52・91)

調査区北西部にある。48号住居と重複するが、本遺構が新しいことを平面観察から確認した。平面形は卵形で、埋土下部から大腿骨が1本のみ出土した。

主軸方位はN-38°-Eであり、長さ1.04m、幅0.68m、深さは最も深いところで0.34mである。

遺物は銅銭5点(永楽通寶1点、洪武通寶2点、祥符元寶1点、景德元寶1点)が出土している。土器などは出土していない。1411年初鑄の永楽銭が出土していることから、この墓の時期はそれ以後の15世紀～16世紀のものと考えられる。

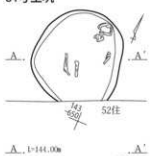
68号土坑



68号土坑出土遺物



84号土坑



84号土坑

1. 褐灰色土(10YR4/1)；軽石・ローム粒を含む。
 焼土・炭化物をこく堆か含む。



第176図 68・84号土坑平面図、68号土坑出土遺物

この遺構の北側は6mほどで調査区外となるが、その北側隣接地には現在でも墓地があるので、関連も考えられる。

84号土坑(第176図、P L. 52)

調査区西部にある。52号住居と重複する。重複するのはわずかな部分であるため、直接の新旧関係は確認できなかったが、人骨の状態などから、本遺構が新しいものと考えられる。やや楕円に近い円形で、主軸方位はN-24°-E、長軸は0.96m以上、短軸は0.94mである。表面が削平され浅くなっており、最も深いところで0.11mである。内部に人骨が散在していたが、削平のため頭蓋骨の上半分は破壊されていた。人骨の残りはよくないが、歯は良好に残っていた。

周辺に同規模の土坑は見当たらないので、墓は単独で作られた可能性があるが、この付近は削平が著しいので、他の墓は既に消滅してしまった可能性もある。

出土遺物は土師器類の小破片が1点出土しているのみである。そのため、時期は確定できないが、人骨の状況からは中世に属する可能性が高い。

第7節 井戸

井戸は合計6基である。いずれも素掘りの井戸であり、直径は比較的細い。この付近は地下水位が高いためか、深さはあまりない。しかし、底面まで作業員が掘るのは危険であると判断したために、底面までは掘れなかったものがある。

1号井戸(第177図、第54表、P.L. 53・91)

調査区中央やや北側、6号住居に重なった位置にある。本井戸が新しいことは平面観察で確認した。外形はやや楕円形で、住居床面で計測して、長軸0.90m、短軸0.76m、深さ1.99mである。付近の地山には多くの礫が含まれているようで、壁面には礫が多く現れている。埋土上部にも多くの礫が含まれていて、埋める際に意図的に投げ込まれたものと考えられる。地下水は、現状では底面からしみ出て溜まる程度であった。

出土遺物は少ない。掲載したのは土師器甕1点(1)と在地系土器の片口鉢1点(2)である。

2は14世紀中頃のものと思われる(星野守弘「軟質陶器」『新編高崎市史 資料編3 中世1』高崎市1996)による)ので、その存在からこの井戸は中世のものであると思われる。その他小破片として土師器甕類(2点)が出土している。

2号井戸(第178図、第54表、P.L. 53)

調査区中央にある。他の遺構と重複せず、単独で存在する。直径0.87～0.89mのほぼ円形で、深さは1.93mである。ほぼ垂直にまっすぐ掘られている。1号井戸同様、付近の地山には多くの礫が含まれているようで、断面や底面にはその礫が現れている。地下水は現状ではほとんど湧き出てこなかった。

出土遺物は少ない。掲載したのは土師器環1点のみである。その他、小破片として土師器甕類2点が出土しているにすぎない。

遺物の出土が少ないので詳細な時期は不明であるが、1・5号井戸から中世の遺物が出土し、井戸の形態がよく似ていることから、ほぼ同時期、つまり中世のもの

考えられる。

3号井戸(第178図、第54表、P.L. 53・91)

調査区西部にあり、51、52号住居と重複する。本井戸が新しい。住居床面で計測して、直径0.86～0.90mのほぼ円形で、深さは2.08mである。ほぼ垂直にまっすぐ掘られている。1・2号井戸とは異なり、壁面や底面にほとんど礫がみられない。地下水は、現状では底面からしみ出して溜まる程度であった。

出土遺物は少なく、掲載したのは土師器環2点のみである。その他、小破片として土師器甕類8点、同環類4点、須恵器甕類1点、同環類1点が出土している。この井戸の時期も、2号井戸と同じ理由で中世と考えられる。

4号井戸(第178図、P.L. 53)

調査区南西部にあり、64、67号住居、7号溝と重複する。それらのいずれよりも本井戸が新しい。住居の床面で計測して直径0.87mのほぼ円形で、深さは遺構確認面から1.88mまで掘り下げたが、危険なためにそれ以下に掘り下げるのは断念した。ただし、さらに0.73m下がることはピンボールを差し込んで確認している。ほぼ垂直にまっすぐ掘られている。1・2号井戸とは異なり、壁面・底面に礫がほとんど見られない。底面まで掘れなかったので地下水の状態は不明である。

出土遺物はないが、2、3号井戸と同じ理由で、中世である可能性が強い。

5号井戸(第178図、第54表、P.L. 53・91)

調査区西部の中央付近にあり、54号住居と重複する。本井戸が新しい。住居の底面で計測して直径1.12～1.22mのほぼ円形で、本遺跡の井戸の中では比較的太い。深さは1.33mまで掘り下げたが、さらに0.55m下がることは確認した。垂直に掘っているが、壁には比較的凹凸がある。1・2号井戸とは異なり、壁面・底面に礫がほとんど見られない。底面まで掘れなかったので、地下水の状況は不明である。

出土遺物は少ない。掲載したのは土師器環1点(1)と在地系の内耳鍋1点(2)である。2は14世紀後半から15世紀初頭のものであり(秋本太郎「上野と周辺地域との関係 - 在地土器の分布論を中心に - 」『海なき国々

第3章 調査の成果

のモノとヒトの動き- 16～17世紀における内陸部の流通-』内陸遺跡研究会 2005による)、その存在からこの井戸は中世のものである。その他、小破片として土師器裏類3点、同坏類1点が出土している。

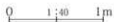
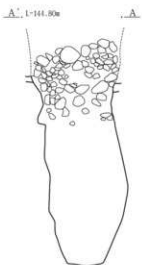
6号井戸(第178図、P.L. 53)

調査区南西隅付近にある。他の遺構との切り合いはなく単独で存在する。直径0.86～0.89mのほぼ円形で、

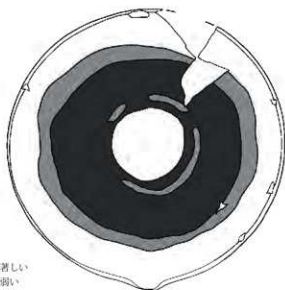
深さは1.40mと浅い。ほぼ垂直にまっすぐ掘られている。底面のレベルが浅いためか、現状では地下水はほとんど湧き出てこなかった。

出土遺物は非常に少なく、掲載遺物はない。その他に土師器裏類の小破片が1点出土しているにすぎない。時期は、2・3・4号井戸と同様な理由で、中世と思われる。

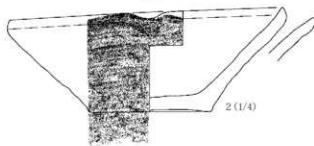
1号井戸



1号井戸出土遺物

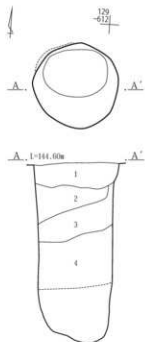


使用痕
トーン濃・摩滅著しい
トーン薄・摩滅弱い



第177図 1号井戸断面図・出土遺物

2号井戸



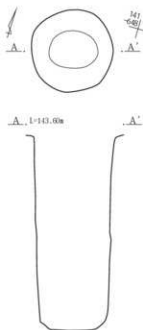
2号井戸出土遺物



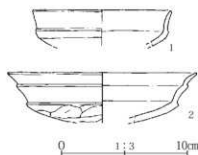
2号井戸

1. 黒褐色土(2.5V3/2)：ローム粒を稀らに含む。
2. 黒褐色土と浅黄色シルトブロック(2.5V7/4)ロームブロックの混合。
3. 黒褐色土(2.5V3/2)：ロームブロックを含む。
4. 黄灰色土(2.5V4/1)：ローム小ブロック・礫(φ5～10cm)を多く含む締まりやや弱い。

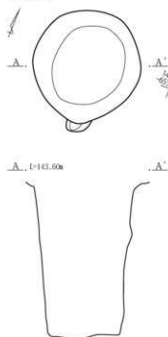
3号井戸



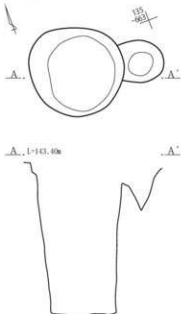
3号井戸出土遺物



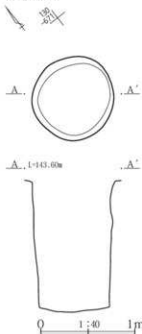
5号井戸



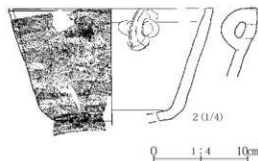
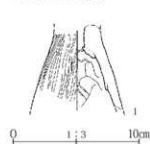
4号井戸



6号井戸



5号井戸出土遺物



第178図 2～6号井戸断面図、2・3・5号井戸出土遺物

第8節 溝

溝は合計11条あり、散在している印象は否めない。北東部に1～3号が、西半部の遺構が集中する範囲に4号が、東半部やや中央よりの第2面から5、6号溝が見つかったりしているほか、西端部付近で7～11号溝が見つかったりしている。

1号溝(第179図、P.L. 7)

調査区の北東部にある。他の遺構との切り合いはない。走行方向は $N-51^{\circ}-W$ でほぼ直線的に延び、北西端でわずかに西に曲がっている。両端が途切れており、長さは17.95m、幅は0.22～0.72mで、深さはきわめて浅く、最も深いところで0.08mである。北西から南西に向かって低くなっており、両端の底面の比高差は0.14mである。出土遺物はないため、時期は確定できず、性格も不明である。

2号溝(第179図、P.L. 7)

調査区の北東部にある。他の遺構との切り合いはない。走行方向は $N-18^{\circ}-E$ であり、北端が東に25°折れ曲がる。両端は途切れ、南端は徐々に不明瞭となる。長さは14.55m、幅は0.48～1.22mであり、深さはピット状になっている部分を除いて最も深いところで0.36mである。断面は皿状であるが、中央部に細く深くなった部分があり、その部分に砂が堆積しているので水流があったものと思われる。北から南に向かって下がり、北端と南端との底面の比高差は0.31mもあるので、やや強い水流が底部を細く削り取ったのであろう。

出土遺物は小破片ばかりで掲載できるものではなく、時期は明らかではない。出土した小破片は土師器斐類21点、同環類25点、坏の高台部分1点、須恵器斐類1点、同環類1点である。

やや傾斜の強い溝であり、水流があったものと思われるが、両端が途切れているため、どのような用途のものかは明らかにしがたい。

3号溝(第181図、第54表、P.L. 7・91)

調査区北東隅近くにある。北端部を調査の際に削平し

てしまったが、そのまま延びていれば1号住居と重複していたと思われる。南端は徐々に不明瞭になっている。南半部は直線的で、走行方向は $N-30^{\circ}-W$ であるが、北半部で東側に大きく湾曲する。長さは南端から北端まで直線で12.90m、幅は0.44～0.80m、深さは最も深いところで0.30mであり、断面は逆台形である。

埋土は軽石を含み、少量の鉄分を含むが、水が流れていたかは明らかではない。北から南に向かって下がっており、北端と南端との底面の比高差は0.42mである。

遺物は南端部で1の土師器斐が出土した。胴部下半部の破片などで詳細な時期は不明だが、7世紀～8世紀前半代のものと思われ、本溝の時期の一端を示すものと思われる。その他、小破片として土師器斐類3点、同環類3点が出土した。溝の性格は不明である。

4号溝(第180図、第54表、P.L. 7)

調査区のほぼ中央にあり、調査区の南外側から北東部へとほぼ直線的に延びる溝で、北側は徐々に浅くなって途切れてしまう。南端で39号住居、中央で21号住居と重複するが、いずれの住居でもセクション図でその存在を確認できなかったため、本溝が古いと思われる。

走行方向は $N-22^{\circ}-E$ で、わずかに蛇行するだけでほぼ直線的に延びている。長さは北端部の分離した部分も含めて23.36mであり、南端はさらに調査区外へ延びている。幅は0.18～0.67m、深さは最も深いところで0.25mである。断面は逆台形あるいは椀形であり、明瞭な形状の溝である。埋土の中層には砂を多く含む部分があり、水が流れていたものと思われる。傾斜は北から南に向かって下がっており、北端と南端の底面の比高差は0.48mである。

出土遺物はやや多く、掲載したのは土師器環3点、須恵器環蓋2点、同費1点である。小破片として土師器斐類189点、同環類46点、須恵器斐類13点、同環類1点、同蓋1点も出土している。21号住居(7世紀後半)、39号住居(6世紀後半)より古いことから、6世紀代のものであると言える。その他、打製石斧も出土しているが、それは第12節(第208図48)で取り上げている。

北端が途切れてしまうものの、水が流れていたと考えられるので、何らかの用排水路であったと思われる。

5号溝(第181～183図、第54・55表、P.L. 7・91)

第2面にある溝であり、西端は3号住居と、東端は6号溝と重複する。3号住居とは、住居のセクションにこの溝が現れないため、本溝が古いと考えられる。6号溝とは同時存在であることを断面で確認した。走行方向はN-85°-Eであり、わずかに蛇行する。底部は凹凸が激しく、長方形の土坑がいくつも接続したような形態である。3号住居に接続する部分は広がっているが、この部分に特に顕著なように、白色シルトの部分で掘り広げている部分があり、部分的には粘土採掘坑のように、白色粘土を採掘する目的で掘り下げていることも考えられる。東端部は6号溝と交差し、その東は粘土採掘坑群となるが、P-P'セクションにみられるように両者の間にはわずかに地山が残っており、直接重複しない。この部分では地山を不自然なほど鋭く掘り込んでいるが、この部分の土層をみると(P-P')の10層細かい層をなす砂からなるので、6号溝を流れた水がその部分を抉り込んだものと思われる。

長さは3号住居からこの地山の部分まで計測して21.44m、幅は0.85～2.12mである。深さは0.41～1.09mと差が大きい。

埋土には砂粒を含む層もみられるが、底面に凹凸が多いため、水を流すために掘られた溝とは思えない。その点で次の6号溝とは大きく異なる。

出土遺物は比較的多く、掲載できたのは土師器環2点、同台付甕1点、同甕3点であり、その他小破片として土師器甕類31点、同環類5点が出土している。

出土遺物は6世紀後半から7世紀にかけてのものと思われるが、後述するように同時存在と考えられる6号溝からは7世紀前半の遺物が多く出土するので、この溝の年代もそのころに押さえることができる。

前述したように、一部では粘土採掘も行われていたようだが、他の粘土採掘坑と異なって直線的な溝状であり、しかも6号溝とは同時存在と考えられる。6号溝には水が流れていた可能性が強いので、本溝にも流れ込んだと思われるが、底面には顕著な凹凸があり、しかも途中には6号溝の底面よりも高い部分もある。そのため、溝を流す目的で掘られたとは考えがたく、本来の性格は明らかにしがたい。

6号溝(第184・185図、第55表、P.L. 7・92)

第2面で見つかった溝であり、ちょうど調査区を横断する形となっている。東側に粘土採掘坑群が重複しており、この溝がその西端という形となっている。この粘土採掘坑群とは、Q-Q'セクションでは本遺構が新しいものの、その他の大部分のセクションでは本遺構の方が古く、H-H'セクションでは粘土採掘坑に時期差があり、その間に掘られたようにみえる。そのため、粘土採掘坑群の掘削期間はある程度長く、6号溝はその期間の幅の中で掘削され、機能していたことが分かる。

走行方向はN-17°-EからN-5°-Wの間でごく緩やかに蛇行している。長さは北端から南端まで直線距離で44.0m、幅は0.70～1.00mで比較的一定しているが、北端部では1.80mと広がる。深さは最も深いところで0.81mであるが、0.50～0.60m程度の部分が多い。断面形はきれいなU字形の部分が多く、底面は平坦な部分が多いが、5号溝と交わる付近は凹凸が多くなっているほか、一部粘土採掘坑で壊されている。埋土中～下部は砂粒を含み、細かい葉理をなす部分があるので流水があったらしい。傾斜からみて流水方向は北から南であり、北端と南端との底面の比高差は0.81mである。

掲載できた遺物は土師器環1点、同甕2点、須恵器壺1点であり、その他に小破片として土師器甕類28点、同環類7点、須恵器環類1点が出土している。

出土遺物からこの溝の時期は7世紀前半と思われる。

断面U字形のしっかりした溝であり、明確な目的をもった溝だと思われるが、粘土採掘坑の採掘の期間中に使用されていることから、機能していた期間は短いものと思われる。調査区を横断してしまい、関連する遺構がないので性格は明らかにしがたいが、流水があり、何らかの用排水路と考えられる。

7号溝(第186・187図、第55表、P.L. 92)

調査区の西端近くを横断するように走行する溝である。この付近は上面からの削平が激しく、また、多くの遺構と重複するため、途切れ途切れになってしまっているが、本来は調査区を完全に横断してさらにのびているものと思われる。49、53～55、57、64～67号住居と重複するが、そのすべてよりも新しい。53号土坑、4号井戸とも重複するが、それらよりは古い。

緩やかに蛇行し、幅も広狭があり、さらに南端近くで二股に分かれているなど、あまりしっかりとした印象を受けない溝であるが、この付近は上面がかなり削平されていると考えられるので、本来はもっと深い溝であったと考えられる。埋土には多くの砂礫が含まれており、強い流水があったものと思われる。

走行方向は蛇行しているが、北端と南端を結ぶとN-27°-Eである。長さは北側が25.90m、南側が16.10mで、間が4.90m離れている。幅は広狭が著しく、0.42m～1.88mである。深さも差が大きく、最も深いところで0.32mである。断面形は皿状の部分、椀状の部分などがあるが、底面に凹凸が多く、一定しない。

先述のように埋土の特徴から水が流れていたものと思われるが、傾斜は北が高く、底面の比高差は北端と南端とで0.38mである。

出土遺物はかなりあるが破片になっているものが多い。掲載したのは土師器環2点、同高環2点、須恵器埴1点、同長頸壺3点、同甕3点である。小破片としては土師器甕類388点、同環類133点、高環14点、赤彩土器(高環脚部)1点、須恵器甕類30点、同環類7点、同蓋1点が出土している。その他、石鏝・石匙と打製石斧も各1点出土しているが、それらは第12節(第208図38・41・52)で取り上げている。

出土遺物には、多くの遺構を壊していることからいろいろな時期のものが混在し、7世紀代から10世紀初頭までのものが見られる。この溝の時期を示すものは、それらの中で最も新しい3の須恵器埴であり、それは9世紀末から10世紀初頭のものと考えられるので、この溝の年代の上限はそこに押さえることができる。溝よりも新しい53号土坑、4号井戸は出土遺物がないので、下限年代は明確ではないが、4号井戸は中世のものと考えられるため、それを一応の下限と考えることはできる。

全体像が不明であるため、性格は明らかにしたが、流水があることから何らかの用排水路と考えられる。

8号溝(第188図、第55表、P.L. 7・92)

調査区北西部にある。この付近は上面からの攪乱が著しく、遺構が削平されており、確認が難しかった。そのため、他の遺構との切り合いが激しいもの、相互の新旧関係はほとんど掴めなかった。

8号溝は9・11号溝、63号土坑と重複し、本溝が新しいことは確認した。しかし、52号土坑、92号土坑とはわずかな切り合いであり、新旧関係は不明である。

平面形態はL字形である。東西方向の走行はN-73°-Wで、南北方向はN-20°-Eであり、ほぼ直角に交わっている。東西方向はやや深く長く、南北方向は浅く短い。東西方向は整った形態であり、長さ8.51m、上幅1.52～2.00m、底幅0.75～0.93m、深さ0.50～0.56mである。断面は逆台形で、底面は平坦である。南北方向は北側を63号土坑として掘ってしまったため長さは不明だが、4.50m程度と推定され、幅は1.33～1.65mである。深さは最も深いところで0.30mだが、底面はほぼ平坦である。

埋土をみると、不自然な埋没状態であり、1～3層の部分は掘り直しの可能性が考えられる。

出土遺物は少なく、掲載したのは内耳鍋1点、永楽通寶1枚である。内耳鍋は15世紀中～後半頃のものであり、永楽通寶は1408年初鑄なので、この溝の時期は15世紀中頃以降のものと思われる。その他小破片として、土師器甕類が5点出土している。

L字形に掘られていることからみて、何らかの区画の隅を示すものであろう。西側約10mのところにはほぼ同じ方向の10号溝があるので、両者が組み合わさって南東隅を区画する溝である可能性が考えられる。

9号溝(第188図、P.L. 7)

調査区北西部にあり、8号溝と大きく重複する溝である。南側は44号住居と重複し、いずれよりも古い。

北側を8号溝に大きく壊されているために全形は不明だが、ほぼ直線的に延びていると考えられ、走行方向はN-6°-Eである。長さは北端と考えられるところから44号住居までを計測して4.38mである。幅は南側の断面を計測したところで0.87mであり、深さはやはり南側で計測して0.18～0.25mである。断面は逆台形で、底面は平坦であり、比較的整った形態の溝である。

埋土は軽石を含む黒褐色土であり、砂などは含まれていなかったため、水は流れていなかったものと思われる。

出土遺物はなく、時期・性格共に不明であるが、6世紀中頃～後半と考えられる44号住居よりも古いので、少なくともそれ以前のものである。

10号溝(第189図、第55・56表、P.L. 8・92)

調査区北西部にある。調査当時、調査区西端部には南北に細長く攪乱が入っており、この溝の西端部はそれによって壊されているように見えたので、この溝の西側は調査区を越えてさらに西へ延びるものと考えていた。そのため10号溝と名付けて調査を行ったが、掘り下げたところ西端は攪乱の部分で止まってしまい、それよりも西には延びてはいないことが判明し、溝というよりは大規模な土坑のような形状となった。南側に82号土坑が重複するが、本遺構が新しい。しかし後述するように、いずれからも中世の遺物が出土しており、近い時期のものであることが判明する。

長方形の大きな土坑状の形態であり、主軸方向はN-75°-Wである。長さは11.64m、上幅は南側に重複する浅い凹みの部分を除いて2.73~3.78m、底面幅は1.09~1.38m。深さは最も深いところで0.99mである。底面はほぼ平坦で断面形も整った逆台形であり、しっかりとした掘方の遺構であるといえよう。

埋土をみると、北側からロームの前壊土(3・5層)が流れ込んでいることが見て取れるので、この溝を掘った土は北側に盛られていたものと思われる。

出土遺物は少なく、しかも破片ばかりである。掲載できたのは須恵器甕1点、内耳鍋4点、茶臼の下臼1点である。3は16世紀前半から中頃の可能性があり、その他の内耳鍋は15世紀中頃から後半のものと思われる。その他、小破片として土師器甕類11点、同環類4点、須恵器甕類4点、同環類3点、同蓋1点が出土している。

整った形の遺構であり、明確な目的をもって掘られたものと思われる。東側に約10m離れた8号溝の東西部分とは方向が似ており、時期も大差がないことから、これと組になって館などの南東隅を区画する溝である可能性が考えられる。その際、北側に盛土があったと推定されることが重視されるが、館の区画溝としてはあまりに短すぎ、不自然であることは免れないので、断定することは避けた。

11号溝(第188図、P.L. 7・8)

調査区北西部にある。48号住居、8号溝、63・74・90号土坑、261号ピットと重複する。48号住居より新しく、8号溝、63号土坑、261号ピットより古いことは確認し

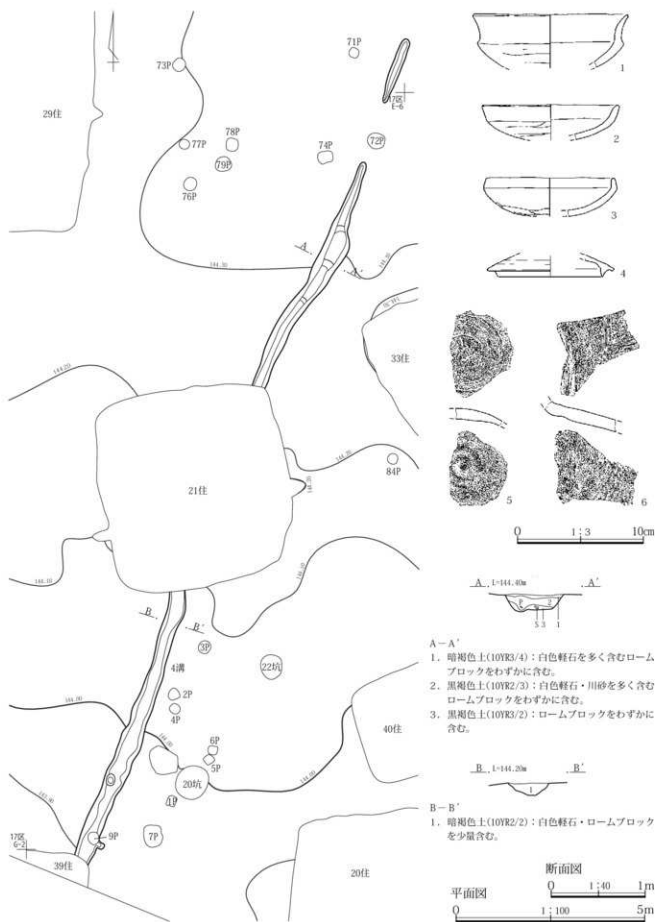
たが、74・90号土坑とは新旧不明である。

平面的にはほぼ直線に延びるが、両端が途切れる短い溝であり、深さも浅く明瞭な溝ではない。走行方向はN-22°-Wで、北端部は西に曲がる。幅は攪乱や別の遺構に壊されているところが多いので明確なところが少ないが、北端部は0.38m程度、その他の部分では0.92~1.10mである。断面は皿状で、底面は細かい凹凸があり、平坦ではない。深さは最も深いところで0.13mである。

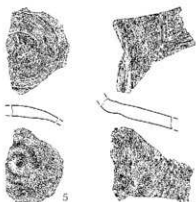
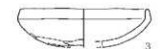
埋土にはわずかに炭化物を含むが、砂粒などはなく、水が流れたとは思えない。

出土遺物はなく、時期の詳細は不明だが、48号住居(6世紀後半)と8号溝(15世紀後半以降)との間のものである。

短く不明瞭な溝であり、性格は不明である。



第180図 4号溝断面図・出土遺物



0 1:3 10cm



A-A'

1. 暗褐色土(10YR3/4): 白色軽石を多く含むロームブロックをわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3): 白色軽石・川砂を多く含むロームブロックをわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2): ロームブロックをわずかに含む。



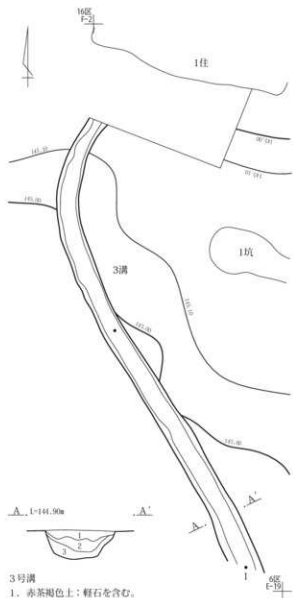
B-B'

1. 暗褐色土(10YR2/2): 白色軽石・ロームブロックを少量含む。

断面図

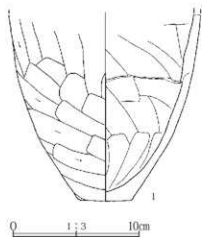
平面図 0 1:40 1m
0 1:100 5m

3号溝



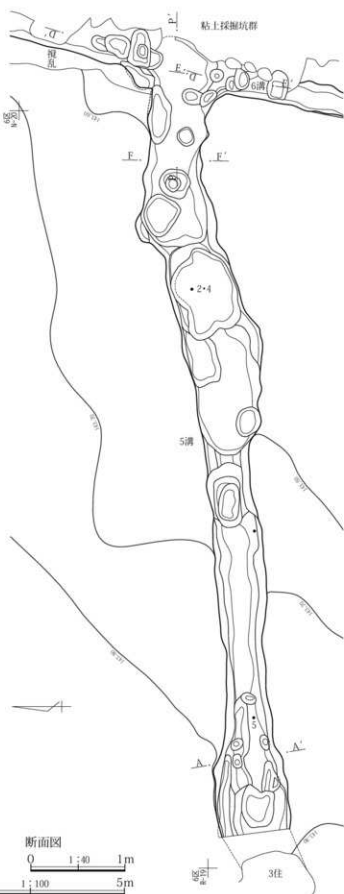
3号溝

1. 赤茶褐色土：軽石を含む。
2. 赤茶褐色土：軽石・鉄分を少量含む。
3. 赤茶褐色土：軽石・ロームブロックを若干含む。



0 1:3 10cm

5号溝



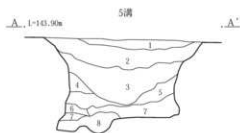
断面図

0 1:40 1m

平面図

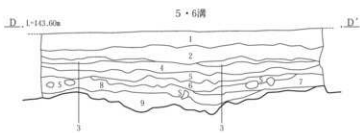
0 1:100 5m

第181図 3・5号溝断面図、3号溝出土遺物



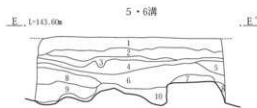
A-A'

1. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：軽石・ローム粒を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)：軽石を多く含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石・砂粒を多く含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石少量。
5. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石少量、砂粒を含む。
6. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：軽石少量、粗砂を含む。地山崩落上。
7. 黒褐色土・ローム・灰白色シルトの混合。
8. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：鉄分の固まりを多く含む。



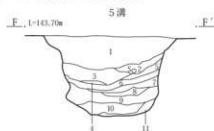
D-D'

1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石・砂粒を多く含む。
3. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：下層に軽石を含む。
4. 黒褐色土(2.5Y2/1)：粒子細かく均質。
5. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：粗砂粒を多く含む。
6. 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)：細かく均質を成す部分がある。
7. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：粗砂粒を多く含む全体にシルト分を含む。
8. 黒褐色土(2.5Y3/1)と灰白色シルトブロック(2.5Y7/1)、にぶい黄色土ブロック(2.5Y6/3)の混合。
9. 灰白色シルトブロック・黄色土ブロックの混合。



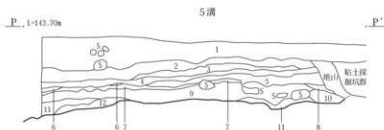
E-E'

1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2)：南へ行く程黒くなる。軽石を含む。
3. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：軽石の大きい部分がある。
4. 黒色粘土(2.5Y2/1)：粗砂粒を多く含む部分がある。
5. 黒色土(2.5Y3/2)：軽石を含む。
6. 黄灰色土(2.5Y4/1)：灰白色・暗灰色シルトブロックを含み砂粒を多く含むところがある。
7. 暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)：地山崩落上。
8. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：シルト分多く砂粒を含む。
9. 黄灰色土(2.5Y4/1)：シルト分多く灰白色シルトブロックを含む。
10. 灰白色シルトブロック(2.5Y7/1)とにぶい黄色シルトブロック(2.5Y6/3)の混合。



F-F'

1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。
2. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1)：軽石を含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石・砂粒を多く含む。
4. 灰黄色砂質土(2.5Y4/1)。
5. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を含む。
6. 黒色粘質土(2.5Y2/1)：粒子細かく均質。
7. 黒褐色粘質土(2.5Y3/1)：軽石を少量含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：砂粒を含む。
9. 黒褐色土(2.5Y3/1)と灰白色シルトブロック(2.5Y7/1)・にぶい黄色土ブロック(2.5Y6/3)の混合。
10. 灰白色シルトブロックとにぶい黄色土ブロックの混合。黒褐色土をわずかに含む。
11. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：地山崩落上。

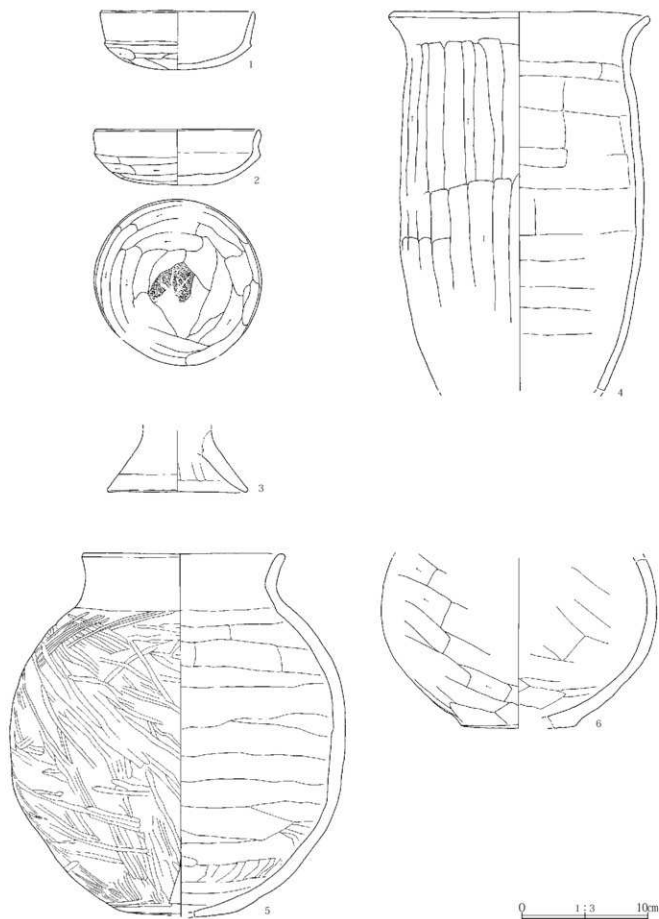


P-P'

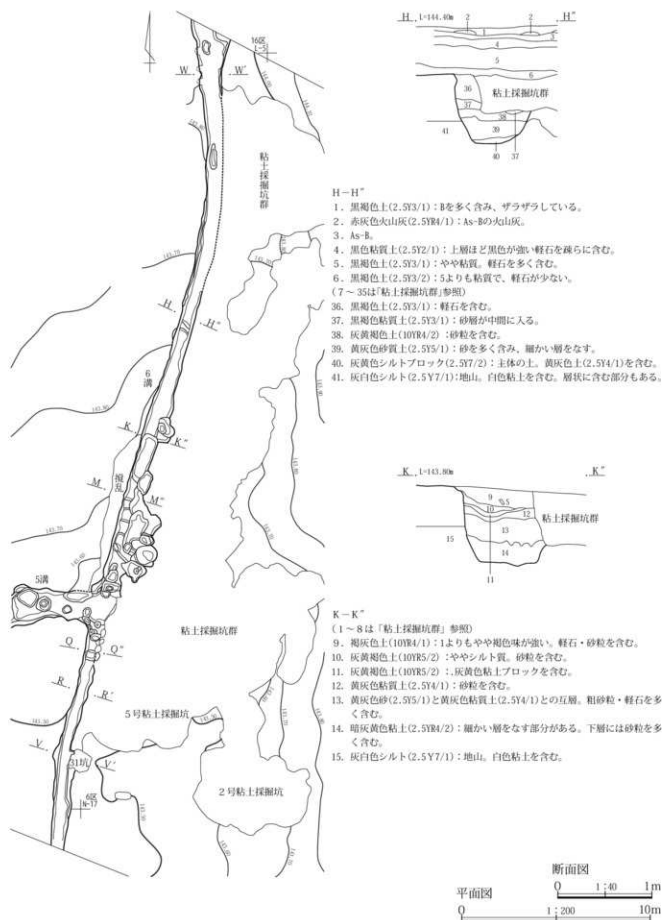
1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石・砂粒を多く含む。
3. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：下層に軽石を含む。
4. 黒色粘土(2.5Y2/1)：粒子細かく均質。
5. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：粗砂粒を多く含む。
6. 黒褐色粘質土(2.5Y3/1)：軽石を少量含む。
7. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：砂粒を含む。
8. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)。
9. 黒褐色土(2.5Y3/1)と灰白色シルトブロック(2.5Y7/1)・にぶい黄色土ブロック(2.5Y6/3)の混合。
10. 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)：細かく均質から成り薄層を成す。
11. 灰白色シルトブロックと黄色土ブロックの混合。
12. 黄灰色土(2.5Y6/1)：地山のシルトと砂との混合。

0 1:40 1m

第182図 5・6号溝断面図

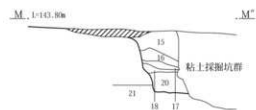


第183図 5号溝出土遺物



第184図 6号溝平面断面図

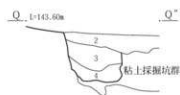
第3章 調査の成果



M-M'

(1~14, 19は「粘土採掘坑群」参照)

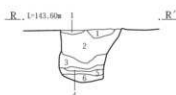
15. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を含む。
16. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石が少なくシルト分が多い。
17. 暗灰黄色砂(2.5Y4/2): 細かい層をなす。
18. 黒色粘質土(2.5Y2/1): 浅黄色シルトブロックを少量含む。
20. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1): 灰黄色シルトブロック・ローム粒を含む。
21. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 地山, 白色粘土を含む。層状に含む部分もある。



Q-Q'

(1, 5~は「粘土採掘坑群」参照)

2. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を多く含む。
3. 黒色土(2.5Y2/1): 軽石を含む。
4. 黄灰色土(2.5Y4/1): 黒褐色土・暗灰色シルトが層状に入る。砂粒を含む層もある。



R-R'

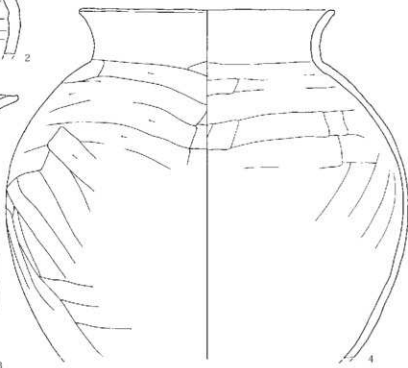
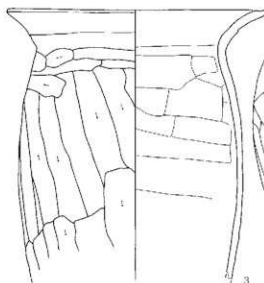
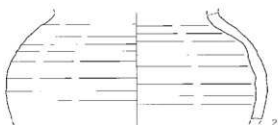
1. 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)。
2. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を多く含む。
3. 黒褐色砂質土(2.5Y3/2): 軽石をごくわずか含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2): 粒子細かく緻密。
5. 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 灰白色シルト・砂粒を含む。



V-V'

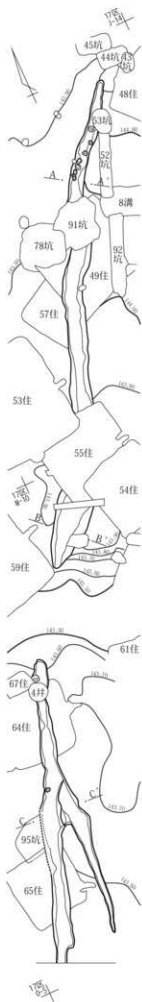


0 1:40 1m



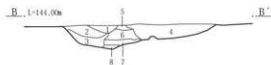
0 1:3 10cm

第185図 6号溝断面図・出土遺物



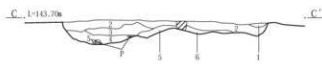
A-A'

1. 砂層: ϕ 20mm以下の礫を多く含む暗褐色土ブロック・白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3): ローム粒・砂を少量含む。
3. 砂層: ϕ 5mm以下の礫を少量含む暗褐色土ブロックをやや多く含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3): ロームブロック・砂をやや多く含む。
5. 暗褐色土(10YR3/3): ローム粒をわずかに含む。



B-B'

1. 暗灰黄色細砂質土(2.5Y5/2)。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2): 軽石・砂粒を含む。
3. 黄灰色細砂質土(2.5Y4/1): シルト分を含む。
4. オリブ褐色土(2.5Y4/3): 灰砂を多く含む。
5. 黄灰色細砂質土(2.5Y6/1)。
6. 灰黄色砂質土(2.5Y6/2): 細かい層を成す。
7. 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2): 細かい層を成す。
8. ロームの崩れと砂との混合。

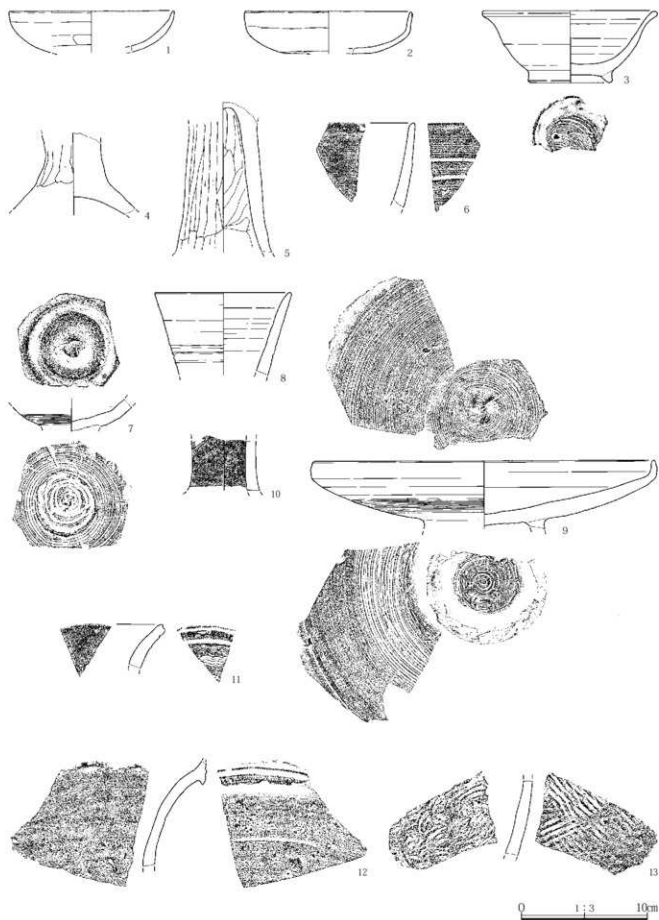


C-C'

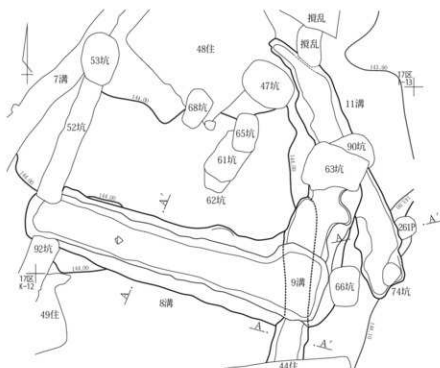
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3): 砂質・黒褐色土ブロックをやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2): 白色軽石・ローム粒を少量含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2): 砂を多く含む。ローム粒を少量含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3): 砂を非常に多く含む。礫をわずかに含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2): 砂を少量含む。
6. 暗褐色土(10YR3/4): 砂を少量含む。柔らかい。



第186図 7号溝断面図



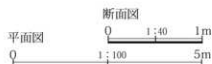
第187図 7号溝出土遺物



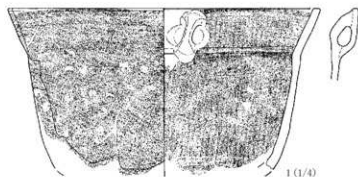
- 8号溝
1. ロームブロック・黒褐色土の混合。
 2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を含む。
 3. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒をごくわずか含む。
 4. ローム粒主体の上。暗灰黄色土を含む。
 5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒を含む。



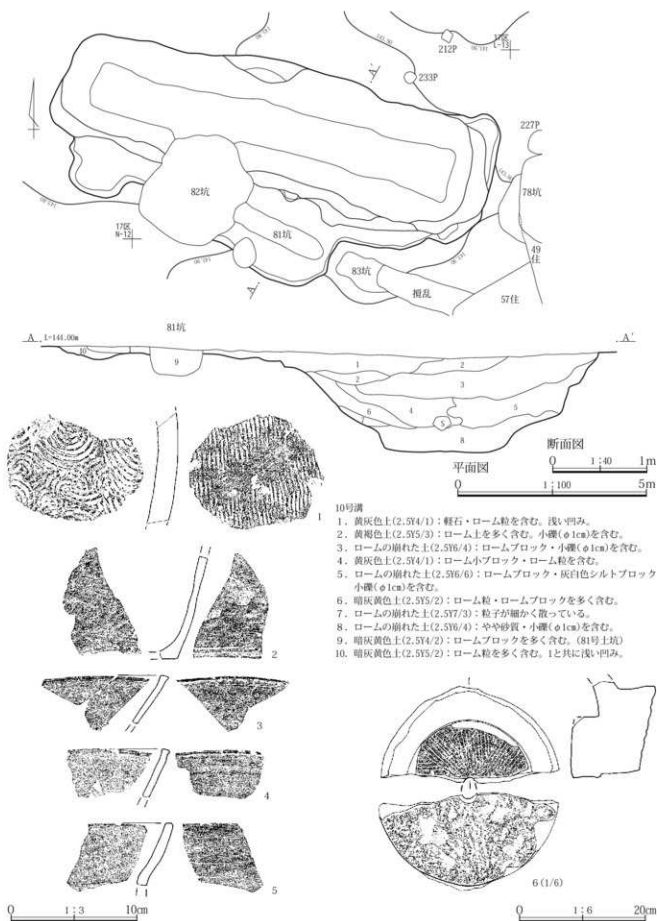
- 11号溝
1. 黒褐色土(10YR2/2)：ロームブロックをやや多く含む。白色軽石を少量含む。(261号ピット付上)
 2. 暗褐色土(10YR3/3)：ロームブロックをやや多く含む。炭化物粒をわずかに含む。



8号溝出土遺物



第188図 8・9・11号溝平断面図、8号溝出土遺物



第189図 10号溝平面断面図・出土遺物

第9節 粘土採掘坑

粘土採掘坑と名付けた遺構は、合計8基と1群がある。遺構番号を付したものは、1号から9号までであるが、6号は欠番である。というのは、6号粘土採掘坑としたものは、確認面ではある程度独立した遺構と思えたのでひとつの名称を付して調査を開始したものであるが、その後の調査で後述する粘土採掘坑群につながってしまい、その境界を毅然と分けることが難しくなってしまった。そのため独立した遺構としては認めがたくなり、本書では欠番としたものである。5号もやや同様な形態であるが、ある程度遺構として分けることが可能であったため、独立した遺構として残し、本書ではそのまま報告する。

なお、これら粘土採掘坑は、発掘当初は竪穴住居に形態が似ていたこともあり、「竪穴遺構」という名称で調査を開始したものである。しかし、調査が進むにつれ遺構の壁をみると、灰白色シルトの部分で奥に削り込んでいる場合が多い。そのため、これらの遺構は、灰白色シルトに層状に含まれる白色粘土を採掘することを目的とした土坑と考えられ、名称を「粘土採掘坑」に変更することにした。第190図以下にあげた遺構断面図では、遺構の壁の外側に、灰白色シルトの上面の層位を水平線で示してある。

1号粘土採掘坑(第190図、第56表、P.L. 45)

調査区東部中央にあり、東側が2号住居とわずかに重複している。この2号住居は6世紀後半のものと思われる、それに対して粘土採掘坑の時期は後述のように7世紀前半と思われるので、本遺構が古いことになる。

不整形ではあるが、全体として方形を意識したように見える形であり、7・8号粘土採掘坑等で述べるように、本来竪穴住居であったものを粘土採掘坑として掘り広げたものである可能性が強いものと考えられる。

規模は南北5.92m、東西5.72m(東端は1号住居と重複)で、底面は凹凸が激しく、深さは最も深いところで1.55mである。北東部分を特に深く掘り込み、その底部付近では横に掘り広げるようにしている。住居の床面のような平坦面が見つからなかったが、南から西にかけては

比較的平坦であり、この部分は住居の掘り込みの状態をある程度残しているのではないかと推定される。

出土物は多くなく、いずれも埋土中からの出土であり、特筆すべき出土状態のものはない。掲載したのは土師器環5点と甕2点である。その他小破片として、土師器甕類が53点、同環類が17点、同高環が2点、須恵器甕類が1点出土している。

遺物から見ると、7世紀前半～中葉にかけてのものと思われる。

2号粘土採掘坑(第195・199図、第57表、P.L. 45・92)

第2面にあり、後述する粘土採掘坑群の最南端にある。浅く細長い土坑を介して粘土採掘坑群とつながっているが、この土坑と2号粘土採掘坑とは、G-G'セクションにみるように、本遺構が新しい。なお、この浅い土坑は粘土採掘坑群の一部として取り扱った。

平面図・断面図を併せてみると、土坑状の掘り込みがいくつも重複して掘られていることが分かる。U-U'セクションでは、西から東に向かって次々と土坑を掘っていったことが分かる。全体の形態も不整形であり、この粘土採掘坑については、竪穴住居を再利用したものではないであろう。長さ6.35m、幅3.98mであり、底面は凹凸が激しく、深さは最も深いところで1.22mである。

遺物は少なく、いずれも埋土中から出土し、特筆すべき出土状態のものはない。掲載したのは土師器甕の底部1点と須恵器甕3点である。その他小破片として、土師器甕類16点、同環類14点、同高環4点、須恵器甕類2点、同環類1点が出土している。

時期は明確にしたいが、6世紀～7世紀のものと考えられる。

調査時に一つの遺構と思えたので2号粘土採掘坑と名付けて調査したが、前述のようにいくつかの土坑の集合したものと思われる、また、浅い土坑で粘土採掘坑群とつながっていることもあり、本来は粘土採掘坑群の一部として考えた方がよい遺構である。

3号粘土採掘坑(第190・191図、第56表、P.L. 45)

調査区中央のやや北東にある。この付近は遺構が集中する範囲の東端に当たる。不整形の本体は、西側と南西にある突出部を除けば隅の丸い方形に見える。南西方向

第3章 調査の成果

の突出部は特に細く長い。本体部分の底面は中央付近から西側にかけてが最も深く掘られている。その他の部分をみても、底面の凹凸は大きく、何度にも分けて掘られたようにみえるが、B-B'セクションをみると埋没したのは同時であると判断できるので、何期かに分けて掘られたものではなく、短期間のうちに、底面だけ凹凸に掘られたものと思われる。ただし、南側から東側にかけて平坦になっている部分もあり、これも竪穴住居を掘り広げたものである可能性は残るものと思われる。

この本体部分は長さ4.68m、幅3.80mであり、深さは最も深いところで1.26mである。

南西方向に延びる細い突出部は、長さ2.80m、幅は基部で1.05mであり、先に行くにしたがって細くなる。深さが0.23～0.35mと浅く、シルト層に達していないため、掘削された意図は不明である。この付近は他の部分に比べて礫が多く含まれているために掘り下げにくく、シルト層まで掘り下げたことを断念したのであろうか。

遺物は多くなく、いずれも埋土からの出土で、特筆すべき出土状態のものはない。掲載したのは土師器環4点、同高環4点である。その他小破片として、土師器甕類92点、同環類88点、同高環2点、須恵器甕類2点、同環類3点が出土している。

時期は6世紀後半と思われる。

4号粘土探掘坑(第191・192図、第56・57表、P.L. 45・93)

調査区中央のやや北東にあり、3号粘土探掘坑の北側に当たる。北西部に馬歯が出土した16号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

外形は不整形で、底部も凹凸が多いので、竪穴住居であった痕跡はほとんど見られないが、上端線が直線的になっている部分や、底面が平坦に近い部分があること、東半部に焼土が集中していた部分があり、その付近に竈の存在が想定できることから、これも本来竪穴住居であったものを掘り下げたものである可能性は残るものと思われる。

この粘土探掘坑では、白色シルトの層のうち、特に白色粘土が多い層を狙って削り取っていることがよく分かり、壁はその層で顕著に奥に入り込んでいる。その際、円を描くように削り取るらしく、そのために壁の外側に

半円形に突出する部分が何カ所もみられる。

埋土の上層からは礫(φ5～20cm)が多く出土したが、特に意味のある出土状態とは思えなかった。規模は最大幅9.60m、最小幅6.22m、深さは最も深いところで1.31mである。

比較的多くの遺物が出土しているが、大部分は埋土中からの出土であり、特筆すべき出土状態のものはない。掲載したのは、土師器環4点、同高環2点、同環5点、須恵器瓶1点、同短頸壺1点、同長頸壺1点である。その他小破片として、土師器甕類239点、同環類122点、同高環1点が出土している。

遺物から見て、7世紀前半のものと思われる。

5号粘土探掘坑(第195・198図、第57表、P.L. 46・93)

第2面にあり、後述する粘土探掘坑群の南東隅に接して存在する。2号粘土探掘坑と同様、本来粘土探掘坑群と一連のものである可能性が強いものであるが、遺構確認時に一つのまとまった遺構に見えたため、別の遺構として調査を行ったものである。平面形は全体としては楕円形で、所々に突出部がある。規模は最大幅5.34m、最小幅3.67mであり、深さは最も深いところで1.09mである。

出土遺物は少ない。掲載できたのは土師器環1点、同高環2点、同環2点、須恵器鉢1点、同高環1点である。その他小破片として、土師器甕類16点、同環類3点、同高環1点が出土している。

時期の詳細は遺物からは特定しがたいが、7世紀代のものと思われる。

7号粘土探掘坑(第47・48図、P.L. 17)

調査区中央の北東にあり、南北方向の浅い谷にごく近い部分にある。16号住居と重複する粘土探掘坑である。調査の経緯などについては16号住居の記述(35頁)に詳しいが、16号住居が多少埋まり始めた段階で、その北半部について、外側に半円形に大きく掘り広げるようにこの粘土探掘坑が掘られている。さらにそれに続いて南西部の床面も竈の手前まで掘り下げられてしまっている。16号住居の平面図(第47図)をみると、住居の北側にドーナツ状の土坑が重複しているように見えるのが、この粘土探掘坑である。16号住居の床面は灰白色シルトの途

中で止まっているが、その上部と下部とに薄い白色粘土の層が存在しているため、おそらくそれを狙って掘り広げたものと思われる。採掘坑の壁をみると、その部分で奥に顕著に削り込んでいることがわかる。16号住居が使用されていた頃、その壁面にこの白色粘土の層が見えたため、住居廃絶後埋没し始めた頃に採掘したものであろう。この遺構の存在が、その他の粘土採掘坑も、竪穴住居であったものを掘り広げたものなのではないかと推定する大きな根拠となっている。

この採掘坑の規模を示すのは難しいが、住居の壁の推定線から、北に1.85m、東に1.2m、西に1.3mほど掘り広げられ、東端と西端との距離は6.5mになっている。深さは最も深いところが南西付近であり、遺構確認面から計測して1.32mである。これは16号住居の床面から計測して0.67m下となる。

出土遺物は、発掘調査当初からこの遺構の存在を認識していたわけではないので、16号住居として取り上げてしまった。そのため、この粘土採掘坑の時期を特定することはできない。ただし、16号住居の1の土師器環はこの粘土採掘坑から出土した可能性が強いが、この土器もその他の16号住居出土土器と時期差を認めることは困難である。

8号粘土採掘坑(第11・12図、P.L. 9)

調査区中央の南東側にあり、遺構の集中する部分の東端になる。3号住居と重複する粘土採掘坑であるが、7号粘土採掘坑とは逆に、住居が新しく本遺構が古い。住居の北側に重複するが、その平面形は住居の掘方底面との判別が難しく、やや不明瞭であり、東西に長く、長さ4.20m、幅3.00m程度がその範囲であると思われる。やはり灰白色シルトに含まれる白色粘土を狙って掘っているらしく、その層の部分に奥に深く掘られている。深さは最も深いところでは確認面から1.15mである。

3号住居と同時に調査したため、遺物は3号住居として取り上げてしまったが、その中には特に時期の異なる遺物はなく、住居との時期差はほとんどないものと考えられる。

住居の出土遺物は7世紀後半のものと考えられるものであり、本遺構はそれよりも古いので、これがこの遺構の年代の下限になる。

9号粘土採掘坑(第203図、第57・58表、P.L. 46)

これまで上げてきた粘土採掘坑と後述する粘土採掘坑群は、調査区東部にある南北に延びる浅い谷かその近くにあったが、この粘土採掘坑のみはそこからかなり西側に離れている。20、31号住居と重複しており、いずれよりも新しい。

長さ4.10m、幅2.96mの不整形で、深さは最も深いところで1.47mであり、底面近くの深さで壁が奥に掘り広げられている。他の粘土採掘坑に比較して深いのが、それは、灰白色シルトのある深さが谷部から離れるほど深くなり、この付近では確認面から約0.90mとなるので、それに含まれる白色粘土を採掘するとすると、より深くまでの掘削が必要になるためであろう。粘土採掘坑がこの付近に他に見られないのも、その深さのためであると思われる。

出土遺物は少なく、いずれも埋土からの出土である。掲載したのは土師器環2点、同小型甕2点である。その他、小破片として土師器甕類6点、同環類2点が出土している。

遺物から見ると時期は8世紀第3四半期頃と思われる。他の粘土採掘坑よりもかなり新しい時期のものである。粘土採掘坑としてこの1基だけ離れているのは、そのためかと思われる。

粘土採掘坑群(第193～202図、第57表、P.L. 46・93・94)

既に何度も述べているように、調査区の東部には南北に延びる浅い谷があり、底にはAs-Bが堆積していたが、その下層の黒色粘質土、黒褐色土(H-H'セクションの4～6層、基本土層のIV～VI層に相当)を除去したところ、遺構が見つかったのでこの面を2面として調査した(この間の経緯は「第1章第2節2調査の経緯」に既述)。この面で調査されたのは、ここで取り上げる粘土採掘坑群の他、2・5号粘土採掘坑と、5・6号溝、37～40号土坑である。

粘土採掘坑群はこの浅い谷に沿って南北に延びているもので、多くの土坑状の遺構が複雑に重複して一つの遺構をなしている。個々の土坑状の遺構の特徴は粘土採掘坑と同様なので、これらの土坑状の遺構も白色粘土を採

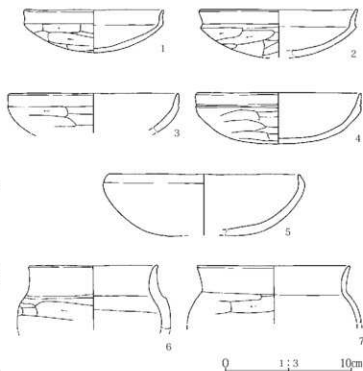
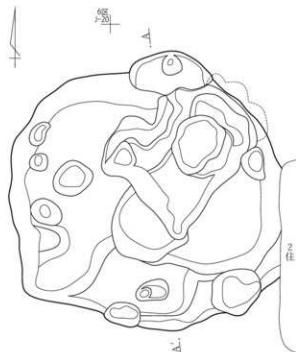
掘る目的で掘られたものと考えられる。そして、それらの土坑状の遺構はあまりに複雑に重複し、平面的には個々の形状を確認することは全く不可能であったので、それぞれを個別に分離して調査することはできなかった。そのため、「粘土採掘坑群」と名付けて一括して調査することにしたものである。ただし、第8節の6号溝の項で述べたように、この粘土採掘坑群は場所によって6号溝よりも古いところ、新しいところがあるので、掘削された期間にはある程度の時間幅があったと考えられる。そのため、ここでは一つの遺構として扱ったものの、実際にはある程度時間幅の中で掘り続けられた採掘坑の集まりであるので、注意が必要である。

粘土採掘坑群の範囲は、南北35.5m、東西11.0mに及び、傾向としては南ほど深くまた複雑に掘られ、北側は浅くあまり凹凸がなくなっている。標高でみると、最も深い部分は南部で142.46mであり、この付近の遺構確認面は143.60m程度なので、深さは約1.15mであるが、北端部付近では深さは0.60m前後となる。

出土遺物はやや多い。掲載したのは土師器環4点、同高環2点、同鉢1点、同甕2点、須恵器坏身2点、同短頸壺1点、同甕3点である。その他小破片として土師器甕類29点、同坏類2点、同高環4点、須恵器甕類34点が出土している。

時期は、出土遺物からみると7世紀前半代のものが多いが、先述のようにある程度時間幅の中で形成された遺構なので、この時期は形成年代の一端を示すものと考えた方がよいと思われる。実際、この粘土採掘坑群の一部をなしていると考えられる2号粘土採掘坑からは6世紀代と思われる土器が出土している。住居のように遺構の時期に近接する土器が出土するとは限らない性質の遺構なので、7世紀前半を中心としたやや広い時間幅の中で掘削されたものと考えておきたい。

1号粘土採掘坑

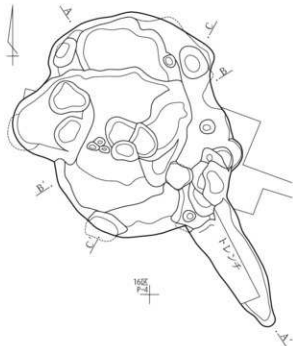


1号粘土採掘坑

1. 暗褐色土：粒状C軽石混入。
2. 赤茶褐色土：粒状C軽石混入・粒状ローム多量。
3. 黒褐色土：粒状C軽石多量・塊状ローム上若干。
4. 黒褐色土と塊状ローム上の混土。
5. 黒色土：粒状C軽石混入(N層近置)
6. 黒褐色土：少塊状ローム土混入。
7. 塊状ローム上。
8. 黒褐色土と塊状ローム上の混土。
9. 黒褐色土：粒状C軽石混入・塊状ローム上少量・粒状堆土若干。
10. 黒褐色土(シルト質気味)：粒状C軽石少量。
11. 黒灰色土：ノロ。
12. 黒灰色土：ノロと細粒砂。
13. 黒灰色土：細粒状C軽石微量・塊状灰色シルト質地山土含有。
14. 黒褐色土：粒状C軽石含有・粒状ローム含有。
15. 黒褐色土：粒状C軽石含有・粗粒状ローム多量。
16. 黒褐色土：粒状C軽石少量・粒状ローム含有。
17. 硬質灰褐色シルト。
18. 黒褐色土：粒状C軽石若干・粒状ローム褐色土。
19. 黒褐色土：小塊状ローム土含有・粒状ローム混入。
20. 黒褐色土：粒状C軽石少量・塊状ローム上多量・粒状ローム混入。
21. 灰白色シルト(地山)：やや砂質。白色粘土が層状に含まれる所がある。



3号粘土採掘坑



第190図 1・3号粘土採掘坑平面断面図、1号粘土採掘坑出土遺物

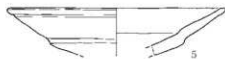
第3章 調査の成果



3号粘土探掘坑

B'-B

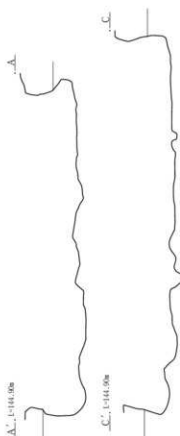
1. 黒褐色土(7.5YR3/2)：白色軽石(FA)を多く含む。
2. 灰褐色土(7.5YR4/2)：白色軽石(FA)・ローム小ブロックを含む。
3. 褐灰色土(10YR4/1)：灰白色シルトブロック(10YR8/1)を含む。
4. 褐灰色土(10YR4/1)：黒褐色土(10YR3/1)を含む。灰白色シルトブロックは疎ら。
5. 黒褐色土(10YR3/1)：砂粒を含む。
6. 黒褐色土(10YR3/1)：灰白色シルトブロックを疎らに含む。
7. 灰黄褐色粘土ブロック(10YR4/2)。
8. 灰白色シルト(10YR7/1)と黒褐色土(10YR3/1)の細かい互層。
9. 黒褐色土(10YR3/1)：灰白色シルト含む。粘質。
10. 灰白色シルト(10YR7/1)：地山崩落上。
11. にぶい黄褐色土(10YR5/3)：地山崩落上。
12. 灰白色シルト(地山)：やや砂質。白色粘土が層状に含まれる所がある。



0 1:3 10cm

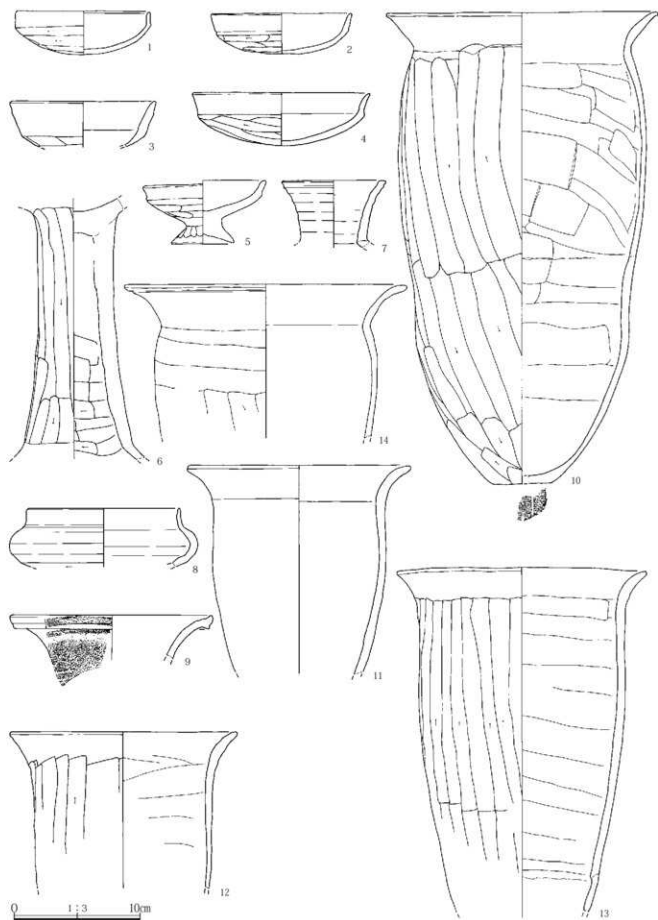


4号粘土探掘坑



0 1:80 2m

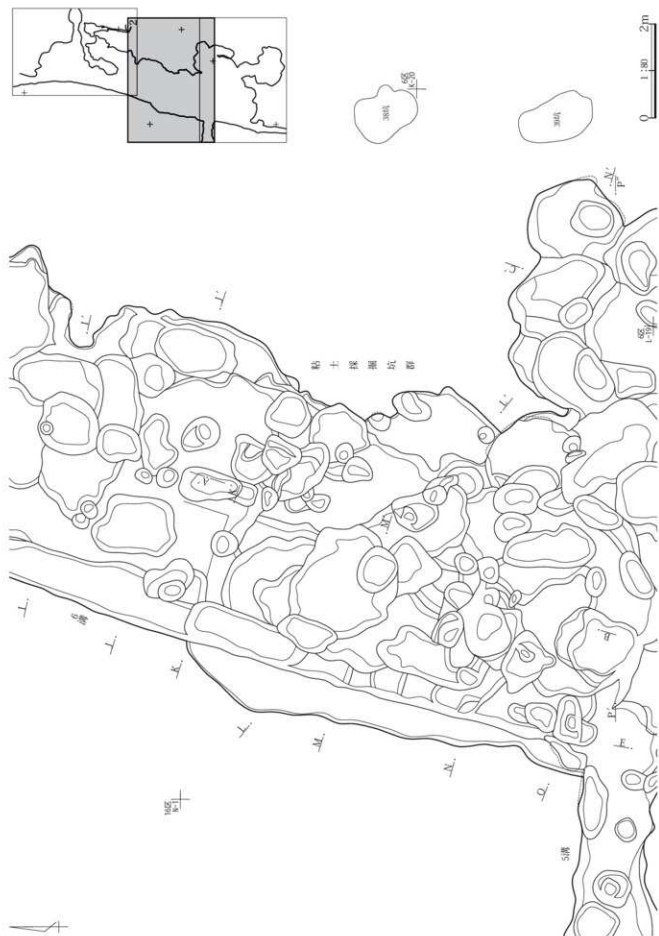
第191図 3号粘土探掘坑断面図、出土遺物、4号粘土探掘坑断面図



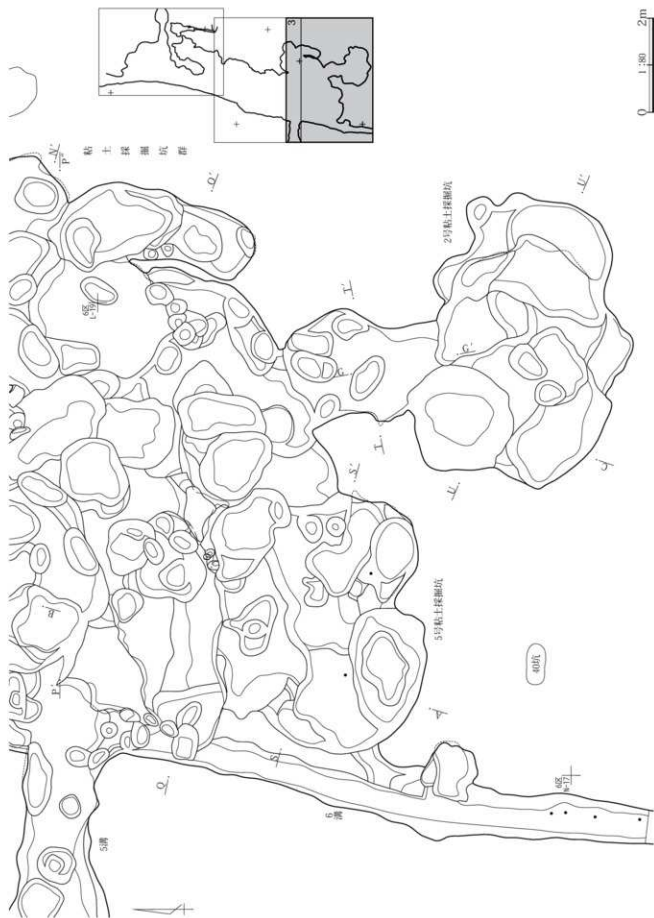
第192图 4号粘土採掘坑出土遺物



第193図 2・5号粘土採掘坑、粘土採掘坑群平面図(北部)



第194圖 2・5号粘土探掘坑, 粘土探掘坑群平面图(中央部)



第195図 2・5号粘土探掘坑、粘土探掘坑群平面図(南部)



- B-B'
1. 灰黄色土(107R4/2)：砂粒・軽石を含む。
 2. 灰黄色土(2.5V4/1)：軽石を含む。
 3. 灰黄色土(107R4/2)：軽石・ローム粒を含む。
 4. 灰黄色土(2.5V4/1)：軽石・ローム粒を含む。
 5. 灰黄色土(2.5V4/1)：灰白色粘質シルト(2.5V7/1)の薄い層が上下2層入り、砂粒を多く含む層も入る。
 6. 灰黄色粘質土(2.5V1/1)：灰黄色シルトブロック(2.5V6/2)・灰白色シルトブロック(2.5V7/1)を含む。
 7. 灰黄色土(2.5V6/2)：やや粘質、地山崩落土。
 8. 灰黄色土(2.5V4/1)：灰白色シルト(2.5V7/1)の小ブロックを含む。
 9. 明灰色粘質土(2.5V4/2)：地山崩落土。
 10. 灰黄色土(2.5V4/1)：軽石・砂粒を含む。

11. 灰黄色土(2.5V4/1)：軽石・砂粒を多く含む。
12. 灰黄色粘質土(2.5V4/1)：細かい層をなす。
13. 暗灰黄色土(2.5V4/2)：軽石を含む。
14. 黒褐色粘質土(2.5V1/1)：軽石を含む。
15. 灰黄色粘質土(2.5V4/1)：砂粒を多く含む。
16. 灰黄色粘質土(2.5V4/1)：砂粒を多く含む。
17. 灰黄色粘質土(2.5V1/1)：シルト分を含むところがある。一部細かい層をなす。
18. 暗灰黄色粘質土(2.5V2/2)：灰白色シルトブロックを含む。
19. 灰黄色土(2.5V1/1)：シルト分を含む。
20. 暗灰黄色粘質土(2.5V2/2)：灰黄色シルトブロックを含む。
21. 灰黄色シルト(2.5V7/2)：ブロックの重なり。
22. 灰黄色土(2.5V4/1)：軽石・ローム粒を含む。

23. 暗灰黄色土(2.5V4/2)と黄灰色粘質シルト(2.5V6/1)地山崩落土。
24. 黄灰色粘質土(2.5V4/1)：粗砂を多く含む。軽石を少量含む。
25. 黄灰色粘質土(2.5V5/1)：砂粒・灰白色シルトの小ブロックを含む。
26. 暗灰黄色土(2.5V4/1)：やや粘質と灰白色シルトの小ブロックを含む。
27. 明灰黄色土(2.5V2/2)：地山崩落土。均一の上土。
28. 明灰黄色土(2.5V4/2)：灰白色シルトブロックを多く含む。
29. 明灰黄色土(2.5V4/1)：地山崩落土。均一の上土。
30. 明灰黄色土(2.5V4/2)：灰白色シルト(2.5V7/1)と地山崩落土。
31. 黄灰色粘質土(2.5V6/1)：地山崩落土。
32. 灰白色シルト(2.5V7/1)：地山崩落土を含む。一部膠状を含む。



- H-H'
1. 黒褐色土(2.5V3/1)：Bを多く含み、ザラザラしている。
 2. 赤灰色土(107R4/1)と黄灰色土(2.5V4/1)との混合。
 3. A5-B。
 4. 黒褐色土(2.5V3/1)：上層は黒褐色が強い。軽石を疎らに含む。
 5. 黒褐色土(2.5V3/1)：やや粘質、軽石を多く含む。
 6. 黒褐色土(2.5V3/2)：5よりも粘質で、軽石が少ない。
 7. 明灰黄色土(2.5V4/2)：軽石・ローム粒を含む。
 8. 黒褐色土(2.5V3/2)：軽石・砂粒、ローム粒を含む。
 9. 黒褐色土(2.5V2/2)：軽石を含む部分と含まない部分がある。
 10. 黒褐色土(2.5V3/1)：軽石・砂粒を多く含む。
 11. 黒褐色土(107R2/2)：軽石・砂粒を含む。
 12. 13のブロックと黒褐色粘質土(107R1/1)との混合とロームブロック、明灰黄色土(2.5V4/1)を含む。
 13. 明灰黄色土(107R3/3)：地山崩落土。均質・軽石層が薄い。
 14. 13のブロックと灰白色シルトブロックの混合。
 15. 灰白色シルト(107R7/1)と灰黄色土(2.5V6/2)との混合。
 16. 黒褐色土(2.5V3/1)：暗灰黄色シルトブロック(2.5V6/2)を含む。

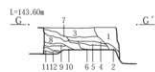
17. 灰白色シルト(107R7/1)と黄灰色土(2.5V4/1)との混合。
18. 黒褐色土(2.5V3/1)と黄灰色土(2.5V4/1)との混合。灰白色シルトブロック・ローム粒を含む。
19. 灰黄色土(107R4/2)：地山崩落土。13に似るが、全体に黒分の細かい層が多い。
20. 灰白色シルトブロック(107R4/1)・(107R7/1)・(107R8/2)主体の土。黄灰色土(2.5V3/1)と黄灰色土(2.5V4/1)との混合。
21. 灰白色シルトと黄灰色土との混合。鉄分の混集が全体に見られる。
22. 黒褐色粘質土(2.5V3/1)：軽石・ローム粒を含む。
23. 黒褐色土(2.5V3/1)：軽石・砂粒を多く含む。
24. 灰黄色土(2.5V5/1)：やや粘質・灰白色シルトブロックを含む。
25. 灰黄色土(107R5/3)：ローム粒・鉄分の混集を含む。
26. 灰黄色土(2.5V4/1)：軽石・灰白色シルト・ローム粒を含む。やや粘質。
27. 灰黄色土(2.5V4/1)：軽石・砂粒を含む。
28. 黒褐色粘質土(2.5V3/2)：少量の軽石を含む。細かい層をなす部分がある。
29. 灰黄色土(107R5/2)：鉄分の層が別々に入りを含む。
30. 灰黄色砂(2.5V6/1)：細かい層をなす。下部に灰黄色粘土(2.5V4/2)の薄い層がある。

31. 明褐色土(107R3/3)：やや粘質。灰白色シルトブロックをわずかに含む。
32. 灰白色シルト(107R4/3)：灰白色シルトの小ブロックを含む。
33. 灰黄色土(107R4/2)：やや粘質。砂粒を含む。
34. 暗灰黄色粘質土(2.5V2/2)：シルト分を多く含む。
35. 灰黄色土(107R5/2)：鉄分の層が全体に見られる。外は均質な土であり、上層の土とは大きく異なる。その高この土は粘質土層に埋まった上ではなく、より古い自然の堆積物と思われる。
36. 黒褐色土(2.5V3/1)：軽石を含む。(以下40まで6号層)
37. 灰黄色粘質土(2.5V3/1)：砂粒を含む。
38. 灰黄色土(107R4/2)：砂粒を含む。
39. 灰黄色粘質土(2.5V5/1)：砂を多く含み、細かい層をなす。
40. 灰黄色シルトブロック(2.5V7/2)：主体の土。灰黄色土(2.5V4/1)を含む。
41. 灰白色シルト(2.5V7/1)：地山崩落土を含む。層状を含む部分もある。

第196図 2・5号粘土採掘坑、粘土採掘坑断面図(1)

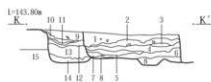


第3章 調査の結果



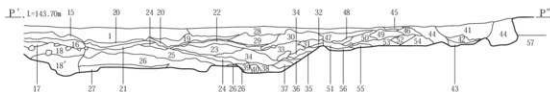
G-G'

1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。(1・2は2号粘土採掘坑)
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ロームブロック・軽石を含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石を多く含む。
4. 灰黄色シルト(2.5Y7/2)と黒褐色土ブロック・ローム小ブロックの混合。
5. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒・灰白色シルト粒を含む。
6. 灰黄色シルト(2.5Y7/2)と黒褐色土ブロック・ローム小ブロックの混合。
7. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒・軽石を含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム小ブロック・粗砂を含む。
9. オリブ褐色土(2.5Y4/3)：地山崩落土・緻密。
10. にぶい黄色シルト(2.5Y6/3)：地山崩落土。
11. 黒褐色土(2.5Y3/2)。
12. 灰黄色シルト(2.5Y7/1)とにぶい黄色シルト(2.5Y6/4)の混合。



K-K'

1. 褐灰色土(10YR4/1)：軽石・砂粒を含む。
2. 黒褐色粘質土(10YR3/1)：粗砂粒を含む。
3. 黄灰色砂(2.5YR4/1)：シルト分を含むところがある。
4. 黒褐色粘土(2.5Y3/2)：きめが細かく、均質。
5. 黄褐色粘土(2.5Y5/3)：きめが細かく、均質。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：砂粒・灰白色シルトブロック(2.5Y8/1)を含む。
7. 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)：灰白色シルト粘土・灰黄色粘土のブロックを疎らに含む。
8. 灰白色砂質土(2.5Y7/1)：灰白色シルト粘土・灰黄色粘土のブロックを多く含む。
9. 褐灰色土(10YR4/1)：1よりもやや褐色味が強い。軽石・砂粒を含む。(9～14まで6号溝)
10. 灰黄褐色土(10YR5/2)：ややシルト質。砂粒を含む。
11. 灰黄褐色土(10YR5/2)：灰黄色粘土ブロックを含む。
12. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1)：砂粒を含む。
13. 黄灰色砂(2.5Y5/1)と黄灰色粘質土(2.5Y4/1)との互層。粗砂粒・軽石を多く含む。
14. 暗灰黄色粘土(2.5YR4/2)：細かい層をなす部分がある。下層には砂粒を多く含む。
15. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：地山。白色粘土を含む。

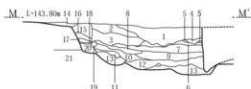


P'-P''

1. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。
15. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：軽石・砂粒を含む。
16. 黄灰色土(2.5Y4/1)：やや粘質。砂粒を含むところがある。軽石を含む。
17. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1)：薄い層をなすところがある。
18. 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)：礫(φ5～10cm)。軽石を含む。
- 18'. 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)：礫(φ5～10cm)を含む。
19. 黄灰色砂(2.5Y4/1)：層をなして堆積。下層は砂粒径が大きい。
20. 黒色粘土(2.5Y2/1)：ややシルト質。中間に灰白色粘土の薄い層が入る。
21. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：軽石・灰白色シルト粒を含む。
22. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ロームブロックを含む。
23. オリブ褐色土(2.5Y4/3)：軽石を含む。
24. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：にぶい黄色シルト粒を含む。
25. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を多く含む。
26. 黄灰色土(2.5Y4/1)：灰白～淡黄シルトの小ブロックを含む。軽石を含む。
27. 灰白色シルトブロックと暗灰黄色土の混合。
28. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石・ロームブロックを含む。
29. 暗灰黄色土(2.5Y4/1)：軽石を多く含む。ロームブロックを含む。
30. ロームブロック・黄灰色土(2.5Y4/1)・灰白色シルトブロック(2.5Y7/1)の混合。
31. 黒褐色土(2.5Y3/2)：地山崩落土。緻密で均質な土。
32. 黄褐色ローム土(2.5Y5/6)：地山崩落土。
33. 暗灰黄色土ブロック(2.5Y5/2)・黄灰色土・灰白色シルトの混合上。
34. 黄灰色土(2.5Y4/1)：暗灰黄色土ブロック(2.5Y5/2)を含む。
35. 黄褐色土(2.5Y5/3)：灰白色シルトブロックを含む。
36. 灰白色シルトブロック主体の層(2.5Y7/1)：黄灰色土を含む。
37. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4)と黄灰色土(2.5Y4/1)との混合。
38. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。
39. 黒褐色土(2.5Y3/2)：灰白色シルトブロックを少量含む。
40. 灰白色シルトブロック(2.5Y7/1)。
41. 黒色土(2.5Y2/1)：軽石・灰白色シルトの小ブロックを含む。
42. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4)：地山崩落土。
43. 灰白色シルト(2.5Y8/1)：黄灰色土(2.5Y4/1)を少量含む。
44. 黄灰色土(2.5Y4/1)：黄褐色ロームブロックを含む。
45. 灰白色シルト(2.5Y8/1)と黄灰色シルト(2.5Y7/2)との混合。
46. 黄褐色ローム土(2.5Y5/3)：砂粒を含む。
47. 黄褐色ローム土(2.5Y5/6)：上層に薄く灰白色シルトの層がある。
48. オリブ褐色土(2.5Y4/3)：ロームブロックを含む。
49. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：地山崩落土。緻密で均質。
50. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：砂粒・ローム粒を含む。
51. オリブ褐色土(2.5Y4/3)：下部に黄灰色土粒を含む。
52. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：礫と同質。地山崩落土。
53. 黄褐色ローム土ブロック・黒褐色土・灰白色シルトブロックの混合。
54. 黄褐色ローム土(2.5Y5/6)：地山崩落土。均質。
55. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：灰白色シルト小ブロックを含む。
56. 灰白色シルトブロックと黄灰色土との混合。
57. 灰白色シルト(2.5Y7/1)地山。白色粘土を含む。

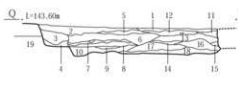
0 1:80 2m

第197図 2・5号粘土採掘坑、粘土採掘坑群断面図(2)



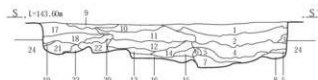
M-M'

1. 灰黄褐色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒・砂粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・ローム粒を含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・ローム粒を含む。やや粘質で固く締まる。
4. 暗灰黄色砂(2.5Y4/2): 細かい層をなす部分がある。
5. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1): 細かい層をなす。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。
7. 黒褐色粘質土(2.5Y3/1): 軽石を部分的に含む。2~3層に分かれる。西へ行くに従い粒子が細かくなり粘性が増す。
8. 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2): 細砂粒を含む。細かい層をなす部分がある。
9. 黄灰色砂(2.5Y5/1): シルト分を含むところがある。細かい層をなす。
10. 暗灰黄色シルト(2.5Y5/2): 微砂粒を含む。細かい層をなす。
11. 黒褐色砂質土(2.5Y3/2): 軽石・灰白色シルト粒を含む。
12. 暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2): 灰白色シルトブロックを含む。鉄分を含むところがある。
13. 灰白色シルトブロック主体の層。暗灰黄色土を含む。
14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。
15. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を含む。(15~20は6号溝)
16. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石が少なくシルト分が多い。
17. 暗灰黄色砂(2.5Y4/2): 細かい層をなす。
18. 黒色粘質土(2.5Y2/1): 浅黄色シルトブロックを少量含む。
19. 黒褐色シルトブロック(2.5Y3/1): 砂粒を含む。
20. 黄灰色砂質土(2.5Y4/1): 灰黄色シルトブロック・ローム粒を含む。
21. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 地山。白色粘土を含む。層状に含む部分もある。



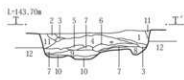
Q-Q'

1. 暗灰黄色砂(2.5Y4/2): 細かい層をなす。
2. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を多く含む。
3. 黒色土(2.5Y2/1): 軽石を含む。(3・4は6号溝)
4. 黄灰色土(2.5Y4/1): 黒褐色土・暗灰黄色シルトが層状に入る。砂粒を含む層もある。
5. 灰白色(2.5Y7/1)・灰黄色(2.5Y6/2)シルトブロックと黄灰色土(2.5Y4/1)の混合。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石・灰白色シルト粒を含む。
7. 黄灰色粘土(2.5Y4/1): 均質でできが細かい。薄い層をなす。
8. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・粗砂を含む。
9. 黄灰色粗砂(2.5Y5/1): シルト粒を含む。
10. 灰白色シルト(2.5Y7/1)と灰黄色シルト(2.5Y6/2)はブロック状に入っている。黒褐色土(2.5Y3/1)の混合。
11. 黄灰色砂。
12. 黒色砂質シルト(2.5Y2/1)と黄灰色砂(2.5Y5/1)とが細かい層をなす。
13. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 砂を多く含む。
14. 黄灰色粗砂(2.5Y4/1): シルト分を全体に含む。
15. 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2): 地山崩落上。緻密。
16. 暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2): 地山崩落上。緻密。
17. 黄褐色粘質土(2.5Y5/3): 暗灰黄色粘質土ブロック(2.5Y4/2)・ぶい黄色土ブロック(2.5Y6/3)を含む。
18. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 灰白色シルトブロックを含む。
19. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 地山。白色粘土を含む。層状に含む部分もある。



S-S' (5号粘土採掘坑)

1. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を多く含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y3/2): 暗灰黄色粘質土ブロック(2.5Y5/3)を含む。
3. 黄褐色土(2.5Y5/3): 地山崩落上。
4. 黒褐色土(2.5Y3/1)・灰白色シルト(2.5Y7/1)・灰黄色シルト(2.5Y6/2)の互層。砂を多く含む部分もある。薄い層をなす部分が多い。
5. 灰白色シルト(2.5Y6/2): 主体の上。灰白色シルト・黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。
6. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・粗砂を多く含む。
7. 灰白色シルト(2.5Y8/2): 地山崩落上。
8. 灰白色シルト(2.5Y8/1): 黄灰色土(2.5Y4/1)を含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 軽石を含む。
10. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石を含む。
11. 黒褐色土(2.5Y3/1)と黄灰色砂(2.5Y4/1)との互層。軽石を含む。
12. 黄灰色砂(2.5Y5/1): 細かい層をなす。
13. 黄灰色土(2.5Y4/1)と灰白色シルト(2.5Y7/1)の互層。砂を含む層もある。
14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2): 混じりけが少ない。やや粘質。固く締まっている。
15. 黄灰色粗砂(2.5Y4/1)。
16. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 黄灰色土(2.5Y5/1)を含む。
17. 黄灰色土(2.5Y4/1): 軽石・粗砂多い。
18. 黄灰色土(2.5Y5/1)と黄灰色砂(2.5Y5/1)の互層。
19. 黄灰色砂質土(2.5Y5/1): 細かい砂からなる。細かいシマ状。
20. 黄灰色土(2.5Y5/1): 軽石を含む。



T-T'

1. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y3/1): 砂粒をわずかに含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1): ロームブロック・灰白色シルトブロックを含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2): ロームブロック・軽石を含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/1): 軽石を含む。
6. 黒色土(2.5Y2/1): 軽石・砂粒を含む。
7. 黄褐色ローム土(2.5Y4/4): 地山崩落上。
8. 黒褐色土(2.5Y3/1): 軽石・砂粒を含む。
9. 黒褐色土とロームブロックの混合。灰白色シルトブロックを織らに含む。
10. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4): 黄灰色土を含む。
11. 地山崩落上。
12. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 地山。白色粘土を含む。層状に含む部分がある。
21. 黄灰色土(2.5Y5/1): 灰白色シルト粒・軽石を多く含む。
22. 暗灰黄色シルトブロック(2.5Y7/1)・灰黄色シルトブロック(2.5Y6/2)と黒褐色土(2.5Y3/1)の混合。
23. 灰黄色シルト(2.5Y7/2): 地山崩落上。鉄分で固まっている部分がある。
24. 灰白色シルト(2.5Y7/1): 地山。白色粘土を含む。層状に含む部分もある。

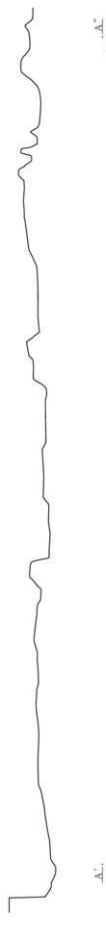
0 1:80 2m

第198図 2・5号粘土採掘坑、粘土採掘坑群断面図(3)



- U-U' (2号粘土採取坑)
1. 灰黄褐色土(10.0R/2)：軽石を多く含む。
 2. 黒褐色土(2.5Y3/2)：軽石を多く含む。
 3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石・ローム粒を含む。
 4. 黄褐色土(2.5Y4/1)：軽石を含む。
 5. 黄褐色土(2.5Y4/1)と黒褐色土(2.5Y3/1)との混合。軽石を多く含む。
 6. 黄褐色土(2.5Y4/1)：軽石を少量含む。
 7. 黄褐色土(2.5Y5/4)：ソフトロームか、地山崩落土。暗密。
 8. 黒褐色土(2.5Y3/1)：ローム粒・砂粒を含む。
 9. 浅灰色シルト(2.5Y7/4)：黄褐色土(2.5Y4/1)を含む。地山崩落土。
 10. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：地山崩落土。暗密。
 11. 黄褐色土(2.5Y5/4)：ソフトロームか、地山崩落土。暗密。
 12. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：地山崩落土。暗密。
 13. 灰黄色シルト(2.5Y7/2)：灰白色シルトブロック・暗灰黄色土を含む。
 14. 黄褐色土(2.5Y4/1)：軽石・ロームブロックを含む。
 15. 灰白色シルト(2.5Y7/2)：灰白色シルトブロック・暗灰黄色土を含む。
 16. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：軽石・ロームブロック・灰黄色シルトブロックを含む。
 17. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石・ロームブロックを含む。
 18. 黄褐色土(2.5Y5/3)：ソフトロームか、地山崩落土。暗密。
 19. 灰白色シルト(2.5Y8/1)と浅灰色シルト(2.5Y7/3)の混合。
 20. 黄褐色土(2.5Y5/4)：ソフトロームか、地山崩落土。暗密。
 21. オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：地山崩落土。部分的に暗灰黄色土(軽石含む)を含む。
 22. 黄褐色土(2.5Y5/4)：ソフトロームか、地山崩落土。暗密。
 23. 黒褐色土(2.5Y3/2)：灰黄色シルトブロックを露らに含む。軽石粒を多く含む。
 24. 灰白色シルト(2.5Y7/1)：地山。白色粘土を多く含む。

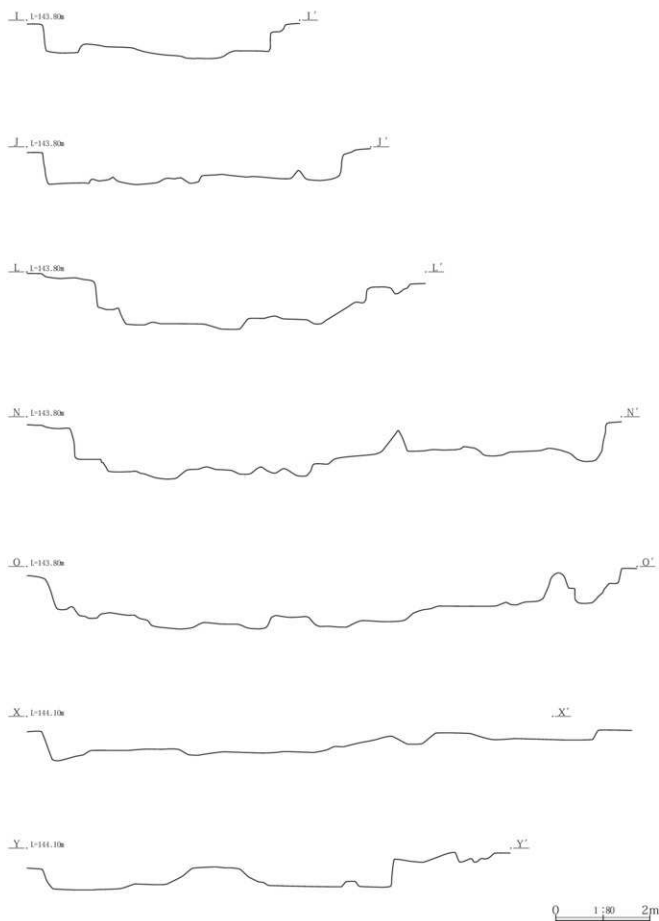
A.-1:144.0m



C.-1:10.0m



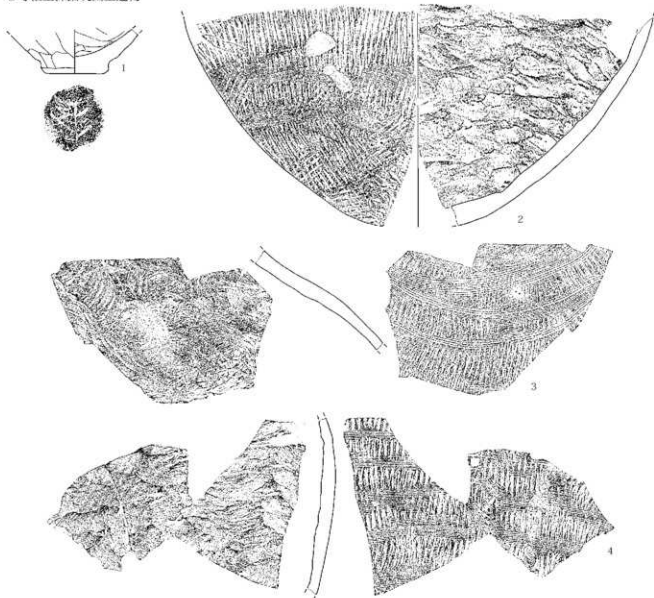
第199図 2・5号粘土採取坑、粘土採取坑群断面図(4)



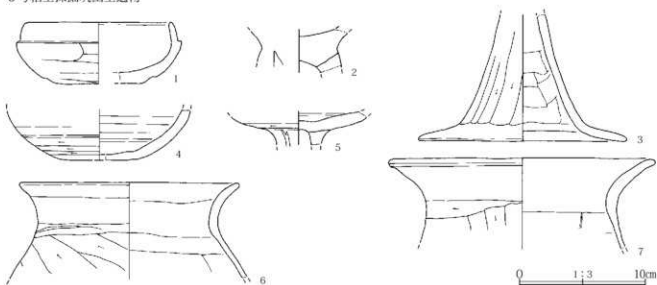
第200圖 2・5号粘土採掘坑、粘土採掘坑群断面図(5)

第3章 調査の成果

2号粘土探掘坑出土遺物

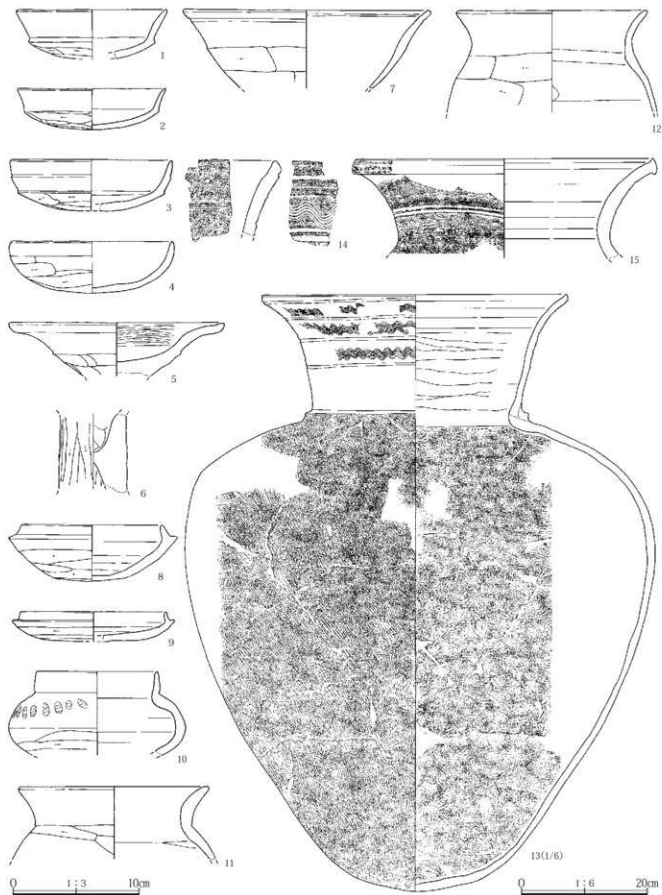


5号粘土探掘坑出土遺物



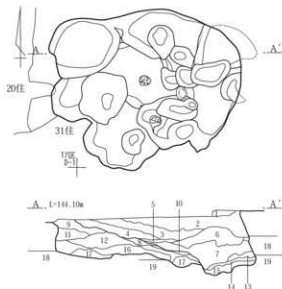
第201図 2・5号粘土探掘坑出土遺物

粘土採掘坑群出土遺物



第202圖 粘土採掘坑群出土遺物

9号粘土探掘坑



9号粘土探掘坑

1. 黄褐色土(2.5Y5/3)：軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：軽石を含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1)：軽石を含む。ローム粒わずかに含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ロームブロック・灰白色シルトブロックを含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/1)：やや砂質。灰白色シルト粒をわずかに含む。
6. 黒褐色土(2.5Y3/2)：黒色土(2.5Y2/1・白色軽石含む)ブロックを含む。
7. 黒褐色土(2.5Y3/2)：やや砂質。混じりけ少ない。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・灰白色シルト粒・黒色土粒を含む。
9. 8とはほぼ同質だが、焼土を含む。
10. に深い黄褐色ローム土(10YR5/4)と黒褐色土(2.5Y3/2)との混合。
11. 焼土と黒褐色土との混合。20号住居のカマドの崩落土。
12. 黒褐色土(2.5YR3/2)：黒色土ブロック・灰白色シルトブロックを含む。
13. に深い黄褐色土(10YR4/3)：混じりけ少ない。地山崩落土。
14. 黒褐色土(2.5Y3/2)：灰白色シルトの小ブロックをわずかに含む。
15. 灰白色シルトブロック・ロームブロックの混土。黒褐色土をわずかに含む。
16. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4)：ロームの崩落土。
17. 灰白色シルトの崩落土。
18. に深い黄色ローム。やや粒子あらい。
19. 灰白色シルトやや砂質。白色粘土が層状に含まれる所がある。

0 1:80 2m



0 1:3 10cm

第203図 9号粘土探掘坑平面断面図・出土遺物

第10節 溜井

調査区南西隅にあり、62号住居を大きく破壊している。西側は調査区外となる。(第204・205図、第58表、P.L. 53・94)

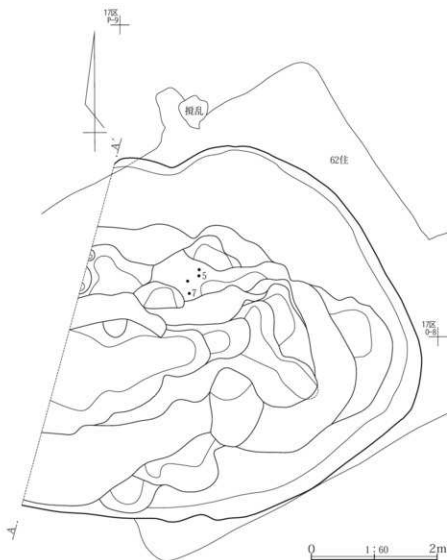
本遺跡の西側は底の平坦な谷が南北に走っており、調査区の西側はその谷へ落ち込む崖状の斜面となっている。そのため、斜面と調査区との間には、谷側への土砂の崩落を防ぐ目的で、ある程度の幅を掘り残す必要がある。本遺構の西側もそのために発掘することができず、遺構の全体を調査することはできなかった。

調査区内では大きな土坑に見える遺構であるが、本来は西側に向かって水を流す、「溜井」といわれる遺構であると思われる。南北の幅は4.50mであり、西側斜面から見て、崖を半円形に掘り込んでいる。崖から掘り込みの先端までは、正確に測ることはできなかったが、8～10mある。深さは、最も深いところで確認面から2.06mである。その底面のレベルは、本遺跡で見つかった井戸のレベルとほぼ同じであるが、調査時には湧水などは一切なかった。しかし、これは湧水期に調査したためであると思われる。地下水位の高い時期にはここから地下水が湧き、それを溝等で下流へと導いていたものと思われるが、前述のようにその部分は未調査である。また、底面には特に水を溜めるような施設、たとえば堰板のような施設の痕跡は見つからない。

出土した遺物は比較的多い。掲載したのは土師器環4点、同高環1点、同壘1点、須恵器環身1点、同環蓋1点、同壘1点、太刀と思われる形象埴輪1点である。その

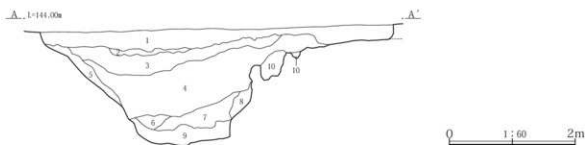
他、小破片として土師器甕類187点、同環類101点、同高環5点、須恵器甕類12点、同環類5点、同高台埴1点、赤色塗彩土器(器種不明)2点が出土している。

出土遺物の時期に幅があり、7世紀前半～8世紀前半のものが出土しているが、これは7世紀前半の62号住居と重複しているためであり、8世紀前半がこの遺構の年代のある程度を示すものと思われる。しかし、使われていた時期にはある程度の時間幅があると考えられるので、奈良～平安にかけてのものと考えられる。覆土の最上層にはAs-Bの純層が見られ、最終的に埋まったのは平安時代末である。その後ちょうど同じ位置に浅い掘削が掘られ、平面図ではそれが溜井の外側を丸く囲むように見える。断面に見られる1層はそれに相当する。



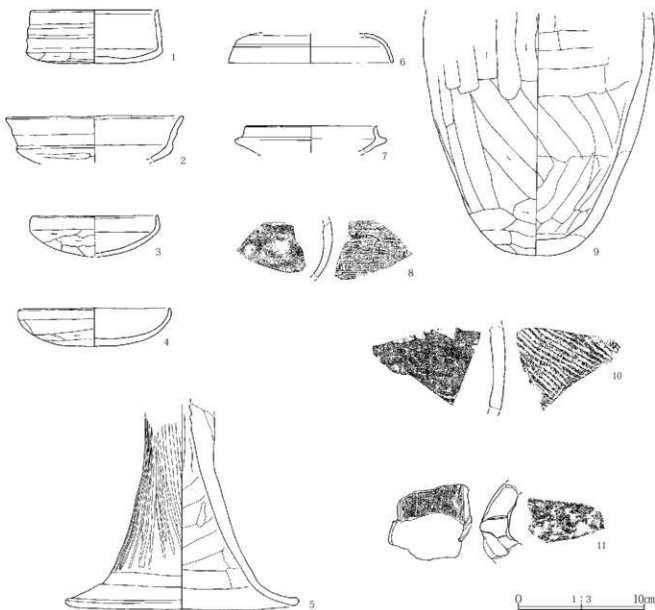
第204図 1号溜井平面図

第3章 調査の成果



1号溜井

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：西側低地への斜面を埋めた上。ごく新しいものらしい。
2. As-8純腐。
3. 黒色土(2.5Y3/1)：軽石を少量含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2)：ロームブロックを少量含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)：ローム粒を多く含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ローム粒・ロームブロックを多く含む。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1)：ローム粒・軽石を少量含む。
8. ロームの崩れた上。
9. ロームブロックと灰白色シルトブロック(2.5Y7/1)主体。ブロックの間に黄灰色土が入る。
10. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)：ロームブロックを含む。締まり弱くボロボロ。木根か。



第205図 1号溜井断面図・出土遺物

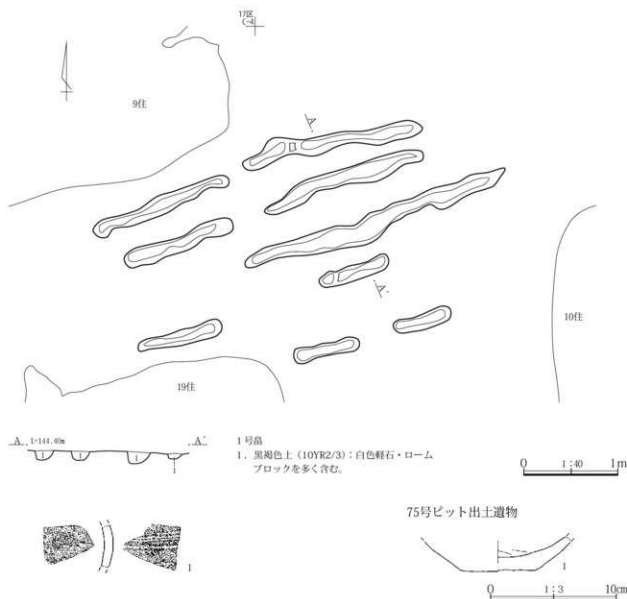
第11節 その他の遺構

その他の遺構としては、畝とピットがある。

畝の畝間と思われる線状の痕跡は調査区の各所で視認できたが、明瞭なもののごく少なく、1ヶ所のみであった。それは調査区中央南側で見つかったもので、9・10・19号住居に囲まれた場所にある。細い溝が5列平行したものであり、その形状から畝の畝間痕跡と考えられ、高耕作時の地表面はこの上面にあり、既に削平されているものと思われる。各畝間は幅0.10～0.25m、深さは最も深いところで0.13mである。これらの畝間痕跡が、長さ4.3m、幅2.4mの範囲に並んでいる。出土遺物はご

く少なく、掲載したのは須恵器類1点のみである。その他小破片として土師器器類4点、同坏類2点が出土しているが、これらが遺構に伴う証拠はない。また、埋土にも特に特徴的なところはなく、遺構の時期は不明である。

ピットは調査区北西部を中心として数多く見つかった。それらはおそらく掘立柱建物の柱穴となるものと考えられるが、北西部には削平が激しかったためか、全体に残りが悪く、建物として把握できたピットはごくわずかであった。それらの基礎的なデータは第7～9表に上げたとおりである。出土遺物は少なく、掲載できたのは75号ピットから出土した土師器器類1点のみである。



第206図 1号畝平面図・出土遺物、75号ピット出土遺物

第3章 調査の結果

第7表 ビット一覧表(1)

番号	区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深度	
1	17	F-2	0.27	0.24	0.24	道橋名のみは重複道橋・新旧不明
2	17	F-2	0.31	0.31	0.23	1号掘立1点
3	17	F-3	0.33	0.31	0.16	
4	17	F-2	0.28	0.25	0.20	
5	17	F-2	0.25	0.24	0.28	
6	17	F-2	0.25	0.24	0.17	
7	17	F-2	0.59	0.45	0.67	土留器費額6点、同環類1点
8	17	F-1	0.44	0.37	0.46	
9	17	F-2	0.34	0.29	0.40	4号溝
10	17	F-12	0.33	0.29	0.29	土留器費額1点
11	17	F-11	0.26	0.23	0.18	
12	17	F-11	0.26	0.21	0.16	
13	17	F-11	0.36	0.28	0.21	
14	17	E-9	0.64	0.46	0.35	25号土坑より新
15	17	E-8	0.46	0.33	0.56	
16	17	E-8	0.41	0.25	0.54	24号土坑・33号Pit
17	17	G-8	0.35	0.30	0.47	1号掘立
18	17	D-9	0.22	0.21	0.39	
19	欠香					4号掘立(P7)に変更
20	17	C-10	0.28	0.23	0.36	
21	17	D-8	0.30	0.26	0.68	25号Pit
22	17	D-8	0.21	0.20	0.27	2号掘立(P10)
23	欠香					5号掘立(P10)に変更
24	欠香					4号掘立(P6)に変更
25	17	D-8	0.34	0.25	0.73	21号Pit
26	17	G-8	0.30	0.28	0.41	
27	17	H-8	0.35	0.30	0.56	
28	欠香					4号掘立(P1)に変更
29	欠香					4号掘立(P2)に変更
30	欠香					5号掘立(P8)に変更
31	17	D-7	0.27	0.23	0.64	土留器費額9点
32	17	D-7	0.26	0.24	0.56	
33	17	E-8	0.45	0.37	0.73	24号土坑・16号Pit
34	17	E-11	0.53	0.45	0.17	
35	17	G-8	0.29	0.29	0.43	土留器費額2点、同環類5点
36	17	F-8	0.35	0.24	0.26	
37	17	B-9	0.37	0.34	0.54	
38	17	B-10	0.25	0.25	0.37	
39	17	B-9	0.38	0.37	0.47	
40	17	B-8	0.44	0.36	0.40	
41	17	B-8	0.57	0.42	0.46	土留器環類1点
42	17	B-8	0.40	0.38	0.38	土留器高環2点
43	17	B-8-9	0.34	0.25	0.39	
44	17	B-9	0.27	0.26	0.25	
45	17	B-9	0.47	0.46	0.45	
46	17	B-9	0.40	0.36	0.27	57号Pit
47	17	B-9	0.42	0.31	0.24	
48	17	B-9	0.34	0.30	0.28	
49	17	B-8	0.30	0.29	0.19	
50	17	B-8	0.31	0.27	0.17	
51	17	H-7	0.62	0.61	0.37	
52	17	E-8	0.40	0.32	0.56	
53	17	E-8	0.53	0.29	0.82	
54	17	E-8	0.51	0.41	0.51	
55	17	E-8	0.22	0.16	0.21	56号Pitより新
56	17	E-8	0.56	0.16	0.30	55号Pitより古
57	17	B-9	0.54	0.52	0.34	46号Pit
58	17	B-6	0.26	0.21	0.30	
59	17	C-7	0.27	0.25	0.16	
60	17	A-9	0.49	0.47	0.71	63号Pit
61	17	A-8	0.72	0.69	0.43	土留器費額2点
62	17	C-6	0.55	0.38	0.51	
63	17	A-9	0.55	0.36	0.48	60号Pit
64	欠香					5号掘立(P7)に変更
65	欠香					
66	欠香					5号掘立(P2)に変更

番号	区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深度	
67	欠香					5号掘立(P3)に変更
68	欠香					5号掘立(P4)に変更
69	欠香					5号掘立(P6)に変更
70	欠香					5号掘立(P9)に変更
71	17	E-6	0.25	0.25	0.27	
72	17	E-5	0.46	0.41	0.48	土留器費額3点
73	17	F-6	0.35	0.34	0.28	
74	17	E-5	0.41	0.30	0.34	土留器費額1点
75	17	D-5	0.34	0.34	0.46	土留器費額2点
76	17	F-5	0.36	0.33	0.32	土留器費額1点
77	17	F-5	0.28	0.25	0.32	
78	17	E-5	0.34	0.32	0.56	土留器環類1点
79	17	E-5	0.42	0.37	0.30	土留器費額1点、同環類1点
80	欠香					
81	17	C-D-4	0.34	0.29	0.43	
82	17	A-4	0.31	0.28	0.28	
83	17	B-4	0.62	0.56	0.60	
84	17	E-4	0.28	0.26	0.40	
85	17	T-A-4	0.34	0.31	0.28	土留器費額1点
86	17	B-4	0.28	0.28	0.43	土留器環類1点
87	17	A-8	0.39	0.32	0.42	
88	17	A-8	0.33	0.28	0.84	
89	16	T-8	0.27	0.23	0.42	
90	欠香					
91	16	S-8	0.51	0.47	0.60	土留器費額1点
92	16	S-7	0.45	0.39	0.39	
93	16	S-8	0.56	0.54	0.66	
94	16	S-8	0.36	0.34	0.46	
95	16	T-6	0.49	0.47	0.49	
96	16	T-6	0.40	0.38	0.81	
97	17	A-6	0.30	0.24	0.39	11号住居より新
98	17	A-5	0.41	0.39	0.55	
99	16	S-8	0.39	0.31	0.68	33号土坑
100	16	S-8	0.52	0.47	0.77	35号土坑
101	17	D-8	0.44	0.32	0.73	2号掘立(P10)
102	16	T-6	0.43	0.42	0.30	13号住居より新
103	17	H-10	0.58	0.49	0.29	43号住居より新
104	17	I-9	0.50	0.43	0.56	45号住居、105号Pitより新
105	17	I-9	0.38	0.32	0.38	104号Pitより古
106	17	I-9	0.45	0.42	0.38	45号住居より新
107	17	I-8-9	0.53	0.34	0.20	45号住居より新
108	17	I-9	0.38	0.38	0.20	45号住居より新
109	17	I-9	0.35	0.27	0.25	45号住居より新
110	17	I-9	0.38	0.27	0.49	45号住居より新
111	17	I-9	0.29	0.23	0.01	45号住居より新
112	17	I-9	0.39	0.30	0.12	45号住居より新
113	17	I-9	0.52	0.34	0.31	45号住居より新
114	17	I-8	0.31	0.30	0.11	45号住居より新
115	17	J-B-8	0.35	0.31	0.20	45号住居より新
116	17	J-8	0.42	0.30	0.19	45号住居より新
117	17	J-8	0.30	0.27	0.25	45号住居より新
118	17	I-9	0.27	0.23	0.18	45号住居より新
119	17	I-9	0.43	0.36	0.16	45号住居より新
120	17	J-9	0.35	0.29	0.24	45号住居より新
121	17	I-9	0.39	0.30	0.23	45号住居より新
122	17	C-12	0.42	0.38	0.26	
123	17	H-12	0.34	0.25	0.19	
124	17	H-12	0.28	0.28	0.26	
125	17	H-12	0.26	0.25	0.29	
126	17	H-12	0.31	0.28	0.30	
127	17	H-12	0.27	0.18	0.13	
128	17	H-11	0.37	0.28	0.38	
129	17	H-11	0.26	0.14	0.17	
130	17	H-11	0.34	0.24	0.28	
131	17	H-12	0.25	0.21	0.11	
132	17	H-12	0.28	0.27	0.11	

第8表 ビット一覧表(2)

番号	区	グリッド	埋 戻 (m)			備 考
			長軸	短軸	深度	
133	17	H-13	0.33	0.32	0.22	道橋名のみは重複遺構・新旧不明
134	17	H-13	0.36	0.29	0.53	
135	17	H-11	0.28	0.27	0.30	141号P1t
136	17	H-11	0.32	0.29	0.29	137号P1tより新
137	17	H-11	0.31	0.21	0.09	136号P1tより古
138	17	H-11	0.37	0.18	0.14	139号P1tより新
139	17	H-11	0.46	0.29	0.38	138号P1tより古
140	17	H-11	0.53	0.42	0.32	
141	17	H-13	0.24	0.16	0.20	134号P1t
142	17	H-12	0.28	0.24	0.15	
143	17	H-12	0.43	0.29	0.31	
144	17	I-10	0.23	0.21	0.22	
145	17	H-10	0.27	0.26	0.27	土師器坏類 1点
146	17	I-10	0.52	0.36	0.17	
147	17	H-10	0.36	0.27	0.43	
148	17	H-11	0.32	0.25	0.21	
149	17	H-10	0.32	0.21	0.48	
150	17	H-9	0.32	0.29	0.44	
151	欠番					
152	17	I-10	0.45	0.35	0.24	44号住居より新
153	17	H-11	0.26	0.26	0.20	
154	17	H-9	0.34	0.32	0.64	
155	17	H-9	0.44	0.36	0.27	土師器費類 2点
156	17	I-10	0.37	0.29	0.36	
157	17	I-10	0.37	0.31	0.38	
158	17	I-10	0.34	0.32	0.24	159号P1tより新
159	17	I-10	0.27	0.25	0.37	158号より古、160号P1tより新
160	17	I-10	0.38	0.36	0.58	158・159より古、172号P1t
161	17	H-10	0.32	0.31	0.33	173号P1t
162	17	I-9	0.41	0.33	0.15	土師器坏類 1点
163	17	I-9	0.46	0.31	0.25	
164	17	I-13	0.36	0.24	0.38	
165	17	H-12	0.35	0.34	0.29	
166	17	I-9	0.29	0.24	0.15	
167	17	I-9	0.36	0.26	0.18	
168	17	I-9	0.44	0.34	0.50	
169	17	H-13	0.44	0.37	0.39	
170	17	I-10	0.48	0.33	0.53	171号P1tより新
171	17	I-10	0.19	0.18	0.37	170号P1tより古、180号P1t
172	17	I-10	0.25	0.21	0.47	160号P1t
173	17	I-J-10	0.35	0.26	0.35	161号P1t
174	17	I-9	0.68	0.41	0.66	
175	17	I-9	0.45	0.35	0.56	176号P1tより新
176	17	I-9	0.59	0.34	0.51	175号P1tより古
177	17	I-9	0.32	0.30	0.18	
178	17	I-9	0.26	0.20	0.19	
179	17	I-9	0.39	0.38	0.09	
180	17	I-10	0.23	0.21	0.19	171号P1t
181	欠番					
182	17	J-13	0.22	0.19	0.35	
183	欠番					7号掘立(P7)に変更
184	17	J-14	0.26	0.16	0.71	185号P1tより新
185	17	J-14	0.24	0.19	0.42	184号P1tより古
186	17	J-13	0.29	0.28	0.19	
187	17	K-12・13	0.36	0.28	0.32	
188	17	K-13	0.38	0.33	0.43	
189	17	J-13	0.38	0.26	0.22	土師器費類 4点
190	17	J-13	0.23	0.19	0.13	土師器費類 1点
191	17	J-13	0.23	0.23	0.18	土師器費類 1点
192	17	J-12	0.28	0.22	0.19	48号住居より新
193	17	J-12	0.24	0.24	0.16	
194	17	J-12	0.22	0.19	0.25	
195	17	K-13	0.26	0.23	0.12	196号P1tより新
196	17	K-13	0.26	0.22	0.28	195号P1tより古
197	17	J-12	0.23	0.23	0.19	
198	17	K-12	0.22	0.21	0.12	7号溝

番号	区	グリッド	埋 戻 (m)			備 考
			長軸	短軸	深度	
199	17	I-12	0.27	0.24	0.24	
200	17	J-14	0.26	0.25	0.17	183号P1t
201	17	K-14	0.35	0.27	0.45	
202	欠番					7号掘立(P6)に変更
203	17	J-14	0.32	0.25	0.45	
204	17	J-14	0.36	0.28	0.32	
205	17	J-13	0.38	0.30	0.28	48号住居より新
206	17	I-12	0.19	0.15	0.17	
207	17	I-12	0.25	0.22	0.16	
208	17	J-12	0.26	0.23	0.21	
209	17	J-12	0.26	0.25	0.18	
210	17	J-12	0.16	0.16	0.12	
211	17	J-11	0.29	0.19	0.26	
212	17	L-13	0.26	0.25	0.45	
213	17	L-13	0.52	0.42	0.28	
214	17	J-12	0.27	0.20	0.17	215号P1tより新
215	17	J-12	0.22	0.17	0.19	214号P1tより古
216	17	J-14	0.55	0.29	0.38	
217	17	K-13	0.46	0.35	0.60	
218	17	L-13	0.33	0.29	0.22	56号土坑
219	17	K-13	0.34	0.32	0.48	
220	17	K-13	0.27	0.21	0.26	
221	欠番					7号掘立(P3)に変更
222	17	K-13	0.29	0.28	0.44	
223	欠番					
224	17	J-13	0.22	0.16	0.34	
225	欠番					
226	17	K-13	0.34	0.29	0.41	7号掘立(P4)
227	17	K-12	0.63	0.47	0.25	
228	17	K-14	0.32	0.24	0.56	
229	17	L-14	0.28	0.26	0.52	
230	17	J-K-14	0.38	0.27	0.51	
231	17	L-14	0.37	0.26	0.56	
232	17	L-14	0.26	0.21	0.36	
233	17	L-12	0.31	0.29	0.64	
234	17	K-14	0.22	0.19	0.50	
235	17	K-14	0.19	0.15	0.57	246号P1t
236	17	K-14	0.24	0.23	0.17	
237	17	L-13	0.38	0.35	0.56	
238	17	K-12・13	0.26	0.22	0.23	7号溝
239	17	L-13	0.35	0.33	0.16	
240	17	K-13・14	0.29	0.24	0.41	
241	17	K-14	0.22	0.14	0.48	
242	17	K-13	0.34	0.29	0.60	
243	17	H-12	0.39	0.31	0.40	
244	17	I-13	0.35	0.24	0.32	
245	17	I-13	0.34	0.22	0.32	
246	17	K-14	0.24	0.21	0.57	235号P1t
247	17	K-14	0.28	0.27	0.28	
248	17	K-14	0.24	0.24	0.33	
249	欠番					7号掘立(P5)に変更
250	欠番					7号掘立(P2)に変更
251	17	K-13	0.38	0.34	0.40	
252	17	K-13	0.31	0.29	0.41	土師器費類 1点
253	17	K-13	0.31	0.27	0.22	
254	17	H-11	0.39	0.35	0.38	
255	17	I-10	0.49	0.41	0.43	
256	17	J-10	0.29	0.26	0.15	
257	17	I-9	0.29	0.26	0.32	
258	17	I-9	0.27	0.25	0.22	275号P1t
259	17	J-10	0.24	0.24	0.21	
260	17	I-10	0.33	0.30	0.31	
261	17	J-12	0.58	0.51	0.25	11号溝
262	17	L-13	0.48	0.47	0.47	50号住居
263	17	L-13	0.33	0.22	0.13	50号住居
264	17	L-13	0.28	0.23	0.29	50号住居・79号土坑

第3章 調査の結果

第9表 ビット一覧表(3)

番号	区	グリッド	層 模 (m)			備 考
			長軸	短軸	深 度	
265	17	L-13	0.27	0.19	0.54	50号住居
266	17	L-13	0.24	0.21	0.34	50号住居
267	17	L-13	0.29	0.27	0.47	50号住居
268	17	L-13	0.19	0.17	0.11	50号住居
269	17	L-13	0.42	0.28	0.30	50号住居
270	17	K-L-13	0.42	0.35	0.33	50号住居・79号土坑
271	欠番					7号掘立(再)に変更
272	17	I-9	0.25	0.24	0.22	
273	17	I-9	0.23	0.18	0.16	275号Pit
274	17	I-10	0.43	0.41	0.63	
275	17	I-9	0.39	0.33	0.49	258・273号Pit、大きな石あり
276	17	I-10	0.24	0.18	0.17	
277	17	I-9	0.25	0.19	0.18	
278	17	I-9	0.35	0.33	0.31	282号Pit
279	17	I-9	0.25	0.21	0.19	280号Pit
280	17	I-9	0.27	0.22	0.34	279・281号Pit
281	17	I-9	0.36	0.24	0.47	280・282号Pit
282	17	I-9	0.58	0.26	0.14	278・281号Pit
283	17	I-10	0.34	0.31	0.28	
284	17	I-10	0.26	0.23	0.20	
285	17	I-9	0.44	0.29	0.32	
286	17	I-9	0.36	0.28	0.30	
287	17	I-9	0.41	0.25	0.38	
288	17	I-9	0.52	0.33	0.27	
289	17	I-8	0.51	0.45	0.14	
290	17	J-8	0.41	0.31	0.34	
291	17	I-8	0.47	0.34	0.29	292号Pitより新
292	17	I-J-8	0.34	0.30	0.39	291号Pitより古
293	17	J-7	0.68	0.46	0.22	
294	17	J-10	0.74	0.44	0.25	295号Pitより古
295	17	J-10	0.27	0.20	0.32	294号Pitより新
296	17	I-J-8	0.43	0.31	0.27	300・306号Pitより新
297	17	I-8	0.34	0.32	0.14	
298	17	I-8	0.34	0.32	0.51	
299	17	I-7-8	0.56	0.42	0.22	
300	17	I-8	0.21	0.20	0.31	296号Pitより古
301	17	J-7	0.37	0.32	0.31	
302	17	J-8	0.42	0.22	0.56	303号Pitより古
303	17	J-8	0.39	0.17	0.42	302号Pitより新
304	17	J-8	0.34	0.27	0.44	305号Pitより新
305	17	J-8	0.35	0.18	0.52	304号Pitより古
306	17	I-8	0.15	0.13	0.32	296号Pitより古
307	17	I-7	0.32	0.20	0.17	
308	17	J-8	0.38	0.25	0.27	309号Pitより新
309	17	J-8	0.20	0.19	0.23	308号Pitより古
310	17	J-8	0.19	0.18	0.44	
311	17	J-10	0.24	0.21	0.15	
312	17	J-10	0.30	0.18	0.40	313号Pitより古
313	17	J-10	0.29	0.25	0.52	312号Pitより新
314	17	K-10	0.27	0.25	0.38	
315	17	K-9	0.43	0.31	0.32	
316	17	J-10	0.31	0.19	0.24	
317	17	J-10	0.24	0.18	0.17	
318	17	J-10	0.26	0.14	0.30	319号Pit
319	17	J-10	0.17	0.13	0.35	318号Pit
320	17	K-11	0.24	0.24	0.18	
321	17	K-10	0.32	0.26	0.37	
322	17	K-11	0.32	0.27	0.16	
323	17	J-10	0.24	0.23	0.16	
324	17	J-11	0.18	0.18	0.13	
325	17	J-10	0.27	0.25	0.10	
326	17	K-10	0.23	0.21	0.29	
327	17	J-8	0.37	0.32	0.47	
328	17	J-8	0.19	0.19	0.41	
329	17	J-8	0.36	0.29	0.62	
330	17	J-8	0.33	0.27	0.47	

番号	区	グリッド	層 模 (m)			備 考
			長軸	短軸	深 度	
331	17	J-7	0.26	0.24	0.19	
332	17	K-L-7-8	0.51	0.47	0.42	
333	17	J-7	0.39	0.31	0.28	
334	17	K-8	0.28	0.25	0.35	
335	欠番					
336	欠番					
337	17	K-8	0.24	0.19	0.22	
338	17	K-8	0.29	0.24	0.39	
339	17	K-8	0.52	0.32	0.50	
340	17	K-9	0.27	0.22	0.21	
341	17	K-10	0.36	0.32	0.17	
342	17	K-10	0.38	0.36	0.19	
343	欠番					
344	欠番					
345	欠番					
346	欠番					
347	欠番					
348	17	K-7	0.39	0.38	0.27	
349	17	K-7	0.35	0.29	0.32	
350	17	L-7	0.54	0.45	0.33	
351	17	K-6	0.47	0.45	0.58	
352	17	J-6	0.56	0.41	0.45	
353	17	J-6	0.39	0.36	0.32	
354	17	J-6	0.36	0.34	0.44	
355	17	K-6	0.38	0.33	0.58	
356	17	K-7	0.34	0.33	0.51	
357	17	K-6	0.46	0.39	0.35	
358	欠番					
359	17	K-6	0.39	0.36	0.45	
360	17	K-7	0.34	0.27	0.30	
361	欠番					
362	欠番					
363	欠番					
364	欠番					
365	欠番					
366	欠番					
367	欠番					
368	17	P-6	0.39	0.37	0.26	369号Pitより新
369	17	P-6	0.39	0.26	0.20	368号Pitより古

第12節 縄文時代の遺物

本遺跡からは明らかな縄文時代の遺構は見つかっていない。そのため、縄文時代の遺物は基本的に混入したものと考えてよいものである。そのため、それらを出土した遺構で個別に取り上げることはあまり意味のあることとは思えないので、遺構外出土のものも含め、本節でまとめて報告することにした。

1、縄文土器(第207・208図、第58・59表、P.L. 95)

本遺跡からは縄文土器が208点出土した。内訳は関山Ⅰ式2点、黒浜式7点、前期前葉～中葉68点、諸磯a式1点、諸磯b式10点、諸磯c式59点、浮島式1点、興津式1点、前期後葉21点、阿玉台式1点、中期中葉1点、称名寺Ⅰ式1点、同Ⅱ式7点、堀之内Ⅰ式1点、後期前葉14点、不明13点となり、黒浜期、諸磯c期が数量的に多い傾向にある。そのうちの35点を図化、掲載した。以下、説明を加える。

1、2は関山Ⅰ式。1は梯子状沈線により鋸歯状あるいは菱形モチーフを描き、貼付文を付す。2は口縁が緩く内湾する器形を呈す。口縁下に集合沈線をめぐらせて口縁部短沈線帯を作り、文様帯内に集合沈線を用いた円文を描き、斜行集合沈線で連結させる。余白に斜切文を充填施文し、貼付文を付す。3・4は有尾式。5～8は黒浜式。3、4は連続爪形文により菱形状文を描く。5はR Lを横位施文し、コンパス文を施す。6～8は縄文施文の土器。6、7はL R、8はR L、L Rを羽状施文する。9は前期前葉でループ縄文による羽状構成。10～13、20は諸磯b式。10は波状口縁で強く内湾する器形。横位集合沈線を施し、沈線間に鋸歯状文を施す。11、12は同一個体で、浮線による横帯構成。地文にR Lを横位施文する。13は集合沈線による横帯構成。20は屈曲する部位。集合沈線による帯状構成で、屈曲部上位に円形刺突をめぐらす。14～19、21～24は諸磯c式。14は口縁部に矢羽根状、横位集合沈線を施し、貼付文を付す。口縁内面を肥厚させ、肥厚部に斜位の集合沈線、貼付文を施す。15、17は緩く内湾する口縁部に横位集合沈線を施し、貼付文を付す。16は口縁が短く内湾する。口縁部に斜位、横位の集合沈線を施し、以下、縦位のモチーフが

展開、貼付文を付す。18、19は同一個体。無節L Rを横位施文し、口縁下に刺突をめぐらせて貼付文を付す。21、23は横位集合沈線、縦位展開するモチーフを描く。22は鋸歯状の集合沈線を施し、貼付文を付す。24は底部破片で、横位の集合沈線を施す。25は浮島式。緩く外反する器形を呈し、ロッキングを施す。26は興津式。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、沈線間に貝殻腹縁文を充填施文する。27、28は前期後葉の縄文施文土器。27は附加条1種L r+rの結節縄文を横位施文する。28はR Lを横位施文する。29は阿玉台式でヒダ状文がみられる。30、31は称名寺Ⅱ式。30は波頂部の環状突起。31は帯状沈線によりJ字状、弧状モチーフを描く。32は堀之内Ⅰ式。L Rを地文とし、横位、人組み状の沈線を施す。33は称名寺Ⅰ式。帯状沈線を施し、R Lを充填施文する。34は後期前葉の底部破片で、推定底径8.5cmを測る。35は土製円盤。黒浜式の胴部破片を利用し、外周の2/3ほどを整えている。

2、石器(第208・209図、第59・60表、P.L. 95・96)

草創期有茎尖頭器を含む54点が出土したが、掲載したのは合計22点である。54点のうち、主な石器には打製石斧22点(40.7%)、削器6点(5.5%)、加工痕のある剥片12点(22.2%)などの剥片系石器がある。礫石器は凹石3点(5.5%)が出土しているのみである。石鏃・石錐・石匙は各々1～2点の出土で量的には少ない。石材は11種があるが、黒色頁岩が32点(59.3%)と最も多い。分布は調査地のほぼ全域から出土しているが、台地頂部に少なく、台地縁辺から多く出土する傾向が見える。打製石斧に偏る組成、石鏃の少なさ、凹石を除く礫石器がないのが特徴で、やや奇異な印象がある。掲載したのは、36～38が石鏃、39が草創期の有茎尖頭器、40が石錐、41・42が石匙、43が削器、44～52が打製石斧、53～55が石核、56・57が凹石である。

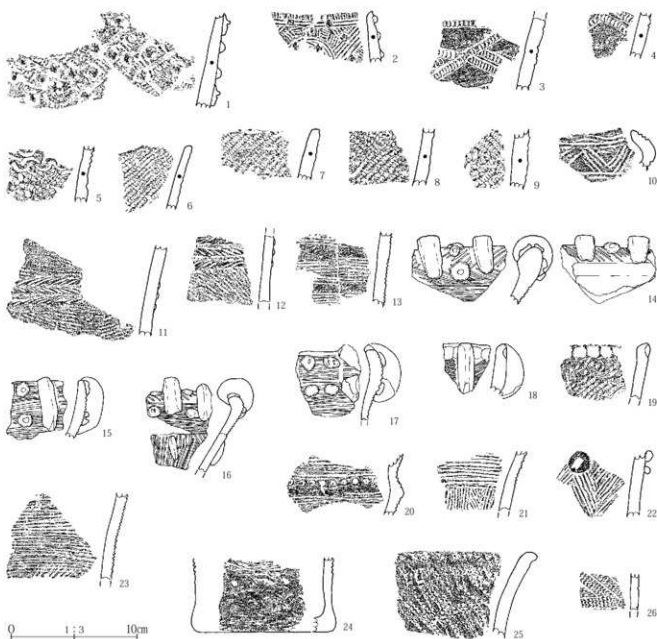
第3章 調査の成果

第10表 石器器種別石材組成一覧

石材	打製石斧	有茎尖頭器	石鏃	石匙	石鏃	削器	石核	加工痕ある剥片	凹石	合計
黒色頁岩	14	1		1	1	4	1	10		32
頁岩	1					1	1			3
珪質頁岩							1	1		2
黒色安山岩						1		1		2
黒曜石			1	1						2
チャート			1							1
灰色安山岩	4									4
細粒輝石安山岩	1						1			2
粗粒輝石安山岩									3	3
変玄武岩	2						1			2
変質玄武岩	2									2
合計	22	1	2	2	1	6	5	12	3	54

第11表 剥片石材組成一覧

石材	個数	重量 (g)
黒色頁岩	174	5379.3
頁岩	3	71.3
珪質頁岩	4	128.2
黒色安山岩	4	120.7
黒曜石	1	5.5
チャート	3	85.6
灰色安山岩	7	224.7
細粒輝石安山岩	4	265.2
粗粒輝石安山岩	2	75.8
砂岩	1	12.7
変玄武岩	0	0
変質玄武岩	2	51.5
合計	205	6420.5

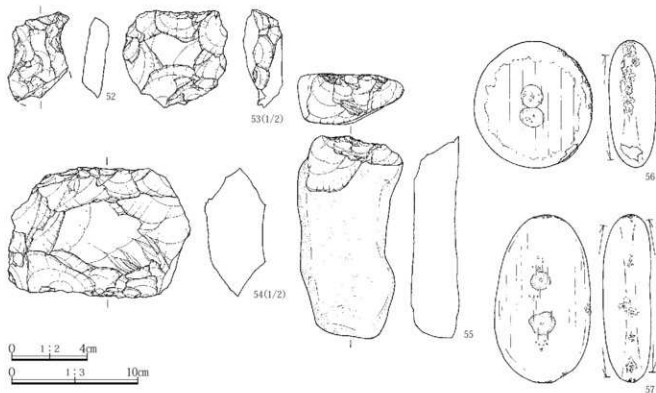


第207図 縄文時代の遺物(1)



第208図 縄文時代の遺物(2)

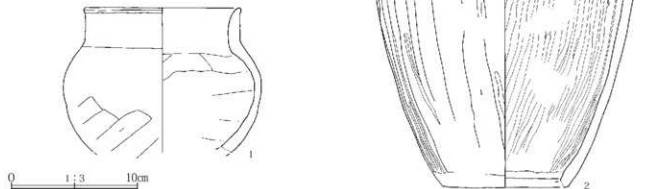
第3章 調査の成果



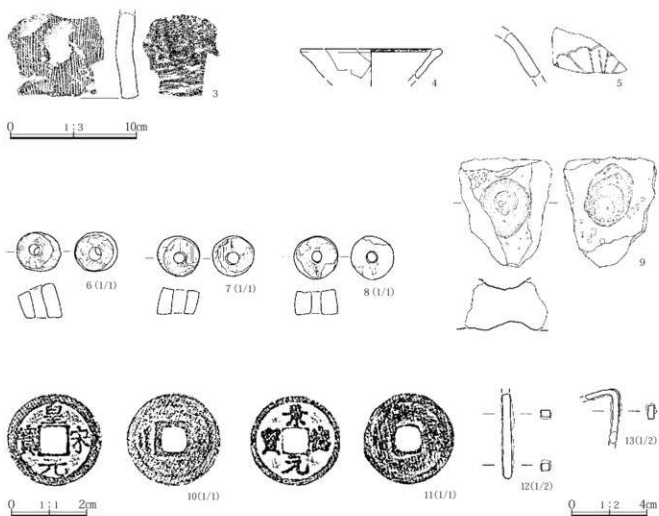
第209図 縄文時代の遺物(3)

第13節 遺構外出土の遺物

遺構外からも多くの遺物が出土しているが、ほとんどは小破片である。ここでは古墳時代～中・近世の遺物で、ある程度の大きさに復元できたもの、及び石製品、銅銭、鉄器などを中心に取り上げた。(第210・211図、第60・61表、P.L. 96)取り上げえなかった小破片の土器は土師器甕類5,231点、同環類2,229点、同高環48点、赤色塗彩土器24点、須恵器甕298点、同環59点、同蓋9点、同高環45点、中世軟質陶器1点、埴輪9点である。



第210図 遺構外出土の遺物(1)

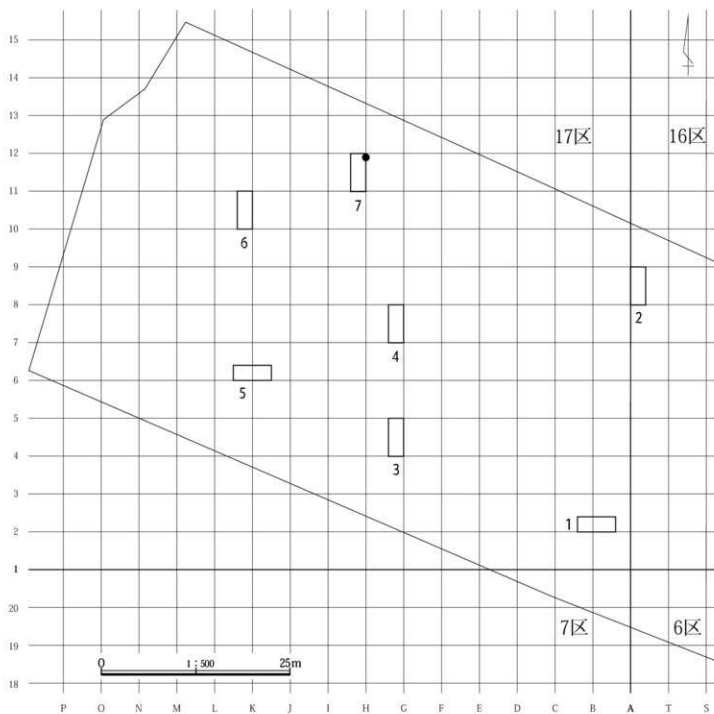


第210図 遺構外出土の遺物(2)

第14節 旧石器時代の調査

本遺跡の調査範囲全域には、ロームが比較的良好な状態で残っていたため、遺構の調査終了後、旧石器時代の調査を実施した。調査は2m×5mのトレンチを設け、その中をジョレンを用いて注意深く掘り下げ、遺物・遺構が見つければ、随時周囲に調査区を広げるといった方法で行うことにした。しかし、本遺跡は竪穴住居等の遺構が数多く存在し、それらのうちのほとんどはローム層を掘り抜いて基盤となるIX層にまで達する状態となっていた。そのため、トレンチはそれらの遺構を避ける形で第210図のように設定し、合計7ヶ所として調査を行った。その結果、遺構・遺物とも発見されなかった。

なお、7トレンチに見える●印は、火山灰分析の試料採取地点である。これについては第4章第4節1を参照のこと。



第212図 旧石器調査トレンチ配置図

第4章 総括

第1節 出土土器について

東田之口遺跡では竪穴住居、掘立柱建物、粘土採掘坑、井戸、土坑などの多くの遺構が発掘調査で検出されている。遺構のなかでは竪穴住居が主体を占めており、その数は68軒を検出している。竪穴住居は概観すると古墳時代中期5世紀代と古墳時代後期6世紀から7世紀までのもので占められている。特に古墳時代後期の竪穴住居から土師器を主に若干の須恵器を伴う多量の土器が出土している。土器は遺構の重複関係などから多少の混在はみられるものの比較的良好的な共存関係を見ることが可能である。

今日、県内の土器については多くの研究者によって土器編年をはじめ多くの分析、検討が行われている。土器編年では地域間での多少の相違点や変化はみられるが研究者の間では概ね一致した見解が示されている。東田之口遺跡が立地する赤城南麓でも東約2キロに位置する芳賀東部郡地遺跡では33haに及ぶ発掘調査で古墳時代4世紀から11世紀代にかけての竪穴住居420軒、掘立柱建物138棟、鍛冶遺構3基、古墳4基など多くの遺構が検出されている。これらの成果は1984年から1990年にかけてⅠ・Ⅱ・Ⅲと3冊に及ぶ報告書でその成果が報告されている。そのなかでは唐沢康之・前原照子氏によって「土器の分類」として古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居から出土した土器による分類が行われ、変遷が提示されている。これらの成果と東田之口遺跡出土の土器群を比較すると土師器A類やC類の割合が非常に少ないなどの相違点がみられるのでここに改めて出土土器の分類、変遷について検討を行うこととした。

1 分類

出土した土器群には土器種に土師器、須恵器がある。土師器には環、埴、高環、鉢、有孔鉢、短頸壺、小型丸底壺、壺、甗、小型甗、甗、須恵器には合子状坏身・蓋、小型丸底坏身・蓋、高環、高鉢、鉢、横瓶、平瓶、短頸壺、長頸壺、壺、器台、甗など多くの器種を見ることができ

る。その中で土師器環、高環、鉢、小型甗、甗などそれぞれの竪穴住居から普遍的に出土している器種については形態に差を見ることができ、分類が可能であることから土器変遷を考える上での指標となりえる。また、東田之口遺跡では須恵器環、高環などは同時期の他の遺跡と比較すると多く出土しており、こうした須恵器も変遷を考える上で重要な土器群となりえる。しかし、それぞれの器種の出土量は少ない。また、共存関係でも幅広い関係を確認できるため後世までの残存を考慮する必要性がみられる。

分類を行った器種についての詳細は下記のとおりである。

土師器環

土師器環には須恵器合子状坏の蓋・身を模倣した形態であるいわゆる「模倣環」と模倣環の一種であり、口縁部に段を有する「有段口縁部環」、金属器模倣から発生した底部が丸底で口縁部がやや内湾する形態とその他の形態を見ることができる。

土師器環Aはいわゆる須恵器合子状坏身を模倣した形態である。口縁部の形態により大きくaとbの2区分が可能である。aは口縁部がほぼ垂直に立ち上がる形態である。bは口縁部がやや内傾する形態である。a、bとも口唇端部に平坦面や凹線が巡る形態をⅠ、口唇端部の平坦面が作られていない形態をⅡとする区分ができる。さらにそれぞれの分類の中で稜下の体部から底部の形態によってさらに細分が可能である。

aⅠは体部から底部の形態でⅠ～Ⅲに細分できる。Ⅰは器高が比較的高く、半球状の形態である。該当するものには11号住居4、29号住居1・3・4などがある。ⅡはⅠより体部から底部の器高が多少低く膨らみの弱い形態である。該当するものには11号住居3、34号住居3・4、62号住居1などがある。Ⅲは体部から底部の器高が低く、体部と呼べる範囲が存在しない形態である。該当するものには11号住居6、59号住居1・4がある。

aⅡはaⅠと同様な形態によりⅠ～Ⅲに細分できる。Ⅰに該当するものには25号住居1、Ⅱに該当する

るものには30号住居5、49号住居2、53号住居4などがある。－3に該当するものには6号住居8、34号住居2、53号住居2などがある。

b Iはa Iと同様な体部から底部の形態で細分が可能で、－1～－3に細分できる。－1に該当する形態には35号住居2、5号粘土採掘坑1などが該当する。－2に該当する形態には14号住居1、20号住居3、67号住居1などが該当する。－3に該当するものには52号住居1がある。

b IIはb Iと同様な形態により－1～－3に細分できる。－1に該当するものには20号住居2・6、29号住居18、－2に該当するものには14号住居7・8、30号住居2、31号住居1などがある。－3に該当するものには15号住居2、48号住居1などがある。

土師器環Bはいわゆる須恵器合子状環蓋を模倣した形態である。東田之口遺跡から出土している土師器環の中でもっとも大きな比率を占める形態である。口縁部の形態によりa、b、cの3区分が可能である。aは口縁部が直線的で垂直または外傾、bは口縁部が外反する、cは口縁部が外傾、外反とも存在するが内面の口縁部下に屈曲部をもつ形態である。

aは口縁部が垂直に立ち上がるI、やや外傾するII、外傾するIII、わずかに外傾して口唇部がわずかに内湾するIV、外傾するものの口縁部外面に丸みをもつため底部、体部と一体化して見えるVの5形態に区分できる。

a Iはほとんどの個体が口唇端部に平坦面なり、ごく小規模の凹線を巡らしているものもある。稜下の体部から底部の形態によって細分が可能であるが、出土量が少ないのでこの段階までの区分にとどめる。該当するものには20号住居7などがある。

a IIは稜下の体部から底部の形態で細分を行った。－1は体部から底部にかけて丸みもち、比較的低い器高がある形態である。該当するものには11号住居11、25号住居3、30号住居1、32号住居2、34号住居9などがある。－2は稜下の器高が低く体部と呼称できる範囲がほとんど存在しない形態である。該当するものには19号住居15をはじめ若干の個体がある。なお、－1には個体数は少ないが内外面または内面に吸炭による黒色処理を施したものが存在する。該当する個体には7号住居5・6、19号住居13、44号住居2などがある。

a IIIもa IIと同様に稜下の体部から底部の形態によって－1、－2に細分できる。－1に該当するものには31号住居7、63号住居3をはじめ比較的多くの個体がある。－2に該当するものには28号住居6、31号住居6、47号住居3がある。

a IVは口縁部の外傾の状態で－1と－2に細分できる。－1は口縁部が垂直に近いかあまり外傾しない形態である。該当するものには1号住居2、34号住居6、64号住居4がある。－2は口縁部が比較的大きく外傾する形態である。該当するものには6号住居6、15号住居10がある。

a Vは全体的に出土量が少ない。該当するものには19号住居12・14、1号粘土採掘坑3・4がある。

bは口縁部の外反の度合いからI・IIに分類が可能である。Iは口縁部下半があまり開かず、口縁部上半がわずかに外反する形態。IIは口縁部下半から比較的大きく外反する形態である。

b Iはa IIと同様に稜下の体部から底部の形態によって－1、－2に細分できる。－1に該当するものには1号住居1、25号住居4～6・9など多くの土器がある。なお、－1にはa II－1と同様に出土量は少ないが内外面または内面を黒色処理したものが存在する。該当するものには7号住居4、44号住居1、47号住居8、9号粘土採掘坑2がある。

b IIもb Iと同様に稜下の体部から底部の形態によって－1、－2に細分できるほかに、口径に対して器高が低い形態を－3に細分した。－1に該当するものには29号住居11、47号住居5などがある。－2に該当するものには6号住居2、15号住居5、38号住居2などがある。－3に該当するものには28号住居2、31号住居4などがある。

cは口縁部が外傾する形態をI、外反する形態をIIに区分し、さらに区分した中を口径に対して器高の高い－1、口径に対して器高の低い－2に分類した。

c I－1に該当するものには32号住居4、40号住居1などがある。－2に該当するものには4号住居1、17号住居2などがある。

c II－1に該当するものには42号住居13、1号粘土採掘坑1・2などがある。－2に該当するものには55号住居1がある。

土師器環Cはいわゆる有段口縁部環である。東田之口遺跡から出土している有段口縁部環は大きくa～dの4区分が可能である。

aは口縁部が内傾する土師器環Aの口縁部に段を有する形態である。該当するものには30号住居7、6号住居11がある。この他では図示できなかった破片にみられる程度で出土量は少量である。

bは口径に対して器高が高く、口縁部がやや内傾する形態である。bは出土量自体が少ないが、その形態から3区分が可能である。bⅠはaの器高を高くし、稜下から底部に球状の丸みを有する形態である。該当するものには29号住居19や47号住居13がある。29号住居19は口唇端部に平坦面を作るが47号住居13は口唇端部に平坦面が作られず外反するなど時間的経過も見られることからⅠとⅡに細分できる。bⅡは53号住居1が該当する。口唇部は内傾気味から垂直に立ち上がり口唇端部はわずかに内湾ぎみを呈する。底部は欠損しているが体部から底部にかけてやや萎む形態を見せている。bⅢは土師器環B aⅡ-2などにみられるような稜下部分の高さが非常に低い形態である。口縁部は直線的で内傾し、口唇端部は平坦面をつくる。該当するものは1号掘井1がある。

c・dは全体的な形態は土師器環Bと同様である。cは口縁部が垂直かわずかに外傾し、口唇端部がわずかに内湾する形態である。該当するものには15号住居7、30号住居10、粘土採掘坑群3などがある。それぞれ、口縁部や口唇端部の形態が多少異なり、細分も可能であるがそれぞれ1個体ずつしか出土していないことからこの段階でとめておく。

dは口縁部が比較的垂直から開く形態で口縁部の形態で3区分ができる。dⅠは口縁部が比較的垂直的に立ち上がる。dⅡは口縁部は外傾するが直線的である。dⅢは口縁部が外傾し、口唇部が外反する。dⅠは15号住居8、4号住居4が該当する。両者の間では有段の状態や口唇端部の形態が異なることから細分も可能であるがこの形態も出土量が少ないため細分までには至らなかった。dⅡは土師器環Cの中でも多くの個体がみられる形態である。この形態は口唇端部に平坦面をつくる形態のⅠと作らない形態のⅡに細分できる。また、外傾の度合いによっても細分が可能であるが、外傾の角度など

での明瞭な区分ができないため細分には至らなかった。dⅡ-1は11号住居15、14号住居14、38号住居3などが該当する。dⅡ-2は10号住居3・5、29号住居10・16、30号住居12、35号住居7・8などが該当する。

土師器環Dは体部から底部の形態によってaからdに区分できる。aは体部から底部が球状の丸みを呈し、器高/口径比が概ね0.35以上と比較的大きい値を示すもので口縁部の形態によってさらに3分類が可能である。

aⅠは口縁部が内湾する形態である。口縁部から体部上位の整形技法でさらに3区分の細分が可能である。Ⅰは口唇部の狭い範囲のみ横ナデが施され、口縁部から体部はヘラ削りが施されている。該当するものには18号住居8、29号住居20などがある。ⅡはⅠより横ナデの範囲が広く口縁部に横ナデ、体部はヘラ削りが施されている。該当するものには14号住居20などがある。Ⅲは口縁部は横ナデであるが、体部のヘラ削りと間にナデ部分が残されている。該当するものには18号住居7・9などがある。

aⅡはaⅠが丸みを持って内湾するのに対して直線的で内傾または垂直に立ち上がる形態を示す。aⅠと同様に口縁部から体部の整形技法によって3区分に細分できる。Ⅰに該当するものには3号住居15、29号住居21、31号住居14・16などがある。Ⅱに該当するものは25号住居11、42号住居21、30号住居13などがある。Ⅲに該当するものは3号住居13、32号住居9などがある。

aⅢは短い口縁部下に弱い稜を有し、口縁部はわずかに外反する形態である。aⅢも口縁部から体部の整形技法で細分ができる。Ⅰは口縁部が横ナデで、体部はヘラ削りが施されている。該当するものには9号住居8がある。ⅡはaⅠ・ⅡのⅢと同様に口縁部の横ナデと体部のヘラ削りの間にナデが残る。該当するものには42号住居22・23などがある。

bは体部から底部にかけて丸みをもつが、器高/口径比が0.3を前後する値を示し、底部としての範囲がaよりやや明瞭で、ものによっては狭い範囲ではあるが平底きみの箇所がみられる形態である。口縁部から体部の形態によって4形態に区分できる。bⅠは口縁部が内湾する形態、bⅡは口縁部が内傾、またはほぼ垂直に立ち上がる形態、bⅢはやや外側に開く形態、bⅣはaⅢと同様に口縁部下に弱い稜を有する形態である。

b Iはaと同様に口縁部から体部の整形技法によって細分が可能である。-1が口縁部に横ナデ、体部にヘラ削りが施される。該当するものには14号住居19がある。-2は口縁部の横ナデと体部のヘラ削りの間にナデが残る。該当するものには45号住居2がある。

b IIはb Iと同様に口縁部から体部の整形技法によって細分が可能である。-1が口縁部に横ナデ、体部にヘラ削りが施される。該当するものには3号住居6、21号住居4などがある。-2は口縁部の横ナデと体部のヘラ削りの間にナデが残る。該当するものには3号住居8・11、14号住居18がある。

b IIIはb IIと同様に口縁部から体部の整形技法によって細分が可能である。-1が口縁部に横ナデ、体部にヘラ削りが施される。該当するものは3号住居9がある。-2は口縁部の横ナデと体部のヘラ削りの間にナデが残るもので、該当するものは21号住居11である。

b IVは図示した土器では3号住居7が該当するだけで出土量自体が少ないとみられる。

cは体部と底部の境が明確ではないが、明瞭に底部と認められる範囲が存在する形態である。器高/口径比は0.25を前後する値を示し、平底きみの範囲がbより広い形態である。口縁部の形態によって3形態に区分できる。

c Iは口縁部がやや内傾する形態、c IIは口縁部がほぼ垂直に立ち上がる形態、c IIIはやや外側に開く形態である。c Iは2号住居3が該当する。c IIは21号住居6と粘土探掘坑群3は口縁部が横ナデ、体部がヘラ削りに対して21号住居10は口縁部横ナデと体部ヘラ削りの間にナデが残ることから-1、-2に細分ができる。c IIIは図示した中では38号住居4が該当するだけである。

dは体部と底部の境が比較的明瞭で底部は平底化している形態である。なお、体部のヘラ削りは省略され底部だけにヘラ削りが施されている。該当するものには7号溝2がある

土師器高坏

土師器高坏は脚部が高低でA、B、Cに3区分が可能である。Aは一般的な高さをもつ形態、Bは長脚を呈する形態、Cはごく低い脚部の形態である。なお、AとBは坏身部の形態で細分が可能である。しかし、土師器高坏は坏身部については土師器坏のような分類も可能であるが、脚部が欠損した状態での出土が多いため大区分で

の判別ができないため中区分での分類にとどめる。

土師器高坏Aは坏身の形態でa～dの3区分が可能である。aは土師器坏B状の口縁部が外傾する器高の深い形態で該当するものには35号住居10がある。bは口縁部が大きく外反し、やや口縁部から底部までの器高がある形態である。該当するものには20号住居13、42号住居26などがある。cは底部がほぼ水平に開き、稜上の口縁部も大きく外反する形態である。該当するものには42号住居25、25号住居12などがある。dはやや器高が低く、稜下の底部の範囲がごく狭く口縁部が大きく外傾し、坏身部全体がやや小ぶりな形態である。該当するものに19号住居18・19がある。

土師器高坏Bは土師器高坏A bの坏身部と同様な形態である。a、A cと同様な形態であるbに区分できる。aに該当するものには32号住居10、bに該当するものには59号住居14がある。

土師器高坏Cは脚部が高台をやや高くした形態である。坏身部は形態が判明しているものが唯一4号粘土探掘坑5しかないが土師器坏B bの形態に近い。この他に該当するものには脚部だけであるが42号住居27・28がある。

土師器鉢

土師器鉢は底部に穿孔をもつ有孔鉢を含めて検討した。全体の形態によって4区分が可能である。Aは底部が平底で体部から口縁部が一体的に立ち上がるか、口縁部が外反する形態、Bは土師器坏AやBのように口縁部と体部の間に稜をもち、丸底を呈する形態、Cは裏のように頸部で口縁部が屈曲して開く形態である。Dは狭い底部から体部と底部が直線的に開くほぼ逆三角形を呈し、有孔鉢にみられる形態である。

土師器鉢Aは口縁部が外反する。Aは外反の状態によって細分も可能であるが出土量が少ないためこの段階でとどめる。該当するものには1号住居3～5などがある。

土師器鉢Bは口縁部の形態で区分が可能である。口縁部が内傾する形態をa、口縁部が外反する形態をbとする。aに該当するものには19号住居16・17、39号住居4などがある。bに該当するものには9号住居9、46号住居6がある。なお、3号住居16は鉢Bに区分されるが口縁部下の稜が弱く、口縁部は内傾でも外反でもないaと

bの中間的な位置に区分されるものであるまた、B aに分類される中には28号住居13のような台付のものも存在する。

土師器鉢Cは器高の高低や口縁部の形態によって区分が可能であるが出土量が少ないためこの段階でとどめる。該当するものには25号住居15、31号住居27、40号住居3の有孔鉢がある。なお、25号住居15は鉢B bへ分類できる可能性があるが器高が比較的高いのでCとする方が適切と考える。

土師器鉢Dは有孔鉢のみにみられる形態である。体部から口縁部の形態で細分も可能であるが、出土量が少ないためこの段階でとどめる。該当するものには8号住居10、14号住居27、25号住居16、27号住居15、28号住居10がある。

土師器小型甕

土師器小型甕は土師器甕と同様に長狭系のA、胴部が球胴状に近いBに区分できる。A・Bとも胴部の形態や口縁部の形態によっての細分が可能である。

土師器小型甕Aは口縁部が頸部から明瞭に外反、外傾し、胴部の膨らみが口径より大きい形態のa、口縁部が頸部からやや外反、外傾し胴部の膨らみが口径とほぼ同じである形態のb、口縁部は頸部で外反、外傾するが胴部の膨らみはほとんど頸部の径と同じかそれより小径の形態のc、口縁部が頸部からそれほど明瞭に外反、外傾せず、胴部の膨らみもあまりみられないdに区分できる。

aに該当するものには31号住居25、42号住居42などがある。bに該当するものには10号住居8、25号住居21などがある。cに該当するものには19号住居35、42号住居43、62号住居5がある。dに該当するものには31号住居28、58号住居6などがある。

土師器小型甕Bは口縁部が頸部から明瞭に外反、外傾する形態のa、口縁部と頸部の区分が明瞭でなく、口縁部があまり外反、外傾しない形態のbに区分できる。

aに該当するものには15号住居30・31、27号住居19などがある。bに該当するものには25号住居20、53号住居19がある。

土師器甕

土師器甕は主体的に出土したのものにはカマドの普及に伴って変化した胴部の長いいわゆる長狭形態を示すもの

と胴部が大きく膨らむいわゆる球胴形態を示すものに大別できるが、ここでの区分名称は細分化したときの名称が複雑になるので省略し、長狭系をA、Bに、球胴系をCに区分した。

長狭形態は長狭化する前段階のAと長狭化した段階のBに区分した。

土師器甕Aはまだ長狭とは呼べないもので器高が30cmほどで胴部中位から下位に胴部最大径をもつ。胴部の最大径の位置により細分ができる。胴部最大径が中位にあるものをa、胴部下位にあるものをbとした。aは出土量が少なく、口縁部から底部までの全体がわかるものには1号住居7と28号住居23があるだけである。なお、この他では6号住居18が該当するとみられる。bは口縁部の外反状態によって細分が可能である。あまり開かない形態をI、大きく外反する形態をIIとした。b Iに該当するものには6号住居17、31号住居29・30・31などがある。b IIに該当するものには6号住居19がある。

土師器甕Bは胴部の形態によってa、b、cに区分できる。aは頸部が屈曲するなどして比較的明瞭で胴部上位に最大径をもち、中位から下位にかけて徐々に細くなる底部のやや上で小径の底部に移行する形態である。該当するものには8号住居12、10号住居9などがある。

bは頸部がaと同様に屈曲するなどして比較的明瞭で胴部の最大径を上位と中位の間にもち、そこから徐々に底部まで移行する形態である。該当するものには19号住居40、28号住居21などがある。

cは大きく外反、外傾する口縁部をもち、胴部の最大径を頸部下か、胴部でも頸部に近い位置にもち、そこからほとんど膨らみをもたないで底部につながる形態である。該当するものには9号住居11・12、16号住居13・14などがある。

土師器甕Cは胴部が球状の膨らみをもつ形態である。全体またはおおよその形態がわかる個体は6号住居20、19号住居29、28号住居24、5号溝5、6号溝4などだけであるが、口縁部の形態などからa～cの3区分ができる。aは口縁部が直線的に外傾する形態である。該当するものには5号溝5がある。bは口縁部が外反する形態である。該当するものには6号住居20、28号住居24、6号溝4などがある。cは頸部から口縁部が内傾し、小型甕B bに近い形態でどちらかと言えば直に近い特異な形

態である。該当するものは19号住居29である。

須惠器坏身・坏蓋

須惠器坏身・坏蓋の出土量は少なく、出土遺構も偏っているが形態によって区分が可能である。

須惠器坏身Aは合子状坏の坏身である。この坏身は蓋受け部分の長短によってa、bに区分できる。aは受け部が長い形態である。稜から下の体部、底部の形態によって2区分が可能である。aⅠは稜下の体部から底部に丸みをもち、比較的器高の高い形態である。該当するものには20号住居17・18、26号住居11などがある。aⅡは稜下の器高が低い形態である。該当するものには19号住居26・27がある。

bは受け部の短い形態でaと同様に稜下の形態によってⅠ・Ⅱの2区分とやや特異な形態であるcに区分できる。

bⅠは器高の高い形態である。該当するものに15号住居22、30号住居17、37号住居5、42号住居34・35がある。bⅡは器高の低い形態で、該当するものは粘土採掘坑群9がある。Ⅲは比較的器高が高く底部にやや平坦面をもち、稜下の形状が逆台形状を呈する形態である。該当するものに粘土採掘坑群8がある。

須惠器坏蓋Aは須惠器坏身Aに伴う蓋である。この坏蓋は天井部から口縁部に移行する稜を有するaと天井部から口縁部にかけて一体的な丸みを持つbに区分できる。aは天井部や口縁部、口唇端部の形態によって3区分が可能である。aⅠは全体的な器高が高く口唇端部に明瞭な平坦面をつくり、そこに凹線が巡る形態である。該当するものに33号住居2、54号住居5がある。aⅡはⅠに比べると天井部が低く、口唇端部に明瞭な平坦面をもたない形態である。該当するものに17号住居10、1号溜井6がある。aⅢは全体的な器高が低く口縁部が天井部から大きく開き、天井部周縁に稜をもつ形態である。該当するものには22号住居3、30号住居16、42号住居32・33などがある。

bは口径に対する器高の比率によって2区分が可能である。器高/口径が0.2以上をⅠ、0.2以下をⅡとする。bⅠに該当するものには14号住居28、42号住居29がある。bⅡに該当するものには14号住居29、42号住居30・31がある。

須惠器坏蓋Bは小型丸底坏(平城宮発掘調査報告書で

の土器分類で坏Gに分類されている形態に伴う蓋である。摘みは多くの個体で欠損しているが、残存している個体からは乳頭状のものが貼付されている。坏蓋Bは天井の形態によってa、bの2区分が可能である。aは天井部に丸みをもち、比較的器高の高い形態である。なお、a類では摘みが残存する個体は見られないが、摘みの貼付された痕跡を見るとb類と同様な乳頭状のものともみられる。該当するものには22号住居5、42号住居36がある。bは天井部が扁平な形態である。該当するものには22号住居4・6、42号土坑1がある。

須惠器高坏

須惠器高坏は坏身部の状態から有蓋と無蓋の形態でA、Bに区分できるがA類と確認できるのは29号住居25しかない。B類は口縁部が垂直に立ち上がるaとやや開くbに区分できる。aに該当するものは14号住居30しかない。bは口縁端部の形態によって2区分できる。bⅠは口縁端部に平坦面をもつ形態である。該当するものには15号住居23・24などがある。bⅡは口唇端部に明瞭な平坦面をもたない形態である。該当するものには35号住居16・17などがある。

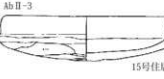
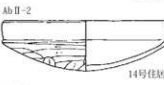
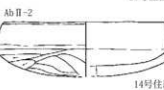
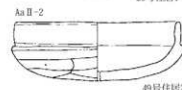
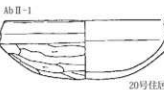
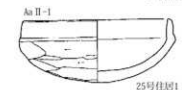
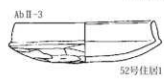
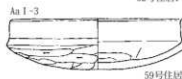
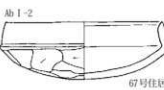
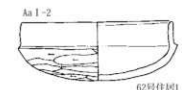
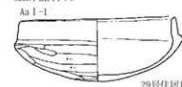
この他に脚部に1段の透孔、2段の透孔をもつものが確認できることから、脚部の状態によっても区分が可能であるが、坏身部と脚部がともに残存する個体では1段透孔しか確認できない。

2 共存関係

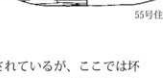
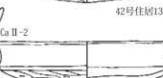
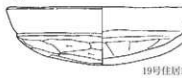
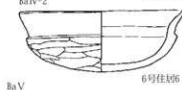
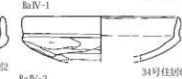
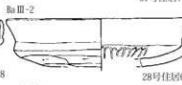
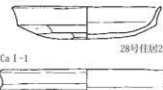
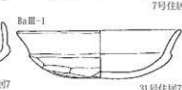
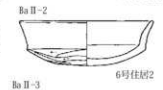
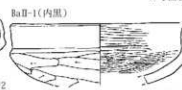
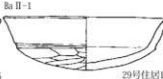
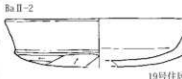
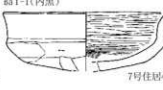
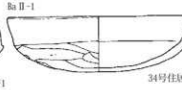
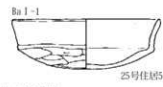
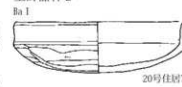
前項で分類した土器群は各形態によって個体数に差があるが、各住居に戻って共存関係をみると第12表のようになる。東田之口遺跡で検出した竪穴住居は比較的に確認面から床面までの深度があり良好な残存状態である。このため埋没過程において多少時間がゆかったとみられたのか、次世代において埋没しきらない窪地を利用した土器廃棄が行われたとみられる出土状況も窺える。このため、共存関係表は出土した土器についてそのまま掲載したが、ここでは可能な限り床面、カマド、掘方など確実に出土遺構に伴うと認定される土器を主に扱うことにする。

共存関係では土師器坏を中心にみていくこととする。土師器坏A類が主体となす住居は11号住居、14号住居、15号住居、34号住居がある。こうした住居で共存する土

土師器杯A



土師器杯B



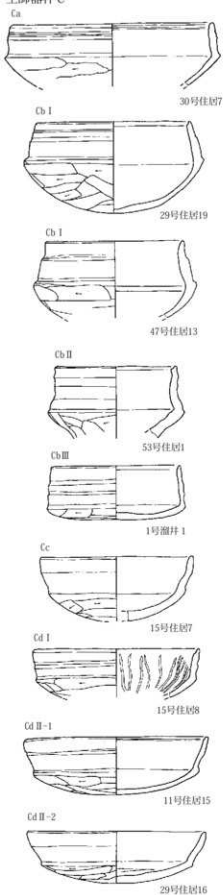
第213図 土器分類①

土師器杯はB類、C類が中心である。そしてD類との共伴関係の多くは14号住居で見られるようなD類の出土位置が覆土であることから後の混入とみられる事例が多い。その他の高杯、鉢、甕類などの共伴関係はあまり多くないため明確なことは言えないが、杯A類と甕B c類と

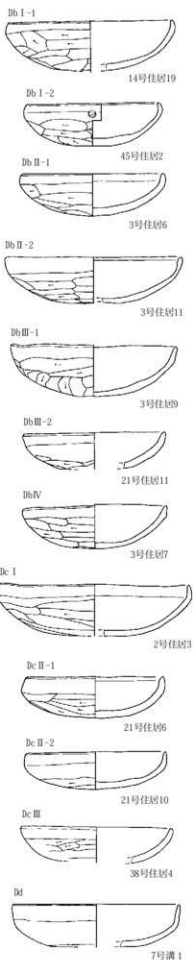
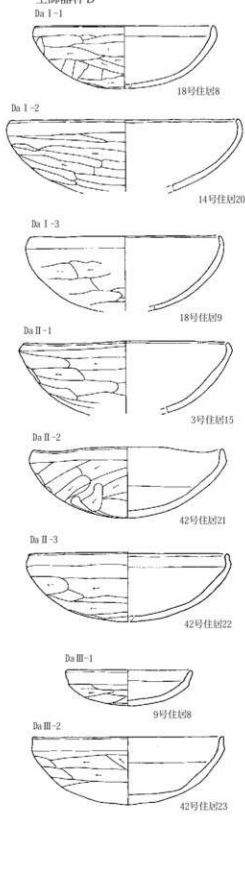
の共伴事例は25号住居で確認されているが、ここでは杯A類が客体的なものであり、他の住居での共伴関係は確認されない。

土師器杯B類が主体をなす住居は5号住居、8号住居、9号住居、19号住居、25号住居、29号住居、32号住居、

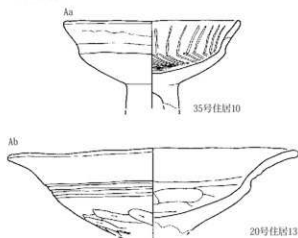
土師器杯 C



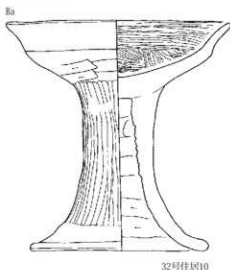
土師器杯 D



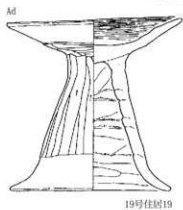
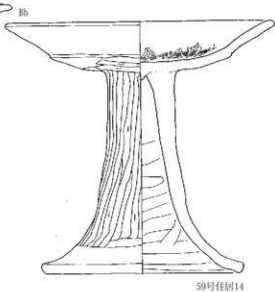
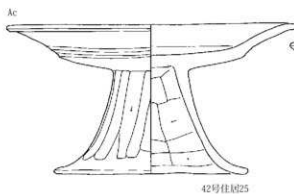
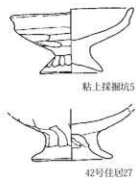
土師器高杯A



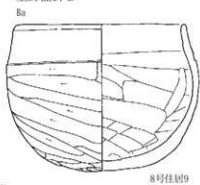
土師器高杯B



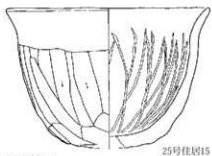
土師器高杯C



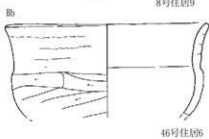
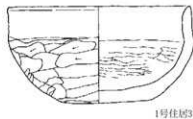
土師器鉢B



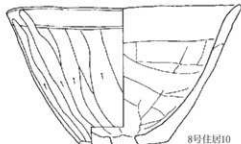
土師器鉢C



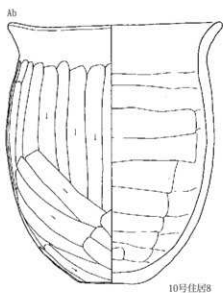
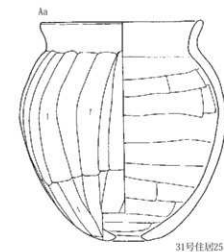
土師器鉢A



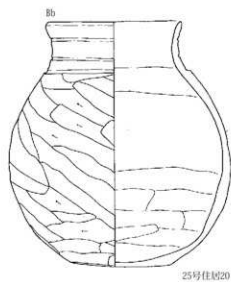
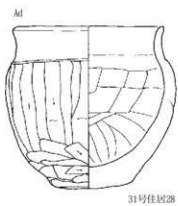
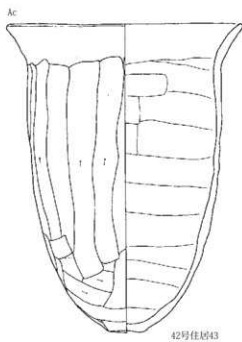
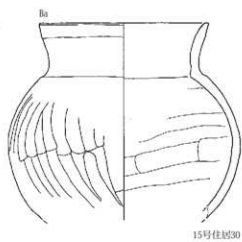
土師器鉢D



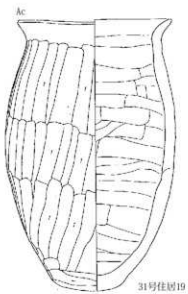
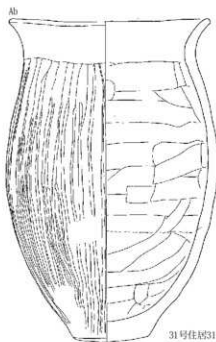
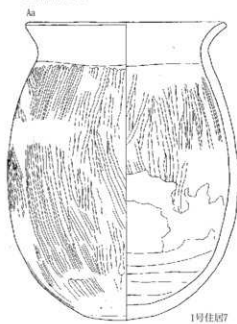
土師器小型甕 A



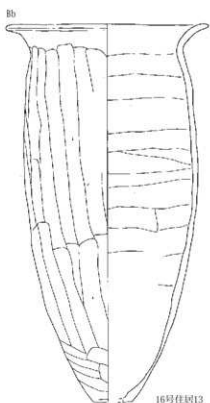
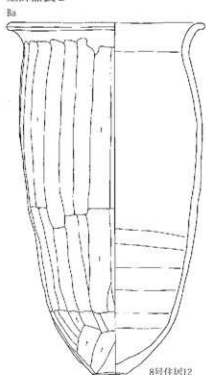
土師器小型甕 B



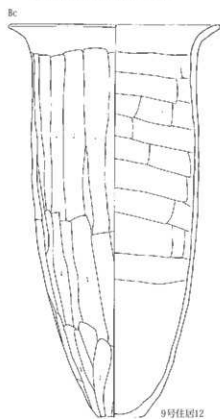
土師器甕 A



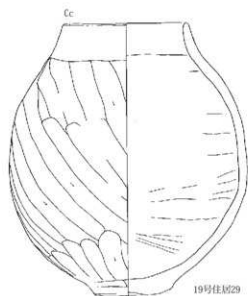
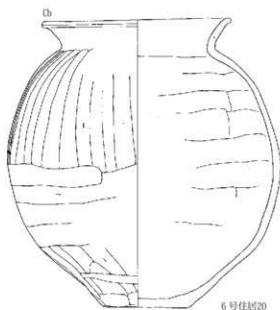
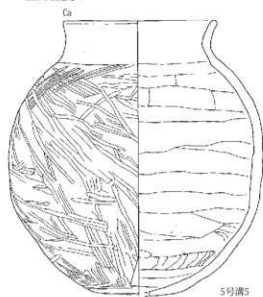
土師器表 B



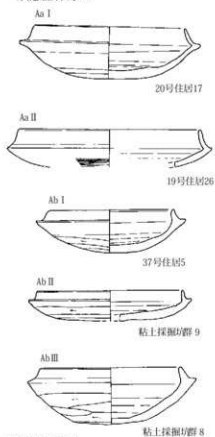
第1節 出土土器について



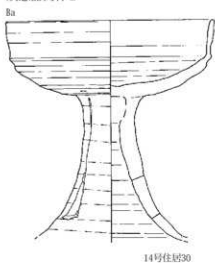
土師器表 C



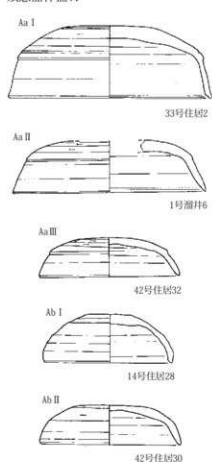
須恵器杯身 A



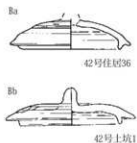
須恵器高杯 B



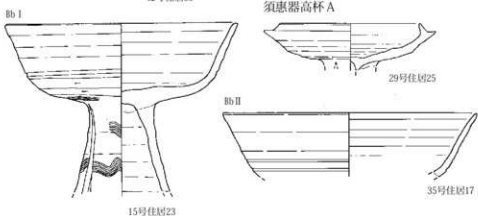
須恵器杯蓋 A



須恵器杯蓋 B



須恵器高杯 A



第218図 土器分類⑥

42号住居、47号住居がある。ここでの共伴関係にある杯はA類とC類が主体であるが、29号住居、42号住居のようなD類との共伴関係も見ることができる。なお、29号住居でのD類は客体的な存在である。また、杯A類でみられなかった甕B cとの共伴関係は8号住居、9号住居、25号住居、29号住居で確認することができる。特に29号住居では杯A a I-1、-2類と杯C類、杯D a I-1、D a II-1類、高杯A類、甕A a、B b、B c類、須恵器高杯との幅広い共伴関係がみられる。また、42号住

居では杯B a Iが主体であるが、杯D類の共伴や高杯A c類、小型甕A a、A c、B a類、甕B b類の他、須恵器合子状杯身・杯蓋、小型丸底杯蓋との共伴関係が確認できる。

土師器杯D類が主体をなす住居は3号住居、18号住居、21号住居がある。ここでの共伴関係は杯B類との共伴関係が主で杯C類との共伴関係は31号住居、47号住居があるが、31号住居は杯D類が混入、47号住居での杯C類が出土量自体が少ない特異な形態であることから杯C類が

客体的な存在とみられる。なお、土師器甕との共伴関係では甕A類との共伴関係はほとんどみられなくなり、甕B類との関係がみることができると事例自体が少ない。

土師器環を中心に共伴関係をみると環類は比較的多かった事例が確認できるが、出土量が少ない高環や鉢、甕類では環類ほどの多まった事例を見ることができない。特に土師器甕B類では環A類、B類、D類に及ぶ広範囲との共伴関係がみられる。また、土師器甕類の中では甕A類とB類の間では多少の共伴関係に差が生じているが、甕B類の中ではa、b、cがすべて共伴するような事例も存在する。これは甕B類の中でもBb類が最も多くの出土量を占めているためB A類、B C類の両形態との共伴が多くなることと環類ほど形態的な変化を生じていないことによるとみられる。

3 土器の変遷

前項までの分類、共伴関係をもとに東田之口遺跡から出土した古墳時代後期から飛鳥時代にわたる土器群の変遷における各期の設定をおこなう。土器の変遷では比較的長期にわたって大区分での形態が存続し、出土量もままとまっている形態である。土師器環A類、B類、D類を基軸に環C d類、甕類を参考に行うこととする。ただし、東田之口遺跡では土器の共伴関係でみられるような幅広い形態との共伴は住居自体が長期にわたって存続していた可能性が考えられる。こうした点を考慮するとできるだけまとまった共伴関係をもつ住居出土の土器で各期の設定を行わないと前後の時期に属する土器が混在することもあり得る。しかし、まとまった共伴関係をもち、かつある一定量の土器群を出土した住居はそれほど多くない。そこでまとまった共伴関係をもつ住居を中心としながらも幅広い共伴関係をもつ住居の土器群では主体をなす形態の土器群を主に取り上げて各期の設定を行うこととする。

1期

この期では土師器環A a I・II、B a I・II、鉢A a、A b、甕A aを主体とする。この期に比定される住居は少なく1号住居、33号住居、34号住居がみられる。1号住居からは前記の形態の他に甕C類が出土している。34号住居では環A b II-2、B a IV-1、B b II-2が出土しているが、B b II-2は出土位置の状況から共伴す

るか難しい点がある。なお、33号住居からは須恵器環甕A a Iが出土している。

2期

この期では土師器環A a I・II、B a I・II・III、B b I、C d、甕A a、A bを主体とし、土師器環C a、C b、高環A a・b・c、鉢A b、甕C b、須恵器環身A a I、高環B a、B b IIなどが共伴する。この期では新たに土師器有段口縁部環C類が出現する。

この期に比定される住居は6号住居、7号住居、11号住居、14号住居、20号住居、26号住居、35号住居がみられる。この他に48号住居、49号住居、63号住居、67号住居が比定されるとみられるが、出土遺物が少ないため不確実な点もある。

なお、14号住居からは土師器環D類の出土が確認されるが、出土位置が覆土中であることから後世の廃棄・混入とみられる。この他、32号住居も共伴する多くの土器群から2期に比定されると考えられるが、32号住居の床面からは土師器環D b III-2に分類される9が出土している。出土位置からは32号住居に確実に共伴する。しかし、土師器環D b IIIは5期以降に共伴する個体であるため、出土位置を含めて検討が必要である。

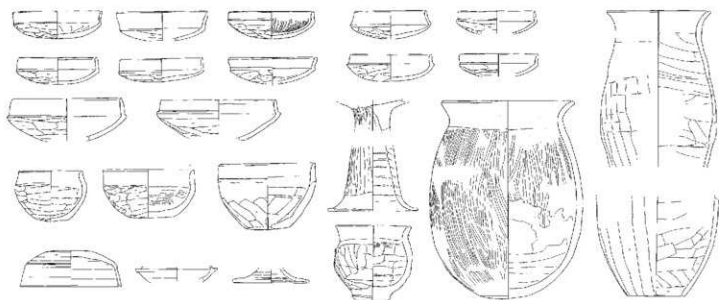
3期

この期では土師器環A b、B a、B b、B c、C d、B類、甕A a、A b、B a、B bを主体とし、土師器環A a、黒色処理されたB類、高環A b、A c、甕B c、鉢C、D、小型甕A a、A b、B b、須恵器環身A b I、環甕A a II・III、高環A、横瓶などが共伴する。この期から土師器甕B類が出現し、土師器環A a、B a Iなど比較的須恵器を丁寧に模倣した土師器環が減少している。この期に比定される住居は4号住居、15号住居、17号住居、25号住居、29号住居、30号住居、31号住居、44号住居、53号住居、62号住居がある。この期に比定される住居からは土師器環D類の出土も確認されるが、出土位置が覆土中であることから後世の廃棄・混入とみられる。

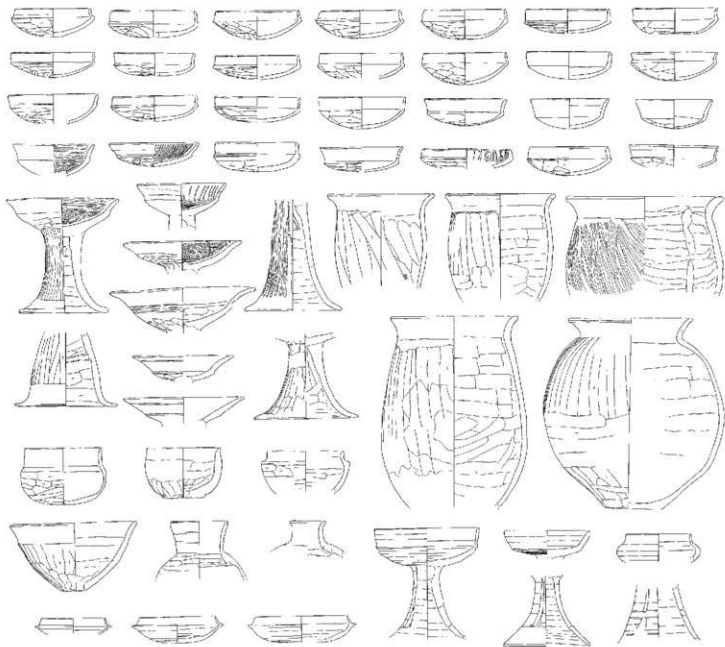
4期

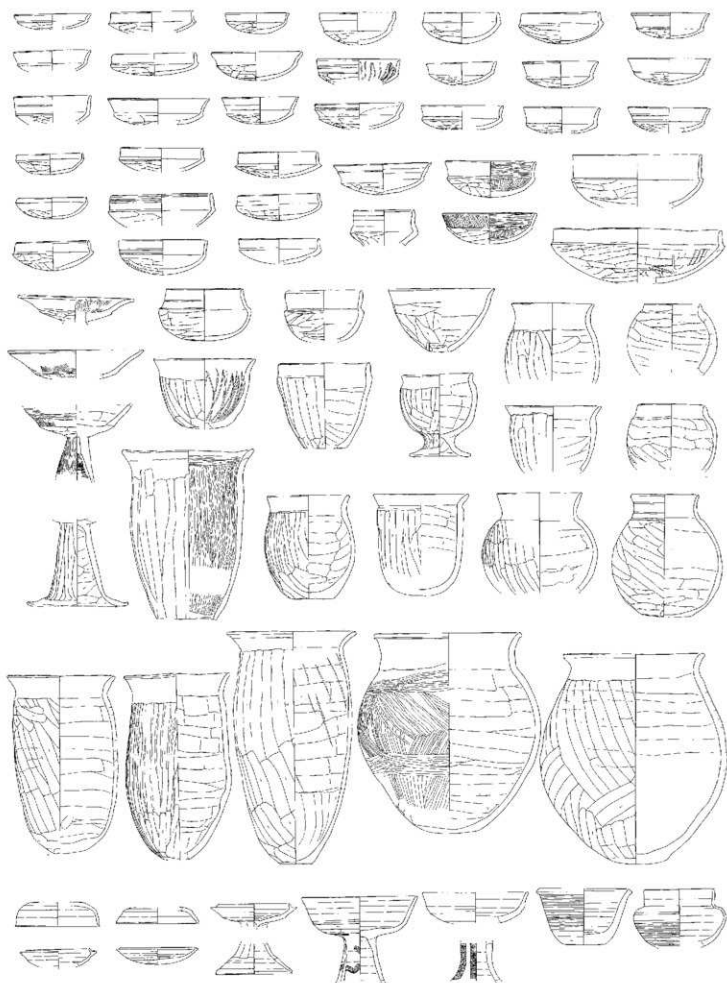
この期では土師器環B a、B b、甕B a、B b、B cを主体とし、土師器高環A a、A b、A c、鉢A b、B a、C、小型甕A a、A b、須恵器環身A a IIが共伴する。この期からは須恵器環身模倣の土師器A類がみられない。この期に比定される住居には8号住居と19号住居

1期



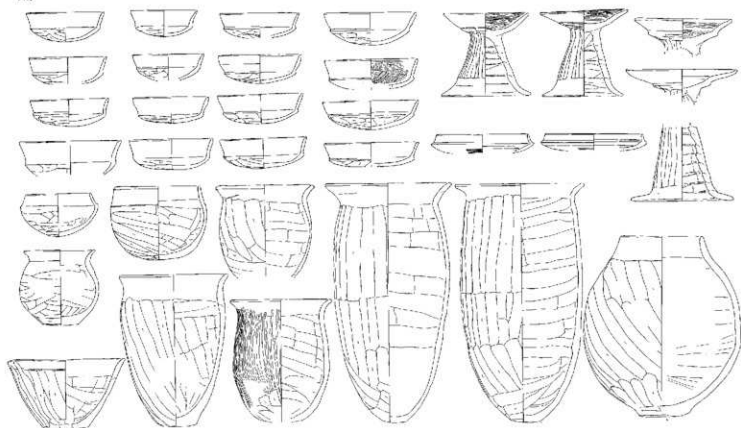
2期



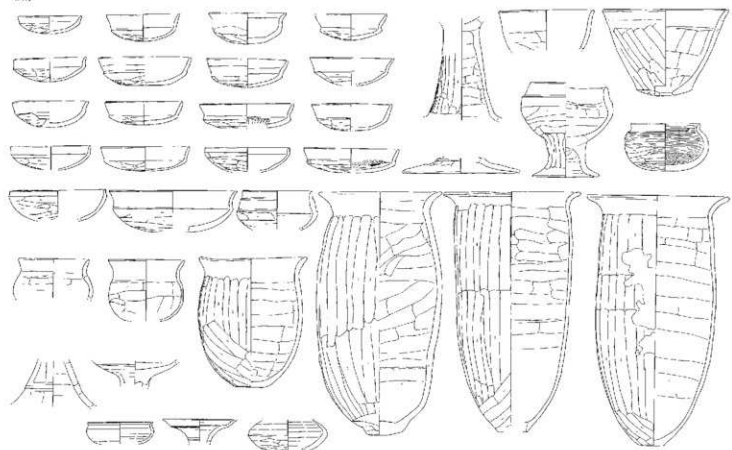


第220図 3期の土器

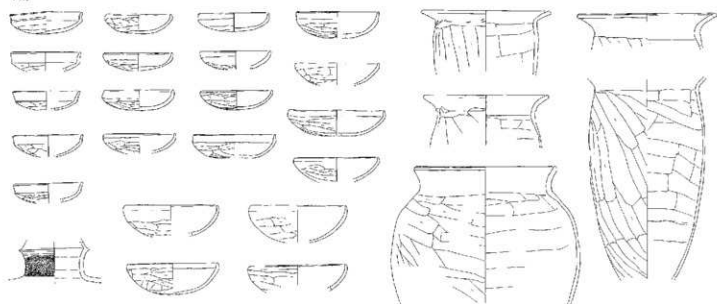
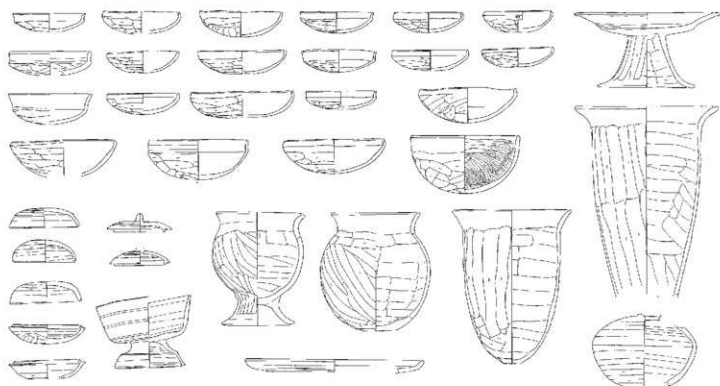
4期



5期



第221図 4期・5期の土器



第222図 6期・7期の土器

がある。

5期

この期では土師器環Ba、Bb、Bc、Cd、甕Ba、Bb、Bcを主体とし、土師器高環B類、鉢Ba、Bb、D、短頸甕、小型甕Ab、Ac、甕Aa、Ab、Cb、須臾器高環、短頸甕などが共伴する。なお、9号住居9、47号住居10、11の土師器環Da、Db類が出土し

ている。これらの土器は出土位置が覆土中のため共伴するか否かは明確ではないが、畿内平城宮の土器様相などではこの期に金属器模倣の土器群が出土していることが知られていることや次の6期の様相から5期での土師器環Da1・II-1～2の出現は予想されることから住居に共伴する可能性は想定される。

この期に比定される住居には9号住居、10号住居、12

写住居、28号住居、47号住居がある。この他に出土遺物が少ないため確実性が乏しいが24号住居、43号住居も比定される。

6期

この期では土師器環B a、B b、D a、D b、甕B b、B cが主体をなし、土師器高環A c、鉢B b、小型甕A a、A c、B a、須恵器環身A b I、杯蓋A a III、b I、b II、杯蓋B a、b、脚付埴、平瓶、長頸壺などが共存する。この期では今まで土師器環の主体はB類であったが、D a、D bへと移っている。また、須恵器環での合子状の環A類だけであったのが、小型丸底環のB類が出現している。

この期に比定される住居には3号住居、22号住居、42号住居、45号住居がある。

なお、45号住居4の脚付埴であるが、これは金属器模倣の初期段階のものとみられる。この須恵器自体は焼成時の歪みが激しいが当時としては貴重な器形であったことから廃棄されずに使用されたとみられる。この形態の土器は陶邑古窯跡群T K 209型式と同様なものがみられる。T K 209型式は7世紀前半に位置付けられており6期との区別がみられるが特殊な器形のため残ったと考えられる。

7期

この期では土師器環D b、D c、甕B b、B cが主体をなし、土師器環B a、B b、D aが共存する。なお、この期での土師器環D類の中には口縁部と体部のヘラ削りの間にナデ部分が残るのみがみられる。また21号住居29、30ではこのナデ部分の範囲が広がっておりより後出の様相も見ることが出来る。

この期に比定される住居には2号住居、18号住居、21号住居がある。

4 各期の年代について

東田之口遺跡からは直接年代の比定につながる資料は出土していない。また、群馬県内の古墳時代後期の土器が出土した遺跡においても直接年代を比定できる資料が出土した事例は見られない。現在、群馬県内での年代比定の資料には搬入された須恵器や極名二ツ岳噴出のテフラ層(テフラ層降下の年代については土器の年代が援用されている。)が援用されている。しかし、今までの

多くの研究によって土器に比定された年代は遺跡ごとの土器編年によって多少の違いはあるが、大きな区別は見られないことからほぼ確定したものとみられる。東田之口遺跡の出土土器についてもこうした研究成果の援用によって実年代が比定できるものとする。東田之口遺跡から出土した土器群は渋川市黒井峰遺跡などと比較すると黒井峰遺跡より後世の様相がみられることからテフラ降下以降に比定できる。こうした状況からすると須恵器研究からの援用が適当であるとする。

最近の群馬県内での5世紀後半から7世紀前半にかけての古墳時代須恵器については藤野一之氏によっての詳細な研究がおこなわれている。その成果は藤野一之「群馬県における古墳時代須恵器編年」(2009年「群馬・金山丘陵窯跡群II—菅ノ沢遺跡(須恵器窯跡群)・巖穴古墳の発掘調査報告—駒澤大学考古学研究室刊行に掲載)で提示されている。年代の比定についてはやはり陶邑古窯跡群出土の須恵器形態変化やテフラ層などからの援用であるが、最新の研究成果である点と群馬県内出土の須恵器を網羅している点から東田之口遺跡の須恵器の年代比定にはもっとも適した成果と考える。また、畿内では2006年に近つ飛鳥博物館で開催された企画展「年代のものさし—陶邑の須恵器—」での図録で白石太郎氏による「須恵器の暦年代」(2006年「年代のものさし—陶邑の須恵器—」大阪府立近つ飛鳥博物館刊行)が発表されている。この中で飛鳥時代の須恵器の暦年代が提示されており、藤野氏が行ったⅦ期以降の年代比定には最適な研究であり、地域的には離れているが参考になるものである。

東田之口遺跡から出土した須恵器は太田金山古窯跡群の周辺に位置する同時期の集落遺跡と比較すると決して豊富ではないが、20号住居から出土した環身A a I類、32号住居から出土した杯蓋A a I類、30号住居から出土した杯蓋A a III類、22号住居や42号住居から出土した杯蓋B類、14号住居から出土した高環B a類などは比較できる好資料となりえる。ただし、高環は脚部端部が欠損しているため確実性に乏しい。

上記の資料と藤野一之氏による「群馬県における古墳時代須恵器編年」との比較により与えられる年代は20号住居17の環身や32号住居2の杯蓋、14号住居30の無蓋高環が藤野氏の編年ではⅦ期に比定される。このⅦ期は高崎市稲貫観音山古墳から出土した土器群を中心に構成さ

れている。Ⅴ期の年代は観音山古墳から出土した須恵器の中にある搬入されたものが、陶巴古窯跡群の編年(1981年に刊行された田辺昭三氏による「須恵器大成」に提示されている編年に準ずる。)でのTK43形式とされる奈良県藤の木古墳出土須恵器と同形態と考えられていることから6世紀後半でも後葉の年代が与えられている。東田之口遺跡2期も同様な年代と考えられることから6世紀後半でも後半に位置付けられている。

22号住居や42号住居から出土した坏蓋B類は金属器模倣によって出現する土器群である。藤野氏の編年ではⅦ期に相当し、7世紀前半に比定されている。この年代はⅦ期の土器群の様相が飛鳥1期と同様であることからである。飛鳥1期は7世紀前半代と幅広い年代が比定されているが、東田之口遺跡6期から出土した須恵器坏蓋B類は飛鳥1期のもものと比較するとBaは比較的類似した様相がみられるが、Bbは器高が低く扁平化し、摘みもやや雑な作りを見せておりだいぶ在地化した様相が見受けられる。また、42号住居から出土している須恵器坏蓋AbⅠも口径が小さく矮小化が見受けられ、どちらかと言えば飛鳥Ⅰでも後葉の山田寺跡整地層から出土した土器群と同様で飛鳥Ⅱに近い。こうした土器様相から見ると7世紀前半の後葉以降に位置付けるのが妥当と考えられる。

以上のような年代から東田之口遺跡での土器変遷の各期の年代は、1期から2期が6世紀後半、3期が6世紀末から7世紀初頭、4期から5期が7世紀前半代、6期が7世紀後半でも前半、7期が7世紀後半の後半から8世紀初頭に比定される。ただし、2期は土師器環Ba類はⅠからⅢまで共伴しており年代的に長い期間が想定される。こうした状況が、出土した須恵器の年代が6世紀後半に比定される要素かもしれない。

年代については明確な資料は存在しないためあくまで今までの研究成果の援用であるため推定の域を出ないが、今までの研究成果の結果と比較しても大きな誤差は見られない。

今回の土器についての検討が今後この地域史解明の一助となれば幸いです。

第2節 竪穴住居について

はじめに

今回の発掘調査で発見された住居跡は68軒であるが、この中で65軒が調査区の西半側に集中する状態で発見されて、6世紀後半から7世紀前半に集中する傾向が認められた。発見された住居跡の平面形状は、整った状態の正方形を呈する住居跡は非常に少なく、いずれかの辺がやや歪んでいる。しかし、住居の構築段階は正方形の竪穴を創意して掘削があった筈である。住居の構築過程は、竪穴の掘削段階と上屋構造の構築段階に分別出来る。当時の人は、どのようにして住居跡の形状を決定して掘削し構築したのか、この点を視点にして個別毎の所見を記した。ここでは各住居跡の部位ごとに所見をまとめる。

1 住居跡の壁

通常、住居跡の壁は、平面図上で上端・下端の二本の線で描画されているが、上端線は壁の崩壊部分の範囲おも含めた外形線である。しかし、当遺跡の場合、住居跡の遺存状態が良く、露呈されている壁は、写真記録では断面図より垂直に見られる。そして、上端線は崩落・崩壊の外形線としての性格が強い。すなわち、下端線が構築段階の形状に最も近い住居跡が多いのと、構築意図の規模は、この下端での距離「下端間距離」が当てられる。しかし、住居跡形状が正方形と言っても、数学の概念とは異なるため、規模は測点部位により一様な数値は得られない。

住居跡の四壁には、1辺か2辺の直線的な造りの壁が直角状態で交わる場合が多い。しかし、他の3辺か2辺は緩やかな曲線状態に造られている。

2 住居の四隅部

住居跡の四隅部には3種がある。①隅部を構成する壁がほぼ直角に交わる状態。②隅部が丸みを帯びる状態。③隅部が曲線を描く状態。この3種が1軒の住居跡で認められることが多い。特に直線的な2壁を扶む隅部では①の状態が看取される。また、他の2壁で3種の状態が認められるが、直線的な壁の1壁の両端に①の状況が認

められることが多い。

3 主柱穴

主柱穴は伴う住居跡、伴わない住居跡の二種があるが、後者は小形住居跡が占める。主柱穴を伴う住居跡は、24号住居跡を最小規模とする。床面での壁下端間距離1辺4.3m×4.35mである。

主柱穴の配置位置には、表現上「屋内寄り」・「壁寄り」の二者と、これに「やや」を冠したが、より具体性をもたせるため、数値化で表した住居跡もある。数値化は、壁下端から柱穴の芯々までの距離(最寄りの2壁からの計測距離)と壁下端間距離を比較させた数値である。数値として1:4~1:5など双方の中間値が得られている。

主柱穴の配置位置は、住居跡の形状より歪んだ配置が多く、規則性を見出すのは困難である。しかし、4本の主柱穴をそれぞれ最寄りの隅部を介する2壁の下端からの距離を計測すると、仮に、東壁・西壁側からか、北壁・南壁側からの距離で、どちらかの計測距離に近似する値が得られている。すなわち、柱穴に対して平行する両壁側からの壁下端の一方から、適度な距離を採り位置の決定をしている。この場合、この直交方向からの壁下端から距離は不特定であり、この不特定状態が住居跡形状より歪んだ配置状態に見せている。

住居の規模決定や、上屋構造材などの調達など、当時も何らかの形で長さ・大きさを決めていた事が想定される。このため、住居跡の柱穴位置を各部位から得られた計測数値に、公約数という形で求めてみた。いわゆる「尺度」である。この結果24cm・30cmの単位が得られたが、これを尺度と表現するにはまだまだ憚る。しかし、何らかの形で長さの基準の存在が示唆される。

主柱穴の配置位置としては、42号住居で屋内寄りの配置位置から、壁側に配置位置が変わる状況が看取されている。同様に、調査区内中央部付近で発見された14・15号住居は、1辺9m級の巨大な住居跡が2mを置かず並んだ状態で発見されている。双方の住居跡からは、廃棄時伴う遺物がほとんど得られなかったが、14号住居は7世紀中頃には廃棄され、15号住居は7世紀前半には廃棄されている。この双方の主柱穴は14号住居が壁寄りの配置を採り、15号住居は屋内に寄った位置に配置している。このことから、主柱穴の配置は、屋内側から壁寄りの配

位置の変化が認められる。

4 貯蔵穴・竈

貯蔵穴は、平面形状で正方形・長方形・円形・楕円形を基調とする各様が見られる。これらの形状の決定はいかなる理由により決定されたかは不明である。

竈は、屋内外の形状に違いが認められる。竈を屋内側に長く突出させる竈は屋外側の造りが短い。この竈の作り出す長さ、屋外側への造り込距離に各様が認められた。竈の設置は、住居跡の中軸と壁の交点に左袖を設ける住居跡が多く、このために竈の設置位置が中心から右側に外れた位置になっている。また、竈の構築は、左右一方の内壁面を壁に向かい直角に掘え、各部位の必要幅を対壁側に求め、形状決定し構築している。

5 掘方

当時の掘削工具・土運搬具は、鋤・鍬・モッコなど、限られた道具により住居の掘削が行われた事は推定に易い。住居の掘方も、同様な道具により掘削・土運搬が行われていた事は確実である。そして、掘方に留められた起伏は、掘削当時の掘削方法の一部の状態でもある。住居跡の掘方に留められた痕跡には、「L」字状の掘り込み、逆「L」字状の掘り込み、「コ」の字状の掘り込み、溝状、土坑状の掘り込み、これらは壁直下で認められる状況である。また、掘方の掘り込みが一方的な状態、一つの壁直下に偏って認められる状態などである。これらは、四壁の中でも特に直線的な状態の壁面直下で認められることが多く、直線的な壁面の両端の隅部は、直角に近い鋭い状態に仕上がっている。掘削当初の粗掘りには、構築当初の構築者の創作意図が内在していると考えられる。

6 構築基準辺

住居跡の掘方は、構築当初の構築方法・経過を残す唯一の状況証拠である。上記の直線的な壁の造り、直角に交わる隅部の状態、「L」字状掘方など、調査された住居跡で普遍的に認められる。

「住居の構築基準辺」は、竪穴の掘削段階に設けたと考えられる1辺を基準とする直線面であり、構築する住居規模・方向を決定する要素を含んでいる。この「構築基準辺」の痕跡が、多くの場合掘方に痕跡として留められ

ている。また、「構築基準辺」は、古代以降の構築物に普遍的に認められる平面上の設計基準線であり、中心軸から必要な幅員を採り形状を決定するのは異なり、片側の辺(面)を基準に必要幅員を採り形状を決定する構築方法の「基準」である(註)。

住居跡の構築基準辺は、四壁の中から直線的な壁と、隅部が直角に近い状態で交わり、掘方では溝状・「L」字状が認められる壁を以て「住居の構築基準辺」とした。

7 まとめ

住居の構築には、構築基準辺の設定により住居竪穴の掘削方向・規模が確定され、粗掘り、床造り(造床)、竈構築、柱穴掘削、上屋の組み方などの工程が見込まれる。そして、完成から廃棄されるまでの使用期間はそれぞれの住居跡により異なると考えられるものの、個別の住居跡の存続期間を推定するのは、特殊な条件下でなければ困難である。

住居跡の形状には、構築当初の状態がほぼそのまま留められている。一方、竈は改築・据え換えにより構築当初の姿を残していることは極めて稀であり、露呈される竈の形状は廃棄段階の形状である。

通常、住居跡の時期決定は、住居の廃棄時に残された遺物等、出土土器類を拠り所として推定される。しかし、住居跡が構築された時期は、遺物での推定は困難であるが、「○世紀前半」・「○世紀第1四半期」などの時間幅の中での「見出し時期」で当てている。また、出土遺物が無い場合は、住居跡形状・竈形状等により時期の推定を行っている。

住居跡の構築状況は、住居跡の形状に残されている。この住居の構築状況・形状と廃棄段階の竈形状を住居跡相互間で比較することにより、遺物による住居の廃棄時期による相互間の関係とは異なる状況が見出せる可能性があり、集落の実態把握のためには、住居跡の構築状況・形状・竈・遺物の三者による検証が必要であろう。

後段で出土遺物について述べられるので、その成果を踏まえ、別稿で改めて上記三者での検証を行ってみたい。
註：木津博明 1989 「構築基準辺に就いて」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 で概念について記した。

第3節 各遺構について

本遺跡では、ここまで述べたように、多種多様な遺構が見つかっている。それらの概要は既に第3章第1節で触れた通りであるが、ここでは調査成果の意義についてまとめておきたい。

古墳時代の集落について

本遺跡では合計68軒という、多数の竪穴住居を調査することができた。その中には5世紀代のもと思われるものが4軒、8世紀に下る可能性があるものが1軒含まれるが、その他の63軒はすべて古墳時代後期、6～7世紀のものであり、かなり短かい期間の中で営まれた集落と言うことができる。この地域の集落遺跡については第2章第2節で述べたとおりであるが、古墳時代後期以降の集落は、芳賀東部団地遺跡を中心とした五代地区の諸遺跡を初めとして、数多く調査されている。しかし、それらの遺跡の集落は、いずれも奈良・平安時代まで継続して営まれており、本遺跡のように8世紀以降、完全に集落が見られなくなるといったことはない。この地域では本遺跡のような例はやや特異であると言えよう。集落が廃絶することについては、遺跡周辺の環境に特に大きな変化は指摘できないので、何らかの政治的・社会的要因が深く関わっていたものと考えられるが、その要因を明らかにすることは、今回の調査成果だけでは難しい。いずれにしろ、赤城南麓の古墳時代後期の集落の消長はかなり流動的なものであったことが、本遺跡の調査から判明した。今後周囲の集落遺跡の動向を含めて検討することで、本地域の集落の変遷がより鮮明になってくるものと期待される。

粘土探掘坑について

粘土探掘坑と呼んだ遺構は8基と1群がある。このうち、西に大きく離れた9号だけが8世紀代のもので、残りはみな6～7世紀代のものであり、竪穴住居の年代と同時期のものである。9号以外は調査区東部にある浅い谷状地形の部分と、その近傍にある。

これらの遺構を「粘土探掘坑」と考えたのは、通常の竪穴住居や土坑の掘り方とは異なり、壁がオーバーハン

し、底面近くで外側に大きく広がっていることによる。そのため、その大きく掘り広げられている層位の土を採掘するための穴ではないかと考えたのである。その層位は、基本土層でⅩ層とした層位であり(16ページ、第7図)、灰白色のシルト層であるが、よく観察すると、ちょうど掘り広げられている高さには、粒子の細かい白色粘土のごく薄い層が1～2層認められた。おそらく、この粘土の層が採取の主目的なのではないだろうか。しかし、この白色粘土の層は厚さ1cm前後とごく薄いものなので、完全にこの土のみを目的にしたとは考えがたく、底面には顕著な凹凸も見られる。おそらく、それを中心とした前後の白色シルトを含めて採掘するのが目的なのではないかと考えるのが妥当であろう。

それでは、何に使用する目的で、この白色粘土層を含む灰白色シルトを採掘したのであろうか。その問題を考えるのは非常に難しい。これらの層位の土の科学的な分析などは実施しなかったため、確定的なことを述べることはできないが、白色粘土層は粘土とはいっても粘性はあまり強くなく、土器などの材料にはなりにくいというのが発掘時の印象であった。もちろん、前後のシルト層はさらに粒子が粗く、砂も含むので、土器などには向かない。とすると、竈構築材などとして使用したのではないかとというのが一つの考えであろう。灰白色や、あるいは黄灰色のシルトを竈構築材にしている住居は9、10、14、17号住居など数多いし、シルトブロックを多く含んだ土で構築している住居も数多く存在する。そのため、ここで採掘した、白色粘土を含むシルトの用途として、まず第一の候補として竈構築材を考えることが可能である。

しかし、使用したのが竈の構築材だけだとすると、それに使用するシルトの量に比べて、粘土探掘坑の規模があまりにも大きいように思われる。特に粘土探掘坑群と名付けたものは、谷状地形の広い範囲を掘り広げており、かなり大量に灰白色シルトを掘り出したものと思われる。とすると、他にも用途があったと考えるべきだと思われるが、残念ながら今回の発掘調査の結果のみからは、それを明らかにすることはできなかった。

白川扇状地の堆積物について

この灰白色シルトは基本土層でⅩ層と呼んだものだ

が、この層は非常に厚く、発掘調査の段階ではその層厚を確認できなかった。しかし、西隣の庄子遺跡の西側にある崖面には良好な露頭があり、その全体を観察することができた。そこでは成層した水成堆積物として把握でき、3m以上の厚さがある。これが本遺跡のある白川扇状地を形成する層と考えられるが、その下層には火山灰を含む層をみることができた。東田之口遺跡で観察できるIX層は、その水成堆積物の最も上層に当たる部分と考えられ、しかも、残りのいいところではその上にも火山灰を含む層が認められる。とすれば、その両者の火山灰を分析することで、この水成堆積物の年代をある程度絞ることができ、白川扇状地の形成年代の一端を把握することができるのではないかと考えられた。そのため、両者の火山灰分析を実施し、その結果を第4節1に掲載した。

分析の結果、下層の火山灰はAs-BPグループであり、上層の火山灰はAs-0kグループであることが判明した。そのため、この水成堆積物の年代は、As-BP（約1.9～2.4万年前）からAs-0k（約1.6～1.65万年前）の間であることになり、本遺跡ののる白川扇状地の形成年代をある程度掴むことができた。

16号土坑の馬歯

16号土坑は4号粘土探掘坑と重複する土坑である。残念ながら調査時にはその存在に気づかず、粘土探掘坑と同時に掘り下げてしまったため、新旧関係や平面形などが不明となってしまった。ただ、出土遺物や土層から、4号粘土探掘坑と時期が大きく異なるとは思えず、7世紀前半を前後する時期のものと考えられる。

この土坑の中からは馬歯が1頭分まとまって出土したため、その鑑定分析を行った。その結果は第4節の3で述べられているとおり、馬の性別は不明で、5～6歳の幼齢馬か、あるいは牡馬であることが判明した。しかし、注目すべきはその出土状態である。歯の位置から頭骨の位置を推定すると、第231図のようになり、頭を切断して埋納したとしか考えられない、不自然な位置となるのである。胴体部分は出土していないが、4号粘土探掘坑に壊された部分にあったことは否定できない。そのため、頭だけを埋納したとは即断できないが、人為的に頭骨を切断し、土坑に埋納した可能性は高い。このように馬の

頭部を切断して土坑に埋納した例としては、千葉県佐倉市大作古墳群31号墳のものがある。そこでは歯や馬具の出土状態から、頭部を切断された馬が胴体と共に一つの土坑に投げ込まれたように埋納されていたと復元されており、この馬はこの古墳に殉葬されたものと考えられている（財団法人千葉県文化財センター『佐倉市大作遺跡』1990）。時期は6世紀初頭前後と考えられており、本遺跡のものよりもやや遡る。本遺跡では古墳に伴うものではないので、少なくとも「殉葬」とは違う性格のものであろう。歯の出土だけなので、考える資料に乏しいが、何らかの祭祀に伴って馬の頭部が埋納された可能性は高いものと思われる。その際、住居が集中する部分の東の端、浅い谷地形に近い部分に見ついているのが、性格を考える根拠の一つになるかもしれない。

中世の遺構について

既に前述しているように、本遺跡の北西を中心とした部分には、中世と思われる遺構が集中している。残念ながら削平が深くまで及んでいる範囲にあたり、遺構の残りが非常に悪かったが、多くのピット、土坑、溝のほか、6基の井戸や2基の墓などが見つかっており、この付近に中世の館があった可能性は高い。出土遺物は少ないが、その時期は14～16世紀と考えられる。

墓からは人骨が出土しており、鑑定分析を実施し、その結果は次節2に掲載したとおりである。そのうち68号土坑は銭の出土から15～16世紀のものと考えられ、人骨は成人女性のもので推定された。84号土坑は遺物が出土せず時期は不明だが、周囲の遺構から見て中世のものである可能性が高く、人骨・歯は18～20歳代の若い女性であると推定された。墓はこの2基しか見つからないが、似たような形の土坑は周囲にもあり、削平を考えれば、他にも複数存在した可能性は高い。

周辺の遺跡の項で述べたように（15ページ）、この地域には戦国時代には嶺城、大胡城があり、その支城、砦などがいくつも作られている。しかも、西隣に位置する庄子遺跡からは中世の大規模な環濠が見つかっており、関連が考えられる。庄子遺跡も本遺跡と同様、館の内部構造を把握することはできなかったが、上記の城跡群の一部をなす館であった可能性は十分考えられ、本地域の中世を考える上では重要な遺構だと思われる。

第4節 自然科学分析

東田之口遺跡では、火山灰分析、人骨鑑定、獣骨鑑定という、3種の自然科学分析を実施した。

火山灰分析は、本遺跡の立地する白川扇状地の形成年代の一端を明らかにするために行ったものである。というのも、本遺跡の基本土層でⅩ層とした層以下には厚い水成堆積物が認められ、これがこの遺跡の基盤となっているが、西隣に位置する丑子遺跡の南西端(第2図にその位置を●印で示した)の崖面にはその層が露頭として観察でき、しかも、その層の下位には火山灰を含むと思われる土層が観察できたからである。本遺跡の旧石器調査の7号トレンチ(やはり第2図に位置を示した)ではこのⅩ層の上に火山灰を含む層があり、とすれば、両者の火山灰を分析・比較することでこの水成堆積物の年代をある程度絞ることが可能であるからである。以上の目的で火山灰分析を株式会社火山灰考古学研究所に依頼し、その分析結果を以下1項に掲載した。

人骨は68号、84号の2基の土坑から出土した。いずれも中世のものと思われ、その性別・年齢などを明らかにするために鑑定分析を行った。

馬歯は16号土坑から1頭分がまとまって出土した。時期の特定は難しいが、古墳時代後期のものである可能性が強い。馬の年齢や歯がまとまって出土した意味などを考える手掛かりを得る目的で鑑定分析を行った。以上の人骨・馬歯の鑑定分析は生物考古学研究所・橋崎修一郎氏に依頼し、その結果は以下2項、3項に掲載した。

1 東田之口遺跡と丑子遺跡の火山灰分析

1. はじめに

関東地方北西部に位置する赤城山麓とその周辺には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを抽出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や

遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

赤城山南麓の台地上に位置する東田之口遺跡の発掘調査区や露頭でも、層位や年代が不明なテフラや土層が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を行って、土層の層序や層位さらに年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、丑子遺跡西露頭および7号トレンチ(150-635)の2地点である。

2. 土層の層序

(1) 丑子遺跡西露頭

台地の断面が認められた西露頭では、本遺跡が位置する扇状地面を構成する堆積物を観察できた(第223図)。ここでは、露頭の下部にテフラ層を多く挟む腐植質堆積物が認められた。それは、下位より黄灰色細粒軽石層(層厚3cm以上、軽石の最大径2mm)、黒泥層(層厚1cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚2cm)、黒褐色泥層(層厚1cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)、黒泥層(層厚2cm)、白色細粒火山灰層(層厚0.8cm)、黒泥層(層厚5cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚1cm)、細粒軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層(層厚9cm、軽石の最大径2mm)、黒泥層(層厚2cm)、黄灰色細粒軽石層(層厚10cm、軽石の最大径5mm、石質岩片の最大径2mm)、黒褐色泥層(層厚1cm)、白色砂質細粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚0.8cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚5cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚1cm)、紫灰色シルト層(層厚6cm)、黒泥層(層厚1cm)からなる。

その上位には、成層した厚い水成堆積物が認められる。それは、下位より層理が発達した桃灰色砂質シルト層(層厚13cm)、砂がちの灰色泥流堆積物(層厚78cm、礫の最大径38mm)、層理が発達した灰色砂層(層厚11cm)、垂円礫層(層厚64cm、礫の最大径115mm)、黄白色軽石を少量含む灰色砂層(層厚41cm、軽石の最大径11mm)、桃色シルト層(層厚5cm)、層理が発達した灰色砂層(層厚14cm)、黄灰色砂層(層厚5cm)、灰色砂層(層厚12cm)、礫混じり灰色砂層(層厚19cm、礫の最大径13mm)、褐色リモナイト層(層厚2cm)、粗粒の黄白色軽石を特徴的に含む灰色泥流

堆積物(層厚61cm, 軽石の最大径43mm, 礫の最大径22mm)からなる。その上位には、灰褐色土(層厚38cm以上)が形成されている。

(2) 7号トレンチ(150-635)

台地上に位置する7号トレンチ(150-635)では、下位より灰白色シルト質砂層(層厚4cm以上)、黄色がかった白色細粒軽石に富む黄色砂質土(層厚21cm, 軽石の最大径3mm)、褐色リモナイト層(層厚0.9cm)、黄白色細粒軽石を少量含む褐色土(層厚17cm, 軽石の最大径2mm)、灰色礫混じり灰色砂層(層厚28cm, 礫の最大径3mm)、黄褐色土(層厚19cm)、黄色軽石層(層厚11cm, 軽石の最大径6mm, 石質岩片の最大径2mm)、灰褐色土(層厚6cm)が認められる(第224図)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

西露頭および7号トレンチ(150-635)において採取した試料のうちの15試料を対象に、テフラ粒子の相対的な特徴を把握するテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第13表に示す。西露頭では、分析対象のいずれの試料からも軽石やスポンジ状や繊維束状に発泡した火山ガラスを多く検出できた。また、いずれの試料にも、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。

最下位の試料10には、とくに多くの灰白色や白色を呈する比較的良く発泡した軽石(最大径5.4mm)が含まれている。試料9、試料8、試料6には、灰白色の軽石型ガラスがとくに多く含まれている。このうち、試料8にはスポンジ状に良く発泡した軽石(最大径2.6mm)、試料5には比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径3.2mm)が少し含まれている。試料4には、比較的粗粒の比較的良く

発泡した灰白色軽石(最大径10.2mm)がとくに多く含まれている。火山ガラスとしては、その細粒物である灰白色軽石型ガラスのほか、白色の軽石型ガラスも少量含まれている。試料1には、灰白色や白色の軽石型ガラスが多く含まれている。

一方、7号トレンチ(150-635)では、砂層から採取された試料10をのぞいて軽石や火山ガラスを検出できた。この中では、試料20に比較的多くの透明のバブル型ガラスが認められる。細粒軽石に富む土層から採取された試料18や試料16には、灰白色、灰色、無色透明の分厚い中間型ガラスのほか、白色や透明の軽石型ガラスが含まれている。これらは、試料14で比較的多いようにみえる。さらに、試料6や試料4でも同様な傾向にあるが、軽石層から採取された試料1には、スポンジ状や繊維束状に発泡した無色透明や白色の軽石型ガラスが含まれている。また、この試料では多くの斜長石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

特徴的なテフラ粒子が認められた試料のうち、7号トレンチ(150-635)の試料18に含まれる火山ガラスについて、指標テフラとの同定精度を向上させるために、温度変化型屈折率測定法により屈折率(n)の測定を行った。測定には、京都フィッシュン・トラック社製RMS2000を使用した。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第14表に示す。7号トレンチ(150-635)の試料18に含まれる火山ガラス(18粒子)の屈折率(n)は、1.500-1.502である。

5. 考察

西露頭で認められたテフラ層は、いずれも層位や岩相などから約1.9～2.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003, 早田, 1996など)と考えられる。

一方、7号トレンチ(150-635)の試料18が採取された土層中に多く含まれるテフラ粒子は、層位、火山ガラスの形態、色調などから、約1.7万年前*1と約1.6万年前*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-

Ok1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)と浅間大窪沢第2軽石(As-0k2, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996, As-0k1と合わせて仮に浅間大窪沢テフラ群: As-0k Groupとする)に由来すると思われる。火山ガラスの屈折率からは、前者の可能性がより高いと考えられる。この地点で最上部付近に認められる黄色軽石層については、層相や含まれる火山ガラスの特徴などから、約1.3～1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石群(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003)と考えられる。

なお、本地点の最下部の試料20に少量含まれる無色透明のバブル型ガラスについては、その特徴から、As-BP Groupの下位にある、約2.4～2.5万年前*1に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 2003, 松本ほか, 1986, 村山ほか, 1991, 池田ほか, 1995)に二次的に由来するものと考えられる。

以上のことから、本遺跡では、As-BP GroupとAs-0k Groupの間と、As-0k GroupとAs-YPの間に水成堆積物が挟まれていると考えられる。とくに下位の堆積物が厚く、本遺跡の位置する台地をつくっていると思われる。今後さらに周辺でも地形地質の調査を実施して、これら水成堆積物の層厚分布や成因に関する資料の収集が望まれる。

6. まとめ

東田之口遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、下位より、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9～2.4万年前*1)、浅間大窪沢軽石群(As-0k Group, 約1.6～1.7万年前*1)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3～1.4万年前*1)などの指標テフラを検出できた。As-BP GroupとAs-0k Groupの間と、As-0k GroupとAs-YPの間には水成堆積物が認められ、とくに厚い前者については本遺跡の位置する台地を構成していると考えられる。

*1 放射性炭素(¹⁴C)年代。ATとAs-YPの較正年代については、約2.6～2.9万年前と約1.5～1.65万年前と考えられている(町田・新井, 2003)。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群

馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.

新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.

荒牧重雄(1968)浅間火山の地質, 地研専報, no.45, 65p.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫(1995)南九州, 始良カルデラ起源の大間降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器¹⁴C年代, 第四紀研究, 34, p.377-379.

町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義一, 科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.

町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の¹⁴C年代, 第四紀研究, 26, p.79-83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代, 地質雑, 99, p.787-798.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山, 黒班～前掛期のテフラ層序, 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.

早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

第13表 テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
西露頭	1				***	pm(sp,fb)	灰白,白
	4	****	灰白	10.2	**	pm(sp,fb)	灰白,白
	5	*	灰白	3.2	****	pm(sp,fb)	灰白
	6				****	pm(sp,fb)	灰白
	8	*	灰白	2.6	****	pm(sp,fb)	灰白
	9				****	pm(sp,fb)	灰白
	10	****	灰白,白	5.4	**	pm(sp,fb)	灰白,白
7号トレンチ(150-635)	2				*	pm(sp,fb)	透明,白
	4				*	pm(sp,fb),md	透明,白,灰
	6				*	pm(sp),md	透明,灰
	10						
	14				**	pm(sp,fb),md	白,透明,灰白,灰
	16				*	pm(sp,fb),md	白,透明,灰白,灰
	18				*	md,pm(sp,fb)	灰白,灰,白,透明
	20				*	bv	透明

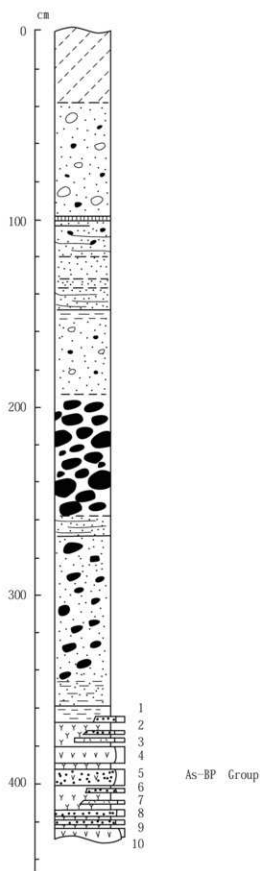
****:とくに多い, ***:多い, **:中程度, *少ない, 最大径の単位は, mm, bv:バブル型, md:中間型, pm:軽石型,

sp:スポンジ状, fb:繊維束状,

第14表 屈折率測定結果

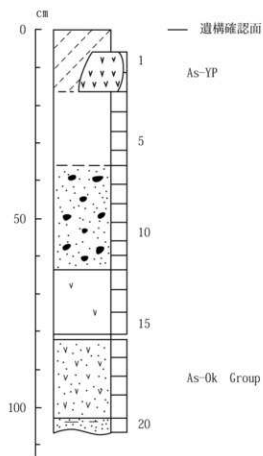
地点名	試料	火山ガラス	
		屈折率(n)	測定点数
7号トレンチ(150-635)	18	1.500-1.502	18

測定は温度変化型屈折率測定装置(R1MS2000)による。



第 223 図 西露頭の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号



第 224 図 7号トレンチ (150-635) の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

2 東田之口遺跡出土人骨

生物考古学研究所 橋崎修一郎

1. はじめに

東田之口遺跡は、群馬県前橋市上細井町に所在する。国道17号(上武道路)改築工事に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、2008(平成20)年7月～2009(平成21)年2月まで行われた。

本遺跡の68号土坑及び84号土坑から、中世人骨が出土したので、以下に報告する。なお、歯の計測方法は、藤田にしたがった(藤田 1949)。

2. 68号土坑出土人骨

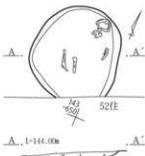
68号土坑出土人骨は、長軸(南北)約104cm・幅(東西)約68cm・深さ約34cmの隅丸長方形土坑から出土している。本土坑では、南部から大腿骨片1点のみが検出されている。

副葬品は、銭貨5点(永楽通寶1点・洪武通寶2点・祥符元寶1点・景德元寶1点)が検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。大腿骨は、比較的小さく華奢であるため、被葬者は成人女性であると推定される。

3. 84号土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況:本土坑は、南部が52号住居と重複しており、全容は不明である。現状で、長軸(南北)約96cm・短軸(東西)約94cm・深さ約11cmの規模で、恐らく楕円形土坑であると推定される。

(2)被葬者の埋葬状態:人骨の出土位置から、被葬者は頭位を北にし顔面部を西に向けた横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。



第225図 84号土坑出土人骨平面図[1/40]

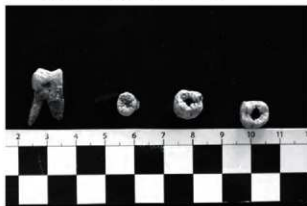
(3)個体数:出土骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(4)性別:出土歯の歯冠計測値が、全般的に小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(5)死亡年齢:出土歯の咬耗度を観察すると、咬耗がほ

んど無いかあるいはエナメル質に限定されるマルティンの0度と1度の状態である。出土状況から、M3(第3大臼歯)は萌出しているのに、被葬者の死亡年齢は約18歳から20歳代であると推定される。

(6)古病理: 齧蝕(虫歯)は、上顎左M1(第1大臼歯)の遠心面・下顎左右M1の咬合面に認められた。また、上顎左M3(第3大臼歯)は、退化形を示している。



第226図 84号土坑出土人骨[左から、上顎左M1遠心面齧蝕・上顎左M3退化形・下顎右M1咬合面齧蝕・下顎左M1咬合面齧蝕]

第15表 東田之口遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	本遺跡 84号土坑		中世時代人*		江戸時代人*		現代人**			
		右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀		
上	I1	MD	8.1	—	8.48	8.29	8.78	8.38	8.07	8.55	
		BL	6.8	—	7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28	
	I2	MD	6.9	—	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05	
		BL	6.2	—	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51	
	C	MD	7.7	7.7	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71	
		BL	8.7	8.6	8.50	7.94	8.96	8.03	8.52	8.13	
	P1	MD	7.2	7.1	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37	
		BL	9.5	9.4	9.46	9.03	9.67	9.33	9.99	9.43	
	P2	MD	6.9	6.6	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94	
		BL	9.1	9.3	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23	
	顎	M1	MD	9.5	9.6	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47
		BL	10.8	10.6	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40	
MD		8.2	8.5	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74		
M2	BL	10.9	11.1	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31		
M3	MD	7.5	6.9	—	—	—	—	8.94	8.86		
BL	10.1	8.2	—	—	—	—	10.79	10.50			
下	I1	MD	5.6	5.5	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48	5.47	
		BL	5.5	5.6	5.78	5.61	5.78	5.65	5.88	5.77	
	I2	MD	—	6.1	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11	
		BL	—	6.1	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30	
	C	MD	6.9	6.7	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68	
		BL	7.5	7.5	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50	
	P1	MD	7.2	7.3	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19	
		BL	7.8	8.0	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77	
	P2	MD	7.0	7.1	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29	
		BL	7.8	8.2	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26	
	顎	M1	MD	9.9	10.2	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
		BL	9.5	9.7	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55	
M2	MD	—	10.7	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30	10.89		
BL	—	9.6	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53	10.20			
M3	MD	—	10.6	—	—	—	—	10.96	10.65		
	BL	—	9.2	—	—	—	—	10.28	10.02		

3. 東田之口遺跡出土馬歯

生物考古学研究所 橋崎修一郎

1. はじめに

東田之口遺跡は、群馬県前橋市上細井町に所在する。国道17号(上武道路)改築工事に伴う発掘調査が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により、2008(平成20)年7月～2009(平成21)年2月まで行われた。

本遺跡では、約5世紀～7世紀の古墳時代竪穴住居・平安時代の溜井・中世の掘立柱建物等が検出されている。特に、古墳時代の竪穴住居は、5世紀代が4軒・6世紀～7世紀が64軒と多く検出されている。

本遺跡の16号土坑から、ウマ[*Equus caballus*]の歯が出土したので、以下に報告する。なお、馬歯の計測方法は、フォン・デン・ドリッシュ[Von den DRIESCH]にしたがった(von den DRIESCH 1976)。

2. 馬歯の出土状況[2008年8月29日出土]

16号土坑は、南東部で4号粘土採掘坑と重複しているが、新旧関係は不明である。本馬歯は、現状で、北北東～南南西が約2.1m・北北西～南南東が約1.04m・深さ約0.42mの規模の土坑から出土している。

なお、明確な時代の特定は困難であるが、本土坑からは古墳時代後期の土器片が出土している。これらが、副葬品かどうかは不明である。



第227図 16号土坑出土馬歯出土平面図[1/40]



第228図 16号土坑出土馬歯出土状況[南東から撮影]

3. 馬歯の出土部位

上下左右のP2[第2小白歯]～M3[第3大白歯]までの白歯24本が出土している。その他、上下左右のI1[第1切歯]・I2[第2切歯]・I3[第3切歯]の破片も出土している。四肢骨片は、検出されていない。

なお、本馬歯は取り上げ時にラベルが付されており、小白歯にはP1～P3と書かれていたが、馬の場合、P1[第1小白歯]は、痕跡的に退化している場合も多く、特に下顎では欠けることが多い。また、上顎の犬歯化したものは狼歯とも呼ばれている。家畜の場合は、ハミの妨げになるとしてこのP1を抜歯する場合もある。したがって、実際は、P1～P3ではなくP2～P4となる。

4. 馬の個体数

出土馬歯には、重複部位が認められないため、馬の個体数は1個体であると推定される。

5. 馬の性別

馬の場合、性別は、一般的に犬歯の有無及び寛骨の形態で推定することが可能である。しかしながら、今回、犬歯及び寛骨は出土していない。

犬歯は、稀に雄でも萌出しない場合があったり、雌にも萌出することがあるため、犬歯が出土していないからといって、雌であるとは判断できないので、性別は不明である。さらに、家畜の場合、前述のP1[第1小白歯]と併せてC[犬歯]も抜歯する場合があるという。この抜歯の風習が古代から存在したかどうかは不明である。

6. 馬の死亡年齢

出土白歯の歯冠高から、馬の死亡年齢は、幅を持たせて約5歳～6歳の幼齢馬あるいは牡馬となる。ちなみに、幼齢馬は1歳～5歳、牡馬は6歳～16歳と区分されている。



第229図 16号土坑出土馬歯右側上下歯列頰側面観



第230図 16号土坑出土馬歯左側上下歯列頰側面観

第16表 東田之口遺跡16号土坑出土馬歯計測値

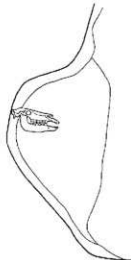
計測項目	上顎右						上顎左					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
ノ歯種	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
MD	26 mm	25 mm	23 mm	27 mm	29 mm	35 mm	35 mm	29 mm	28 mm	24 mm	24 mm	26 mm
BL	20 mm	23 mm	23 mm	25 mm	24 mm	22 mm	22 mm	24 mm	24 mm	23 mm	破損	20 mm
CH	53 mm	53 mm	42 mm	53 mm	51 mm	40 mm	41 mm	54 mm	55 mm	44 mm	53 mm	51 mm
計測項目	下顎右						下顎左					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
MD	30 mm	25 mm	24 mm	27 mm	27 mm	31 mm	31 mm	27 mm	27 mm	23 mm	25 mm	30 mm
BL	11 mm	12 mm	12 mm	14 mm	15 mm	13 mm	13 mm	15 mm	14 mm	12 mm	12 mm	11 mm
CH	60 mm	65 mm	56 mm	71 mm	62 mm	42 mm	42 mm	61 mm	70 mm	57 mm	64 mm	60 mm

註1. 歯種は、P2(第2小白歯)・P3(第3小白歯)・P4(第4小白歯)・M1(第1大白歯)・M2(第2大白歯)・M3(第3大白歯)を意味する。

註2. 計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠頬舌径)・CH(歯冠高)を意味する。

7. 埋葬状態の復元

本馬歯の出土状況から、馬の頭部を切断して埋葬した可能性が高い。頭部は、右側を上にして左側を下にした状態で埋葬されている。但し、頭部のみを埋葬したのか、切断した四肢骨も埋葬したのかは、四肢骨が出土していないため不明である。土坑は重複しているため、全容は不明であるが、比較的大きいので、切断した頭部と胴体部を埋葬した可能性もある。葬送儀礼に関連したものであろうか。



第231図 16号土坑出土馬歯埋葬推定図[1/40]



第232図 16号土坑出土馬歯出土状況近接[南東から撮影]まとめ

東田之口遺跡の16号土坑から、馬歯が出土した。古墳時代後期の可能性もある。この個体は、性別不明で約5歳～6歳の幼齢馬あるいは牡馬であると推定された。馬歯の出土状況から、少なくとも、頭部を切断して埋葬した可能性が高く、葬送儀礼に伴うものと推定される。

引用文献

Von den DRIESCH, Angela 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites", Peabody Museum Bulletin No.1, Harvard University

遺物観察表 凡例

古墳時代～中近世遺物の遺物観察表(第17表～第61表)においては、略号などを多く用いたので、以下にその凡例を掲げる。

出土位置 竪穴住居・竪穴状遺構の場合、出土位置を記録しその位置を挿図にドットで示してある遺物については、遺構内のおおよその出土位置を記述し、同時に床面とのレベル差を+○(cm)、-○(cm)と示す。cmは略。±0や床面にわずかにめり込んでいる場合は「床直」と記述する。その他の遺物は「覆土」「瀧内」「掘方」と記述する。

残存率 %で表示する。

計測値 土器は口径・底径・高さを計測する。石製品・金属製品などでは、長さ・幅・厚さなどを計測しているが、形状により異なる。単位はcm。重さを計測した場合もあり、その場合の単位はg。

胎土分類 下記参照。

胎土 古墳時代～古代の土器について記述している。夾雑物の略号は以下の通り。

微=微細砂粒 細=細砂粒 粗=粗砂粒 ガ=ガラス質の粒子 褐粒=褐色粒子 白粒=白色粒子

その他、角閃(石)、長石、雲母、砂岩などの混入を記述している。

色調 『新版標準土色帖1999年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修)に準拠した。

焼成 古墳時代～古代の土器について記述している。土師器の場合は「良好」か「やや軟質」かを区別し、須恵器の場合は「還元焰」か「酸化焰」かを区別して記入している。

○胎土分類について

1. 胎土分類の目的は、類似する胎土を分類し、ある程度の産地分類を試み、産地別の需給関係を明らかにする方法として行った。
2. 分類の対象は、掲載遺物の全てと、住居跡出土の未掲載遺物全てに対して行ったが、住居跡以外の遺構・遺構外出土遺物は未実施である。
3. 分類対象の数量は、掲載土師器669点・須恵器214点・埴輪6点。未掲載遺物土師器22,897点・須恵器250点、合計24,039点である。縄文土器は未分類である。
4. 分類の方法は、肉眼観察により分類した。また、分類した一部を10倍ルーペ・実態顕微鏡で観察を行ない、特定鉱物の同定、含有夾雑物の確認を行った。
5. 分類の基準は、可能な限り生地土の段階を想定して行い、特定夾雑物以外での夾雑物による分類は行っていない。
6. 分類は、A～Eの基本分類に適宜枝番号を付した。この結果、分類は9種類に及んだ。須恵器類では、特定古窯跡群の名称を冠したものもある。
7. 夾雑物の中で、「βQtz」としたものは「高温石英」を表す。
8. 県内の主要粘土分布との対比は、木津博明 1992「上野国窯業考(序)」『研究紀要10』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 P211・第10図を参照されたい。

分類の各様

A類、枝分類無し。緻密な密度で可塑性の強い生地土を使用する。比重は重い。陶土質。東毛地区の雷電山古窯跡群以

東太田古窯跡群(渡良瀬川扇状地は含まない)程の分布範囲を推定している。ただし、笠懸古窯跡群は除外。

夾雑物：白色鉱物粒子(石英)・微細透明鉱物粒子(β Qtか火山ガラス)(劈開面がない裂開面で構成)・微細な白色粒子など。

土師器裏は角粒状の粗粒砂(灰色チャートが多い)を含有する。人的に混入させた可能性がある。

B類 粘土化したローム土を生地上に使用する。

B 1類 調査区で出土したローム土とは異なる。調査区で出土したローム土は比重が軽い、胎土に使用されているローム土は比重が重い。多孔質。前橋市東部の低地・伊勢崎市域の広範囲での堆積が考えられる。暗色帯相当の層位、西宿遺跡の粘土採掘坑で採取されていた粘土も該当する。俗称「波志江の土」も含まれる。富田漆田遺跡窯の生地上は谷地部に堆積したローム土が粘土化したもの。

夾雑物：結晶構造の β Qt・粗粒の β Qt(破片化したもの)・黒色鉱物粒子(角閃石・輝石)・白色軽石・赤褐色粒子など。

B 2類 北毛産土師器の胎土。焼成技法が異なるのか発色が灰色気味に燻む。 β Qtは丸みを帯びるのが多い。

B 3類 赤城山・榛名山中の暗色帯相当の粘土。単純酸化燻焼成では茶褐色～赤茶褐色の発色をする。俗称「赤ネバ」。赤城山南麓では、縄文土器での使用が多いが、土師器では少ない。

夾雑物：基本的にはB 1類同様だが、赤城山中ではスコリヤを含み、 β Qtは結晶構造が良く残る。

B 4類 B 1類の一部で、シルト粗粒(5～10mm)を含む。6世紀代の土師器裏に見られる素地土。

C類 水漥土もしくは水漥に近い生地上。焼成技法に変化が起き、窯体構造を備える空間内で焼成される。稀に火道の痕跡が残る。このため、焼き上がりの色調が均質。

C 1類 可塑性の少ない生地上。焼き締まった状態でも触ると胎土の一部が指に残る。産地不詳。

夾雑物：粒子状の物はほとんど認められない。微細な長石が含まれる。直射日光下で反射光を放つ。

C 2類 特徴はC 1類と同じである。C 1類との分別が困難な場合がある。一部の土師器坏には成・整形技法に特徴が有り、技法を中心とした作図を成さないとならない。

夾雑物：微細な長石・雲母を含む。吉井・藤岡産が多い。

C 3類 A類に近い同質の生地上。可塑性が有り夾雑物が少ない。

夾雑物：破片化した β Qtか火山ガラス・白色粒子・黒色鉱物粒子(角閃石・輝石)などを含む。

D類 吉井山土。地溝帯状の地形に堆積か。

D 1類 可塑性が強。生地上はモンモリロナイトを多く含む。素地土の仕込み方によっては「ハイ」に焼き上がる。分布は、藤岡市・甘栗町・富岡市域の丘陵中。

夾雑物：白色鉱物粒子(石英)・石英雲母片岩・雲母石英片岩など。

D 2類 D 1類の風化再堆積粘土。採取地により状態が異なると考えられる。

夾雑物：D 1類同様。

E類 藤岡畑土。可塑性は強くない。現代「藤岡瓦」の生地上。

夾雑物：D類と同じ。

遺物観察表

第17表 遺物観察表(1)

1号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第9図 PL.54	1	土師器 環	竈前+9 95%	口 底 13.8 高 4.4	C 3	黒/にぶい黄褐色/良好	口縁部横ナデ、腰部(横下)から底部は手持ちへラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第9図	2	土師器 環	覆土 20%	口 底 14.2 高	B 1	黒/にぶい黄褐色/良好	口縁部横ナデ、腰部(横下)から底部は手持ちへラ削り。	
第9図 PL.54	3	土師器 塊	竈左床直 70%	口 底 14.0 高 7.6 7.3	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り後部分的にへら磨き。内面は腰部にへら磨き。	
第9図 PL.54	4	土師器 小型鉢	竈右床直 98%	口 底 9.8 高 7.9 5.3	B 1	黒・粗・ガ・角閃/に ぶい黄褐色/良好	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。内面は底部から腰部がヘラナデ。	
第9図 PL.54	5	土師器 有孔鉢	竈前床直 98%	口 底 14.8 高 10.3 7.0	B 1	黒・粗・ガ/にぶい橙 /良好	外面腰部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、腰部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。内面は底部から腰部がヘラナデ。	
第9図 PL.54	6	土師器 小型鉢	竈前床直 95%	口 底 11.4 高 11.9 5.7	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良 好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はナデ、底部はヘラナデ。内面は底部から胴部がヘラナデ、部分的にハケ目が残る。	
第9図 PL.54	7	土師器 P 4上	P 4上 80%	口 底 8.0 高 31.0 20.3	B 2	黒・ガ/にぶい黄褐色/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへら削り後胴部はへら磨き。内面胴部は上半がへら磨き、下半はヘラナデ。	
第10図 PL.54	8	土師器 環	竈前付近+2~+8 40%	口 底 9.6 高	B 2?	黒・粗粒/にぶい赤褐色/ 良好	内面胴部に輪積み痕が残る。胴部はへら削り後部分的にへら磨き。内面はヘラナデ。	

2号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第10図 PL.54	1	土師器 環	南壁際+4 95%	口 底 11.2 高 3.9	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、腰部(横下)上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第10図	2	土師器 環	南壁際+6、覆土 40%	口 底 12.8 高	C 2	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、腰部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第10図	3	土師器 環	南西壁際+52 40%	口 底 14.8 高	C 2	黒/橙/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第10図	4	須恵系 高環	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焼	クロコ整形、回転方向不明。外面はカキ目。脚部に透孔が3方向。	
第10図	5	土師器 環	竈周辺床直~+23 5%	口 底 21.5 高	A	黒・粗粒/にぶい橙/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はヘラナデ。	
第11図	6	土師器 環	覆土、竈 5%	口 底 高	A	黒多/にぶい橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はヘラナデ。	
第11図	7	土師器 環	南壁際+12、覆土 5%	口 底 高	A	黒・粗/灰黄褐色/良好	外面は器面剥落のため不明。内面胴部はヘラナデ。	

3号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第13図	1	土師器 環	掘方竈前-15 50%	口 底 11.2 高 2.8	D 1	黒・粗/橙/良好	口縁部横ナデ、腰部(横下)から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	2	土師器 環	P 1内 45%	口 底 11.2 高 3.1	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、腰部(横下)から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	3	土師器 環	中央掘方-11、覆土 45%	口 底 12.5 高	B 2	黒・粗・雲母/にぶい 黄褐色/良好	口縁部横ナデ、腰部(横下)から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	4	土師器 環	P 1内 45%	口 底 13.0 高 4.8	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、腰部(横下)から底部は手持ちへラ削り。	
第13図 PL.54	5	土師器 環	覆土 70%	口 底 10.9 高 3.5	C 2	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	6	土師器 環	P 1西+5 45%	口 底 11.0 高 3.3	B 1	黒・粗粒/にぶい赤褐色/ 良好	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図 PL.54	7	土師器 環	竈内+1 98%	口 底 11.0 高 3.4	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	8	土師器 環	覆土、掘方 50%	口 底 11.8 高	C 2	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、口縁部下にわずかにナデが残る、腰部から底部は手持ちへラ削り。	内面に僅か但点状に付着。 有機質か。
第13図 PL.54	9	土師器 環	竈内+3 100%	口 底 12.8 高 4.0	D 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	内面全面に付着 物、有機質か。
第13図 PL.54	10	土師器 環	南壁際中央-2 80%	口 底 13.4 高 4.1	C 1	黒・粗/にぶい橙/良 好	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	11	土師器 環	南壁際中央+2~ +4 35%	口 底 13.6 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	12	土師器 環	中央掘方-18 25%	口 底 13.6 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、口縁部下にわずかにナデが残る、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	13	土師器 環	P 1西+5、覆土、 掘方 50%	口 底 15.0 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、腰部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	14	土師器 環	P 1西床直、掘方 30%	口 底 15.6 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図	15	土師器 環	覆土 20%	口 底 16.0 高	C 1	黒・粗/橙/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。	
第13図 PL.55	16	土師器 鉢	中央床直 75%	口 底 16.6 高 9.0	A	黒・白粒・雲母/灰褐色/ 良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、腰部から底部は手持ちへラ削り。内面は口唇部横ナデの他はへら磨き。	

第18表 遺物観察表(2)

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第13図	17	土師器 高杯	覆土 20%	口底 高	B 1	黒・粗・白粒/明赤褐/良好	坏身と脚部は貼付。坏身口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ、脚部はヘラ削り。内面は脚部がナデ。	
第13図	18	須恵器 盤	覆土 3%	口底 27.6 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。	
第13図	19	須恵器 高杯	覆土 3%	口底 高	太田?	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。身部と脚部は貼付。身底部はカキ目、脚部に3カ所の透孔。	
第13図	20	須恵器 盤	覆土 3%	口底 高	太田?	黒・白粒/灰/還元焰	脚部は外面に平行引き直、内面位同心円状アテ具痕が残る。	外面脚部と内面口縁部に降灰が付着。
第13図	21	土師器 甕	住居中央掘方-34、 甕掘方 5%	口底 20.8 高	A	黒多/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面脚部はヘラナデ。	
第13図	22	土師器 甕	北隅掘方 3%	口底 高	B 1	黒多/にぶい黄橙/良好	外面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面脚部はヘラナデ。	
第13図	23	土師器 甕	中央掘方-38、 -44、掘方 5%	口底 22.6 高	A	黒多/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面脚部はヘラナデ。	
第14図	24	土師器 甕	電左+4、掘方中央 -6 ~ 47 15%	口底 高	B 1	黒・粗粒/赤褐/良好	脚部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第14図	25	土師器 甕	掘方中央 3%	口底 6.8 高	B 1	黒・粗・ガ/にぶい赤褐/良好	底部と脚部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第14図 PL.55	26	土師器 甕	南段原中央+2 ~ +17 20%	口底 7.8 高	A	黒多・白粒/にぶい赤褐/良好	底部と体部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第14図	27	土師器 高杯	東段原北床直 30%	口底 高	B 1	黒/浅黄橙/良好	外面は赤色塗彩。坏身はホゾ状の差し込みを持つ。脚部は縦位のヘラ磨き、裾部付近はハケ目が残る。内面はナデ。	
第14図 PL.55	28	鉄器 刀子	覆土 10%	長 6.9 厚 1.3 幅 4.5 重 8.4			刃部の大半、柄部の2/3を欠損、わずかな極区が確認される。鞘金具とわずかな木部が残る。	

4号住居

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第15図	1	土師器 杯	覆土 5%	口底 12.0 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第15図	2	土師器 杯	覆土 5%	口底 12.0 高	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(腋下)は手持ちヘラ削り。	
第15図	3	土師器 杯	覆土 5%	口底 11.7 高	B 1	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第15図	4	土師器 杯	覆土 5%	口底 12.0 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)は手持ちヘラ削り。	有段口縁部
第15図	5	須恵器 坏身	覆土 3%	口 11.3 蓋受径 13.0	太田	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。	
第15図 PL.55	6	土師器 甕	甕内袖先端床直 75%	口底 20.4 高 26.7 9.4	C 3	黒・粗・褐粒/橙/良好	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面は口縁部が横位、脚部は縦位のヘラ磨き。	内面脚部下位に面割れ力所あり、使用時か。
第15図	7	土師器 甕	甕内 3%	口底 18.6 高	B 1	黒・粗・砂岩/にぶい橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面脚部はヘラナデ。	
第15図	8	土師器 甕	北西隅付近+20、 覆土 3%	口底 19.6 高	B 1	黒・粗/淡黄/良好	口縁部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面脚部はヘラナデ。	
第15図	9	土師器 甕	甕内 10%	口底 高	B 1	黒・粗・砂岩/灰黄褐/良好	脚部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	

5号住居

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第16図	1	土師器 杯	掘方 3%	口底 11.9 高	C 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)は手持ちヘラ削り。	
第16図	2	土師器 杯	覆土 20%	口底 高	B 1	黒/明黄褐/良好	底部は手持ちヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第16図	3	土師器 高杯	覆土 脚部1%	口底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	内面は赤色塗彩。脚部はナデ。身内面はヘラナデ。	

6号住居

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第17図	1	土師器 杯	覆土 3%	口底 13.6 高	B 1	黒/黄灰/良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部はヘラ削り。内面は横位のヘラ磨き。	
第17図	2	土師器 杯	西側中央+5 30%	口底 10.2 高 3.5	C 3	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第17図	3	土師器 杯	覆土 20%	口底 11.7 高	C 3	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第17図 PL.55	4	土師器 杯	中央南側床直 95%	口底 12.6 高	B 1	黒・角閃/にぶい黄橙/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第18図	5	土師器 杯	覆土 30%	口底 12.7 高	C 1	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第18図 PL.55	6	土師器 杯	北西部+4 95%	口底 12.9 高 4.9	C 1	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちヘラ削り。	

遺物観察表

第19表 遺物観察表(3)

種別番号 写真図版	NO.	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分期	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第18図 PL.55	7	土師器 環	北壁際中央+8 95%	口 底 14.0 高 4.9	B 1	黒・ガ/白粒/にぶい 黄橙/良好・焼	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第18図 PL.55	8	土師器 環	西壁際中央+9 50%	口 底 13.7 高 4.6	B 1	黒・褐粒/橙/良好	内面黒色処理、口縁部横ナデ、体部(横下) から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部 から体部と口縁部の一部に放射状ヘラ磨 き(暗文状)。	二次被熱を受け ている。
第18図 PL.55	9	土師器 環	中央付近+4、+6 70%	口 底 14.0 高 4.7	C 3	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第18図	10	土師器 環	覆上 25%	口 底 14.0 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第18図	11	土師器 環	北側中央+9 20%	口 底 12.8 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第18図	12	土師器 鉢	北東隅+9、壺内 30%	口 底 20.5 高	C 3	黒・褐粒/にぶい橙/ 良好	口縁部横ナデ、体部は器面磨滅のため不 明。	内面に煤が付 着。
第18図	13	土師器 高環	覆上 20%	口 底 12.4 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	外面は赤色塗彩。脚部は履位のヘラ磨き、 胎部は横ナデ。内面胎部はナデ。	
第18図	14	須恵器 須恵器	中央+29 20%	口 底 高	太田	黒・粗・長石・角閃/ 灰・還元焼	ロクロ整形、回転石回り。底部は回転ヘ ラ削り。	
第18図	15	土師器 環	西側中央床直 20%	口 底 16.4 高	B 2	黒・粗・雲母・角閃/ 浅黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
第18図 PL.55	16	土師器 環	北西部+10、覆上 20%	口 底 17.0 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	外面口縁部に輪積み痕が見られる。口縁部 から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面胴部はヘラナデ。	
第18図 PL.55	17	土師器 環	西壁際中央+8、東 側+29 覆上 35%	口 底 20.6 高	B 2	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
第18図 PL.55	18	土師器 環	中央～西側床直～ +4 20%	口 底 23.7 高	A	黒・白粒/にぶい黄橙/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り後履位のヘラ磨き。内面胴部はヘラナ デ。	
第19図 PL.56	19	土師器 環	壺左袖+18 50%	口 底 19.5 高 30.2	B 1	黒・褐粒/浅黄橙/良 好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	外面胴部に煤が 付着。
第19図 PL.56	20	土師器 環	南壁際、中央付近 床直～+31 50%	口 底 18.9 高 8.8	B 1	黒・褐粒/灰黄褐/良 好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は ヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナ デ。	
第19図 PL.56	21	石製品 砥石	覆上	長 6.5 重 27.6 幅 3.3			裏面側を除く、各面を使用。上下両端の 破損部は著しく磨滅しており、破損後も 継続使用。	珪質粘板岩。

7号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分期	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第20図	1	土師器 環	覆上 35%	口 底 12.7 高	B 2	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため不明。	
第20図	2	土師器 環	覆上 20%	口 底 12.7 高	C 3	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、底部(横下)は手持ちヘ ラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第20図	3	土師器 環	南壁際中央-1 40%	口 底 11.6 高	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/ 良好	口縁部横ナデ、体部(横下)は上位がナ デ、中位から底部は手持ちヘラ磨き。内 面は底部から体部に放射状ヘラ磨き(暗 文状)。	
第20図 PL.56	4	土師器 環	壺右側+7 25%	口 底 12.7 高	B 2	黒/にぶい橙/良好	内面黒色処理、口縁部横ナデ、体部(横下) から底部は手持ちヘラ削り。内面は全面 にヘラ磨き。	外面底部から体 部に煤が付着。
第20図	5	土師器 環	南壁際中央床直 25%	口 底 13.6 高	B 2	黒/にぶい黄橙/良好	内面黒色処理、口縁部横ナデ、体部(横下) から底部は手持ちヘラ削り。内面は全面 にヘラ磨き。	
第20図	6	土師器 環	南壁際中央+2、覆 上 95%	口 底 14.5 高 5.1	B 1	黒・粗・ガ/角閃/橙 /良好	内面黒色処理、口縁部横ナデ、体部(横下) から底部は手持ちヘラ削り。内面は全面 に履位のヘラ磨き。	
第20図	7	土師器 小型環	覆上 30%	口 底 7.0 高	B 1	黒多・ガ/片岩/赤褐 /良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。 内面はヘラナデ。	
第20図 PL.56	8	土師器 環	西壁際+2～+31 40%	口 底 18.5 高	B 4	黒多・片岩/にぶい黄 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
第20図 PL.56	9	土師器 環	P 1内、南半部床 直～+28 15%	口 底 19.0 高	B 1	黒多・片岩/にぶい赤 褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ヘ ラ磨き。内面胴部はヘラナデ後ヘラ磨 き。	
第20図	10	土師器 環	西壁際+12、+31、 覆上 10%	口 底 6.4 高	B 1	黒・粗・ガ/灰黄褐/ 良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナ デ。	

8号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分期	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第22図 PL.56	1	土師器 環	中央+26 75%	口 底 12.0 高 4.7	C 1	黒・粗/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第22図	2	土師器 環	P 1内、覆上 30%	口 底 12.0 高	C 1	黒・粗/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第22図	3	土師器 環	覆上 20%	口 底 12.0 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第22図 PL.56	4	土師器 環	中央+26 75%	口 底 12.1 高 4.3	C 3	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第22図	5	土師器 環	覆上 50%	口 底 12.2 高	C 3	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	

第20表 遺物観察表(4)

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第22図 PL.56	6	土師器 環	覆土 30%	口 底 15.4 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第22図 PL.57	7	土師器 高環	覆土 40%	口 底 17.3 高	C 3	黒/黄緑/橙/良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ。底部から 脚部はへラ削り。内面脚部はナデ。	
第22図	8	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄緑/良好	坯身はホゾ上の芯し込みで取付。脚部外 面はハグ目後ナデ。内面はナデ。	
第22図 PL.57	9	土師器 鉢	覆土側+14 100%	口 底 13.2 高 11.5	B 2	黒/粗・ガ/角閃・白 粒/にぶい黄緑/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ち へラ削り。内面は底部から体部にへラナ デ。	
第22図 PL.57	10	土師器 有孔鉢	覆土側+16 100%	口 底 18.0 高 11.0 7.0	B 1	黒/粗・角閃・ガ/に ぶい黄緑/良好	口縁部は横ナデ。体部と底部は手持ち へラ削り。内面底部から体部はへラナ デ。	底部孔径2.3cm。
第22図 PL.57	11	土師器 小型鉢	中央+19 50%	口 底 14.8 高	B 1	黒/粗・長石/にぶい 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削 り。内面胴部はへラナデ。	
第22図 PL.57	12	土師器 襷	覆土前床直、壺内、 覆土 80%	口 底 20.0 高 36.7 3.6	B 1	黒/褐粒/灰黄褐/良 好	口縁部は横ナデ。胴部と底部はへラ削り。 内面は底部から胴部がへラナデ。胴部上 半は前面磨減のため単位不明。	
第23図 PL.57	13	土師器 襷	覆土前付近床直+ 13、覆土 10%	口 底 20.8 高	A	黒/粗・ガ/にぶい橙 /良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削 り。内面胴部はへラナデ。	15と同一か。
第23図	14	土師器 襷	覆土 10%	口 底 19.4 高	B 1	黒/粗・角閃/にぶい 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削 り。内面胴部はへラナデ。	
第23図 PL.57	15	土師器 襷	覆土+2、壺内、覆 土 25%	口 底 高 4.0	A	黒/粗・ガ/明赤褐/ 良好	底部と胴部はへラ削り。内面はへラナ デ。	13と同一か。
第23図 PL.57	16	土師器 襷	壺内 40%	口 底 10.0 高	B 1	黒/角閃・砂岩/にぶ い黄緑/良好	底部と胴部はへラ削り。内面はへラナ デ。	
第23図	17	土師器 襷	P 1 肩部-5 ~ -9 5%	口 底 8.6 高	B 1	黒/粗・砂岩・ガ/灰 黄褐/良好	底部と胴部はへラ削り。内面はへラナ デ。	
9号住居								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第24図	1	土師器 環	覆土 40%	口 底 9.8 高 2.8	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第24図	2	土師器 環	覆土 25%	口 底 9.8 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第24図	3	土師器 環	壺内+3、覆土 45%	口 底 9.8 高 2.6	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)はナデ。底 部は手持ちへラ削り。	
第24図 PL.58	4	土師器 環	覆土 80%	口 底 11.4 高 3.8	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第24図	5	土師器 環	内側-2 35%	口 底 11.8 高 3.2	C 1	黒/褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第24図 PL.58	6	土師器 環	南壁際中央+22、 覆土 80%	口 底 11.8 高 4.1	C 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第24図	7	土師器 環	南壁際中央+2、 覆土 50%	口 底 12.3 高	D 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第24図	8	土師器 環	覆土 20%	口 底 14.8 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持 ちへラ削り。	
第24図	9	土師器 鉢	覆土 10%	口 底 18.4 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持 ちへラ削り。	
第24図	10	土師器 短頸 甕	覆土 30%	口 底 9.0 高	C 1	黒/粗/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第24図 PL.58	11	土師器 襷	壺内+2 ~ +3、覆 土 95%	口 底 21.6 高 39.8 4.5	B 1	黒/褐粒/にぶい黄緑 /良好	口縁部は横ナデ。胴部と底部はへラ削り。 内面胴部はへラナデ。	
第25図 PL.58	12	土師器 襷	壺内+2、+3 90%	口 底 21.4 高 10.8 4.8	B 1	黒/ガ/にぶい黄緑/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部と底部は へラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第25図	13	須恵器 襷	覆土 1%	口 底 高	太田	黒/灰/還元焰	ロウク整形。回転方向不明。胴部は縦位 のキ目か。	
第25図	14	須恵器 襷	覆土 1%	口 底 高	B 1 ?	黒/灰/還元焰	外面は平行引き直がすかに。内面は同 心円状アテ具直が残る。	
第25図	15	須恵器 襷	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/白粒/灰/還元焰	外面は平行引き直後側面をあげたキ目、 内面は同心円状アテ具直が残る。	
第25図	16	須恵器 円筒	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/明赤褐/良好	外面は縦位のハゲ目(10m 6本)、内面はナ デ。	
第25図	17	須恵器 円筒	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/橙/良好	外面は縦位のハゲ目(10m 6本)、内面はナ デ。	
第25図 PL.58	18	石製品 紡錘車	覆土	径 4.0 重 25.4			上面の孔周辺部は強く磨らる。下面は大 きく窪む。孔は片側穿孔による。上面部 は穿孔後、回転整形され、やや凹む。孔 内面に輪轉挿入時の縦位線痕。	滑石
第25図 PL.58	19	石製品 砥石か	覆土	長 15.0 重 578.6 幅 4.8			襷底石か。背面側平坦面が磨耗、光沢を 帯びる。角柱状磨。	粗粒輝石安山岩
10号住居								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第26図 PL.58	1	土師器 環	南壁際中央+2 98%	口 底 11.2 高 4.2	C 1	黒/褐粒/橙/やや軟 質	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第26図	2	土師器 環	覆土 20%	口 底 11.8 高	B 1	黒/明黄褐/良好	口縁部横ナデ。底部(横下)は手持ち へラ削り。内面口縁部に1本の凹線が通 る。	

遺物観察表

第21表 遺物観察表(5)

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第26図	3	土師器 環	覆土 15%	口底 13.0 高	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削りか、器面磨滅のため不明。	
第26図	4	土師器 環	覆土 25%	口底 13.4 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)はナデ底部は手持ちへラ削り。	
第26図 PL.58	5	土師器 環	竈左側+4、覆土 55%	口底 14.3 高 4.5	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)はナデ底部は手持ちへラ削り。	
第26図	6	須恵器 高環	中央+3 15%	口底 高	B 1	黒/灰白/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。脚部に通孔が3カ所。	
第26図	7	須恵器 短頸壺	覆土 35%	胴径 12.4	C 3	黒/白粒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。底部から胴部下半は回転へラ削り。	
第26図 PL.58	8	土師器 小型壺	竈内+12 98%	口底 16.4 高 20.4 5.2	B 1	黒・方・褐粒/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第27図 PL.59	9	土師器 壺	竈左袖 98%	口底 17.8 高 34.7 6.3	B 1	黒・粗・方・角四/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第27図	10	土師器 壺	南東部+7、+11 15%	口底 17.5 高	B 4	黒・粗・方/にぶい黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第27図 PL.59	11	土師器 壺	竈右袖、竈内 90%	口底 20.0 高 34.8 4.1	A	黒・粗・角四/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	外面胴部の一部に粘土付着。
第27図 PL.59	12	土師器 壺	竈内-3、南東部+11、覆土 98%	口底 20.5 高 39.0 4.1	B 4	黒・粗・方・砂粒/明赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第28図 PL.59	13	土師器 壺	中央+3、北東部+3、覆土 75%	口底 20.5 高 39.1 4.0	A	黒・粗・方/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第28図	14	須恵器 壺	覆土 3%	口底 22.6 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。	
第28図	15	須恵器 壺	覆土 1%	口底 高	B 1	黒・粗・角四/灰/還元焰	外面は平行叩き面、内面に同心円状アテ具痕が残る。	
11号住居								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第29図	1	土師器 環	覆土 20%	口底 10.6 高	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図 PL.60	2	土師器 環	覆土 90%	口底 11.7 高 4.7	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図	3	土師器 環	覆土 30%	口底 11.7 高 4.2	B 1	黒/褐灰/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図	4	土師器 環	覆土 20%	口底 11.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図 PL.60	5	土師器 環	中央+9 98%	口底 11.9 高 4.5	B 1	黒・粗・雲母・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図	6	土師器 環	覆土 60%	口底 12.5 高 4.2	B 1	黒・粗・方/灰黄褐/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。内面底部はへラナデ。	
第29図	7	土師器 環	覆土 45%	口底 12.6 高 4.1	B 1	黒・粗/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図	8	土師器 環	覆土 40%	口底 12.6 高 4.1	B 1	黒/褐灰/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。内面底部はへラナデ。	有段口縁部環
第29図	9	土師器 環	覆土 45%	口底 12.9 高 4.7	C 1	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図 PL.60	10	土師器 環	中央+23、覆土 85%	口底 13.0 高 4.8	C 1	黒・粗/橙/良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図 PL.60	11	土師器 環	覆土 70%	口底 13.1 高 4.1	B 1	黒/にぶい橙/良好・外燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図 PL.60	12	土師器 環	覆土 85%	口底 13.4 高 4.5	B 1	黒・方/にぶい黄橙/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。内面底部から体部はへラナデ。	
第29図	13	土師器 環	竈右袖、覆土 45%	口底 13.7 高 4.6	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図	14	土師器 環	覆土 25%	口底 14.0 高 5.1	B 1	黒/白粒/にぶい黄橙/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図 PL.60	15	土師器 環	覆土 80%	口底 14.1 高 4.5	B 1	黒・方/にぶい黄橙/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第29図	16	土師器 短頸壺	北東部+2、覆土 50%	口底 11.8 高 8.9	C 2	黒/橙/やや軟質	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部は手持ちへラ削り。	
第30図 PL.60	17	土師器 用	覆土 30%	口底 8.6 高	C 3	黒/橙/良好	内面に口縁部と胴部は接合痕、口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第30図	18	土師器 壺	覆土 10%	口底 16.4 高	B 4	黒・粗/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、頸部下にナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第30図	19	土師器 壺	覆土 3%	口底 5.6 高	B 4	黒・粗・角四/にぶい黄橙/良好	底部、胴部ともへラ削り。内面はへラナデ。	
第30図	20	土師器 壺	覆土 5%	口底 9.6 高	B 1	黒・粗・角四/橙/良好	底部、胴部ともへラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はへラナデ。	
第30図	21	須恵器 壺	覆土 3%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。口縁部には円筒区画、区画に波状文が施る。	
第30図	22	須恵器 壺	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焰	外面は平行叩き面、内面に同心円状アテ具痕が残る。	

第22表 遺物観察表(6)

挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第30図	23	須恵器 甕	覆土 1%	口 底	高 3.7	黄緑 太田	粗/暗灰/還元焼	外面は平行叩き面、内面は同心円状7字 痕が残る。	
第30図	24	須恵器 長頸甕	覆土 3%	口 底	高 1	B 1	粗/粗/灰/還元焼	ロクロ整形。胴部の肩に円筒区画、区画 内に波状文が巡る、下半は回転へうり。	
12号住居									
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第31図	1	土師器 環	覆土 40%	口 底	11.8 高 3.7	C 1	粗/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(枝下)から底部は 手持ちへうり。	
第31図	2	土師器 環	西原際中央+5、+6 30%	口 底	12.6 高 3.5	C 1	粗/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(枝下)から底部は 手持ちへうり。	
第31図	3	土師器 環	覆土 10%	口 底	12.4 高	C 1	粗/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(枝下)から底部は 手持ちへうり。	
第31図	4	土師器 碗	覆土 10%	口 底	12.8 高	C 1	粗/粗粒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ち へうり。内面体部はへうりナデ。	
第31図	5	土師器 御付鉢	中央+11 20%	口 底	高	B 1	粗・粗/角閃/にぶい 橙/良好	環身底部から脚部は縦位のへうり。	
第31図	6	土師器 高杯	壱石袖+9 30%	口 底	高	B 1	粗・粗/角閃/にぶい 黄橙/良好	脚部は縦位のへうり後下半に横位のへ うりナデ。内面は横位のへうり。	
第31図	7	土師器 高杯	南東部+9 5%	口 底	18.2 高	C 3	粗/橙/良好	脚部はへうり割、裾部上半がへうりナデ、 下半は横ナデ。	
第31図	8	須恵器 高杯	覆土 5%	口 底	12.8 高	搬入	粗/暗灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。体部に2条 の凹線が巡る。	
第31図	9	須恵器 高杯	覆土 3%	口 底	10.8 高	搬入	粗/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。	
第31図	10	土師器 小笠	覆土 10%	口 底	10.8 高	C 1	粗/橙/やや軟質	外面頸部に輪轆み痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ、胴部はへうり割。内面胴 部はへうりナデ。	
第31図	11	土師器 皿	南西部+3 20%	口 底	18.1 高	B 1	粗・粗/粗粒/浅黄橙 /良好	外面頸部に輪轆み痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ、胴部はへうり割。内面胴 部はへうりナデ。	
第32図 PL.60	12	土師器 甕	南半部床直+3 70%	口 底	19.8 高	B 1	粗・粗/角閃・粗粒/ にぶい橙/良好	外面頸部に輪轆み痕が残る。口縁部は横 ナデ、胴部はへうり割。内面胴部はへう りナデ。	外面胴部に粘土付着。
第32図	13	土師器 甕	覆土 10%	口 底	20.0 高	A	粗・粗/角閃/にぶい 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへうり 割。内面胴部はへうりナデ。	外面胴部の一部 に粘土付着。
第32図	14	土師器 甕	南半部床直+6 20%	口 底	6.6 高	B 1	粗/にぶい黄橙/良好	外面頸部に輪轆み痕が残る。口縁部は横 ナデ、底部と胴部はへうり割。内面はへ うりナデ。	外面に粘土付着。
第32図	15	須恵器 甕	掘方 1%	口 底	高	乗附	粗/暗灰/還元焼	ロクロ整形。口縁部は凸帯による区画と 区画内に波状文が巡る。	
第32図 PL.60	16	石製品 内磨	南東部+27	径 重	2.8×3.1 6.3			輪轆を研磨・面取り整形して概形を整 える。表面とも平坦に研磨。	蛇紋岩
第32図 PL.60	17	石製品 白玉	南東部埋蔵+11	径 重	2.0 1.2			上下両面は折衝後、面を整える程度に研 磨。断面は縦位の粗い整形痕。	滑石

13号住居

挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第33図	1	土師器 高杯	北西部+7、覆土 60%	口 底	18.0 高	B 1	粗/にぶい黄橙/良好	外面は全面、内面は環身を赤色塗彩。環 身口縁部は横ナデ、底部はへうり磨き、接 合部はハケ目。脚部は縦位のへうり磨き、 裾部は横ナデ。内面は環身が口縁部下半 に斜放射状へうり磨き、脚部はナデ、裾部 はハケ目(1)。
第33図	2	土師器 高杯	北東部+9 10%	口 底	19.2 高	B 1	粗・粗/にぶい黄橙/ 良好	口縁部横ナデ、体部はへうりナデ後へうり 磨き。内面は全面斜めのへうり磨き。
第33図	3	土師器 高杯	北東部+16、覆土 20%	口 底	21.8 高 13.2 底	B 1	粗・雲母/橙/良好	口縁部横ナデ、体部から底部はハケ目(7)、 屈曲部にへうり磨き。内面体部は斜めのへ うり磨き。
第33図	4	土師器 高杯	中央+6 45%	口 底	10.6 高	B 1	粗/にぶい黄橙/良好	脚部内部を除き赤色塗彩。環身は横ナデ、 脚部は縦位のへうり磨き。内面は環身脚部 ともハケ目。
第33図 PL.60	5	土師器 高杯	中央+5、覆土 40%	口 底	14.8 高	B 1	粗・雲母/にぶい赤橙/ 良好	脚部は縦位のへうり磨き。裾部は横ナデ。 内面は脚部がへうりナデ。
第33図 PL.60	6	土師器 高杯	南部+14、覆土 30%	口 底	16.4 高	B 1	粗・雲母/にぶい黄橙 /良好	環身と脚部は貼付。環身底部はへうりナデ、 接合部はハケ目。脚部は縦位のへうり磨き、 裾部はハケ目(12)。内面は横位のへうり ナデ、裾部はハケ目。
第33図	7	土師器 高杯	西原際中央+31 25%	口 底	高	B 1	粗砂粒/にぶい橙/良 好	脚部はハケ目後ナデ、裾部はハケ目。内 面は脚部がハケ目、裾部は横ナデ。
第33図	8	土師器 高杯	P 4南+7 25%	口 底	高	B 1	粗砂粒/にぶい橙/良 好	脚部は縦位のへうり磨き。環身と脚部付近 はハケ目。内面は横位のハケ目(8)。
第33図	9	土師器 高杯	覆土 10%	口 底	高	B 1	粗/暗灰/良好	脚部はハケ目後ナデ、裾部はハケ目。内 面は脚部がナデ、裾部は横ナデ。
第33図	10	土師器 高杯	東部+3 20%	口 底	高	B 1	粗砂粒/にぶい橙/良 好	脚部はナデ、環身付近はハケ目。内面脚 部は縦位のハケ目(12)。

遺物観察表

第23表 遺物観察表(7)

調査番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第33図	11	土師器 高杯	P 2南-2 10%	口 底	高	B 1	黒/褐灰/良好	外面は赤色塗彩。外面は縦位のへら磨き、 内面はハケ目。	
第33図	12	土師器 高杯	覆上 10%	口 底	高	B 1	黒・白粒/灰褐/良好	杯身はホゾ状突起で頸部と接合。外面は 赤色塗彩。外面は縦位のへら磨き、内面 はハケ目。	
第34図 PL.60	13	土師器 有孔鉢	東部+14、覆土 60%	口 底	16.4 高 10.1 4.0	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ。下半に指頭痕が残る。胴 部はハケ目(9)。下位はへらナデ。内面は ハケ目、底部付近はナデ。	
第34図	14	土師器 短頸壺	覆上 50%	口 底	9.8 高	B 1	黒多/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ。胴部はナデ。底部はへら 削り。内面は頸部付近に指頭痕が残る。 胴部がへらナデ。	
第34図 PL.60	15	土師器 甗	北部中央+7 98%	口 底	9.4 高 11.1	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	胴部は横ナデ。口縁部はへら削り後放 射状へら磨き。胴部から底部までへら削り。 内面は口縁部下から底部までへらナデ。	
第34図 PL.60	16	土師器 甗	P 2東+9、+14、 覆土 80%	口 底	11.8 高 13.3	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/ 良好	口唇部横ナデ。口縁部から胴部上位はナ デ。頸部にへらナデが残る。胴部から底 部はへら削り。内面は口縁部が横ナデ、 胴部上位はナデ。中位から底部はへらナ デか。	
第34図	17	土師器 甗	覆上 20%	口 底	11.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部は上半が横ナデ。下半はハケ目 (12)。内面も同様。	
第34図	18	土師器 甗	覆上 10%	口 底	13.0 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部は上・中位は横ナデ。下位はハケ 目(13)。内面は口唇部横ナデ。口縁部は へらナデ。	
第34図	19	土師器 甗	北西隅+13、覆土 30%	口 底	7.0 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	底部はへら削り。胴部はへら削り後へら 磨き。内面はハケ目後ナデ。	
第34図	20	土師器 甗	北東部+26、覆土 5%	口 底	15.4 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部折り 返し。口縁部から頸部は横ナデ。胴部は ハケ目外。内面胴部はへらナデ。	
第34図 PL.61	21	土師器 甗	南東部+11、覆土 80%	口 底	18.8 高 30.0 8.0	B 1	黒/赤褐/良好	内外面に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、 胴部はへら削り後へら磨き。底部はへら 削り。内面は底部から胴部・頸部がへら ナデ。	
第34図 PL.61	22	土師器 甗	南東部+5、+6、 覆土 60%	口 底	17.0 高	B 1	黒・片岩/にぶい黄橙/ 良好	口縁部横ナデ。頸部から胴部はハケ目(6)。 内面は口縁部上位が横ナデ。中位から胴 部はハケ目後へらナデ。	
第34図	23	土師器 甗	北西部+3、+13、 覆土 10%	口 底	18.4 高	B 1	黒・粗/にぶい橙/良 好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削 り。内面胴部はへらナデ。	
第34図	24	土師器 甗	中央南+10、覆土 10%	口 底	7.2 高	B 1	黒・粗/にぶい黄橙/ 良好	底部はへら削り。胴部は下位にハケ目 が残るが大半はへら磨き。内面はへらナ デ。	
第35図	25	土師器 甗	北西部+3、+13 20%	口 底	8.6 高	B 1	黒・粗/にぶい黄橙/ 良好	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
第35図	26	土師器 甗	覆上 10%	口 底	7.4 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	底部はへら削り。胴部はへら削り後雑な へら磨き。内面はへらナデ。	
第35図 PL.61	27	石製品 砥石	小礫片	長 幅	2.5 重 4.3 2.6			砥石端部の破片。	変質デザイン

14号住居

調査番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第39図 PL.61	1	土師器 環	南東部+39 95%	口 底	11.5 高 4.5	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/ 良好・煙	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図 PL.61	2	土師器 環	北西部+12 70%	口 底	12.0 高 4.6	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削りか、器面磨滅のため不詳 明。
第39図	3	土師器 環	覆上 65%	口 底	12.1 高 5.0	C 3	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図	4	土師器 環	中央+11、覆土 35%	口 底	12.3 高	C 1	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図	5	土師器 環	覆上 20%	口 底	12.6 高	B 1	黒多/にぶい黄橙/良 好	内面黒色処理。口縁部横ナデ。体部(椀下) から底部は手持ちへら削り。内面はへら 磨き。
第39図	6	土師器 環	南部中央床直 25%	口 底	12.5 高	B 1	黒・白粒/褐灰/良好・ 煙	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図	7	土師器 環	覆上 30%	口 底	12.8 高	B 1	黒・粗・ガ/灰褐/良 好・煙	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図	8	土師器 環	北西部床直、覆土 50%	口 底	12.8 高 3.9	C 3	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図 PL.61	9	土師器 環	覆上 70%	口 底	12.8 高 4.7	C 3	黒/明黄橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図 PL.61	10	土師器 環	西部中央+9、+20 98%	口 底	12.9 高 4.0	C 3	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第39図	11	土師器 環	覆上 25%	口 底	13.2 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ。体部(椀下) から底部は手持ちへら削り。
第39図	12	土師器 環	西部中央+14 15%	口 底	13.2 高	B 1	黒・白粒/褐灰/良好・ 煙	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへら削りか、器面磨滅のため不明。

第24表 遺物観察表(8)

探検番号 写真版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第39回 PL.61	13	土師器 環	中央+10 25%	口底 13.7 高 3.9	C 1	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへラ削り。	
第39回 PL.61	14	土師器 環	覆上 80%	口底 13.1 高 4.6	B 1	黒・小礫/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへラ削り。	
第39回	15	土師器 環	中央+9 30%	口底 13.8 高 3.7	B 1	黒・粗・ガ/黒/良好	内外面とも黒色処理。口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへラ削り。内面は放射状へラ磨き(暗文状)。	
第39回	16	土師器 環	覆上 30%	口底 13.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好・焼	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第39回 PL.61	17	土師器 環	覆上 75%	口底 10.2 高 3.9	B 1	黒/粗/良好	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第39回 PL.61	18	土師器 環	覆上 60%	口底 11.3 高 3.9	B 1	黒・粗/橙/良好	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第39回	19	土師器 環	覆上 40%	口底 12.8 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第39回	20	土師器 環	覆上 25%	口底 17.8 高	C 1	黒/橙/良好	口唇部は横ナデ、口縁部、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第39回	21	土師器 高杯	覆上 25%	口底 15.9 高	B 1	黒・粗・褐粒/にぶい赤褐/良好	脚部はへラ削り、腹部は横ナデ、内面は上半ナデ、下半はへラナデ。	
第39回 PL.61	22	土師器 高杯	北東部+10、覆上 30%	口底 高	B 1	黒・粗・褐粒/橙/良好	脚部はへラ削り、腹部は横ナデ、内面は上半ナデ、下半はへラ削り。	
第39回	23	土師器 高杯	覆上 25%	口底 高	B 1	黒/浅黄橙/良好	脚部器面磨滅のため整形不明。内面は上半ナデ、下半はへラナデ。	
第39回	24	土師器 高杯	覆上 25%	口底 11.2 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	脚部上半はへラ削りか、下半から腹部は横ナデ。内面脚部はへラナデ。	
第39回	25	土師器 高杯	覆上 10%	口底 11.3 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	内面に輪軸みねが残る。脚部はへラ削り、器面磨滅のため単位不明、腹部は横ナデ。内面は脚部がへラナデ。	
第40回	26	土師器 鉢	北東部+6、覆上 40%	口底 11.2 高 7.9	B 1	黒・褐粒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ体部上半はナデ、下半はへラナデ、底部はへラ削り。内面は底部から体部がへラナデ。	
第40回 PL.61	27	土師器 鉢	覆上 60%	口底 19.3 高 10.7	B 1	黒・褐粒/黄灰/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。内面は体部から底部がへラナデ。	
第40回	28	須恵器 环蓋	覆上 30%	口底 9.8 高 3.8	B 1	黒・白粒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部中央は回転へラ削り。	
第40回	29	須恵器 环蓋	覆上 25%	口底 11.4 高 3.4	推定?	微・灰白/還元焰	ロクロ整形、回転左回り。天井部中央は回転へラ削り。	
第40回 PL.61	30	須恵器 高杯	北西部床直 70%	口底 16.0 高	B 1	黒・粗・白粒/灰/還元焰	环身と脚部は接合。ロクロ整形、回転左回り。环身底部は回転へラ削り。脚部に透孔が3カ所。	
第40回 PL.61	31	須恵器 高杯	北部中央床直 50%	口底 13.0 高 10.8	B 1	黒・粗/暗赤褐/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。脚部は貼付、底部はカキ目。	
第40回	32	須恵器 高杯	覆上 10%	口底 13.0 高	不詳	黒/灰褐/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。脚部に透孔が3カ所。	
第40回 PL.61	33	須恵器 高杯	北壁敷床直、中央 +9 50%	口底 13.3 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転左回り。脚部に透孔が3カ所。	
第40回	34	須恵器 器台	覆上 10%	口底 高	不詳	黒/灰白/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。脚部に2段透孔が3カ所。	
第40回	35	須恵器 器or高盤	覆上 5%	口底 19.1 高	不詳 推定?	黒・粗/灰白/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。底部から体部下半は回転へラ削り。	
第40回	36	土師器 短頸壺	西部中央+2、覆上 15%	口底 11.7 高	B 1	黒・ガ/灰黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第40回	37	土師器 罎	覆上 5%	口底 12.8 高	B 1	黒/黄灰/良好	外面と内面の口縁部は赤色塗彩。口縁部はへラ磨き。内面頸部はへラナデ、胴部はナデナデ。	
第40回 PL.62	38	須恵器 壺	P 2内、北壁敷 +16、覆上 40%	口底 17.6 高 26.7	B 1	黒・粗/灰/還元焰	口縁部はロクロ整形。口縁部は凹線による区画、区画上位に波状文、下位に樹突文と波状文、胴部はカキ目。内面は脚部がへラナデ。	
第40回	39	土師器 壺	覆上 5%	口底 10.8 高	B 2?	黒/褐灰/良好・焼	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第40回	40	土師器 壺	中央北+11 5%	口底 13.5 高	B 1	黒/灰黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はナデ。内面胴部はへラナデ。	
第40回	41	土師器 壺	覆上 5%	口底 12.0 高	B 2	黒・ガ/褐灰/良好	内外面とも黒色処理。口縁部は横ナデ、胴部はへラ磨きか。内面は口縁部がへラ磨き。胴部はへラナデ。	
第41回	42	土師器 壺	覆上 10%	口底 19.5 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。器面磨滅のため単位不明。	
第41回	43	土師器 壺	覆上 3%	口底 9.2 高	A	黒・ガ/にぶい黄褐/良好	胴部はへラ削り、底部露はナデ、底部はへラ削り。内面はへラナデ。	
第41回	44	土師器 壺	覆上 5%	口底 高	B 1	黒・粗/灰黄褐/良好	頸部上位は横ナデ、下位はナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第41回	45	土師器 壺	覆上 3%	口底 6.1 高	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/良好	内外面とも赤色塗彩。底部、胴部ともへラ削り。内面はへラナデ。	

遺物観察表

第25表 遺物観察表(9)

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第41図	46	土師器 甕	覆土 3%	口 高 底 8.0	C 3	黒/浅黄緑/やや軟質	胴部はヘラ削り、底部に木葉痕が残る。 内面はヘラナデか。	
第41図	47	須恵器 甕	覆土 3%	口 高 底	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	口縁部はロクロ整形。外面は凹線による 区画、区内に波状文が巡る。外面に降 灰が付着。	
第41図	48	須恵器 甕	覆土 3%	口 高 底	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。胴部はカキ 目。	
第41図	49	須恵器 甕	覆土 1%	口 高 底	太田	黒/灰白/還元焼	外面は平行明き、内面は同心円状アテ 具痕が残るが、内外ともやや磨滅。	
第41図 PL.62	50	石製品 砥石	覆土	長 8.1 重 146.5 幅 3.7			右辺・裏面部には刀子痕跡による砥石 機能面内生を目的とした整形痕がある。 上面小口部は内生面の初期整形面と見ら れ、痕跡整委痕が残る。	砥石
第41図 PL.62	51	石製品 砥石	覆土	長 12.3 重 345.5 幅 4.9			小口部内面に打痕・摩耗痕があるほか、 背面側上端・右辺縁部に弱い摩耗痕があ る。上端縁部鋭利。	ひん岩
第41図 PL.62	52	鉄製品 不明	中央東+2	長 17.3 厚 0.9 幅 1.0 重 16.3			端部は尖っている。表面は錆化が進んで いる。	
15号住居								
種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第44図	1	土師器 環	覆土 20%	口 12.7 高 底	C 1	黒・粗/にぶい橙/良 好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第44図	2	土師器 環	覆土 30%	口 13.0 高 3.5 底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第44図 PL.62	3	土師器 環	覆土 75%	口 10.0 高 3.3 底	C 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)にナデが残り、 その下位から底部は手持ちヘラ削り。	
第44図 PL.62	4	土師器 環	覆土 98%	口 11.6 高 3.1 底	C 2	黒・粗多/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第44図	5	土師器 環	覆土 20%	口 15.9 高 底	C 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第44図	6	土師器 環	覆土 40%	口 11.8 高 4.2 底	C 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第44図	7	土師器 環	覆土 40%	口 11.7 高 底	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)にナデが残り、 その下位から底部は手持ちヘラ削り。	
第44図	8	土師器 環	覆土 20%	口 12.8 高 底	B 1	黒/赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面に放射状ヘラ磨き 痕文状。	有段口縁部環
第44図	9	土師器 環	P 1内	口 13.6 高 底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第44図 PL.62	10	土師器 環	北東部直 底	口 14.1 高 4.5 底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	内面は磨滅り。 有段口縁部環。
第44図	11	土師器 碗	覆土 30%	口 高 底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持 ちヘラ削り。	
第45図	12	土師器 大型環	覆土 25%	口 20.0 高 底	C 3	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	外面体部の一部 に髷が付着。
第45図	13	土師器 大型環	東原野中央+3 20%	口 26.1 高 底	B 1	黒・粗・ガ/にぶい赤 褐/良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ。体部(横 下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は 底部から体部にヘラナデと部分的にヘラ 磨き。	
第45図	14	土師器 高環	北東部直 底	口 18.6 高 底	B 1	黒/橙/良好	内面黒色処理。環身口縁部は横ナデ。体 部から底部はヘラナデか。内面はヘラ磨 きか。	
第45図	15	土師器 高環	覆土 10%	口 21.0 高 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部上半は横ナデ。下半から底部はハ ケ目⑤。屈曲部にヘラ磨き。	
第45図	16	土師器 高環	覆土 40%	口 11.8 高 底	B 1	黒・粗粒/明黄褐/良 好	外面は赤色塗彩。環身と脚部は接合。内 面に磨滅み痕が残る。環身口縁部と脚部 はヘラ磨き。体部にはハケ目⑥が残る。 底部はヘラ削り。内面は環身がヘラナデ、 脚部はハケ目。	
第45図	17	土師器 高環	覆土 15%	口 14.8 高 底	B 1	黒/橙/良好	脚部は縦位のヘラ磨き。基部は横ナデ。 内面脚部はヘラナデ。	
第45図	18	土師器 高環	覆土 30%	口 高 底	B 1	黒/黄灰/良好	外面は縦位のハケ目後ナデ。内面は横位 のハケ目⑦(B)。	
第45図	19	土師器 高環	覆土 25%	口 高 底	B 1	黒/褐灰/良好	外面は縦位のハケ目後ナデ。内面は横位 のハケ目⑤(B)。	
第45図 PL.62	20	土師器 高環	南東隅+14、覆土 40%	口 高 底	B 1	黒・角閃/橙/良好	内面に粘土磨き上げ痕が残る。脚部は 縦位のヘラ削り。基部は横ナデ。内面は ヘラナデ。	外面天井部にヘ ラ磨き。
第45図	21	須恵器 环蓋	覆土 10%	口 高 底	太田	黒・粗/暗灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。天井部は中 央から周辺まで回転ヘラ削り。	底部にヘラ磨 き。
第45図	22	須恵器 环身	覆土 40%	口 11.7 高 2.6 受け部12.7	太田	黒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転ヘ ラ削り。	
第45図 PL.62	23	須恵器 高環	中央+3、覆土 30%	口 18.0 高 底	B 1	黒・角閃・白粒/灰白 /還元焼	ロクロ整形。回転右回り。環身と脚部は 接合。環身底部周縁は回転ヘラ削り。そ の内側に波状文。脚部は波状文が2段、 通孔が3カ所。	

第26表 遺物観察表(10)

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/構成	成形・整形の特徴	備考
第45図	24	須恵器 高坏	覆上 5%	口 16.2 高 9.6 口底 9.6	太田	黒/暗灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。	
第45図	25	須恵器 瓶	覆上 5%	口 高 口底 12.0	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。脚部に透孔が3カ所。	
第45図	26	須恵器 高坏	覆上 3%	口 高 口底	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形。外面にカキ目。脚部に透孔3カ所か。	
第45図	27	土師器 短頸直 瓶	覆上 20%	口 10.4 高 口底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第45図	28	土師器 短頸直 瓶	北西隅床直 覆上 15%	口 12.8 高 口底	B 1	黒/灰白/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第45図	29	土師器 卍	覆上 10%	口 8.2 高 口底	B 1	黒/暗灰/良好	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラ削き。	
第45図	30	土師器 卍	覆上 30%	口 13.0 高 口底	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラナデ。内面胴部もヘラナデ。	
第46図	31	土師器 卍	北東部床直、覆上 30%	口 13.0 高 口底	B 1	黒/ガ/にぶい橙/良 好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラナデ。内面胴部もヘラナデ。	内面胴部下位に 煤が付着。
第46図	32	須恵器 平瓶	覆上 3%	口 9.2 高 口底	不詳	黒/暗灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部下に1柔の小凸帯が流る。	
第46図	33	須恵器 瓶	覆上 5%	口 11.6 高 口底	太田	黒/角閃/暗灰/還元 焼	ロクロ整形、回転右回りか。頸部と胴部と接合。	横筋または旋転筋
第46図	34	須恵器 瓶	覆上 5%	口 高 口底	太田	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部と口縁部に波状文が流る。	
第46図	35	須恵器 瓶	覆上 3%	口 高 口底	不詳	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。胴部上位に把手が附付。外面には腐床が付着。	
第46図	36	土師器 瓶	覆上 3%	口 6.0 高 口底	B 1	黒/ガ/明黄褐/良好	底部に径4mm前後の孔が数個。胴部と底部はヘラ削りか。	
第46図 PL.62	37	土師器 卍	北西隅床直、覆上 70%	口 19.2 高 口底	B 1	粗・ガ/砂岩/浅黄褐 /良好	内外面に輪轆や煤が残る。口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	外面胴部に粘土 付着。
第46図	38	土師器 卍	覆上 5%	口 21.6 高 口底	B 1	粗・粗/角閃/浅黄褐 /良好	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第46図	39	土師器 卍	P 1内、覆上 30%	口 高 口底	B 1	粗/黒/にぶい黄橙/ 良好	胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第46図 PL.62	40	土師器 卍	中央～北東隅+2 ～+16、70机 25%	口 9.4 高 口底	B 4	粗・ガ/角閃/橙/良 好	底部、胴部ともヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第46図	41	土師器 卍	覆上 10%	口 6.4 高 口底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第46図	42	須恵器 卍	覆上 1%	口 高 口底	太田	黒/灰/還元焼	外面は平行印重き。一部ナデ消されている。内面は同心状アテ具痕が残る。	
第46図	43	土師器 卍	覆上 1%	口 高 口底	B 1	粗/黒褐/良好	外面はヘラナデ後平行印重。内面はナデ。アテ具痕はない。	
第47図 PL.62	44	石製品 板磚 片?	覆上	長 18.9 重 676.6 幅 13.4			板磚特有の削痕が左辺裏面に残る他、他辺は粗く打ち欠かれている。加工意図は不明。	雲母石英片岩

16号住居

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/構成	成形・整形の特徴	備考
第48図 PL.63	1	土師器 瓶	南部中央+21 98%	口 11.5 高 3.6 口底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。器面磨滅のため単位不明。	
第48図	2	土師器 瓶	覆上 10%	口 11.6 高 口底	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第48図	3	土師器 瓶	覆上 20%	口 11.6 高 口底	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第48図	4	土師器 瓶	覆上 5%	口 13.8 高 口底	B 1	黒/灰黄褐/良好・煙	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第49図	5	土師器 高坏	覆上 5%	口 29.0 高 口底	C 2	黒・ガ/橙/良好	口縁部横ナデ。体部へ削り。内面は渾な放射状噴文。	
第49図	6	土師器 高坏	覆上 15%	口 高 口底	B 1	黒・粗/角閃/明赤褐/ 良好	脚部は器面磨滅で整形不詳明であるが、最上位にハケ目が残る。内面は上位が下半はハケ目。	
第49図	7	土師器 高坏	覆上 5%	口 高 口底	B 1	黒・ガ/明赤褐/良好	脚部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第49図	8	須恵器 环蓋	覆上 5%	口 高 口底	太田	黒/白粒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。天井部中ほどまでは回転ヘラ削り。	
第49図	9	須恵器 瓶	覆上 15%	口 高 口底	B 1	粗・黒粒/灰/還元 焼	ロクロ整形、回転右回り。底部はカキ目、胴部は回転ヘラ削り。	
第49図	10	土師器 鉢	覆上 30%	口 3.6 高 口底	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/ 良好	内面黒色処理。底部から胴部はヘラ削り。内面はヘラナデか。	
第49図	11	土師器 卍	覆上 10%	口 16.2 高 口底	B 4	粗・粗・ガ/明赤褐/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第49図 PL.63	12	土師器 卍	甕右袖～焚口床 直、覆上 80%	口 20.1 高 口底	A	黒多/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第49図 PL.63	13	土師器 卍	甕左袖～焚口床直 95%	口 20.8 高 38.1 口底 7.0	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

遺物観察表

第27表 遺物観察表(11)

挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第49図 PL.63	14	土師器 甕	南右側床直、覆土 95%	口底 23.0 高 40.2 3.8	B 1	黒・褐粒/にぶい黄緑 /良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第50図 PL.63	15	須恵器 甕	覆土 10%	口底 17.4 高	太田	黒/暗灰/還元焰	口縁部はロクロ整形。口縁部は凹線によ って上下に区画、口唇部と区画上に波 状文が走る。内面は頸部までヘラナデ。 胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円 状アテ具痕が残る。	
第50図	16	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	乗附?	黒・粗/灰/還元焰	口縁部は凹線による区画、区画内に波状 文が走る。	303と同一個体 か。
第50図	17	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	太田	黒・粗/角閃/灰/還 元焰	口縁部はロクロ整形。外面は凹線によ って2段以上に区画、区画内に波状文が 走る。	
第50図	18	須恵器 甕	覆土 5%	口底 高	太田	黒・粗/灰/還元焰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ 具痕が残る。	
17号住居								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第52図	1	土師器 環	覆土 10%	口底 11.6 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良 好・燻	口縁部横ナデ。体部(横下)上半はナデ、 下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第52図	2	土師器 環	覆土 15%	口底 12.9 高	B 1	黒/粗/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)上半はナデ、 下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第52図	3	土師器 環	覆土 30%	口底 13.8 高	B 1	黒・褐粒/にぶい黄緑 /良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第52図	4	土師器 環	覆土 10%	口底 14.4 高	B 1	黒/にぶい粗/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第52図	5	土師器 環	内側中央+4 10%	口底 13.7 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第52図	6	土師器 高環	覆土 10%	口底 高	B 1	黒/明赤褐/良好	坯身内面黒色処理。坯身底部から脚部は ヘラ削り。内面は坯身がヘラ磨き、脚部 はナデ。	
第52図	7	土師器 高環	覆土 10%	口底 高	B 1	黒/粗/良好	坯身内面黒色処理。坯身底部から脚部は ヘラ削り。内面は坯身がヘラ磨き、脚部 はヘラナデ。	
第52図	8	土師器 高環	覆土 10%	口底 高	B 1	黒・粗・褐粒/粗/良 好	脚部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第52図	9	土師器 高環	覆土、鋳方 10%	口底 13.8 高	B 1	黒・褐粒/粗/良好	内面に輪軸み痕が残る。脚部はヘラ削り、 胴部は横ナデ。内面脚部はヘラナデ。	
第52図	10	須恵器 環蓋	覆土 15%	口底 13.0 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。回転右回りか。天井部は回 転ヘラ削り。	外面には降灰が 厚く付着。
第52図	11	須恵器 器台	覆土 5%	口底 高	B 1	黒/灰白/還元焰	口縁部はロクロ整形、外面に1条からなる 波状文が2段走る。	
第52図 PL.64	12	土師器 甕	P 2 西床直、覆内、 覆土 45%	口底 20.6 高 6.4	B 1	黒・粗・ガ/にぶい黄 褐/良好	口縁部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部がヘラナデ。胴部上 半は器面磨滅のため不詳。	
第52図 PL.64	13	土師器 甕	覆土 15%	口底 8.4 高	B 1	黒多・褐粒/にぶい黄 褐/良好	底部はヘラ削り、胴部はヘラ削り後ヘラ 磨き。内面はヘラナデ。	
第52図	14	須恵器 高環	覆土 5%	口底 高	太田	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。回転右回りか。底部は脚部 周辺にカキ目、その外側に刺交文。	
第52図	15	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口縁部はロクロ整形。口唇部と口縁部に 波状文が走る。	
第52図	16	手捏ね 鉢形	覆土 50%	口底 9.0 高 4.9 5.3	B 1	黒/黄灰/良好	口縁部横ナデ。体部は上半がナデ、下半 はヘラナデ。底部は木葉痕が残る。内面 はハケ目。	
第52図 PL.64	17	石製品 紡錘車	覆土	径 4.6 重 68.9 2.5			上面・側面を同心円状に縦紋。縦刻間に 新南文(上面8・側面11)刻む。孔は片 側穿孔。	蛇紋岩
第52図 PL.64	18	鉄製品 鉄匙	覆土 30%	長 4.5 厚 0.2 幅 3.1 重 7.3			頸部から基部を欠損。頸部上段で折れ曲 がっている。表面は錆化が進んでいる。	
18号住居								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第54図	1	土師器 環	南東部床直、覆土 20%	口底 高	C 1	黒・ガ/明赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第54図	2	土師器 環	覆土 10%	口底 10.8 高	C 1 (B)	黒/灰黄褐/良好・燻	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第54図	3	土師器 環	覆土 20%	口底 10.3 高	C 1 (B)	黒/にぶい粗/良好	口縁部横ナデ。体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第54図	4	土師器 環	覆土 5%	口底 13.6 高	B 1	黒/褐灰/良好・燻	口縁部横ナデ。体部(横下)は手持ち ヘラ削り。	
第54図	5	土師器 環	覆土 25%	口底 13.0 高	B 1	黒・粗・角閃/明赤褐 /良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ち ヘラ削り。	
第54図	6	土師器 環	覆土 20%	口底 13.0 高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 赤褐/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ち ヘラ削り。	
第54図 PL.64	7	土師器 環	覆土 40%	口底 14.3 高	B 1	黒/にぶい粗/良好	口縁部横ナデ。体部上半ナデ、下半から 底部は手持ちヘラ削り。	
第54図 PL.64	8	土師器 環	P 1 内 50%	口底 14.0 高 4.9	D 1	黒・粗・角閃/にぶい 粗/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ち ヘラ削り。	

第28表 遺物観察表(12)

神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第54図	9	土師器 環	覆土 20%	口 底 15.0 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第54図	10	土師器 環	覆土 15%	口 底 12.8 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第54図	11	土師器 台付盥	南壁際中央床直 15%	口 底 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	脚部は貼付、脚部はヘラ削り、基部は横ナデ。内面は基部・脚部ともヘラナデ。	
第54図	12	須恵器 環蓋	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒・靑/角閃/灰白/還元焰	ロクロ整形か、天井部は手持ちヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第54図	13	須恵器 坏身	覆土 3%	口 底 10.0 高	太田?	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。	
第54図 PL.64	14	土師器 環	竈前床直、竈内 60%	口 底 高	A	黒・ガ/にぶい赤褐/良好	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第54図	15	土師器 環	覆土 3%	口 底 6.7 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第54図	16	土師器 環	覆土 3%	口 底 6.7 高	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第54図	17	須恵器 須恵	覆土 3%	口 底 高	太田?	黒/灰/還元焰	胴部に1条の凹線が走る、凹線の上に波状文が走る。	
19号住居								
神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第57図 PL.64	1	土師器 環	竈前+1、竈内 40%	口 底 13.0 高	B 2	黒・ガ・白粒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
第57図	2	土師器 環	覆土 30%	口 底 10.5 高 4.1	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	3	土師器 環	覆土 30%	口 底 11.2 高	C 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	4	土師器 環	覆土 25%	口 底 11.8 高 4.1	B 1	黒・ガ/褐灰/良好・燻	口縁部横ナデ、底部(楼下)は手持ちヘラ削り。	
第57図	5	土師器 環	覆土 20%	口 底 12.4 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	6	土師器 環	覆土 30%	口 底 12.9 高 4.5	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	7	土師器 環	覆土 5%	口 底 13.0 高	C 2	黒/橙/良好	内面黒色処理、口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	8	土師器 環	中央+5、覆土 30%	口 底 13.0 高 4.7	C 3	黒・靑・長石/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図 PL.64	9	土師器 環	南壁際西側+3、覆土 60%	口 底 13.2 高 4.6	C 3	黒・靑粒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	10	土師器 環	覆土 40%	口 底 11.2 高	C 3	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図 PL.64	11	土師器 環	覆土 85%	口 底 13.4 高 4.7	C 3	黒・靑粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図 PL.64	12	土師器 環	北東部+2 75%	口 底 14.3 高 5.1	B 2	黒・靑/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	13	土師器 環	覆土 20%	口 底 14.4 高	B 1	黒・ガ/黒褐/良好	内面黒色処理、口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り、体部器面磨滅のため不詳。内面は口縁部横灰、底部から体部は斜めのヘラ磨き。	
第57図	14	土師器 環	覆土 25%	口 底 14.8 高 4.5	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	15	土師器 環	覆土 20%	口 底 14.8 高	B 4	黒/黒褐/良好・燻	口縁部横ナデ、底部(楼下)は手持ちヘラ削り。	
第57図 PL.64	16	土師器 碗	竈内+2、竈東+6 80%	口 底 10.0 高 6.7	B 1	黒・ガ・白粒/灰褐/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図	17	土師器 盥	覆土 20%	口 底 14.1 高	B 1	黒・白粒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第57図 PL.64	18	土師器 高环	北壁際西側床直 98%	口 底 13.1 高 13.0 13.4	B 1	黒・ガ・靑粒/にぶい黄橙/良好	内面は坏身部が黒色処理、内面脚部に粘土継ぎ上げ痕が残る。坏身部口縁部と基部は横ナデ、底部から脚部はヘラ磨き。内面は坏身部がヘラ磨き、脚部から基部上半がヘラナデ。	
第57図 PL.65	19	土師器 高环	北壁際西側床直 98%	口 底 13.6 高 13.5 12.4	B 1	黒・靑・角閃・ガ/黄灰/良好	内面は坏身部が黒色処理、内面脚部に粘土継ぎ上げ痕が残る。坏身部口縁部と基部は横ナデ、底部から脚部はヘラ磨き。内面は坏身部がヘラ磨き、脚部から基部上半がヘラナデ。	
第57図	20	土師器 高环	中央+3 30%	口 底 15.0 高	B 1	黒・靑・角閃/にぶい黄橙/良好	坏身内面黒色処理、口縁部横ナデ、底部から脚部はヘラ削り。内面は坏身がヘラ磨き。	
第57図 PL.65	21	土師器 高环	中央南床直、覆土 35%	口 底 16.0 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/良好	内面に粘土継ぎ上げ痕が残る。脚部はヘラ削り、基部は横ナデ。内面は脚部から基部上半がヘラナデ、下半が横ナデ。	
第57図	22	土師器 台付盥	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/良好	坏身底部から脚部はヘラ削り。内面は脚部がヘラナデ。	

遺物観察表

第29表 遺物観察表(13)

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分期	胎土/色調/構成	成形・整形の特徴	備考
第57図 PL.65	23	土師器 高坏	中央南+3 15%	口底 高	C 3	黒・褐粒/淡褐/良好	胴部は外面がへう削り、内面はへうナデ。	
第57図 PL.65	24	土師器 鉢	P 1内、中央南 +1、覆土 30%	口底 高	B 1	黒・粗多・ガ/にぶい 黄粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、体部はへう削り。 内面体部はへうナデ。	
第58図	25	須恵器 环蓋	覆土 35%	口底 高	B 1	黒/浅黄粒/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転 へう削り。	
第58図	26	須恵器 高坏	覆土 5%	口底 14.2 高	未詳?	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は力キ目。	
第58図	27	須恵器 环身	覆土 5%	口底 14.9 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転方向不詳。底部は手持 ちへう削り。	
第58図	28	須恵器 瓶	覆土 1%	口底 高	B 1	黒・角閃/灰/還元焰	胴部はロクロ整形。胴部中に1条の凹線、 凹線の上に波状文が通る。	
第58図 PL.65	29	土師器 壺	中央+3、覆土 70%	口底 12.6 高 28.4 7.9	B 1	黒・角閃/浅黄粒/良	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへう削り。 内面は底部から胴部がへうナデ。	
第58図	30	土師器 台付甕	覆土 10%	口底 10.6 高	B 1	黒/にぶい粒/良好	胴部は貼付。胴部はへうナデか。内面は 底部がナデ、胴部はへうナデ。	
第58図 PL.65	31	土師器 小空甕	覆土 75%	口底 10.9 高 11.8	B 1	黒・白粒/浅黄粒/良 好	口縁部から頸部、胴部上位は横ナデ、胴 部と底部はへう削り。内面は底部から胴 部がへうナデ。	
第58図 PL.65	32	土師器 小空甕	内野原北側+12 50%	口底 12.8 高	B 1	黒・粗・ガ/粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。 内面胴部はへうナデ。	
第58図	33	土師器 小空甕	北西部床直、覆土 35%	口底 13.6 高	B 1	黒・角閃・ガ/にぶい 黄粒/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへう削り。内面 胴部はへうナデ。	
第58図 PL.65	34	土師器 小空甕	中央+4、+5、覆土 60%	口底 15.4 高	B 1	黒・粗・角閃/褐灰/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り 後後部から胴部下位に縦位のへう削り。 内面胴部はへうナデ。	
第58図 PL.65	35	土師器 小空甕	中央北側+2、+4、 覆土内、覆土 65%	口底 16.6 高 23.8 6.2	B 4	黒・粗・角閃・褐粒/ にぶい黄粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は へう削り。内面は底部から胴部がへうナデ。	
第58図 PL.65	36	土師器 甕	南部+1、北西部 55%	口底 16.2 高 32.7 7.5	B 1	黒・ガ/にぶい黄粒/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は へう削り。内面は底部から胴部がへうナ デ。	外面胴部の一部 に粘土付着。
第59図 PL.66	37	土師器 甕	東平部+4 ~ +9、 覆土 60%	口底 18.3 高 38.4 5.5	B 1	黒・褐粒/にぶい粒/ 良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへう削り。 内面は底部から胴部がへうナデ。	
第59図 PL.66	38	土師器 罐内床直	罐内床直 90%	口底 19.0 高 37.3 3.4	A	黒・粗・角閃・ガ/粒 /良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は へう削り。内面は底部から胴部がへうナ デ。	
第59図 PL.66	39	土師器 甕	中央+2、南部床直、 覆土床直、+9、覆土 85%	口底 22.2 高	D 1	黒・粗・角閃・長石・ 赤褐/還元焰	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。 内面胴部はへうナデ。	
第59図 PL.66	40	土師器 甕	罐左袖 98%	口底 19.7 高 37.2 5.0	B 4	黒・ガ/灰黄粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は へう削り。内面は底部から胴部がへうナ デ。	
第60図 PL.67	41	土師器 甕	罐右袖、覆土 95%	口底 20.0 高 35.0 5.7	B 4	黒・ガ・褐粒/粒/良 好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへう削り。 内面は底部から胴部がへうナデ。	
第60図	42	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	不詳	黒/灰白/還元焰	口縁部はロクロ整形。口縁部に波状文が 通る。	
第60図	43	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口縁部はロクロ整形。口唇部と口縁部に 波状文が通る。	
第60図	44	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 赤褐/還元焰	口縁部はロクロ整形。口縁部は2案単位 の凹線で区画、凹線の上に波状文が通る。	
第60図	45	須恵器 瓶	覆土 1%	口底 高	太田	黒/灰/還元焰	胴部はロクロ整形。外面は力キ目、内面 は頸部付近にへうナデ。	

第30表 遺物観察表(14)

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第62図	11	土師器 環	北野原+7、覆土 45%	口底 13.0 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第62図	12	土師器 環	覆土 20%	口底 13.0 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好・焼	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第62図 PL-67	13	土師器 高環	覆土 30%	口底 22.6 高	B 1	黒/橙/良好	环身内面は黒色処理。环身口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第63図	14	土師器 高環	覆土 25%	口底 高	B 1	黒・ガ/褐粒/明赤褐/良好	脚部は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第63図	15	土師器 高環	覆土 10%	口底 高	D 2	黒・粗/橙/良好	内面脚部に輪軸みねが残る。脚部は縦位のヘラ削り。内面はナデ。	
第63図	16	須恵器 环蓋	覆土 5%	口底 高	太田	黒・ガ/灰/還元焰	口口整形、回転左回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第63図	17	須恵器 环身	覆土 50%	口底 11.7 高 4.1	B 1	黒・白粒/暗灰/還元焰	口口整形、回転左回り。底部は回転ヘラ削り。	
第63図	18	須恵器 环身	甕内 10%	口底 18.4 高	太田?	黒/灰白/還元焰	口口整形、回転左回りか。底部から体部下半は回転ヘラ削り。	
第63図	19	須恵器 高環	覆土 5%	口底 高		黒/灰/還元焰	口口整形、回転方向不明。脚部は2段の透孔が2か所。	
第63図	20	須恵器 高環	覆土 10%	口底 高		黒/灰/還元焰	口口整形、回転方向不明。脚部に3段の波状文が通る。透孔は2か所。	
第63図	21	土師器 壺	覆土 30%	口底 高	B 1	黒・ガ/褐粒/にぶい黄粒/良好	底部から胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第63図 PL-67	22	土師器 壺	覆土 10%	口底 5.2 高	B 1	黒多/にぶい黄粒/良好	内面頸部と胴部に輪軸みねが残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削りか。内面胴部はヘラナデ。	
第63図	23	須恵器 短頸壺	覆土 5%	口底 10.0 高	B 1	黒/灰/還元焰	口口整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削りか。	
第63図	24	須恵器 瓶	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口口整形、回転方向不明。口縁部に小凸帯が1条通る。	
第63図	25	須恵器 高環	覆土 5%	口底 12.6 高	太田?	黒/褐灰/還元焰	口口整形、縦軸右回り。脚部に透孔あり。外面と内面の一部に障灰が付着。	
第63図	26	土師器 環	覆土 5%	口底 12.8 高	B 1	黒/灰褐/良好・焼	内面黒色処理か。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後粗いヘラ磨き。	
第63図	27	須恵器 小壺	覆土 25%	口底 5.0 高	B 1	黒・粗・ガ/にぶい橙/良好	底部はヘラ削り、胴部もヘラ削りであるが大部分ナデ消されている。内面はヘラナデ。	
第63図	28	土師器 環	覆土 5%	口底 7.0 高	B 1	黒・雲母/にぶい赤褐/良好	底部はヘラ削り、胴部下位はハケ目が残る、その上はナデ。内面はヘラナデ。	
第63図	29	土師器 環	覆土 5%	口底 8.6 高	B 1	黒・粗/角閃/にぶい橙/良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第63図	30	須恵器 環	覆土 5%	口底 14.8 高	太田	黒/灰/還元焰	口縁部は口口整形。外面は上位に波状文が通る。	
第63図	31	須恵器 環	覆土 1%	口底 20.8 高	太田	黒/褐灰/還元焰	口縁部は口口整形。外面は凹縁による区画、凹縁の上下に波状文が通る。内面は上位に波状文が通る。	
第63図	32	須恵器 環	覆土 1%	口底 22.8 高	太田	黒/灰/還元焰	口縁部は口口整形。外面は小凸帯と凹縁による区画、凹縁の上下に波状文が通る。内面は上位に波状文が通る。	
第63図	33	須恵器 環	覆土 1%	口底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焰	口縁部は口口整形。外面は小凸帯と凹縁による区画、区画内に波状文が通る。内面は上位に波状文が通る。	内面にヘラ磨き。
第63図	34	須恵器 環	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口口整形。肩に凹縁による区画、区画内に波状文が通る。	
第63図 PL-67	35	石製品 砥石	覆土	長 4.0 重 28.5 幅 3.3			背面側面が著しく片減り、裏面側は比較的に平直。上下両端を欠損。四面使用。	砥沢石
第63図 PL-67	36	鉄製品 鉄蓋	覆土 30%	長 10.4 厚 0.5 幅 0.8 重 7.4			刃部から頸部の上半を欠損、表面の錆化が進んでいる。	

21号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第65図	1	土師器 環	覆土 45%	口底 10.6 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図	2	土師器 環	覆土 25%	口底 10.8 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図	3	土師器 環	南東部掘方 45%	口底 12.6 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図 PL-67	4	土師器 環	西野原+4 98%	口底 10.0 高 3.1	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図 PL-67	5	土師器 環	覆土 60%	口底 10.4 高 2.8	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図 PL-67	6	土師器 環	甕内+14、北部+18 60%	口底 10.7 高 3.2	C 3	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図 PL-67	7	土師器 環	覆土 20%	口底 10.8 高	C 3	黒/にぶい橙/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図	8	土師器 環	中央+18 45%	口底 11.0 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	

遺物観察表
第31表 遺物観察表(15)

挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第65図	9	土師器 環	覆土 10%	口 底 15.0 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第65図	10	土師器 環	覆土 50%	口 底 11.0 高	C 3	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第66図	11	土師器 環	覆土 35%	口 底 11.0 高	C 3	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第66図	12	須恵器 高環	覆土 3%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/酸化	ロクロ整形、回転方向不明。	
第66図	13	土師器 高環	覆土 5%	口 底 高	C 1	黒/橙/良好	环身と脚部は接合。环身底部から脚部はへラ削り。脚部内面はナデ。	
第66図 PL.67	14	土師器 高環	北部+2、覆土 15%	口 底 15.2 高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい黄橙/良好	环身はホゾ状差し込みで脚部と接合。脚部はへラ削り後へラ磨き、底部は横ナデ。内面は上半がへラナデ、下半はへラ磨き。	
第66図 PL.67	15	須恵器 环蓋	覆土 60%	口 底 10.6 高 3.9	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転へラ削り。	
第66図	16	須恵器 有蓋甕	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。凸帯下に幅が広い波状文が通る。	
第66図	17	土師器 甕	甕左前床直、覆土 5%	口 底 19.1 高	A	黒・粗粒/明赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第66図	18	土師器 甕	東部+1 5%	口 底 20.0 高	A	黒・粗粒/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第66図	19	土師器 甕	北部床直 5%	口 底 23.0 高	B 1	黒多/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第66図	20	土師器 甕	甕内、覆土 15%	口 底 高	A	黒・長石/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第66図	21	須恵器 甕	覆土 3%	口 底 19.0 高	B 1	黒・粗・角閃/灰/還元焰	口縁部はロクロ整形。外面には縦位の方目。	
第66図	22	須恵器 甕	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	外面は平行叩き、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第66図	23	須恵器 甕	覆土 1%	口 底 高	不詳	黒/灰白/還元焰	外面は平行叩き。内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第66図	24	土師器 甕	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒・方/灰黄褐/中性	周囲を打ち欠き二次利用か。外面はへラ削り。内面はナデ。	
第66図	25	土製品 白玉	2号甕左前+13 90%	径 0.4 孔 0.1 厚 0.7	B 1	緻密/褐灰/良好	表面はナデか。	

22号住居

挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第68図	1	土師器 環	覆土 5%	口 底 11.7 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第68図	2	土師器 環	覆土 10%	口 底 11.0 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第68図	3	須恵器 环耳蓋	覆土 5%	口 底 12.0 高	B 1	黒/灰白/還元焰	ロクロ整形。	
第68図 PL.67	4	須恵器 环G蓋	覆土 25%	口 底 8.2 高 2.6	B 1	黒・白粒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。握みは貼付、天井部は周辺まで回転へラ削り。	
第68図 PL.67	5	須恵器 环G蓋	覆土 30%	口 底 9.2 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は全面回転へラ削り。	
第68図	6	須恵器 环G蓋	覆土 15%	口 底 9.6 高	B 1	黒・黒粒/灰白/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は全面回転へラ削り。	
第68図	7	須恵器 环G身	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転へラ起し、周囲は回転へラ削り。	
第68図 PL.67	8	土師器 甕	覆土 10%	口 底 21.6 高	B 1	黒・粗粒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	

23号住居

挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第69図	1	土師器 環	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/褐灰/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへラ削り。	
第69図	2	土師器 環	覆土 30%	口 底 高	C 3	黒・粗粒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第69図	3	土師器 甕	覆土 3%	口 底 12.7 高	B 1	黒・白・粗粒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ。	
第69図 PL.67	4	石製品 勾玉	覆土	長 3.3 重 7.1 幅 2.1			上下両端・右側縁を分割して縦形を作出したのち、左側縁を直線的、右側縁を部分研磨。上端部・孔の左側縁側をノッチ状に抉る。	滑石

24号住居

挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第70図	1	土師器 環	北西部+6 20%	口 底 13.6 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好・内燻	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへラ削り。	
第70図	2	土師器 環	覆土 20%	口 底 11.8 高	C 3	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへラ削り。	
第70図	3	土師器 環	南壁際+3、+4 30%	口 底 13.7 高	B 1	黒・方/にぶい黄橙/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへラ削り。	

第32表 遺物観察表(16)

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第70図	4	土師器 高坏	南壁際床直、甕上 3%	口 16.0 高 底	C 3	黒・粗粒/橙/良好	脚部は内外ともへら削り、裾部は内外とも横ナデ。	
第70図	5	土師器 高坏	甕上 5%	口 11.8 高 底	B 1	黒/灰白/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。	
第70図	6	土師器 高坏	甕上 3%	口 19.8 高 底	A	黒・粗粒/橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り、内面胴部はへらナデ。	
第70図	7	土師器 高坏	甕上、甕上 3%	口 5.0 高 底	B 1	黒/にぶい黄褐/良好	底部と胴部はへら削り、内面はへらナデ。	
第70図	8	須恵器 高坏	甕上 1%	口 高 底	太田	黒/灰褐/還元焼	口縁部はロクロ整形。口縁部は小凸帯による区画、区画内に波状文が施す。	
第70図	9	須恵器 高坏	甕上 3%	口 高 底	B 1	黒・粗・角四/灰オリーブ/還元焼	外面は平行引きめかき目、内面は同心円状アテ具痕が残る。	

25号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第72図 PL.67	1	土師器 高坏	甕左床直 98%	口 11.2 高 4.9 底	B 1	黒・粗・ガ・角四/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	2	土師器 高坏	甕上 80%	口 11.0 高 3.6 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	3	土師器 高坏	北部+49 95%	口 11.1 高 3.8 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	4	土師器 高坏	中央+32 55%	口 11.2 高 3.5 底	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	5	土師器 高坏	甕上 75%	口 11.4 高 4.0 底	A	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	6	土師器 高坏	P 1内-54 95%	口 12.0 高 3.9 底	C 2	黒・粗粒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	7	土師器 高坏	P 1内-16 98%	口 12.1 高 4.9 底	B 1	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下の上半)はナデ、下から底部は手持ちへら削り、内面底部はへらナデ。	
第72図 PL.67	8	土師器 高坏	P 1内-10 98%	口 12.0 高 5.0 底	C 3	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	9	土師器 高坏	甕上 20%	口 12.8 高 底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.67	10	土師器 高坏	P 1内-42、甕上 75%	口 13.8 高 4.9 底	B 1	黒/暗赤褐/良好・煙	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り、内面底部はへらナデ。	
第72図 PL.67	11	土師器 高坏	甕上 15%	口 17.7 高 底	D 2	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第72図 PL.68	12	土師器 高坏	甕上 5%	口 19.7 高 底	D 1	黒/橙/良好	坯身口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第72図 PL.68	13	土師器 高坏	甕内-7 50%	口 15.6 高 底	D 1	黒・粗・砂岩/橙/良好	脚部は縦位のへら削り、裾部は横ナデ。内面は脚部が横位のへら削り、裾部は横ナデ。	
第72図 PL.68	14	土師器 高坏	中央+6 5%	口 高 底	D 1	黒・粗/にぶい黄褐/良好	脚部は内外ともへら削り。	
第72図 PL.68	15	土師器 高坏	北西隅+16 45%	口 15.8 高 5.0 底	B 1	黒・粗・ガ/にぶい黄褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部に放射状へら磨き(端アテ)。	
第72図 PL.68	16	土師器 高坏	P 1内-12 98%	口 16.4 高 10.0 底 3.6	B 1	黒・粗・ガ・砂岩/にぶい赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は体部下ラにへらナデ。	
第72図 PL.68	17	須恵器 高坏	甕上 5%	口 高 底	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。蓋受け径12.0cm。	
第72図 PL.68	18	須恵器 高坏	中央北床直 5%	口 高 底	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。脚部は力か目、透孔が3カ所。	
第72図 PL.68	19	須恵器 高坏	甕上 3%	口 高 底	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。脚部は力か目、透孔あり。	
第72図 PL.68	20	土師器 高坏	P 1内-13 95%	口 10.3 高 19.2 底 8.1	B 1	黒・白粒/明黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第72図 PL.68	21	土師器 高坏	南部床直 95%	口 12.6 高 16.2 底 7.0	B 1	黒・ガ・白粒/にぶい赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、底部は木葉痕が残る。内面胴部はへらナデ。	
第72図 PL.68	22	土師器 高坏	甕内-12~+12 95%	口 18.5 高 35.8 底 3.5	B 1	黒・粗・ガ/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第73図 PL.68	23	土師器 高坏	北壁際床直、+35、 甕上 35%	口 20.5 高 底	B 1	黒・粗粒/にぶい赤褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第73図 PL.68	24	土師器 高坏	甕内-4~+18 95%	口 20.5 高 37.2 底 4.6	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良好	内面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、底部はへら削りであるが木葉痕が残る。内面胴部はへらナデ。	
第73図 PL.69	25	土師器 高坏	中央床直、北壁際 中央+35 10%	口 19.1 高 底	A	黒・ガ・粗粒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第73図 PL.69	26	土師器 高坏	甕左袖 98%	口 20.0 高 36.6 底 5.0	A	黒・粗・長石/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り、底部は木葉痕が残る。内面胴部はへらナデ。	
第73図 PL.69	27	土師器 高坏	中央床直、甕左前 +20、甕内 75%	口 22.8 高 41.3 底 3.2	B 4	黒・粗・角四/明赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	

遺物観察表

第33表 遺物観察表(17)

探検番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第74図 PL.69	28	土師器 甕	壺口袖 80%	口 底	22.0 高	B 4	黒・粗・角閃・粗粒/ にぶい黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。
第74図 PL.69	29	土師器 甕	北西部+7、+13、 覆上 35%	口 底	21.6 高	B 1	黒・粗/にぶい黄橙/ 良好	口縁部横ナデ、胴部は器面磨減と土砂付着で単位不明。内面は胴部がへらナデ。
第74図 PL.70	30	土師器 甕	P 1上~2 85%	口 底	22.6 高 31.4 10.7	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り後へら磨き、底部はへら削り。内面胴部はへらナデ。

26号住居

探検番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第75図	1	土師器 杯	覆上 10%	口 底	12.0 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良 好・焼	口縁部横ナデ、体部(楼下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへら削り。
第75図	2	土師器 杯	覆上 10%	口 底	12.0 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良 好・焼	口縁部横ナデ、体部(楼下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへら削り。
第75図	3	土師器 杯	覆上 20%	口 底	13.0 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良 好・内焼か	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。
第75図	4	土師器 杯	覆上 20%	口 底	13.2 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良 好・焼	口縁部横ナデ、体部(楼下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへら削り。
第75図	5	土師器 杯	覆上 15%	口 底	12.0 高	C 3	黒/にぶい黄橙/良 好・内焼	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。
第75図 PL.70	6	土師器 杯	北東部床直、+11、 覆上 30%	口 底	13.0 高 4.3	C 3	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(楼下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへら削り。
第75図	7	土師器 杯	覆上 15%	口 底	14.8 高	B 1	黒・粗/にぶい黄橙/ 良好・内焼	口縁部横ナデ、体部(楼下)から底部は手持ちへら削り。
第75図 PL.70	8	土師器 高杯	中央南+2 40%	口 底	15.0 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/ 良好	胴部は縦位のへら磨き、裾部は横ナデ、内面は脚部上位はナデ、中位から下位はへらナデ。
第76図	9	土師器 高杯	覆上 3%	口 底	15.8 高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 黄橙/良好	脚部はへら磨き、裾部は横ナデ、内面は黄橙がハケ目。
第76図	10	須恵器 鉢	壺口+11 25%	口 底	高	太田	黒・白粒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転へら削り、体部は力キ目。
第76図	11	須恵器 坏身	覆上 5%	口 底	10.0 高	兼附?	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転方向不明。
第76図	12	土師器 甕	覆上 3%	口 底	高	B 1	黒・白粒/にぶい黄橙/ 良好	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。
第76図	13	土師器 甕	覆上 3%	口 底	4.4 高	B 1	黒・ガ/橙/良好	胴部と底部はへら削り。内面はへらナデ。
第76図	14	土製品 円盤状	北西部+12 100%	径 7.0×6.8 厚 1.7	高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 黄橙/良好	裏の底部、周囲は打ち欠いている。外面は手持ちへら削り、内面はハケ目。
第76図 PL.70	15	石製品 勾玉	覆上	長 2.7 重 2.9 1.0	高			勾玉端部は丸味を持ち、断面は扁平。穿孔孔周辺を肉離れから浅く窪める。この浅い凹部は刀子等を回転させ形成されたように見えるが、それを示す顕微鏡像はなく、光沢が強い。孔周辺を浅く窪める穿孔孔法は、縄文期扶杖玉にはない。複製勾玉の部類か。

27号住居

探検番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第77図 PL.70	1	土師器 碗	覆上 75%	口 底	11.4 高 5.1 5.4	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 黄橙/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部はへら削りか。内面は底部から体部がへらナデ。
第77図 PL.70	2	土師器 碗	南東部床直 98%	口 底	12.0 高 6.7 5.4	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/ 良好	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部はへら削りか。内面は口唇部横ナデ、底部から体部、口縁部がへらナデ。
第77図 PL.70	3	土師器 碗	覆上 20%	口 底	4.8 高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 黄橙/良好	体部はナデ、底部周辺から底部は手持ちへら削り。内面はへらナデ。
第77図 PL.70	4	土師器 高杯	南東部床直、覆上 90%	口 底	19.6 高 15.4 14.1	B 1	黒/橙/良好	外面と坏身内面は赤色塗彩。坏身口縁部は横ナデ、体部から底部、脚部最下位はハケ目、種と脚部はへら磨き裾部は横ナデ、内面は坏身がへら磨き、脚部はナデ、裾部上半はハケ目。
第77図 PL.70	5	土師器 高杯	覆上 35%	口 底	16.9 高	B 1	黒・ガ/明黄橙/良好	外面と坏身内面は赤色塗彩。坏身口縁部は横ナデ、体部はへらナデ後一部へら磨き、底部はへら磨き。内面は底部から体部がへら磨き。
第77図	6	土師器 高杯	覆上 15%	口 底	21.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	内外面とも赤色塗彩。外面は放射状へら磨き、内面は口縁部が横ナデ、体部がへら磨き。
第77図	7	土師器 高杯	覆上 10%	口 底	高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	内外面とも赤色塗彩。脚部添付、体部はへら磨き、底部はへら削りか。内面は器面磨減のため不鮮明。
第78図	8	土師器 高杯	覆上 20%	口 底	高	B 1	黒・粗・粗粒/にぶい 黄橙/良好	外面に輪積み痕が残る。坏身底部は小口痕が残るへら削り。内面はハケ目。
第78図	9	土師器 高杯	東隣P 1際+11 20%	口 底	高	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/ 良好	坏身底部は脚部に差し込むボゾ状小突起をもつ。内外面ともハケ目。

第34表 遺物観察表(18)

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第78図 PL.70	10	土師器 高環	南部+18、覆土 45%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	外面全面と内面の坯身と裾部下半は赤色 塗彩。内面脚部に粘土紐巻き上げ痕が残 る。坯身口縁部は横ナデ、底部から脚部 は縦位のヘラ磨き、裾部は横ナデ。内面 は脚部がヘラ磨き、脚部はナデ。	
第78図	11	土師器 高環	南部+9 35%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	脚部内面を除き赤色塗彩。内面に輪積 み痕が残る。脚部はヘラ磨き後両端を横ナ デ。内面はナデ。	
第78図 PL.70	12	土師器 高環	東部P 3 割+3 30%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	内面に輪積み痕が残る。脚部から裾部上 半はハケ目(5本)。下半は横ナデ。内面 は脚部上半がナデ、下半はハケ目。裾部 は横ナデ。	
第78図	13	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	外面は赤色塗彩。脚部はナデ、内面は上 半がナデ、下半はヘラナデ。	
第78図	14	土師器 高環	内環床直 20%	口 底 高	B 1	黒/灰黄褐/良好	脚部はハケ目後上位と中位をナデして いる。内面は上半がナデ、下半はハケ目。	
第78図 PL.70	15	土師器 有孔鉢	覆土 40%	口 底 19.4 高 10.5 6.9	B 1	黒・粗/にぶい黄橙/ 良好	内外面に輪積み痕が残る。口縁部から底 部はナデ、底部はヘラ削り。内面は口縁 部が横ナデ、体部から底部はヘラナデ。	底部孔径1.8cm。 内面は全体的に 艶が付着。
第78図 PL.70	16	土師器 短頸壺	南部+11 70%	口 底 9.3 高 5.9 5.7	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上半ナ デ、下半と底部は手持ちヘラ削り。内面 は底部から胴部がヘラナデ。	
第78図 PL.70	17	土師器 卍	西溝P 5中、覆土 98%	口 底 11.7 高 11.6 2.3	B 1	黒・粗・角四・ガ/に ぶい黄橙/良好	内面に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデ、 口縁部から頸部はハケ目。胴部上半はナ デ、下半はハケ目の残るヘラ削り。底部は ヘラ削り。内面は口縁部から胴部に磨目。	
第78図 PL.70	18	土師器 卍	東部+4、西部床直、 覆土 75%	口 底 13.5 高 16.2 4.7	B 1	黒・角四・粗粒/にぶ い黄橙/良好	口縁部はハケ目後横ナデ、一部ヘラ磨き、 胴部上半はナデ、下半から底部はヘラ削 り。内面は口縁部下半がハケ目後部分的 なヘラ磨き。胴部はヘラナデか。	
第78図 PL.71	19	土師器 卍	南部+6、覆土 85%	口 底 9.1 高 12.4 4.9	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、胴部はヘラ削り後上位か ら中位にナデ、底部はヘラ削り。内面は 胴部がヘラナデ。	
第78図 PL.71	20	土師器 罍	北西壁壁際北側床 直 25%	口 底 16.4 高	B 1	黒・粗・ガ/浅黄橙/ 良好	内面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部 は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は ヘラナデ。	外面に艶が付 着。
第79図 PL.71	21	土師器 罍	東部+4 ~ 6、覆土 50%	口 底 16.4 高	B 1	黒・粗粒/にぶい黄橙 /良好	内面に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、 胴部上位はハケ目(8本)、中位はナデ、 下半はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第79図 PL.71	22	土師器 環	覆土 10%	口 底 14.8 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)は手持ちヘ ラ削り。	
第79図 PL.71	23	石製品 砥石	北東部床直 100%	長 30.4 重 10.94 22.7			表面とも研磨され、死灰を帯びている。 特に、背面側の研磨が著しい。	粗粒輝石山岩造
第79図 PL.71	24	鉄製品 鋤先	北西壁際中央+5 100%	長 5.0 厚 2.0 9.1 重 72.7			表面左上位に別鉄片付着。表面は錆化が 激しい。	
28号住居								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第81図 PL.71	1	土師器 環	覆土 75%	口 底 11.8 高 4.8	B 1	黒・粗・ガ・粗粒/に ぶい黄橙/良好	外面の上半と内面は赤色塗彩。口縁部横 ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手 持ちヘラ削り。	
第81図 PL.71	2	土師器 環	覆土 30%	口 底 11.6 高	C 1	黒・粗/橙/良好	口縁部横ナデ、底部(横下)は手持ちヘ ラ削り。	
第81図 PL.71	3	土師器 環	北西部床直 100%	口 底 12.6 高 4.5	A・C	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第81図	4	土師器 環	覆土 20%	口 底 14.0 高	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第81図	5	土師器 環	覆土 40%	口 底 14.0 高	C 1	黒・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第81図	6	土師器 環	覆土 30%	口 底 14.6 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良 好・外燻	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面底部に連弁状にヘ ラ磨き(暗文)。	
第81図	7	土師器 高環	覆土 5%	口 底 13.6 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	脚部は器面磨滅のため整形不明、裾部 は横ナデ。内面は脚部がヘラナデ。	
第81図	8	土師器 高環	覆土 20%	口 底 高	B 1	黒・雲母/にぶい黄橙 /良好	脚部と坯身は接合。脚部はヘラ削り、内 面は上半が縦位、下半は横位のヘラナデ。	
第81図	9	土師器 高環	壺内、覆土 15%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	脚部外面は器面磨滅や粘土付着で整形不 明。内面はヘラナデ。	
第81図 PL.71	10	土師器 有孔鉢	中央+8、+12、覆 土 50%	口 底 19.6 高 13.5 8.6	B 1	黒・粗・角四・ガ/に ぶい黄橙/良好	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は 横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。 内面は底部から体部がヘラナデ。	底部穿孔径2.0 cm。
第81図	11	土師器 壺	中央+9 20%	口 底 6.5 高	B 1	黒・粗・ガ/橙/良好	胴部はヘラ削り、底部はヘラ削りとナデ。 内面はヘラナデ。	底部穿孔径2.5 cm。
第81図	12	土師器 高環・ 器台	覆土 3%	口 底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	口ロコ整形。外面は力キ目、中位に4条 の凹線、2段透孔が3カ所。	

遺物観察表

第35表 遺物観察表(19)

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第81図 PL.71	13	土師器 台付短 須面	西壁際床直 85%	口 11.9 高 14.8 底 10.0	B 2	細・粗・ガ/赤褐/ 良好	胴部と頸部は附付。口縁部横ナデ、胴部 上位はナデ、中位から底部、脚部はヘラ 削り。裾部は横ナデ。内面は胴部と脚部 がヘラナデ。内面黒。	
第81図	14	土師器 甕	中央+8 30%	口 12.0 高 底	C 1	細/橙/やや軟質	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り り。内面胴部はヘラナデ。	
第81図	15	土師器 甕	覆土 5%	口 高 底	B 1	細/にぶい黄橙/良好	胴部はヘラ削り後ヘラ磨き、単位不鮮明。 内面はヘラナデ。	胴部下位に貫通 していない小孔 あり。
第81図 PL.71	16	土師器 甕	中央+6~+8+8、 覆土 80%	口 20.8 高 底	B 1	細・粗・ガ/角四/明 赤褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	外面胴部の一部 に粘土付着。
第81図 PL.72	17	土師器 甕	中央+8~+12、 覆土 70%	口 19.1 高 底	B 1	細・粗/角四・褐粒/ 良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	
第82図 PL.72	18	土師器 甕	中央+8、+12 60%	口 21.0 高 底	B 1	細・粗・ガ/にぶい黄 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り り。内面胴部はヘラナデ。	
第82図 PL.72	19	土師器 甕	竈門口床直、覆土 95%	口 18.8 高 38.1 底 4.9	B 2	細・ガ/灰黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は ヘラ削り。内面は底部から胴部、口縁部 下半がヘラナデ。	
第82図 PL.72	20	土師器 甕	竈右袖 95%	口 20.5 高 37.5 底 4.8	B 2	細・ガ・褐粒/にぶい 黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	
第82図 PL.71	21	土師器 甕	竈門口床直、竈 95%	口 22.0 高 39.0 底 3.8	B 4	細・粗・褐粒/橙/良 好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部は ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	外面胴部の一部 に粘土付着。
第83図 PL.73	22	土師器 甕	竈左袖 80%	口 22.0 高 底	B 1	細・粗/角四・褐粒/ 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り り。内面胴部はヘラナデ。	外面の一部に粘 土付着。
第83図 PL.73	23	土師器 甕	北西部床直~+2、 覆土 95%	口 21.4 高 28.4 底 8.8	B 2	細・粗・褐粒/にぶい 黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り り後ヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面胴 部はヘラナデ。上半は器面粗雑のため不 鮮明。	
第83図 PL.73	24	土師器 甕	東部床直 30%	口 17.6 高 底	B 1	細・粗・ガ/にぶい黄 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り り。内面胴部はヘラナデ。	
第83図 PL.74	25	土師器 甕	中央北東床直~ +9、覆土 60%	口 高 底	B 2	細・粗・ガ/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り り。内面胴部はヘラナデ、中位は器面剥 離のため不明。	
第83図	26	土師器 甕	覆土 10%	口 高 底 5.9	B 1	細/にぶい赤褐/良好	底部と胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ 後放射状にヘラ磨き。	
第83図	27	土師器 甕	覆土 10%	口 高 底 5.2	B 1	細・粗・ガ/にぶい黄 橙/良好	底部はヘラ削り、胴部もヘラ削り、器面 磨滅のため単位など不明。内面はヘラナ デ。	
第83図 PL.74	28	石製品 砥石	覆土	長 15.2 重 62.5 幅 7.8			表裏面に多方向の線痕有。右辺に器体長 軸に直交する線痕有あり、弱い横を形成 中。	輝綠岩

29号住居

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第85図 PL.74	1	土師器 杯	F 1 中 98%	口 11.9 高 4.9 底	B 1	細/にぶい橙/良好・ 燻	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第85図	2	土師器 杯	覆土 20%	口 12.6 高 底	B 1	細/褐灰/良好・燻	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第85図	3	土師器 杯	覆土 20%	口 12.6 高 底	B 1	細/灰黄褐/良好・燻	口縁部横ナデ。体部(腋下)にナデ、そ の下方から底部は手持ちヘラ削り。	
第85図 PL.74	4	土師器 杯	覆土 40%	口 11.6 高 4.5 底	C 3	細/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第85図 PL.74	5	土師器 杯	覆土 65%	口 11.6 高 4.2 底	C 3	細/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第85図	6	土師器 杯	中央+10 20%	口 11.7 高 底	C 3	細/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第85図 PL.74	7	土師器 杯	中央+10、覆土 70%	口 11.9 高 4.1 底	C 3	細/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第85図 PL.74	8	土師器 杯	中央+13、覆土 60%	口 11.2 高 4.2 底	C 3	細/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第85図 PL.74	9	土師器 杯	中央+24、覆土 60%	口 12.7 高 4.7 底	C 3	細/橙/やや軟質	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第86図	10	土師器 杯	覆土 20%	口 12.7 高 底	B 1	細/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)にナデが残る。 その下方から底部は手持ちヘラ削り。	
第86図	11	土師器 杯	覆土 15%	口 12.8 高 底	C 1	細/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第86図 PL.74	12	土師器 杯	覆土 80%	口 12.8 高 4.4 底	C 1	細/橙/やや軟質	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第86図	13	土師器 杯	覆土 20%	口 12.8 高 底	B 1	細・ガ/にぶい赤褐/ 良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第86図	14	土師器 杯	北西部+42、覆土 30%	口 13.2 高 3.9 底	B 1	細・砂岩/褐灰/良好・ 燻	口縁部横ナデ。体部(腋下)にナデ、そ の下方から底部は手持ちヘラ削り。	
第86図 PL.74	15	土師器 杯	北部+3 40%	口 13.6 高 4.5 底	B 1	細・ガ/褐灰/良好・ 燻	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。口唇端部に凹線が通る。	
第86図	16	土師器 杯	覆土 50%	口 13.8 高 4.0 底	B 1	細・ガ/灰黄褐/良好・ 燻	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	

第36表 遺物観察表(20)

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第86図	17	土師器 土環	覆土 15%	口 底 17.6 高	B 1	黒・ガ/褐灰/良好・ 焼	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第86図 PL.74	18	土師器 大型環	南壁際中央+4、覆 土 80%	口 底 17.8 高 7.3	B 1	黒/褐灰/良好・焼	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへラ削り。内面は口縁部から体部 まで横ナデ。底部はナデ。	1号型穴状遺構 2と接合する。
第86図 PL.74	19	土師器 土環	覆土 75%	口 底 11.8 高 7.1	B 1	黒/赤褐/良好・焼か	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへラ削り。口唇部に凹線が通る。	有段口縁部境
第86図	20	土師器 土環	覆土 20%	口 底 14.8 高	C 3	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ。体部は手持ちへラ削り。	
第86図	21	土師器 土環	覆土 15%	口 底 23.4 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	口唇部横ナデ。口縁部から体部は手持ち へラ削り。内面は体部がへラナデ。	
第86図	22	土師器 土高環	覆土 10%	口 底 18.2 高	B 1	黒・ガ/橙/良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ。底部は手 持ちへラ削り。内面は波状放射状へラ磨 き。	
第86図	23	土師器 土高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒・粗/ガ/にぶい橙 /良好	脚部はへラ削り。内面はへラナデ。	
第86図	24	土師器 土高環	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/淡橙/良好	内面赤色塗彩。環身は底部にホゾ状足 込みをもつ。頸部外面は器面磨滅のため 不明。内面はへラナデ。	
第86図	25	須恵器 土高環	北東部+63 覆土 25%	口 底 10.8 高	太田	黒/灰/還元焰	口クロ整形。回転右回り。脚部は貼付、 腰部に透孔が3カ所。	
第86図	26	須恵器 土高環	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口クロ整形。回転方向不明。脚部はカキ 目。透孔は2カ所か。	
第86図 PL.74	27	須恵器 鉢	覆土 20%	口 底 14.0 高 8.8 7.0	B 1	黒・粗/角閃/灰/還 元焰	口クロ整形。回転左回りか。底部から胴 部下位は回転へラ削り。中位から口縁部 はカキ目。	
第86図	28	須恵器 煎	覆土 1%	口 底 高	太田	黒/灰/還元焰	口クロ整形。回転方向不明。頸部は波状 文が通る。	
第86図	29	須恵器 土環	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口クロ整形。胴部は頸部周囲が回転へラ 削り。その下位はカキ目。中位に波状文 が通る。	
第86図	30	土師器 土高環	中央+26、覆土 5%	口 底 16.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削 り。内面胴部はへラナデ。	
第86図	31	土師器 小型環	覆土 5%	口 底 13.8 高	B 2	黒/淡橙/良好	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第86図	32	土師器 土高環	南部+42、覆土 10%	口 底 19.2 高	D 1	黒/にぶい黄橙/良好	外面に輪軸みねが残る。口縁部は横ナデ、 胴部から上位は赤中位はへラナデ。内 面胴部はへラナデ。	
第87図 PL.74	33	土師器 土高環	覆土 15%	口 底 19.8 高	A	黒・粗/にぶい黄褐/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削 り。内面胴部はへラナデ。	
第87図 PL.74	34	土師器 土高環	南部+6、+9、38注 覆土 25%	口 底 19.6 高	B 2	黒・ガ/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削 り。内面胴部はへラナデ。	
第87図 PL.74	35	土師器 土高環	南部+1 ~ +5、覆 土 70%	口 底 20.6 高	B 1	黒・粗/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削 り。内面は胴部上位と中位がへラナデ、 器面磨滅のため単位不詳。下位はハケ 目。	
第87図	36	土師器 土高環	覆土 5%	口 底 21.8 高	B 1	黒・粗/にぶい橙/良 好	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第87図	37	土師器 土高環	南部+1 ~ +10 覆土 30%	口 底 高	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良 好	頸部は横ナデ。胴部はへラ削り。下半は 粘土付着のため単位不明。内面はへラナ デ。	
第87図	38	須恵器 土高環	覆土 3%	口 底 高	B 1	黒/灰白/還元焰	胴部は平行叩き前後一部にナデ。内面は 同心円状アテ具痕が残る。	
第87図	39	須恵器 土高環	覆土 3%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	外面は平行叩き前、内面は同心円状アテ 具痕が残る。	
第87図 PL.75	40	石製品 砥石		長 7.8 重 160.6 幅 4.5			南側面に幅2mm・深さ1.5mmを測る刃なら し。使用過程で中央付近で欠損。砥石面 は整形され、継続使用されている。	砥石
第87図 PL.75	41	鉄製品 鉄鏝	北東部+42 20%	長 6.9 厚 0.6 0.7 重 4.2			刃部から頸部の上半を欠損。頸部と茎部 の境に小突起を作る。表面の錆化が進ん でいる。	
第87図 PL.75	42	鉄製品 紡錘車	覆土 60%	径 2.9 幅 0.6 長 4.1 重 30.3			軸の大部分を欠損。表面の錆化は激しい が、内面は比較的良好な残存状態である。	

30号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第89図	1	土師器 土環	覆土 30%	口 底 10.2 高 3.2	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ち へラ削り。	
第89図 PL.75	2	土師器 土環	窟左+3、覆土 98%	口 底 10.6 高 3.3	D 2	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部上平ナデ、下半から 底部は手持ちへラ削り。	
第89図 PL.75	3	土師器 土環	覆土 50%	口 底 11.4 高	B 1	黒・粗少/にぶい橙/ 良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第89図 PL.75	4	土師器 土環	覆土 90%	口 底 12.7 高 4.0	B 1	黒/にぶい橙/良好・ 焼	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへラ削り。	内外面とも漆塗り。
第89図 PL.75	5	土師器 土環	覆土 75%	口 底 12.8 高 4.3	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は 手持ちへラ削り。	内外面とも漆塗り。

遺物観察表

第37表 遺物観察表(21)

挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第89図	6	土師器 環	覆上 15%	口 底 12.8 高	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第89図	7	土師器 環	覆上 10%	口 底 15.6 高	B 1	黒/灰黄褐/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第89図	8	土師器 環	覆上 25%	口 底 12.4 高	B 2	黒・ガ/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第89図 PL.75	9	土師器 環	覆上 60%	口 底 13.4 高 5.1	E	黒・粗/明黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第89図 PL.75	10	土師器 環	覆上 80%	口 底 13.7 高 5.5	D 2	黒多/橙/良好	口縁部横ナデ、体部上平ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。口縁部下位に2条の凹線が通る。	
第89図	11	土師器 環	覆上 20%	口 底 14.6 高	B 1	黒・ガ/褐灰/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第89図 PL.75	12	土師器 環	覆上 50%	口 底 13.6 高 4.1	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第89図	13	土師器 環	覆上 30%	口 底 9.6 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第89図 PL.75	14	土師器 環	覆上 25%	口 底 11.6 高	B 1	黒・細粒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第89図 PL.75	15	土師器 高環	覆上 25%	口 底 16.6 高	B 1	黒・ガ/明赤褐/良好	内面黒色染焼。口縁部横ナデ、底部(横下)は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラ磨き。	
第89図	16	須恵器 環H蓋	覆上 10%	口 底 12.8 高	太田	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。回転方向不明。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第89図	17	須恵器 環G蓋	覆上 15%	口 底 9.8 高	推入品 表面	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。回転方向不明。	
第89図	18	須恵器 高環	覆上 10%	口 底 高	太田?	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。回転方向不明。脚部はカキ目。透孔が3カ所。	
第89図	19	須恵器 長頸壺	覆上 3%	口 底 7.8 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。回転方向不明。口縁部は全面にカキ目後段の波状文。	
第89図	20	須恵器 壺	覆上 3%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。口縁部中位に凹線。凹線の上下に波状文が通る。	
第89図	21	須恵器 壺	覆上 3%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。胴部は凹線と凹線下に刺突文が通る。	
第89図	22	須恵器 平瓶	覆上 3%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。底部から胴部はカキ目。	
第89図	23	土師器 鉢	覆上 40%	口 底 9.0 高	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)と底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部がヘラナデ。	
第90図 PL.75	24	土師器 甕	甕前床直。覆上 95%	口 底 21.0 高 34.3 4.4	B 1	黒・粗/褐粒/にぶい橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第90図 PL.75	25	須恵器 甕	覆上 3%	口 底 高	B 1	黒/灰白/還元焰	ロクロ整形。口縁部は凹線による区画、区画内に波状文が通る。	
第90図 PL.75	26	石製品 蔵石	覆上	長 幅 18.5 重 587.2 5.4			小口部の両端に敲打痕・衝撃剝離痕。	粗粒輝石安山岩
31号住居								
挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第91図 PL.75	1	土師器 環	甕内 98%	口 底 10.9 高 3.9	C 3	黒・長石/淡橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	2	土師器 環	甕左袖上	口 底 11.3 高 4.1	C 1	黒・白粒/淡橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	3	土師器 環	甕左前 95%	口 底 13.4 高 4.4	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図	4	土師器 環	覆上 30%	口 底 11.4 高 2.9	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	5	土師器 環	覆上 50%	口 底 11.8 高 3.4	C 3	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	6	土師器 環	東壁厚床直	口 底 12.5 高 3.9	C 1	黒/淡橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	7	土師器 環	北壁厚床直	口 底 12.6 高 3.7	C 3	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	8	土師器 環	覆上 45%	口 底 16.7 高	C 3	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	9	土師器 環	甕左、壺横	口 底 12.4 高 4.4	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第91図 PL.75	10	土師器 環	甕 70%	口 底 12.8 高 4.7	C 1	黒/淡橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第92図	11	土師器 環	覆上	口 底 13.0 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第92図 PL.75	12	土師器 環	覆上 30%	口 底 10.3 高 3.9	B 1	黒・粗・角閃/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。器面磨滅のため単位不明。	
第92図	13	土師器 環	覆上 35%	口 底 10.4 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	

第38表 遺物観察表(22)

挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第92図	14	土師器 覆土 環	覆土 30%	口 底 10.8 高 3.3	C 1	細・ガ/にぶい赤褐/ 良好	口唇部は横ナデ、口縁部、体部から底部 は手持ちヘラ削り。	
第92図	15	土師器 覆土 環	覆土 25%	口 底 11.6 高 3.6	B 1	細・粗/にぶい赤褐/ 良好	口唇部は横ナデ、口縁部はナデ、体部か ら底部は手持ちヘラ削り。	
第92図	16	土師器 覆土 環	覆土 15%	口 底 15.0 高	B 1	細・粗・角閃/粗/良 好	口唇部は横ナデ、口縁部、体部から底部 は手持ちヘラ削り。	
第92図	17	土師器 覆土 環	覆土 35%	口 底 17.2 高	C 1	粗/粗/良好	口唇部は横ナデ、口縁部、体部から底部 は手持ちヘラ削り。	
第92図 PL.76	18	土師器 覆土 高環	覆土 20%	口 底 12.2 高	B 2	粗/にぶい黄褐/良好	内面に輪積み痕が残る。脚部はヘラ削り、 頸部は横ナデ。内面脚部はヘラナデ。	
第92図 PL.76	19	土師器 覆土 高環	覆土 45%	口 底 15.0 高	B 2	細・粗・角閃・褐粒/ 浅黄褐/良好	内面に輪積み痕が残る。脚部ヘラ削り、 頸部横ナデ後縦位のヘラ磨き。内面は脚 部がヘラナデ。	
第92図	20	土師器 覆土 高環	覆土 15%	口 底 高	B 1	細・粗/にぶい粗/良 好	环身底部にホゾ状差込みあり。环身底 部から脚部はヘラ削り。内面は脚部がナ デ。	
第92図	21	土師器 覆土 高環	覆土 15%	口 底 高	B 1	粗/灰黄/良好	外面は赤色塗彩。脚部はナデ、頸部は横 ナデ。内面も同様。	脚部中に貫通 しない小孔あ り。
第92図	22	土師器 覆土 鉢	覆土 5%	口 底 13.1 高	B 1	粗/にぶい黄褐/良好	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り、 内面体部はヘラナデ。	
第92図 PL.76	23	須恵器 覆土 横瓶	覆土 70%	口 底 11.6 高 29.6	B 1	粗/灰/還元焰	口縁部口ロク整形、内面の下半はヘラナ デ。胴部は外面が平行甲斐後開閉をあけ てカキ目。内面は同心円状アテ具痕が かすかに残る。	幅33.2cm、24.5 cm
第93図	24	須恵器 覆土 短頸壺	覆土 20%	口 底 14.0 高	B 1	細・褐粒/明黄褐/酸 化塩気味	口ロク整形、回転右回り。胴部は手持 ちヘラ削り、肩に1本の凹線が通る。	
第93図 PL.76	25	土師器 覆土 甕	甕左床直 98%	口 底 12.6 高 17.4 5.4	B 1	細・ガ/粗/良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、 内面は底部から胴部がヘラナデ。	底部穿孔は焼成 後。
第93図 PL.76	26	土師器 覆土 台付甕	甕左床直 98%	口 底 10.8 高 13.0 9.3	B 2	細・ガ/にぶい黄褐/ 良好	脚部は貼付、口縁部と頸部は横ナデ、脚 部から脚部はヘラ削り。内面は胴部と 脚部がヘラナデ。	
第93図 PL.76	27	土師器 覆土 小型甕	甕左床直 95%	口 底 11.4 高 10.5 6.0	B 1	細・ガ/浅黄褐/良好	口縁部横ナデ、胴部上位と中位はナデ、 下位から底部は手持ちヘラ削り。内面 は底部から胴部がヘラナデ。	
第93図 PL.76	28	土師器 覆土 小型甕	甕左床直 98%	口 底 11.4 高 12.7 6.0	B 2	細・粗・角閃・ガ/粗 /良好	外面胴部中位に輪積み痕が残る。口縁部 から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削 り。内面は底部と胴部がヘラナデ。	
第93図 PL.76	29	土師器 覆土 甕	甕内床直 98%	口 底 15.6 高 28.1 7.1	B 2	粗/にぶい黄褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、 内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第93図 PL.76	30	土師器 覆土 甕	甕口床直 95%	口 底 16.1 高 4.4	B 2	細・粗・ガ/淡黄/良 好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り後部分的にヘラ磨き。内面胴部はヘラ ナデ。	胴部下半は全体 的に煤けてい る。
第93図 PL.77	31	土師器 覆土 甕	甕左袖 75%	口 底 20.4 高 33.5 7.8	B 2	細・粗・角閃/粗/良 好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り後鋭なヘラ磨き、底部はヘラ削り。内 面は底部から胴部がヘラナデ。	
第94図 PL.77	32	土師器 覆土 甕	甕前床直、甕内 95%	口 底 20.5 高 37.9 4.2	B 1	細・褐粒/にぶい黄褐 /良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り、下位から底部は器面磨減のため不 明。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第94図 PL.77	33	土師器 覆土 甕	甕右袖、甕内 98%	口 底 17.1 高	B 1	細・粗・角閃・ガ/浅 黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
32号住居								
挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第95図	1	土師器 覆土 環	甕東壁床直 20%	口 底 13.0 高	B 1	細・ガ/褐灰/良好・ 焼	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第95図 PL.77	2	土師器 覆土 環	貯蔵穴-3 95%	口 底 12.9 高 4.3	B 1	粗/灰黄褐/良好・ 焼	口縁部は横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り、器面磨減・割離のため単位不 明。	
第95図 PL.77	3	土師器 覆土 環	甕右床直 95%	口 底 13.2 高 4.0	B 1	粗多/粗/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第95図 PL.77	4	土師器 覆土 環	甕東壁床直 98%	口 底 13.3 高 4.4	B 1	粗/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第95図 PL.77	5	土師器 覆土 環	甕東壁+2、 甕上 70%	口 底 11.7 高 4.6	C 1	細・褐粒/粗/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第95図 PL.77	6	土師器 覆土 環	甕東壁床直 98%	口 底 12.1 高 4.8	C 1	細・褐粒・角閃/粗/ やや軟質	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り、器面磨減のため単位不 明。	
第95図 PL.77	7	土師器 覆土 環	甕左+1 98%	口 底 12.3 高 4.5	C 1	細・粗・長石/粗/や や軟質	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り、器面磨減のため単位不 明。	
第95図	8	土師器 覆土 環	内部+13 15%	口 底 14.8 高	C 3	粗/粗/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第95図 PL.77	9	土師器 覆土 環	甕東壁床直 95%	口 底 14.2 高 4.8	B 1	細・粗・白粒/にぶい 黄褐/良好・焼	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体 部から底部は手持ちヘラ削り。	

遺物観察表

第39表 遺物観察表(23)

神原番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第95図 PL.77	10	土師器 高環	東壁際-4 98%	口 底 17.4 高 18.1 13.6	B 1	黒・ガ/褐粒/粗/良 好	坯身内面は黒色処理。口縁部と裾部は横ナデ。体部上半ナデ。下半から底部は手持ちへラ削り。脚部はへラ磨き。内面は坯身部がへラ磨き、脚部はへラ削り。	
第95図 PL.77	11	土師器 高環?	覆土 15%	口 底 15.8 高	B 3	黒・粗/角閃/赤褐/ 良好	脚部はへラ削り、裾部は横ナデ。内面は脚部上半がへラナデ、下半がへラ削り、裾部は横ナデ。	
第95図 PL.78	12	土師器 鉢	西部+4 10%	口 底 15.0 高	C 3	黒/粗/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第95図 PL.78	13	土師器 小型壺	南部+3、覆土 70%	口 底 6.2 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄褐/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部と底部はへラ削り。内面は底部から胴部がへラナデか。	
第95図 PL.78	14	土師器 高環?	北壁際+2、南西部 +12 15%	口 底 高	A	黒・粗/角閃・黒雲母? にぶい赤褐/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。胴部は外面がへラ削り、内面はへラナデ。	外面胴部下半の一部に粘土付着。
第96図 PL.78	15	土師器 壺	北西隅床直、覆土 15%	口 底 16.0 高	C 1	黒/粗/良好	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第96図 PL.78	16	土師器 壺	南部+4、覆土 35%	口 底 7.8 高	B 1	黒・粗/角閃・ガ/に ぶい粗/良好	内面胴部の中心に輪積み痕が残る。底部と胴部はへラ削り。内面はへラナデ、胴部上半は器面剥落のため不鮮明。	
33号住居								
神原番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第97図 PL.78	1	土師器 環	北東壁際+4 80%	口 底 13.1 高 4.3	B 1	黒・ガ/明赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。内面は斜射状へラ磨き(暗文状)。	
第97図 PL.78	2	須恵器 環蓋	壺内+20 70%	口 底 15.8 高 5.6	B 1	黒・粗/灰/還元焰	口縁部整形、回転左回り。天井部は中ほどまで回転へラ削り。	天井部へラ磨き。
第97図 PL.78	3	須恵器 環蓋	北西部+22 50%	口 底 高	B 1	黒・粗/角閃/灰/還 元焰	口縁部整形、回転左回り。天井部は中ほどまで回転へラ削り。	天井部へラ磨き。
第97図 PL.78	4	須恵器 環蓋	覆土 3%	口 底 高	太田?	黒/灰/還元焰	口縁部整形、回転方向不明。天井部は回転へラ削り。	天井部へラ磨き。
第97図 PL.78	5	土師器 壺	壺右床直、北部 +23 5%	口 底 高	B 1	黒・粗/白粒/灰黄褐/ 良好	胴部は外面がへラ削り、内面はへラナデ。	
第97図 PL.78	6	須恵器 壺	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口縁部整形、回転方向不明。口縁部に波状文が流る。	
第97図 PL.78	7	須恵器 壺	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒・黒粒/灰/還元焰	外面は平行明き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
34号住居								
神原番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第98図 PL.78	1	土師器 環	北西部+16 35%	口 底 11.0 高 4.3	B 1	黒・粗/角閃/灰黄褐/ 良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	2	土師器 環	覆土 30%	口 底 11.8 高	D 2	粗・褐色/明黄褐/良 好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	3	土師器 環	覆土 35%	口 底 12.1 高 4.2	B 1	黒・ガ/灰黄褐/良好・ 煙か	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	4	土師器 環	東部-7 60%	口 底 12.4 高 4.2	B 1	黒・粗・褐粒/灰黄褐/ 良好・煙か	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	5	土師器 環	北東部+5、覆土 85%	口 底 12.7 高 3.7	B 1	黒・赤粒/にぶい橙/ 良好	口縁部黒色処理。口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	6	土師器 環	北東部-11 25%	口 底 12.0 高	C 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	7	土師器 環	覆土 25%	口 底 13.6 高	B 1	黒・ガ/灰褐/良好・ 外煙か	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。内面底部はへラナデ。	
第98図 PL.78	8	土師器 環	覆土 40%	口 底 13.8 高 4.2	C 3	黒・粗粒/粗/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	9	土師器 環	南部+21 95%	口 底 14.2 高 4.3	B 1	黒/にぶい黄褐/良 好・煙か	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	10	土師器 大型環	北東部-7 30%	口 底 17.0 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄褐/ 良好・外煙	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	11	土師器 大型環	中央+7、覆土 35%	口 底 17.8 高	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/ 良好・煙か	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへラ削り。	
第98図 PL.78	12	土師器 高環	北東隅+5 20%	口 底 14.0 高	B 1	黒・粗・ガ/粗/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。脚部はへラ削り、裾部は横ナデ。内面はへラナデ。	
第98図 PL.78	13	土師器 高環	覆土 5%	口 底 17.8 高	C 3	黒/粗/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。脚部は履位のへラ磨き、裾部は横ナデ。内面はへラナデ。	
第98図 PL.78	14	土師器 高環	東部-10 10%	口 底 高	B 1	黒・粗/角閃/にぶい 黄褐/良好	坯身底部はへラナデ、脚部はへラ削り。内面は脚部がナデ。	
第98図 PL.78	15	土師器 高環	北東部-24 30%	口 底 高	B 1	黒・ガ/粗/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。脚部はへラ削り、裾部は横ナデ。内面はへラナデ。	
第99図 PL.78	16	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/粗/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。脚部は履位のへラ磨き、裾部は横ナデ。内面はへラナデ。	

第40表 遺物観察表(24)

挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第99図	17	須恵器 環日身	覆土 5%	口底 高	B 1	黒/灰白/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。蓋受け径12.8cm。	
第99図	18	須恵器 高環	覆土 3%	口底 11.6 高		黒/灰白/還元焼	ロクロ整形。回転右回りか。	
第99図	19	須恵器 瓶	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焼	把手は胴部に貼付、外面はナデ。	
第99図	20	土師器 瓶	北東部-2 25%	口底 9.0 高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 黄橙/良好	胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデと底部上はへら削り。	
第99図	21	土師器 甕	中央+9、+19 10%	口底 16.0 高	B 1	黒・ガ/白粒/にぶい 黄橙/良好	内外面に輪轆み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、上位はナデ消されている。内面胴部はへらナデ。	
第99図	22	土師器 甕	覆土 5%	口底 19.4 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第99図	23	須恵器 瓶	覆土 1%	口底 高	太田	黒・粗/暗灰/還元焼	底部外面はカキ目、内面はアテ具痕が残る。底部の一部に黄白の須恵器片が付着。	
35号住居								
挿入番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第100図	1	土師器 環	覆土 20%	口底 11.6 高 4.4	B 1	黒・粗多/にぶい黄橙 /良好	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面底部はへらナデ。	
第100図 PL.78	2	土師器 環	覆土 30%	口底 11.7 高 4.8	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/ 良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。口唇部部に凹線が通る。	
第100図 PL.78	3	土師器 環	南西部+10 75%	口底 11.8 高 4.3	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/ 良好・煙	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	外面の一部に煤が付着。
第100図	4	土師器 環	覆土 20%	口底 12.6 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第100図 PL.78	5	土師器 環	覆土 50%	口底 13.1 高 4.1	B 1	黒・白粒・ガ/明赤褐 /良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第100図 PL.78	6	土師器 環	覆土 50%	口底 13.2 高 4.8	B 1	粗・長石・角閃・ガ/ にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部上平ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	
第100図 PL.78	7	土師器 環	覆土 25%	口底 13.3 高 4.0	B 1	黒・白粒・雲母/赤褐 /良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部環
第100図 PL.78	8	土師器 環	覆土 30%	口底 14.6 高 3.8	B 1	黒・白粒・ガ/赤褐/ 良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部環
第100図	9	土師器 塊	覆土 20%	口底 12.6 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部塊
第100図 PL.78	10	土師器 高環	覆土 25%	口底 13.5 高	B 1	黒/橙/良好	内面黒色処理。外面口縁部に輪轆み痕が残る。口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削りか。内面は2段の斜射状へら磨き(暗文状)。	
第100図 PL.79	11	土師器 高環	北部+7、+8、覆土 30%	口底 18.0 高	B 1	黒・粗・角閃/橙/良 好	坯身内面は黒色処理。坯身口縁部は横ナデ、底部から脚部はへら削り。内面は坯身がへら磨き。	
第100図	12	土師器 高環	覆土 10%	口底 15.4 高	B 1	黒/明黄橙/良好	坯身口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第100図	13	土師器 高環	北東部+3 10%	口底 18.8 高	C 3	黒/橙/良好	坯身口縁部は横ナデ、底部はへらナデ。	
第100図	14	須恵器 環日蓋	覆土 20%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転右回りか。天井部中ほどは手持ちへら削りか。	
第100図	15	須恵器 高環?	覆土 3%	口底 12.8 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。	
第100図	16	須恵器 高環	覆土 10%	口底 18.8 高	B 1	黒・粗・角閃/灰/還 元焼	ロクロ整形。回転方向不明。底部は回転へら削り。体部に凹線が2条通る。	
第100図	17	須恵器 高環?	覆土 3%	口底 19.8 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。体部に凹線が2条通る。	
第100図	18	須恵器 高環	覆土 5%	口底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。脚部に透孔が3カ所。	
第100図	19	須恵器 高環	覆土 5%	口底 高	B 1	黒/にぶい赤褐/酸化 焼	ロクロ整形。回転右回りか。外面はカキ目。脚部に透孔3カ所。	
第100図	20	須恵器 壺	覆土 5%	口底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。頸部周囲は回転へら削り。	
第101図	21	須恵器 壺	P 7 覆土 5%	口底 高	B 1	黒/灰白/還元焼	ロクロ整形。回転右回りか。胴部中に波状文が通る。	
第101図	22	須恵器 壺	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。胴部上位に刺突文が通る。	
第101図	23	土師器 台付甕	覆土 10%	口底 高	B 1	黒・ガ/にぶい赤褐/ 良好	脚部は貼付。胴部と脚部はへら削り。内面は胴部と脚部ともへらナデ。	
第101図	24	土師器 甕	覆土 5%	口底 4.6 高	B 1	黒・粗多/橙/良好	底部には木葉痕が残る。胴部はへら削り。	
第101図	25	土師器 甕	覆土 10%	口底 6.3 高	B 1	黒/明赤褐/良好	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
第101図 PL.79	26	土師器 甕	覆土、 P 8 覆土 15%	口底 8.8 高	B 1	黒・ガ/橙/良好	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
第101図	27	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	外面は平行明き痕、内面は同心状アテ具痕が残る。	

遺物観察表

第41表 遺物観察表(25)

挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第101図	28	須恵器 甕	覆土 3%	口底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	外面は平行明き直後側面を削りあげたカキ目。内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第101図	29	須恵器 甕	覆土 3%	口底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	外面は平行明き直後一部にカキ目。内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第101図 PL-79	30	手捏丸 土	覆土 20%	口底 9.4 高 4.3 5.6	B 1	黒にぶい黄褐/やや軟質	口縁部横ナデ。体部と底部はナデ。	
36号住居								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第102図	1	土師器 環	北東部床直 10%	口底 15.6 高	B 1	黒/赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第102図 PL-79	2	土師器 短頸甕	覆土+6 25%	口底 10.3 高 6.0 5.6	B 1	黒・白粒/橙/良好	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ。胴部は上位ナデ。中位から底部はヘラ削り。内面は器面測地のため不明。	外面の一部に煤が付着。
第102図	3	土師器 甕	覆土 5%	口底 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
37号住居								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第103図 PL-79	1	土師器 環	中央+10 75%	口底 10.6 高 3.9	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第103図 PL-79	2	土師器 環	中央+16、覆土 40%	口底 12.1 高	B 1	黒にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第103図 PL-79	3	土師器 環	覆土 95%	口底 12.0 高 4.4	B 1	黒/明黄褐/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第103図 PL-79	4	土師器 環	竈前床直 35%	口底 10.8 高	B 1	黒/橙/良好	胴部は縦位のヘラ磨き。裾部は横ナデ。内面は器面がヘラ削り。	
第103図 PL-79	5	須恵器 環身	覆土 65%	口底 9.8 高 3.3	B 1	黒・長石/灰白/還元焼	口縁部整形。回転し回内。底部回転ヘラ削り。	
第103図 PL-79	6	須恵器 甕	中央+12、14位覆 土 30%	口底 高	B 1	黒・粗・白粒/暗灰/還元焼	口縁部整形。回転し回内。底部から胴部下位は回転ヘラ削り。	
第103図	7	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/褐灰/還元焼	口縁部整形。胴部上位に刺突文が透る。	
38号住居								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第105図	1	土師器 環	覆土 5%	口底 11.8 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第105図	2	土師器 環	覆土 15%	口底 13.9 高	B 1	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第105図	3	土師器 環	覆土 20%	口底 14.8 高	B 1	黒/褐灰/良好・焼	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第105図	4	土師器 環	覆土 10%	口底 11.8 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第105図	5	土師器 環	覆土 10%	口底 13.4 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第105図	6	土師器 高環	覆土 10%	口底 高	B 1	黒・白粒/明赤褐/良好	内面黒色処理。胴部はヘラ削り後縦な縦位のヘラ磨き。裾部は横ナデ。内面はヘラナデ。	
第105図	7	土師器 甕	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/橙/良好	口唇部は横ナデ。口縁部は縦位のハケ目(7本)後一部ナデ。内面は口縁部上位は横ナデ。中位から頸部は縦位のハケ目。	
第105図	8	土師器 甕	覆土 3%	口底 4.0 高	B 1	黒/橙/良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第105図	9	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	資料不 太田	黒・角四/灰/還元焼	外面は平行明き直が比較的明確に。内面は同心円状アテ具痕がわずかに残る。	
39号住居								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第106図	1	土師器 環	覆土 5%	口底 11.8 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第106図	2	土師器 環	覆土 5%	口底 13.8 高	B 1	黒/灰黄褐/良好・焼	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第106図	3	土師器 環	覆土 10%	口底 14.4 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第106図 PL-79	4	土師器 鉢	北東部+5、覆土 75%	口底 12.4 高 8.5	B 1	黒・粗粒多/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部がヘラナデか。	
第106図	5	土師器 甕	覆土 1%	口底 高	C 1	黒にぶい橙/軟質	器面磨滅のため整形不明。底部に径4mm前後の孔が数個あけられている。	

第42表 遺物観察表(26)

40号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第106図 PL-79	1	土師器 環	中央床直 70%	口 13.9 高 4.4 底	B 1	黒・ガ/橙/良好	口縁部横ナデ、椀下にナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第106図	2	土師器 環	中央床直、覆土 25%	口 14.4 高 4.8 底	C 1	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第106図 PL-79	3	土師器 有孔鉢	中央床直、覆土 85%	口 15.4 高 11.5 底	B 1	黒・ガ/白粒/にぶい 橙	内面黒色処理、外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面に放射状ヘラ磨き(暗文状)。	
第106図 PL-79	4	須恵器 ?蓋	中央床直 98%	口 15.2 高 4.8 底	B 1	黒・粗/角閃/灰/還元 焼	口縁部整形、口縁部は小凸帯による区画、外面には平行明さ痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第106図	5	須恵器 環	覆土 1%	口 高 底	B 1	黒・粗/灰白/還元焼	口縁部整形、口縁部は小凸帯による区画、区画の上下に波状文。	
第106図	6	須恵器 環	覆土 1%	口 高 底	乗附	黒/暗灰/還元焼	外面には平行明さ痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	

41号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第106図	1	土師器 環	覆土 3%	口 12.8 高 底	B 1	黒/灰黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第106図	2	土師器 環	覆土 10%	口 13.7 高 底	C 1	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。器面磨滅のため単位不詳。	
第106図	3	土師器 環	覆土 3%	口 13.8 高 底	B 1	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第106図	4	須恵器 環	覆土 1%	口 高 底	B 1	黒・粗/灰黄褐/還元 焼	口縁部整形、小凸帯による区画、区画内に波状文。	

42号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第109図	1	土師器 環	覆土 35%	口 9.4 高 3.0 底	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	2	土師器 環	覆土 60%	口 10.0 高 底	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	3	土師器 環	覆土 75%	口 10.1 高 3.0 底	E	黒・ガ/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	4	土師器 環	南東壁際+15	口 10.4 高 3.3 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	5	土師器 環	覆土 50%	口 10.4 高 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図	6	土師器 環	覆土 40%	口 10.6 高 2.9 底	C 3	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)にナデ部分があり、その下位から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	7	土師器 環	覆土 70%	口 10.8 高 3.4 底	E	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図	8	土師器 環	覆土 30%	口 10.8 高 底	C 3	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図	9	土師器 環	覆土 50%	口 10.8 高 3.1 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図	10	土師器 環	覆土 40%	口 10.9 高 2.8 底	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	11	土師器 環	北隣+16、覆土	口 11.3 高 3.3 底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	12	土師器 環	覆土 50%	口 11.4 高 3.5 底	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図	13	土師器 環	北隣	口 11.4 高 3.0 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	14	土師器 環	覆土 95%	口 11.6 高 3.6 底	B 1	黒・角閃/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	15	土師器 環	北隣+55、掘方	口 15.3 高 6.2 底	C 3	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	16	土師器 環	中央北 85%	口 10.5 高 3.2 底	C 3	黒/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図	17	土師器 環	覆土 25%	口 10.6 高 底	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-79	18	土師器 環	覆土 90%	口 11.7 高 3.3 底	D 2	黒・長石/明赤褐/良 好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。体部上半の一部にナデが残る。	
第109図 PL-79	19	土師器 環	覆土 70%	口 12.8 高 4.2 底	D 2	黒・長石/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第109図 PL-80	20	土師器 環	北部+20、覆土 85%	口 12.2×14.2 高 4.2 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	肉状
第109図 PL-80	21	土師器 環	北隣+16、覆土	口 14.7 高 5.6 底	C 3	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	赤みが濃い。
第109図 PL-80	22	土師器 環	南東壁際+1、覆土 75%	口 15.5 高 5.5 底	B 1	黒・角閃/橙/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	

遺物観察表

第43表 遺物観察表(27)

検出番号 写真図版	NO.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第109図 PL.80	23	土師器 環	甕方 60%	口 底 14.8 高 5.3	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちへり削り、底部は器面磨滅のため単位不明。	
第109図 PL.80	24	土師器 環	甕上 50%	口 底 17.2 高	B 1	黒・粗・長石/明赤褐/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへり削り。	
第109図 PL.80	25	土師器 高環	甕上 高環 40%	口 底 23.0 高 11.6 15.2	C 3	黒/橙/良好	坏身と脚部は接合。坏身口縁部と頸部は横ナデ、坏身底部と脚部はへり削り。内面脚部はへり削り。	
第109図 PL.80	26	土師器 鉢	甕上 20%	口 底 30.7 高	B 1	黒多/にぶい黄褐/良好	口縁部は横ナデ、体部は手持ちへり削り。	
第109図 PL.80	27	土師器 高環	甕上 25%	口 底 5.8 高	B 1	黒/橙/良好	坏身から脚部はへり削り、頸部は横ナデ、内面脚部はナデ。	
第109図 PL.80	28	土師器 高環	北隣+18 高環	口 底 12.0 高	B 1	黒・粗・ガ/にぶい赤褐/良好	坏身から脚部はへり削り、頸部は横ナデ、内面は脚部がへり削り、脚部はへり削り。	
第109図 PL.80	29	須恵器 杯	西部床直 杯蓋 98%	口 底 9.5 高 3.5	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転へり削り。	
第109図 PL.80	30	須恵器 杯	北隣甕方 杯身蓋 100%	口 底 10.9 高 3.0	B 1	黒・粗・角四・黒煎/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転へり削り。	
第110図 PL.80	31	須恵器 杯	甕上 杯身蓋 75%	口 底 11.0 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転へり削り。	
第110図 PL.80	32	須恵器 杯	甕上 杯身蓋 45%	口 底 10.9 高 3.1	太田	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回り。天井部はへり削り。	
第110図 PL.80	33	須恵器 杯	甕上 杯身蓋 20%	口 底 11.9 高	太田	黒/灰白/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は回転へり削り。	
第110図 PL.80	34	須恵器 杯	甕上 杯身蓋 20%	口 底 10.0 高	B 1	ロクロ整形、回転右回りか。底部から体部下半は手持ちへり削り。		
第110図 PL.80	35	須恵器 杯	甕上 杯身蓋 30%	口 底 10.5 高 3.0	太田	ロクロ整形、回転右回りか。底部から体部下半は手持ちへり削り。		
第110図 PL.80	36	須恵器 杯	甕上 杯蓋 40%	口 底 7.6 高	B 1	ロクロ整形、回転右回り。筒みは貼付、天井部は中ほどまで回転へり削り。		
第110図 PL.80	37	須恵器 平盤	甕上 平盤 35%	口 底 高	瀬入品 東海	ロクロ整形、回転右回りか。底部から胴部下半は回転へり削り。胴部天井部にボタン状小皿を貼付。上半は降灰が付着。		
第110図	38	須恵器 長頸壺	甕上 5%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。胴部は肩より下位に回転へり削り。	
第110図	39	須恵器 壺	甕上 3%	口 底 14.8 高	B 1	黒/暗灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部に波状文。	
第110図	40	須恵器 壺	甕上 3%	口 底 15.8 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。	
第110図 PL.80	41	土師器 台付甕	甕右+2 台付甕 60%	口 底 13.8 高 17.7 11.3	B 1	黒・ガ/明赤褐/良好	脚部は貼付。口縁部と頸部は横ナデ、頸部はナデ、胴部から脚部はへり削り。内面は底部から胴部がへり削り。	
第110図 PL.80	42	土師器 甕	甕右+3 甕 98%	口 底 13.8 高 18.5 5.6	B 1	黒・ガ/橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへり削り。内面胴部はへり削り。	
第110図 PL.80	43	土師器 甕	甕左床直、甕上 甕 85%	口 底 18.1 高 24.0 3.0	B 1	黒多・褐粒/橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへり削り。内面は底部から胴部がへり削り。	
第110図	44	土師器 甕	甕上 10%	口 底 15.8 高	B 1	黒多/灰黄褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへり削り。内面胴部はへり削り。	
第110図 PL.80	45	土師器 甕	東隣+5、+23、甕上 30%	口 底 22.0 高	B 1	黒・粗・ガ・褐粒/にぶい黄褐/良好	外面胴部に輪轆み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はへり削り。内面胴部はへり削り。	外面胴部にごろに粘土付着。
第111図	46	土師器 甕	甕上 30%	口 底 12.3 高	B 1	黒・粗・ガ・角四/にぶい黄褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへり削り。内面胴部はへり削り。	
第111図	47	土師器 甕	甕上 20%	口 底 14.1 高	B 1	黒・粗・ガ/にぶい黄褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへり削り。器面磨滅のため単位不明。内面胴部はへり削り。	
第111図 PL.80	48	土師器 甕	甕右+13、甕上 30%	口 底 4.6 高	A	黒/にぶい橙/良好	胴部と底部はへり削り。内面はへり削り。	
第111図 PL.80	49	須恵器 甕	甕上 5%	口 底 20.8 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。口唇部に凹線と口縁部に波状文が巡る。	内面口縁部に「十」のへり書き。
第111図	50	須恵器 甕	甕上 3%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焼	胴部は外面が平行引き後凹線をおけてカキ目、内面は同心円状ア字具痕が残る。	
第111図	51	須恵器 甕	甕上 3%	口 底 高	B 1	黒/灰黄褐/還元焼	胴部は外面が平行引き後凹線をおけてカキ目、内面は同心円状ア字具痕が残る。	
第111図	52	瀬輪 円筒	甕上 1%	口 底 高	B 1	粗・褐粒/橙/良好	内面に輪轆み痕が残る。外面は縦位のハケ目(1cm当たり6本)。	
第111図	53	瀬輪 円筒	甕上 1%	口 底 高	B 1	黒/橙/良好	内面に輪轆み痕が残る。外面は縦位のハケ目(1cm当たり6本)。	
第111図 PL.80	54	石製品 敲石	東隣+25	長 幅 12.5 重 588.8 6.0			鎌が四分割したものをを用いる。分割面が摩耗、分割線の状態で河床から採取、その鎌を激しく敲打。鎌面は摩耗して部分的に光沢を帯びる。	珪質頁岩

第44表 遺物観察表(28)

43号住居

探検番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第112図	1	土師器 環	壺内5%	口 底 8.8 高	B 1	細/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	歪みあり
第112図	2	土師器 環	掘方3%	口 底 15.7 高	B 1	細/明赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	歪みあり
第112図	3	土師器 環	壺内1%	口 底 26.5 高	B 1	細/黄橙/良好	口縁部は横ナデ。	
第112図 PL.81	4	土師器 環	壺内1、壺前-1、 北西部-3、壺内、 掘方 5%	口 底 高	B 1	細・ガ/にふい橙/良 好	胴部は外面がへラ削り、内面はへラナデ。	内外面の一部に 靨が付着。
第112図 PL.81	5	土師器 環	壺前-1～+3、壺 内10%	口 底 高	B 1	細・ガ/にふい赤褐/ 良好	胴部は外面がへラ削り、内面はへラナデ。	
第112図	6	土師器 環	壺内5%	口 底 4.3 高	B 1	細/明赤褐/良好	底部・胴部ともへラ削り。内面はへラナ デ。	

44号住居

探検番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第113図 PL.81	1	土師器 環	南西部+14、覆土 85%	口 底 14.1 高 5.6	B 1	細・粗・ガ/灰黄褐/ 良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ。体部(腋下) から底部は手持ちへラ削り。内面は口縁 部が横位、底部から体部が放射状へラ磨 き。	
第113図 PL.81	2	土師器 環	覆土 50%	口 底 14.6 高 4.9	B 1	細・ガ/にふい黄橙/ 良好	内外面とも黒色処理。口縁部は縦位のへ ラ磨き、体部(腋下)から底部は手持ち へラ削り。内面は全面へラ磨き。	
第114図 短頭蓋	3	須恵器	P 4上+15、覆土 35%	口 底 10.8 高	B 1	細/灰/還元焼	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第114図 PL.81	4	土師器 環	覆土 25%	口 底 14.6 高	B 1	細・粗・褐粒/にふい 黄橙/良好	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第114図 PL.81	5	土師器 環	覆土 20%	口 底 5.0 高	B 1	細・粗/角内/にふい赤 褐/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。胴部と底部 はへラ削り。内面はへラナデ。	
第114図 PL.81	6	土師器 環	北西部+16、覆土 20%	口 底 7.0 高	B 1	細/にふい橙/良好	胴部と底部はへラ削り。内面はへラナデ。	
第114図	7	土師器 環	覆土 3%	口 底 7.2 高	B 2	細/にふい黄橙/良好	胴部はハケ目か、底部はへラ削り。内面 はハケ目(10)。	
第114図	8	土師器 環	覆土 1%	口 底 7.5 高	B 1	細・褐粒/にふい赤褐/ 良好	底部は木葉痕が残る。内面はへラナデ。	

45号住居

探検番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第115図 PL.81	1	土師器 環	南東隅+16 100%	口 底 10.3 高 2.9	B 1	細/明黄褐/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ち へラ削り。	
第115図 PL.81	2	土師器 環	南東隅環+4	口 底 10.3 高 3.3	B 1	細/橙/良好	口縁部は上半が横ナデ。下半がナデ。体 部から底部は手持ちへラ削り。	口縁部に焼成後 の穿孔あり。
第115図 PL.81	3	須恵器	北隅+3、+4、覆土 95%	口 底 11.8 高 3.6	B 1	細・黒斑/灰白/還元 焼	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。天井部 は中までは回転へラ削り。	
第116図 PL.81	4	須恵器 脚環	南東部床直、42住 環+ 85%	口 底 14.2 高 11.2 11.7	搬入?	細/灰/還元焼	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。脚部 は貼付、残部は回転へラ削り。	
第115図	5	須恵器 瓶(通)	覆土 1%	口 底 高	B 1	細/灰/還元焼	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第115図 PL.82	6	土師器 環	壺前-1 25%	口 底 22.2 高	B 1	細・粗・褐粒/にふい 橙/良好	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第116図	7	土師器 環	中央+8 3%	口 底 23.2 高	A	細・粗・ガ・チ・褐粒 /にふい橙/良好	口縁部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面 胴部はへラナデ。	
第116図 PL.81	8	土師器 環	壺内-2 20%	口 底 6.0 高	B 1	細・ガ/にふい黄橙/ 良好	底部はへラ削り。胴部はへラ削り。内面 はへラナデ。	
第116図	9	土師器 環	壺内-1、+2、壺内 20%	口 底 6.4 高	B 1	細・粗・角内・ガ/に ふい黄橙/良好	底部には木葉痕が残る。胴部はへラ削り。 内面はへラナデ。	
第116図	10	土製品 ボタン 状	覆土 98%	径 2.2 厚 0.6	B 1	夾雑物無/にふい黄橙 /良好	表面ともナデ。貼付痕は見られない。	

46号住居

探検番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第117図	1	土師器 環	覆土 40%	口 底 12.3 高	B 1	細・粗/にふい黄橙/ 良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第117図 PL.82	2	土師器 環	覆土 30%	口 底 12.8 高	C 1	細・粗・褐粒/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第117図	3	土師器 環	覆土 40%	口 底 12.8 高	C 1	細・粗・褐粒/良好	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第117図	4	土師器 環	覆土 10%	口 底 13.2 高	B 1	細/赤褐/良好・焼	口縁部横ナデ。体部(腋下)から底部は 手持ちへラ削り。	
第117図	5	土師器 高杯	覆土 10%	口 底 高	B 1	細・粗/にふい黄褐/ 良好・杯内燻	杯身部とは貼付。脚部はへラ削り。内面 はナデ。	
第117図	6	土師器 鉢	覆土 20%	口 底 15.4 高	C 1	細・褐粒/橙/良好	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は 横ナデ。体部は手持ちへラ削り。	

遺物観察表

第45表 遺物観察表(29)

検出番号 写真図版	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第117図	7	須恵器 甕	覆土 5%	口底 高	B 1	黒・長石/灰/還元焼	口クロ整形、回転方向不明。穿孔の上下に2条の凹線による区画、区画内に刺突文が巡る、肩部にカキ目。	
第117図	8	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	太田?	黒/灰白/還元焼	胴部外面は平行印痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
47号住居								
検出番号 写真図版	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第119図 PL-82	1	土師器 杯	中央+23、覆土 75%	口底 10.3 高 3.3	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第119図 PL-82	2	土師器 杯	北東隅+6、覆土 50%	口底 11.2 高 4.1	C 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第119図	3	土師器 杯	北東隅+6 25%	口底 12.4 高	C 3	黒・細粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第119図 PL-82	4	土師器 杯	竈左+3 85%	口底 12.6 高 4.3	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第119図 PL-82	5	土師器 杯	竈右前+6、覆土、 47住覆土 50%	口底 13.1 高	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第119図	6	土師器 杯	覆土 10%	口底 14.6 高	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
第119図 PL-82	7	土師器 杯	覆土 25%	口底 14.7 高	B 1	黒/灰黄褐/良好・煙	口縁部横ナデ、椀下にナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面底部に花卉状ヘラ磨き(踏文状)。	
第119図	8	土師器 杯	覆土 25%	口底 12.4 高 5.0	B 1	黒・ガ/橙/良好	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面は底部から体部にヘラ磨き。	
第119図 PL-82	9	土師器 大型杯	P 3、覆土 25%	口底 19.7 高 環	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第120図 PL-82	10	土師器 杯	覆土 30%	口底 13.0 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第120図 PL-82	11	土師器 杯	覆土 40%	口底 13.6 高 5.0	B 1	黒・ガ/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第120図 PL-82	12	土師器 碗	覆土 30%	口底 7.5 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
第120図 PL-82	13	土師器 碗	覆土 30%	口底 10.8 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好・煙	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第120図	14	土師器 高杯	覆土 10%	口底 15.0 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/良好	脚部は縦位のヘラ削り、裾部は横ナデ。内面脚部はヘラナデ。	
第120図	15	土師器 高杯	覆土 20%	口底 高	B 1	黒・細粒/にぶい橙/良好	杯身と脚部は接合。脚部はヘラ削り、内面は上位がナデ、中位と下位はヘラ削り。	
第120図	16	土師器 高杯	覆土 25%	口底 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	脚部は縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第120図	17	土師器 高杯	覆土 10%	口底 高	B 1	黒・粗・白粒/にぶい黄橙/良好	脚部は縦位のヘラ削り、内面はヘラナデ。外面の一部に粘土付着。	
第120図 PL-82	18	土師器 高杯	竈内 25%	口底 高	B 1	黒/灰黄褐/良好	脚部は縦位のヘラ削り、裾部は横ナデ。内面脚部はヘラナデ。	
第120図	19	土師器 鉢	中央+17 15%	口底 14.7 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第120図	20	須恵器 环耳蓋	覆土 10%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焼	口クロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。	
第120図 PL-82	21	土師器 短頸甕	南壁際+4、覆土 98%	口底 10.8 高 7.5	B 2	黒・粗・角四/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り後部分的にヘラ磨き。内面はヘラ磨き。	
第120図	22	須恵器 甕	覆土 5%	口底 11.4 高	B 1	黒/灰/還元焼	口クロ整形。頸部は2条の凹線により上下に区画、凹線位には刺突文が巡る。	
第120図	23	須恵器 短頸甕	覆土 5%	口底 10.0 高	B 1	黒/灰/還元焼	口クロ整形、回転方向不明。	
第120図 PL-82	24	土師器 甕	竈内床直、左袖、 竈内、覆土 80%	口底 9.2 高	B 4	黒・ガ/角四/にぶい橙/良好	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第120図 PL-82	25	土師器 甕	竈前-3 ~ +10、竈 内 70%	口底 18.3 高 38.8	B 4	黒・粗・角四・ガ/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	外面胴部上位に粘土が帯状に付着。
第121図 PL-82	26	土師器 甕	覆土 10%	口底 8.4 高	B 2	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第121図	27	土師器 甕	竈前+10 10%	口底 18.3 高	B 1	黒・粗・ガ/灰黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第121図	28	土師器 甕	竈右前-3 5%	口底 24.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第121図	29	土師器 甕	覆土 5%	口底 4.4 高	B 1	黒/橙/良好	底部と胴部はヘラ削り、胴部の一部にヘラ磨き。内面はヘラ磨き。	
第121図	30	須恵器 甕	覆土 1%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焼	周囲は打ち欠きか。外面は平行印痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	

第46表 遺物観察表(30)

48号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第121図	1	土師器 環	覆土 20%	口 底 13.5 高	B 1	黒/にぶい黄緑/良好・焼	口縁部横ナデ、体部(横下)は手持ちへら削り。内面に放射状へら磨き(暗文状)。	外面体部と口部は器面磨滅。

49号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第123図	1	土師器 環	覆土 10%	口 底 13.0 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第123図 PL.83	2	土師器 環	覆土 30%	口 底 高	B 1	黒/黒/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第123図 PL.83	3	土師器 環	中央南+8 25%	口 底 12.7 高	B 1	黒・粗/ガ/にぶい黄緑/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第123図	4	須恵器 盤	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転へら削り。内面はへらナデ。	
第123図	5	土師器 環	P 1内、覆土 15%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄緑/良好	内面側に輪積み痕が残る。胴部は外面へら削り。内面はへらナデ。	外面の一部に煤が付着。
第123図 PL.83	6	石製品 有孔円盤	覆土	長 幅 2.2 重 8.1 2.7			径44mmの孔を片側穿孔。周辺部を打ち欠き概形を整える。表面の研磨は粗い。	滑石

50号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第123図 PL.83	1	土師器 環	P 1上+7、覆土 35%	口 底 11.7 高	B 1	黒/黒/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	

51号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第124図	1	須恵器 甕	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/粗/灰/還元焼	外面は平行叩きを格子目状に残す。内面は同心円状アテ具痕をナデ消している。	
第124図 PL.83	2	石製品 砥石	南限際+6	長 幅 15.5 重 58.6 7.7			左右の側縁・小口部に敵打痕が著しい。	粗粒輝石安山岩

52号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第124図 PL.83	1	土師器 環	覆土 30%	口 底 11.0 高	B 1	黒/にぶい黄緑/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第124図	2	土師器 高環	覆土 5%	口 底 20.8 高	B 1	黒・粗/ガ・褐粒/にぶい黄緑/良好	内外面とも赤色塗彩。口縁部は横ナデ、体部は輪積(5本)。内面は口縁部から体部に磨滅し、一部厚減。	
第124図	3	須恵器 高環	掘方 20%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焼	ロクロ整形、回転右回りか。内面胴部はへらナデ。	
第124図	4	土師器 小型甕	覆土 10%	口 底 14.0 高	B 1	黒・粗/角閃/褐粒/黒/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	

53号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第126図	1	土師器 環一特殊	覆土 20%	口 底 9.4 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好・焼	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	底部に台を有する形状か。
第126図 PL.83	2	土師器 環	覆土 50%	口 底 12.3 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄緑/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第126図 PL.83	3	土師器 環	覆土+14、覆土 90%	口 底 12.5 高	C 3	黒/にぶい黒/良好・内焼	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削りか、体部から底部は器面剝離のため不鮮明。	
第126図 PL.83	4	土師器 環	覆土+3、覆土 70%	口 底 12.6 高 4.1	B 1	黒・粗/ガ・角閃/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)上半ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	
第126図 PL.83	5	土師器 環	南部+3、覆土 90%	口 底 10.7 高 4.2	B 1	黒・粗/にぶい黒/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第126図	6	土師器 環	覆土 40%	口 底 12.0 高 3.6	C 3	黒/灰黄褐/良好・焼	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第126図	7	土師器 環	覆土 25%	口 底 12.4 高 4.0	C 1	黒/黒/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第126図 PL.83	8	土師器 環	壱前・壱左床直 90%	口 底 13.6 高 4.0	B 1	黒・ガ/黒/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部環、内面の2/3に煤が果実状に貼付。
第126図 PL.83	9	土師器 環	覆土 55%	口 底 15.2 高 4.8	B 1	黒/にぶい黒/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部環
第126図	10	土師器 環	覆土 10%	口 底 17.8 高	C 3	黒/黒/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	
第126図	11	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/黒/良好	环身底部から脚部はへら削り。	
第126図	12	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒・粗/褐粒/にぶい黄緑/良好	环身内面は黒色処理。环身底部から脚部はへら磨き。内面脚部はへらナデ。	
第126図	13	土師器 台付鉢	北西隅+5 20%	口 底 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄緑/良好	鉢身と脚部は接合。鉢身底部から脚部はナデ、脚部は横ナデ。内面はへらナデ。	

遺物観察表

第47表 遺物観察表(31)

神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第126図 PL.83	14	土師器 高杯	北西部+6、覆土 25%	口 底	高 13.3	B 1	胎土・粗/角四/にぶい 黄橙/良好	脚部は擬位のへら磨き。裾部は横ナデ。 内面は上半がナデ、下半はへら削り。
第126図 PL.83	15	土師器 鉢	覆土 40%	口 底	14.0 高 6.6	B 1	胎土・ガ/にぶい橙/良 好	口縁部は横ナデ、体部は手持ちへ ら削り。内面は底部から体部にへらナ デ。
第126図 PL.83	16	土師器 鉢	北西隅+9 20%	口 底	23.4 高	B 1	胎土・ガ/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部はへら削り。内 面体部はへらナデ。
第126図 PL.83	17	須恵器 環G蓋	覆土 5%	口 底	高	B 1	胎土/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。天井部は 周面まで回転へら削り。
第126図 PL.83	18	須恵器 高杯	覆土 5%	口 底	高	B 1	胎土/灰/還元焼	ロクロ整形。透孔は2か所。
第127図 PL.83	19	土師器 甕	甕内、覆土 25%	口 底	8.6 高	B 1	胎土/にぶい黄褐/良好	内面製部に輪積み痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面 胴部はへらナデ。
第127図 PL.83	20	土師器 甕	P 5内+23 50%	口 底	10.2 高	B 1	胎土・ガ/にぶい赤褐/ 良好	口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。内面 胴部はへらナデ。
第127図 PL.83	21	土師器 小甕	覆土 25%	口 底	12.7 高	B 1	胎土・角四・ガ/にぶい 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら 削り。内面胴部はへらナデ。
第127図 PL.83	22	土師器 甕	甕口+1、甕内 90%	口 底	16.7 高 27.9	B 1	胎土/にぶい橙/良好	外面製部に輪積み痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ。胴部と底部はへら削り。 内面は底部から胴部がへらナデ。
第127図 PL.83	23	土師器 甕	甕口+1～+6、 甕内 95%	口 底	18.1 高 39.1 4.7	B 1	胎土・粗/にぶい橙/良 好	口縁部は横ナデ。胴部と底部はへら削り。 内面は底部から胴部がへらナデ。
第127図 PL.83	24	土師器 甕	甕左床敷、覆土 15%	口 底	高	B 1	胎土・ガ/にぶい黄橙/ 良好	胴部はへら削り、内面はへらナデ。
第127図 PL.84	25	土師器 甕	甕右袖 10%	口 底	21.0 高 33.0 9.6	B 2	胎土・ガ・褐粒/にぶい 赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部と底部は へら削り。内面は底部から胴部にへら ナデか。下半は器面逆磨のため不明。
第128図 PL.84	26	土師器 甕	北西部+5～+9、 覆土 30%	口 底	22.6 高	B 2	胎土・褐粒/にぶい赤褐/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら磨 き。内面胴部はへらナデ。大部分は器 面逆磨のため単位不明。
第128図 PL.84	27	土師器 甕	覆土 15%	口 底	8.5 高	B 1	胎土・ガ/にぶい黄橙/ 良好	底部はへら削り、胴部はへら削り後へ ら磨き。内面はへらナデ。
第128図 PL.84	28	土師器 甕	覆土 10%	口 底	9.4 高	B 1	胎土・橙/良好	底部と胴部はへら削り。内面はへらナ デか。
第128図 PL.84	29	土師器 甕	覆土 10%	口 底	高	B 1	胎土・ガ/にぶい橙/良 好	底部と胴部はへら削り。内面はへらナ デか。
第128図 PL.84	30	石製品 砥石	覆土	長 幅	7.1 重 264.8 5.3			小口部に打痕。先端部破片。
54号住居								
神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第129図 PL.84	1	土師器 杯	覆土 10%	口 底	12.7 高	B 1	胎土/にぶい赤褐/良 好・内輪	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第129図 PL.84	2	土師器 杯	掘方 10%	口 底	12.9 高	B 1	胎土・雲母/明赤褐/良 好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第129図 PL.84	3	土師器 杯	覆土 30%	口 底	13.8 高	B 1	胎土・灰黄褐/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第129図 PL.84	4	土師器 鉢	覆土 15%	口 底	17.8 高	B 1	胎土/褐/良好	口縁部横ナデ、体部はへら削りか、器面 逆磨のため不明。内面体部はへらナ デ。
第129図 PL.84	5	須恵器 環H蓋	掘方 25%	口 底	14.0 高	太田	胎土・黒粒/灰/還元焼	ロクロ整形。回転方向不明。天井部は中 ほどまで回転へら削り。
第129図 PL.84	6	石製品 砥石	覆土	長 幅	11.6 重 244.1 6.3			裏面先端に擬位の刃らし傷。下半部欠 損。西面使用。
第129図 PL.84	7	鉄製品 刀子	覆土 40%	長 幅	4.4 厚 0.5 1.6 重 9.3			刃部、柄部とも端部を欠損。錆化が進ん でいる。
55号住居								
神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第130図 PL.84	1	土師器 杯	覆土 25%	口 底	13.7 高 3.4	B 1	胎土/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第130図 PL.84	2	土師器 杯	覆土 35%	口 底	12.8 高	B 1	胎土/灰褐/良好・燻	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第130図 PL.84	3	土師器 高杯	覆土 10%	口 底	19.6 高	B 1	胎土・片岩/にぶい黄褐/ 良好	内外面とも赤色塗彩。口縁部は横ナデ、 体部はへら磨き。内面はへら磨き。
第130図 PL.84	4	土師器 高杯	覆土 5%	口 底	高	B 1	胎土/にぶい黄褐/良好	内外面とも赤色塗彩。口縁部は横ナデ、 体部はへら磨き。内面はへら磨き。
第130図 PL.84	5	土師器 甕	覆土 5%	口 底	9.8 高	B 1	胎土/にぶい黄橙/良好	内面黒色処理。口唇部横ナデ、口縁部は へらナデ。内面はへら磨き。
56号住居								
神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第131図 PL.84	1	土師器 杯	甕内+8 100%	口 底	9.7 高 2.9	B 1	胎土・ガ/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は 手持ちへら削り。
第131図 PL.84	2	土師器 甕	甕右袖+1 5%	口 底	高 8.0	B 1	胎土・ガ/赤褐/良好	底部はへら削り、胴部はナデか。内面は へらナデ。

第48表 遺物観察表(32)

58号住居		種類	出土位置	計測値	胎土	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
種別番号	写真図版	NO.	器種	残存率	(cm)	分類			
第133図	PL-85	1	土師器 覆土	70%	口 底	12.3 高 5.5	B 1	粗・粗・ガ/にぶい、橙 /良好	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部横ナ デ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ 削り。
第133図	PL-85	2	土師器 環	左前+8 55%	口 底	12.8 高 4.4	B 1	粗・粗・角閃/淡黄/ /良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第133図	PL-85	3	土師器 環	覆土 50%	口 底	13.6 高 4.1	C 1	粗・粗粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第133図	PL-85	4	土師器 環	覆土 40%	口 底	11.8 高 4.6	C 1	粗・粗粒/橙/やや軟	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第133図	PL-85	5	土師器 環	中央北東床直~ +6、覆土 80%	口 底	20.0 高 23.5 10.1	B 1	粗・粗/橙/良好	内面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部 から頸部は横ナデ、製部はヘラ削り。内 面製部はヘラナ後縦位のヘラ磨き。
第133図	PL-85	6	土師器 小型甕	北部+3、+7、覆土 60%	口 底	12.8 高 13.4 5.8	B 1	粗/にぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、製部と底部は ヘラ削り。内面は底部から製部がヘラナ デ。
第133図	PL-85	7	土師器 小型甕	北部+3、覆土 30%	口 底	12.3 高	B 1	粗・粗/淡黄/良好	口縁部から頸部は横ナデ、製部はヘラ削 り。器面磨減のため表面不明。内面製部 はヘラナデ。
第133図	PL-85	8	土師器 甕	覆土 10%	口 底	15.2 高	B 1	粗・粗・ガ/にぶい、橙 /良好	口縁部から頸部は横ナデ、製部はヘラ削 り。内面製部はヘラナデ。
第133図	PL-85	9	土師器 甕	北東部床直、+3、 覆土 70%	口 底	17.8 高	B 1	細多/明赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、製部はヘラ削 り。内面製部はヘラナ後下位に横な縦 位のヘラ磨き。
第134図	PL-85	10	土師器 甕	北東部床直、覆土 60%	口 底	17.8 高	B 1	粗・ガ/にぶい黄橙/ /良好	口縁部から頸部は横ナデ、製部はヘラ削 り。内面製部はヘラナデ。製部は内外面 とも器面磨成あり。
第134図	PL-85	11	土師器 甕	北東部床直~+4、 覆土 65%	口 底	18.6 高	B 1	粗・粗・褐粒/にぶい 黄橙/良好	外面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部 は横ナデ、製部はヘラ削り。内面製部は ヘラナデ。
第134図	PL-86	12	土師器 甕	覆土 25%	口 底	18.6 高	B 1	粗・粗・褐粒/にぶい 黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、製部はヘラ削 り。内面製部はヘラナデ。
第134図	PL-86	13	土師器 甕	北部・北東床-3、 覆土 40%	口 底	20.5 高	B 1	粗・粗・角閃/にぶい 赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、製部はヘラ削 り。内面製部はヘラナデ。
第135図	PL-86	14	土師器 甕	北東部床直~+3、 覆土 50%	口 底	19.4 高	B 1	粗・粗粒/明黄褐/良 好	口縁部から頸部は横ナデ、製部はヘラ削 り。上位は器面磨減のため表面不明。内 面製部はヘラナデ。
第135図	PL-86	15	土師器 甕	北東部床直~+4、 覆土 70%	口 底	22.0 高	B 1	粗・角閃/橙/良好	口縁部は横ナデ、製部はハケ目(8本)。 内面製部はヘラナデ。
第135図	PL-87	16	土師器 甕	覆土 10%	口 底	5.0 高	B 1	粗・粗・角閃/にぶい 黄橙/良好	製部はヘラ削り、底部もヘラ削りでも木 葉痕が残る。内面はヘラナデか。
第135図	PL-87	17	土師器 甕	中央床直 5%	口 底	6.0 高	B 1	粗・ガ/浅黄/良好	製部と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

59号住居		種類	出土位置	計測値	胎土	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
種別番号	写真図版	NO.	器種	残存率	(cm)	分類			
第138図	PL-87	1	土師器 環	覆土 30%	口 底	12.0 高 3.8	B 1	粗/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	2	土師器 環	北東部中央+7 98%	口 底	12.2 高 4.4	B 1	粗・粗・ガ・石英他小 礫/灰黄褐/良好・焼	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	3	土師器 環	覆土 20%	口 底	12.4 高	B 1	粗・ガ/橙/良好	内外面とも黒色処理。口縁部横ナデ、体 部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	4	土師器 環	覆土 45%	口 底	13.4 高 4.0	B 1	粗/にぶい黄橙/良好	内外面とも黒色処理。口縁部横ナデ、体 部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	5	土師器 環	覆土 20%	口 底	12.6 高	B 1	粗・ガ/灰黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	6	土師器 環	覆土 20%	口 底	12.8 高	B 1	粗・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	7	土師器 環	北東部+7 98%	口 底	12.9 高 4.3	C 3	粗/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	8	土師器 環	北東部+5、覆土 70%	口 底	13.2 高 4.2	B 1	粗/暗褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	9	土師器 環	覆土 30%	口 底	14.0 高	B 1	粗・ガ/にぶい赤褐/ 良好・焼か	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	10	土師器 環	壺内、覆土 60%	口 底	14.0 高 4.1	B 1	粗・粗・砂岩/にぶい 黄橙/良好・内焼か	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	11	土師器 環	覆土 40%	口 底	14.4 高	B 1	粗・ガ/黄褐/良好	内外面とも黒色処理。口縁部横ナデ、体 部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	12	土師器 環	覆土 20%	口 底	14.6 高	B 1	微・粗・ガ/灰黄褐/ 良好	内外面とも黒色処理。口縁部横ナデ、底 部(横下)は手持ちヘラ削り。
第138図	PL-87	13	土師器 環	P 1内、覆土 25%	口 底	12.8 高	C 1	粗/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は 手持ちヘラ削り。

遺物観察表

第49表 遺物観察表(33)

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第138図 PL.87	14	土師器 高杯	南壁際東+8、P 2 70%	口 底 20.8 高 19.7 15.2	B 1	細・粗・ガ・褐粒/橙 /良好	坯身内面黒色処理。坯身口縁部は横ナデ。体部はナデ、底部から脚部はヘラ削り。基部は横ナデ。内面は坯身底部から体部がへう磨き、脚部から基部はヘラナデ。	
第138図	15	土師器 須恵器 高杯	覆土 10%	口 底 15.6 高	B 1	細・ガ/明赤褐/良好	脚部はヘラ削り後一部へう磨き、基部は横ナデ。内面は脚部から基部上半までヘラナデ。	
第138図	16	須恵器 高杯	覆土 25%	口 底 高	B 1	細・粗・礫・角四/灰 還元焰	口クロ整形。回転右回り。坯身口部は接合。脚部は半目。穿孔が3カ所。	
第138図	17	土師器 小型甕	覆土 20%	口 底 5.8 高	B 1	細/灰黄褐/良好・雑	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第138図 PL.87	18	土師器 出	覆土、P 2 20%	口 底 高	B 1	細少/ふい橙/良好	胴部上位と中位はナデ、下位はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第138図	19	土師器 小型甕	覆土 15%	口 底 13.4 高	B 1	粗多・ガ/明赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第138図 PL.87	20	土師器 甕	覆土 10%	口 底 17.4 高	B 1	細・粗・ガ・角四/に ふい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	外面胴部の一部 に粘土付着。
第139図	21	土師器 甕	甕内、覆土 5%	口 底 18.6 高	B 1	細・粗多・ガ・角四/に ふい黄橙/良好	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第139図	22	土師器 甕	覆土 5%	口 底 18.0 高	B 1	細/明赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第139図	23	土師器 甕	覆土 5%	口 底 20.6 高	B 1	細・ガ/ふい黄褐/良 好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第139図 PL.87	24	土師器 甕	覆土、P 2 15%	口 底 4.2 高	B 1	細・粗/灰褐/良好	胴部と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第139図	25	土師器 甕	覆土 5%	口 底 5.0 高	B 1	細・粗・ガ/明赤褐/ 良好	胴部と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第139図	26	土師器 甕	P 2 5%	口 底 3.2 高	B 1	粗多・角四・ガ/にふ い黄橙/良好	胴部と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第139図	27	須恵器 甕	覆土 5%	口 底 高	B 1	細/灰/還元焰	口クロ整形。回転方向不明。	
第139図	28	須恵器 甕	覆土 1%	口 底 高	乗射	細/灰/還元焰	外面は平行明赤、内面は同心内状アテ 具が残る。	
第139図	29	在地系 土器 内耳甕	覆土 底部片	口 底 高		/にふい黄褐/	内面と体部外面黒色。体部外面下端から 底部外面暗灰色。平底。	
60号住居								
種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第140図 PL.87	1	土師器 高杯	集中部、覆土 80%	口 底 16.3 高	B 1	細/にふい黄橙/良好	坯身と脚部は接合。内面胴部に輪積み痕 が残る。坯身口縁部は縦位のへう磨き。 底部はヘラナデ。脚部はへう磨き後横ナ デ。内面は坯身口縁部が放射状へう磨 き、底面と脚部はヘラナデ。	
第140図 PL.87	2	土師器 出	集中部、覆土 10%	口 底 12.5 高	B 1	細/赤褐/良好	内外面とも赤色塗彩。口唇部は横ナデ。 口縁部はヘラナデか。内面は口縁部上位 が横ナデ。中位・下位はヘラナデ。	
第140図 PL.87	3	土師器 出	集中部 40%	口 底 高	B 1	細/黄灰/良好	外面は赤色塗彩。胴部上半はナデ、下半 から底部はヘラ削り。内面は胴部がナ デ、底部はヘラナデ。	982と同一個体 か。
第140図	4	土師器 壺	覆土 10%	口 底 15.6 高	B 1	細・ガ/にふい黄橙/ 良好	口縁部中位に前面三角形の凸帯貼付。 口縁部は内外とも横ナデ後放射状へう 磨き。	
第140図 PL.87	5	土師器 甕	集中部、覆土 70%	口 底 15.4 高	B 1	細/にふい黄橙/良好	内外面の胴部に輪積み痕が残る。口縁部 から頸部は横ナデ。胴部はへう磨き。内 面胴部はヘラナデ。	
第140図 PL.87	6	土師器 甕	集中部、覆土 70%	口 底 17.6 高	B 1	細/にふい黄橙/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横 ナデ。胴部はへう磨き。内面はヘラナ デ。	
61号住居								
種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第140図 PL.88	1	土師器 杯	P 1 内 98%	口 底 11.8 高 4.7	C 1	細・粗・褐粒/橙/良 好	口縁部横ナデ。体部(股下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第140図 PL.88	2	土師器 杯	P 1 内 95%	口 底 12.0 高 4.8	B 1	細・粗・ガ/橙/良好	口縁部横ナデ。体部上半ナデ、下半から 底部は手持ちヘラ削り。	
第140図 PL.88	3	土師器 小型甕	P 1 内 95%	口 底 12.6 高 10.5	B 1	細・ガ/明黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は上半が ヘラナデ、下半から底部が手持ちヘラ 削り。内面は底部から胴部がヘラナ デ。	
第140図 PL.88	4	土師器 小型甕	P 1 内 98%	口 底 11.0 高 12.5 6.0	B 1	細・ガ/灰黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部と底部は ヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラ ナデ。	外面胴部の一部 に粘土付着。
第140図	5	土師器 甕	東部掘方 10%	口 底 7.4 高	B 1	細・粗・ガ・角四/灰 黄褐/良好	胴部から底部はヘラ削り。内面はヘラナ デ。	
第140図	6	土師器 甕	掘方 10%	口 底 高	D 1	細・粗・角四・長石/ 明赤褐/良好	頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面は 胴部がヘラナデ。	

第50表 遺物観察表(34)

62号住居

種別 番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第142図 PL-88	1	土師器 環	南東壁際中央+9 98%	口 底 11.8 高 4.6	B 1	黒・粗・ガ/粗/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第142図 PL-88	2	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒・粗/黄褐/良好	内面黒色処理、口縁部横ナデ、体部ナデ、 底部はヘラ削り。内面は底部から体部に 放射状と横位のヘラ磨き。	
第142図 PL-88	3	土師器 高環	1号溜井、覆土 45%	口 底 高	B 1	黒・粗/角閃/明黄褐 /良好	脚部は縦位のヘラ磨き、裾部は横ナデ。 内面は脚部が上位ナデ、中位ヘラ削り、 下位ヘラナデ、裾部は横位のヘラ磨き。	
第142図 PL-88	4	土師器 小型甕	覆土 15%	口 底 11.9 高	B 1	黒・粗・ガ/にぶい 粗/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
第143図 PL-88	5	土師器 小型甕	甕右+3 70%	口 底 14.7 高 15.9	B 1	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面は脚部が上位ナデ、表面磨減のため不鮮 明。内面胴部はヘラナデ。	
第143図 PL-88	6	土師器 甕	覆土、1号溜井 40%	口 底 17.7 高 6.4	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
第143図 PL-88	7	土師器 甕	甕右袖 98%	口 底 16.8 高 36.1	B 1	黒・ガ/にぶい黄褐/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面は底部から胴部がヘラナデ、 下半は器面剥落のため不鮮明。	
第143図 PL-88	8	土師器 甕	1号溜井、覆土 70%	口 底 18.4 高 33.1	B 1	黒・粗・ガ/粗/良好	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第143図 PL-88	9	土師器 甕	甕左袖 50%	口 底 17.0 高	B 1	黒多・ガ/粗/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 上位にナデ。内面胴部はヘラナデ。	
第143図 PL-88	10	土師器 甕	甕右-5、覆土 25%	口 底 17.5 高	B 1	粗・ガ・褐粒/にぶい 黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	胴部下平に粘土 付着。

63号住居

種別 番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第145図	1	土師器 環	覆土 20%	口 底 11.8 高	C 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第145図	2	土師器 環	覆土 10%	口 底 12.4 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄褐/ 良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第145図	3	土師器 環	3ビット、覆土 60%	口 底 12.8 高 3.9	B 1	黒/赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第145図 PL-89	4	土師器 環	覆土 75%	口 底 13.6 高 4.1	B 1	黒/にぶい粗/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第145図	5	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒・ガ/にぶい粗/良 好	脚部はハケ目、内面はヘラナデ。	
第145図	6	土師器 鉢	覆土 10%	口 底 9.6 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄褐/ 良好	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。	
第145図	7	須恵器 甕	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
第145図	8	土師器 小型甕	甕左 1%	口 底 22.2 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄褐/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
第145図	9	土師器 小型甕	甕左 3%	口 底 高	B 1	黒・粗・褐粒/にぶい 黄褐/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	
第145図	10	土師器 甕	覆土 5%	口 底 5.8 高	B 1	黒/灰黄褐/良好	内面黒色処理、胴部はヘラ削り、底部は ナデ。内面はヘラ磨き。	高環かも
第145図	11	須恵器 甕	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	外面は平行明き煎、内面は同心円状ア ズ貝痕が残る。	

64号住居

種別 番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第147図	1	土師器 環	覆土 10%	口 底 12.0 高	B 1	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第147図 PL-89	2	土師器 環	西壁際+6、覆土 95%	口 底 11.8 高 4.1	C 1	黒・褐粒/粗/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第147図 PL-89	3	土師器 環	覆土 30%	口 底 12.6 高 4.6	B 1	黒・ガ/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第147図	4	土師器 環	覆土 10%	口 底 12.7 高	B 1	黒/にぶい黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第147図 PL-89	5	土師器 甕	甕左+8、覆土 10%	口 底 14.6 高	B 1	黒・ガ/灰黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 表面磨減のため単位不明。内面胴部 はヘラナデ。	外面口縁部の一 部に粘土付着。
第147図 PL-89	6	土師器 甕	甕内床直 25%	口 底 19.8 高	B 1	黒・粗・角閃/にぶい 黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	外面胴部上平に 帯状に表面磨 減、甕後者痕か。
第147図 PL-89	7	土師器 甕	甕内床直、甕内、 覆土 15%	口 底 20.0 高	B 1	黒・粗・角閃・ガ/に ぶい黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
第147図	8	土師器 甕	甕内、覆土 5%	口 底 4.5 高	B 1	黒・雲母/にぶい黄褐 /良好	胴部と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第147図	9	須恵器 甕	覆土 1%	口 底 高	太田?	黒/灰/還元焰	外面は平行明き後力半目、内面は同心円 状アズ貝痕が残る。	

遺物観察表

第51表 遺物観察表(35)

67号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第149図 PL.89	1	土師器 環	南西隅+17 98%	口 底 12.3 高 4.5	B 1	黒・粗/ガ/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	

68号住居

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第150図 PL.89	1	土師器 環	覆土 10%	口 底 13.8 高	B 1	黒/灰黄褐/良好・焼	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部環
第150図 PL.89	2	土師器 高環	西壁際+3 98%	口 底 18.7 高 15.8 14.0	B 1	黒・粗/角閃・ガ/橙/良好	坏身はホゾ状尻し込みで脚部と接合。坏身部口縁部はハケ目(8~10本)、体部から底部はヘラ削り。脚部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面は坏身部がハケ目後放射状ヘラ磨き。脚部はナデ後ハケ目(7本)。	
第150図 PL.89	3	土師器 高環	西壁際+2 50%	口 底 18.6 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	坏身部の口縁部上半は横ナデ下半はナデ。体部はヘラ磨き。内面体部は器面剥離のため不詳明。	
第150図 PL.89	4	土師器 高環	北部床直。覆土 25%	口 底 14.0 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	坏身はホゾ状尻し込みで脚部と接合。脚部はヘラ削り後ヘラ磨き。底部は横ナデ。内面は脚部がハケ目(7本)。	
第151図 PL.89	5	土師器 高環	覆土 25%	口 底 高	B 1	黒/明赤褐/良好	坏身はホゾ状尻し込みで脚部と接合。内面に輪積み痕が残る。脚部はナデ。底部はヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第151図 PL.89	6	土師器 高環	覆土 25%	口 底 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	内面に輪積み痕が残る。脚部はヘラ削り。底部はヘラナデ。内面は脚部がヘラナデ。	
第151図 PL.89	7	土師器 鉢	覆土 50%	口 底 9.8 高 5.8 4.4	B 1	黒/明赤褐/良好	内外面の口縁部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ。体部の大部分はナデ。底部とその周囲がヘラ削り。	
第151図 PL.89	8	土師器 鉢	南壁際+17、覆土 85%	口 底 12.4 高 8.5 4.2	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部ハケ目(7~8本)。底部はヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
第151図 PL.89	9	土師器 鉢	中央+7、覆土 75%	口 底 13.3 高 7.6 5.0	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/良好	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。内面体部はヘラ磨きか、器面剥離のため不詳明。	
第151図 PL.89	10	土師器 附	北部床直 98%	口 底 14.0 高 16.9 8.0	B 1	黒・粗・雲母/にぶい黄橙/良好	口唇部横ナデ。口縁部と胴部はハケ目(9本)後胴部の2/3にヘラ磨き。底部はヘラ削り。内面は口縁部下平がハケ目胴部はヘラナデか。	外面は黒色処理か。
第151図 PL.90	11	土師器 附	北部床直。覆土 30%	胴最大径 12.9	B 1	黒/赤褐/良好	内面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り後胴部はナデのため単位不明。胴部中に直弧文が半周する。内面はヘラナデ。	
第151図 PL.90	12	土師器 小甕	北東部床直 95%	口 底 12.0 高 10.0 5.0	B 1	黒・ガ/にぶい黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削りか。内面は底部から胴部がヘラナデ。	外面は頸部付近を除き粗が付着。
第151図 PL.90	13	土師器 甕	南部床直。覆土 95%	口 底 14.7 高 20.5 7.2	B 1	黒・粗・ガ/明黄褐/良好	口縁部上半は横ナデ。下半から頸部、胴部上位はハケ目。胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第151図 PL.90	14	土師器 甕	南壁際+8 5%	口 底 高 8.0	B 1	黒・白粒/にぶい赤褐/良好	底部は手持ちヘラ削り。胴部はヘラナデ。内面はハケ目(8~11本)。	
第151図 PL.90	15	石製模 造品 刺形	覆土	長 4.5 重 7.7 2.3			右辺上半が斜向。刺先端形状を呈す。右辺は截断磨削整形。左辺はトリミング整形。右辺にノミ状の工具によるハンチ痕が残る。表面面の研磨は粗い。	蛇紋岩
第151図 PL.90	16	石製品 砥石	中央床直	長 10.4 重 934.0 幅 8.8			礫面全面。特に下端部の摩耗が顕著。小口部は打痕、摩耗痕。下端部は被熱して割断。	粗粒輝石安山岩

1号掘立柱建物

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第154図	1	土師器 環	覆土 3%	口 底 11.8 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第154図	2	土師器 環	覆土 3%	口 底 11.6 高	B 1	黒/明黄褐/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第154図	3	土師器 環	覆土 3%	口 底 21.8 高	B 1	黒多/橙/良好	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

2号掘立柱建物

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第155図	1	土師器 鉢	P15覆土 3%	口 底 11.6 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(楼下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第155図	2	土師器 高環	P 3 覆土 3%	口 底 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	脚部はヘラ削り。内面はナデ。	

5号掘立柱建物

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分組	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第155図	1	土師器 環	P12覆土 1%	口 底 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部上半ナデ、下半は手持ちヘラ削り。	小片のため詳細不明。

第52表 遺物観察表(36)

3号窟立柱建物

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第157図	1	土師器 環	P 3 覆土 3%	口 底 15.2 高	B 1	黒・ガ/褐灰/良好・ 焼か	口縁部横ナデ、腰部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	

1号竪穴状遺構

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第160図	1	土師器 環	覆土 20%	口 底 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、腰部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第160図 PL.90	2	土師器 環	中央+4、北部+15、 覆土 80%	口 底 12.8 高 4.2	B 1	黒/淡橙/良好	口縁部横ナデ、腰部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	29号住居18と接 合する。
第160図	3	土師器 環	覆土 15%	口 底 10.4 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、腰部上半ナデ、下半から 底部は手持ちヘラ削り。	
第160図 PL.90	4	土師器 環	覆土 15%	口 底 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	須恵器坯蓋模倣。底部は外面が手持ちヘ ラ削り、内面がヘラナデ。	内面に漆付着。 漆容器として使 用か。
第160図	5	須恵器 坏耳蓋	覆土 15%	口 底 15.0 高	B 1	黒・粗/角閃/暗灰/ 還元焰	クロコ整形、回転右回りか。天井部は周 縁まで回転ヘラ削り。	
第160図	6	須恵器 坏耳蓋	覆土 5%	口 底 高	太田	黒・白粒/灰/還元焰	クロコ整形、回転方向不明。天井部は回 転ヘラ削り。	天井部にヘラ削 き。
第160図	7	須恵器 坏耳身	覆土 3%	口 底 10.8 高	太田?	黒/灰/還元焰	クロコ整形、回転方向不明。	
第160図	8	須恵器 高坏	覆土 15%	口 底 高	B 1	黒・白粒/灰/還元焰	クロコ整形、回転方向不明。脚部に透孔 が3カ所。	
第160図	9	須恵器 瓶(矮)	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒/灰白/還元焰	クロコ整形、回転右回りか。胴部中位に 1条の凹線、凹線下に刺突文が2段通る。	
第160図	10	須恵器 瓶(覆)	覆土 3%	口 底 高	太田	黒/灰/還元焰	クロコ整形、回転方向不明。口縁部に2 条の凹線で区画、上下に波状文が通る。	
第160図	11	土師器 環	覆土 5%	口 底 16.5 高	B 1	黒・白粒/にぶい橙/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
第161図 PL.90	12	土師器 環	東部+30、+25、覆 土 10%	口 底 17.6 高	B 1	黒多・ガ/にぶい橙/ 良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	
第161図	13	土師器 環	南西隅+8 5%	口 底 19.6 高	B 1	黒・粗・ガ/にぶい赤 褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
第161図	14	土師器 環	東壁+42 5%	口 底 19.1 高	B 1	黒・粗/角閃・ガ/に ぶい黄橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
第161図	15	土師器 環	覆土 15%	口 底 5.6 高	B 1	黒・粗/にぶい赤褐/ 良好	底部には木葉痕が残る。胴部は器面磨減 のため不明。内面はヘラナデ。	
第161図	16	土師器 環	中央+4~+7、覆 土 20%	口 底 高	B 1	黒・粗・ガ/灰黄褐/ 良好	胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第161図	17	須恵器 環	覆土 3%	口 底 高	太田	黒/灰/還元焰	胴部は外面に叩き痕、内面にアテ具痕が かすかに残るが、ほとんど消滅されて いる。	
第161図	18	須恵器 高坏	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円 状アテ具痕が残る。	
第161図	19	土製品 附焼	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	整形不明、二次被熱で器面が赤みを帯 びている。	

2号竪穴状遺構

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第162図 PL.90	1	土師器 環	西部+10 50%	口 底 14.8 高 4.0	B 1	黒・ガ/にぶい黄 橙/良好	口縁部横ナデ、腰部上半ナデ、下半から 底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部から 腰部上半は横ナデ、下半から底部はハ ケ目。内外赤色塗彩。	
第162図 PL.90	2	土師器 環	中央+9、西部+10、 覆土 30%	口 底 14.5 高	B 1	黒・ガ/浅黄/良好	外面は赤色塗彩。脚部基部ともヘラ磨き。 内面は脚部がヘラナデ、基部は横ナデ。	
第162図 PL.90	3	土師器 環	西部+10、中央 +10、覆土 20%	口 底 16.8 高	B 1	黒・ガ/にぶい橙/良 好	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は 横ナデ、胴部はヘラ削り、器面磨減のた め単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
第162図	4	土師器 環	中央+10 3%	口 底 7.0 高	B 1	黒・ガ/にぶい黄橙/ 良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

1号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第163図 PL.90	1	石製品 板碑片	覆土	長 幅 31.0 重 184.8 16.0			裏面側右辺のみ台形状の凹状を留める。 背面側は剥落、種子・遺珠等は不明。他 辺は後付加工されているが、その加工意 図は不明。	緑色片岩

7号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第163図	1	土師器 環	覆土 3%	口 底 9.0 高	B 1	黒・粗/角閃・ガ/に ぶい黄橙/良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

遺物観察表

第53表 遺物観察表(37)

16号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第164図	1	土師器 環	覆土 5%	口 底 14.0 高	C 1	黒/にぶい黄緑/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第164図	2	土師器 環	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/角四・灰/黄緑/ 良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	
第164図	3	土師器 環	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄緑/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	

23号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第165図	1	土師器 環	覆土 10%	口 底 13.0 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第165図	2	土師器 環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/褐灰/良好・外焼 か	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は 手持ちヘラ削り。	

25号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第165図	1	土師器 環	覆土 20%	口 底 13.6 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ち ヘラ削り。	

42号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第167図 PL.90	1	須石蓋 灰心蓋	覆土 98%	口 底 7.8 高 2.9	B 1	黒多・白粒/灰/還元 焼	ロクロ整形。回転石回り。掴みは貼付。 天井部は部分的にヘラ削りがみられる。	

43号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第167図 PL.90	1	銅銭 大銅元 貨	覆土	径 2.5 孔 0.6 厚 0.2 重 4.1				銭文が摩滅、錆化が進んでいる。
第167図 PL.90	2	銅銭 標準元 貨	覆土	径 2.4 孔 0.6 厚 0.4 重 2.4				銭文の摩滅が激しい。錆化が進んでいる。

56号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第169図 PL.90	1	石製品 球形磨	覆土	長 4.4 重 92.0 幅 4.5				器体中央に最大径。全面が研磨され、最 大径付近に縦位線条痕。	変質ディスプレイ

61号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第170図 PL.90	1	石製品 玉	覆土	径 0.8 重 0.4				扁平して表面が割れているが、形状の整 う優品。石材感是真珠光沢を帯び、透明 感が強い。	滑石
第170図 PL.90	2	鉄製品 鉄鏝 釘	覆土 30%	長 10.2 厚 0.7 幅 0.7 重 8.4				頭部or 刃部、頸部を欠損、表面の錆化が 進んでいる。	

65号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第170図 PL.90	1	銅銭 元祐通 寶	覆土	径 2.4 孔 0.6 厚 0.1 重 2.9				比較的良好的状態。	
第170図 PL.90	2	銅銭 紹聖元 寶	覆土	径 2.4 孔 0.7 厚 0.1 重 2.3				二片に割れている。錆化が進んでいる。	

82号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第173図 PL.90	1	銅銭 聖宋通 寶	覆土	径 2.5 孔 0.6 厚 0.1 重 2.5				外縁をわずかに欠損、錆化が進んでいる。	

86号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第174図	1	土師器 環	覆土 10%	口 底 14.5 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部にハケ目が残る。	
第174図	2	土師器 環	覆土 5%	口 底 6.0 高	B 1	黒/にぶい黄緑/良好	底部と胴部はヘラ削り、胴部の一部にヘ ラ磨き。内面はヘラナデ。	

88号土坑

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考	
第176図 PL.91	1	銅銭 景徳元 寶	覆土	径 2.5 孔 0.6 厚 0.2 重 3.0				銭文が磨滅、錆化が進み、特に裏面が激 しい。	

第54表 遺物観察表(38)

挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第176図 PL.91	2	銅銭 押付元 寶	覆土	径 2.5 孔 0.6 厚 0.1 重 2.1			銭文が磨滅、錆化が進んでいる。	
第176図 PL.91	3	銅銭 洪武通 寶	覆土	径 2.4 孔 0.6 厚 0.1 重 2.7			錆化が進んでいる。	
第176図 PL.91	4	銅銭 洪武通 寶	覆土	径 2.4 孔 0.6 厚 0.2 重 2.2			錆化が進んでいる。	
第176図 PL.91	5	銅銭 永楽通 寶	覆土	径 2.5 孔 0.6 厚 0.1 重 2.2			錆化が進んでいる。	
1号井戸								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第177図	1	土師器 甕	覆土 3%	口 21.4 高	B 1	黒・雲母/灰黄褐/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り、器面磨滅のため単位不明。内面胴部はへうナデ。	
第177図 PL.91	2	在地系 土器 片口鉢	覆土 一部欠	口 29.0 高 9.7 底 13.0 11.0		/にぶい橙/	器表灰白色。口縁部立ち上がり、端部尖る。口縁部横ナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧痕残る。底部赤切無調整。糸切は右回転気味とあるが、静止状態に近い。体部内面下位と底部同縁厚度	14世紀中頃。
2号井戸								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第178図	1	土師器 杯	覆土 5%	口 10.8 高	C 1	黒/明黄褐/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへう削り。	
3号井戸								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第178図	1	土師器 杯	覆土 5%	口 10.8 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへう削り。	
第178図 PL.91	2	土師器 杯	覆土 10%	口 15.0 高	B 1	黒・灰/にぶい橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへう削り。	有段口縁部環
5号井戸								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第178図	1	土師器 高杯	覆土 5%	口 高	B 1	黒/明赤褐/良好	脚部は縦位のへう磨き、内面上位はナデ、中位から下位はへうナデ。	
第178図 PL.91	2	在地系 土器 内耳罐	覆土 1/4	口 21.6 高 底 15.2		/灰/	器表黒褐色。口縁部短く、横ナデ。内耳1カ所残存し、貼り付け時の押さえで口縁部平面変形する。このため、口縁部推定径が小さい。耳貼り付け部外面は口縁部を撫でつけたような痕跡が認められ、耳は粘土紐を口縁部に貫通させていると考えられる。丸底。	14世紀後半～15世紀初頭。
3号溝								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第181図 PL.91	1	土師器 甕	覆土 10%	口 高 底 4.2	B 4	黒・粗・灰/にぶい黄橙/良好	内面に輪軸みねが残る。底部から胴部はへう削り。内面はへうナデ。	
4号溝								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第180図	1	土師器 杯	覆土 10%	口 12.0 高 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへう削り。	
第180図	2	土師器 杯	覆土 10%	口 10.7 高 底	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへう削り。	
第180図	3	土師器 杯	覆土 25%	口 10.0 高 底	B 1	黒/褐灰/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第180図	4	須恵器 杯G蓋	覆土 5%	口 8.1 高 底	不詳	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第180図	5	須恵器 杯H蓋	覆土 20%	口 高 底	B 1	黒・粗/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転へう削り。	
第180図	6	須恵器 甕	覆土 1%	口 高 底	太田	黒/灰/還元焰	外面は一部にカキ目、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
5号溝								
挿図番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第183図 PL.91	1	土師器 杯	覆土 95%	口 12.0 高 4.6 底	C 1	黒/淡橙/良好	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへう削り、椀下にナデ部分が残る。	
第183図 PL.91	2	土師器 杯	覆土 70%	口 12.8 高 4.3 底	B 1	黒/褐灰/良好・焼	口縁部横ナデ、体部(椀下)から底部は手持ちへう削り。	

遺物観察表

第55表 遺物観察表(39)

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第183図	3	土師器 甗付費	甗上 5%	口底 10.7 高	B 1	黒・粗/ガ/にぶい黄 橙/良好	脚部はヘラナデ、裾部は横ナデ。内面も同様。	
第183図 PL.91	4	土師器 甗	甗上 70%	口底 20.0 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第183図 PL.91	5	土師器 甗	甗上 85%	口底 10.1 高 29.6	B 1	黒・粗/向閃/にぶい 黄橙/良好・内燻	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後燻へラ削り、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第183図	6	土師器 甗	甗上 10%	口底 9.0 高	B 1	黒・ガ/灰黄橙/良好	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

6号溝

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第185図	1	土師器 甗	甗上 15%	口底 11.8 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第185図	2	須恵器 甗	甗上 10%	口底 高	不詳	黒/灰白/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第185図 PL.92	3	土師器 甗	甗上 50%	口底 20.0 高	B 1	黒・褐粒/明赤褐/良	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第185図 PL.92	4	土師器 甗	甗上 35%	口底 19.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

7号溝

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第187図	1	土師器 甗	甗上 20%	口底 12.8 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第187図	2	土師器 甗	甗上 10%	口底 12.8 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第187図 PL.92	3	須恵器 甗	甗上 25%	口底 13.2 高 5.7 6.4	B 1	黒/にぶい黄橙/還元 焰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第187図	4	土師器 高坪	甗上 20%	口底 高	B 1	黒・粗/褐粒/橙/良	脚部はヘラ削り、裾部は横ナデ。	
第187図	5	土師器 高坪	甗上 20%	口底 高	B 1	黒/明赤褐/良好	脚部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第187図	6	須恵器 高盤	甗上 25%	口底 26.8 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。脚部は貼付、底部から体部下半にカキ目、内面は底部から体部にカキ目。	
第187図	7	須恵器 高坪	甗上 10%	口底 高	B 1	黒/灰オリーブ/還元 焰	ロクロ整形、回転右回り。脚部は貼付、底部はカキ目。	
第187図	8	須恵器 長頸甗	甗上 5%	口底 10.4 高	B 1	黒/灰白/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部中に凹線が3条通る。	
第187図 PL.92	9	須恵器 長頸甗	甗上 1%	口底 高	太田?	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部はカキ目、中に2本の凹線が通る。	
第187図	10	須恵器 長頸甗	甗上 5%	口底 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。頸部は胴部に貼付。	
第187図	11	須恵器 甗	甗上 1%	口底 高	B 1	黒/暗灰/還元焰	口唇端部と口唇部下に凹線が通る。口縁部には波状文が通る。	
第187図	12	須恵器 甗	甗上 3%	口底 高	太田	黒・粗/片岩/灰/還 元焰	口縁部はロクロ整形、中に凹線が1条通る。内面口縁部は下半にヘラナデ。	
第187図	13	須恵器 甗	甗上 1%	口底 高	太田	黒・粗/暗灰/還元焰	外面は平行明き直、内面は同心円状アテ具残る。	外面の一部に降灰が付着。

8号溝

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第188図 PL.92	1	在地系 土器 内耳甗	甗上 1/3	口底 33.0 高		/橙/	器表暗灰から黒色。口縁部外反し、屈曲部内面にゆるい段をなす。内面に耳1カ所残存。口縁部横ナデ、体部内面ナデ。体部外面ナデで、成形時の積み残。底部欠損するが平底であろう。	16世紀中から後半頃。
第188図 PL.92	2	銅鏡 永来通寶	甗上	径厚 2.5 孔 0.6 0.2 重 3.4				

10号溝

押戻番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第189図	1	須恵器 甗	甗上 1%	口底 高		黒・粗/灰/還元焰	外面は平行明き直、内面は同心円状アテ具残る。	
第189図	2	在地系 土器 内耳甗	甗上 体部片	口底 高		/にぶい黄橙/	器表黄灰色。平底。	
第189図	3	在地系 土器 内耳甗	甗上 口縁部片	口底 高		/灰/	器表黄灰色。器壁薄く、口縁部長い。端部上面は平坦で外方に小さく突き出る。	16世紀前半から中頃の可能性がある。
第189図 PL.92	4	在地系 土器 内耳甗	甗上 口縁部片	口底 高		/にぶい黄橙/	器表黄灰色。器壁やや厚く、口縁部小さく内湾。端部上面は平坦で外方に小さく突き出る。	15世紀中頃から後半ころと思われる。

第56表 遺物観察表(40)

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第189図	5	在地系土器 内耳罐	覆土 口縁部片	口 底 高		/にぶい黄橙/	器表黒褐色。口縁部外反した後に内湾。肩部上面は丸みを帯びる。	15世紀中頃から後半ごろと思われる。
第189図 PL.92	6	石製品 赤白・ 下白	覆土	径 28.0 重 507.3 幅 15.4			8分割。溝目は10～11条を数え、摩耗が著しい。軸受け孔は下半は膨らみ、上半は卒み、上端部は磨き整形、下端部は磨きを残す粗仕上げ。側面は水磨き仕上げ、底面は指跡状を呈し、磨きが残る。	粗粒輝石山岩

1号粘土探掘坑

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第190図	1	土師器 環	覆土 30%	口 底 11.0 高 3.3	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第190図	2	土師器 環	覆土 20%	口 底 12.4 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第190図	3	土師器 環	覆土 10%	口 底 13.3 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第190図	4	土師器 環	覆土 25%	口 底 13.0 高 4.1	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第190図	5	土師器 環	覆土 15%	口 底 15.0 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削りか、器面磨滅のため不明。	
第190図	6	土師器 小型 環	覆土 15%	口 底 10.0 高	C 1	黒/ガ/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第190図	7	土師器 小型 環	覆土 5%	口 底 12.0 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	

3号粘土探掘坑

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第191図	1	土師器 環	覆土 25%	口 底 10.8 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第191図	2	土師器 環	覆土 25%	口 底 11.4 高	B 1	黒/ガ/褐灰/良好・ 煙	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第191図	3	土師器 環	覆土 10%	口 底 14.6 高	C 1	黒/褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第191図	4	土師器 環	覆土 10%	口 底 14.8 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第191図	5	土師器 高環	覆土 10%	口 底 17.0 高	B 1	黒/ガ/橙/良好	坏身口縁部は横ナデ、体部はへラ削り。	
第191図	6	土師器 高環	覆土 25%	口 底 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	外面は赤色塗彩。器部外面はへラ磨きか、単位不鮮明。裾部付近にハゲ目が見える。内面はへラナデ。	
第191図	7	土師器 高環	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/淺黄橙/やや軟質	器部外面はへラ削りか、器面磨滅のため不明。下位にハゲ目。内面はへラナデか。	

4号粘土探掘坑

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第192図 PL.93	1	土師器 環	覆土 80%	口 底 10.5 高 3.4	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第192図 PL.93	2	土師器 環	覆土 98%	口 底 10.9 高 3.7	C 1	黒/橙/良好・煙	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第192図	3	土師器 環	覆土 15%	口 底 11.4 高	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第192図	4	土師器 環	覆土 25%	口 底 14.0 高	C 2	黒/橙/良好	口縁部横ナデ、体部(腋下)から底部は手持ちへラ削り。	
第192図 PL.93	5	土師器 高環	覆土 85%	口 底 9.5 高 5.0 2.8	C 1	黒/ガ/橙/良好・ やや軟質	頸部は貼付、口縁部と裾部横ナデ、体部(腋下)から底部、器部は手持ちへラ削り。	
第192図 PL.93	6	土師器 高環	覆土 35%	口 底 高	B 1	黒/ガ/橙/良好	頸部は縦位のへラ削り。裾部は横ナデ。内面頸部は縦位のへラ削り。	
第192図	7	須恵器 瓶	覆土 5%	口 底 8.0 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部は胴部に貼付。	
第192図	8	須恵器 短頸色	覆土 5%	口 底 11.8 高	B 1	黒/灰黄橙/還元焰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下位は回転へラ削り。	
第192図	9	須恵器 長頸色	覆土 1%	口 底 15.8 高	B 1	黒/灰/還元焰	口縁部はロクロ整形、回転方向不明。口唇部と口縁部に波状文が施される。	内面は障灰が厚く付着。
第192図 PL.93	10	土師器 環	覆土 75%	口 底 21.2 高 37.1 5.0	A	黒/白粒/橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り。底部は水浸痕が残る。内面は底部から胴部がへラナデ。	
第192図 PL.93	11	土師器 環	覆土 20%	口 底 17.4 高	B 1	黒多/灰黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削りか。内面胴部はへラナデか。胴部は内外面とも器面磨滅のため不明。	
第192図 PL.93	12	土師器 環	覆土 3%	口 底 17.6 高	B 1	黒/灰黄橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第192図 PL.93	13	土師器 環	覆土 60%	口 底 19.5 高	B 1	黒/褐粒/橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はへラナデ。	

遺物観察表

第57表 遺物観察表(41)

検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第192図 PL.93	14	土師器 甕	覆土 15%	口 底 21.8 高	A	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
2号粘土探堀坑								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第201図	1	土師器 甕	覆土 10%	口 底 4.6 高	B 1	黒・粗・角閃・褐粒/ にぶい赤褐/良好	底部には木葉状が残。胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
第201図 PL.92	2	須恵器 甕	覆土、5粘探掘覆 土 10%	口 底 高	B 1	黒・粗/灰/還元焰	底部から胴部は外面が平行叩き痕と間隔をあけたカキ目。内面には同心円状アテ具痕が残る。	
第201図	3	須恵器 甕	覆土 1%	口 底 高	B 1	黒/灰白/還元焰	胴部は外面に平行叩き痕と間隔をあけたカキ目。内面には同心円状アテ具痕が残る。	
第201図	4	須恵器 甕	覆土、5粘探掘覆 土 1%	口 底 高	B 1	黒/灰白/還元焰	胴部は外面に平行叩き痕と間隔をあけたカキ目。内面には同心円状アテ具痕が残る。	
5号粘土探堀坑								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第201図	1	土師器 杯	覆土 25%	口 底 11.4 高 4.9 6.6	B 1	黒・褐粒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへら削り。	
第201図	2	土師器 高杯	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒・方/赤褐/良好	胴部はへら削りか、器面増減のため不鮮明。胴部に透孔3カ所。	
第201図	3	土師器 高杯	覆土 25%	口 底 16.2 高	B 1	黒・方/橙/良好	胴部はへら削り。頸部は横ナデ。内面胴部はへらナデ。	
第201図	4	須恵器 鉢	覆土 30%	口 底 6.0 高	B 1	黒/灰/還元焰	ロクロ整形。回転右回りか。底部から体部下位は回転へら削り。	
第201図	5	須恵器 高杯	覆土 5%	口 底 高	B 1	黒・粗/暗灰/還元焰	ロクロ整形。回転右回りか。胴部は貼付。坯身底部は回転へら削り。胴部に透孔が3カ所。	
第201図 PL.93	6	土師器 甕	覆土 15%	口 底 17.0 高	B 1	黒・方/にぶい橙/良 好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第201図	7	土師器 甕	覆土 5%	口 底 20.7 高	A	黒/にぶい橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
粘土探掘坑群								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第202図	1	土師器 杯	覆土 25%	口 底 11.8 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへら削り。	
第202図 PL.93	2	土師器 杯	覆土 50%	口 底 9.6 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへら削り。	
第202図 PL.93	3	土師器 杯	覆土 35%	口 底 12.6 高	B 1	黒・方・褐粒/にぶい 赤褐/良好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部環
第202図 PL.93	4	土師器 杯	覆土 40%	口 底 12.7 高 4.1	C 1	黒/橙/やや軟質	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへら削り。	
第202図	5	土師器 高杯	覆土 5%	口 底 16.8 高	B 1	黒・粗・方/淡橙/良 好	内面黒色処理。口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削り。内面は口縁部がへら磨き。底部はへらナデ。	
第202図	6	土師器 高杯	覆土 10%	口 底 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	坯身底部にホリ状差し込みを持つ形状か。胴部はへら削り。内面はナデ。	
第202図	7	土師器 鉢	覆土 3%	口 底 19.4 高	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ。体部はへら削り。内面は口唇部横ナデ、口縁部から体部はへらナデ。	
第202図 PL.93	8	須恵器 坏(身)	覆土 85%	口 底 11.0 高 4.5 5.7	重入品?	黒・粗/灰/還元焰	ロクロ整形。回転右回り。底部から体部は回転へら削り。	
第202図 PL.93	9	須恵器 坏(身)	覆土 20%	口 底 11.4 高	太田?	黒・粗・長石/灰白/ 還元焰	ロクロ整形。回転右回り。底部から体部は回転へら削り。	
第202図 PL.93	10	須恵器 短頸甕	覆土 20%	口 底 9.4 高	B 1	黒・粗・白粒/灰/還 元焰	ロクロ整形。回転右回りか。底部は回転へら削り。胴部上位に刺突文が通る。	
第202図	11	土師器 甕	覆土 3%	口 底 14.7 高	B 1	黒・方/にぶい黄橙/ 良好	口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第202図	12	土師器 甕	覆土 3%	口 底 14.8 高	B 1	黒・方・白粒/にぶい 橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第202図 PL.94	13	須恵器 甕	覆土 55%	口 底 48.0 高 94.2	B 1	黒・粗・角閃/灰/還 元焰	口縁部はロクロ整形。口縁部は凹線により4段に区画。上位3段には波状文が通る。内面は下平にへらナデ。胴部は外面が平行叩き痕、内面には同心円状アテ具痕が残る。	
第202図	14	須恵器 甕	覆土 3%	口 底 高	B 1	黒/灰/還元焰	口縁部はロクロ整形。口縁部は凹線による区画。区画内に波状文が通る。	
第202図 PL.94	15	須恵器 甕	覆土 3%	口 底 23.4 高	B 1	黒・粗/灰白/還元焰	口縁部はロクロ整形。口縁部中位には2条の凹線、凹線の上下に波状文が通る。	
9号粘土探掘坑								
検出番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第203図	1	土師器 杯	覆土 15%	口 底 11.8 高	B 1	黒・褐粒/明赤褐/良 好	口縁部横ナデ。体部(椀下)から底部は手持ちへら削り。	

第58表 遺物観察表(42)

神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第203図	2	土師器 環	覆上 5%	口 底 14.0 高	B 1	黒/濁灰/良好・焼	外面は口縁部が縦位、体部がやや斜めのへら磨き。内面は口縁部上半が縦位、下半が横位、体部が斜めのへら磨き。	
第203図	3	土師器 小型壺	覆上 10%	口 底 8.8 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、内面胴部はへらナデ。	4と同一個体か。
第203図	4	土師器 小型壺	覆上 15%	口 底 9.7 高	C 1	黒/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、内面胴部はへらナデ。	3と同一個体か。

1号壺								
神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第205図 PL-94	1	土師器 環	覆上 25%	口 底 10.0 高 4.2	B 1	黒/明赤褐/良好	口縁部から体部は横ナデ、底部(横下)は手持ちへら削り。体部に2条の凹線が通る。	
第205図	2	土師器 環	覆上 15%	口 底 13.7 高	B 1	黒/にぶい赤褐/良好	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部環
第205図	3	土師器 環	覆上 25%	口 底 10.0 高	B 1	黒/橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第205図 PL-94	4	土師器 環	覆上 45%	口 底 11.8 高 3.0	B 1	黒/にぶい橙/良好	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第205図 PL-94	5	土師器 高杯	覆上 40%	口 底 18.0 高	B 1	黒・ガ/明赤褐/良好	頸部は縦位のへら磨き、胴部は横ナデ。内面は胴部がへらナデ。	
第205図	6	須恵器 環	覆上 5%	口 底 12.9 高	太田	黒・白粒/灰白/還元焼	口クロ整形、回転方向不明。	
第205図	7	須恵器 環(日身)	覆上 5%	口 底 10.2 高	太田	黒/灰/還元焼	口クロ整形、回転方向不明。	
第205図	8	須恵器 壺	覆上 3%	口 底 高	太田	黒/オリブ黒/還元焼	口クロ整形、回転方向不明。胴部下半は力カ目、上半はへら削り。	外面に障灰付着。
第205図 PL-94	9	土師器 壺	覆上 30%	口 底 3.0 高	B 1	黒・粗・ガ/にぶい黄橙/良好	内面に輪組み痕が残る。底部から胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
第205図	10	須恵器 壺	覆上 1%	口 底 高	B 1	黒/灰白/還元焼	胴部は外面に平行明き痕が残る。内面のアテ具痕はほとんどナデ消されている。	
第205図	11	形象埴 輪 太刀	覆上 1%	口 底 高	B 1	黒/橙/良好	内外面ともへらナデ。塗彩あり。	

1号壺								
神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第206図	1	須恵器 瓶	覆上 1%	口 底 高	太田	黒/灰/還元焼	口クロ整形、胴部に凹線が2条通る、凹線下部に波状文。	

75号ビット								
神岡番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第206図	1	土師器 壺	覆上 3%	口 底 7.6 高	B 1	黒/にぶい黄橙/良好	底部と胴部はへら削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はへらナデ。	

縄文時代上部									
神岡番号 写真図版	NO.	器種	部位	出土位置	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
第207図 PL-95	1	深鉢	胴部破片	44住、IV層カクラン	細砂、白色粒、繊維	橙	ふつう	口縁下の部位、棒状沈線により縦溝状ないし菱形モチーフを描き、貼付文を付す。	岡山1式
第207図 PL-95	2	深鉢	口縁部破片	53住カマド、IV層	細砂、白色粒、繊維	橙	ふつう	口縁が縁く内湾する器形。口縁下に集合沈線をめぐらして口縁部短沈線帯を作出、文様部内に集合沈線を付いた円文を描き、斜行集合沈線で連結させる。余白に斜切文を充填施文し、貼付文を付す。	岡山1式
第207図 PL-95	3	深鉢	胴部破片	IV層一括	粗砂、片岩、繊維	明赤褐	ふつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第207図 PL-95	4	深鉢	胴部破片	49住	粗砂、繊維	橙	ふつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第207図 PL-95	5	深鉢	胴部破片	IV層一括	細砂、白色粒、繊維	にぶい赤褐	ふつう	R Lを地文とし、コンパズ文をめぐらす。	里浜式
第207図 PL-95	6	深鉢	口縁部破片	42住	細砂、白色粒、黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	縦い波状L縁。L Rを横位施文する。	里浜式
第207図 PL-95	7	深鉢	口縁部破片	IV層一括	粗砂、石英、繊維	橙	ふつう	L Rを横位施文する。	里浜式
第207図 PL-95	8	深鉢	胴部破片	口3住	粗砂、黒色粒、繊維	赤褐	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	里浜式
第207図 PL-95	9	深鉢	胴部破片	7溝	細砂、繊維	橙	ふつう	ループ縄文による羽状構成。	前期前葉
第207図 PL-95	10	深鉢	口縁部破片	7溝	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	波状口縁で強く内湾する器形。横位集合沈線を施し、沈線間に縦溝状文を施す。	講議b式
第207図 PL-95	11	深鉢	胴部破片	44住	粗砂、繊維	橙	良好	浮線による横帯構成。地文にR L横位施文。	講議b式

遺物観察表

第59表 遺物観察表(43)

種目番号 写真図版	NO.	器種	部位	出土位置	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
第207図 PL.95	12	深鉢	胴部破片	44住				No.11と同一個体。	講議b式
第207図 PL.95	13	深鉢	胴部破片	3粘土採掘坑	粗砂、白色粒、 黒色粒	赤褐	良好	集合沈線による横帯構成。	講議b式
第207図 PL.95	14	深鉢	口縁部破片	63住	粗砂、細礫、白 色粒、黒色粒、 石英	橙	ふつう	横位集合沈線をめぐらして幅狭な口縁部縦 帯を区画、矢羽根状集合沈線を施して貼付文 を付す。口縁内面を肥厚させ、肥厚部に斜位 の集合沈線、貼付文を施す。	講議c式
第207図 PL.95	15	深鉢	口縁部破片	IV層一括	粗砂、白色粒	赤褐	良好	口縁が緩く内湾。横位集合沈線を施して、貼 付文を付す。	講議c式
第207図 PL.95	16	深鉢	口縁部破片	I溜井	細砂、黒色粒	橙	良好	口縁が緩く内湾。口縁部に斜位、横位の集合 沈線を施し、以下、縦位のモチーフが展開、 貼付文を付す。	講議c式
第207図 PL.95	17	深鉢	口縁部破片	IV層一括	粗砂	にぶい橙	ふつう	口縁が緩く内湾。横位集合沈線を施して、貼 付文を付す。	講議c式
第207図 PL.95	18	深鉢	口縁部破片	IV層一括	粗砂、黒色粒	黒褐	良好	口縁下に刺突をめぐらす。無筋Lrを横位施 文し、貼付文を付す。	講議c式
第207図 PL.95	19	深鉢	口縁部破片	IV層一括				No.18と同一個体。	講議c式
第207図 PL.95	20	深鉢	胴部破片	7溝	粗砂、白色粒、 黒色粒、石英	赤褐	良好	屈曲する部位。集合沈線による横帯構成で、 屈曲部上位に円形刺突をめぐらす。	講議b式
第207図 PL.95	21	深鉢	胴部破片	7溝	粗砂、黒色粒、 石英	にぶい赤褐	良好	横位集合沈線、縦位展開するモチーフを描く。	講議c式
第207図 PL.95	22	深鉢	胴部破片	IV層一括	粗砂、白色粒	にぶい橙	ふつう	裏面側の集合沈線を施し、貼付文を付す。	講議c式
第207図 PL.95	23	深鉢	胴部破片	IV層一括	粗砂、白色粒、 黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	横位集合沈線、縦位展開するモチーフを描く。	講議c式
第207図 PL.95	24	深鉢	底部破片	53住	粗砂、細礫	明赤褐	良好	横位集合沈線を施す。	講議c式
第207図 PL.95	25	深鉢	口縁部破片	7溝	粗砂、細礫、石 英	黒褐	良好	口縁が緩く外反、ロッキングを施す。	浮島式
第207図 PL.95	26	深鉢	胴部破片	I溜井	細砂	明赤褐	良好	貝殻痕線による連続刺突で帯状の三角形 モチーフを施し、沈線で縁取る。	興津式
第208図 PL.95	27	深鉢	胴部破片	Iトレンチ105-602	細砂、黒色粒	赤褐	良好	累加条1種Lr+rを横位施文する。	前期後葉
第208図 PL.95	28	深鉢	胴部破片	IV層一括	粗砂、白色粒、 黒色粒	明赤褐	ふつう	Rを横位施文する。	前期後葉
第208図 PL.95	29	深鉢	胴部破片	IV層一括	粗砂、雲母	赤褐	良好	Hビダ文を施す。	阿玉台式
第208図 PL.95	30	深鉢	口縁部破片	47住	粗砂、黒色粒	橙	良好	波頭部の環状突起。富文、沈線を施す。	称名寺日式
第208図 PL.95	31	深鉢	胴部破片	28住、29住、89上坑	粗砂、白色粒、 黒色粒、石英	橙	ふつう	帯状沈線によりJ字状、弧状モチーフを描く。	称名寺日式
第208図 PL.95	32	深鉢	胴部破片	表採	粗砂、白色粒、 黒色粒	橙	ふつう	Lrを地文とし、横位、入組み状の沈線を施す。	堀之内1式
第208図 PL.95	33	深鉢	胴部破片	47住	粗砂、白色粒、 黒色粒	橙	良好	縦位帯状沈線を施し、Rを充填施文する。	称名寺1式
第208図 PL.95	34	深鉢	底部破片	63住	細砂、黒色粒	にぶい橙	良好	推定径8.5cm。残存部は無文。	後期前葉
第208図 PL.95	35	上製円盤		20上坑	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	長さ3.3cm、幅3.7cm、厚さ1.0cm。外周2/3 ほどを整えていた。	前期後葉

縄文時代石器

種目番号 写真図版	NO.	器種	形態・素材	出土位置	長さ	幅	重量	製作・使用状況	石材
第208図 PL.95	36	石鏃	凹基無茎鏃	64住住居覆土	1.7	1.1	0.2	完成状態。基部は浅く直線的に抉れる。	チャート
第208図 PL.95	37	石鏃	凹基無茎鏃	J-13VI層	2.2	1.6	0.8	完成状態。基部はU字状に抉れる。右辺の返し部を僅か欠損する。	黒曜石
第208図 PL.95	38	石鏃	有茎鏃	7号溝覆土	2.5	1.4	1.0	完成状態。略菱形で、茎が若干内側に入り込む。	黒色頁岩
第208図 PL.95	39	有茎尖頭鏃	柳葉形	3号住居覆土	4.5	1.6	2.7	細身の体部に短い茎が付く。側縁は直線的で、裏面状を呈する。 返し部は鋭く、器体長軸に直交する。	黒色頁岩
第208図 PL.95	40	石鏃	横長刺片	IV層	8.4	3.4	22.6	刺片の一端を加工して機能部を作出。加工部の刺離面は新鮮 で、使用されたようにみえない。	黒色頁岩
第208図 PL.95	41	石匙?	不明	7号溝覆土	(1.4)	(1.3)	0.5	刺片の打面側に握み部を作出。器体下半を欠損する。	黒曜石

第60表 遺物観察表(44)

種別番号 写真図版	NO.	器種	形態・素材	出土位置	長さ	幅	重量	製作・使用状況	石材
第208図 PL_95	42	石造	斜めタイプ	IV層	(6.5)	(5.4)	218.0	完成状態。右辺側の下端対部を欠損。対部は対こぼれ。	黒色頁岩
第208図 PL_95	43	削器	幅広削片	43号住居側方	6.6	12.1	33.5	完成状態。打面側の加工が粗く鋸歯状であるのに対し、端部側は丁寧に加工され、弧状対部を作出。石核転用した削器？	黒色安山岩
第208図 PL_95	44	打製石片	短冊型	表土	9.3	3.7	64.8	完成状態？両側縁は装着が意識され潰れているが、頭部側が大きく変形、対部も未加工であり、使用前に破損したものか。	黒色頁岩
第208図 PL_95	45	打製石片	短冊型	66号住居覆土	12.4	4.5	73.6	完成状態？側縁加工は浅く、素材削片の形状を大きく変えるものではない。割断面の縁は割断。未使用か。	黒色頁岩
第208図 PL_95	46	打製石片	短冊型	14号住居覆土	13.6	6.6	203.4	完成状態。器体下部に最大幅を有し、やや下翻れ。右側縁は再生され、弱く折れている。対部摩耗が著しい。捲断痕は見られない。	黒色頁岩
第208図 PL_96	47	打製石片	短冊型	V層			147.8	完成状態。踵身の装着部に幅広の体部が付き、側縁は「ハ」字状に大きく開く。対部再生・捲断痕が著しい。	灰色安山岩
第208図 PL_96	48	打製石片	短冊型？	4号溝覆土	12.7	5.7	133.9	完成状態。踵身の装着部に幅広の体部が付き、側縁は「ハ」字状に開く。両側縁が潰れる。対部は未加工。	黒色頁岩
第208図 PL_96	49	打製石片	短冊型？	64号住居覆土	(7.1)	5.7	136.3	完成状態。両側縁は「ハ」字状に大きく開く。頭部側の欠損は明らか。対部は直線的で、対部再生は明らかであるが、サイズの異なる削断的再生？捲断痕が著しい。	灰色安山岩
第208図 PL_96	50	打製石片	短冊型	表土	(8.4)	5.8	56.8	完成状態。胴部破片。表裏面に捲断痕。	黒色頁岩
第208図 PL_96	51	打製石片	分銅型	2号粘土探掘坑覆土	10.6	6.3	131.6	完成状態。下端対部は直線的で、対部再生の可能性が否定できない。対部摩耗・捲断痕は見られない。	黒色頁岩
第209図 PL_96	52	打製石片	不明	7号溝覆土	(6.5)	(5.4)	65.9	未成品。裏面頭部と側面に大きく残り、直下を浅く折る。器体下半を欠損しており、全体形状は明らかでない。	黒色頁岩
第209図 PL_96	53	石核	剥片	表土	5.1	5.5	86.3	表裏面でも小型幅広削片を剥離。背面側の割断面構成は求心形。	細粒輝石安山岩
第209図 PL_96	54	石核	厚手大型剥片	7号住居覆土	6.8	9.6	296.8	表裏両面に幅広削片を剥離。	黒色頁岩
第209図 PL_96	55	石核	扁平角柱状	表土	15.9	7.7	793.9	小口部分で打面を固定、幅広削片を剥離。	珪質頁岩
第209図 PL_96	56	凹石	円形偏平盤	54号住居覆土	13.2	7.5	521.7	表裏面とも中央付近に集合打痕、摩耗痕。側縁・小口部に打痕、スス付着。被熱してヒビ。	粗粒輝石安山岩
第209図 PL_96	57	凹石	楕円偏平盤	15号住居覆土	10.0	9.3	562.2	表裏面ともロート状の凹部2。摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩

遺物外

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第210図	1	土師器 壺	表土 30%	口 底 12.2 高	B 1	粗・粗/橙/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上半がナデ、下半はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第210図 PL_96	2	土師器 甌	撥良 60%	口 底 22.7 高 28.8 9.8	B 1	粗・粗・ガ/橙/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後部分的にヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ後は全面ヘラ磨き。	
第211図	3	埴輪 円筒	表土 1%	口 底 高	B 1	粗・白粒/橙/良好	外面は縦位のハケ目(1cm当たり6)、底面はヘラナデ。内面はヘラナデ。	
第211図	4	瀬戸美濃陶器 器種不明	表土 1/8	口 底 11.1 高		/淡黄/	口縁部内面に折り返し、内面に稜をなす。内外面筋輪で口縁端部上面の輪を状う。灯火具であろう。	江戸時代
第211図	5	古瀬戸 瓶類	表土 肩部片	口 底 高		/灰白/	外面買入の入る反輪。外面菊花状彫文を施す。	古瀬戸中期か
第211図 PL_96	6	石製模 造品 白玉	表土	径 1.2 重 1.6 0.9			上下両面は折断後、面を整える程度に研磨。側面は縦位の粗い整形痕。	滑石
第211図 PL_96	7	石製模 造品 白玉	表土	径 高 1.1 重 1.3 0.7			上下両面は折断後、面を整える程度に研磨。側面は縦位の粗い整形痕。	滑石
第211図 PL_96	8	石製模 造品 白玉	表土	径 1.2 重 1.4 高 1.2			上下両面は折断後、粗く研磨して面を整えている。側面は縦位の粗い整形痕。	滑石
第211図 PL_96	9	石製品 不明	表土	長 8.7 重 238.7 幅 7.3			表裏面に径3～4cmの浅い孔を穿つ。孔の傾斜は弱く、回転穿孔によるものではない。	粗粒輝石安山岩
第211図 PL_96	10	銅銭 皇宋元 寶	北西部表土	径 2.5 孔 0.7 厚 0.1 重 2.5			比較的良好な状態。	
第211図 PL_96	11	銅銭 景德元 寶	北西部表土	径 2.4 孔 0.7 厚 0.1 重 1.8			錆化が進んでいる。	

遺物観察表

第61表 遺物観察表(45)

種別番号 写真図版	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	出土 分類	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	備考
第211図 PL-96	12	鉄製品 鉄鏃	表土 10%	長 4.5 厚 0.4 幅 0.4 重 3.7			刃部から基部を欠損、表面の錆化が進んでいる。	
第211図 PL-96	13	鉄製品 鏃	表土 10%	長 4.4 厚 0.3 幅 0.5 重 3.9			一部片、表面は錆化しているが、内部の残存状態は良好である。	

写真図版



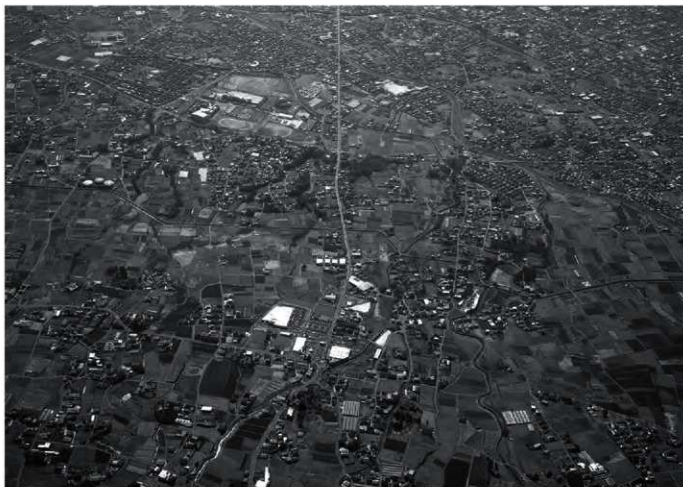
道跡周辺の航空写真(1961年・国土地理院)



遺跡上空から(上が北・右側中央付近が東田之口遺跡)



遺跡遠景(西から)



遺跡遠景(北から・左端中央付近が東田之口遺跡)



遺跡遠景(南から)



調査区全景(北西から)



調査区全景(南東から)



調査区全景(南西から)



調査区全景(北東から)



調査区全景(上が北東)



14・15号住居全景(上が北)



1号溝全景(南東から)



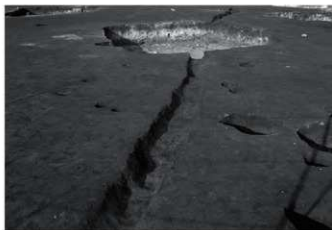
2号溝全景(南西から)



3号溝北部(南から)



3号溝南部(南東から)



4号溝全景(南西から)



5号溝全景(西から)



6号溝全景(南から)



8・9・11号溝(南東から)



10号溝全景(東から)



11号溝全景(南東から)



1号住居全景(北西から)



1号住居掘方全景(北西から)



1号住居竈全景(北西から)



1号住居竈掘方全景(北西から)



2号住居全景(西から)



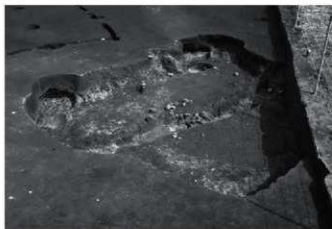
2号住居掘方全景(西から)



2号住居竈全景(西から)



2号住居電掘方全景(西から)



3号住居全景(西から)



3号住居掘方全景(西から)



3号住居竈全景(西から)



3号住居電掘方全景(西から)



4号住居全景(西から)



4号住居掘方全景(西から)



4号住居竈全景(西から)



4号住居竈掘方全景(西から)



5号住居全景(西から)



5号住居掘方全景(西から)



5号住居竈掘方全景(西から)



6号住居全景(南西から)



6号住居掘方全景(南西から)



6号住居竈全景(南西から)



6号住居掘方全景(南西から)



6号住居・1号井戸遺物出土状況(南から)



7号住居全景(南西から)



7号住居掘方全景(南西から)



7号住居掘方全景(南西から)



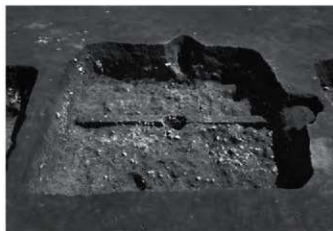
7号住居掘方天井部除去全景(南西から)



8号住居遺物出土状況(南西から)



8号住居全景(南西から)



8号住居掘方全景(南西から)



8号住居竈全景(南西から)



8号住居竈掘方全景(南西から)



9号住居全景(南西から)



9号住居掘方全景(南西から)



9号住居竈全景(南西から)



9号住居竈掘方全景(南西から)



10号住居全景(西から)



10号住居掘方全景(西から)



10号住居遺物出土状況(西から)



10号住居掘方全景(西から)



11号住居全景(西から)



11号住居掘方全景(西から)



11号住居掘方全景(西から)



11号住居掘方全景(西から)



11号住居貯蔵穴全景(西から)



12号住居遺物、礎出土状況(南から)



12号住居全景(南から)



12号住居竈全景(南から)



12号住居電掘方全景(南から)



12号住居2号竈全景(西から)



12号住居2号電掘方全景(西から)



13号住居全景(西から)



13号住居掘方全景(西から)



14号住居遺物出土状況(南東から)



14号住居全景(南東から)



14号住居掘方全景(南東から)



14号住居1号竈全景(南東から)



14号住居2号竈全景(南東から)



14号住居3号竈全景(北東から)



14号住居(左1号・右2号)竈掘方全景(南東から)



14号住居1号貯蔵穴全景(南東から)



14号住居2号貯蔵穴全景(南東から)



15号住居遺物出土状況(南東から)



15号住居全景(南東から)



15号住居掘方全景(南東から)



15号住居竈全景(南東から)



15号住居1号貯蔵穴全景(南東から)



15号住居2号竈掘方全景(北東から)



15号住居2号貯蔵穴全景(北東から)



16号住居全景(南から)



16号住居電籠全景(西から)



16号住居電籠方全景(西から)



17号住居全景(東から)



17号住居掘方全景(東から)



17号住居電籠全景(南から)



17号住居電籠方全景(南から)



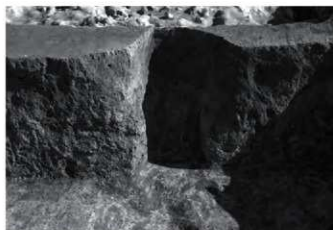
18号住居全景(南西から)



18号住居掘方全景(南西から)



18号住居竈全景(南西から)



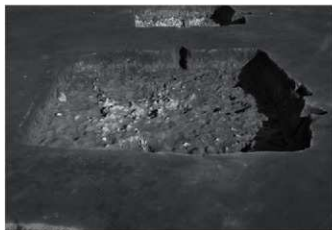
18号住居竈掘方全景(南西から)



18号住居貯蔵穴全景(西から)



19号住居全景(南東から)



19号住居掘方全景(南東から)



19号住居1号竈全景(南東から)



19号住居2号竈全景(西から)



19号住居1号電掘方全景(南東から)



19号住居2号電掘方全景(西から)



19号住居貯蔵穴全景(南から)



20号住居全景(西から)



20号住居掘方全景(西から)



20号住居電全景(西から)



20号住居掘方全景(西から)



21号住居全景(東から)



21号住居掘方全景(東から)



21号住居1号竈全景(東から)



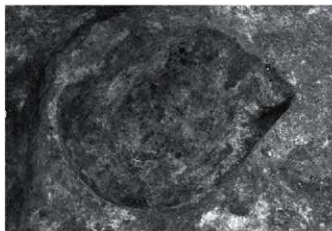
21号住居1号竈掘方全景(東から)



21号住居2号竈全景(西から)



21号住居2号竈掘方全景(西から)



21号住居貯蔵穴全景(東から)



22号住居全景(西から)



22号住居掘方全景(西から)



22号住居電天井除去後全景(西から)



22号住居電掘方全景(西から)



23号住居全景(西から)



23号住居掘方全景(西から)



23号住居竈全景(西から)



23号住居電掘方全景(西から)



24号住居全景(西から)



24号住居掘方全景(西から)



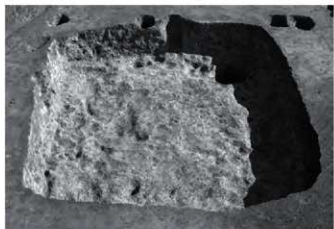
24号住居竈全景(西から)



24号住居竈掘方全景(西から)



25号住居全景(西から)



25号住居掘方全景(西から)



25号住居竈遺物出土状況(西から)



25号住居竈全景(西から)



25号住居竈掘方全景(西から)



25号住居貯蔵穴遺物出土状況(西から)



26号住居全景(西から)



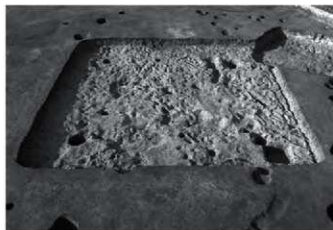
26号住居掘方全景(西から)



26号住居掘方全景(西から)



27号住居全景(南東から)



27号住居掘方全景(南東から)



27号住居貯蔵穴全景(南西から)



28号住居遺物出土状況(東から)



28号住居全景(東から)



28号住居掘方全景(東から)



28号住居竈全景(東から)



28号住居竈掘方全景(東から)



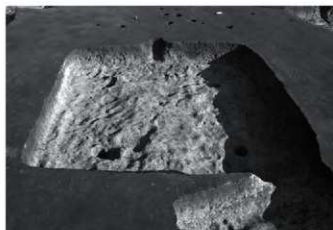
28号住居貯蔵穴全景(東から)



29号住居遺物出土状況(西から)



29号住居全景(西から)



29号住居掘方全景(西から)



29号住居竈全景(西から)



29号住居電掘方全景(西から)



29号住居貯蔵穴全景(南から)



30号住居全景(北西から)



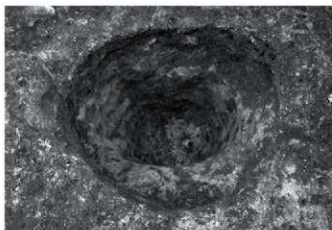
30号住居掘方全景(北西から)



30号住居竈天井除去後全景(西から)



30号住居電掘方全景(西から)



30号住居貯蔵穴全景(南西から)



31号住居全景(北西から)



31号住居掘方全景(北西から)



31号住居掘方全景(西から)



31号住居掘方全景(西から)



32号住居遺物出土状況(西から)



32号住居全景(西から)



32号住居掘方全景(西から)



32号住居掘方全景(西から)



32号住居掘方全景(西から)



33号住居全景(南西から)



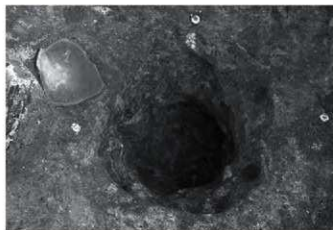
33号住居掘方全景(南西から)



33号住居竈全景(南西から)



33号住居掘方全景(南西から)



33号住居貯蔵穴全景(南西から)



34号住居遺物出土状況(東から)



34号住居掘方全景(東から)



35号住居全景(西から)



35号住居掘方全景(南から)



36号住居全景(北東から)



36号住居掘方全景(北東から)



36号住居掘方全景(北東から)



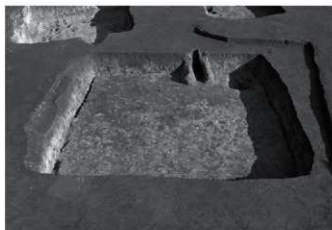
36号住居貯蔵穴全景(西から)



37号住居全景(南西から)



37号住居掘方全景(南西から)



38号住居全景(西から)



38号住居掘方全景(西から)



38号住居掘方全景(西から)



38号住居掘方全景(西から)



39号住居遺物出土状況(北から)



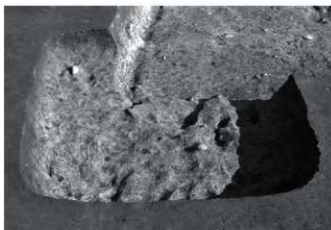
39号住居全景(北から)



39号住居掘方全景(南から)



40号住居全景(南西から)



40号住居掘方全景(南西から)



41号住居全景(北から)



41号住居掘方全景(北から)



42号住居全景(南西から)



42号住居掘方全景(南西から)



42号住居竈全景(南西から)



42号住居竈掘方石組全景(南西から)



42号住居竈掘方全景(南西から)



42号住居貯蔵穴上遺物出土状況全景(南西から)



42号住居貯蔵穴全景(南西から)



43号住居全景(南西から)



43号住居掘方全景(南西から)



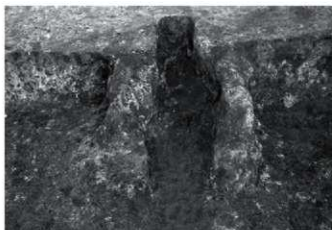
43号住居竈全景(南西から)



44号住居全景(西から)



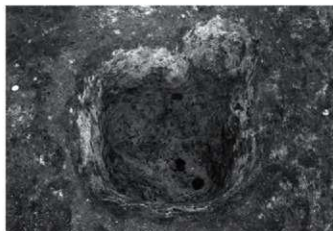
44号住居掘方全景(西から)



44号住居竈全景(西から)



44号住居掘方全景(西から)



44号住居貯蔵穴全景(西から)



45号住居全景(南西から)



45号住居掘方全景(南西から)



45号住居竈全景(南西から)



45号住居竈掘方全景(南西から)



46号住居全景(南西から)



46号住居掘方全景(南西から)



46号住居竈全景(南西から)



46号住居電掘方全景(南西から)



46号住居貯蔵穴全景(南西から)



47号住居全景(南から)



47号住居掘方全景(南から)



47号住居1号竈全景(南から)



47号住居2号竈全景(西から)



47号住居1号電掘方全景(南から)



47号住居2号電掘方全景(西から)



47号住居貯蔵穴全景(南から)



48号住居全景(東から)



49号住居全景(西から)



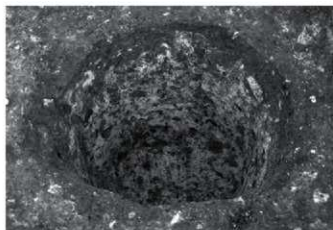
49号住居掘方全景(西から)



49号住居竈全景(西から)



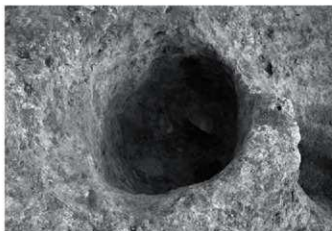
49号住居竈掘方全景(西から)



49号住居貯蔵穴全景(西から)



50号住居全景(南西から)



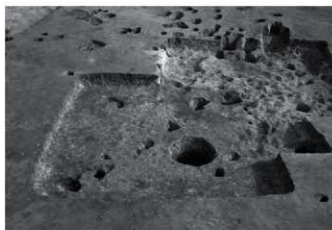
50号住居貯蔵穴全景(南西から)



51号住居掘方全景(東から)



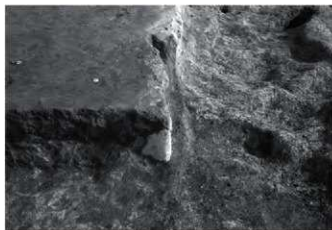
51号住居1号土坑全景(東から)



52号住居全景(南西から)



52号住居掘方全景(南西から)



52号住居竈全景(南西から)



52号住居竈掘方全景(南西から)



52号住居貯蔵穴全景(南西から)



53号住居全景(西から)



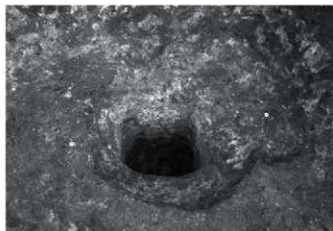
53号住居掘方全景(西から)



53号住居竈全景(西から)



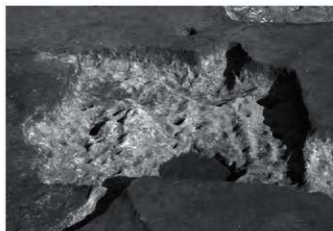
53号住居掘方全景(西から)



53号住居貯蔵穴全景(西から)



54号住居全景(西から)



54号住居掘方全景(西から)



54号住居竈全景(西から)



54号住居電掘方全景(西から)



55号住居全景(西から)



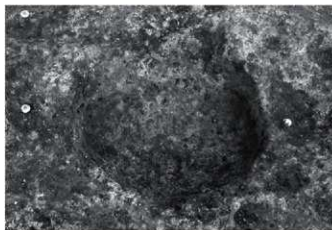
55号住居掘方全景(西から)



55号住居竈全景(西から)



55号住居掘方全景(西から)



55号住居貯蔵穴全景(西から)



56号住居全景(南西から)



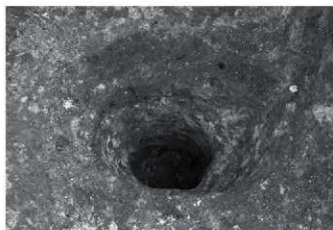
56号住居掘方全景(南西から)



56号住居電全景(南西から)



56号住居電掘方全景(南西から)



56号住居貯蔵穴全景(南西から)



57号住居全景(南東から)



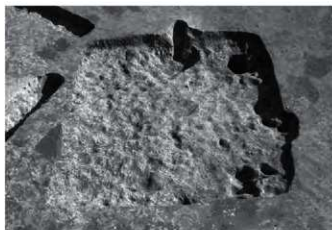
57号住居掘方全景(南東から)



58号住居遺物出土状況(西から)



58号住居全景(西から)



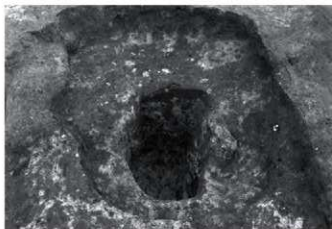
58号住居掘方全景(西から)



58号住居竈全景(西から)



58号住居竈掘方全景(西から)



58号住居貯蔵穴全景(西から)



59号住居全景(南西から)



59号住居掘方全景(南西から)



59号住居竈全景(南西から)



59号住居竈掘方全景(南西から)



59号住居貯蔵穴全景(南西から)



60号住居全景(南西から)



60号住居掘方全景(南西から)



61号住居掘方全景(西から)



61号住居掘方全景(西から)



61号住居貯蔵穴全景(西から)



62号住居全景(南東から)



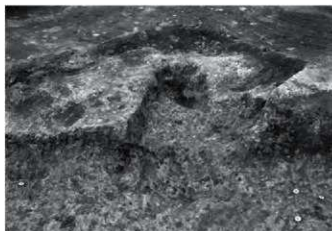
62号住居掘方全景(南東から)



62号住居1号竈全景(南東から)



62号住居2号竈全景(南西から)



62号住居1号竈掘方全景(南東から)



62号住居2号竈掘方全景(南西から)



62号住居1号貯蔵穴全景(南東から)



62号住居2号貯蔵穴全景(南西から)



63号住居全景(西から)



63号住居掘方全景(西から)



63号住居竈全景(西から)



63号住居電掘方全景(西から)



63号住居貯蔵穴全景(西から)



64号住居全景(西から)



64号住居掘方全景(西から)



64号住居竈全景(西から)



64号住居電掘方全景(西から)



64号住居貯蔵穴全景(西から)



65号住居全景(西から)



65号住居掘方全景(西から)



65号住居礎全景(西から)



65号住居電掘方全景(西から)



66号住居全景(北西から)



66号住居掘方全景(北西から)



66号住居貯全景(北から)



66号住居貯完掘(北から)



66号住居1号貯藏穴全景(北西から)



66号住居2号貯蔵穴全景(北西から)



67号住居全景(西から)



67号住居掘方全景(西から)



68号住居全景(西から)



68号住居掘方全景(西から)



68号住居貯蔵穴全景(北から)



68号住居貯蔵穴全景(西から)



64・67号住居作業風景



1号竪穴状遺構全景(南から)



2号竪穴状遺構全景(南東から)



1号粘土採掘坑全景(南から)



2号粘土採掘坑全景(南から)



2号粘土採掘坑全景(西から)



3号粘土採掘坑全景(南西から)



4号粘土採掘坑遺物出土状況(北西から)



4号粘土採掘坑全景(北西から)



5号粘土採掘坑全景(北西から)



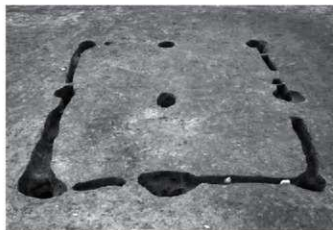
9号粘土採掘坑全景(南から)



粘土採掘坑群全景(北から)



粘土採掘坑群全景(南から)



1号平地建物完掘(南西から)



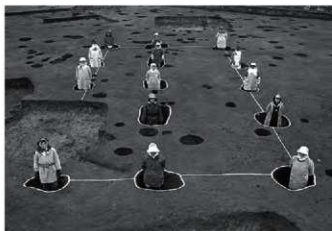
2・3号平地建物完掘(北西から)



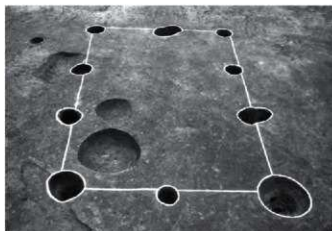
1号掘立柱建物全景(南東から)



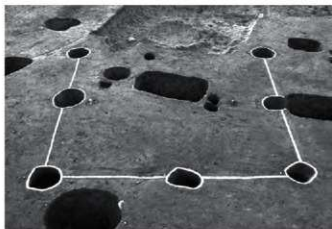
2号掘立柱建物全景(南から)



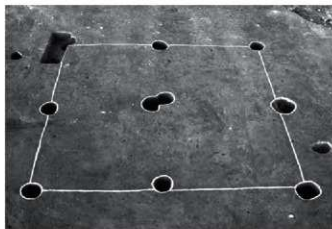
2号掘立柱建物全景(南から)



3号掘立柱建物全景(北西から)



5号掘立柱建物全景(北東から)



6号掘立柱建物全景(南西から)



16号土坑馬歯出土状況(南西から)



16号土坑馬歯出土状況(南西から)



21号土坑全景(南から)



25号土坑全景(南から)



26号土坑全景(南から)



31号土坑全景断面A-A' (南西から)



33号土坑全景(南から)



34号土坑全景(南から)



35 (左)・36 (右)号土坑全景(南から)



37号土坑断面A-A' (南西から)



43・44・45・46・54号土坑全景(南西から)



55 (左)・56 (右)号土坑全景(東から)



58号土坑全景(南西から)



59(右)・60(左)号土坑全景(南西から)



61・62・65号土坑全景(南東から)



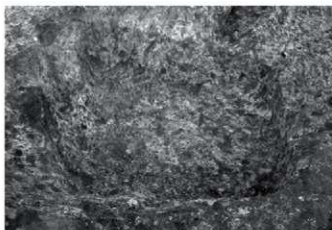
69・70・71・72号土坑全景(東から)



75(手前)・76(奥)号土坑全景(北西から)



77・80号土坑全景(西から)



78号土坑全景(南から)



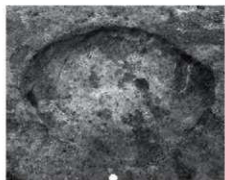
79号土坑全景(北西から)



1号土坑全景(東から)



5号土坑全景(北から)



6号土坑全景(北から)



7号土坑全景(北から)



8号土坑全景(北から)



10号土坑全景(北から)



11号土坑全景(北から)



12号土坑全景(北から)



13号土坑全景(北から)



14号土坑全景(西から)



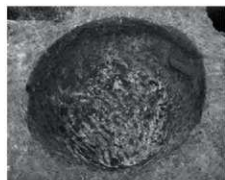
15号土坑全景(北から)



18号土坑全景(南から)



19号土坑全景(南から)



20号土坑全景(南東から)



22号土坑全景(南から)



23号土坑全景(西から)



24号土坑全景(南西から)



27号土坑全景(北西から)



30号土坑全景(南から)



38号土坑全景(西から)



39号土坑全景(西から)



40号土坑全景(南東から)



41号土坑全景(南から)



42号土坑全景(南西から)



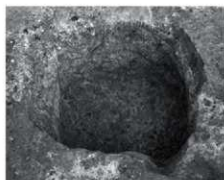
47号土坑全景(北東から)



48号土坑全景(南西から)



49号土坑全景(南西から)



50号土坑全景(南から)



51号土坑全景(南西から)



52・53号土坑全景(南西から)



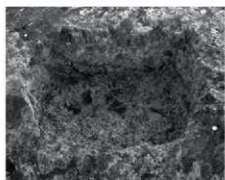
57号土坑全景(南西から)



63号土坑全景(東から)



64号土坑全景(南から)



66号土坑全景(西から)



67号土坑全景(南から)



68号土坑全景(南から)



73号土坑全景(南西から)



81号土坑全景(南東から)



82号土坑全景(北から)



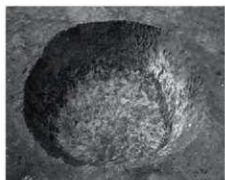
83号土坑全景(南東から)



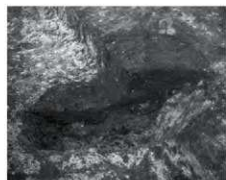
84号土坑全景(北西から)



85号土坑全景(北西から)



86号土坑全景(南東から)



87号土坑断面A-A' (南東から)



88号土坑全景(西から)



1号井戸全景(南から)



2号井戸全景(南から)



3号井戸全景(南から)



4号井戸全景(南西から)



5号井戸全景(南から)



6号井戸全景(南から)



1号溜井全景(東から)



1号畠全景(西から)

1号住居



1



3



4



5



6



7



8

2号住居



1

3号住居



5



7



9



10

3号住居



16



26



28 (1/2)

4号住居



6

6号住居



4



6



7



8



9



16



17



18

6号住居



7号住居



8号住居



8号住居



9号住居



10号住居



8

10号住屋



9



11



12



13

11号住居



12号住居



16 (1/2)



17 (1/1)

13号住居



13号住居



14号住居



14号住居



15号住居



16号住居



1



15



12



13



14

17号住居



12



13



17
(1/1)



18 (1/2)

18号住居



7



8

19号住居



1



9



11



12



16



18



14

19号住居



19



21



24



29



31



32



34



35



36



37



38



39



40

19号住居



20号住居



21号住居



23号住居

4 (1/2)

22号住居



25号住居





13



16



20



21



23



22



24

25号住居



26



27



28



29

25号住居



30

26号住居



6



8



15 (1/1)

27号住居



1



2



3



5



4



10



12



16



18



15



17

27号住居



19



20



21



23(1/4)



24(1/2)

28号住居



1



3



10



13



16



28号住居



28号住居



25



28

29号住居



1



4



5



7



8



9



12



15



18



19



27

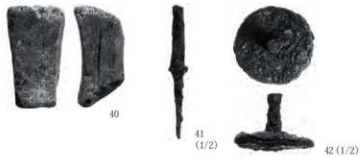


34

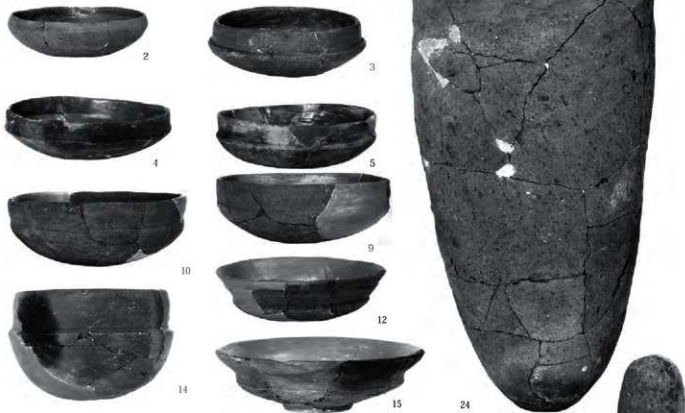


35

29号住居



30号住居



31号住居





31号住居



31



32



33

32号住居



2



3



4



5



6



10



7

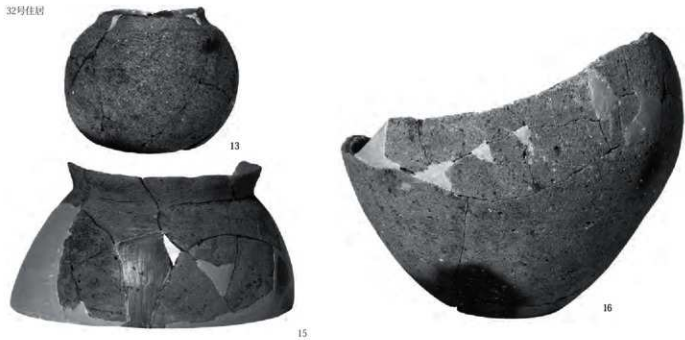


9



11

32号住居



33号住居



34号住居



35号住居



35号住居



11

36号住居



2



26



30

37号住居



1



2



3



5



4



6

40号住居

39号住居



4



1



4



3

42号住居



2



3



4



5



7



11



12



14



15



16

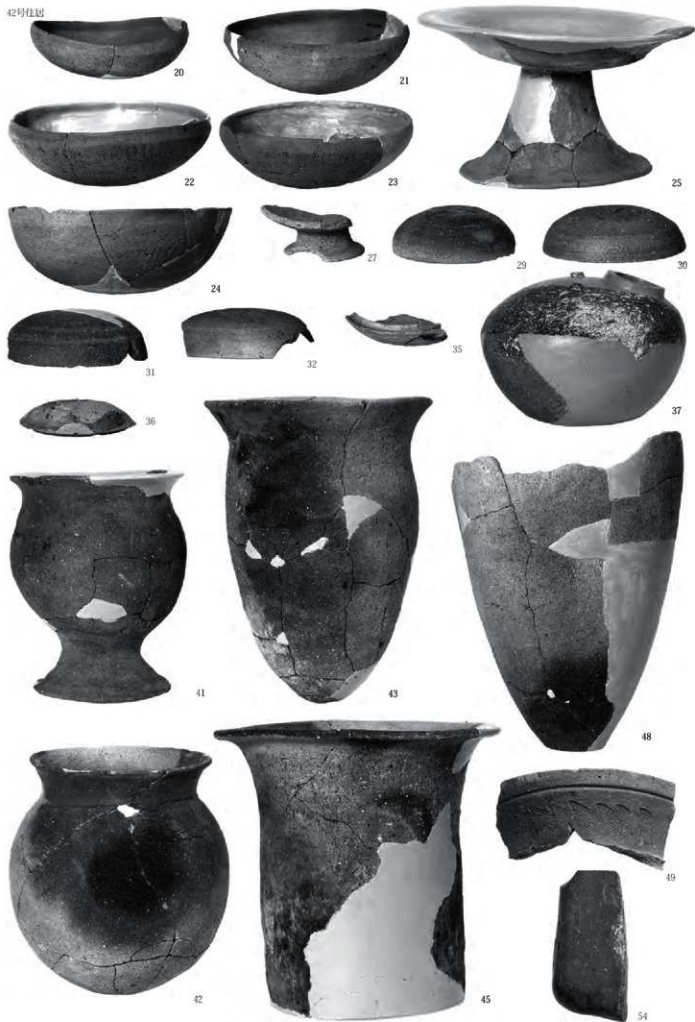


18



19

42号住居



43号住居



4



5

45号住居



1



2



3

44号住居



1



2



3



4



5



6



4



8

45号住居



6

46号住居



2



24

47号住居



1



2



4



5



7



9



10



12



11



13



21



18



25



26

49号住居



50号住居



52号住居



51号住居



53号住居



53号住居



25

54号住居



3



5



6



7 (1/2)

55号住居



2

56号住居



1



2



26



30

58号住居

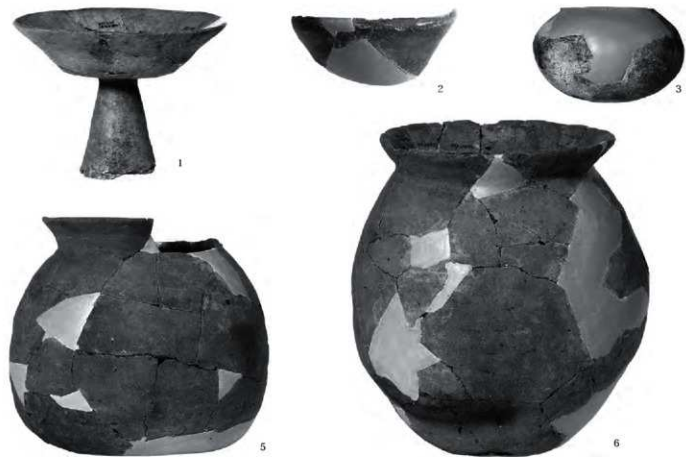




59号住居



60号住居



61号住居



62号住居



63号住居



64号住居



67号住居



68号住居



68号住屋



13



11



12



15 (1/2)



16

1号型穴状道槽



2

4

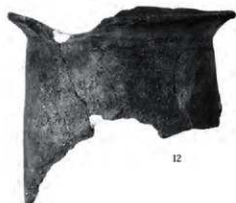
2号型穴状道槽



1



2



12



3

1号土坑



1 (1/6)

42号土坑



1

43号土坑



1 (1/1)



2 (1/1)

56号土坑



1 (1/2)

61号土坑



1 (1/1)

65号土坑



1 (1/1)



2 (1/1)

82号土坑



1 (1/2)



2 (1/2)

68号土坑



1号井口



3号井口



5号井口



3号罐



5号罐



6号溝



3



4

7号溝



3



9

8号溝



1 (1/4)



2 (1/1)



10号溝



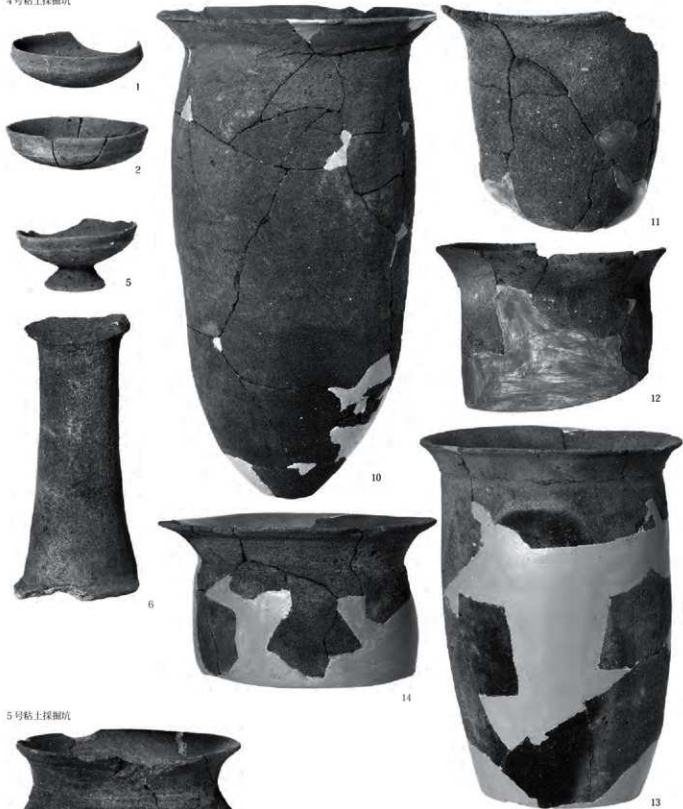
6 (1/6)

2号粘土採掘坑



2

4号粘土探塑坑



5号粘土探塑坑



粘土探塑坑群





13 (1/6)



15

1号掘井



1



4



5



9

編文



縦文



47



48



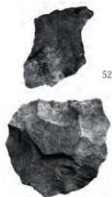
49



50



51



52

53 (1/2)



54 (1/2)



55



56



57

道横外



2



6 (1/1)



7 (1/1)



8 (1/1)



9



10 (1/1)



11 (1/1)



12 (1/2)



13 (1/2)

報告書抄録

書名ふりがな	ひがしたのくちいせき
書名	東田之口遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	523
編著者名	神谷佳明/長谷川博幸/木津博明/高井佳弘/橋本 淳
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20111222
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ひがしたのくちいせき
遺跡名	東田之口遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかみほそいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市上細井町
市町村コード	10201
遺跡番号	125
北緯(日本測地系)	362509
東経(日本測地系)	1390538
北緯(世界測地系)	362520
東経(世界測地系)	1390526
調査期間	20080701-20090213
調査面積	8307
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	古墳/中世
遺跡概要	縄文-土器+石器/古墳-竪穴住居68+掘立柱建物6+粘土探掘坑7+土坑-土器+鉄器/奈良+平安-粘土探掘坑1+溜井1-土器/中世-掘立柱建物1+土坑+溝+井戸6+ピット-土器+陶磁器
特記事項	古墳時代後期の集落
要約	赤城山南麓末端、白川扇状地上に立地する古墳時代の集落である。住居は5世紀～7世紀にほぼすべてが含まれ、存続期間が短いのが特徴である。集落東側の浅い谷では粘土探掘坑が多数見つかっている。調査区の北西部には中世の遺構が集中し、14～16世紀にかけての館があった可能性が高い。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第523集

東田之口遺跡

一般国道17号(上式道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

平成23(2011)年12月15日 印刷

平成23(2011)年12月22日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

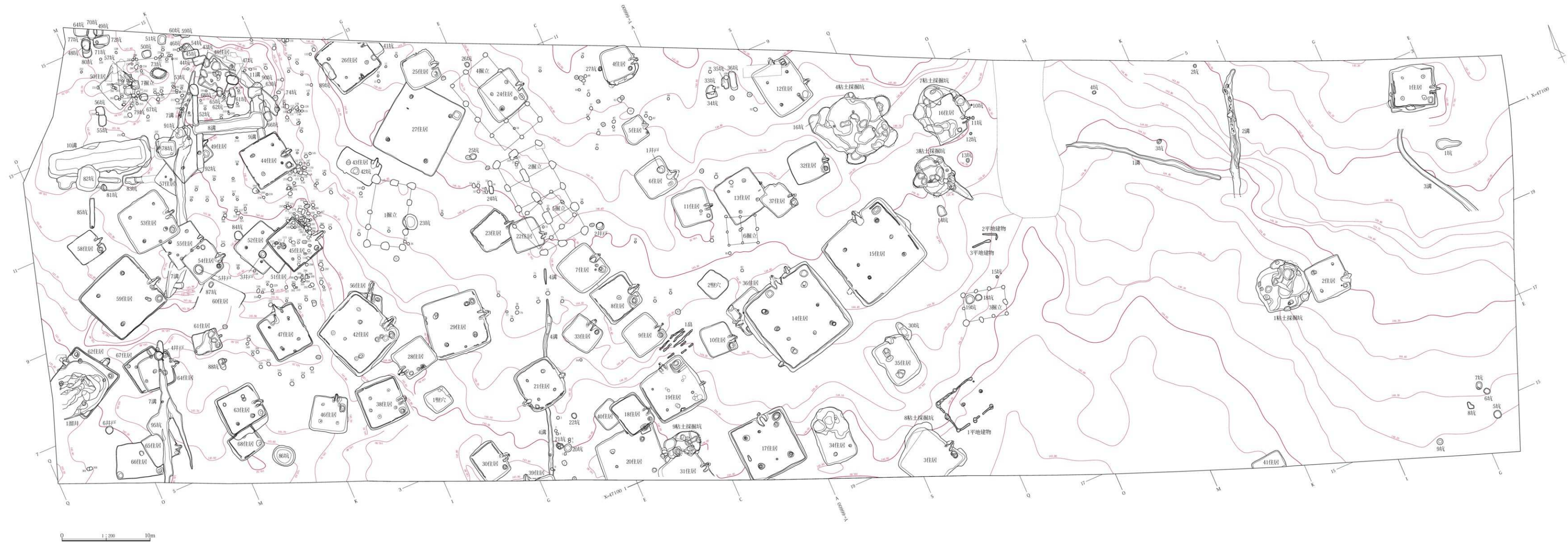
〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

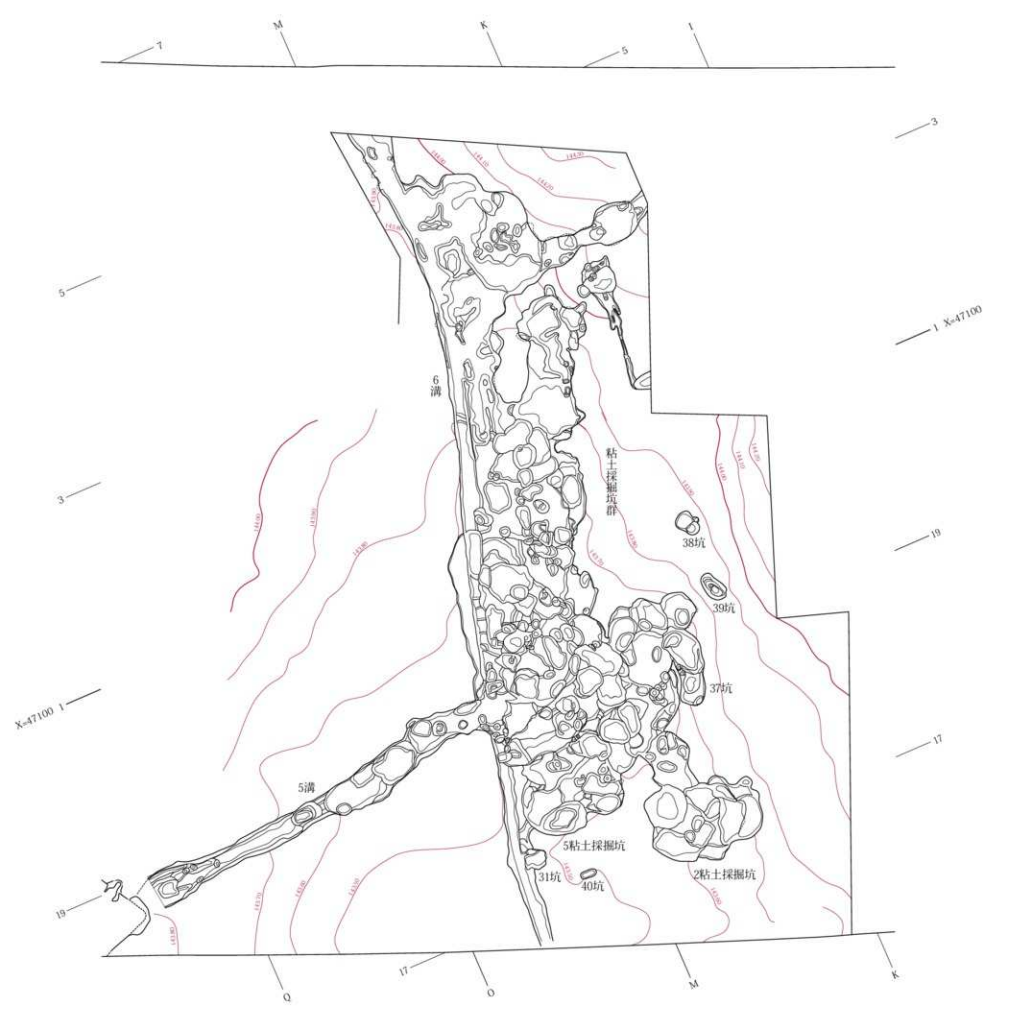
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

東田之口遺跡 全体図 (1/200)



2面



付図 2 東田之口遺跡と周辺の地形 (1/800)

